

奇譚クラス

■ 新しい風俗文献誌 ■



10月号

October-'68

10

奇譚クラブ

昭和四十三年十月号

定価三五〇円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatsukisyupan

Osaka Japan



10月号 Y 350

待望の特集遂に実現!

団鬼六作・長篇羞恥責小説

花と蛇

好評のS文学集大成

絶世の美女財閥遠藤家の令夫人静子が悪鬼たちの手によって誘拐される冒頭のシーンから美貌の探偵助手京子が身敵地にのり込んで捕獲されるに至る前篇(38年8月号より連載)の発端より暴力団の本拠に妙齡の花恥しき美女が次々と略取され、そこに展開される数々の汚辱と羞恥責の宴を団鬼六先生の流暢な筆で描き尽された続篇(39年11月号より41年12月号まで)に至るまで一挙に登載。堂々四百数十頁に亘るサディズム文学の傑作を贈ります。この一冊によって「花と蛇」の書き出しから全部通して読むことが出来ます。四十年に亘って本誌に連載しSファンの熱狂的な絶讃を浴びた小説「花と蛇」を是非お求め下さい。

団鬼六作「花と蛇」収録内容見出し一覧

- 前篇
- 第一章 発端(静子令夫人誘拐された令夫人送られた着衣ズベ公の本拠)
 - 第二章 陥穽(二度の嫌がらせ運転手の正体地獄の結婚)
 - 第三章 美人探偵(落花紛々美人探偵京子流暢地獄図)
 - 第四章 洗腸図(強制屈伏)
 - 第五章 救援者(羞恥地獄観念の座京子の活躍)
 - 第六章 救援の失敗(逆転一助)
 - 第七章 好餌(京子の屈伏淫獣の餌)
 - 第八章 悪魔の哄笑(毒牙は迫る新鮮な生贄悪魔の笑い)
 - 第九章 地下室(悪魔の饗宴美津子のおとり)
 - 第十章 翻弄(屈辱と羞恥身代りに立つ夫人)
 - 第十一章 蛇の執念(裸踊りおしめ使う夫人屈辱の挨拶)

- 続篇
- 第一章 密室の秘密(洗面プロローグ狼の批評)
 - 第二章 脱走の失敗(美津子の脱走望み破れて絶望の涙)
 - 第三章 華やかな饗宴(悪魔の二次会狂乱の静子夫人鬼女の計画)
 - 第四章 地獄屋敷へ新顔(新たな獲物チープレコダー美津子のいわけ美少年)
 - 第五章 翻弄されるカッブル(美少年と美少女折檻部屋乙女の涙毒牙は迫る)
 - 第六章 一千万円の身代金(正気ついた小夜子眼の保養風のと)
 - 第七章 身代金奪取の失敗(小夜子の受難女体の悲しさ美しいニューフェイス)
 - 第八章 涙の宣誓文(美女と木馬毒婦の恋風の小夜子)
 - 第九章 恐怖の逆転劇(悪魔の相談恐ろしい計画千代夫人狂乱の静子夫人)
 - 第十章 奇妙な三々九度(鬼女の嬌声地獄の花嫁)
 - 第十一章 飼育される白い動物(美しき敗北者プレイ開始)
 - 第十二章 悪魔と悪女の悪業(恐ろしい仕事全身美容悪魔の宴)
 - 第十三章 屈辱の地獄図絵(猫とねずみ強迫侵入者)
 - 第十四章 逃走の恐怖と失敗(結末風前の灯再教育京子の号泣勝利に酔う悪魔)
 - 第十五章 悪魔達の残忍な所業(朝の酒白い酒樽ガラスの尻尾)
 - 第十六章 落花無残の修羅場(白いコンビバラの肥料開幕準備)
 - 第十七章 淫らな美女の調教(嵐の後二人花形美女戦)
 - 第十八章 すさまじいショーの展開(変身密談舌と唇)
 - 第十九章 汚水にまみれた宝石(流血狼の檻舞台衣裳スターの心得バラ夫人)
 - 第二十章 華々しき美女の屈伏(難去って酔態身代)
 - 第二十一章 対峙する美女と美女(嵐に立つ令嬢美女対峙悲しい説得調教開始)
 - 第二十二章 あくどい陥穽(修羅図失心する小夜子悪魔の部屋)
 - 第二十三章 羞恥図絵の展開(復讐の生贄汚辱に泣く令嬢小夜子の屈伏)

直接お申込みを 定価五〇〇円 略号「花特」

限定版 写真集 **美しき縛しめ** 第七集

山原清子 妖艶緊縛 **刺青の魅力を探ぐる** 写真集

頒価一部 一〇〇〇円(〒共) 略号「美7」

最近撮影の力作 未公開の秘蔵写真集 刺青の女王山原清子の魅力の隅から隅までを抉り出し、その美しさを最高度に発揮した強烈な刺青女体緊縛フォト結集版(思わず息をのむ凄じポーズ満載)

限定版 写真集 **美しき縛しめ** 第八集

大塚啓子・鈴木晃子・山原清子

女斗と緊縛競艶写真特集

一部 一〇〇〇円 略号「美8」

「女性対女性」の激しい女斗美の躍動! 女性が女性を縛る緊縛プレイの写真化動きのある相互縛り場面の美しい展開 ◎ファンに要望に応じて特に作成した女性対女性の女斗美、女斗場面並に女性同志の緊縛場面を若々しい三人の女性によって力いっぱい演技してもらった躍動的フォト集

限定版 写真集 **美しき縛しめ** 第九集

(女性刑罰拷問特集) 西洋篇

革具に拘束される女 七十二葉

頒価一〇〇〇円(送共) 略号「美9」

モデル川清楚な美木乃々子IIグラマーで美貌の大塚啓子真白で肉づきのよい女体が黒光りする革具或は褐色の牛革具によって厳重に縛しめられる、さまざまな姿態を七十二葉の華麗なフォトによってグラフィック写真集としてここに提供します。 (女性刑罰拷問特集) (日本篇)「略号美5」は売切。本集も残部少し。すぐお申込みを。御申込先はいずれも大阪阿倍野局私書函第十四号箕田京二へ。

限定版グラビア印刷M結集アルバム

Mフォト・「女王様に飼育される日々」

頒価一部 一〇五〇円(送50円) 略号「M特」

◎全頁七十三葉のM傾向ばかりのグラビア写真 待望久しくして初めて刊行されたM派ばかりの限定版M写真集です。今までMモデル募集に応募してきたM男性モデルを網羅し、それらのM男性が色々の女王様に奉仕し飼育される生息のかずかずを豊富な写真資料によってマニアの方には提供するグラビア写真集の結集版です。発行以来数カ月、すでに残りわずかになりました。売切れになりますと絶対に入手は出来ませんし再版はいたしません。未入手の方は、どうか今のうちに是非お申込み願います。

「最近版」粒選り麗美女体緊縛力作写真

Z組百態 大手札型印画紙(9×13)極鮮明焼付

各組 一組一枚(送料共)

四組四枚 五〇〇円

十組十枚 一〇〇〇円

二十組二十枚 一八〇〇円

五十組五十枚 四〇〇〇円

百組百枚 七〇〇〇円

(郵便番号 545-91)

大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号箕田京二宛お申込み下さい。

一枚一枚、いずれも一粒選りの素晴らしい緊縛フォトばかりを集めました。お好みのモデルの、好きなポーズをお選び下さい。

☆

- 1 鞭打条痕の臀部(関谷富佐子)
- 2 後手は高く縛る(佐々木真弓)
- 3 八の字の開股縛(左近麻里子)
- 4 狂う女体の表情(ローズ秋山)
- 5 縄に苦しむ長身(川越美佐子)
- 6 弄ばれる全裸縛(長井葉津子)
- 7 ゴム衣縛りの極(木村 洋子)
- 8 白肌輝く股間責(山原 清子)
- 9 全身縛りを吊る(大塚 啓子)
- 10 悦虐に悲泣する(関谷富佐子)
- 11 亀甲股間縛り晒(山原 清子)

- 12 開股強烈羞恥責(木村 洋子)
- 13 妊婦の太鼓腹縛(中河 恵子)
- 14 縛りの好きな顔(一宮百合子)
- 15 美貌の妊婦緊縛(中河 恵子)
- 16 縛の全裸を見て(金原奈加子)
- 17 憂愁の佳人縛り(左近麻里子)
- 18 前面を晒す裸像(長井葉津子)
- 19 亀甲縛りの正面(左近麻里子)
- 20 後手縛を見せる(川越美佐子)
- 21 鞭は女体に炸裂(ローズ秋山)
- 22 逞ましき臀部晒(左近麻里子)
- 23 真白の柔肌責め(左近麻里子)
- 24 ムチ責めの果て(安井喜久子)
- 25 鉄砲逆海老縛り(関谷富佐子)
- 26 湯責めにあう女(山原 清子)
- 27 変型高手小手縛(川越美佐子)
- 28 洋子をいじめて(木村 洋子)
- 29 緊縛のホステス(佐々木真弓)
- 30 柔肌に喰込む縄(長井葉津子)
- 31 均齊のとれた体(佐々木真弓)
- 32 蜷涙責めの熱演(ローズ秋山)
- 33 脚吊りで責める(ローズ秋山)
- 34 片足吊りの狂態(大塚 啓子)
- 35 猿轡の開股縛り(木村 洋子)
- 36 股間縛の縄掛け(ローズ秋山)
- 37 妊婦仰臥猿轡責(中河 恵子)

- 38 二つ重ねの裸女(佐々木真弓)
- 39 縛られた洋裁生(長井葉津子)
- 40 椅子開股羞恥責(左近麻里子)
- 41 責め抜いた挙句(安井喜久子)
- 42 黒髪をいたぶる(大塚 啓子)
- 43 全裸の股間縛り(山原 清子)
- 44 黒総ゴム衣縛り(木村 洋子)
- 45 パンティを剥く(大塚 啓子)
- 46 緊縛に頬赤らむ(一宮百合子)
- 47 猿轡の妊婦縛り(中河 恵子)
- 48 全裸高手小手縛(長井葉津子)
- 49 黒髪をいたぶる(ローズ秋山)
- 50 後手の厳重縛り(左近麻里子)
- 51 麗わしの妊婦縛(中河 恵子)
- 52 炸裂する革ムチ(安井喜久子)
- 53 剥がされた布片(金原奈加子)
- 54 浴槽と荒縄の責(山原 清子)
- 55 髪吊りの操り責(ローズ秋山)
- 56 高手小手の裸女(左近麻里子)
- 57 海老縛りに泣く(関谷富佐子)
- 58 恐怖の滑車吊り(大塚 啓子)
- 59 悶える全身縛り(一宮百合子)
- 60 伸びやかな素足(一宮百合子)
- 61 卓上の人身御供(左近麻里子)
- 62 皮紐の柔肌責め(中河 恵子)
- 63 股間縛を羞らう(金原奈加子)
- 64 宙吊りにもがく(木村 洋子)
- 65 裸身を晒す表情(金原奈加子)
- 66 輝く全裸の悶え(関谷富佐子)
- 67 全裸をもがく女(ローズ秋山)
- 68 豊満な臀部晒し(佐々木真弓)

- 69 乳房強調縛猿轡(左近麻里子)
- 70 媚を撒く縛り女(佐々木真弓)
- 71 縄のブラジャー(左近麻里子)
- 72 逆手吊りの鞭打(関谷富佐子)
- 73 逆エビで責める(ローズ秋山)
- 74 美しき緊縛立像(関谷富佐子)
- 75 悶える緊縛全裸(金原奈加子)
- 76 鞭で責める女体(ローズ秋山)
- 77 両手吊りで晒す(金原奈加子)
- 78 豆絞りの猿轡縛(川越美佐子)
- 79 あどけなき表情(金原奈加子)
- 80 敵しい縄目の肌(金原奈加子)
- 81 白肌にむごき縄(左近麻里子)
- 82 両手大の字吊り(関谷富佐子)
- 83 首縄縛りの裸女(佐々木真弓)
- 84 美しき全裸肢体(佐々木真弓)
- 85 柱に繋がれた女(長井葉津子)
- 86 尻挙げ海老縛り(安井喜久子)
- 87 鑑賞用全裸緊縛(川越美佐子)
- 88 荒縄縛りの刺青(山原 清子)
- 89 股裂きで責める(ローズ秋山)
- 90 ドレイ洋子の姿(木村 洋子)
- 91 後手に縛上げる(ローズ秋山)
- 92 滑車吊りの裸女(大塚 啓子)
- 93 若々しき緊縛美(佐々木真弓)
- 94 S男がいたぶる(佐々木真弓)
- 95 強烈縛りに喘ぐ(山原 清子)
- 96 正面全裸柱晒し(長井葉津子)
- 97 開股縛りに羞う(左近麻里子)
- 98 白肌に喰込む縄(大塚 啓子)
- 99 尻立て股間縛り(木村 洋子)
- 100 悦虐に泣く美女(安井喜久子)

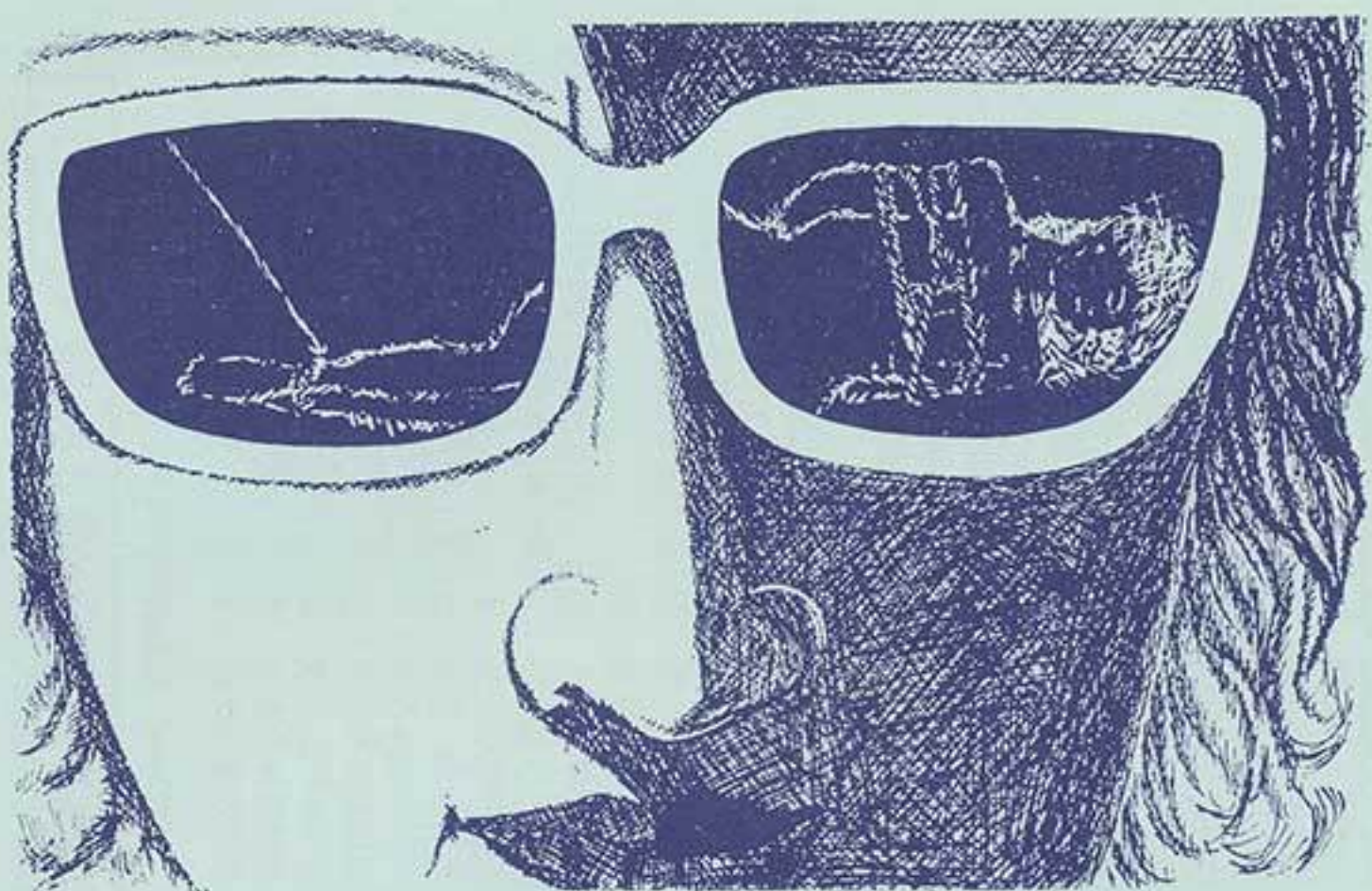
奇譚クラブ

△第三卷第十一号・通刊第二四五号▽

(昭和四十三年) 十月号 目次

〈本 文〉

本誌自粛の徹底……………	編集部……………(9)
此見亭漫語 (これみていまんこ)……………	斎藤 夜居……………(10)
茶の間の戯れ事……………	牧 高志……………(15)
贗作平家物語「富士川」……………	黒淵 嬰一……………(18)
切腹研究夜話 愛と死の映像……………	中康 弘通……………(40)
イメージ・フォト 女剣士の割腹……………	六角京之介……………(45)
漫談千一夜物語「薔薇と蜜蜂」……………	田代 俊夫……………(46)
濡れにぞ濡れし (鬼六先生とクレイジードクターと)……………	芳野 眉美……………(60)
探奇考料「クロテスク」補遺……………	斎藤 夜居……………(66)
随考 拷問異聞……………	陸月笛一郎……………(70)
懸賞入選作「狂執」 死女に憑かれた男……………	播野 弘三……………(72)
新連載「大噴火」……………	千葉 青鬼……………(80)
告白 恥ずかしいけれど……………	蓮見 順子……………(87)
告白「願望と憧憬」……………	島田 道雄……………(88)



奇クサロン……………編集部構成……………(23)

女体緊縛の遍歴……………	北川東一郎
サロン楽我記 (第五十二回)……………	辻村 隆
第二の味……………	さく きち
私の願望「希求十年」……………	鶴藤 恵
イメージ画「異聞緋縮緬地獄」……………	新井 伸治
安井喜久子御夫妻に……………	風流極道軒
編集部だより……………	編集部
映画通信「スクリーンの責め」……………	細川 英治
夏と妊婦……………	高野 原美
短信往来・河川ユリさんへ……………	橋 雅美
僕のイメージ画集……………	
「透視の術」……………	柏木真佐男
「つやほくら」……………	室井亜砂路
私とブレイをして下さい……………	城山はずみ
淋しい誕生日……………	早木 夢二
イメージ画「特別製サドル車」……………	赤ちゃん
初めて奇クを手にして……………	岩田浩二郎
川柳・あふちっく△村まつり▽……………	水沢のぼる
欲求不満……………	安井喜久子
詩「やまびこ」……………	菊地 淳子
僕の耽美画……………	杉田与三郎
実験 室……………	系振 昇
「馬のつぶやき」……………	青井 松造
訪欧土産フォト……………	佐野 寿

連載時代伝奇小説「緋縮緬地獄」 (六)……………	白鳥 大蔵……………(92)
アマソネス考 映画・ローマの女戦士……………	佐野 寿……………(101)
SMカメラ・ハント 木戸悦子の巻……………	
「胎児の喘ぐとき」 妊娠九カ月の妊婦を縛る……………	辻村 隆……………(104)
告白 僕の想い出 △高校時代▽……………	京野 郁文……………(113)
読切・Fストーリー「レモン色の雨」……………	香川 泳三……………(126)
いろいろデート……………	水沢 登……………(142)
連載小説「花と蛇」 (続篇第四十七回)……………	団 鬼六……………(148)
フォート・ストーリー 私の「SM日記」……………	小竹 一浩……………(164)
懸賞入選「青と赤の蝶」 △刺青女性記▽……………	小谷和 勝……………(172)
マニアのノート 〓この美酒に私は酔い痴れる〓……………	とやま かずひこ……………(180)
鬼六談義「どさ廻りの話」……………	団 鬼六……………(188)
S・C・R回答欄 性科学論文について……………	弓削 達人……………(195)
女相撲物語 花の女斗美たち……………	奮斗士好太……………(196)
漫筆「ふおとあんどむーひー」……………	鶴藤 恵……………(205)
贗作シナリオ 縄付き芸者……………	沢田 広……………(212)
漫画 マゾミちゃん……………	九美 淳……………(213)
SMサイドSFストーリー「金星の怪」……………	町 陽一……………(220)
読者通信……………	編集部選……………(252)

(目次カット「サングラス」磁戒 秋人)

「最近版」粒選り麗美女体緊縛力作写真

Z組百態 大手札型印画紙(9×13種) 極鮮明焼付

各組 一組一枚(送料共)

四組四枚 五〇〇円
十組十枚 一〇〇〇円
二十組二十枚 一八〇〇円
五十組五十枚 四〇〇〇円
百組百枚 七〇〇〇円

(郵便番号 545-91)

大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号箕田京二宛お申込み下さい。

一枚一枚、いずれも一粒選りの素晴らしい緊縛フォトばかりを集めました。お好みのモデルの、好きなポーズをお選び下さい。

☆

1 鞭打条痕の臀部(関谷富佐子)
2 後手は高く縛る(佐々木真弓)
3 八の字の開股縛(左近麻里子)
4 狂う女体の表情(ローズ秋山)
5 縄に苦しむ長身(川越美佐子)
6 弄ばれる全裸縛(長井葉津子)
7 ゴム衣縛りの極(木村 洋子)
8 白肌輝く股間責(山原 清子)
9 全身縛りを吊る(大塚 啓子)
10 悦虐に悲泣する(関谷富佐子)
11 亀甲股間縛り晒(山原 清子)

12 開股強烈羞恥責(木村 洋子)
13 妊婦の太鼓腹縛(中河 恵子)
14 縛りの好きな顔(一宮百合子)
15 美貌の妊婦緊縛(中河 恵子)
16 縛の全裸を見て(金原奈加子)
17 憂愁の佳人縛り(左近麻里子)
18 前面を晒す裸像(長井葉津子)
19 亀甲縛りの正面(左近麻里子)
20 後手縛を見せる(川越美佐子)
21 鞭は女体に炸裂(ローズ秋山)
22 逞ましき臀部晒(左近麻里子)
23 真白の柔肌責め(左近麻里子)
24 ムチ責めの果て(安井喜久子)
25 鉄砲逆海老縛り(関谷富佐子)
26 湯責めにあう女(山原 清子)
27 変型高手小手縛(川越美佐子)
28 洋子をいじめて(木村 洋子)
29 緊縛のホステス(佐々木真弓)
30 柔肌に喰込む縄(長井葉津子)
31 均齊のとれた体(佐々木真弓)
32 蠟涙責めの熱演(ローズ秋山)
33 脚吊りで責める(ローズ秋山)
34 片足吊りの狂態(大塚 啓子)
35 猿轡の開股縛り(木村 洋子)
36 股間縛の縄掛け(ローズ秋山)
37 妊婦仰臥猿轡責(中河 恵子)

38 二つ重ねの裸女(佐々木真弓)
39 縛られた洋裁生(長井葉津子)
40 椅子開股羞恥責(左近麻里子)
41 責め抜いた挙句(安井喜久子)
42 黒髪をいたぶる(大塚 啓子)
43 全裸の股間縛り(山原 清子)
44 黒総ゴム衣縛り(木村 洋子)
45 パンティを剥く(大塚 啓子)
46 緊縛に頬赤らむ(一宮百合子)
47 猿轡の妊婦縛り(中河 恵子)
48 全裸高手小手縛(長井葉津子)
49 黒髪をいたぶる(ローズ秋山)
50 後手の厳重縛り(左近麻里子)
51 麗わしの妊婦縛(中河 恵子)
52 炸裂する革ムチ(安井喜久子)
53 剥がされた布片(金原奈加子)
54 浴槽と荒縄の責(山原 清子)
55 髪吊りの操り責(ローズ秋山)
56 高手小手の裸女(左近麻里子)
57 海老縛りに泣く(関谷富佐子)
58 恐怖の滑車吊り(大塚 啓子)
59 悶える全身縛り(一宮百合子)
60 伸びやかな素足(一宮百合子)
61 卓上の人身御供(左近麻里子)
62 皮紐の柔肌責め(中河 恵子)
63 股間縛を羞らう(金原奈加子)
64 宙吊りにもがく(木村 洋子)
65 裸身を晒す表情(金原奈加子)
66 輝く全裸の悶え(関谷富佐子)
67 全裸をもがく女(ローズ秋山)
68 豊満な臀部晒し(佐々木真弓)

69 乳房強調縛猿轡(左近麻里子)
70 媚を撒く縛り女(佐々木真弓)
71 縄のブラジャー(左近麻里子)
72 逆手吊りの鞭打(関谷富佐子)
73 逆エビで責める(ローズ秋山)
74 美しき緊縛立像(関谷富佐子)
75 悶える緊縛全裸(金原奈加子)
76 鞭で責める女体(ローズ秋山)
77 両手吊りで晒す(金原奈加子)
78 豆絞りの猿轡縛(川越美佐子)
79 あどけなき表情(金原奈加子)
80 厳しい縄目の肌(金原奈加子)
81 白肌にむごき縄(左近麻里子)
82 両手大の字吊り(関谷富佐子)
83 首縄縛りの裸女(佐々木真弓)
84 美しき全裸肢体(佐々木真弓)
85 柱に繋がれた女(長井葉津子)
86 尻挙げ海老縛り(安井喜久子)
87 鑑賞用全裸緊縛(川越美佐子)
88 荒縄縛りの刺青(山原 清子)
89 股裂きで責める(ローズ秋山)
90 ドレイ洋子の姿(木村 洋子)
91 後手に縛上げる(ローズ秋山)
92 滑車吊りの裸女(大塚 啓子)
93 若々しき緊縛美(佐々木真弓)
94 S男がいたぶる(佐々木真弓)
95 強烈縛りに喘ぐ(山原 清子)
96 正面全裸柱晒し(長井葉津子)
97 開股縛りに羞う(左近麻里子)
98 白肌に喰込む縄(大塚 啓子)
99 尻立て股間縛り(木村 洋子)
100 悦虐に泣く美女(安井喜久子)

奇 譚 ク ラ ブ

昭和 43 年 10 月 号

(1968年・10月号<第22巻第11号・通刊第245号>)



本誌自粛の徹底

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する平和で
穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象
として編集しておりますが、青少年の保護
育成に関する条例には抵触しないよう、十
分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ
ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵
の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順
次整えて参りましたが、更に挿入写真の減
少及び見出し、キャッチフレーズの改訂な
どによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺戟の強いもの
は極力掲載しないようにするのは勿論、掲
載した文章は十二分に検討を加え、いやし
くも青少年の健全なる育成に支障を与えな
いよう努力いたします。尚、本誌の発行部
数は最低限度にとどめ、その増大を企るた
めの努力はいたしません。



これみていまんご

此見亭漫語

齋 藤 夜 居

いまは自宅を「愛書家くらぶ発行所」と称しているが、以前には「此見亭書屋」（これみていしょおく）と云っていた。「コレ見たいだ」という「左り巻き」を自認していたのだが、どうも偽悪趣味は子供っぽいので、今は余りつかわない。本誌上で毎号、団鬼六先生の「談義」を読んでいると、私にも元来その気がタツプリアあるので、真似がしたくなつた。書誌記事となると、たとえ軟派ものとは云っても根の疲れる仕事なので、一寸息抜きをさせて頂きたい。

愛書家くらぶ、又は此見亭書屋といってもその編集室なるものは、夏は茶ぶ台の上であ

り、冬は炬燵の猫板の上であって、いつも家族が寝静まったあとで、ウイスキーのグラスをちびりちびりと干しながら、雑文書きのノートだけが相手に、使い古した時代おくれの万年筆だけが頼りなのである。とにかく何か書くのが好きなので、一カ月にインキを二びん使ったことがあった。勿論、そうなる原稿用紙などというのはモッタイないから、広告のチラシを綴じたものの裏の無地の所に書くのである。ある晩、退屈しのぎにそれを数えていたら、驚く勿れ七百枚以上も溜っているのだった。勿論、どれも未発表というだけで、実は発表場所が無いというだけの

話であるから、余り自慢にもならない。その中から生ぐさいような青くさい話を拾い出してみよう。いずれもまとまった話ではないのであらかじめその点をお断りしておきます。

○
大分市に私の友人で伊吹映堂という奇人がある。映堂はむかしから軟派本あさりのマニヤとして知られて居り、蒐集経歴から云つても斯道の大先輩なので、いろいろ教えてもらう点が多いのだが、この人も道楽半分ウヌボレも半分位の孔版一枚刷4ページの季刊誌を発行していて、それを時々全国の痴友たちに無料で配布しては悦に入っているという、博

愛型の軟派人である。

その『蒐集道』13号に、次のような話があった。

「あのひとたちの入浴したあとを掃除すると、二三百人も入った後だと、毛が両掌に一杯も抜けていますよ……秋の抜毛というのは中年以上のおばさんに限ったものではないのですなあ」

これは別府の山ノ手の大ホテルの湯番さん（三助）の話である。あのひとたち、とは女子高校生の団体客であった。そしてニヤニヤした湯番さんは云うのである。

「旦那、こういう新鮮なのは仲々手に入りませんぜ。お安くお譲り、いたしましょうか」

映堂居士が果してそれを買ったか否か、そのことは知らないが、両掌にあふれる程の制服の処女たちの新鮮な脱毛なんていうのは、聞いただけでも垂涎物である。但しこういう話はどの程度まで信用していいか保証の沙汰に非ずという所で、案外に男の団体客が流れていたかも知れず、法医学の鑑定を待たなければ、その真偽の区別がハッキリしないような怪しい品に高価な金額をむさぼられ、三助の創作Vを購うというのはバカらしい話である。

この種の話には昔から珍談が多くて、江戸時代の小咄本「福寿草」（天明二年）のうち

にも、ひる寝というのがあった。

——お母さまが昼寝ですこし出しているのを見つけたわんぱく息子が、いたずらにかの所を竹で突つく。お母さまは眼をさまして、おこってぶったので、子供は大声をあげて泣く。そこに兄むすこが帰って来て、弟にどうして泣いているんだと聞く。弟は泣きじゃくりながら、こうこうだと答えると、兄は弟をなだめながら、このあいだもお前は犬を叩いて泣いていたではないか、これからは毛の生えたものにかまうな、と云ったとある。

とにかく、童児ですらも毛の神秘には惹かされるのである。毛の生えたものにかまうなというのは箴言の如くであるが、とかく凡人は毛には泣かされるものだ。

○

これから語ることはそのコワイもの見たさの話で「関西ストリップ」も随分久しい。当初東京に進出した頃は濃艶なおピンクぶりに関東兵衛も大分どぎもを抜かれたが、昨今では都心ではあまり振わず、近郊の衛星都市の場末小屋をにぎわし、地元客より遠遊の外来客が詰めかけているという専らの噂だが、所でこの関西ストリップというのが特別にマニヤの視聴をあつめたのは『週刊新潮』（昭和39・6・15）の「ストリップ見物人の人権、関西ストリップを迎えた東京の客」という記事からであった。

「特出」という言葉をご存知ですか。つまり「特別出演」を略したものです。が、関西ストリップに限って、それは「見せるぞ」ということだそう。その関西ストリップの「特出」にからかわれすぎる東京の客の人権？を探ってみようというのですが、「オリニピックを前に、いくら取り締まっても」「特出」ははびこる一方。妊娠七カ月の、踊り子まで「特出」している……

この記事は東京・豊島区西巢鴨の「庚申塚ミュージック劇場」が同年五月十九日夜に公然猥褻の現行犯で手入りを喰った事件を取材したもので、検挙の対象となったショウについて警視庁保安課長代理の談話があるので次に抄録してみよう。

「洋舞八景、日舞七景を交互にやっておりそのうちやや出さないというのは三景だけで、あとは着物のスソをまくったり、ネグリジェの下はなんにもつけていないから全部見えたり、和服の前を交互に開いたり、パンツをつけていても網の薄いのでよく透けて見えたりで、いずれのシーンもあの黒いものが見える。踊りながら出す女もあれば、踊らないで只出している女もあるし、全部完全に引かかるところをやっているんです。写真も撮ったし、警視庁からは係

員が出掛けて行って確認もして検挙しました。ひどい女は陰毛をぬいて突き出しのステージ寄りのお客に配っていましたよ」
尚、検挙^あげられた踊子は九名のうち妊娠中二名、子持のおばちゃん一名だった由。

○

さて此の週刊誌記事をすみからすみまで克明に読んだ私は、是非にも一見したくなり早速その劇場に足を運んだが、勿論あとの祭りで、ガランとした場内に客がやっと二十名くらいという寒々とした光景で、おっぱいもうくたびれたストリップパーが淋しそうに踊って居り、これではもう里心がついてしまった。十五分ばかり見ただけで外に出てしまった。そして以前に、浅草通の友人が興行街のストリップ劇場の掃除婦から聴いたという話を思い出した。

小屋がはねてから観客席を清掃していると理解に苦しむような汚物がおちていて、見物中に耐えられなくなって、独りで処理したよごれたハンカチーフがあるのは「赤線」もなくなつた此頃では無理もないとしても、ルーデサックが意外に多く、然かも内容が充填してあるのが捨てあるというに至っては、ずいぶん手の込んだ鑑賞法で、妄想技術という点でも相当のテクニシャンぶりである。現実はいつに手きびしいと思つた。——まあ其処までやれば入場料なんか安いものだ。

とにかくハストリップVは墮落したのか進歩したのか、その点はよく分らない。薄墨色でも自然色を出さなければお客はもう満足しなくなっている。

○

以前には踊子の本当の不注意でバタフライをおとして露呈したり、風紀上は差支えない自然現象だつたと思うけれど、踊っているうち、白い股の辺から赤いみみずが一匹、たれて来たと思つて見ていたら、なお赤いものが幾条となく続いて流出しているのに、ご当人は無自覚で踊り続けているので、かえって観客が騒ぎ出したりしたことがあつたが、そういう場面は偶然というより場数を踏んでこそ初めて観られる光景でもあつたが……。アノ前かくしは三十八度線みたいなもので犯し難い神秘と律法で守護され、いやしくもハ舞台Vである以上それが取り除かれるとは夢にも思わなかつた。然し世の中で不文律というのは政治家同志の取引ばかりではなくて、あそここの劇場は出しているぞ、ということになると不言不語で伝えられて、都心を離れた遙か彼方の海潮と川口の泥の匂いがする田舎町まで弾奇マニヤは行く。これもまったく病気で、医学博士で年中みているくせに行く。一山の住職も修練の鍛伸しに、弁天様を初詣でもするみたいに秘仏開扉の念願かけに行くといい始末。

ストリップ劇場には私も随分足を運んだ方だが、ドアを押して一步場内へ踏み込んだ時のその気分は何とも云い様がない。脳髓から爪先き迄じーんとしびれが来て、胸がどきどきして、フックスの絵入風俗史に書いてあつたハ青春の泉Vに浴みしたみたいな気持ちになる。冬の雨ふる浅草六区街など、人通りも少く詩人めかした気分でカジノ座の地下階段を下りる。こんな日だったら静かにゆっくりヌードが鑑賞できるだろう、と思つたのがとんだ間違いで、場内は目白押しの大満員。濡れた空気は激み饅えきつて、キチガイじみた狂音響に、踊る美女もや々と肩から上だけが見え、黒い頭、頭、頭ばかり。それぞれみんな観客が爪足立ちして全身の重みを靴の先にかけて、眼という眼がすべて舞台の乳房に吸い寄せられている。偉大なる哉おっぱいよ！若い血で張り切つてたるみなく、銀色に輝いている乳房、音楽というよりやけくそな騒音に波をうつ白いお腹……。まったく、若い女は裸になつただけで芸術なんだナーと思つたものである。

然しながらストリップ見物というのは人性慾Vに解決を与えてくれないから、いくら見たって眼がすわって来るだけの話で、昔々の掛け口が求められ得ない。罪な見世物でもある。だから非常に息苦しい鑑賞法だが、ストリップパーが背を向けた時のあの白い大きいお

尻を、尻の割目をそうだと仮定して、おしりを巨大なる無毛のものだと思って、見るんだよと教えてくれた通人がいたが、無毛趣味や幾分男色好みの人ならそういう視淫法もあるかも知れないが私などとてもそういう見方はできない。……まあそんな状態で幾年か過ぎた。浅草のストリップはもう下火だという噂もきいた。そして私の足もいつの間にかストリップ見物から遠ざかっていった。

所でそれが再燃したきっかけと云うのは、「内外タイムス」(昭和40・12・26)に、脱ぐも見せるも小屋まかせ——と題して大藪春彦、大塚清六両氏がメリー島、新橋かの子という踊子ふたりとの対談と、その劇場・淀君の写真が載り、あなたたちは日本全国を股にかけて歩いてるわけですね、という妙なる質問に答えて、

「あらやーだ、それ皮肉ね。関西はいまヌードは商売にならないの、興行者たちがお互いにスパイし合って……あそこはオープンやってるぞ、と密告ばかりしてるの」

と云っているの、専門用語では全裸特出をオープンというのだな、と思った。それから時々その種の夕刊新聞を買って、ヌード劇場の広告などにも注意を怠らなかつた。

「関西セカンドショウ特報!! ゲスト外人ヌード、戦乱のベトナムよりの亡命者、バーバラ・エリ・テキサス・ローズ」

などという珍文もあり、ベトナムよりの亡命者には恐れ入った。また特出の、黒人ヌード・ダンサーというのが、実は敗戦の落し子(混血児)だったりして、腕に明らかに無難作な日本式の種痘のあとがあつて痛ましい氣持がしたことがある。

とにかく裸に限らず、軟派の本物というのは誰れでも見たがるものである。そのため、同情が過ぎて私にはつまらぬ失敗談がある。それを少し語ろう。

○

消息とは、起居安否、おとずれ、たより、などを云い、ある辞書によれば耳搔きを人消息子と云うと出ていたが、消息は風のようにきて又立去って行く——。書物の事柄に関する感想などもそのように、白雲峯を帰去来するように、胸のうちにかかる雲かも知れない。そこに印象深いひととのつながりがあればこそ、何時までも必ずしも総てが善に通じるものではなくても、何かが残る。耳の垢かもしれないし、耳を搔いた時の氣持のさわやかさかもしれない。いずれにしても、取るに足らぬ吹けば飛ぶような小っちゃな人愛憎であつて、嬉しくたつて、悲しくたつて余り直接の日常生活とは関係は無いことであつたが……。

以前に、足繁く茅屋に出入りする若い愛書家がいた。私は当時軟派文献の蒐集に熱中し

ている頃であつたから、その若い友に一冊々々の実物を示して、詳しく刊行事情の裏面譚に就いても解説する所があり、欲すれば、快く貸与したりもした。何故かという、その人は非常に対社会的には固苦しい仕事に従事しており、身体に障害のある、動作に不自由があつたから、私は当然ながら独身生活を過して居られると察して、その心を幾分かでも広げ慰める意味もあつたからだ。

人性の秘事は深く広く知識として得た方がいいというのがその頃の自説で、知っていれば誤ることが少くなるだろうとの思いやりの氣持から、彼との応待が始つたのだ。やがて数カ月を経たある朝、突然に書留の書籍小包が到着した。差出人住所は彼の住所と同じで、同姓の女性であつた。中味は私が彼に貸与した好色読物、つまりスーハー、フンフン、ソレ、という書籍数冊と写真帳であつた。

愕然とするのみで、理由が何で原因がなんだかサッパリ呑み込めない。間もなく別に、速達の封書が配達された。やはりその女性で彼の妻だと書いてあつた。その手紙は直ぐに火中に投じてしまつたが、記憶のまゝを記せば大要は左の如き意味であつた。

夫はいつも貴殿のお噂ばかり申し、毎晩のようにおそくまで拝借の書籍をノートに写し取ることに熱中し、それが如何なる書籍かと気がかりで居りました所、本日夫の不

在中に文庫より、けがらわしき数々のもの
発見いたし、驚きのあまり絶息しそうにな
りました。夫は世の中の為に尊い仕事をし
ております。どうぞこれ以上に夫をまどわ
す悪魔のような書籍や不潔な写真などを貸
したりしないで下さい。別便でお返しいた
しました。以後、夫との書信の往来をも厳
禁いたします。云々。

この手紙には流石の私もまいった。彼が妻
帯者だと知っていたら、軟派物などを貸す必
要はなかったし、こんな賢夫人と一緒に分
っていたら、近付けるべき者ではなかった。
お恐れ乍ら、と警察署に持ち込まないで、私
の所に返送して呉れたことは有難かったが、
馬鹿々々しくて以後数日間というものは不快
でならなかった。彼に私が貸してあげた文献
類は、価格にすれば相当に、高額の書籍だっ
た。私は別に御礼の菓子折一つ清酒一升だっ
て貰ってはいない——何かのために為したこ
とではなかった、それだけに後味が悪いので
ある。

それから十七、八日も過ぎてから、出張し
ており留守中のことで、小生の関知する所で
なく済まなかった、という程度の詫びの電話
があっただけだった。

私はこれ以後に軟派文献だけは、心得のな
い人には貸さないことにしている。親切がか
えって仇になった事柄として今でも忘れられ

ない。

然し、最近になって、訳本『ワイルド警句
集』から次の言葉を発見した。

「善男善女に対して悪人の履歴を説く位楽
みなものはあるまい。其れは聴手の心を智
的に蕩かす。悪人となつての最大の快樂は
善人に談す話が沢山ある事だ」

というのである。ふり返って当時を思う時
私自身だいが偽悪家ぶっていた点があった、
それがわるかった。然し、軟派物の取扱いは
余程注意しないと不測の事故が生じることを
体験した。

○

私は書物の世界に「軟派物」が無かったら
本好きにとつてこれ以上に淋しいことはある
まいと思つてゐる。忠義だの道德だの、知識
のためのものばかりだったら、書物とはまっ
たくつまらなくて、世の中に愛書家の存在が
なくなる筈である。人間に男女の性がある以
上そんなに固苦しいことばかり云う人の気が
知れない……一皮むけば偉人も凡人も性的に
は弱い存在である。

然し、文筆業者や出版社などが、その弱点
に乗じて、読者のキンタマ（よわい所）を握
るような書籍をつくることには絶対に感心で
きない。従つて私たちが性的出版物を見る場
合には、そこに人性の真実が書かれてゐるか
否かという、ホンモノとニセモノを区別でき

る眼識を養ふ必要がある。

セックスのことは、若いうちは只々我武者
羅に飢えた野獣みたいなものであるが、男は
四十を越したら、もう駄目なもので、その点
かえつて女のほうが、家庭の主婦でもけだも
のじみて動物的なのが多い。夫婦生活だつて
中年を過ぎたら、男は女に押され勝ちなもの
であつて、日々を食うためにのみ斗つてゐる
のが男であり、女は夫と子供を会社に学校に
送り出してしまえば、あとはゴロ寝とお喋り
とよろめきテレビドラマと、買い喰ひ、だけ
なのだから嫌やでも、英氣は養われて行くの
だ。智力においても新知識が絶えず吸収され
てゐるのだから、まるで一方通行のような男
の融通の利かない智識と体力では、太刀打ち
できないのである。

そういう現実を正直に認識できない連中が
多いから、益々おんなの尻の下でもがいてい
る男が多くなり、一種の自閉症におち入つて
しまう。

セックスを味わうためには男は妻以外の数
多くの女に接して名器と凡器を識別できるよ
うにならなくてはならぬ。その為にはまった
く現代の法律というものは、女性のみ過保護
であつて実に不便なものである。

（この項おわり）

茶の間の戯れ事



牧 高志

(その一)

茶の間の戯れ事と申しても、こ

こを根城に秘かに熱い接吻を交わ
そうと云うのではありません。実
は長かった今年の梅雨の間のお慰
みに以前演った経験を活かし、即
席カメラマンになってみるのもま
た一興と思ひ、実行したことが、

その道の好事家の方々のご参考と
もなればと、ペンを採ったまでで
す。

今日びは、全国何処へ行こうと
必ずTVがあり、処により番組こ
そまちまちですが、いわゆる読者
好みのものが、必ず一つや二つは
組まれてあるようです。東京方面
では昭和28年頃から35年あたりの

各社劇作品映画が、TV向けに再
編集されて放映され、結構オール
ド・ファンに喜ばれています。こ
れをまがりなりにもわが家の記
録にとどめて置くためには、今流
行の8ミリ機で改めて、撮影する
のが一番手取り早く、且安上りで
す。高価なビデオ・テープに依
らずとも、600円あまりのリバーサ
ル白黒フィルムで所要所を撮影
し、その上、テープコーダーで録
音しておけば、結構あとあとまで
も娛しめるというものです。

処で、撮影の実際はご承知のと
おり8ミリの世界では、従来のダ
ブル式のフィルムと最近新しく開
発されたシングル式（スーパーも
同じ）に折半されて居り、筆者な
どは止むを得ず仲良く両方を使っ
ていますが、これから始めようと
いう方はシングル式の方が万事よ
ろしいでしょう。ダブル式の方は
フィルムの取扱いが面倒であるば
かりでなく、普通の映画館だと、
たとえ失敗しても一日のうちに同

じものが三回も上映されるので、
辛抱さえすれば目的の場面をスチ
ールカメラでスナップすることが
出来ますが、TVの方はそうはい
きません。筆者のメモ帳を繰って
みると、古い映画の再放送は早く
て半年あとのものが多く、つまり
常にズバリ本番で、二度目がない
のがTVの世界だと思えばよろし
い。ですから撮影用のフィルムを
用意するには、一卷50フィート位
の余裕が欲しいので、どうしても
シングル式の方がベターというこ
とになります。片面25フィートの
ダブルで太急ぎでターンしている
うちに、お大切な場面をみすみす
逃がした例はいくらもありました
から……。もっとも、こちら側で
これだけ用意万端ととのえ、手ぐ
すねひいてTV箱の前に陣取って
いても、肝心な放送映画の方で、
ていよくすっぱかすこともないで
はありません。例えば、先刻放送
された東映作品の「旅笠道中」で
大川橋蔵の旅人が足手まといにな

る旅の女、平原しのぶを地蔵堂の前で後ろ手に縛り猿轡をかまして堂の中へ放り込むという……一つのクライマックス？ シーンは美事？ に省略されていました。これに限らず、TV向けに再編集する編集者は映画を作成した監督さんではないので、どんなに豪華長篇物でも、一時間半以内にまとめあげなくてはならない関係上、つい妙な？ 場面はカットし、手前の机のひき出しの中へしまっけて置くという癖にかられるとでもいうのでしょうか。

次に撮影機の方ですが、だいたい二万円台の中級機で充分です。カメラ屋のPRではありませんが極く小型でスナップ形のフジカP300あたりが頃合いでしょう。フィルム^{エディター}の感度はASA200ないし250に越したことはありませんが、粒子の細かい40や50でも部屋さえ明るければ撮影出来ます。ただ、このシーンこそ最も貴重、かつ、お大切な場面であると、にらんで、こ

こを先途とシャッターボタンの押し放しは、それこそ貴重なフィルムのお損となります。何故なら、どんな映画のシーンでも縛られる女が映れば、次のカットには一応不要？ と考えられる野郎の雁首が映るのを、かまわずジャンジャン撮影なさっては、長尺百フィートフィルムでも用意しない限り、とても、間に合いそうもありません。中でも一番腹が立つのはピンク映画でもよくお目にかかる、いい場面だ、凄い？ これはいける……なんて固唾^{かたす}を呑んで凝視しているうちに一方的に勝手にカメラがパーンしてベッドからおおよそ関係のない壁掛の生花などを映したりする厚つかましき？ です。当の監督さんや撮影技師の連中はこれで一応徳義上の問題を片づけた気持ちでいるンでしょうが、観る方はまるで背負投げを喰ったみたいで何んとも嫌やあーな感じになるものです。丁度これと同じように、場面が芸術写真化し始めた

ら、遠慮なくマイ8ミリカメラの撮影を、停止しなければなりません。そうでなくても8ミリ用フィルムは短いので、うっかりしているうちに、すぐアップしてしまいます。それから撮影の技術的な問題になりますが、TVの画面は少しどぎつくなるように前もって輝度をやや高めにし、TVボックスとカメラとの距離をよく測るとともに、脚のしっかりした三脚を用意し、シャッター穴には長レリーズをつけて下さい。ただここで問題となることは、8ミリカメラのフィルム速度、シャッター開角度がTV画像の周期と一致しないので、撮影後現象し、出来上ったフィルムを我が家のスクリーンにいざ映写してみると、薄い黒い帯が斜めに、上下して気にすれば見辛いことです。しかしこれは今のところ一部の限られた撮影機を除いて、ほとんどのカメラが気になるが、そこまで救いの手は出し兼ねているというのが、現状である以

上、まあ我慢する外に手はなさそうです。「貴重な場面？」を曲がりなりにも録画出来ただけでも、感謝してしかるべきではないでしょうか。広い東京では、いつかも本誌上にご紹介しておきましたけど、TVでは間がぬるいとばかり直接、映画館のカブリツキ近くに陣取り、ASA250位のSSフィルムでジージーと8ミリカメラを廻わし、よく見るとひざの上には小型ポータブルの録音機まで用意して同時録音している、まことに奇特新御仁もいらっしゃいます。ともあれ、暇にまかせ、せっせとスナップしたTVお好みの場面は、各社連合でストーリーもへったくりもありませんが、それこそあなたが最高編集者になって、これをうまく継ぎ合わせ、邦画（あるいは洋画、又は演劇）縛り絵集として、メイン・タイトルを打てばちょっとしたものが出来上ります。版權の問題も門外不出で、わが家で楽しむ以上、左程気にする

必要もないでしょう。先日、あの盛り場のピンク映画館へ彼女を銀座のヤングマダム風に着飾らせ連行？ するカップルにぶつかりましたが、制約のある館内で、わざわざ至難な早業などせずとも、茶の間でそれこそ寝そべって彼女と再生映画？ でも御覧になれば感興も一きわ、湧こうと云うもの……。

(その二)

茶の間には固苦しい新聞紙より週刊誌がしかるべく転っている方がよく似合います。以下、私の見解が間違っていましたらお許し願いますが、最近この週刊誌も種類的に大分、変遷しつつあって、従来の週刊誌に代って一億総白痴ならぬ「漫画」週刊誌が急激に出廻り始めたことです。常日頃、無関心な筆者が古本屋でチラッと見たのが運のつき？ これは容易ならぬ強敵だと判断した訳けですが例えば文献的な意味合いで二、三

あげてみると、「漫画O・K」「漫画エース」「漫画パック」といったあたりは一流挿画家の漫画（というよりは色物語に近いが）を必ず入れ、内容も今流行のピンク映画に優るとも劣らない残酷物エロ物が、大胆な筆法で描かれています。これは一応表向、成人映画とし「〇〇刑罰史」とか「〇〇拷問史」などと銘打てば、さすがの映倫さんでも、カットのしようがなく、渋々パスさせるのと全く同じように、何んと批判されようという処までもそれは漫画なんですよ……と云われればと、令嬢の首が飛ぼうと、芸妓の股が開かうと大目に見て呉れるあたり、裏を返せばだからこそ漫画執筆が、ありとあらゆる奇想天外なことが描けるんだと云うことにもなります。もっともアイディアだけ先に行って肝心なデザインが、まるで小学生のような漫画も中には載っていますが、左前の合わせの着物を着た女でも、どうかして縛られる場

面になると、日頃のご研究の効果が顕われ、誠に写實的な縛り絵を描く漫画家もいるようです。

この世界でも映画の影響は大きくて、例えば「秘録おんな牢」が封切られると早速、漫画化されていましたし、東京では現在チラリズムばかりかと思っていたら吊り責めなどある最高のカラー責め映画であった「女浮世風呂」が上映中で、物が物だけに漫画化されるのも早や時間の問題でしょう。

ついでこの間のこと、全国ネットかどうかは知らないが、TVで木島則夫司会のハプニングと銘打った番組の中で、お座敷芸「艶もの落語」が、ご存知、談志師匠などによって、木島氏の心配気？ な様子をよそに、深夜の茶の間に送り込まれたのを、ニヤニヤしながら聞いた人は手を挙げて下さい。縛りは出てこないのだが、色ッポイ咄しだった。例によってどう思う？ の体裁づけインタビュの後、著名人の批評。そして、落語

研究家のエライ人が最後に、……一般的にキワドイとか何とかいわれることでも、落語の場合は笑いがあるので昇華されるのではないかと……てなことを、のたまわってチョン。

艶咄しがどうこうではなく、落語として笑いのオブラートに包むから……といういいかたにひっかかるのはヘソ曲りでしょうか。

さてこうなると、先程の再生縛り断片映画で興奮？ し、今また総白痴化ならぬ漫画週刊誌でしこかれては、一つ夏バテ防止もさることながら大いに栄養物でも食べてハッスルする必要がありそうです。特に、（そのこと自体、大変結構なんです）堂々と自肅宣言の本誌が、ふたを開けたら漫画誌に喰われたなんてことにならないよう充分ご注意願って、この新しい分野である漫画の世界をしばし静観されるよう願って止まないのが、老婆心ながら筆者の偽わらない心情なのである。——完。



(贗作平家物語)

富

士

川

黒 湊 嬰 一

日めくりのカレンダーが昭和四十二年十月十七日を示して室内を見下している。

窓の外に見えるのは護国寺の屋根。

国電の音が聞える。山手線が近いらしい。

「お忙しいでしょうに、よくお寄り下さいました。お一人で来られたのでしょうか」

男みたいな低音だが柔い丁寧な物腰。

よく肥って色が白く、丈の高い和服姿。

高く結った髷。豊富で長い髪だ。垂らした腰の下まで届くだろう。

「主人の出張と同じ汽車に乗って来ました。

十九日に仕事が終わるからといいますので、伊東で落会う約束にしています。その間に、東京で信乃様に御挨拶して来るよう言いつかって参りました」

金属性の高い声。そして、すごい早口。

背丈も幅もトランジスタサイズ。

今脱いだピンクのベレー帽を左手に握り、

金ボタンを並べたミリタリールックの黒いジャケットとグレーのスラックス。

「余り散らかしているので呆れたでしょう。仕事場は階下に有るのですが、生活に仕事が

割り込んでしまっただけで居間も御覧の通りです。

茶室に御案内しようかとも思いましたが、畳の上は固苦しいでしょうし、賀集子さんに対しては、隠したり見栄を張ったりする事はありませんものね」

賀集子は珍しそうに室内を見廻している。

信乃の居間は六畳大の板の間に和風の窓。

元は和室だったらしい。敷物は無く、中央に

大きな机と凝った彫刻の椅子。窓際には仕事机。書架には契約書や伝票綴やデザイン集。

壁面一杯に船の舵輪。民芸品の盆や額縁。

柱に下っているのは木彫りの胡桃割や匙。

「珍しいわ、女流彫刻家なんて。全部お作りになったのですか」

「父の家業を継いだのです。ホンの手伝いのつもりが、何時の間にか本職になってしまいました」

反対側の壁には木槌、鑿、其他の木工具。

棚に並んでいる電動工具類や部分品。

そして床一面に逼り廻っている電線。

天井には蛍光灯の他に、スポットライト、自由に上下する電灯等。卓上スタンドを加えて一室に照明器具が七箇所も有る。

「結婚なさいませんか？」

「そのお話は止めましょう」

「すみません。でも、お若いわ。お姉様って

お呼びしていいかしら」

信乃は答えず、微笑するのみ。

× × ×

賀集子が窓外の護国寺を見ながら言った。

「此処は巢鴨の近くでしょう。たしか八犬伝の犬塚信乃が生れた所……」

信乃はコーヒーを注ぎながら答える。

「そう。女装の剣士に憧れたのでしょうね」

「あたしなら男装の王女にするんだけど」

× × ×

「コレクションを見せて下さいませんか？」

「どうぞ」

信乃は納戸を開けた。

「まあ、すばらしい」

十手。刺股。突棒。搦手。六尺棒。捕縄。

手鎖。足枷。一尺八寸の笞。二尺一寸の杖。

「先祖が役人だったものですから」

「江戸町奉行所の捕方？」

「いいえ。関守でした」

「それで御仕置や牢屋の事にお詳しいのね。

これ全部、お家に伝ったものなのですか」

「古式通りに模造したものもあります。小細工は本職ですから」

「此の着物、何かしら」

「お召しになっても構いませんよ」

「何だか変なの。あたしが着ても短いわ」

「本物通りに仕立てた囚衣ですよ」

「あら、いやだ」

「それを着たら、やはり縄も無いと似合いませんわね」

「あらッ、待って。縛られるの、あまり好き

じゃないんです」

「新影治源流の女縄、締め合いかが」

「何でも御存知なのね。でも……」

× × ×

賀集子は無抵抗で縛られた。尤も暴れても

無駄だったろう。信乃の方が五十％は重い。

腕の太さも二倍。体格全体が一桁違う。

「でも……」

「M派だとばかり思っていたのに」

「男になったつもりでS、女のままだらM、

何方でも使い分ける事が出来ます」

「両生動物」

「これは酷い」

「酷いのは何方かしら。あたし、主人以外と

プレイした事ありませんのよ」

「今度の旅行もプレイの為ですか」

「それにお答えしなければいけませんの？」

「又、新しい題材の探索ですか？」

「プライベートにつき、ノーコメント」

「言いたくないなら、けっこうですわ。でも

ここには笞も杖も有りましてよ」

「言いますわよ。神隠しの調査なんです」

「近頃流行の人間蒸発。行方不明の追跡？」

「いいえ。人間が突然消える事の研究。伊豆

地方には昔から神隠し伝説が多いのです」

× × ×

「神隠しなんて本当に有るのですか？」

夕食の席で信乃が改めて聞いた。

仕出料理を取り寄せてあるのは料理の腕に

自信を欠く為か、談話に熱中していた為か。
「古い記録は沢山有りますが、中でも住民登録の行き届いた江戸時代のは、信用に価するでしょうね」

賀集子はメモを出した。

「人間が消えただけなら超自然力を考えなくても説明出来るでしょう。遁世、逃避、事故死、自殺、誘拐、完全殺人による死体隠匿」

信乃は懷疑派で合理主義者だ。

「神隠しの例では、一旦消えた人が再び現れる事も有るのです。文化七年の記録で、江戸の浅草に全裸で意識不明の男が天から降ったように現れ、取調べに対して京都の安次郎と答えたが、十二日前に愛宕山参詣途中で、突然見えなくなった当人に間違いがない事が解ったそうです」

「一時的的精神異状で放浪したのでしょう」

「では、此の例はどうでしょう。寛延年間に八幡の商人松前屋市兵衛が自宅の便所から急に消え失せ、二十年後に、前と同じ年齢、同じ服装で、元の便所に坐っているところを見つけられた……」

「財産相続を狙った犯罪と考えられますね」

「外国の例を出しましょう。チベットで失踪したラマ僧がメキシコで発見されています。」

アメリカの例では、一九五六年に八才の少年が他の子供達の見ている前で突然消滅。テネシーでは、牧場主が家族や友人達の目の前で消え失せたと、五人の者が証言しています。

有名な人物では、機械技術者ルドルフ・ディ

ーゼル博士……」

「消えた人が再び現れるのなら、何処かに生きていなければなりませんね」

「その通り。全く別の世界に居るのです」

「別の世界？」

「時間と空間を超越して存在する世界、竜宮や桃源境の伝説がそれを暗示するようです。

浦島太郎やリップ・ヴァン・ウィンクルは時代と場所を越えた他の世界を訪問していたのですね。そこから戻った人が記憶を語っても誰も信用しない。そこでもう一度、別世界を訪問しようとしても今度は入口が解らない」

「なぜ特別の人間だけが行けるのですか」

「時限の断層とでも呼びましょう。異なる世界が人間に見えない軸方向で交っている。知らずに境界を越えると異時限に迷い込んで姿が消え、これを神隠しと呼ぶ」

「戻って来れるわけは？」

「二箇の円が交ったなら二箇の交点が出来るでしょう。一方の円から他方の円に迷い込んだ

としたら、一度だけ戻る機会がありますね。神隠し伝説には、戻って来る例と、一度だけ姿を現し、再び消えると永久に現れない例とがあります」

「別世界に迷い込むのは人間だけですか？」

「動物の場合は自分で証言しないから例が少いですね。ドイツで消えた伝書鳩が通信を持ったまま一箇月後にブラジルで発見された。

大きいものでは飛行機がレーダー面から消えて残骸も発見されない話。船舶が完全に蒸発した話。乗員が全部居なくなって無人の船が漂流している話……」

「伊豆に神隠し伝説が多いというのは？」

「時限の断層は特定の地域に現れ易いようです。飛行機の消滅はフロリダ沖の大西洋上空に十件の例が集中し、船舶の蒸発は東支那海に辰和丸や畝傍等の著例が多く、伊豆半島とその南方海上は神隠しの多い場所です。他の世界が近いのか、地殻構造に原因が有って空間の歪曲が起り易いのか、何か未だ知られていない理由が有るのでしょうかね」

× × ×

寝具を用意した後で信乃が言った。

「わたしの自動車でよろしければ伊東まで送ってさしあげますよ。或る旅館から注文され

た飾棚を届ける事になっているのです」

「どうやら興味を覚えて来たらしい。」

× × ×

十月十八日の朝、信乃が呼びかけた。

「出かけましょう」

賀集子は手提袋を持って立ち上る。

「お願いします」

「大きなお荷物ですね」

「救急袋なの。風邪薬、傷薬、消毒薬、いち

じく浣腸、繃帯、ガーゼ、絆創膏、ロープ」

「随分と風邪をひいたり傷をしたりするので
すね。本当に救急用なのですか？」

「知りませんわよ」

× × ×

信乃は玄関にトヨエースを廻した。

「自動車って、此の車なの？」

「乗心地は良いし、運転手はベテラン。無事
故ですよ」

「大きい事は、いい事」

「わたしの身体の事ですか」

「いいえ、此のトヨコレート。半分いかが」

「賀集子さんの免許も大型でしたね」

「ええ。でも大きなトラックはとても無理で
すわ。出来るだけ首を伸ばしても、前の道が
見えないから」

「座布団を敷いたら……」

「ブレーキに足が届かない」

× × ×

トヨエースが伊豆の海岸道路を南下してい
る。雲が低い。今にも降りそうだ。

網代町の手前でパトカーが注意した。

「此の先で大きな事故がありましたよ」

のぞき込んだ警官が妙な顔をした。トラッ

クの運転手が和服の女性だったからか。

「混んでいるみたいですね。道は悪いけれど
山越えしましょう。この車なら少々ことは
平気です」

信乃は右にハンドルを切った。

× × ×

初島が眼の下に見える。

灰色の海。白い泡。幾分波が高いようだ。

「あら。何か光った」

雲が裂け、海面に向って閃光が飛んだ。

「大きな流星よ。昼でも見えるのだから、夜
だったら綺麗でしょうね」

「海を御覧なさい。渦巻が見えますよ」

信乃は自動車を停めた。

「珍しいわ、隕石を見るなんて。地表へ着く
までに燃え尽きてしまうのが殆んどなのよ」

強い風が西から東へ吹き抜けた。

海面には細長い帯状の痕跡と無数の渦巻。

「富士山の方から飛んで来たようですね」

「地球に接線を描いて。衝突よりも接触でし
よう。大きな流星は斜に当たるんだそうです」

「隕石は太平洋の底に沈んだのでしょうか」

「流星が斜に落ちたら、水面に当たっても撥ね
返って宇宙へ飛び去ると聞いていますわ」

トヨエースが再び動き出す。途端に突然の

震動。信乃は慌てて急ブレーキ。窓外に光の

縞が流れ、霧のような不透明幕が視界を掩っ
た。一瞬の朦朧。いや意識は有る。それなの
に視覚も聴覚も作用しない。

「どうしたの。運転は無事故の筈でしょう」

「道が無くなったのです」

再び視野が開けた。前方は絡み合った樹木
や蔓草の牆壁。日光を遮る陰気な暗さ。

「道路から落ちたのね」

「そんな筈はないのですが」

賀集子は例の手提袋を大切に抱えて元気に
車外へ出た。

「伊東の町は近いのだから歩きましょうよ」

草履穿きの信乃は困った表情。

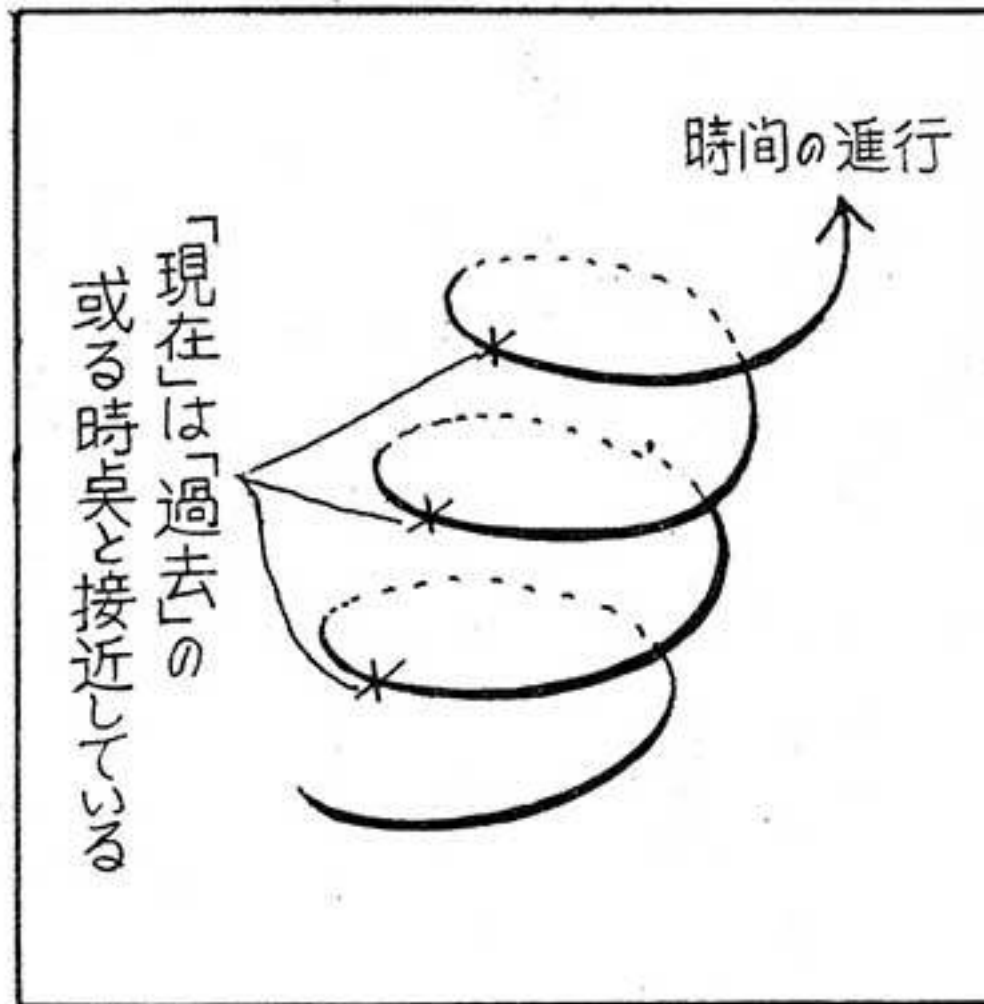
「だけど何だか変ですね」

後方にも道路は無い。自動車は太古の原始
林の如き樹海の底に完全に埋没していた。

「困っちゃうわ。だけど、どちらに向って歩くとしても、まず道を見つけないければならぬいわね」

賀集子は荷物を置き、手頃な樹を選んで身軽に登った。これは信乃には無理な技術だ。和服姿の上に身体も重い。下で見守るのみ。「東に初島が見える。もっと上に登るわよ」「気をつけて下さい」

此の時、信乃は何かの気配を感じて振り向いた。樹間に色彩が揺れる。赤・青・黄・黒。「北の方は何うかしら。あら、大変。富士山



が煙を吐いてるわ。噴火が始ったのよ」
樹上に身を曝した賀集子の大声が何かを惹きつけたらしい。

「危い。狙われていますよ」

空気を引裂く高い響。長く影を引いて飛ぶ直線の束。脚下の枝に突き刺さった物が征矢である事を確かめる隙も無い。踏み外した賀集子は信乃の頭上へ真逆様。折重って転げた二人が起き上ろうと跪く眼前には忽ち白刃の垣が作られた。三尺の太刀、四尺の長巻、鉤鉾、弓箭。それを持つ汗臭い不潔な者達。時代離れた服装。柿色の直垂、腹巻、胫当。

信乃も賀集子も荒縄で後ろ手に縛られ、頸を繋ぎ合わされて引き据えられている。

「ねえ。あたし達はね、エキストラの契約はしてないのよ！」

賀集子が金属性の声で呟鳴った。その鼻先に太刀が突きつけられる。黙れ、という意味らしい。

「なによッ。銀紙貼った竹の棒なんか振り廻して。一体どういうつもりなの？ 子供の遊びじゃないのよッ」

途端に腰の番を蹴り上げられた。賀集子が縛られた俣で勢よく一回転すると、首の縄が

締まって眼を白黒。

「逆らわない方がよろしいでしょう。どうやら本物のようですよ」

信乃は落着いていた。尤も慌てるには少しばかり重過ぎるようだ。

「此の刀、本当に斬れるの？」

「太刀も本物。持っている人も本物。偽物はわたし達二人の方です。賀集子さんの言われた時限の断層とかに迷い込んだみたいです」

「驚いたな。二人共、女だぞ」

小声で話し交わす声が背後に聞える。

「見慣れぬ風態だ。宋人だろうか」

「伊東の一族とは違うようだが……」

「併し樹の上から窺っていた怪しい奴等だ」

林の途切れた山中の広場。信乃と賀集子は後ろ手の縄尻を樹の根木に繋がれている。

何かを待っているようだ。

「見慣れぬ風態とか怪しい奴とかいってるけど、あれはあたし達の事なの。向うの方が余ッ程怪しいわよ」

賀集子がむくれた。

「仕方ありません。富士山が活動しているよ。うな昔に、迷い込んだのですから」

信乃は泰然と観察している。

「どの位前なのかしら」

賀集子も神経は身体程には細くない。覚悟を決めて信乃の膝に凭れかかった。

「あの鎧は戦国時代の胴丸ではありません。

鎌倉時代か、もっと前。多分七、八百年昔」

信乃は日本史に精通している。

「時間の狂った原因が解りかけて来たわ。流星が地面と平行に飛んだでしょう。その軌跡に、あたし達が這入ったのですよ」

賀集子が樹林の彼方を顎で指した。

「流星が通ると時間が逆行するのですか？」

信乃は不審そう。

「特殊相対論に依る場の歪曲。大きな質量が存在すると空間が歪むのです」

「流星の質量はそれ程大きくないでしょう」

「その代りに速度があります。運動エネルギーは質量の変形ですから」

「空間が歪むのなら伊東から何処か遠い土地に抛り出される筈ですが……」

「時間は空間の一種です。空間が時間軸方向にだけ狂ったのでしょう。本来伊豆地方は次元の断層が生じ易い所へ、あの流星が時間軸を攪乱した……」

「何故、八百年も大きく狂ったのですか」

「時間は直進するのではなく、螺旋階段のよう

に円を描いて進行するという説があります。

現在は未来や過去の或る時点と極めて接近しているわけで、僅かな狂いでも数百年異なる時点と接触する事が有るというわけ」

「解ったみたいですが……」

「今、必要な事はもっと他にある……」

「第一に縄を解く事。第二に此の妙な時代から脱け出す事……」

「出来るかしら」

「賀集子さんの言われた事、覚えてますよ。

神隠しに遭った人は一度だけ姿を現わし……」

「そのまま元の時代に留る事もあるが、再び消えた時は永久に現れない……」

「つまり二十世紀に帰る機会は一度だけ……」

「帰って見たら百年経っていた、なんて事だったらどうしよう」

「此の人達に理解を求めてみますか？」

突然、周囲の武装者が一斉に立ち上った。

彼方から聞える騒々しい罵声。馬の嘶き。武器や甲冑の触れ合う物音。

「大勢やって来るようです」

「此の連中と同類でしょう」

樹隠から現れたのは、大鎧の騎馬武者。長柄を持った歩卒。馬を牽く雑兵等百余人。

それに囲まれて護送される縄附の囚虜三十

余人。中年の僧形武将。乱髪（うろつき）の若武者。前髪の侍童。狩衣の侍や水干の郎党。

「あら。女の人も縛られている」

桂袴（きしかば）の貴婦人。小袖袴（こそでば）の侍女達。

傷を負った者。血を吐いている者。

すべて荒縄を以て後ろ手に縛られ、馬上、鞍の前輪に緊しく縛りつけられている。

× × ×

信乃は和服の裾を気にしていた。後ろ手に縛られているので一度乱れたら直せない。

「スラックスなので助かったわ。でもお姉様乗馬がお上手なようね」

「乗るのは好きでしたが、積まれたのは始めてです。これは乗馬とは言えませんものね」

二人共、鞍に太腿を縛りつけられている。

「調べもせずに何処へ連れて行くのかしら」

「服装から見て野盗、山賊の類ではないようです。地方勢力の私闘でしょうか」

傍で微かに忍び泣く声がある。隣に並んだ馬に、五つ衣（きぬ）、緋の袴の貴婦人が縛られていた。振乱した長い黒髪。顔は伏せているので見えない。重ね合わせ、荒縄に締められた細い手首は透ける程に白かった。

「誰かしら。身分の高い方みたいだけれど」

「公卿とは違いますね。武家娘のようです」

× × ×

富士山が美しい。澄んだ青空に噴煙一条。

「矢張り見覚えある富士山とは違いますね。

頂上も此の富士山の方が尖っていますよ」

「万年雪も見えないでしょう」

伊豆半島を掩う樹海も広く且つ濃密。その森林が絶えると台地斜面は駿河平野に下る。

此処で一行は小休止の為に停った。

海が真赤に染っている。落日の下に霞んで見える海岸は三保の松原あたりか。

信乃も賀集子も後ろ手の縄尻を松の樹に繋がれている。

「あたしは賀集子。此方のお姉様は信乃様。ちょっと、お尋ねしたいんですけれど……」

隣の松に五つ衣の貴婦人が縛られていた。

「貴女のお名前、教えて下さいませんか？」

賀集子は無遠慮に聞いた。

「何故、縛られたのですか？」

答えはない。

「此の連中は何者です。高貴な方々を縛って曳き去るなんて、悪い人達なんでしょう」

貴婦人は漸く顔を上げ、不思議そうな表情で信乃と賀集子を見較べた。二十才ぐらいだろうか。下膨れの古典的美貌。一重瞼だが切れの長い形のよい眼。その瞳は拭う事も出来

ない涙に濡れている。

「今日は何年の何月何日なのでしょうか」

信乃が代って隠やかに尋ねた。

「本当に何も御存知ないのですか？」

貴婦人の花卉のような唇が始めて開いた。

「どうやら海上漂流者と解釈したらしい。服装も髪形も異常。信乃はまだしも、賀集子の焦茶色でウェーブした髪は此の世界で見る事の出来ない種類のものなのだろう。」

「異国の御方。今日は此の国の治承四年十月十八日。妾は伊東入道祐親の末娘で八重と申します」

賀集子が驚いて叫んだ。

「一一八〇年の今月今日だわ。八百年近くも流されたのね」

信乃の驚愕は全く別種のものだった。

「すると頼朝の子を生んだ八重姫様ですか」

貴婦人は面も掩えずに泣きだした。

「此の世に妾ぐらい不幸な女は有りませぬ。

愛する方とは引き裂かれ、生んだ子は実の祖父に殺され、今度は夫となる筈だった人に捕えられて父や兄弟達と共に斬られるのです」

信乃は暗誦する程に愛読した源平盛衰記や平家物語の章句を記憶中に摸索していた。「御心配は無用です。頼朝は決して御一族を

害したりはしません」

「何故、そう言い切れるのですか？」

「わたし達には未来が解るのです」

× × ×

駿河平野が暮れて行く。

「驚いたわ。あたし達、源頼朝の陣営に曳かれて行くのね」

「あの川筋が黄瀬川。古典が正しければ鎌倉を発した頼朝は、治承四年十月十八日、つまり今夜。此の川岸に着陣した筈です」

信乃も賀集子も後ろ手縛りで馬背に揺られている。

「篝火が随分沢山。あそこへ連れて行かれるのね。何人ぐらい居るのでしょうか」

「平家物語では二十万騎。でも実数は遥かに少いでしょう。富士川合戦は明後二十日に行われる筈です。決戦を前にして一方の主将にインタビュー出来るとは有難いですね」

信乃が自嘲した。身の自由を奪われていては行き着く所まで曳かれて行くしかない。

「でも怖いわ。頼朝という人、弟でも功臣でも殺してしまう冷血なサディストでしょう」

「寧ろ合理主義者だと思いますよ。必要な時には弟でも殺し、利益が有れば敵でも許す。但し女は殺しません。彼は好色の上にフェミ

ニストだから……」

「そう言えばそうね。巴御前。伊東八重姫。唐絲。静の前。みんな許されている……」

黄瀬川の岸に待つは如何なる運命か。

× × ×

黄瀬川駅に源氏の武者が満ちている。

民家を壊した材料で板囲いを作り、陣幕を張り巡らせ、篝火赤く燃えさかる所。

兜の金具が輝き、鎧の緞毛が照り映える。

居並ぶ武将は和田義盛、三浦義澄、千葉常胤、岡崎義実、上総介広常、土肥実平等。

武田信義、一条忠頼、安田義定等の甲斐源氏と北条父子は未だ到着していない。

後年その武功で有名になる畠山重忠、熊谷直実、平山季重等は遙か下座に居た。

総大将頼朝は熊の毛皮を敷いた中央の将座に在り、生得の威厳は居並ぶ諸将を壓する。

青地錦の直垂に紺絲織の鎧。烏帽子を戴き二方白星、五枚綴の兜は郎党に持たせている。

形の良い髯。薄い唇。気品に満ちた容姿。併し面上には憂色が見える。

揮下の軍は一万に余る。だが頼朝の直属兵力は皆無。過半は日和見主義者の集合体であり、関東八平氏の後裔が多く、石橋山で敵対した者達さえ加っている。各兵団の戦闘力、

編成、装備、団結、規模、戦意、戦争目的は

全く異なる。統一指揮の困難は言語に絶し、極論すれば関東諸豪族の勢力均衡点上にロボッ

ト頼朝が乗っているに過ぎない。そして平家の正規常備軍は続々と駿河に侵入していた。

「武田信義殿御到着。富士の裾野にて駿河目代橋遠茂と戦い撃ち破った由にございます」

土屋宗遠が注申した。一座は歓喜に騒然。頼朝の地位は一挙好転した。大庭景親既に降

り、今又橋遠茂敗走、富士川以東の三大強敵中二つまで亡びた事になる。併し頼朝は喜怒

を露さない。この快報にも無言で頷くのみ。「天野遠景殿唯今御参陣。伊東一族を生捕った故、見参に供したき旨申して居られます」

三番目の敵も潰えた。又も湧き上る歓声。「引見には及ばぬ。幽閉して置け」

頼朝の心事は複雑だった。伊東祐親の長女は三浦義澄の妻であり、三女の八重姫には頼

朝自身が子を生ませている。祐親は怒って頼朝を殺そうとしたが子の祐清が逃がしてくれ

た。その祐清も捕えられている。子には恩があり、親を許せば虎を放つに等しい。

「伊東一族と共に怪しき風態の者二名を捕えました。未来の事が解ると申して居ります」

「僧侶か。神官か。それとも修験者か」

「それが二人共、女性によしでございます」

「すると巫女だな」

「全く見た事もない装束、髪形でして……」

頼朝は超自然力の存在を信じ、自らを運命の寵児と思い、御幣担ぎの傾向が強かった。

決戦前の不安感が彼を駆り立てた。

「よし。源氏の将来を占わせてみよう。返答に詰るようなら贖物だ。追放するなり、軍神

の血祭りに捧げて斬るなりするがよからう」

× × ×

信乃と賀集子は将座の前に引き据えられ、額が地に接する程に土下座させられた。背後

の両手は首に高く吊られ、胸から肩へ荒縄で幾重にも緊しく縛られている。後世の菱縄に

似た実用的縄法が既に普及しているようだ。「其方の生国を申せ」

平山季重が答で信乃の顎を突き上げた。「東京都豊島区、いや、違いました。武蔵国

豊島郡でございます」

落着いている心算だったが少しアガった。「神道か。仏門か」

「創価学会です。日蓮正宗とも申します」

「法然上人が最近弘め始めた新興宗門だな」

「あれは浄土宗です」

日蓮は未だ生れていない筈なのだが……

「其方の宗旨は何ぞ」

今度は賀集子に質問が向けられた。

「グリーク オーソドックスですわ」

「何だと？」

賀集子は昂然と胸を張る。

「心配なんでしょう。勝つか、負けるか」

将座の頼朝は興味を持ったようだ。

「占って見よ。富士川合戦の勝敗を」

年長の信乃を先ず指名した。

「源氏が勝つ、とは申しかねます」

「ならば平家が勝つのか」

「勝敗とは戦ってから決めるものです。富士川

で合戦は起らないから勝敗も有りません」

「何故、合戦にならないのか」

「平家が戦わずに退くからです」

「源平の対決は何時、何処で行われるのか」

「縄を解いて下さったら申し上げましょう」

「よかろう。季重。此の者達の縄を解け」

信乃と賀集子を縛ってある縄が切られた。

「有難うございます」

信乃は丁寧に一礼。

「あーア、痛かった。あたしお礼なんか言わ

ないわよ。それにお腹も空いたわ」

賀集子は大袈裟な身振りで手首を揉む。

「平家が退くとあれば我等はこれを追って東

海道を攻め上らねばなるまいな」

これは本心を隠した誘導訊問である。信乃

は翡翠の指環を透し見ながら勿体をつけた。

「此の玉に未来が写るのです。貴方は平家を

追跡せず鎌倉へ一旦お引き揚げになります」

居並ぶ諸将は明らかに不満の表情を示した

が、頼朝は始めて快心の微笑を浮べた。

「重忠。盃を与えよ。夕餉も何か用意致せ」

当時の頼朝は生き残る事に専念していた。

平家を亡し、武家政治を確立する思想は未だ

発生していない。関東の地盤を確立するまで

京都政権との武力衝突は極力避けたかった。

「御許しが出たぞ。受けられい」

大きな土器かわらけが二つ並び、美男子畠山重忠が

瓶子を持って進み出た。

「折角ですが不調法でして」

アルコール・アレルギーの信乃は辞退。

「あたし戴きますわ」

賀集子は大盃を一息に傾ける。

「美事な飲みぶりであるな。其方も能く占う

のか」

「今度はあたしの番？ 指名料高いわよ。で

も手提袋を返して下さるなら占いましょう」

「直実。あの妙な袋を持って参れ」

武骨な中年男、熊谷直実が気味悪そうに手

提袋を持って来た。

「玻璃器に入った丸薬。薄金に包んだ練薬。

怪しげな木の実。奇態な果実。その他、和漢

に類無き薬種ばかりでございます」

饅頭、チューブ・カプセル・いちじく浣腸等

を知らない者には何に見えただろう。

「寂しいわ。残っているのは三本だけ」

賀集子は早速ハイライトを一本取り出し、

ガスライターで点火する。

「仙人は霞を吸って生きると申すが、其方は

口の前で火を焚き煙を食べるのか」

頼朝も諸将も愕然。無理もない。煙草がヨ

ーロッパに知られたのは十五世紀末。コロ

ブスのアメリカ発見以後であり、日本に輸入

されたのは十六世紀に入ってからである。

「これを吸うと頭の中が澄んでくるのです」

賀集子は煙を頼朝の方へ吐きかけながら、

手提袋のランプを出して示す。

「紙の笹竹か」

「ジプシー直伝のカード占いです」

「ジプシーだど？」

「天竺の傀儡くぐつ子みたいなもの……」

頼朝は単純な武将ではない。幼時は京に育

って笹竹の知識を覚え、延喜以来亀卜の伝統

を誇る伊豆に永住する間に陰陽道をも極めた

ようだ。俄か占師の賀集子は満身の冷汗。

「此の絵札が貴方です。冠は王者の象徴。剣を持って強そうな顔をしているでしょう」

スペードのキングを中央に据えた。

「貴方の三方を強い人達が囲んでいますね」

指先の熟練が辛くも体裁を守った。鮮やかなカード捌き。両手の間で電光の如く五十二枚が飛び交うと見る内に忽ち三枚のキングが飛び出した。

「西に坊さん。貴方の敵です。東にも法師。

扱い方次第で敵にも味方にもなる人です。北には若い武将。味方のように、そうばかりでもない。競争相手と言うより本当の敵に近いかもしれません」

此の暗示が効果を表すか。

「西は入道相国清盛。東は鎮守府將軍秀衡。

北は誰だろう。木曾次郎義仲かな」

頼朝は自己催眠にかかったようだ。ここまです誘導すれば、あとは思うままに操れる。再びカードが躍り、マニキュアの輝きが篝火に映えて衆目を眩惑した。

「藤原秀衡殿は源平どちらにも味方せず、八年間、固く境を守って動きません」

鎮守府將軍兼陸奥守秀衡を表すダイヤのキングの下に2点札ばかりが四枚並んでいた。

「重忠。重ねて盃を与えい」

秀衡中立の予言に頼朝は満足したようだ。

「膳部を持て。次を聞きたい」

焼米、乾魚、昆布、勝栗、鯛、紫蘇を用いない白梅干。陣中では最高の饗応らしい。

「貴方は思いがけない人に会うでしょう」

賀集子は焼米を噛みながら、頼朝の象徴にスペードのジャックを添えた。

「富士川より御帰還の途次、此の黄瀬川駅で御舎弟の九郎義経殿と御対面なさいます」

最大効果を期待して放った爆弾宣言だが、

「九郎義経？ 知らぬぞ。そのような弟は」

本当に知らないらしい。

「平治元年に生れたばかりの幼名牛若殿が成人なされたのです。此の義経殿が御名代として副将になり、同じく御舎弟の範頼殿が大将になられて京へ攻め上られます」

「その範頼、義経が禅門相国と戦うのか」

頼朝は余り積極的でない。

「清盛公には死神がついています。明年二月に亡くなられるでしょう」

賀集子はハートのキングにジョーカーを投げつけた。

「何と、太政入道が急死するのか」

頼朝は平治の乱で捕虜になり、死刑を宣告

されたが池禅尼の歎願を清盛が聴き容れて助命された。平家は親の仇だが、頼朝にとって恩のある清盛は戦いたくない相手だった。

「平家は急速に衰え、木曾義仲殿に攻められて都を棄て、西海へ落ちて行きます」

「信じられようか。木曾次郎が兵を挙げしは九月七日。今までに集めた勢は千騎を越えまい。現に二万騎を有する此の頼朝すら憚る平家を、太政入道亡き後とて義仲如きに倒せるはずがない」

賀集子は義仲を表すクラブのキングに二枚のクインを並べた。

「忠実で強い女の人が二人ついています」

「信義。知っているか。誰であろう」

「木曾殿には勇婦の聞え高い巴御前が陣中にも従っていると聞いて居ります。他の一人は八条女院殿でありましょう」

甲斐出身の武田信義は此の程度の知識を持っていた。併し葵御前の名は未だ世に知られていないようだ。

「男の人も二人、木曾殿についています」

賀集子はジャックの札を二枚並べた。

「一人は坊さん。もう一人は中年の武将。どちらも最初は義仲殿に味方し、あとで叛きます。そして木曾殿の運勢は急速に興り、絶頂

に達すると一転忽ちに没落します」

「僧は法王様。武士は叔父の新宮十郎行家殿であろう。木曾次郎が振り廻されても不思議はない。義仲は京に於て一旦は源氏の武威を示しながら結局は平家に敗れるのだな」

「いいえ。義仲殿を亡すのは貴方です。御名代の範頼殿と義経殿が京に攻め上るのは木曾殿を討つ為なのです」

これは失言だった。真実だとしても言わない方が良かっただろう。

「義仲も源氏。我も源氏。平家を討つに先を越されたとして、喜びこそすれ妬み怒る理由はどこにもない。察するに其方達は源氏の仲を裂かんとして差し向けられた間者であろう」

心外な邪推を受けて賀集子は怒気と酒の酔が一時に頭へ上り何も言えなくなった。

「木曾殿は平家を追い落した後、洛中で乱暴の振舞あったが為、院宣に依って貴方の討伐を受けるのであり、決して私事の争ではありません。そして範頼殿と義経殿は更に進んで西海に平家を追討なさるでしょう」

信乃が後を引き取って穏やかに修正した。併し結果は一層悪くなった。

「余の欲する処は関東に安住の地を得る事。そして昔の通り源平相並んで堂上に仕える事

だけだ。攻められれば防ぐが此方から戦を挑みはしない。然るに源平を相争わせようと企む其方達ば一体、誰の手先であるか」

「偽りは申しません。わたし達には未来がすべて解るのです。貴方は平家を亡し、国には守護を、郡には頭地を置き、鎌倉に幕府を開いて武家の政治をお始めになるでしょう」

居並ぶ諸将は騒然となった。当時の武士は社会の上層階級ではない。現状に不満を抱きながら、政治意識の低さと団結の不足から京都貴族の支配に服している地下人^{ちげびと}だった。武家の治める世が来るといふ予言は天国の約束にも等しい。だが頼朝は独り動かなかった。

「余は皇室の外籍たる平家を亡そうとは思わぬ。日本国の政治を朝廷から横領する気もない。若し平家に代って武家の統領となる事があっても必ず京に住んで勅を奉ずるだろう。鎌倉に幕府を開くなどは平将門の所行だ。汝等は甘言を用いて余を逆賊にしたいのだから余は愚者ではないぞ」

頼朝は席を蹴って立ち上った。

「此の者達を搦めよ」

郎党数人が荒縄を持って駆け寄り、信乃と賀集子を逆手に振じ上げる。

「疾う曳き出して首を刎ねい」

賀集子は白酒が程よく全身に廻っていた。場所も立場も見境がつかない。後ろ手に縛られながら全身で抵抗し、顔を真赤に染めて呶鳴った。

「貴方は冷血漢よ。平家を亡したら弟も功臣も殺してしまうわ。一人だけ高い所に坐りたいのでしょう。それだから子孫は決して栄えはしない。確かに貴方は天下を握ることが出来るけれど、源氏の世は三代で終りよ。此の席に居る人に奪^とられるのだわ。でも誰だか教えてあげない」

× × ×

信乃と賀集子は陣幕の外に曳き出された。庭の一隅には低い杭を二本打ち並べ、前に荒席を敷いてある。首の座だろう。

「坐れ」

二人共、腰を蹴られて席の上に横転した。これは一種の儀式らしい。後ろ手の縄尻は忽ち杭に繋がれた。

「痛い。乱暴しなくても穏和しく坐るわよ」

賀集子は未だ舌が縄れ頭が回転している。

「其方達。右兵衛佐殿が天下を取り、それを三代で奪われると申したな」

郎党を遠退けて若い武将が進み出た。

「申しました。その通りになりました」

信乃は丁寧に頭を下げた。

「源氏の世を盗む悪者が、あの席に居るとも言つたであらう。それは誰だ。俺に教えろ」

凄い醜男だが一本気の若武者だ。

「教えたら何となさいます」

「其奴を斬る。御主君の為だ」

真剣な眼光。旨く利用すれば何とかなる。

「そして、わたし達は」

「命は助けよう。何処へなりと去るがよい」

「有難うございます。では申しましよう。源氏の天下を奪う者は北条時政殿です」

「何イ」

途端に若武者は三尺余り跳び上った。

「俺は北条義時だ。汝は御父上が逆臣だと申すのか」

義時は髪を逆立て、口から泡を噴きながら太刀を抜いた。

「もう我慢ならぬ。斬るぞ。念仏を称えよ」

こうなつては諦めるしかない。

「短い一生だった、と言いたいけれど、一体あたし何才なのかしら」

「マイナス七百五十六才ですよ」

「二十世紀に知らせて貰えるかしら」

「黒田寿氏が喜ぶでしょうね」

白刃が簪に映えて孤を描く、と見えたが、

「待て。御錠であるぞ。斬ってはならん」

義時の父、北条時政が現れて制止した。

× × ×

頼朝と時政が密談している。

「斬る、と言つた時の態度は何うだったか」

「泰然と落着いていました」

「義仲と戦わせようとしたから、木曾方の密偵ではない。平家と争わせたいようだから、清盛の配下とも違う。幕府を開けと奨めるから一院の間者にも非ず。とすると、あの二人は本当の予言者だろうか」

「秀衡殿の手の者とも考えられますが、間者にしては風態が眼立ち過ぎます。或は……」

「兎に角、少し生かしておこう。富士川で平家が戦わずに退くか、黄瀬川の陣に義経なる者が現れるか、それを確かめてから斬っても遅くはあるまい」

× × ×

「嫌な臭いだわ」

賀集子は漸く酔が醒めたらしい。

「生命だけは助かりました。此処は厩です」

駅宿に必ず有る厩。縄尻は馬繋ぎの柱に固定されている。賀集子は藁の中に横臥し、信乃は柱の前に端坐していた。

「あたし達、馬並みの待遇なのね」

鞍を置いた軍馬が多数同居している。外には長巻を持った大男が立番しているようだ。

「賀集子さんのカード捌き鮮やかでしたよ。出した札が望む時に現れて来るのだから」

「マジックランプよ。絵札は縦に長く、平札は横に太く出来ているから手触りで引き出せるし、裏の縞も一枚宛僅かに違うのです」

そのカードも、手提袋も、雑然と厩の一隅に投げ込まれている。

「頼朝という人、案外でしたね」

「見損つたわ。平家を亡して天下を治める計画なんか全然持っていないじゃないの」

「買い被って酷い目に遭いました。でも二日したら許して貰えるでしょう」

「あたし達の予言が正しかったと解る？」

「富士川で平家が退く。翌日義経が現れる」

「でも心配だわ。水鳥の羽音で本当に逃げるかしら。義経の登場だって旨く出来過ぎているでしょう。鞍馬の稚児が行方不明になり、陸奥の平泉に行つて成人し、今度は突然黄瀬川に現れるなんて小説以上よ。牛若丸と義経は本当に同一人物なのかしら」

「若しも予言と實際が違っていたら……」

「今度こそ間違いなく首を斬られる……」

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

「源氏に代って天下を治める者が儂だど？」

北条時政と義時の父子が対坐している。

「無礼な偽者です。それを許す佐殿も……」

「本当だったら何うする」

「そんな事は有りません。併し若しも本当だったら私が父上を幽閉します」

荒縄で後ろ手に縛られた信乃と賀集子が馬の間で身を揉んでいる。

「何とかして逃げたいわ」

「賀集子さん、縄脱けが出来るのでしよう」

「先刻から試しているのよ。あの手提袋に足が届けばペンナイフが有るのだけれど」

「解けそうにありませんか」

「やっ結び目に指が届いたところです」

頼朝は陣幕の内で冥想に耽っている。

北条父子、佐々木兄弟と共に山木判官兼隆を奇襲して滅亡させたのが八月十七日。

八月二十三日。石橋山に敷陣した時の兵力は漸く三百騎。三浦一族は未だ合流せず。

同日、大庭景親の三千騎と戦って大敗す。一時は頼朝自殺の噂が高かった。梶原景時が故意に見通したので辛くも逃走に成功。

八月二十九日。安房に上陸した者は僅か数

名。丸、安西両氏がこれを迎えた。

これから後の頼朝は全く幸運だった。反平家の気運は全国に満ちている。関東諸豪族は實力を持ち、頭上に仰ぐ人物だけを求めている。軍勢は招かずして集って来た。

九月七日。源義仲が木曾で挙兵。

九月十七日。頼朝は三百余騎を卒いて下総国府へ進出。千葉一族が三百余騎を以て迎える。一個大隊に近い人数が揃った。

九月十九日。隅田川渡河に際し上総介広常の二千騎が合流。兵力は一個聯隊に成長。

武蔵を通過する間に葛西清重、熊谷直実、下河辺行平、金子家忠、岡部忠澄等が二百、三百の兵を卒いて続々参陣した。総人員は既に混成旅団の内容を具えつつある。

目的地、鎌倉に入ったのが十月六日。それまでに、畠山重忠、工藤茂光等が加り、遠く上野や信濃からの来援も約束されていた。

平家軍接近の報を得て鎌倉を出撃したのは十月十六日。その陣容は一万を越えた。

そして十月十八日、黄瀬川着陣の日。天野遠景は二千余騎を卒いて合同し、北条父子の先導で武田信義も甲斐、信濃の兵三千と共に到着した。伊豆、駿河の武士は一刻毎に旗下に加る。单身駆けつける者。五人、十人の群

を成す者。百人、二百人の小軍勢で参陣する者。総兵力は何時か二万に近い。

だが、と頼朝は考える。

大軍には見えても諸豪族の私兵を寄せ集めたものに過ぎない。坂東武者の勇猛は期待出来るが秩序がない。緒戦に勝てばよいが一度敗れたら、脆いだろう。味方は団結を欠く。逃亡、中立、背叛続出し、忽ち雲散霧消し、又は敵に属する懼さえある軍隊なのだ。

対する平家勢は多年正統政府の統制に服した正規軍。編成も装備も優れている。その軍隊が一戦も交えずに退却するなどと言う事が有り得るだろうか。

厩の中で賀集子が跪いている。

引掻く音。擦れ合う音。

「どうですか」

「少し緩んで来たみたい」

頼朝挙兵の報が京に達したのは九月二日。

若し平家が即時に京都、福原の常備軍を急派していたら、その前衛は遅くとも九月中旬には武蔵に入り、頼朝の鎌倉入りを阻止していただろう。そうなれば頼朝の先鋒や中堅になっっている関東諸豪族の多くが日和見に廻り

更に多くは平家方に属して頼朝を攻撃したと思われる。源氏方は北条、三浦、丸、安西の諸氏だけで兵力も数百を出ず、石橋山の敗戦を再演するしかなかったに違いない。

だが平家は多端だった。河内国石川城で武蔵権守義清が叛き、九州では臼杵、戸次、松浦党が反抗、伊予では河野通清が挙兵した。平家の地盤たる瀬戸内海沿岸地方が不穏では東国を顧る隙がない。斯くする内に大庭景親から石橋山合戦の捷報が届き、関東派兵は自然沙汰止みとなった。

頼朝は反撃開始の時間を得たのだ。

× × ×

「ねえ、其処の強そうな郎党さん。ちょっと来て丁戴よ」

賀集子が金属性の声で叫んだ。

「何事だ。罪人のくせに騒々しいぞ」

眠たげな顔が厩を覗く。

「助けて。蛇がいるのよ。噛まれそうだわ。

早く追い払って」

賀集子は縄尻の長さ一杯で右往左往。

「蛇ぐらいで大仰に言うな」

それでも苦笑しながら這入って来た。

「何処に居るのだ」

暗い地面を見廻す。

途端に郎党の後頭部で大きな音。

「旨く行きましたよ」

木柄を握った信乃が立っていた。

「お姉様、強いね」

賀集子は背後に握っている縄を離した。

「起きない間に縛ってしましましょう」

郎党は長々と伸びている。

× × ×

平家の首府は新都と呼ばれる福原。現在の神戸だった。清盛が財力と労力を傾注して築いた経ヶ島の港湾設備は大船巨舶を波浪より守り、海外の物貨を直接近畿に揚陸せしめ得た。貿易国家の海港首都。高倉上皇の皇居も入道清盛の官邸も此処に在った。

九月五日。頼朝追討を命ずる新院の院宣が下された。これは病弱の高倉上皇が発し給うた最後の院宣となった。(当時の最高主権者たるべき後白川法皇は清盛に幽閉されて在した。又、安徳天皇は乳幼児で勅を下し給う年齢ではなかった)

追討軍の編成は遅々として難行した。治承四年秋の関西は史上稀に見る大饑饉。数年来の不作で駿河以西を含む近畿、山陽は餓死続出の惨状を呈している。平家にとって不幸な事に、最重要地盤の大部分が経済的に荒廃し

たのだ。追討軍の兵糧は集積遅延。半農半武士の西国兵は耕作に疲弊して徴募困難。而して皮肉な事に関東、北陸は此の大天災を免れていた。

東征軍三千余騎が福原を発したのは漸く九月二十二日。(平家物語では九月十八日)

東海方面軍最高司令官は小松権亮少将維盛が、参謀長は薩摩守忠度が就任した。師団長級の諸将は上総守忠清と一門の知度である。

だが此の陣容は第二流の人事だった。

維盛は清盛の嫡孫で序列こそ最高だが、美男というだけで武事に不適当な青年公卿。

知度は清盛の六男。

忠度は老巧の武将だが知行地が遠国で、近畿に直系の部下が少い。

首相の清盛、元帥の宗盛は別としても、平家軍の中核たるべき知盛、重衡、通盛、教経等の知将、勇将と、其の部下たる西国の精兵は此の遠征に参加していない。東海派遣軍は必然的に劣勢、弱体だった。

平家首脳部が頼朝を軽視したのではない。全国的規模で発生した反平家動乱が一流諸将と軍主力の東方派遣を不可能にしたのだ。

清盛の三男で後継者の宗盛は首相代理。

四男知盛は聯合艦隊司令長官。

五男重衡は京都を警備する近衛師団長。

能登守教経は福原鎮守府司令長官。

何れも枢要な地位に在って動けなかった。

× × ×

信乃と賀集子は郎党を柱に縛りつけた。

「馬を貰って行きたいわ」

「小さな馬ばかりですね」

「頼朝の軍勢なら、もっと立派な馬が沢山居てもいいと思うけれど」

「此の真黒な馬、少し良さそうですよ」

「あたし、此方の黒栗毛にしよう」

二人共、乗馬の心得は有る。好みの馬を選んで静かに曳き出した。

氣絶している郎党が物音で動きだし、^{うわごと}讒言を言った。

「俺ア死んじまったダ」

× × ×

平家の東征軍が京都に入つたのは九月二十三日。(平家物語では九月十九日)

此処で在京大番役の諸軍二千余騎と合流する筈だった。併し動員計画は旧都でも予定通りに進行していない。

忠清は毎日「悪日」「東方塞り」等と称して遅延を糊塗した。漸く人馬兵糧の準備完了して五千余騎が旧都を発したのは九月二十九

日だった。

維盛の作戦は巧遅に堕した。「聞兵拙速」

若し平家勢が福原常備軍だけで東海道を軽行直進していたら、頼朝が鎌倉に入府した十月

六日より早く足柄峠を確保していただろう。

そうすれば源氏は西方進出を阻止され、甲斐の武田、一条、安田諸氏と合流不能になり、

平家は大庭、橘、伊東勢を含む伊豆、駿河の豪族全部と怖らくは相模武士の一部を味方に加え、彼我の兵数は逆転して、成立したばかりの叛乱政府は忽ち押し潰されていたに違いない。

在京滞留に依る遷延は事態を決定的に悪化させた。東国の平家与党は孤立無援で各個に撃破されてしまった。

× × ×

信乃と賀集子は馬に乗って一鞭当てた。

二頭の悍馬は猛然と駆け出す。

蹄の音で覚醒した郎党が大声で叫んだ。

「各々方。一大事でござる。曲者が逃げ申した。お出会いなされ。生唆と磨墨が盗まれましたぞ」

× × ×

日本の歴史に於て万と名のつく大軍が数箇国を経て遠征するのは今回が始めてである。

準備、経験、何れも不足していた。そして歩兵中心の平家勢は展開援護や偵察に必要な騎兵を欠いていた。併し維盛、忠度の軍は外見的には堂々と東進を続ける。

大動員令は諸国に行き亘った。

近江、美濃、尾張を通過中に一千が合流。

平家発祥の地、伊勢、伊賀からは二千余騎の別働隊が尾張に入ってきた。

畿内五箇国及び丹波、丹後からも一千余騎の軍勢が続行しつつある。

併し三河、遠江、駿河等の東海道諸国からは幾らも人数が集らなかった。饑饉の疲弊と

源氏の脅威が浸透し、最も戦場に近い地域で予定兵力が得られない。戦闘序列に計上された総兵力は漸く一万騎。兵糧の購買も進まず物資輸送の労働力も確保出来ない。

会敵予想地点は当初の箱根、足柄峠から遥か後退して富士川の線に変更された。

× × ×

十月十九日の朝が明け始めた。

「此の馬が生唆と磨墨らしいですよ」

信乃が和服の裾を抑えながら言った。

「宇治川の先陣を争った名馬が此の二頭なのですか？」

賀集子は飛びそうになるベレー帽をベルト

の間に差し込む。

「宇治川を渡ったのではなくて、これから渡るのですよ。今は治承四年ですからね」

信乃は草履を脱いで帯に挟んでいる。

「その大切な馬を盗んでしまったというわけね。でも生唆、磨墨って、もっと立派な馬だとばかり思っていたのに、まるで小馬じゃない。二世かしら」

賀集子の手提袋は鞍脇で揺れている。

「平家物語には八寸馬と書いてありますよ」

「曲尺四尺八寸でしょう。小さい筈だわ」

二人の女流騎手は共に達人である。或は馬が小さい為だろうか。

「中世の和駒は全部此の程度の大きさです」

「一番生唆。二番磨墨。連勝式で一枚百円」

「冗談言っている場合ではありません」

「麻生保氏に見せたいわね」

「あ、追手が来ましたよ」

「それっ、走れ」

× × ×

此の日、平家の前衛は富士川西岸に到着して停止した。平家物語の記す処に依れば、総帥維盛は積極的な渡河前進を主張している。「迅速な機動を行い、足柄峠を越えて相模平野に野戦決戦を指向しようと思うがどうか」

上総守忠清は慎重論を提案した。

「それは攻勢終末点の超越です。伊豆、駿河の友軍は動静不明。敵情は偵察不充分なるも我より優勢である如く、味方は食糧欠乏と疲労で休養を必要としています。富士川西岸に展開して河川防禦の陣を敷き、京畿より兵力と物資の追送を待つて攻勢を採るべきです」

× × ×

名馬生唆と磨墨が疾駆する。

これに追及し得る快速の馬は居ない。だが追跡者は近道を知悉していた。

「お姉様。向うにも追手が現れたわよ」

「挟まれたようですね。あの藪へ逃げ込んで馬は棄てましょう」

× × ×

平家勢の西国兵は生活程度が高く、比較的多量の物資を消費した。維盛の司令部は白拍子、遊女、楽団、陰陽師の一群を同伴し、衣裳、調度の類も少くない。輜重の負担は愈々重く、その全部が陸路輸送に依存した。

瀬戸内海に存在する平家の船隊は太平洋の外航輸送に従事出来なかった。現代に於てさえ甲板の無い内海用機帆船が熊野灘に出る事は法律上禁止され、実用上でも危険である。

平家は維盛の遠征軍に対し、西国の物資を

海上から追送する事が出来なかった。且つ、東海道沿岸の太平洋は源氏方の伊豆、安房水軍が制海権を握っていた。

× × ×

信乃と賀集子は簾際の曲り角で馬から跳び降りた。強く鞭を加えて馬を追いつち、そのまま二人は竹林の奥へと駆け込む。

追手は馬に惹きつけられて遙か彼方へ。

間もなく、北条義時と其の部下若干名が空背の馬を牽いて悄然と引き揚げて行った。

× × ×

よく陸の源氏、海の平家と言われる。

併しこれは軍記物語の対句的呼称と思う。

東国武者が騎馬戦に長じていたのは事実だが彼等が蒙古的遊牧民では決してなかったし、源氏が水軍を知らなかったわけでもない。同様に平家方戦闘員が船員出身であった事実もないし、古代、中世に於て陸上から独立した真の意味の海軍は存在しなかった。

海軍は国際緊張の下で生れる。当時の日本には支那や蒙古から侵略を受けそうな危機感は無かった。且つ海軍は尨大な建造費と維持費を要する。そして軍備とは相対的なものである。仮装敵の存在しない所に不必要な大海軍は生れない。

平家の軍事力は矢張り陸軍が基本だった。その覇権を確立したものは保元、平治の乱に於ける陸戦の勝利だった。

平家の経済力を支えたものは対宋海外貿易の独占、瀬戸内海水運の支配、及び西国農園の経営である。生産性の高い瀬戸内海沿岸地方の荘園は多くの人的資源を供給し、兵員、物資は水路経由で京に運ばれた。関東から陸路補給を行う源氏は少数精鋭主義の騎馬武者を以て兵站線の最末端たる京に奮戦したが敗れた。併し平家が不破の関を越えて東征する場合、平治当時の利益は悉く失われるのだ。

× × ×

信乃と賀集子が簾を掻き分けて行く。

「お姉様、早く早く」

賀集子は例の手提袋を大切に抱えている。

「少し待って下さい」

大柄な信乃は何も持っていないが重たそうに続く。簾の中で迷い、場所も方角も解らなくなつて一日中歩き続けた。空腹、疲労、擦傷、眩暈。気力も体力も尽きかけている。どうやら太陽も傾きかけたようだ。

「あ、外へ出られたわ。川の近くよ」

賀集子が駆け出した。富士川の岸に近い草叢に出たらしい。

「止れ。其処を動くな」

途端に灌木の間から白刃が湧いて出た。

「此処にも居たア」

「もう駄目です。走れません」

十人程の武者が信乃と賀集子を囲んだ。二人を捕えるのが目的とすれば大き過ぎる規模の伏勢だが。

「斎藤別当実盛が御相手致す。いざ来れ」

中物見の隊長らしい大男の老武士が太刀を抜いて頭上に振り上げた。

「助けて下さい。逃げたり手向ったりは致しません」

信乃と賀集子は地面に坐り込んだ。

「何だ。女ではないか」

相手方は寧ろ拍子抜けの表情。

「併し怪しい風態の者達だ。其方等、何の目的有つて平家の陣を簾の中より窺ったのか」

「あら。貴方達は平家なの？」

突然、賀集子が素頓狂な声で叫んだ。

「さては汝等、矢張り源氏方より来たのか」

忽ち殺気が周囲に充満する。

「源氏の陣から参つたに相違ありませんが、実は捕えられていた処を辛くも遁れて来たものでございます」

信乃が丁寧と言訳した。

「源氏方に又も捕ったかと驚いたけれど、平家だと聞いて安心しました」

賀集子も精一杯の愛嬌で微笑する。

「その通りだとしても敵方から来た者を見遁すわけには行かぬ。問い訊す故、本陣まで参れ。者共。此奴等を引つ立てい」

信乃は穏和しく自ら手を後ろに廻した。

「縛らないでよ。何でも言う事を聞くから」

賀集子は僅かに抵抗したが細過ぎる腕は全然問題にされなかった。

「歩け」

二人は刀の下緒で後ろ手に縛られ、鎧の上帯で胸も腕も入念に締めあげられた。更に口腔には揉んだ笹落葉を一杯に詰められ、頬が縊れる程、固く麻布を噛まされた。

「下りろ」

岸边に小舟が隠してあった。其の中へ突き落されるようにして乗せられると、忽ち厚い眼隠しで顔を掩われ、弓弦様の細い丈夫な紐で両足首も揃えて縛られた。

× × ×

「其方達の見た事、聞いた事を包まず申せ」
斎藤実盛が言った。

「大庭景親殿、橘遠茂殿、伊東祐親殿の三家は残らず滅亡しました」

信乃は大きな身体を出来る限り小さく縮めながら答える。

「其の事を何時何処で如何にして知ったか」

正面に青年將軍が坐っていた。赤地錦の直垂に萌黄匂の鎧。「容儀帯佩、絵に書くとも筆も及び難」き二十三才の維盛である。

「祐親殿と伊東の御一族は昨夜わたし達と一緒に黄瀬川の陣へ捕われて来ました。大庭、橘両家の敗戦は、それより前だったようで、陣中の噂で知りました」

美男子維盛は幾分蒼白になりながら実盛の顔を見た。

「それでは東国に平家の味方は無い事になるではないか」

老武者実盛は拳を握って頭を垂れた。

「念の為、物見を遣しましたが三家の敗亡は無念なれど最早疑いありません」

維盛の右前に初老の侍大將が坐っていた。

「して、前右兵衛介は黄瀬川に居るのか」

鬨將の名も高い上総守忠清である。

「頼朝卿は怖らく今日早朝に御出陣、明日には富士川対岸に御到着と思われます」

「兵は何程か」

「凡そ二万と聞きました」

「二万！」

忠清は思わず腰を浮かした。

「そうか。前右兵衛介は既に我に倍する兵を集めたか。さもあるう。八州の武士に加えて伊豆、駿河の勢を悉く収めたとあれば」

一人だけ泰然と動かない武將が居た。紺地錦の直重に赤絲緘の鎧。重厚な態度と口調。そして美髯。維盛の隣、副將の座に坐っている。文武両道に秀でた薩摩守忠度だった。

「よく知らせてくれた。礼を言うぞ」

救父を見習って維盛も冷静を取り戻した。

「忠清。此の者達の縄を解け。酒食などを与え、褒美に何か一品とらせて鄭重に送り出すがよい」

× × ×

上総守忠清の陣は富士川と松林に挟まれた岸近くの一角を占める。幕囲いの中では信乃と賀集子の二人だけが膳を前に坐っている。

「あー、三日分食べたわ。もう沢山」

「源氏方より御馳走でしたね」

合子、鉢、皿、椀、盃、瓶子は全部空になり、魚と山鳥の骨だけが残っている。

「昔の人は菜食だけかと思っていたのに」

「お酒は、その位で止めた方がいいですよ」

「維盛ってイカスわ。好きになっちゃった」

「わたしは忠度という人の方が好きです」

此の時、郎党二人を従えた忠清が入ってきた。郎党は二脚の三宝を捧げている。

「権亮少將殿から其方達に下される品々であるぞ。謹んでお受けせよ」

信乃には白鞘の短刀。

賀集子には梨地の印籠。

「有難く頂戴致します」

信乃が代表して礼を述べた。

「御主君の格別な御諒がなくば源氏方から来た其方達を放免する筈はないのだぞ」

忠清は容貌傲岸、言語、態度共に高慢で何となく虫が好かない。

「富士川兩岸は戦場となろう。早々に立ち去り、我等が源氏を撃ち破るまで隠れて居れ」

途端に賀集子が口を滑らせた。

「隠れる必要などありませんわ。富士川の岸で合戦は起りません。あたし達には未来が解ります。平家方は今夜の内に此の陣を払ってお引き揚げになるでしょう」

「我等は院宣を農み征鈴を戴いて朝敵頼朝を討つべく京より遙かに下向せる者なるぞ。敵多しとて其の姿だに見ずして退く事が有ろうか。まして平家の進退を決定する権限は、此の忠清に委されているのだ。拙者が退軍を言しない限り維盛殿が軍を還す筈がない。其

方達は、源氏の軍威を殊更大きく称えて我等を脅し、富士川の岸より退けようと謀る如くであるが、狂愚に非ずば源氏の手先に違いあるまい」

× × ×
維盛は幕僚会議を召集した。

「事態が斯くなつては基本戦略の再検討も止むを得まい。皆の意見を聞こう」

其の席へ上総守忠清が姿を現した。

「遅くなりました。件の二人は御淀の通り褒美の品を与え、送り出しましてございます」

× × ×

忠清の陣は幕囲いの内に松を二本、取り込んでゐる。放免された筈の信乃と賀集子は其の樹に繋がれていた。

「又しくじっちゃったわ。あたしってホントに駄目ね。お酒を飲むと、すぐ口が軽くなつてしまうのよ」

「正直なのですよ」

「二文字だけ多いのでしょう」

× × ×

夕刻。頼朝は源氏の軍と共に富士川東岸へ駒を進めた。傍には北条時政が従っている。

「平家の勢は我等よりも早く富士川の線に到着した如く、昨日までは前衛の一部が川の此

方に進出して居りましたが、我軍主力の接近を見て対岸へ撤収しました。敵は川に沿って防禦陣地を構築中と思われれます」

「管弦の曲が聞えるぞ。風流ではあるな」

「篝火も、あの通り明るく燃えて居ります」

「流石は都の軍勢だ。余裕がある。平家が戦わずに退くなど何処の巫女が予言したのだろう。偽者奴。今度捕えたら土曜にしてくれよう」

「その前に平家と快く一戦なさいませ。今夜急襲致しましょうか」

「いや。大事な緒戦だ。慎重にやろう」

「全軍の配置完了を待って一挙に……」

「我軍は予定の如く行動する。信義、忠頼、義定は甲斐、信濃の勢を卒い、富士川上流を今夜月出前に渡渉し、富士の裾野より間道を潜行して敵後方に迂回せよ。遠景は軍船に兵を搭載して側面に海上機動を行え。余は本隊と共に此の地点に待機し、先遣隊の展開を待つて渡河する。総攻撃開始は明くる十月二十一日黎明。よいか」

× × ×

信乃と賀集子が同じ姿勢で縛られている。樹に全身を縛りつけられているのではない。後ろ手の縄尻を端短に繋がれているだけなの

で比較的自由に動けるのだが武装兵数人が見張っていて隙が見つからないのだ。

「賀集子さん。解けそうにありませんか」

信乃が小声で聞く。

「痛いわ。爪が割れたみたい」

賀集子が顔を歪めた。

× × ×

軍事顧問、齊藤別当実盛が言った。

「源氏の勢は我が二倍。一半を対岸に留めて我方を牽制し、別軍を以て我が後方に迂回する余力を持っています。富士川を挟んで持久する如き策を採るとは思われません。甲斐、信濃の兵は地理に明るい故、左翼方面から側面攻撃を計るでしょう。敵は伊豆、安房の水軍を利用し得るから我方の無防禦な海側にも機動するに違いありません。余人は知らず、此の実盛なら必ずそうします。但し勝敗は兵の多少のみで決するものではありません。御味方にも相応な作戦が有る筈です」

薩摩守忠度が提案した。

「兵力が斯くも懸隔しては富士川河川防禦に依る持久戦案は抛棄するしかあるまい。木曾川の線に後退配備を採るべきであろう」

これは妥当な戦略だった。平家の用兵は伝統的にロシア式退却戦であり、必要な際には

首府さえ自ら焼棄して敵手に委す。平治の乱には局部的戦場で戦術的退却を行い、源氏を内裏から誘出して勝った。自軍の戦力を温存しつつ退却し、攻者を疲労減少させ、兵站基地間近に於て絶対優勢の兵数確保を待って始めて決戦を挑む。これは古今の軍略家が夙に推奨していた方策である。

「忠清。其方の意見はどうか」

維盛が指名した。

「後退は進撃よりも困難なものです。実行するなら極秘裡に開始し、迅速に敵と離隔しなければなりません」

会議の空気が撤退に傾いているのを感じながら、歴戦の闘将は先刻の予言を思い出していた。

× × ×

遅い下弦の月が昇って来た。

縛られている信乃と賀集子の影は松の樹から離れない。

「賀集子さん。爪が傷ついたら縄脱けは駄目ですか」

「まだ諦めるのは早いわ。あすこに居る監視の眼が離れたら」

賀集子は傍の三宝を横眼で睨んだ。

「管弦が聞えますね。琵琶、琴、笙、笛」

「いいのかしら。遊んでいて」

× × ×

陣幕の中で白拍子が舞っている。併し其処には維盛も忠度も居ない。

月が雲に隠れた。音曲に紛れて肅々と人馬の移動する音がする。

× × ×

弦月は何時しか西に傾いた。

管弦の音のみ愈々高く夜空に冴える。

信乃と賀集子は一晩中同じ姿勢で縛られている。

「あ、何の音かしら」

突然、賀集子が叫んだ。

上流で風のような騒音が起り、忽ち富士川の全延長に亘って鳴り響いた。平家の郎党達も不審そうな顔で闇の対岸を眺める。

「水鳥の羽音ですよ」

信乃が言った。

対岸に火光が揺れる。上流にも下流にも、海上にも松明が燃えた。源氏勢の総攻撃が開始されたらしい。

平家の武者は急いで駆け出した。

× × ×

頼朝は名馬生嗟を駆って富士川西岸に上陸した。直率の本隊は猛然と平家の陣営を蹂躪

する。幕が斬り裂かれ、楽器や食器が散乱した。白拍子や遊女が転げ廻って泣き叫ぶ。

× × ×

「お姉様。脱出のチャンスよ」

賀集子が足を擦り合わせて片方の靴を脱いだ。信乃も直ちに其の意図を察知する。

「機会は一度しか有りませんよ」

白鞘の短刀を載せた俣の三宝は二人の中間にあり、何方が足を伸ばしても届かない。

「任せといて」

身体を振りながら賀集子は脱いだ靴を蹴った。三宝の側面に美事命中。短刀は信乃の足元へ転げて行く。

「足で拾うのは一寸無理なようですが」

「此方へ蹴り返して頂戴。あたしがするわ」

短刀は再転して賀集子の傍に飛んだ。

「足が届きますか」

× × ×

東の空が白みかけた。無数の水鳥が暁天を掩って乱舞する。

「平家は戦わずに逃げたのか」

頼朝は陸戦用の駿馬磨墨に乗り替えた。

源氏の兵は遺棄された武具や陣具を担ぎ出し、白拍子や遊女は縛られて連行され、逃げ

遅れた平家の雑兵が駆り立てられている。

併し平家軍主力の姿は既に無かった。両翼包囲の鉄環が閉じられる寸前に離脱したらしい。

「逃げたのは夜半。今追えば間に合います」

東軍の諸将は先を争って急追撃した。

× × ×

駆け乱れる兵馬の間を潜って信乃と賀集子は松林へ逃げ込んだ。併し両手は未だ背に固く縛られている。

身体柔軟な賀集子は足で拾った短刀を後ろの手に移す事が出来た。自分と信乃の縄尻は簡単に切断した。更に時間が与えられたら後ろ手の自由も回復し得ただろう。だがその隙は無かった。二人は縄附の俣で走った。

× × ×

「退却ではない。転進であるぞ」

維盛は薩埵峠の最高地点で馬を停めた。道は懸崖の中腹を逼り、平家軍の大縦隊は清見瀉、由比を経て興津へと移動しつつある。此の峠さえ越せば無血転進が成功するのだ。

「源氏是我軍の運動に気附くだろうか」

忠度は軽兵を率いて墨股へ急行していた。任務は收容陣地の構築、後続部隊との合流、物資糧秣の集積である。

木曾川の新防衛線に展開が完了すれば、富士川とは比較にならない堅守が可能になる。

海側面は平家方の伊勢水軍に援護され、陸上の左翼も地型的に迂回困難、防禦側は京畿から兵員補充も物資追送も容易に行い得るが、攻撃側は策源地を遠く離れ、饑饉に荒廃した東海道諸国を越えて遠征する事になる。此の防衛線を突破するには絶対優勢兵力の集結と長日月の準備が必要だろう。

平家軍の尾端には上総守忠清が在って伊勢武者の一隊を率い、後退援護に任じていた。

× × ×

「此处まで逃げたら大丈夫よ」

賀集子の後ろ手に手提袋が揺れている。

「素早いですね。命の瀬戸際だと言うのに」

信乃は詰るような口調。

「あたし慾張りなのよ」

賀集子は舌を出して微笑する。

「その袋、何時もより大きいようですが」

「あたし達の持物、全部拾って来ましたわ。」

靴の片方。白鞘の短刀。梨地の印籠」

「後ろ手で拾ったのですか。短刀も印籠も」

「一度貰ったら、あたし達の物でしょう」

× × ×

追撃軍の先鋒と退却軍の後殿が接触した。

小規模な戦闘が清見瀉から薩埵峠の麓にかけて散漫に行われ、平家方は後衛大隊長伊藤景安以下若干の戦死者を生じ、源氏側は尖兵中隊長飯田太郎以下少数の損害を出した。平家の被害が幾分大きく、且つ死傷者や武器装備を遺棄して敗走した。併し此の間に平家主力は薩埵峠を越えて離隔に成功していた。

× × ×

松林の中で信乃と賀集子が背中合せに寄り添っている。

「短刀を拾ってあったから縄が切れるのよ」

「手を傷つけないように頼みますよ」

× × ×

頼朝は清見瀉に進出して軍を掌握した。

「平家を追って東海道を上るべきか」

彼は諸將に諮問する。併しこれは本心を隠した反対表現である。果して大部分の意見は自重論に傾いた。

平家は退却したが主戦力は無傷。

駿、遠、参は荒廃して戦力化不可能。

策源地鎌倉は防禦工事未完成。

常陸、下野には頑強な反源氏党が残存。

西方に長駆すべき兵站線の整備未了。

糧秣の集積不足。

若し頼朝が慢然と平家を追撃していたら、

野戦編成の俛で木曾川の強固な設堡陣地に直面し富士川と逆の結果を生じていただろう。現に翌年早春、軽率な行家は正に此の通りの戦勢に陥って大敗した。

誘導戦略の効果は時として決定的であり、ナポレオンもヒットラーも此の手で敗れた。天成の名将頼朝だけが畏に懸らなかった。

「よし。此処は一旦鎌倉へ凱旋しよう」

何よりも頼朝自身が関東諸豪族の系列化を欲していた。此の無統制な集団に政治的統一を与え、秩序ある軍隊に仕立てなければ正統政府との対決は困難である。

頼朝は八幡大菩薩の神助に感謝した。彼は鎌倉軍事政権確立の時間を得た。若し平家が劣勢を顧みず富士川戦線の持久を試みたら、基盤弱体な関東政府は消耗に耐えずして自壊したかも知れないし、勝っても幕府態勢の確立は相当遅延しただろう。要するに物質主義の平家は精神主義の源氏に自ら敗れたのだ。

頼朝は一条忠頼を駿河の、安田義定を遠江の、守護に任命して中間地帯占領の意図を宣言し、「平家は水鳥の羽音に驚いて逃げた」と称して自軍の強盛を誇示した。

守護、地頭の設置に依る占領地の軍政。

幕府開設に依る関東独立政権の確立。

京都政府に従属しながら東国武家を総轄するという新思想は漸く誕生しつつあった。

× × ×

信乃と賀集子は富士の裾野を当所もなく彷徨している。

「源氏には追われ、平家からも逃げ出し、何処へ行ったらいいやら」

× × ×

維盛、忠清は墨股へと急いでいた。

「あの二人の女、未来が解るのだろうか」

「得難き巫女でございます」

「尋ね出して平家の行末を占わせたいと思うが何とかならないか」

× × ×

十月二十一日の夜。

頼朝は黄瀬川の駅に宿陣した。

「申し上げます。只今、御舎弟の九郎義経殿と称される武者が参陣され、御対面を願ひ出て居られますが」

土肥実平が注申した。

「弟が来たのか。早速これへ通せ」

頼朝は内心の動揺を抑えて言った。

× × ×

信乃の草履は切れ、賀集子の靴も破れかけている。

「悲しくなってきたわ。お姉様、泣いてもいいかしら」

「伊東へ行きましょう。自動車から下りた場所なら二十世紀への抜穴が見つかるかも知れませんよ」

「お金も食物も無いし、道は遠いのよ。袋が重くて耐らないわ。棄てようかしら」

「待って下さい。その短刀と印籠、多分高価なものですよ。駅宿の町へ出て売れば何とかなると思いますよ」

× × ×

「時政。二人の巫女は見つかったか」

突然、頼朝が尋ねた。

「いや、何処へ逃げましたものやら」

「手を尽くして捜し出し、連れて参れ」

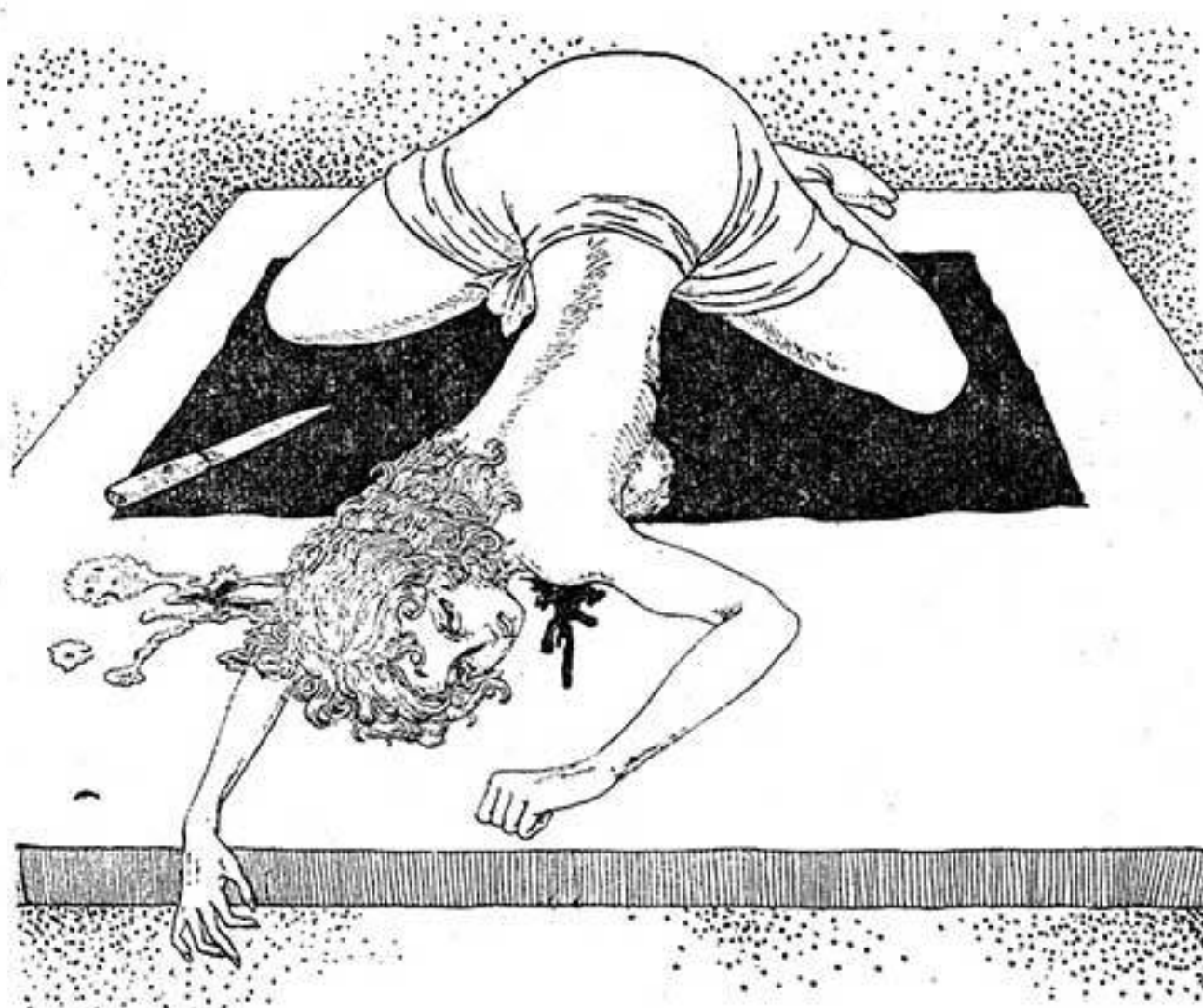
「生唆、磨墨を盗んだ不届者。今度捕えましたら必ず土磔にしてくれます」

「そうではない。余は鶴ヶ岡の若宮を北山に移し、壮大な社殿を造営して源氏の氏神とする予定だ。あの二人が現れたら八幡宮の巫女に任命しようと思っている」

陣外に甲冑武者多数が歩み寄る気配。

世に言う黄瀬川対面は数瞬の後に迫る。

源九郎義経なる天才戦術家が歴史の舞台に登場せんとしていた。



切腹研究夜話

愛と死の映像

中 康 弘 通

先に本誌昭和42年12月号で、「愛と死の映像」と題し、切腹して果てる女人の悲愁を描く映画について論考したが、その資料はすべて青山芳樹氏のご高援ご提供によるものである。当時一筆すべきところを逸し、改めてここに氏への感謝の念と、深謝の意とを併せ表明する次第である。

その後、映画や演劇で女腹切の惨美を描くものが相次ぎ、読者諸兄姉の方がよくご存知

ではあろうが、やはり昨秋、東京イイノホールおよびカジバシ座で劇団「赤と黒」の志村曜子さんは「恐怖の舞踏会」でヒロイン雪乃に扮し、烈女の十文字切腹を連日熱演した。

また先に映画「惨奇生体実験」でスチルにのみ、軍刀による割腹の悲愁を見せた清水世津さんも、青山氏のレポートによれば今春、映画「残酷女の秘絵図」で、能面をつけてカラーの切腹シーンを演じている。

「恐怖の舞踏会」は親しく緒方洋太郎氏の脚本を読む機を得たし、青山氏のご厚意により公演前後のレポートを頂いたので、一筆させて頂くことにする。

是は文字どおり仮装舞踏会に端を発する殺人を描く劇である。ヒロインは、木曾の山奥に祖父と隠棲する二十才の雪乃。戦犯として刑死した父と、雪乃の乳ばなれを待って自刃した母の復讐を、この舞踏会に機を得て果た

し、最後に思い残すことなく、仮装の花嫁姿の白無垢を押し肌ぬいだ彼女は、腹十文字にかき切って満山の紅葉よりも鮮やかに散る。

ここで志村さんの演技について、青山氏のレポートより抄録させて頂く。

志村曜子（二十三才）ははじめて脚本をわたされたとき、自分の役を聞いて「エッ、おなか切りですかア……」と云ってビックリしたような困ったような表情を浮かべたそうであるが、その曜子は今、赤いスラックスに黄色いブラウスを羽織っただけの姿で、台の上にグッと膝を開いてピッタリと坐し、小道具の脇差を逆手にしきりに切腹の練習をしている。見事な女十文字腹だ。（略）

そして志村さんは、演出者緒方さんの指導と青山氏の助言で切腹の演技を修練する。

曜子はブラウスの裾からハミ出す臍も露わに熱心に割腹のしぐさをくり返した。

是が開演三日前、深夜リハーサルである。

次いで公演初日の昼、最後の舞台稽古の志村さん――

瀕死の祖父の前に白装束の曜子は立って「最期の決意」を告げる。「おじいさまのお教え通り、わたくしは武士の娘らし

く、潔く死にます！」キッパリと悪化した様子も見えぬ口調である。「うちかけ」を取った純白の花嫁衣裳のまま曜子は静かに背後の階段を上り、中ほどの踊り場――自刃の場所にピッタリと正面を向いて端坐した。場内は暗くなり、白色のスポットに照らされた曜子の姿が闇の中にクッキリと浮き上った。文字通りの一人舞台である。すでに裏で屋敷に放った火と煙が屏のスキマから吹き出しはじめた。曜子はためらう気色もなくあわてずおちついて、ゆっくりと自害の支度にかかってゆく。キレイである。本当に美しかった。懐紙と懐剣を前におき、帯、紐を解いて重ね、さて衿をゆるめると、両手を懐ろにさし入れて、静かに白の上衣の双肌をぬいだ。きれいな双つの乳房がこぼれ出た。今日は白い半袖の肌襦袢一枚を身につけている。臆する色もなく正面を切って大きく腹を開いた。見ていた雑誌記者の間に、軽いザワメキが走った。はじめてこの女性が腹を切ることを知ったのであろう。写真のフラッシュが雨のように光りはじめた。曜子は両手を前に向け、膝をやや開き、グッと押し下

げて腹を充分にムキ出した。凜然たる覚悟が見える。懐剣を抜く。懐紙を巻く。

――割腹の思いがこもっている。そのまま右逆手に目を閉じ、左の掌で臍の辺りを大きく押しなでる。気を静めている。もう一度腹をさする。悲痛な表情、目の配り。――刀を構えた。目を正面に据えた。左の指で左の腹を揉む。切先がユックリとそこに近づく。一呼吸――腹が丸く張り切った。うつむいて――「うむッ！」長い黒髪が、突き立てた懐剣をのぞき込むようにゆれた。「ああ――」曜子は目をつむり顔を上げ、上体を反らすように胸乳を張ってやや伸びあがり、刃を深く押し入れた。グッと右肩に力が入り「うーむッ」と刀を引き廻しはじめる。

腰をうかし気味にジリジリと臍下へ……哀れに一つあえいで氣力を励まし、一気に右脇へ切り割った。腰が落ち、左手を前に上体を支え、苦痛を詠えて「おじいさま……見て！」「おおッ、見ごと！」舞台はスポットが全照明に変わった。曜子はここで、かねて屋敷に泊めていた少女を呼ぶ。そして驚く少女に喘ぎながら後事を托する。稽古は一応一文字腹のまま

曜子が少女の眼の前で自から止めの乳を貫いてつつ伏し、絶命するところで終わった。これでスグ幕になるわけである。切腹が始まることから流れはじめる哀切な篠笛の調べが、傷ましく効果的であった。

六時——いよいよ第一回の公演である。

舞台は自信にみちていた。曜子の切腹は満場を水を打ったように息づまらせた。

今度は第二刀を鳩尾に入れ、丹田まで充分にかきおろして十文字腹を切った。白い襦袢が血染になる幻すら浮かんた。翌日の最終公演に曜子は、はじめてスッカリ双肌をぬいだ。一文字に切り、裸の上体を立てなおし、刃を腹からグイと抜き、双手でそのまま鳩尾へ、一呼吸して——「ふむッ」グサと突き込む。右手を返して刀の峰を上から押える。身を反らし両腕を絞るように「チチーッ」グーッと脛下まで鮮やかに、深く大きく切り下げる——悶乱。(略)

曜子は丹田から刀をぬきとり、そのまま「さらば……」と、マリのような左乳房の下へ、「うわッ」グンと乳を突きあげ一瞬そのまま泳え、切腹を仕とげた悦び

にみちた眼を、祈るが如く中天に投げて崩れるように突っ伏し、息絶えた。

以上、青山氏のご厚意でレポートを頂き、ここに抄出させて頂いた。以って悲愴美の真景を知るに足ろう。ついでに昨秋、遠く未見の舞台を偲んで志村曜子さんに捧げた一篇の詩をも記しておこう。イイノホール、カジバシ座と続けて公演された舞台姿を偲んでのことである。

志村曜子頌 (旧かな使い)

白無垢は 処女おとめのあこがれ

いさぎよく 身いのちにまとふとき

清若く 生命いのちぞ映ゆる

たださへや 装よそはひさやけく

きみ今し 生命いのちを燃やす

美しき 火群ほむらなすかと

いまはの光り 君きみゆ照り出づ

かなしさや み腹みはら召さんに

すがすがと 白刃はらの光り

ためらはず み腹みはらにぞ没いり

ひとすじに 脛下さいかを走る

たしかなる 白刃はらの動き

あまつさへ 十字くわくを画す

たまゆらの 心こころやいかに

きみはただ 生命いのちひとすじ
燃え燃えて 燃え尽きるまで

身みづから 腹切はらるわざ

日に三たび 場じやうにのぼると

聞くだにも 心こころおののく

眼には見ね 数ならぬ身ほめうたの

きみがため 贈る頌歌

ところで、我々に一番身近なTVドラマでは、どうも、切腹シーンというのは、それがたとえ武士や軍人であっても、敬遠されている。

たとえば40年10月18日放映「竜馬がゆく」「断腸」(MTV)では、土佐勤王党潰滅の悲劇を描くが、武市半平太(内田良平氏扮)の最期にしても、白装束の上半身を写し出して、肩や腕の動きで、有名な三文字切腹を想像させるだけである。ましてや女性ともなればTVコードの制約であろうが、切腹などでのほかであろう。

しかし、現代、時代を問わず、生死を賭けたシリアスなドラマで、ヒロインであろうとなかろうと、女性の自決が哀しく美しく描かれる可能性は決して少くない。

その手段として、服毒や入水等によく使われるところであるが、未遂も含めて最近感銘

を受けたシーンを一つ摘記してみよう。

今春、放映の特別機動捜査隊「夜明け前の故郷」(MTV)のヒロイン宮川由起子に扮した二宮ゆき子さん。殺人を犯したと思いこみ——実際は犯人は他にあるのだが——純情可憐型の美貌に悲痛な表情をみなぎらせて、琵琶湖大橋の欄干に足をかけ、近づく捜査隊の面々をあわてさせる。その決意が、悲愁をたたえて迫った眉根にも、傷ましく震える頬にもあふれて、熱演の瞬間のクローズアップは忘れられないものである。

是が自刃となると、時代ものに主に使われるのであるが、もちろん素肌を見せるようなことは出来ないの、胸を突くにしても着衣のままである。頻度から云うと、

- 1 胸(左乳下)を刺す
- 2 咽喉を突く
- 3 頸動脈をかき切る
- 4 手首の動脈を切る

という順であろうか。

一つにはヒロインの身分がらもある。おおむね武家ともなると、胸を突いて果てるのがたしなみであったし、咽喉を突くのがそれに次いでいる。史実から云えば切先を口にふくみ俯伏して果てた女人もあったという。頸や

手首の動脈を切るのは現代的である。

以下、テレビ局は関西地区基準、また資料は主に筆者の見たもののほか、前述の青山氏や飯森潔氏、兵頭庫一氏(五十音順)ご提供のものもある。

数少ない例から先に挙げると、女人の憂愁を描いて井上靖氏に迫る立原正秋氏原作、41年3月20日放映「やぶさめ」(ATV)がある。

不貞の夫に悩み義弟武二と通じた人妻鬼頭方子(岡田茉莉子さん演)は、夫の愛人が急死しました夫との生活に戻らねばならぬと聞かされる。武二とすごした五日間に女のいのちは終わったと悟り、彼女は武二が鶴岡八幡宮の神事「やぶさめ」に修練の技を見せているころおい、自室で和服のまま庭に面して端座、平静な表情を崩さず、日本剃刀で左の手首をぐいと引き切る。さすがに苦痛のいろは白い額に眉間の縦じわとなって表われるが、唇をわななかせたのみで、声も立てず彼女は崩れるように血まみれの剃刀持つ手を畳について、そのまま斜め右前にのめり、無明の世界へ沈んで行く。

やぶさめのシーンと自決のシーンとが交錯して、実に詩情のあふれるカメラワークが見ものであった。

咽喉を突くのは咄嗟の間にも敢行し易いだけに、わりに緊迫した場面で使われ易いが、そんな中で美しかったのは40年から41年にかけて放映された「新選組血風録」の一章「落日の果て」(MTV)で、幕臣の娘八重に扮した高須賀夫至子さんであろうか。

病床で息絶えた父を囲んで母と涙を流すいとまもなく、官兵に邸を襲われ、娘をかばって斬られた母は、父の亡きがらに折り重なる。

たまたま辞し去ったばかりの新選組の隊士が引き返して官兵と戦っている隙に、覚悟を定めた八重は父の枕辺に端座し、白布を巻いた懐剣の柄を双手でしっかり握りしめると、真っすぐ刃先を上左の咽喉へ突きあげる。

俯瞰撮影の一瞬、伸び上がるようにうなじを反らす八重の咽喉の白さが、観るものの眼に如何にもいさぎよく映じる。八重は眼をとじて苦痛をこらえ、そのまま静止したかに見えるが、次の瞬間、俯伏しに崩折れる。

咽喉を突こうとして未遂に終わるヒロインを、奇しくも二度までも演じるのは浅丘ルリ子さん。

昨年は「真田幸村」(ATV)で、幸村を慕うあまりその墓前に坐り、あの大きく美しい瞳をクッキリ見ひらいて、槍の穂首を両手

にシッカリ握り、咽喉もとへ向けるが、アワヤという瞬間、思いとどまって幸村の菩提を弔うというのが一景。

もう一つは今年で、43年4月29日放映「かげろう」(ATV)犬塚稔氏作。盲いた華族令嬢高子は、継母の仕打ちに耐えかね、家を出て上京の途を、追手に襲われる。忠義な女中とも別れ別れになった高子役が浅丘さん。

助けてくれた大工(長谷川一夫氏扮)と一夜を野小屋で明かす。さて弥太郎が手拭いから商売道具ののみを解き出して、朝の小川へ顔を洗いに行ったすきに、盲いながらも一念で刃ものと察して探りあてた高子は、左手で柄を握り右手で刃先の鋭さをたしかめたのち柄を持ち添えて狙い外らさじと咽喉もとへ……思わず観るものも眼を閉じるような瞬間、弥太郎が帰ってくる。あわてて彼女が膝もとへ隠したのみを見つけ、彼は叱咤して濡れ手拭いで令嬢(浅丘さん扮)の頬を打つ。

その真情に涙を流して死を思いとどまった高子が、やがて光明をとり戻すであろうことは、この辺りでも察せられるが、それにしても、かつて純情可憐型の美少女でスタートした浅丘ルリ子さんの、是ら真剣な演技は、生きることに絶望した女の哀しみを、よく全身

で表現していた。

先ごろ男性向け週刊誌が、女優さんのイラスト特集を発表したときも、浅丘さんが選ばれてイラストされていたが、このほど発売の小説セブン創刊夏の号でも、浅丘さんの随筆が発表されている。後半を引用させていただと、

夢をみたつぎの朝

寝つきのいい私だけど、このごろ恐ろしい夢をみる事が多くて、悩んでいる。ほんとうに恐ろしい。

汽車が私のほうにばく進して、私をひき殺そうとする。ダンビラをふりかざした男が私にせまる。私が刀を持ち、自身をズタズタに切ろうとする。

「キヤー」と悲鳴をあげて、気がつくとも。ひたいにあぶら汗。どうしてこんな恐ろしい夢ばかりみるのかしら。

こんな夢をみた翌朝、私はフト自分の裸をみたくなる。

もっとも、うれしいこと、悲しいことがあると、よくそうするのが、私の23才からの習慣みたいになっている。

裸にみとれる私

お部屋の姿見の前で、私は裸になる。

そして、20分ほど自分の裸にみとれる。

女の子なら、だれでもそんな傾向があるのではないかしら。鏡にうつった自分の裸をみていると、他のことは何もかも忘れてしまう。

ナルシズムの世界は、女性だけ、私だけの世界。ナルシズムにひたっている私を、彼がみたらどんな顔をするだろう。

(「マイプライベート」、私が裸になるとき)より

ナルシズムは女性全般に程度の差こそあれ共通の因子である。それは男性にも云えるかも知れない。しかし明確にナルシストと云えるほどの人は、やはり女性の、それも、美しく個性の強い人に限られるのが、当然と云える。そしてその意味で、ナルシズムを表現する演技の一つとも云える「愛と死の映像」が劇的な美を構成するためには、浅丘さんのような、美貌と感受性と演技力の完備した女優さんによって演ぜられることが、必須条件と云えるかも知れない。

また同時に「平凡パンチ」6月24日号では「浅丘ルリ子に狂った男たち」という読みものがあり、そこではこんな比喻がある。

「私の前で死んでちょうだい。そしたら

イメージ・フォト

女剣士の割腹

六角 京之介

時あたかも明治百年。維新史への尽きせぬ関心、いま朝野をあげて昂まりつつある時に当り、凄絶悲愴な「女性切腹」のイメージを中心に、暗殺剣斗、女志士奮戦と最期に、尽きぬ凄美を覚え惹かれるのです。騒乱の世に、好むと好まざるとにかかわ



らず、女性の身でありながら国事に奔走しなければならなかった、若い花の数多くあったことは事実であります。

白刃の林を切り抜ける志士、女月形半兵太などという講談のすり替えになっ
てしまうでしょうが、私のイメージには
実にピッタリするのです。

いくら殺気立った世相であったとはい
え、うら若い女性の割腹がそうざらにあ
ったとは思えませんが、武家の娘として
自害による最期を遂げた史実は数多くあ
り、その悲愴な心情を察する時、私はこ
のようなフォトをつい撮ってしまうので
す。尚、モデルは滋賀県甲賀郡のさる料
亭の方をお願いしたものです。



好きになってあげるわ」

もし、ルリ子クンがそういえば、三島
由紀夫氏からハラキリの作法を教わって
彼はみごと割腹してみせることだろう。

(「PUNCH GOSSIP」より)

それというのも、浅丘さんのナルシステ
ックなムードが、その大きく美しい瞳に凝集
され象徴されて、男性には絶望的なまでの慕
情をかき立てさせるからでもあろうか。

前掲の引用文に先立って、「寝るときの儀
式」の一節があり、その中で浅丘さんは、

まず顔を天井にむけ胸に手をあてる。

それから、体を左むきにし、次に、ゆっ
くりと右向きになる。

とあるのは「就眠儀式」の一形式としてナ
ルシズムの形象化であり、浅丘さんの「女ら
しさ」を証しするものかも知れない。

いささか脱線しすぎたが、元に戻して、余
談ながら、「かげろう」と同じ日の同じ時間
帯で「俺は用心棒」(MTV)があり、沢宏
美さん扮と思われるが、兄を殺され身は犯さ
れた娘が、兄の墓前で自害するシーンがあっ
たと聞く。もしごらんになったお方があれば
お教え頂きたいものと思う。(未完)

(カット・室井亜砂路画)

漫 談 千 一 夜 物 語

薔 薇 と 蜜 蜂

(10)

第四章 う で く ら べ (三)

田 代 俊 夫

34

木陰を流れる涼しい微風になぶられ、深い眠りからメロンが醒めたとき、すでに日は高く真昼を過ぎておりました。頭上をおおう葉の茂みから、陽光が洩れてくる。

メロンは、うーんと力をこめて四肢をつっぱり、あーあと大きくあくびをしました。今何時ごろだろう？ ふと気がつく、着衣はパンツ一枚だけ、サファイアの仕業にちがいないが、そのわけは不明です。昨日の、転げまろびつ馬の後を追っかけ、泥まみれになった自分の醜態に全然、覚えがないのです。傍

の木の枝に残りの衣服がかけてあるので、それを着る。ズボンは水洗いしてあったのですが、とくに乾いています。

おや、サファイアのやつ、どこへ行ったんだろ？ かたわらの草の上にパンと乾肉とチーズが置いてある。水がめに冷い水が入っている。一枚の紙片が添えられている。メロン様。よくお寝みでしたので、わたしだけ先に頂きました。すぐ帰ってきます。S・Vと、要点のみ書いてありました。

急に空腹を覚えたメロンは顔も洗わず、むしゃむしゃパクつきはじめました。食卓マナーのうるさい姉さん女房の目が光っている所

では、絶対こんな行儀の悪いことは許されないのですが、解放感というものはいいものです。

ああ、食った、食った。さて、食後のデザートは、と。……何だ、またバナナか！ 青い草むらに寝ころがって、しばらく空を眺めていましたが、サファイアは一向、帰ってくる気配もありません。少し心配になってきました。こんな所に美容院などないし、特売場もありそうにない。そこらを散歩がてら探しにいくと、メロンはオアシスの中をぶらぶら歩いていました。

はずれ近くにかなり広い空地があつて臨時

のテント村ができています。数多くの、馬、駱駝、羊などが草を食っており、男が一人、椰子の木にもたれて半分、居眠りしながら監視中です。他の連中は昼寝らしい。

「こんにちは、おじさん。エート、おやすみ中に恐縮ですが、二十五、六の若い女、この辺に来なかった？」

「うーむ、ムニヤ、ムニヤ。……え、お前さんが迷子になった？……いや、そうじゃないって？……あ、なるほど、姉さんを探してる……何、女房？ ママゴトのかい？ へえ、本物の？ で、人相は？ じゃ美人かい？ そんな美人がお前さんのおくさん？……フム、フム、そういう女ね。……知らん」

必要なのは最後の一語だけ。メロンはスゴスゴと引き返しました。

真直ぐには帰らずに、落葉や、枯枝をつまみ上げては、その下になっていないことを確認して探しながら、道を横手の方へ抜ける。と、ぼしゃぼしゃ、何やら水音が聞える。足音を忍ばせ木立を縫って、それと覚しき地点に接近すると、果して誰しもの予想通り、落葉などの下には隠れ得ないと思える、サファイアの衣裳が、草むらの上に脱ぎ捨ててありました。一瞬ドキリで、すぐニタリ。

探している細君がいました。ヴィーナスの水浴びです。

灌木の茂みが円形に配列され、その内側に直径十メートルほどの池がある。その青く澄みきった水に、白い大魚にも似た奔放な動きと人目を意識しない大胆そのものの姿態で、サファイアが喜々として、戯れているのでした。美しい金髪を振り乱し、水面に伸びやかな四肢を浮かべています。水際の大木が枝を張り出し、その池をすっぽり覆いつくす。

木の葉隠れに洩れ来る光線が、大柄ですらりと均勢のとれたサファイアの白い肌にきらきらと反射して、光と影との麗わしい不規則模様を構成しているのです。

好都合にも、池の深さは太腿のあたりまでしかないらしい。たちまち夫の座から変貌した出歯亀君は灌木の直ぐうしろに身を潜め息を殺して、限界至近距離からこの一見万金の光景をつぶさに眺め入りました。だが、そこは女性の本能、人の気配を鋭敏に察知したサファイア、アツと声をあげると、さっと全身を水中に沈めました。残念、バレタか！

「何ですっ、お行儀の悪い！ あっちへ行きなさい！」

「エへへ……見ちゃった、見ちゃった、見ち

やったぞ」

てれかくしに頭をかくメロンの顔に、ばさっと猛烈な勢いで水しぶきがかかりました。腹を立てたサファイアが両手でぶっつけたのです。

「早くいきなさい！」

「いやなこった」

俄然、メロンは居直りました。何も悪いことしてないのに、一昨日からいじめられてばかりいる。口惜しいだけでどうもできなかったが、今は少しちがうぞ。ぼくの見ている前では、いくら女房だって丸裸のまま水から上るわけにはいかないだろうよ。正に千載一遇の好機だ。

「いうことを聞かないからいつも叱られるのよ。昨日あれほど泣かされたこと、もう忘れたの？」

「うん、忘れた」

こういう場合のメロンは強い。あくまでも図々しく構える。また水が飛んできました。出歯亀になったばかりでなく、蛙になったつもりで一向、痛痒を感じない。

一旦、退散する風を装い、水際近くに脱ぎ捨ててあった衣裳を一まとめにし、はるかかなたの草むらの上まで運搬すると、平然とし

てまた元の位置に戻ってくる。そして地面に腹這いになり、頬杖をついて厚かましく細君のヌード鑑賞と洒落こみました。青い水は摩周湖のように澄んでいる。

「ね、いい子だから、そんな悪戯しないで、おりこうにしましょうネ」

「いつまでも子供じゃないぞ！」

水中のサファイヤは唇を噛みました。昨夜自分の言ったことをしつぽ返しされ、恐ろしい目付きでメロンを睨みつける。その視線に射すくめられるとこわいからメロンは、ぷいとそっぽを向く。水浴マダムの形勢は、よろしくありません。まず、立ち上ることができない。水中にしゃがんで両手を楯にし、相手の視線を遮断するのに精一杯です。

「いい加減にしないと、本当に、怒りますよ！」

「平気、平気」

姦通、密通、色目使い等、ソノ範疇に属する大罪・原罪とは本質的に異なり、この程度の悪戯なら叱られるはずはないと、メロン君タカを括っているのです。

その生意気千万な亭主を、隙あらば水中に引きずりこみ、コッピドイ目に会わしてやろうと、虎視眈々窺っているサファイヤですが

テキもさる者で射程距離内にいないのです。

かりに蛮勇を振って池中より飛び出し追いかけたとしても、かけっこではメロンに勝てそうにないし、第一、今は真昼間である。そのうえ、オアシスには先客の隊商が何人もいる！ かく情勢分析をすれば、下手に出る他はありません。

「分ったわ。あなたの希望をいいなさい。どうして欲しいの？」

「そうだなあ……という通りのポーズをとってくれたら着物を返してやるよ」

と、好色なことをいう。子供のクセに女性のヌード鑑賞をしたいだなんて。サファイヤは教育上のことも考え合せて、腹を立てたがここは隠忍自重が肝要と、

「ねえ、お小遣い、今月から倍にしてあげるわ。いいものを買ったげる。だから、そんな聞きわけのないこと言わずに……」

「いやだ、いやだ。どうしても見るんだ！」

手足をばたばたさせて、四階玩具売場か屋上遊園地のごとき状景を呈します。営業用の愛想笑いの店員はいないが、この池にはいつ何時、だれがやってくるかわからないという危険性がある。若い母親は、もてあます。

「いつだって、好きなようにさせてるじゃない

いの！」

「だいたい夜というものは暗いもんだよ」

子供のくせにあまりに理窟っぽく、からかうのでサファイヤは、ついに本気で怒りました。だだをこねる悪い子は相手にせずという風に、池中に身を沈めたまま、くるりと背中を向けました。

しばらくは根くらべが続きます。最後の勝利を確信するメロンは鼻歌まじりに口笛なんか吹いている。水中で腕組みしたサファイヤは無念の形相で、口惜しそうに歯噛みしています。

時刻を気にして空を見上げる。頭上を覆う葉の茂みの間から、ちらちら日射しが洩れてきます。青いお空に白い雲。一羽の大鷲が悠々と巡回飛行しているだけです。

「ねえ、この辺でそろそろ諦めたらどうだいサファイヤ」

「お生憎さま、暗くなるまで、こうしていますからね。……久しぶりに、今夜はひとつミツチりお仕置してあげるわ」

「へん、だれが掴まるもんか！」

「ならいいわよ。置いてけぼりにするだけ。ちっともわたしは困らないわよ」

「その代り運賃も払わないからな」

「覚悟してなさい……」

35

先程の場所へ行ってみると、見張りの男が交替しています。さっきのおっさんよりは機転が利きそうです。

「またこんにちは、おじさん。アノウ、まことに済みませんが、男ものの服を一着、譲ってくださいませんか！」

「服を譲れだど？ おかしな子供だな。何だい、藪から棒に」

「ええ、実は……」

と、適当にでたらめを述べ、衣服の援助を求めました。

「服といっても皆、着たきりだし……。うんそうそう、ちょうど、仕立屋ってのがいるんだがね、奴なら何か持つてるかもしれない。そいつに頼んでみたら？」

「その人、どこにいるんです」

「ほら、はずれにテントが見えるだろ。中で昼寝してるはずさ」

メロンは礼を言っ、また、のこのことそのテントまでやってきました。人間が数人、入れるほどの大きさです。この暑いのに、何だってテントの中で昼寝してるんだろ？

「暑いところが好きな仕立屋さん。少しお願いがあるんだけど」

水中に鳴るドラのような声が響きました。

「何やねん、今頃。せっかくの昼寝の時間や邪魔せんといてんか」

「睡眠中、まことに恐れいりますが、実は火急の要件なんです」

と、テントの外で事情を説明していると、その男の口調が急に変わりました。

「そら、気の毒や。ちゃんとしたるさかい、中へお入り」

一步踏み込んだとたん、メロンは声も立てずに悶絶し、その場に崩れ落ちました。

こちらはサファイヤです。メロンの帰りが遅いので、いらいらしてきました。子供だから馬鹿にされて、交渉に手間どっているのかも知れない。そう思って、相変らず裸身を水中に沈めていたのですが、三十分待っても、一時間過ぎても戻ってこない。

あたりが少し薄暗くなりました。はやくも夕暮れの風が、木立の間を軽ろやかに吹き抜けはじめる。

一体、何をしてるんだろ、あの子は？ あるいは前節末尾の科白で脅してやったから、それをこわがっているとも考えられる。が、

それにしても遅すぎる。こうしてる間に別の男が水浴びにやってきたら、どうしよう。こんなフザケた筋書を作って、なかなか着衣を与えようとならない、あのTとかいう馬鹿面したヤツは、私が裸で困ってることを知ってるんだから……。とにかく、もうここにはいられないわ。あのTって男は、メロン以上にエッチで、なんでも自分に都合よく書くんだから……。

忘れていた重大な危険に気付き、丸裸のまま池を出たサファイヤは、両手で出来るだけわが身をかばうと、薄暗がりの中で木立を縫うように走りました。そして幸い、だれにも見られず、旅装を解いた空地に帰りつきしました。何もないよりマシだから早速、予備のパンティをはき、まずは毛布にくるまってメロンの帰還を待つ。

すぐ夜になる。いつものように月も出る。だが、メロンは姿を見せません。明らかにこれはおかしい。もしや、と鋭い女の第六感にピンとききました。とはいえ、この恰好で探しにくいわけにいかない。さて、どうするか。何かいい方法はないだろうか。

必要は発明の母であります。サファイヤはハッと気づきました。医療品を詰めてある第

「3鞍袋の中に男物の衣服が一式入っているのを思い出したのです。指折り数えて四日前、つまり第25節の出来事をすっかり忘れていました。あのとき、強姦未遂男ストライクを身ぐるみ剥いだその着衣を、第3鞍袋の中にたたきこんでおいたのです。」

事のついでに、その装備を説明すると、第1には食料品、第2には下着のスペアー及び分捕品たる宝石、化粧品の小袋が入れてあります。

そこで、その鞍袋から早速、目的物を取り出す。薄汚い六尺ふんどしや汗臭いシャツに用はないから捨て、残りのものを身にまといました。太い腰ベルトを締め白いターバンを頭に巻くと一かどの美丈夫の誕生です。少々だぶつき気味だが大体よい。顔にひげがないのと胸のふくらみに注意しないと、だれが見ても立派な男です。

亭主奪還斗争の記念に残しておいた黄金造りの太刀を腰に差すと、男装の麗人サファイヤは、気もそぞろにメロンを探しに出かけました。

十数人の男が林間の空地でキャンプファイヤをしていました。くると円形を作って坐り、酒盛りの真最中です。

「今晚は、皆さん。少しお尋ねしますが、十七、八の若者が、さきほどここへ来ませんでしたか？」

男を真似た含み声を出す。声だけ女ではおかしいからです。

「来たよ。まだ暗くなる前だったが、何か男の服がほしいといってな。それで？」

「実は、わたしの弟なんです、それきり行方が分らないんです」

メロンが二番目に会ったその男は、事情を説明してくれました。

「そうでしたか。で、その仕立屋さんというのは、どなた？」

「いや、あいつなら」

と、仲間の一人が、あとを引き取りました。

「急用を思い出したとかで、夕方一人で出発して行ったよ。おかしなやつさ」

急に不吉な予感が胸中をよぎりました。尚も聞くと、その仕立屋は別に彼等の仲間ではないのだそうです。

「つまり、こういうことだ、お前さん」

と、頭領株らしい男が話をまとめました。

「わし達は、一昨日からここに滞在しているんだが、昨日の夕方、一人の男が馬に乗ってこのオアシスにやってきた。人相の悪い山賊

のような風体の大男だったが、こんなことを言うのだ。

——自分はクイラトスという仕立屋であるが仲間と隊商を組んで砂漠を横断中、昨日（つまり一昨日だが）の朝「シルバー・ピース」という九人組の盗賊団に襲われた。仲間は全部殺され商品も略奪されたが、自分だけは命からがら逃げてきた。ついては食べ物と水を少々恵んで下さらぬか。また、大層疲れているので、しばらく休ませてほしい。——

聞けば話の辻褄も合っているし、同情すべき事情だから、わし達は心よくその願いを聞き入れてやったのだ。ところが今日の夕方、さっき仲間が話してあげたように……」

サファイヤは真青になりました。——ストライクにちがいない。笑止千万な偽名など使っておって！ 第29節で殺してしまえばよかったのだ。なまじ慈悲などかけたばかりに……

「本当に一人でしたか？ 出発のとき、何か怪しいことでも？」

「そう、一人で馬に乗ってな。怪しいといっても別に……」

「いや、そういえば、あいつ」

と、出発時の仕立屋を最後に目撃した先程

の男が頭をかしげました。

「どongoろすみたいない大きな布袋を乗っけていたっけ。昨日来たとき、別にそんな袋は……」

「で、その方角は？」

サファイヤは足を踏み鳴らして口早に質問しました。

——まだ殺されてはいまい。次のオアシスまで運んで、あの子の身体をなぶりものにしてから殺すつもりだ。これは大変なことになった。一刻の猶予も許されないわ。

偽仕立屋の行った方角に、案の定ここから一番近いオアシスがあるそうです。その先さらに少し行ったところに大きな河が流れており、砂漠はその手前でおしまいだとも話してくれました。

「何だか知らないが、ま、一杯やってけよ、お前さん」

「とてもそんな余裕はないんだ。皆さん、ありがとう」

サファイヤは大きく馬をつないである場所へ戻りました。寸刻を惜しんで出発準備を整えると、さっと白馬に打ち跨って、夜の砂漠へ駆け出しました。目ざす方角へまっしぐら。神に念じ、人馬一体となって砂煙を巻き

上げ、ただ一直線に宙を飛びました。超特急ひかり号なみの猛スピードです。相乗の際、メロンをいじめたあの速度とは較べものにならない。このスピードなら、メロン君、時間にして十分ほどで、きっとあの世行きでしょう。

36

「やい、小僧。よもや、このおれ様を忘れはしめえな」

遠くの方から徐々に近づいたような、知性と教養の欠除した低音のダミ声を耳にして、ふと意識を回復したとき、メロンは青い草むらの上に、横たわっている自分を発見しました。

後手に縛られている。疲労困憊して全身は鉛のように重い。オアシスのようではあるが元のところではない。

「ふん、気がついたか。手前には大分、借りがあるぜ。利子をつけてタツプリ返してやるからな」

ストライクです。標準語に戻っています。この男とは第18節以来、不思議と縁があるように思われる。瞬時にして事態を悟ったメロンは、たちまち震え上りました。いつも通り

腰が抜け、合わない歯が、ガチガチ鳴っている。ストライクはメロンの襟首を掴んで引き起し、兇悪非道な山犬フェイスを近づけました。ぞっと身震いしたメロンは、目を閉じ顔をそむける。

「もう逃さねえぞ。……第26節では色々楽しい思いをさせてくれてありがとうよ」

ドスの利いた声は、年期が入っています。

「……ほ、ほんの冗談にただけで。ボ、ボクの本心は断じて……」

「うるせえ！ このガキヤ！」

くわんと横づらに拳固を食って、草の上に張り飛ばされる。鼻血が噴き出し、唇からも鮮血が流れる。メロンは恐怖のあまり、虚脱した表情になりました。安心して見上げる夜空に、星が輝いています。まだ十二時になっていないようです。

仕立屋に化けたストライクが、どうしてメロンを誘拐したかは、前節の説明の通りですが、その以前、第29節で戦線離脱して、いち早く遁走したときからずっと、この執念深い狼男は復讐の機会を狙っていたのです。それには先回りして待ち伏せするのが一番いい。むろんサファイヤの前では、手が出せないの

た。その機会が案外、早くやってきたので、千載一遇の好機とばかり、馬で六時間ほどの距離にある、このオアシスまで運んできたのです。

ストライクはメロンを膝下に押さえ、一まづ縛めを解き、衣服を全部剥ぎとって丸裸にすると、再度後手に縛り直しました。夜の冷気がひんやりと肌に心地よい。だが腰を抜かしているメロンには、何ら抵抗するすべもありません。

「ど、どうしようというんです……」

「胸に手を当てて考えてみる。手前がおれ様にしてきたことをな」

後手縛りのまま、胸に当てられるかどうかは別として、ボーリング程度で済みそうになることは確実です。

「折角だから教えてやろう。おれ様をおちよくった罰に、手前はむろんなぶり殺しだ。が、すくにゃ殺さねえ。分ってるだろうが、その前に、ヒヒヒ、たっぷりと礼をさせてもらおう。腰のたたねえようにしてやるぜ」

本性を表わした狼は、好色、且残忍な目つきで、今度こそ独占出来るであろう、獲物を食い入るようにねめ回しました。メロンの命は風前の灯。やはりサファイアの予想通りで

す。

「殺すにも、そう簡単にやらねえ。ゆっくりと時間をかけて地獄へ送ってやるぜ。そのプランを話してもいいんだが、手前に卒倒されちゃ、又、手間がかかってかなわねえから止めとこう」

図に乗ったストライクは本年度、世界残酷コンクール第一位に相当する凄味をきかせます。そしてメロンの身体に手をかけ、締め殺す前のアヒルを調べる手つきと要領で、叩いたり引っくり返したりして吟味、検分しました。この血の逆流するような恥辱に、齒も折れんばかりに強く唇を噛みしめながら、メロンは必死に耐えているのです。

「うれしいか、小僧。何とかいつてみろい」
「サ、サファイアが、きっと助けにきてくれるから……」

「ド阿呆！ここがどうして分るんだ。万一やっ来ててもだ、手前をブチ殺してからトンスラするまでよ。馬蹄の音がすりゃ、すぐ分るんだからな。ま、観念するこった」

片耳のストライクは、その地獄耳を自慢してせせら笑いました。実はこの時、四時間ほど遅れて追跡を始めたサファイアの馬は、あと一時間あまりの地点にまで迫っていたので

すが、だれにも気づかれずに、出発したつもののストライクは、それを知らなかったのです。

メロンは観念の眼を閉じました。たしかにこの男のいうとおりだ。ああ、それにしても残念だ。こんな狼男の手にかかって、慰みものにされた上、むざむざここで殺されるとは！ 痛恨の思いに胸をかきむしられ、屈辱の涙が目には溢れました。ストライクはと見ると長らくの念願と、数々の恨みを一挙に解決出来る前祝と称して、安物のポケット・ウイスキーをグビグビやっています。

何とか逃れる方策はないものか。死刑を宣告されたメロンは、思いのほか平静になり、かえって度胸を据えて脳髓を絞りました。瞬間、脳裡に電光のごとく閃くものがある。そうだ、一か八かやってみよう。

「おじさん。ストライクのおじさん。お願いです。ぼくの最後のお願いを聞いて下さい」
「やかましい！ おれは投票なんかに行かねえんだ！」

「選挙はもう済んだからいいんです。虫歯がひどく痛むんです。さっきなぐられたんで、よけい疼くんです」

「おれ様の知ったことか！ 齒医者に行け、

齒医者に」

第29節で自分が内科医院に駆けこんだものだから、同じように一応は通例の治療法を勧告する。

「そんな無理をいわないで、チョット出してよ、ぼくの上衣のポケットに入っているヘロインを。……純度百二十%の良質ヘロイン……」

「何、ヘロインだ？」

そら、かかってきた。純粹良質の麻薬と聞いたストライクの目の色が変わりました。

「やい、小僧。手前どうしてそんなもの持ってたやがんだ？」

「おかしらの部屋でクスねたんです。手下達の使ってる安物とちがって、世界の最高級品だと、おかしらはいつも自慢を……」

ここを先途と懸命の演技を続けます。

「じゃ、泥棒じゃねえか、手前は。その年令で盗み癖がついてるようじゃ」

とても将来の見込みはないと、自分のことを棚に上げて嘖飯ものの言辞を弄する狼先生です。なるほど、これでまた一つ、死刑にする口実が増えたわけだ。

「丁度いい。おれのストックがなくなったとこだから、そいつを一つ、賞味してやろう」

「お慈悲だから、ぼくに飲ませて下さい。……虫歯が痛いよう、疼くよう、オーン、オーン」

泣くのは、お手のものだから、メロンは最後のツメを怠りません。もう一息だ！

飢えは見境いをなくさせる。剥ぎとったメロンの上衣から、お目当ての紙袋を抜きとったストライクは、ウイスキーもろとも、その白い粉末を一気に飲み干しました。

「へへへ、口当りがいいぜ。口惜しいか、小僧。いくら泣いても無駄だ。……さ、それじゃ、そろそろ、」

と、犬歯を剥き出し、いやらしく笑いながら上衣を脱ぎ始めました。

速効性睡眠薬の利き目は早い。何か呂律の回らぬ音声を呟いたとみるや、まんまと一杯食ったストライクは、その場に転倒してしまいました。たちまち、ごおとあたりを轟する慎みのない軀をかいて寝込む。

助かった！ 九死に一生を得たメロンは跳ね起きました。とにかく縛めを、解かなくちゃ。すぐ近くに大きな岩がある。その鋭い岩角の箇所縛られた手首を押しつけ、ごしごしとこすると、やがて結び目が切れ両手が自由になりました。（この場合には簡単に切れ

させた、この筆の冴え）

俄然、機敏になったメロンは、すぐ元通りに衣服をまとう。それから、周囲の情景に目をやって現在地点の確認を急ぎました。

オアシスといっても、ここは非常に狭い。十数本の椰子の木と、わずかばかりの草地、それに小さい泉があるだけです。その外側には、丘陵をなした白い砂山が、広がっています。月が雲間に隠れているので、砂漠の様子は定かではありません。真夜中です。多分、十二時ごろかと思われる。

象徴派の詩人ではないメロンは無生物たるオアシスから、無理な連想を引き出すことなく、適確、且迅速に事後処理を始めました。ストライクの乗って来た馬が木につないであり、その傍に大きな空の布袋と鞍袋が転がっています。鞘にさしたままの偃月刀が一本、その近くに置いてある。

その刀と、鞍袋の中から出てきた長いロープを持って、メロンは熟睡中のストライクの傍へ近寄りました。自業自得の先生、依然として高軀の製造に余念がありません。ここで目を醒まされては、先程の苦心が水の泡になる。ふん縛ることが先決です。しかし、縛り方など皆目知らないメロンですから、でたら

めなやり方でストライクの全身をぐるぐる巻
きにしてみました。これでも拘束の役目
だけは果せそうです。

刀を握り、この悪漢を成敗してやろうかと
思案する。サファイヤはいつも馬鹿にするけ
れど、ボクだってその気になりさえすりゃあ
それくらいのことではできるんだゾ！ 生意氣
に、刀身をすらりと鞘から抜き放つ。氷の刃
が青白く無気味に冴える。だが、もとよりメ
ロンに切れるはずはありません。

鞘を砂上に投げ捨てたのに、かえってその
鞘の重さ分以上に刀身が重くなった!! だか
ら、手に震えがきて持ち上がらない。刀で切
れば、やっぱり血が出るんだなあ、そう考え
てメロンは計画を断念しました。何となくう
しろめたい気もするので、無抵抗状態の敵を
切るなんて卑怯だ、という絶好の理由を発見
して、やっと安心しました。

危機を脱し緊張が薄らぐにつれ、メロンは
心細くなってきました。サファイヤは心配し
てるだろうなあ、と思うと、いつも自分を護
ってくれる姉さん女房がただ一途に恋しい。
すぐにでも飛んで帰りたい。いてもたっても
いられない衝動に駆られます。メロンは知ら
なかったのですが、必死に馬を飛ばすサファ

イヤは、そのときすぐ近くまで接近してい
たのです。

メロンは考えました。こんな場所にいるの
はいやだ。だが、砂漠を歩いて帰ることはで
きない。となると？

ぶらぶら木の傍へ寄ってストライクの持馬
を眺める。幸か不幸か、持主の御面相とちが
って案外、優しい顔をした、おとなしそうな
牝馬です。おそろおそろ、鼻面を撫でてやる
と、大きな舌を出しべロリとメロンの顔をな
めるのです。

急に自信が湧く。これなら、なんとか乗れ
そう。メロンは無謀な考えを起しました。
木の枝から手綱を解いて、念のため少しそれ
を引張って歩く。おとなしくついてきます。
よし、メロンはさっと身を躍らせて馬の背に
飛乗りました。動かし方を知らないから、い
い加減に腰をおおっていると、馬はいきなり
走り出す。

「わっ、そっちじゃない！ 方角が反対だっ
たら！ ……と、とまれ、とまれっ！」

馬耳東風とは、このことです。馬は自由意
志で加速しました。止め方も知らないメロン
は、振り落されまいとして馬の首にしがみつ
く。

「助けてえーっ。止めてえーっ。だれかぼく
を下ろしてえっ……」

馬上で詩吟をうなっているものと認定した
馬君は、ますます調子よく砂を蹴立てて走り
みるみる間にオアシスを離れていきます。サ
ファイヤ到着までの、わずか十数分の時間差
が、第五章を作る触媒となるのです。

夜の砂漠を走ること数時間、身から出た錆
のメロンは、生きた心地もなく馬の首にすが
りついていました。方向が反対であることは
たしかだが、どこをどう走ったのか分りませ
ん。停ってはくれないが、臨時騎手の力量を
見極めた牝馬は、思いやりある態度を示して、
無茶な速度を出さなかった。メロンも落
馬だけは辛うじて免れたのでした。

いつしか砂漠は終り、草原地帯に入ってお
りました。尚、進むことしばし、やがて水の
においが鼻を打ち、とある大河のほとりに出
ました。夜明けにはまだ時間があり、夜目に
も黒く満々と水をたたえた、かなりの急流で
す。

喉が渴いた馬は、じゃぶじゃぶと浅瀬へ入
る。そこで水を飲もうとしたが、首にしがみ
ついてるやつが、どうにも邪魔です。ヒヒ
ンと、いななき首を振り、前脚を大きく挙げ

る。

ザブーン！ 瞬間、重心を失ったメロンは、あっという間に水面にたたきつけられました。慌てて立ち上ろうとしたが、急流に足を取られ、ずるずると深みへ押し出される。水は満々、流れは早い。すぐ足が底に着かなくなりしました。メロンは泳げません。

「あ、あ……だれか、だれか来てえ……
……わあ、助けてえ……サ、サファイヤーっ」

苦しみは秀句を生む。あに、第13節における陶然宗匠ことキンカーン氏のみならんや。

金槌を 流して早く 無名川

矛盾

○

みるみるうちに夜の河を、メロンは下流へと流されていきました。

37

矛盾宗匠ことメロン君は、どうなるのでしょうか。だが、それは第五章に譲り、再度、誘拐された最愛の夫君のあとを追った男装の麗人サファイヤに目を転じねばなりません。

サファイヤの乗った馬がそのオアシスに到着したのは、死地を脱したメロンの出発に遅

れることわずか十数分の後でした。何たる運命の皮肉か、メロンがあと二十分ほどぐずぐずしておれば、感激の再会場面が演じられたことになります。追跡に猛スピードを維持したサファイヤの白馬は、乗潰されてしまいました。というのも、ストライクの約二倍の速度で追ってきたのですから。

馬から飛び降り、それと覚しき地点へ駆け寄る。前節のごとき有様です。上半身、裸の偽仕立屋は、全身をぐるぐる巻きにくぐられ、草の上に転がっている。まだ薬剤の作用が持続しているとみえ、いぎたなく涎をたらしての熟睡中です。抜身の偃月刀がその横に捨ててある。だが肝心のメロンの姿は影も形もありません。馬が木につないでないのもおかしい。

サファイヤは一瞬あっけに取られました。何が何だか分らない。しかし、心地よさそうに寝ている御仁は、正真正銘のストライクです。とにかく、こいつを叩き起す、必要がある。そこで肩口を蹴りつけ、起しにかかりましたが、偽仕立屋は相変らず鼻から提灯を生産中です。そのとき、やっと何か飲まされているらしいことに、サファイヤは気づきました。いよいよもって奇怪至極です。

強力覚醒剤を嗅がせると、ようやく意識を回復しました。とろんとして血走った眼を開け、キョロキョロあたりを見回す。そのひげ面に罵声が飛びました。

「いい気に寝てるんじゃない！ バッチリ目を開けるんだよ、山猿！」

眼前に男装の麗人が腕組みして、立ちはだかっています。見覚えのある顔と服です。何と、鬼よりこわいサファイヤではありませんか。ストライクは仰天しました。

「あ、……お、お許し、お許しを……」

「どこへやったんだ、わたしの主人を！」

「知りませぬ、トンと存じませぬ、奥様」

その顎をサファイヤは、したたか蹴りつけました。前歯が折れて血がしたたり、夜の草を黒く染めます。さっきメロンを殴ったその仕返しを計らずも頂戴した恰好です。サファイヤは、すごい形相で腰の刀に手をかけ、すらりと引き抜きました。

「正直に白状せぬと……」

「わっ、申、申します、フガフガ。手前の存じておりますことはすべて、フガフガ……」
恭順の意を表したストライクは、すっかり泥を吐いてしまいました。

「……という次第でありまして、全く残念、

あ、いや、実に慶賀の念に耐えず……」

「お前のようなパーとちがって、オツムの出来がずつといいのさ、あの子は。大方、しびれ薬でも飲まされたんだね」

冷笑したサファイアの解説を聞いて、ストライクは始めて、事の真相を悟りました。畜生、あの青二才め、と口惜しがったものの、今度は自分の立場が危い。

サファイアは推理を加えました。前後の事情からみて、ストライクの言は信用してよからう。問題はメロンの行方であるが、馬がいなくなっている以上、それに乗っていったものと断ぜざるを得ない。一人で馬に乗れるはずはないんだが、諸般の事情よりして、そうとしか考えられない。

念のため附近の砂地を詳しく調べると、果して馬の足跡が、自分の来た方向と反対の方角へ点々と続いていることを発見しました。

——機転を働かせて山猿めに一杯食わせたのは感心だけど、わたしが助けに来るのを待っていないとはいえないとは、何て性急で落着きのない子なんだろう。落馬して骨でも折られたら全く、処置なしだわ。早速、追いかけて捕えよう。が、先にこの悪漢を成敗して——。

「……お前とも妙な因縁だったけど、そろそ

ろお別れの時らしいね、ストライク」

底冷えのする声に、芋虫縛りの先生はギリ。男装の麗人は拔身を下げて近づく。ストライクは断末魔の不調和音を発しました。

と意外、大根切りと思いきや、白刃は縛めのロープだけを切り捨てたのです。身体の原因を回復したストライク、夢かとはかり大喜び、

「ありがとうございます、おありがとうございます。奥様、お姫さま、女王様……」

「トンマー！ これで助かったと思うと大間違いだよ。そら」

と、地面に落ちている敵の刀を、その足許へ蹴りやりました。

「縛ったままで斬ることは、わたしの自尊心が許さないからね。機会だけは平等に与えてやる。……さ、かかっておいで！」

機会はあっても、実力が伴わないと無意味です。

「うへっ、滅、滅相もない。ど、どうかお許しを」

女剣士の義侠心の発露を、ただひたすら辞退するストライクです。

「お前の仲間は、みな往生したんだよ。淫売の首領も、今ごろ多分ヒボシさ。一人だけ生

き残っても仕様がなないじゃないか。時間がなから早くおし！」

「お、お説、まことにごもっともではあります。が、それがし深く己れの所業を反省し、きっぱりと悪の道より足を洗い、今後は仲間の冥福を祈る職業に生涯を捧げたく、且つまた世の人のため、慈善事業を……」

とても勝目のないスッポン男は、月の女神に命乞いを続けます。山賊を廃業して慈善事業を始めると言うが、それは施しを受ける側であって、つまりルンペンを開業することに他なりません。その証拠に、先程からストライクは砂地にキチンと正座して頭を地面にすりつけているのです。ただし、葬儀斎場の坊主よろしく何回も頭の上下往復運動を繰り返しているから、仏門に入る方は嘘でもないらしい。

不戦勝の嫌いなサファイアは、いらいらして足を踏み鳴らしました。早く片をつけてメロン探しに行かねばなりません。白刃を眼前に突きつけ、

「出鱈目いうんじゃない！ 早くするんだ、早く！」

「アッ、ヒィーッ！ ……何、何でもします掃除、洗濯、皿洗い……」

「関係ないっ！」

「で、では、犬でも馬でも奴隷でも、何でもなります。命、命ばかりは、お助けを」

何かの雑誌の投書欄でも見たらしい。形勢不利となったプロレスの悪役のごとくに過剰演技を披露して、坊主の頭の体操を急ピッチで行います。敵に全く戦意なしと認定したサファイヤ、

「刀がいやなら、組打ちでおいで！」

「い、いえ、それも結構で」

「弱虫め！……お手玉、おハジキ、縄飛びなら、どうなんだ！」

万能選手だから、何をしてもしけを取りません。ストライク先生、ひたすら固辞の一手です。これでは何とも手のつけようがない。

ギャーッ！一瞬、白刃が閃き、耳が落ちました。鮮血がどっと迸り、第25節に引き続き、遂に両耳を喪失したストライクは、傷口を押さえて砂上にのたうちまします。アラビアの耳なし芳一の完成です。

「あの子を穢さなかったことに免じ、今一度だけ見逃してやる。今後、二度とフザけた真似をする……」

「は、はい。御厚情、生涯忘れることなく、ひたすら身に泌みて痛く、イテテ、テテ……」

救急車……」

救急箱を、にわか芳一に投げつけ、サファイヤは踵を返す。そして、木の枝に結んだ馬の手綱を解くと、さっと打ち跨り、メロンのあとを追って、夜の砂漠に駆け出しました。速度は遅い。先程までの猛スピードに馬君バテているからです。それに、メロンがその辺に落ちて、いるかも知れないから、サファイヤはあたりに目を配って、ゆっくり馬を走らせました。

やがて砂漠を突っ切り草原に入って、メロンが秀句をものした、例の無名川のほとりに達した頃には、すでに夜は白々と明け染めておりました。両側に広々とした、草原を挟んで、大河は波を逆立てて流れています。負けてなるものか一句、浮かぶ。

長々と 川一筋や 草の原

凡 調

38

手綱のついた馬が、一頭、水際の草を悠々と食べています。メロンが乗って来たのは明かです。だがそのメロンの姿はどこにも見えません。サファイヤは途方に暮れました。

——もし、途中の砂漠で落馬していたら、こ

こに着くまでにわたしが発見したはずだ。あるいは、この河を向う側に渡ったのかも知れない。

そう思っただけで対岸に目をやると、はるか下流に無人の小舟らしきものが川面の靄に霞んで映じます。

サファイヤは錯覚しました。急流を馬で渡れないものだから、舟を使ったに相違ない、そう考えたのです。——何て馬鹿なことをするんだろう、あの子は。砂漠ならともかく、草原では探すのに骨が折れます。サファイヤは急に悲しくなりました。おどかしが過ぎたからかもしれないと、自責の念が湧く。自分の腰にしがみついていた、相乗り時のメロンが、恋しくなってきました。わが思い天に届けよかしと、そこでまた一首できました。

あさの風 霧のかあてん 吹きあけよ

メロンの姿 しはしとめむ

相乗返上

○

男装の麗人サファイヤは、水逆巻く急流にざんぶと馬を乗入れ、真一文字に夜明けの大河を横切って、たちまち向う岸へとたどり着きました。

そして西に馬を進め、草むらをかき分け、

血まなこでメロンを、搜索しはじめたのですが、むろん発見できるはずはありません。日は昇り昼を過ぎ、月が出て夜になりました。前日からの強行軍に、さすが頑健な肉体も疲れはてて、いつしか馬上でまどろんでおりました。その間も馬は休みなく進んで行く。

目が覚めると、また朝の光が輝いているのです。メロンのことも気がかりだが、もう携帯食料品が底をついており、丸二日間、何も食べていないのに気づきました。丁度そのとき、美しい泉が湧き、青々とした樹々が茂り、色とりどりの花の咲き乱れる心地よい場所までやって来ました。

サファイヤはそこで馬を降り、樹の枝にたわわに実る甘い果物を食べ、清らかな泉の水を飲んで、しばらく休息をとりました。元気を回復すると、また馬に乗り、緑の草原を縫って進んでいくと、次の日の朝、とある大きな都へ到着いたしました。壮麗な白亜の宮殿や高く美しい塔が立ち並ぶ、実に立派な都です。

その都の城門近くまで来たとき、そこに群がる大群衆のどよめきと、歓声が瞬時にサファイヤを包みました。熱狂した数千のヤジ馬が、たちまち潮のごとき勢いで駆け寄り取巻

いて、サファイヤの本物の馬が少しも進めなくなりました。押し潰されそうです。手に手に何か旗を持ち、打ち振って、万才万才と喚声を挙げている。

わたしがとびきりの美人なので、歓迎してのかしら。サファイヤならずとも誰しもまず最初はそう考える。だが、現在は男装中のだから、そういうことではあるまいと、総明なサファイヤは、すぐ考えを改めました。されば、その理由いかん。

人垣が崩れ、盛装に威儀を正した三人の男がサファイヤの馬前に進み出ました。この都の実力者のように思われる。なかでもチーフらしい色の黒い第一の男が、口火を切って発言しました。意味不明瞭の部分を割愛し、論旨を要約すれば左のごとし。

「おお、威厳ある馬上の美丈夫よ。わしはこの都の大臣ビイサクと申すもの。この二人は侍従長と審問官ですのじゃ。そこもとは、この都の、次期王に選ばれる資格を獲得なされた。よって住民を代表して、ここに歓迎の迎えをなし、恭順の意を表し奉る……」

大臣ビイサクは、馬の手綱をとって城門の中へ導き入ると、その広場に設置された臨時休憩場へ、馬から降りた男装のサファイ

ヤを案内しました。次に侍従長カシヅキが言いました。

「そのわけは、こうでございます。この都の古くから伝わる慣習として、我々の王が王子を残さず死亡されたときは、この都に到着する最初の旅人を新たな王に選出するのでございます。成人の男子であれば、すべてその資格を持っているのです。もし、その旅人が女であれば、これも慣習上、生贄として火炙りの刑に処し、神前に供えることになっています。あなたは幸いにして、男子であられた」

何とも剣呑な話になりました。何が幸いするか分らない。

「さりながら、おお美わしの若者よ」

とカシヅキ侍従長は語を続けました。「バカやチヨンを、由緒あるこの都の王とするわけには参りませぬ。王になるには、所定の試験に合格せねばなりません。試験は三題で、二問正解ないし、七十点以上を以て合格となし……」

落ちたらその候補者を裸にし答で百回ぶって、この都から放逐するのだという。その場合はまた次の旅人に同じ試験を繰り返すそうです。さあ、大変な事態とはなった。

濡れにぞ濡れし

鬼六先生とクレイジイドクターと



美 眉 野 芳

六月十三日の午前二時頃、六本木の穴倉スナックで、私の主治医である精神病院のドクターと一杯やっていると、一人の若い女性をつかまえて、SだのMだのと話をしているサンガラスの男が、どうも鬼六先生らしいので、せっかくのおデートのじゃまをしては悪いと思ったが、ドクターを鬼六先生に紹介するために声をかけた。

サンガラスをかけていらしたからわかりませんでした、と正月以来の御無沙汰をのべ、ドクターを鬼六先生に引き合わせた。女性は女優の乱孝寿さんだった。

ヨシノマユミの精神ジョウタイはどうですか、とか、もう入院したほうがいいですね、とかヤアヤアいって、御二人は名刺を交換、ドクターは乱孝寿さんの側にちゃっかり坐ってしまった。俺が坐ろうと思っていたのに。

乱孝寿さんは花模様のプリントの七分のストラックスがよく似合い、グラマー代表みたいな谷ナオミさんとはまた雰囲気異なる、痩身のスレンダー・タイプの魅力ある方である。

乱孝寿なんていうから男かと思ったと失礼なことをいい、女の名前なんてすぐ忘れてしまいう健忘症の私が、「肉の飼育」のポスターを見て一度でおぼえてしまった名前だから、

乱孝寿の芸名は、アイデアとしては成功しているわけである。

スラックスにも弱いけど、これで支那服でも着ていたら、あちらの方と間違え、ますますもってコーフンして、あらぬことを叫んでいたかもしれない。

まったく、乱孝寿さんとランコウしたら楽しいだろうと、髪の毛の長い横顔をつくづく拝見しながら、よからぬことを考えるのが悪い癖だが、内心何を考えていても誰にもわかりはしないのである。

七月号に鬼六先生のシナリオ「肉の飼育」が掲載されているが、浅草地区の同映画封切りは六月十八日で、このときはまだ映画を見ていなかった。

浅草六区に、ピンク映画三本立てが、三つ四つあるが、谷ナオミさんと乱孝寿さんは、本当によく出演しているので驚きである。

鬼六先生、谷ナオミさん、乱孝寿さんとそろったところで、「肉の飼育」を拝見した。

男優では山本昌平さんが好きで、あの低い声でぼそぼそとやられたら、シビレル女性ファンも多いだろうと思うのだが、なんといっても、ピンク映画の観客は大多数野郎ばかりだから、山本昌平さんは大部ソソしているの

じゃないかと、くだらない心配をしながら見ているのである。

乱孝寿さんの役は山本昌平さんの定雄の妻義江で、白黒の実演夫婦という設定、病身であっさり車で殺されてしまうから、あまり有難くない役どころで、鬼六先生にコウギする必要がある。ウン。

客に笑われながら、実演するシーンで（シナリオの11）定雄をなだめる義江の乱孝寿さんの表情がとても綺麗だった。あの表情がだせるとなると、母性本能の強いほうかもしれない。

映画が終って、三人いた若い女性の客が、あわてて立ち上ったのは、谷ナオミさんの喜悅に歪む表情に圧倒されたせいだと思うのだが、最後のカラーシーンで山本昌平さんと抱擁する谷ナオミさんの表情が、最高に美しかった。（シナリオの50）

それにしても、「ええ体しとるなあ」

私の趣味としては、シナリオの31、

△定雄 どうしたんだよ。

耕次 だって兄貴、これに勝る拷問なし

だぜ。昨夜からこの奥さん、出した

いものを我慢なさってるんだ。

朱美 もう辛抱が出来ないんだとさ。

静江、苦しげにあえぎながら、

静江 後、後生です。この縄をといて。

苦しげに首を振り歯を噛み合わす静江▽

と、34の、

△耕次 兄貴、そら。

耕次、手を出し、小さく丸めた布を定雄に示す。静江のしていた湯文字だ。

耕次 我慢出来ず、とうとうやらかしやがった。▽

というシーンが抜群でした。ああ、もったいない。ぬしの湯文字になりたや……だ。

全編にそこはかとなく流れるのは、ロマンチックなペーソスで、鬼六先生の持ち味と見受けられた。テンポ快調。

おや、と思ったのは、シナリオの42、実演を見る岩田親分（ヒッチコックばりに岸監督が出演？）のうしろのサングラスの男、まちがったらゴメンナサイ。アレ、鬼六先生でしょう。

鬼六先生とわかれて新宿に出たのは、午前三時にあけみ女王と約束がしてあったからである。午前様もこうなると新宿のフーテンなみである。

約束の場所にあけみちゃん、先に来て待つ

ていた。クレイジイドクターはたちまち裸にされる。ことわっておくが、この場合、私は傍観者である。

「床にお坐り」

ドクターは泥だらけの床にひたいをこすりつけ、一段と高いところに坐っているあけみ女王を礼拝し、あけみ女王は泥だらけのサンダルで、ドクターの頭といわず、顔といわず、胸といわず、容赦なく踏みつけ、押しつけ、蹴飛ばすから、ドクターの全身はたちまち泥まみれになる。

ミニドレスを脱ぎ、黒いパンティを脱ぐとあけみ女王はドクターの顔にかぶせた。H氏に続いての被害者である。

「いい匂いだろう」

「はい、すばらしい匂いです」

「お前にあげるよ、持っておかえり」

黒いマスクをしたドクターに、あけみ女王

は汚れた足の裏を舐めさせていたが、

「お前、飲むかい」

椅子に坐って拝見していた私にいった。

「うん」

「うんじゃないでしょう」

「はい、いただきます」

「わたくしは、残りものでけっこうです」

とクレイジイドクターがフワフワいった。

「おだまり」

ドクターに足を舐めさせながら、あけみ女王は、やんわりと注ぎかける。

「今日のは、にがいよ」

「濃いからよ」

ビールを飲みすぎているから、胸につかえて落下しない。早々と退散した。

黒いパンティのマスクを引っ張って、あけみ女王は、引き寄せたドクターの首を足で締めつけ、

「お前もだよ」

「あっ」

こぼした。

「何とかおし。馬鹿」

「は、はい」

泥だらけの床を、這いつくばって、ドクターは舐める。床を綺麗にする。

濡れた床に正座させられ、あけみ女王の泥だらけのサンダルの底が、ドクターの口をふさぐ。

「さあ、サンダルを舐める。こぼした罰よ」

サンダルの底が、ぐいぐいとドクターの顔を踏みにじる。何故か、羨しかった。

裸足のフーテンや、都電の安全地帯に寝て

いたフーテンを見ながら、夜明けの新宿を二人で歩く。

「わたしのほうがMだな」

とクレイジイドクターがいった。

「あなたは、あけみ女王と対等なものね」

「飲むだけですよ」

SでもMでもない、神酒へのFだ、と断言は出来ない。複雑な複合体であることには間違いない。悩むほどのことはないな。

ドクターのカバンの中には、あけみ女王の黒いパンティがはいっている。

「梅雨だね」

と灯台下暗しの女性（八月号の続き）にいった。去年とくらべて今年は涼すぎる。

「濡れるとしますか」

寒古鳥におひきとりを願って店をしめ、近くの温泉マークに一つの傘。

「近くていやだわ」

彼女のアパートが、である。

「いいじゃないの、見られても」

「よくないわ」

「男と女がスルことは皆同じ」

上京したH氏がとまった同じ二階の部屋とは、ネ。部屋に浴室がついていないから、階

下の浴室に二人でいった。浴室でないと、初心者では無理。

ひょうたん型の湯舟は、二人ではいるのは、せますぎる。湯舟にひとり、ふちに彼女を腰掛けさせる。

「あっ」

と彼女が叫んだ。

「好きなくせに」

「馬鹿」

湯舟にひたっているほうが、よほど、のぼせる。

「早くたのむよ」

眼を閉じていたが、

「だめ」

立ち上り、湯舟を出て、長々とタイルにのびた。のぼせた。水をぶっかけて、一息つく初心者には苦勞する。

「ちょっと」

彼女を呼んだ。

「またげよ」

「いやよ」

「いやじゃないよ」

しぶしぶだが、またぎ立つ

「しゃがんで」

「いやだなあ」

「早く」

「恥ずかしい」

「タオルをはなせよ」

「やめて」

強く握って、はなさない。

「やらかせよ」

「そんなこといったって」

「あんなにビールを飲んでいくせに」

そのつもりだったから、店でビールを沢山飲ませておいたのである。

「だって」

「早くしろ」

待つ身にもなってみろ、つかれる。

……………

タイルに坐って身体を洗っている彼女の背後にまわり、

「五味康祐の（色の道教えます）、読んでこ」とある

ときいた。

「夫君が妻女にかけるところがある」

彼女の白い背中にかけた。湯気と交錯する中で、首をうなだれて彼女は白い朝顔と化した。思いがけない凌辱にじっとたえている。

面白い。

「ひどい」

うらめしそうに彼女はいった。

「洗ってやるよ」

石けんを背中にこすりつけ、新しい湯をくんで、幾度も背中を流した。

「さあ、あがろう。縛ってやるよ」

門限がある。帰らなくてはならない。

これで二度、彼女と遊んだ。これで終わりかもしれない。そんなことを考えながら腰紐で彼女をあぐら縛りにする。これ以上付き合うと情が移る。浮気でなくなってしまう。それがこわい。

後手に手首を縛った腰紐が一本、あぐらをかかせて足首を縛った腰紐が一本、乳房を上からしぼりあげたのが一本、足首と首を輪にして上体をかがめたのが一本、緊縛を求めるために、彼女は着物を着ているようなものである。

海老責みたいにして、うしろにひっくり返し、部屋の電気を一斉につける。

「消して」

「見なくちゃつまらないよ」

「お願い、消して」

猿ぐつわはあまり好きではない。というのは、拘束しておいて、彼女の顔を足で踏んづけたり舐めさせたりして、彼女の口唇に羞恥

責めを加える予定があるからである。

Mの彼女に、これは私のサービスだ。

縛るのはつかれる。彼女に奉仕するのも面倒になることもある。逆のほうがいいなと思うこともある。

彼女を、ひっくり返したまま、

「ちよっと薬局に行ってくる」

不安そうな、泣き出しそうな彼女を尻目に部屋を出た。

大抵の人の想像するものを買うためではない。軽便浣腸でも買ってこようと思ったのである。浅草は深夜まで薬局があいているところがある。

これが六月十九日。

カメラルポで山本章氏が魔子を発表したとき、おやと思った。辻村さんがカメラハントで魔子を發表したくて、うずうずしていることを知っていたからである。誌上に發表しないという約束が彼女と辻村さんの間にありればかりはどうにもならなかったらしい。

カメラルポの特色で、顔はかくされてあったから、これなら誰だかわからない。このルポが突破口になって、八月号のハントにやると魔子が解禁になり、彼女に再び会えたこと

は、私にとってうれしいことであった。

辻村さんに紹介されて、魔子に会ったのは三年前で、その時一度だけ、二時間ばかり付き合ったきりだから、もう顔など忘れてしまった。

彼女の本名も住所も知らないし、東京と関西じゃ遠すぎるから、辻村さんの楽我記で彼女の消息を知るのみであった。

当時の彼女は、誌上に發表されることを極度に恐れていたのは事実で、どっちみち本名でない魔子という名前さえ、私に誌上での發表を禁じたのである。

それだけではない。紹介者の辻村さんにさえ絶対秘密にするなら、付き合ってもいいという難題で、魔子の強烈な性格に圧倒されたのである。とにかく、彼女は自分を話題にするということを許すことができなかったのに違いない。

辻村さんには申し訳なかったが、目の前にすらりとした新鮮な魔子がいるのだから、黙ってうなずくより仕方がなかった。

「魔子の呻く夜」を読むと、その頃はまだ大学に在学中だったことになる。

女性の身上調査は嫌だし、無関心で、三年付き合った女でさえ、アパートの電話番号

すら知らなかったぐらいだから、魔子についての知識は全く無い。

ホテルに入るなり、浴室のタイルに寝かされ、胸をまたいで立った魔子にどっと浴びせられた。そのつもりだったのか、あまり読ん

でいず、私のことは勿論、知らなかった。はじめから飲まされると、唇にキスでなくなるので、プレイにも段階があるほうが好ましいのだが、どっちみちサディスチンの魔子が唇を許すわけもなく、キスを許されたのは、はるか下の足先だった。

身体を洗って浴室を出ると、腰紐を首にまきつけられて引きずられ、隣室の夜具に勢よく横転した。

それが合図で、浴衣の裾をはしよった魔子が胸にまたがり、カメラハントにも書いてあったが「首を股で挟んでしめ上げ」「顔のり、ゆすりにゆすり、押しつけてきた」のである。息がつまり、顔をのけぞらして、息をつくと、首にまいた腰紐がぐいとしまる。

さんざん顔に坐ってから「お前の好きなのをあげるよ」と、再び浴室に引きずられ、目茶苦茶に浴びせられたのであった。

「それで顔でも洗うんだね」

浴衣の裾をからげて浴槽に入り、水遊びで

もするように、びしゃびしゃとやっていたのが、とても小気味良かった。

彼女の言葉は関西弁と標準語がミックスするが、カメラハントによると、京都弁なんだな。東男と京女か。逆だ。

丹前の帯で後手に縛られて柱にくくりつけられた。丹前で顔をおおわれ目の前が暗くなる。魔子の楽しそうな笑い声がした。何かいたずらをしたらしいが、もぞもぞとして妙な感触だけで、何をされたのか、さっぱりわからない。

いきなり、バンドが腰に、胸に、足に打ち下ろされた。

鞭打たれるのは、あまり好きでない。真似

女性写真モデル募集

分譲写真撮影のため

奮て御応募下さい

○本誌では、代理部分譲品用の写真を撮影するため、女性モデルを募集しています。
○本誌愛読者の方でしたら、年令、遠近は問いません。分譲品用ですから誌上に発表いたしません。誌上発表可能でしたら尚結構です。又、助手介添え或はプレイのみ出演御希望の方は御照会下さい。
○出演又は参加御希望の方は、年令略歴記

事だけで許してもらって、一服した。丹前の猿ぐつわは息苦しすぎた。

ケントの箱を取ろうとして、彼女の顔を見た。ケントの中味だけがテーブルに散乱し、白い箱がないのである。

柱に縛りつけて彼女がやっていたが、ようやくのみこめた。

一休みしてから「魔子の呻めく夜」が再開された。「舌の作業」が「延々とつづ」いたのである。腰紐の首輪は、最後まで解かれなかった。それ以上の関係はない。

まだ書きたいことは沢山あるけれど、赤裸裸な話はさけない。

三年間、魔子との約束を守ったし、めでた

載の上編集部宛お申込み下されば、報酬その他詳細につき、お返事いたします。

○応募されました方々の個人的な秘密は固く厳守いたしますから御安心下さい。尚お好みの傾向を附記下されば好都合です。

○本誌の内容充実のため、並に皆様の文献研究資料作成のため、奮って御応募御参加下さるよう、お待ちいたします。余暇を利用しての御参加も大いに歓迎いたします。
○特に妊婦資料の作成に御協力下さる婦人を求めています。撮影可能の方は、遠近に拘らず御一報下さるようお願いいたします。

△奇く編集部△

くカメラハントも発表されたから、約束は時効だと思う。

このことを紹介された辻村さんに、話せないことが最高に良かった。その意味で書きました。

辻村さん、どうも申し訳有りませんです。せっかく連れて行って頂いて、魔子を紹介していただきながら、ウソをつく結果になりましたが、右のような事情があったので、お許し下さいますように。

これで胸が、すっきりした。

レズビアンは疲れるという。終りがなければである。

男と女の関係なら、男のダウンで終了するわけだから、区切りがある。

ところで、と考えた。

神酒拝受である。それだけで終ることもあるし、そのあとで関係を持つこともある。そうなれば問題はないが、神酒拝受だけで終ってしまう場合のことである。

それで満足するものかどうか。

浴びせられて、女王から暴行されたときが最高だったなあ。

カット・春川ナミオ画

探

奇

考

料

『グロテスク』補遺

「癌患者の手記」(武村祥将)を主として

齋 藤 夜 居



新増時時刊

「グロテスク」新年臨時増刊号表紙

梅原北明の雑誌『グロテスク』については本誌(昭和43・2)にその概略を記載したので、説明を省く。以下はその補遺である。

『グロテスク』の昭和五年一月号(事実上の終刊号、というより北明の出版活動の終止符ともなった)は、二種類が発行されている。一冊は市販されたが、もう一冊の方は禁止になっってしまった。刊行を許されたのは、『グロテスク』新年特輯号(昭和4・12・31印刷納本、昭和5・1・1発行、発行編輯兼印刷人梅原北明、印刷所ユニオン社印

刷所、発行所談奇館書局、定価一円菊判三一八頁)

となっている。「人を喰った男の評伝、梅原北明の巻」という記事があり、生方敏郎・大泉黒石・高田義一郎・今東光・斎藤昌三・鈴木竜二・和田信義・大曲駒村・綿貫六助・乾谷土句子などがその奇行の片鱗を伝えているが、編輯子は北明は目下のところ行方不明中だという事を書いている。殆んど身の置き所に窮していたと言うべき状態だったと推察すべきだろう。石井研堂の文によれば奇病を得て入院中と聞くともあるが、それには日付

があつて昭和四年八月五日である。

発禁となつた『グロテスク』は新年臨時増刊号で、昭和四年十二月二十一日印刷納本、同五年一月一日発行、梅原貞康編輯印刷、談奇館書局発行で、定価金二円、四六判三七五頁、単行形式の耽奇読物集となつており、當時にあつては定価二円とはずいぶん高価な雑誌である。然し、この臨時増刊号発行に関する予告は、既に昭和四年十一月の『グロテスク』文芸市場社五周年記念特輯号の二四九頁に(社告)として先着五百名に限り「雑誌創刊以来の清算すべき奉仕的珍籍」だとして広告している——。この新年臨時増刊号は現在でも珍誌にかぞえられる位、残存部数が少く、グロテスクには一冊だけ、四六判のものがあつて、と言われているのはこの号のことなのである。次に内容の紹介にうつる。

おそくづの絵文献志	原 浩三
本朝男色雑考	鈴木 大充
男 色 考	旭 寿雄
虫魚鳥獸の性交論	北斗 光山
私娼物語	板倉 四郎
癌患者の手記	武村 祥将
西比利亞地方の 秘密食堂と淫乐的賭博場	北川 寿雄

支那黄表紙

続支那黄表紙

撮影所猥談

劇場の怪奇談

洞房小話

外道文章

支那学生風流塊

最初の鞭打専門店

同性痴情曲

美人局事件

深夜の世界

裸身闘争曲

米田 華紅

後東浅太郎

小川 正

鈴木 藤夫

竹浦楼主人

羅 部玲

羅 張彦

武内 光

玉井 幸雄

比 呂 志

渡部欽一郎

山中 一之

なかなかバラエティに富んだ読物集となつてゐる。特色としては男色物が三篇も載つてゐる点と、性体験告白物や、映画人の素っ破抜き記事や、当時としては珍らしい和製のマゾ式の鞭打小説、虫鳥獸類の生殖行為の観察支那の猥談笑話などと実に多彩である。

原浩三の「おそくづの絵文献志」は好色美術史研究家の初期の考察として注目し、価値するもので、春画についての語意語義の集録であつて今でも便利なものである。「本朝男色雑考」は日本男色の系譜について簡約し、「男色考」はそれより更に詳しく男道を述べてゐる。「虫魚鳥獸の性交論」は蜘蛛・蛙・蝶・

蛾・鴨・蛸・亀・蛇・蝸牛・みみず・なめくじ・鮫・鯨・かまきり、などの交尾に就いて書いたもの。このうち余り人に知られていない、なめくじの交尾の所を引いてみよう。

「なめくじはその姿態に似合ふなかなカ斯道の好者であつて、蒸暑い真夏の夜、雌なめくじがノロノロと進行していると、一方雄なめくじはその後を追うてくる。そして後から追いついた雄なめくじは、雌の尾とでも言はれる部分に、彼の口を持っていつて相手が進むがままに彼の口をのせたままついて行く。このような場面が暫時続いてから、遂には彼等はその処に立ち止まつたまま、二匹が互いにもつれ合うのである。そして円錐形をなすと円時に、雌雄の口辺の凹んだ所から器官が現はれ、それが互いにキスするのである。こんなことをしばらくやっていると、彼らは糸のような引きのある粘液を多量に分泌するのであつて、彼らはこの糸の先きで互いに和氣あいあいとして、もつれ合つたまま螺旋形に蠕動する。そして、時には美しい貝の形状になるかと思へば、こんどは捲きよれた木の葉の形となり、あるいは茸(きのこ)を逆さに倒したような形だの、種々雑多な形ちをして楽しむのであるが、程を経てから雌雄はその

からだを解いて、お道具も引っ込め、お互いに別れ別れ愛着の糸を引きながら、しづしづと立ち去って行くのである」。

「私娼物語」は玉の井と亀戸の私娼街の裏話であって――、銘酒屋の経営者にはベテランの私娼上りが多く、またその亭主なる者に、警察上りが多く、どうしてこの利害相反する仇敵同志の間柄であった男女が、気が合い、一番接近した同棲生活が生れるのであろうか？ またその場合でも、銘酒屋の主人（女）は、娼婦が不足する場合には自らエキストラの役を買うが、女房が二階でミシミシ屋鳴り震動はげしく稼いでいても、巡査上りの亭主は茶の間で平気で夕刊を読んでいる、という情景を書いている。男女の性行為はこの社会に来ると、徹底的に商品化（生活手段）されてしまうからだとも言っている。

次に、「癌患者の手記」だが、これはこの雑誌中の逸品で、耽奇物語としても奇怪な話なので、やや詳しく紹介してみよう。学術的記事としてH帝大医学部紀要に発表されたもの、という冒頭の序述より始まる……。

第一人称（私）の主人公、語り手は箕山信造とよぶ二十八歳の男である。陰茎喪失者と

なってしまうまでの物語りである。

私は東北地方弘前市を北東に二里隔てた黒石町に生まれた。人口約一万五千、土地が一段と隆起していて、前を流れる浅瀬石川の流れゆたかに、古来豊饒無比の地として黒石米の名は夙に天下に知られておりました。此処で私は平穩無事に育ったと言えればそれ迄ですが、土地の小学校を了える頃、私は蟻虫症というきわめて厄介な病気にとりつかれてしまったのです。夜分休んでいると、皮膚のポカポカと暖まるにつれて、肛門の附近が妙にムズ痒くなり、そのムズ痒さは一定の速度を以って肛門の周囲に拡がったかと思うと、全身が心地よくホンノリとほてって言うべからざる温熱感を覚えるのでした。無論、私は痒さに堪えられないで爪でガリガリと肛門の周りを搔きむしるので、皮膚が破れて血がにじみ出ることにすら、珍らしくはありませんでした。そのため触れればボロボロと落ちる軟かい乾ききった痂皮が、いつも不規則にこびりついていて、それを搔き落すのが、また妙な感覚をそそののでした。

所が、その堪え難い痒さにも係らず、私はその病気を家の者にも告げず、また医師をたづねることをもしなかった。なぜなら私はそ

の甚だしい痒さ痛さのうちに一種の言うに言えない所の自己快感を催していたからです。

当時、私はH市の中学に入るに及んで、素人下宿におり、実家にあった時とちがって生活が自由に振舞えるので、この悪癖が更に一層はげしくなり、自己の肛門を中心とする変態遊戲に溺れきって居りましたが、ある晩のこと、友人から借りた淫本を夢中になって読んでいたうち、肛門をはげしく搔きながら、とうとうオナニー常習者とも成り果ててしまった……。というのが告白の序章で、特にこの箕山信造のリングは烈しく燃え立っている時には約七寸もあり、赤銅色の円柱の如くに肥え太っていた。ある時、下宿のお君さんとよぶ十七の少女に暴力的に情交を迫り、遂にその目的を達してしまうが、まるで道鏡が一般の婦人と交接を無理強に行ったが如き結果を見るのであった。

彼は中学卒業後は進学の目的もなかったのに、黒石の実家に帰っていた。そして附近のT村の従兄Kの許で遊んでいたが、歪んだ性欲はしだいに残酷味をおびた悪戯を発見するのだった。それは夏になるとこの村では昔ながらの悪習で、若者たちが娘を村外れの森に誘い込み、闇にまぎれて輪姦を行うことを知

って、若者たちが目的をすませ、それぞれ散り去って行ったあとで、更にその娘におそいかかるという方法だったが、如何なる因果か彼のリングは日増しに肥大し強直の度を加えて行くため、いずれの娘も容器としての適合を欠くという始末に至ったのである。

所が、ここに箕山をして悪魔の化身たらしめる重大にして奇怪残酷な事件が突発した。従兄のKが所用があつて上京する、あとは彼とKの妻妙子が留守番だが、その時、妙子は妊娠九カ月の身重だった。……以下、差障りのない程度に原文に拠ることとする。

Kが出かけてから七日目の晩でした。私は昼山へ出かけた疲れでグスリと寝込んで居たのです。その晩は幸か不幸か、例の肛門の周りの小さな虫けら共も、その青白い爪をかくして、ことさらに暴れ出様ともしなかつたらしい——と、つと、私は眼を覚めたのです。この夜更けにミシリミシリという重苦しい物音が、微かに響いて来ます。身の縮まる様なシーンとした静寂の中に透き通ったその物音は、ハッキリと身内に応えるのでした。

「泥棒？」

と、私は直感しました。

「なにくそッ……」

という様な反発心がピンと私に迫った。泥的は妙子の寝室の方へまわったらしく、何の物音も聞えなくなった。沈々として更け行く初夏の夜、生あたたかい不気味な空気、ニヤリとはほえむ心の映像。

途端に、

「アレ……」

という鋭い金属的な叫びが張り切った私の鼓膜を強くふるわしたのです。私は立上って猶予なく、彼女の寝室に飛び込みました。そこには、覆面をした一人の長身の男が、妙子の身体を抱き、恐らくは強淫の目的でしょう、その右手を寝巻の下からさし入れようとしている、怪しからん有様なのです。私の鉄拳はもう喰ひを生じて怪漢の首筋を襲いました。男はゴム鞣のようにけし飛ばされたのです。そしてチラッと私をにらんだが、クルリと後向きになるや否や栗鼠の様に逃げ出したのです。……私は、敢て追うのをやめた。何とはなしに気がうとい気分が私をゆううつにしました。まだ恐怖したままの寝巻を破られた彼女の裸体！素晴しく膨れ上った妊娠九カ月の腹部を明

らさまに露出した彼女の動物的な姿態が夢のように私の眼を掠め去りました。そして当然ながら見るべからざる人妻のうっ蒼たるかげりや、そこに隠れている盛り上った色づいた豊かな脂肪層とが幻影のように脳髓にふれてくるのです。その瞬間、なんとこの浅間しいことでしょうか、私は彼女のふくれ上った新しい生命をひそめた腹部に堪らない程の魅惑を感じたのです。それは幻怪な想像だったかも知れませんが、サディスト的精神と、甚だしい耽奇心との入り混ったもので、孕女の肉に秘められた鮪のように張り切った感覚、潑刺と執着と弾力性との錯雑した爛熟期の女性に対する致命的な好奇欲によって、示されたのであります。反抗する彼女の肉体は感溺的な芳香を発散して私の嗅覚を苛烈にも突つたのでした。たくましい彼女の片足は、私の手によってグイッと高く挙げられ……

という、まるで暮末期の淫虐式の春本にでもありそうな場面が展開されるのです。彼の超サイズのペニスに、突き破られた子宮からは、新生命が破壊されて流出の惨を招く。おどろきの余り狂人ようになった箕山は「産

婆だ、産婆だ」と叫びながら、夜の町へとかけ出して行く。所が田舎町の平凡な産婆さんは無智な女だったので、流産の跡始末ということだけで、案外易々とこの異常事態を片附けることができたのであった。——そして間もなく、何事もなかったように平然として従兄の家を立去ると、こんどは黒石町から三里程東方の、Y村の親戚の家にはぐらぐらしていた。此処は平和な片山里で、牧歌的情緒の豊かな村落であった。

ここでもリングの過大によって満たされぬ性的欲求に苦しんでいた——として、ある日遂に何とも奇妙なる性的対象物を発見したのである。裏山の放牧場の草に寝ころびながら無心に放れ駒を眺めているうちに、馬をも仔細に観察していると、夫々に特徴があつて、

お嬢さんもあれば年増もあり、新造もあれば未亡人もある、というように考えられる。そしてモダン相な一頭の牝駒をえらび、彼は何となく妙な興味にひかれて、ジッと彼女の行動を観察するのだった。

「奇妙な野心にかられて私は彼女(馬)の鼻に近付きました。そして静かにその鼻頭をなでてやったのです。馬をならす第一の秘訣はその馬と馴染になる事です。その為には第一に鼻先を愛撫すべしとはひとり曲垣流のみならず、凡ての流派に通じる原則らしい。そして大分なれた所で、彼女を林の奥の外からは見えない場処につれ込んだのです。そして手頃な樹を物色し……」つまり結合の位置を均等するために、彼は枝にまたがるということ考えたのだった。

この物語は馬婚記が重点となっているのだが、これ以上描写の紹介を続けることはできない。また読んで陰惨無気味なだけなので、あとは読者各位のご想像におまかせする。結果的には一度で味を占めた彼はその後毎日のように林の中に出かけ、そして二十数頭の牝馬のうち一つとして彼のヴァオレーショナルな淫欲の犠牲とならないものはなかった。

そして、この哀れな男箕山の話の結末は牝馬にペニスを噛み切られてしまうことで終わっているが、彼の強直肥大の陰茎は脳下垂体肥大という内分泌系統の疾患に由来する所で、あって、別に先天性のものではなかったことも、医局の研究によって知らされたのである。不具ではなかった。当然なおるべき疾患に過ぎなかったのに——。

拷問

異聞

調べる事があつて、初めて横浜で新聞が発行されてから明治の末期迄の記事を通読した際、ついにて拷問、SMに関する記事を拾ってみようと試みた。

初期の新聞は当然ながら政府、政治に重点が注がれていた関係から、奇的な事件は殆んど見当らなかったが、明治十八年頃になると社会世相が顔を出すようになり、長崎、神戸

の犬姦事件、白木屋の不正店員に対する番頭のリンチ事件が、僅かに紙面を賑わしているだけである。

社会の底流にはSM的な事象が有ったと思うが、当時にはニュース価値が無かったのだろう。

拷問と言う字から気付いたが、世間では江戸時代の刑罰について誤解の向きが意外に多

睦月

笛一郎



いようだ。拷問もその例に洩れず、自白を強制させる手段を総て拷問と考え勝ちだが、拷問とは、牢舎の拷問蔵で両手を後縛りにして吊すのを言ったので、滅多には用いられなかった。笞打ちや三角の角材の上に坐らせて石を抱かせた石責め、頭を両足の間に挟み込む海老責めなどは当時、牢問いと言った。拷問が余り行われなかったのは、容疑者に自白を強制しないのが吟味役人の、所謂、老功さであって、拷問に掛けても自白しない時はお上の御威光にかかわるからである。

しかし、昔の事だから随分と乱暴な事も行

なわれたのは想像に難くない。拷問で思い出されるのは、大正末期から昭和の初期に掛けての無政府主義者等に対する、当時の特高の拷問の凄まじさである。被疑者の指の間に鉛筆を挟んで両指を強く緊めると耐え難くて、女などは思わず小便を洩らしたという。

此れなどは序の口で、剣道場に引出し、素裸にして吊し上げ、竹刀で撲るのはまだしも燃した新聞紙を軀の一部分に押付けたという話である。失神して運ばれた女に看守役の老巡查が憐れんで、手当のために鶏卵を溶いて焼け爛れた傷に塗ってやったそうである。

拷という字がある。読みは同じコウ、ゴウであり、^{ごんずい}構の木の一種で喬木であるが、磔柱として此の属の木が使用された。偶然かも知れぬが面白い。

山本周五郎氏の小説に、伊達騒動を描いた「樅の木は残った」がある。原田甲斐の江戸での菩提寺良源院に、甲斐が樅の木を手ずから植えた。樅は矢張り磔柱に用いられる木であり、甲斐の刃傷後有名になったが、江戸っ子は樅の木と思い誤っていた。山本氏は此の事を知ってや知らずや、題名に用いられた。

芝居で有名な河内山宗俊は、自邸の床柱にわざとほった磔柱（逆さ柱）を背に髑髏模様の浴衣を着て酒を呑んでいたそうである。逮捕術も各藩に依って流派があったらしく、縛

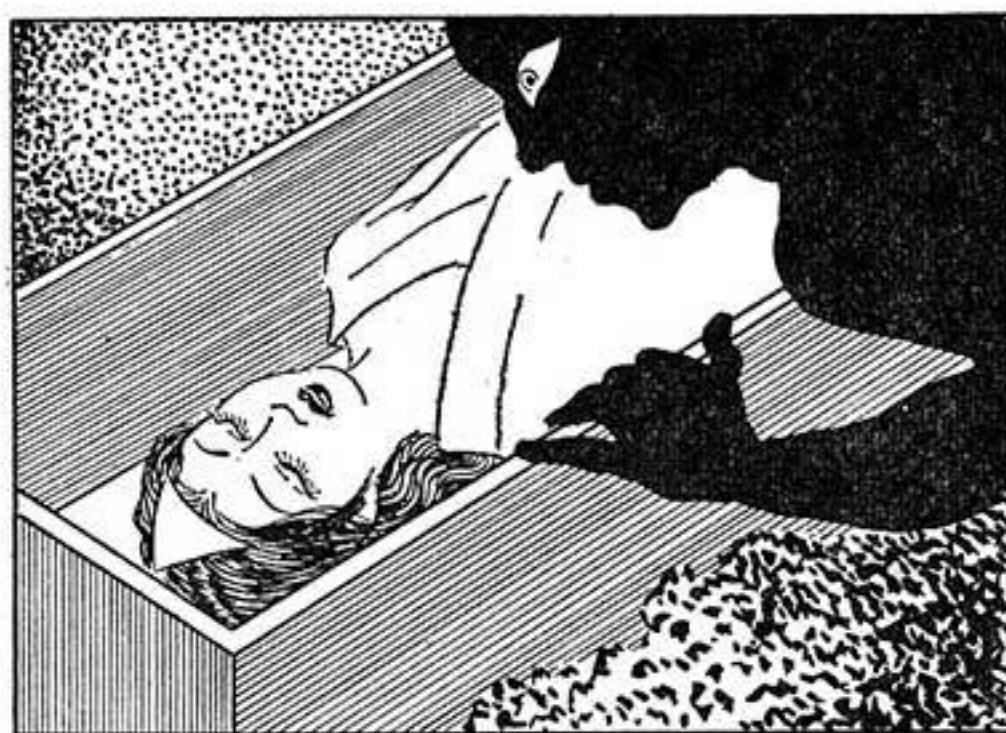
り方も違っていたが、長く放置しておくに成り、皮膚が腐ったという。

筆者は、かつて赤線廃止後の八王寺元遊廓に泊った事がある。いずれも次の間付きの豪華な座敷だった。手伝いに来ていた女は、赤線廃止後に市内の職人と結婚したが、元は此の家の女郎だったそうで、給仕の間に当時の話をしてくれた。十八で住込んで二度逃げ出したが、一回は駅に張っていた若い衆に捕まり、手酷く折檻されたそうだが、内容については口を噤んで語らなかった。しかし、三日ばかり縛られた縄の跡が腐り、腕と脇腹に傷として残っていたのを見せて呉れた。二度目の時は逃走に成功したが、泥水が身について世間で生活出来ず、半月余りで又、舞い戻って来たと言っていた。

面白いのは検閲日の前日の話で、廊内で若い衆か遣手がガンギと称する器具で事前検査をするそうで、同性の前で着物をはいだりして、受検させられることが拷問よりも苦痛で、死ぬ思いだったと語っていた。

奇クの読者の拷問プレイは、縛ることや緊縛姿態を見て自らの人生をエンジョイするのが目的であって、そこには刑罰のための拷問と自ら異なる処があり、又一段の工夫と実践があるように見受けられる。拷という語の意味も深さを増したというべきか。

懸賞入選作品



狂

(きょうしゅう)

執

死女に憑かれた男

播野弘三

ここ、大江戸の町は、相次いで起る墓場荒しの噂で、もちきりだった。

墓場荒しが横行するようになってから早や三年にもなるというのに、下手人の見当さえ付かず、寺社奉行でもどうこうたる非難を浴びて、頭を痛めていた。

『墓場荒しと言えば、新仏けと共に葬られた金品を盗んで行くのが相場だが、今出沒している、墓場荒しは、仏けのからだに』あるも

の”を置いて行くのだった。そして、荒される墓は、女の新仏けと決っていた。

(一)

大工の吉松が初めて死んだ女を見たのは三年前のことだった。

その日、吉松は一人で川釣りを楽しんでいたが、かかったのは魚ならぬ若い女の死体であった。仰天したが流してしまうことも出

来ず、岸へ引き上げた。そして、後を追うように男の死体も流れ着いた。若い男だった。一見して心中と分る。

二つの死体を並べて見ると、似合いの夫婦に見えた。

「どんな深い事情があるのか知らねえが、何もこんないい男といい女が、心中なんぞするこたあねえじゃねえか。ああ、もってえねえこった」

早く番所へ届けなければと思ひながらも、余りの美しさに、吉松はうっとり女顔に見とれていた。真昼間のせい、心中死体を前にしていても、吉松は恐ろしいと思ひなかつた。女の美しさが彼にすべてを忘れさせたのである。

とび込んでから、まだ余り時間はたつていないらしく、二人ともそれほど冷え切つてはいなかつた。人工呼吸を施せば、息を吹き返していたかも知れないが、その頃の、しかも一介の叩き大工が、人工呼吸法など心得えているはずはなかつた。

女の顔に見惚れているうち、吉松の胸にふと良からぬ思ひが頭をもたげ始めた。

辺りを注意深く見回した吉松は、女の死体を抱え上げると、蔑の中へと消えて行つた。

その頃の若者達は、ほとんどの者が女郎買ひに行つた。吉松も親方に連れられて、二、三度行つたことがあるが、彼は少しも良いものなどと思つたことはなく、年増女郎のただれ切つた痴態を見て、吐き気を催しさえした。その時の印象から、吉松は女というものに失望した思ひになつてゐた。

しかし、物も言わず、身動きもしないこの女に吉松の胸は、なぜかあやしく、ときめく

のだった。心中しようとする男女のほとんどがそうするように、その女のからだにも燃え上らせた情熱の跡が認められた。しかも、女は今まで生娘だったらしいことは、女を知らぬ吉松にも、はっきりと判つた。

しかし吉松は、それを少しもいやらしいとは思ひなかつた。真白い肌にとりとまとい付いた緋色の襦袢のかもしれないコントラストが、吉松の目にはこの上もなく美しい物に思へた。

吉松はこの心中女を、役人の手に渡したくはなかつた。出来ることなら家に持つて帰りたい想ひだったが、不可能なのは当然のことだ。やがて諦めをつけて、着物をもと通りにし、男の死体と並べて置いて、番所へ知らせに行つた。

その頃は、心中者といへば理由の如何によらず、極悪非道の罪人よりも忌み嫌われ、二人揃つて死んでいることが分ると、もうそれだけで役人の顔には軽侮の表情が浮かび檢視も形の上だけであつた。

その夜、吉松は朝まで、まんじりともできなかった。心中した女の顔が、真白い肌が、彼の頭から離れなかつた。

それは決して大それたことを仕出かした罪悪感などではなく、明らかに恋慕であつた。翌日は仲間の者に「おい吉、おめえどうかしたんじゃねえのか」と言われるほど、ぼんやりしてゐた。あながち睡眠不足のせいばかりではなかつた。とにかく、どんなことをしても、あの女の白い肌にもう一度お目にかかりたいという想ひが、吉松の心を占領していたのだ。

彼は「どうも頭が痛くて」と、うそを言つて親方から暇をもらうと、きのうの番所へ走つた。

「きのう浮き上りました心中者の身許は知れましたでしょうか」

役人は妙な顔をした。

「あつしが二人をみつめて引き上げてやりましたのも、何かの縁じゃねえかと思ひやして……。線香の一本も手向けてやりてえと思ひやすんで、もし身許が知れておりやしたら、お教え願えませんかしょうか」

恋する者のうそは、時として人の心を打つことがあるものだ。

役人に教えられて、日本橋の木綿問屋「播州屋」の前を、通行人を装つて通つてみる。心中者の葬儀なので、なるべく内輪にしよう

という気配が伺われたが、やはり大店のこととて人の出入りは多かった。

今では土葬はほとんどないが、その頃は土葬も、かなり多かった。

吉松は、播州屋から出て来た一人の男をつかまえると、ここでも巧みにうそが出て来て、多少げんなり目で、頭のとっぺんから足の先までじろじろ見られはしたが、首尾よく土葬であることを聞き出すことが出来た。吉松は内心ほっとした。寺まで聞きたかったのだが怪しまれてはまずいのでやめた。出棺時間を確かめると、それまでの間、吉松は繁華な通りを、ぶらぶらした。

吉松は葬列の一番後からついて行って埋葬するお寺を確かめると、何食わぬ顔で家へ帰った。

こわれかかった練り堀に足をかけると、ヒョイとその上へとび乗り、中を見定めてからポイととび下りた。身軽な吉松には、それくらい朝飯前だった。

おぼろ月に照らされて、無数の墓石が浮き上って見えた。吉松は、新しく掘り起された土を探しまわった。新仏の墓という物は、墓石が出来て来るまでは、土を盛り上げただ

けのものだろうと吉松は思った。

それをみつけると、吉松は胸をわくわくさせながら掘り始めた。掘り起されたばかりの土は軟かく、竹の棒で十分間に合った。

現れ出た白い棺の、ナワを解く手ももどかしく、ふたをはね除けると、目指す彼女の姿があった。愛しい者に再会出来た喜びに、死体の一日の変化も意に介せず抱え出そうとした。そのさまを、もし誰かが見ていたら、きっと腰を抜かしていたことだろう。

こうして、彼の墓場荒しは始められたのである。その時の彼の眼付きは完全に狂者のそれだった。

それからというものの、吉松はまるで飢えた野良犬のように、若い女の葬式をかぎつけては、夜になってからその墓を掘り返すようになったのだった。

単なる墓場泥棒ではなく、死者を冒瀆すると言うのだから、住民の気味悪がりようは大変なもので、噂は噂を呼んで、江戸の町は大騒ぎであった。

病気で寝ている娘の枕許で、その母親が「お前、死んでしまうつもりかい。それならそれでもいいけれど、あの世へ行くと、あんな恥ずかしめを受けなくっちゃいけないのを

承知かネ」

などと、おかしい元氣付けをするありさまで、枕の上らなかつた幾人もの娘が、急に元氣になったりした。

だが初めは愛するだけだった吉松は、場数を踏むにつれて図々しく、しかも残忍性を帯びるようになり、狂者の本領を発揮して、冒瀆だけではなく、むごたしくも刃物を使って、毀損しはじめた。後で発見した人達が腰を抜かさんばかりに驚き、犯人を呪い殺してやりたい気持になるようなむごいことを、平気でやるようになって行った。

(二)

吉松には、居酒屋の娘でおとよと言う彼女があった。どちらかと言えば、おとよの方が熱をあげていたが、吉松もまんざらおとよが嫌いではなかった。まだ手を触れ合ったこともなかったが、おとよは「いつかきつと吉松さんと一緒にになれる日が来るわ」と、可愛い夢をえがいていた。

しかし、この頃の吉松はどうも様子がおかしい、と彼女は思い始めていた。

どこがどう言う風に変なのかは考えれば考えるほど分らなくなってしまうが、そのくせ

なんだか吉松の人間が変りつつあるような気がするのだった。

女の勘と言うものであろう。

ある日、おとよは客ががすいたのを見計らって、吉松に声をかけてみた。

「ねえ、吉松さん。今夜、夜店へ連れて行ってくれない？」

二人だけで夜店へ行き、ほおずきを買ってもらったのは、三年前の夏だった。おとよには今だに忘れられない、楽しい思い出なのだが、それ以来、二人でどこかへ出かけたことなど一度もない。

「だって、おめえ。こんな稼ぎ時に看板娘がいなくっちゃあ、どうにもなるめえ。父っつあんが怒るぜ」

以前の吉松なら、二人でどこかへ出かけようと言えば大喜びだったのに——やっぱり吉松さんは変ったわ。きっと私が嫌いになったんだわ。きつといいヒトが出来たに違いないわ。おとよは、そっと、まぶたを拭いた。

「ううん、大丈夫よ。ちゃんとお父っつあんのお許しを得てあるんだから」

「ふうん。手まわしのいいこった。だけど今夜は駄目だ」

「あら、どうして」

「ちよいとばかり、野暮用があるんだ」

「どんな……」

「どんなだっていいじゃねえか。おとよ坊にや関係のねえこった」

「いい女の所へ行くんでしよう」

「そんなんじゃねえ」

「じゃあ、何んの用か教えてくれたっていいじゃない」

「うるせえ！」

吉松は叫ぶなりおとよを凄^{すて}い目で睨んだ。思わずぞおっと身の毛のよだつような吉松の目であった。

夫婦約束どころか、好きとも嫌いとも言い合ったことさえないのだから、たとえ吉松が他の女の所へ行くのだといっても、おとよには何も言う権利がないことは、彼女も知っていた。しかし、吉松の突然の怒りようといひあの恐ろしい目付きといひ、どうも腑に落ちないものがあつた。

『私が好きとか嫌いとか、そんな問題じゃないわ。もっともっと恐ろしい……しかも重大なことにちがいない』

そう思い始める一途な乙女心が、その恐ろしい重大なことを自分の目で確めなければならず、おとよにある決心をさせた。

吉松は人を寄せつけず、おとよの店で遅くまで飲んでいた。吉松が外へ出ると、おとよは「ちよっと吉松さんと二人きりで話したいことがあるの」と父親に言って、そのあとを追うべく、とび出した。

それが最後の別れになるとも知らず、父親は笑顔でうなずいた。

吉松は家へは帰らず、町外れ目指して足早に歩いて行く。その後を、家々の軒下に隠れながら、おとよは小走りについて行った。足音も立てずに小走りに……というのは、かなり難かしいことだった。

最初は、てっきり女が出来たに違いないと思ったが、足早に歩いて行く吉松の後姿を見ているうち、狐狸妖怪の類にでもたぶらかされているのではなからうか、それとも何か良からぬ企みでも、抱いているのではなからうか。などと思い始めた、おとよだった。

半時（今の一時間）以上も歩いたろうか。家並はとくに切れて、道は次第に細くなりながら田んぼと畑と木立の間を、どこまでも続いていった。

どこか遠くから九つ（十一時）の鐘が聞こえて来る。十三夜の月が辺りを煌煌と照らし

ていた。

吉松がピタッと立ちどまったので、おとよは、あわてて木陰に身を隠した。

用心深く辺りを見回したかと思うと、ふいに吉松の姿が見えなくなった。吉松の姿が見えなくなると、おとよは急に心細くなって、ぞおっとした。しかし、もう引き返すことはできなかった。こんな、人っ子一人通らない田んぼ道、退いても進んでも恐ろしいことには変りない。

そこは木立の陰で、こちらからは見えなかったが、共同墓地へ通じる脇道になっていたのである。おとよがそこまで行くと墓地へ向って行く吉松の姿が見えた。

しかし、おとよはまだ吉松の目的を察することはできなかった。共同墓地で泥棒の仲間達と出会うことになっているのかも知れないと、おとよは思った。

文字通り身の毛もよだつ思いだったが、愛しい吉松の行動を見届けずにはいられない心境であった。

見られているとも知らぬ吉松は、墓石の間を行ったり来たりしていたが、やがて四本の竹に囲まれた、こんもりと高くなった所をみ

つけると、ニタリと会心の笑みをもらした。

月に照らし出された吉松の鬼気のおふれた顔に、おとよはあやうく悲鳴をあげかけた。

今日、仕事に出かけた先の商家で、親戚の娘が死んだので葬式に行くのだ、と言って、主人が出かけるところを、吉松は仕事をしながら見聞きしていたのだった。その後で、女中に主人の行先をくわしくたずねることも忘れなかった。

人口の密集した現在の東京では、お墓のアパートが出来てくくらいで、墓を一つ作るにも大変な金が必要だから、道路わきに共同墓地のある風景などは、田舎へ行かないと見られない。

昔だって、町中では墓はお寺の中に作ったが、町を外れると、山のふもとや田んぼの脇など、いたる所に共同墓地があった。今でも田舎へ行くとそういう風景にぶつかる。

いつもの通り吉松は、なれた手付きで土を掘り起すと、取り出した棺のナワを手で引きちぎった。『やっぱり吉松さんは墓場泥棒をしていたんだね』と思いながら、おとよはかたずを呑んで見守っていたが、死んだ娘の死体を引出してニタリと笑った吉松の、月明りに照らされた狂気まるだしの顔付きの恐ろし

さ。おとよは、その場にへたへたと坐り込んでしまった。

そのかすかな物音に、吉松はハッと身を起こした。

「て、て、てめえは、おとよじゃねえか！」
おとよは齒をガチガチ鳴らすばかりで、物も言えなかった。

「ハハーン、てめえは俺のあとをつけて来やがったんだな」

「……………」

「こんな姿を見られたからにやあ、生きて帰すわけには行かねえ。さあ、覚悟しやがれ」
「ま、ま、待って吉松さん。決して誰にも言やしないから、命ばかりは助けて……………」
お願い、この通り」

やっとのことでそれだけ言うと、おとよは手を合わせて吉松を拝みながら、男の目を見つと見た。

おとよに目をみつめられ、たじろぎかけた吉松は、あわてて気を取り直すと「うるせえっ」と言うなり、おとよの襟首をつかんでズルズルと引きずって行った。

「おい、おとよ。おめえ、たしかまだ生娘だったな。それとも俺の目を盗んで、町内の野郎に抱かれやがったか！」

ああ、なんと言ふむごい言葉だろうか。吉松と一緒にされる日を、あれほど夢見ていたおとよなの。

『そんなに女がほしいのなら、なにもこんな情ないことをしなくても、あたしのからだをあげるのに。いいえ、あたしはあなたの口から、おまえがほしいと言ってくれるのを待っていたのに』

そんなことを心の中で叫びながら、おとよは墓場の湿った土の上に泣きぐずれていた。

「殺す前にたっぷり可愛がってやるから、待っていな」

「吉^きつつあん、待って。あたしはあんたが好きだった。死ぬほど好きだったわ。だからあんたに殺されても、決してあんたをうらみやしない。だけど、あたしのからだにさわるのだけはやめて。それだけは、どんなことがあっても、いや！」

「なにおっ」

「あんたは、さっき何をしてたのよ。そんなけがらわしい畜生には、絶対に……」

「ふん。好きなことを勝手にほざいてろ。どうせ半時とねえ命だからな」

そう言うなり吉松は、泥の付いた手で、おとよに、いどみかかった。おとよは死にもの

狂いで、あばれまわった。

吉松の隙を見て泥塗^{まみ}れの手から逃がれたおとよは、卒塔婆を引き抜くと盲滅法に振りまわした。吉松がひるむ隙に、おとよは一目散に逃げ出していたが、男の足にかなうはずはなく、着物の裾が足にからんでパツタリ倒れてしまった。

吉松は、おとよをかつぎ上げると、死体のそばまで運んで行き、ドサツと、投げ下ろした。死体の手が顔に触れると、キャツと叫んで、おとよは気を失ってしまった。

いくら死んだ女に憑かれて狂う彼でも、相手が生きていては勝手が違ったし、気を失っただけの女と思うと、プライドが狂うことを許さなかった。

吉松は力まかせに、おとよの背中をけり上げた。ウーンとうなって目をさました女の着物を荒々しくはぎ取った。

彼は無数の死女を冒瀆して来たが、生きた女を相手にしたのは女郎買いの時だけで、その時も吐き気を催したくらいであったから、本当の意味で生きた女を相手にするのは初めてだったと言えよう。

もうあきらめたのか、力が尽き果てたのかおとよは逆らおうとはしなかった。吉松のち

がれ切った手に組み敷かれたおとよの顔は、苦痛にゆがみきっていた。その首に手がかった。

吉松はおとよのからだから離れると、二つの死体を並べて置き、その上からおとよの着物をかけた。そして、さすがに引き返す足なみは徐々に速くなり、遂に駆け出していた。

その後には、なにごともしなかったように静寂が訪れ、月はますます冴え渡って行った。

(三)

翌る日の朝になっても、おとよが帰って来ないので、父親は心当りを捜しまわったがみつからず、夕方近くになってから届け出た。

吉松の姿が急に見えなくなっているの、役人共は彼の仕業と見て追及し始めた。

おとよの無残な死体が、棺に納められているはずの娘と共に発見されたのは、それから三日後のことだった。発見したのは石塔を建てに来た石屋の職人だった。

吉松への疑いは「誘拐」から「殺し」へ切り換えられ、その追及はますます厳しくなった。おとよの無残な死体が発見されて以来、三年間も続いた墓場荒しは、ピタリとなくなり、当然それも吉松の犯行と断定された。

辻々には高札が掲げられ、人相書が至る所に配られ、岡つ引きが血眼になって吉松の行方を追った。今で言えば「全国指名手配」である。

その厳しい捜査の網をどうのがれたのか、吉松の行方は知れなかった。

佐代は田んぼの脇で草を刈っていた。

辺りは見渡す限りの田んぼで、佐代の家のある部落の屋根も、ここからは本当に小さく見える。田んぼの真中にたった一本だけある柿の木に牛をつないで、佐代は鼻唄まじりで草を刈っていた。この秋の信三との婚礼のことを思うと、うれしくて恥ずかしくて、誰も見ていないのに一人で顔を赤らめていた。

田んぼは青々として、新らしい畳を敷いたようだった。

「娘さん、せいが出るじゃねえか」

ふいに背後から声をかけられて、佐代はギクリとした。肩越しに振り向いてみると、顔じゅうヒゲの男がつっ立っていた。

「何か用かね」

佐代はそう言いながら、鎌を持つ手に力をこめて、男がへんなことをしようとしたら、これで身を守ろうと思った。

「何か面白いことねえかな」

「そんなもの知らねえだ」

「そんなことあねえよ。ここにちゃんとあるじゃねえか」

男は、いきなり手を伸ばしてきた。

「なにすんだっ」

叫ぶなり、佐代は鎌で男の手をどけさせようとしたが、男が鎌を持った佐代の手をつかまえる方が早かった。

「騒ぐんじゃねえ。大きな声を出すと、これだぞ」

男は取り上げたばかりの鎌を佐代ののどもとへつきつけて、すごんだ。ヒゲ面で年令は分らなかったが、声は意外に若々しい。

力の限り叫んでみたら部落まで届くかも知れないと思ったが、男におどかされて、それもできず、佐代はガタガタとふるえていた。

どこかに人影はないものかと、目を皿のようにして辺りを見回したが、あいにく今日はどこにも人影はない。

男は着ている物を全部脱いでしまえと言ったが、佐代は目を伏せ両手で胸を押えたままっ立っていた。

「さあ、おれの言う通りするんだ。逆らわなきゃ、命は取らねえから、素直にいわれたと

おりにしな」

佐代は、しぶしぶ着物を脱ぎ始めた。

「早くしねえか。何もおめえをどうしようてんじゃねえんだ。ちよいとばかり面白えことをしようてえのよ」

男はいら立って、佐代の腰ヒモを鎌で切り落した。それと同時に佐代は「あれっ」と言っ、しゃがみこんでしまった。

「おい、立つんだ」

男は鎌を握りしめながら叫んだ。

緑を背景にして全裸の女が陽の光を真上から浴びて立っている姿は、男にはまばゆいくらいだった。女の肌は顔の黒さに似合わず真白で、むっちり起伏する若いボリウムが男の魂を宙に浮かす魅力を包みこんでいた。

「今から面白えことをしてやるからな。さ、足をくっつけてもっとまっすぐ立ってみろ。そうだ、そうだ。さあ、その恰好で小便をしてみろ」

「えっ」

佐代には男の言葉が分らなかった。

「小便をするんだよ」

「そ、そ、そんなことできねえ」

「なに、そんなことねえだろ。簡単なことだ、さあ早くしろ。痛い目にあわねえうちに

やった方が身のためだぞ」

「そうだ、男に逆らって殺されちゃったら、信三さんと一緒になることもできねえ」

佐代はガタガタ慄えながらも、死にもの狂いで男の命令に従った。男はそれを食い入るように見ていたが、それが終ると

「ようし、よくやった。さあ今度はくそだ」「ヒエーツ」

「なんて声を出しやがる。さあ、こうして」

男は佐代の首ったたまを掴んで引き倒すと、うつ伏せに寝かせて足を広げさせた。

「さあ、早くしろ」

これも信三さんのためだと思い、佐代は男のいう通りにしようとしたが、今度はそう簡単に出来ることではない。

「か、かんにんしてくんろよう」

まつ赤になって泣き出す佐代のねじまげられた片頬に、鎌がピタツと押し当てられて、無言の催促をするのだった。

おやつの芋と茶を運んで来て、この様子を見た佐代の母親が仰天してとんで帰り、村人たちが駆けつけた時、佐代は男に馬乗りになられ、首を締めつけようとする手と争っている最中だった。村人たちの怒りは爆発した。

最初からのボロ着物は、ただの布切れのようになり、醜悪極まる不ざまな恰好に縛り上げられた男を見て、引取りに来た役人も思わず嘔き出したぐらいだったが、すぐにその私刑のひどさに眉をしかめ、その行き過ぎを叱った。だが、男の佐代に加えたいたぶりの数々を聴取するに及んで、そのリンチに関して是不問に附することにした。

役人は更に、その男が江戸から通達のあった、墓場荒し重要容疑者吉松と判明した時、気味悪るげな表情になって「牢が汚れてしまふ」といい出した。直ちに村外れの川原に小さい竹矢来をしつらえ、真中に杭を打って佐吉を縛りつけ、彼専用の臨時留置場にした。別に役人としても晒し刑にしたわけではなかったのだが、伝え聞いた人々が、気味悪るげに取り巻いてわいわい罵倒し始めた。

その内に一人が、「てめえは死んだのが好きなんだろう」といって、野ねずみの死骸を投げつけた。わっと湧いた村人たちは、われもわれもと色々な動物の死骸を持って来た。

見張りの者の報告を受けた役人は、「畜生にも劣るヤツに対する人間の怒りじゃ」といって、少々のは見えて見ぬ振りをするように、と命じたのだが、「それがそのう……」

と頭をかく見張り役の態度に不審を感じて視察に出掛けた。

吉松の姿は見えなかった、というより隠れてしまっていた。竹矢来の中は、ねずみ、猫犬などの他、豚や牛の死骸まで運ばれて来ていて、一杯に積み重ねられているのだった。臭いにおいが辺り一面に立ちこめ、とても近寄れるものではなかった。さすがに驚いた役人は直ちに非人達にそのうず高い畜生類の死骸を処理させたが、無数のそれらに埋っていた吉松は半死半生の態で失神していた。

江戸へ護送された吉松を待っていたものはどうどうたる人々の非難と極刑であったのは当然であった。

「死罪申渡し」の書状に、苦々しい顔付きで署名を終えた奉行は、筆を持ったままじっと眼を宙にとどめて呟いた。

「愚かな、哀れな奴じゃノウ」

傍に控えていた与力が、不審気に顔を挙げろのに、思慮深げな眸がキラツと光り、筆を置くなり奉行がきっぱりと云った。

「処刑は早く致せ」

スックと立ち上った姿には、法を守る者の厳然たる力が満ち溢れていた。

(終)

疑 惑

六月のパリでは、マロニエの花がまっさかりである。緑の街路樹は、時ならぬ雪片に蔽われたように見えた。

パリに永住している人々には見馴れた季節の一駒でもあろうが、昨夜北廻りで着いたばかりの新津謙介にとっては、自分の突然の訪欧が、暗黒の疑惑に根ざしているだけに、今みるマロニエの白さにも、何か不吉な予感を覚えるのだった。

それはともかく、パリは一番よい季節にな

っていた。行き交う若者共は思いきり薄着に変わっていた。中でも恋人たちは、あの独得なあけっぴろげの仕ぐさで、彼等の青春を楽しんでいる。それは、新津謙介の重い心とは裏腹に、ひどくはなやいだ光景だった。

約束の時間に、まだ間があったし、面倒なタクシー運転手との会話をさけるためにも、彼は歩いて行くことに決めたのである。

丁度、ノートルダムの前を過ぎて、警視庁の方へ曲ろうとしたとき、月の前をスーッと横ぎった黒塗りのシトロエンがあった。新津が何故かアツと思ったのは、運転していたのが単に美しい女性だったからではなかった。

新津の脳裏に焼きついていたある人に、あまりにも似通っていたからだったのである。

彼は思わず知らず馳け足になり、その車を追おうとしたけれども、すぐに到底無理だとな気がついて、苦笑しながらもとの歩調に戻った。とはいえ、もうそこは、目的の場所から一〇〇メートルと、はなれていなかった。

パリ警視庁は、歴史の重さを秘めて町重に新津を迎えた。その中で、インターポールのピエール捜査官と落合う約束になっている。

「ボンジュール、ムシユウ・ニイツ……」

小柄なピエールは小意気なストライプの両前を役者のように着こなしていた。握手をし



第一回

た手も、やせて乾いている。

「貴国からの秘密文書を拝見致しましてから与うるかぎり資料をととのえてみました。その結果……」

尻上りのフランス語で、早速本題に入る。さすがにビジネスライクだと思しながら、ピエールの次の言葉を待つ新津は不思議な興奮を感じていた。

「その結果、ムッシュウ・ニイツの疑いも当然である。つまり、ここ数年間世界各国に起った様々の家出、失踪、事故死の中で、相当数のものに奇妙な関連が見出せるということとです」

新津は深い溜息をついた。莫然とした嫌疑が、今や現実のものとなりつつあった。

まくしたてるピエールの声を耳の端にしなから、新津は示された紙片を喰い入るように見つめていた。

◎一九六八年二月十四日

ジョセフィーヌ・フリーエール(二十二才)

の場合は評判の美人であったばかりでなく、大学在学中に学位をとった天才内科医としても著名だった。ところがアルプスをドライブ中、断崖から落ち、車体炎上して惨死した。

死体も殆ど白骨に近く、識別困難であった。

◎一九六五年六月二十日

野沢洋子(当時二十四才)新進デザイナー伊豆方面をドライブ中、断崖から落下、炎上して焼死。死体は焼爛して鑑別不良、血液型により、本人と認めた。

◎一九六二年十一月十八日

サンフランシスコ郊外のトレシーでラテン系美人歌手マーサ・アマビスカ(十九才)自ら運転中、立体交叉の橋脚に激突、ガソリンに引火して焼死。深夜であったので、目撃者もなく、翌朝発見された車のナンバーその他焼失を免れた持物で本人と認定。

次々と疑惑の事故死がメモされている。いずれも死体は残されていても、断定のキメ手がないのが特徴なのである。

「しかも……」

新津の注意をひこうとするかのように、大きなジュエチャーをしながらピエールがいった。

「ここに挙げた実例五十六件のうち、三十一件が日本女性に関して起っているのですぞ。それは要するに、何等かの原因が日本および日本人にあることを示しているようです」

「残念なことですが、私といたしましても異論を申上げることが出来ません」

自分ながら下手な言い廻しだと思うけれども馴れない外国語である。それよりも新津にとっては頭の痛い問題が次から次へと提出されるのだから、ますます重苦しくなってくる。

そもそも、新津がこの事件に頭を突っ込まされたのも、まったく偶然のいたずらだったのかも知れない。

つい三カ月ほど前のこと、丁度ひな祭りの夜だった。麻葉Gメンと共同で、ある外航船の調査に立ち会った新津は、ひどく手こずったので、下船したのが真夜中になってしまった。横浜新港埠頭は荷役を明朝に変更した本船以外は一隻もなく、ガランとして人の気配もなかった。

あらかじめタラップの近くに駐車しておいた公用車を自ら運転して帰ろうと、二、三步あゆみ寄ろうとした途端、車のそばに乱雑に積み重ねてあった大きな梱包ケースが、カサコソと揺れた。

「誰か？」

思わず左腋に吊ったコルトに指をかけて見構える。今度はカサとも音を立てない。何者かが、箱と箱の間で息をこらして、ひそんで

いるようである。犬かも知れない。ふと気をゆるめて、そっと近づき、倉庫の壁と木箱の間のうすくらがりを見き込んだ新津は、思わずアッと声を吞んだ。

全裸の若い女がぐったりと倒れている。立上がる気力も喪っているらしく、ただゼイゼイと苦しそうな息使いだけが伝わってくる。

反射的に駆けよって助け起す。髪から全身グッシヨリと濡れている。暗闇に馴れた眼にはじめて女が白人で、しかも素晴らしい美人であることがわかってきた。何事がこの女に起ったのだろうか。疲れ果てたような女は、しかし、それでも抱き上げられたのを知ったのか、かすかに両眼を開いて、聞きとれないような声で、

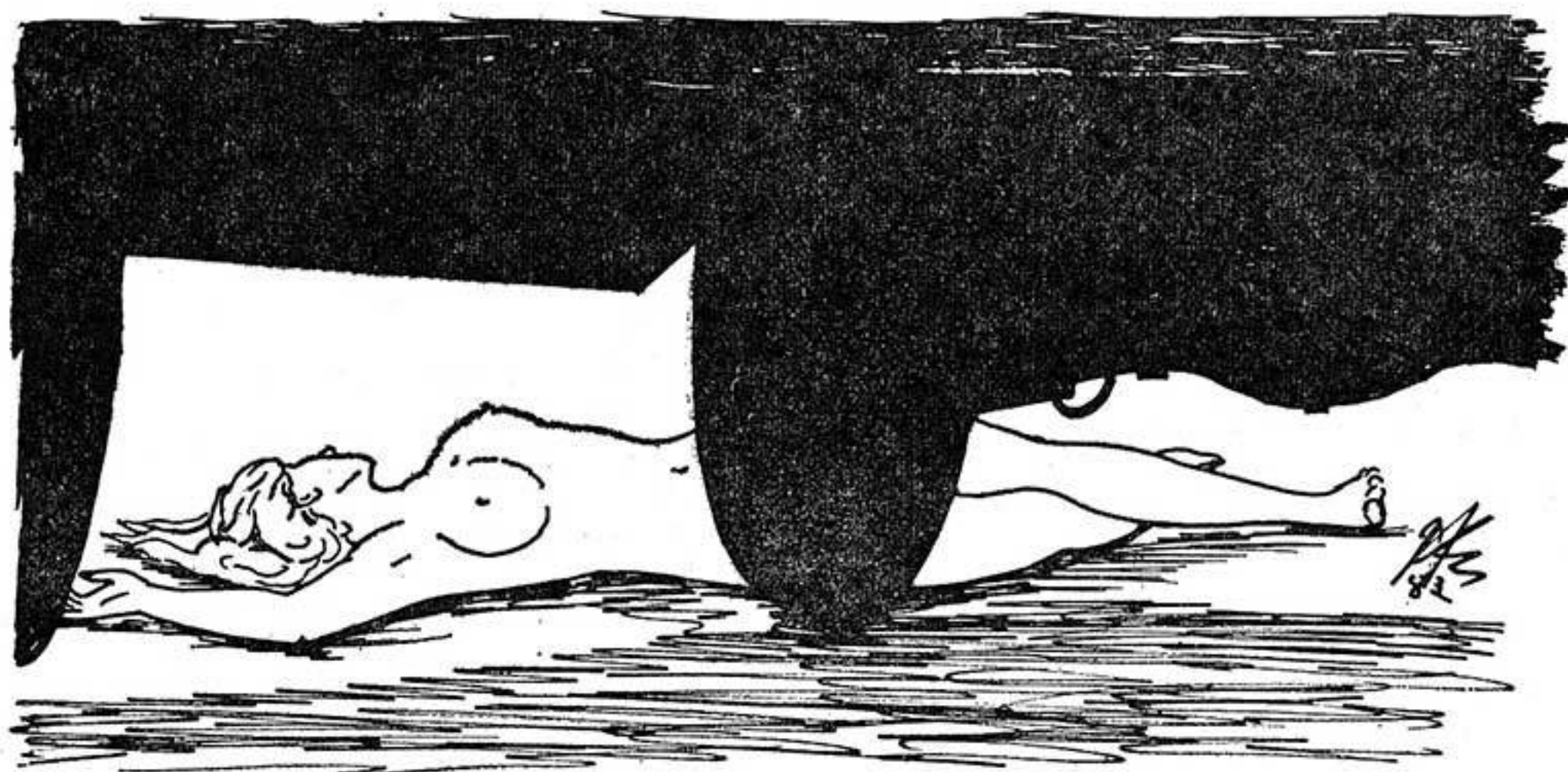
「レ・セ・モア（助けて）……」

とつぶやくのだった。そして、

「ここは、どこ？ 私はどこにいるの？」

とフランス語で話しかけながら、はじめて自分が裸なのに気がついたのか、想像出来ないような力で彼を突きはなすと、倉庫の壁に全身を丸めてうずくまってしまう。何か新津を怖れているらしいのが素振りでわかる。

「安心して下さい。私は日本の警察官です」
新津もフランス語で言った。



「ここはヨコハマですよ。あなたはどなたですか。どちらから来られたのですか」

「おお、ポリス・ジャポネ」

女は、ほっとしたように声をあげたが、

「すると、ここは日本なのですか」

「ええ、日本ですよ。日本の横浜です」

「アア、いつの間にこんな遠くへ来てしまったんでしょう、私は……」

水に濡れた美しい金髪をかきむしるようになって、女は絶望の極みであるかのようにサメザメと哭くのだった。

「すると、あなたは何者かに誘拐されて、ここまできたとおっしゃるのですか」

「ええ、私はパリで、おお……」

ありありと恐怖を顔に泛べた女は、何かを思い出したように、両手で顔を蔽うと激しく慟哭をくりかえすのだった。

警察官としての義務感が、新津をわれにかえらせた。自分のコートを脱いで、女の裸身をかくすと、やさしく立ち上らせて、車の方へかかえるようにして連れ出す。後の座席にねかして、報告をするために無線マイクに手を延ばした途端である。

たまぎるような、女の悲鳴が後部座席に起った。反対的にふりかえると、半身を起した

女が両眼をはりさけるほどに見開いたまま、唇をふるわして、新津の背後を凝視しているところであった。

そのとき、新津は何かチクリと背中を刺したような気がして、前後不覚になってしまったのである。

翌朝、新津は顔見知りの税関吏に揺り起された。彼は自分の車の中で眠り込んでいたしかなかった。しかも、時間はもう十時になろうとしていたのである。

女の姿は消えていた。女に着せた記憶のあるレインコートは、チャンと新津が着ていたし、第一、車のそばには箱なんか一個もなかった。

新津は税関吏に、この辺に箱が積んでなかったかと聞くと、その男は、そんな気がしないでもないが、事実今は何もないじゃないかと不思議そうな顔をする。新津は、これではありのままに話したとしても、誰も信じてくれないと思うのだった。いくらあたりをさがしても、証拠の品は何一つ残されてない。しかし、新津の脳裏には、常夜灯の黄色い光に照らし出された女の顔が、忘れようとしても忘れられない程鮮かに印象づけられて

いたのである。

職業柄、誘拐事件と判断した新津は、インターポールを通じて、フランスにおける過去三カ月間の失踪事件のリストを要求し、詳細に検討した上、怪しい十数件について、顔写真の送付を依頼した。こうして一カ月以上、繁忙な公務の寸暇をさいて追求しつづけた努力も、結局は徒労に終わってしまいそうであった。というのは、新津の記憶している顔に合致した写真は一つもなかったからである。

同僚たちも、何か麻薬を飲んで、夢でも見たのじゃないかと冗談まじりに追求をやめるようにすすめたけれども、警察官としてのカンを信じる新津は、ガンとしてあきらめなかった。あらゆる努力を費した上で、ある日、資料室へ行った彼は、何気なくめくっていた新聞の中から、遂に求める顔を発見したのである。それが、ジョセフィーヌ・フリーエールの事故死を報じた記事だったのである。二センチ角ぐらいの小さな顔写真だったけれども、新津にはピンとくるものがあった。早速原写真を取りよせてみると新津の予想した通り、先夜の「謎の女」は、まぎれもなく死んだ筈のジョセフィーヌだったのである。これは、どういうことになるのか。

彼女は二月十四日に事故死している。失踪事件のリストにのっていないのも当然であった。誰かかえ玉を使って、彼女の死を偽装し、本物のジョセフィーヌを誘拐したということが想像された。ところが、一旦そういう想定に立って様々の事故死を見直して行くと、あまりに酷似した事例にぶつかってしまった。これは、新津にとって一つの驚きだった。先にあげた、野沢洋子の事故死、マーサの事故死なども、ジョセフィーヌの場合と全くそっくりであるといってよいであろう。

報告を見たインターポールのピエール捜査官は、事重大と判断して新津をわざわざパリへ招聘したのである。

ドアがノックされた。

「アントレ（お入んなさい）」

とピエールがいうと、スリリと入って来たのは何と先程新津が車で見た若い女だった。ピエールは、いたずらっぽく片目をつぶって見せて、

「マドモワゼル、マリー・フリーエールだ。ジョセフィーヌの妹さんだよ」

新津は立ち上がったまま棒を呑んだようになっちゃった。そして口の中で、そっくり

だ、そっくりだと繰り返していた。

「ごきげんよう。日本の警部さん」

明るい声にハッとわれにかえった新津は、

差し出された手をソッと握り返した。

「ねえさんをごらんになったというお話しは本当ですか」

「本当ですとも……」

新津は確信をこめていった。

「おねえさまが事故でなくなられたのは、二月の十四日でした。私は、そのおねえさまに三月三日の夜、お目にかかったのです」

「それじゃ、ねえさんは、まだ生きているとおっしゃるのですか」

パッと顔を輝かしながら、マリーが真剣な声音でたずねた。

「わかりません。もし死体が、おねえさまでないとする、おねえさまが、どこかで生きていらっしゃる可能性が高くなります」

「そういえば、あのときは怖くって、よく見ないで姉と決めてしまったようなところがありませんでしたわ」

遠くを見るような目つきで、マリーがつぶやいた。

「そうそう、不思議に思ったことが一つありました。ねえさんが必ずつけていた、金の口

ザリオが残っていなかったんです」

「えっ？」

とたんに、ピエールが叫んだ。

「金の鎖ならば焼ける筈がない。衝撃で切れたとしても現場に残されていなければならぬ。それが残っていなかったとすると、かえ玉説はますます濃くなるね」

「確かに現場にはなかったんですね」

新津が念を押すように訊くと、

「それは確信をもって言えるね」

ピエールが答えた。

「何故なら、焼死体の身元を確認するため、附近を徹底的に洗ったんだから」

「ねえさんは、どこへ行ってしまったんでしょう」

心細気にマリーがいった。フランス人らしくやや小柄だが、ほっそりした肢体に、美事なバストがトックリセーターをつき上げていた。姉に似ているといっても、やや丸顔で、それがジョセフィーヌの知的な美しさに比べてマリーの美さをより温いものにしていた。「私たちは姉妹二人つきりなんです。ねえさんは秀才ですけど、私はだめ。だから、ねえさんがいないと本当に困るんです」

「きつとさがし出すよ、マリー。安心してま

っておいで」

「さびしいわ」

しよげていたかと思うと、すぐ氣をとり直したように、

「私ね、あしたカンヌへ行くのよ。アルバイトで、映画祭のホステスに選ばれたから」と、うれしそうにいった。

「それはよかったね。では氣をつけて行ってらっしゃい」

ピエールも、ほっとしたようだった。

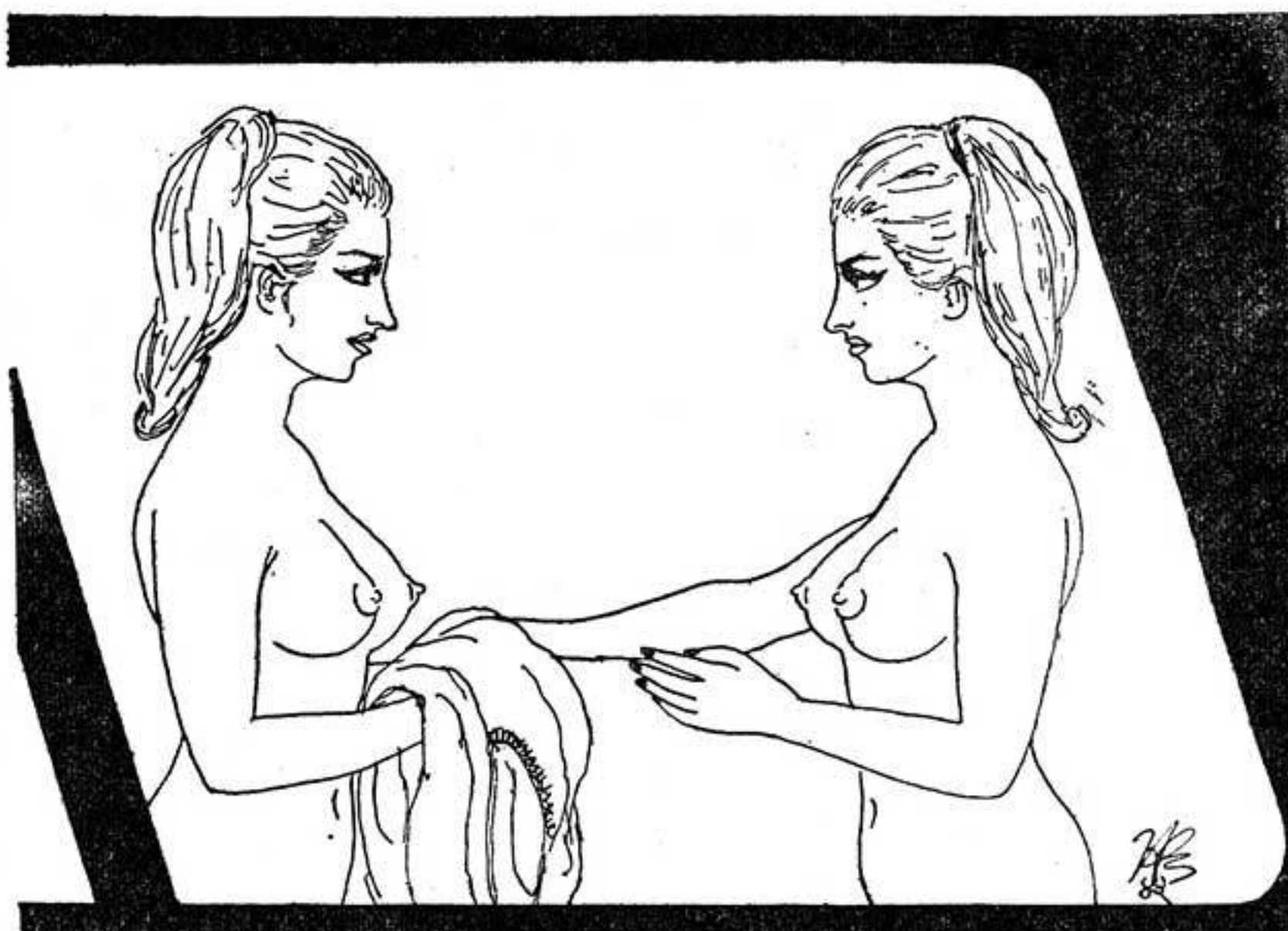
立ち上りながらも、話しつづけるマリーの肩をやさしく抱くようにしてドアの外へ送り出すと、

「さて……」

とふり返ったピエールの表情は、見違えるほど厳しくなっていた。

かえ玉

南仏の避暑地カンヌ。ただでさえうきうきした土地柄なのに、ここ数日は一層色めき立つようであった。というのは、有名な映画祭を数日後にひかえて、世界中の映画関係者が続々と集って来ていたからである。特に若い女優たちを中心にした世界の美女たちがその



空気に一層彩りを添えていたことはいうまでもあるまい。

であった。

ホテル・Mの裏庭は直営のヨットハーバーになっていて、大小様々のヨットがさざ波に

つれて上下にゆれていた。

フロントで小型のクルーザーボートをチャーターした若い女も、カンヌを賑わす、常連の一人だった。アメリカ脳外科の権威テッド・ウィリー博士に見染められ、僅か十八才で四十才も年齢の違う新妻となったのも束の間、一年目のある日二人してスキンドビングを楽しんでいるとき、事故にあつてウィリーは行方不明、彼女自身も半死半生で救助された話はあまりにも人口に膾炙している。十九才の寡婦は世人の同情を惹いた。しかし、巨額の保険金と遺産を相続した彼女は徐々に変貌して行った。人のうわさも何とやらで、それから三年たった今日、モナコに定住した彼女の名は、あそびものの未亡人として遊び野郎にとりまかれ、恰好のゴシップの的にされていたの

さて、そのミセス・ウィリーは燃えるような赤毛を潮風になびかせて、単身ボートのスターターを押した。六メートルばかりの小艇

だが、エンジンは強力なのであろう、グリーンとうねりを起してスピードをあげた。そのおりで、もやっていた何隻かがグラグラと揺れた。

それから三十分もたつと、ボートは岸から遠くはなれた洋上にポツンと漂泊していた。見渡すかぎり、一隻の小舟すら見えない海上にミセス・ウィリーだけが長々とねそべっていたのである。

空と海と一そうの小舟。際限のないような時間の経過。

ふと何かの気配を感じたのか、彼女はムツクリと起き上った。ボートの吃水線あたりがゆらゆらと波立つ。黒いウェット・スーツをかぶった人の頭部が現われる。ミセス・ウィリーは少しもあわてないで舷側にタラップをおろす。真黒な人影はそれを伝わって、スリルとキャビンに姿を消した。ホンの一瞬の出来事だった。その間、僅かにボートが二、三回ヨーイングを起こしただけで、それもすぐにおさまって、もとの静寂にもどった。

しばらく、双眼鏡で周囲をさぐっていたミセス・ウィリーは、異常のないのを確認すると、やおら立ち上り、ブラウスを脱ぎ、スラックスをおろし、下着までとってしまった。

そして、脱ぎ棄てた衣類を丁寧にたたむと、それを捧げ持つようにして、キャビンの中へ入った。

キャビンの床には、水びたしのウェット・スーツが丸められていた。全裸で立っていたのは、おどろくべきことに、何から何までミセス・ウィリーにそっくりな女性だった。第三者がみたら、鏡を見ているような気がしたかも知れない。強いて相異点をさがすとすれば、この不思議なちん入者の方が、若干だがプロポーションにおいて、まさっている点があった。というのは、ミセス・ウィリーが、うやうやしく差し出した衣類を、その女が身体につけてみたとき、はちきれそうになってしまったからである。

信じられない入れ換えが起った。ミセス・ウィリーは、も早ミセス・ウィリーではなくあとから来た女の方がミセス・ウィリーとなつたのである。

数分後、入れ替ったミセス・ウィリーは、たくみにボートを操縦してホテルへ戻った。もとのミセス・ウィリーは逆に黒いゴム製スーツを身にまとい海へ戻った。どこから来て、どこへ帰るのか。それは、この物語りの

進展に従って自らあきらかになるであろうがここでは、彼女が水中二十五メートルの深度まで、まっすぐに潜っていったことだけにとどめ、入れ替ったミセス・ウィリーの後を追いかけて行こう。

ニセ・ウィリー夫人は、やがてホテルへ戻った。誰一人としてミセス・ウィリーが入れ替ったことを疑う者はいなかった。実際は、入れ替った方のミセス・ウィリーの方が本人だったからでもあるが、俄然、ミセス・ウィリーが積極的に行動するようになったことが目立った。そしてそのような積極性は、彼女が実行しなければならぬ計画にとって、不可欠の要素であった。

パリ——カンヌは、飛行機ならば約二時間の距離なのだが、列車だと特急のミストレルでも、ほぼ九時間はかかる。しかし若いマリ・フリーエールは疲れも見せず、いそいそとカンヌの駅に降り立った。

もう夕方だったけれども宿舎の心配は全くなかった。採用通知と一諸に切符もホテルのクーポンも同封してあったからである。しかも列車も一等だし、ホテルも有名なMだ。出迎えたボーイたちの彼女に払う敬意、与えら

れた部屋の豪華さは、いずれもマリーの自尊心をくすぐる。彼女は満足だった。

「八時から、ミセス・ウィリーのお客間でレセプションがございますからお出まし下さるようにとのことでございます」

最後にボーイがうやうやしくいった。マリーをアルバイトに雇った人の名は「ミセス・ウィリー」その人だったのである。

特別室を借り切ったウィリー夫人の客間は贅美をつくしていた。約束の時間になると、マリーと同様にして採用されたい娘たちが三々五々集ってきた。総勢二十人にもなるうか、いずれ劣らぬ美人揃い。それに年配も二十才前後とあって、たちまち室内は華かなムードに包まれて行った。脂粉のにおいの間に、若さがムンムンと舞っていた。

やがて、寢室から出て来たミセス・ウィリーも負けず劣らずの素晴らしさだった。さすがに若さでこそ娘たちに一步をゆずってはいたけれども、華麗なドレスと高価なアクセサリで圧倒する貫録を見せていた。

そして、よく透る、ややハスキーな声で娘たちを歓迎して、こういうのだった。「皆さん、よくいらっして下さいました。フ

告白
恥ずかしいけれど
蓮見順子

私、今年の春、一カ月ほどトルコ風呂でアルバイトを致しました。学校に知れたら大変なことになるだろうとは思いましたが、同じく、同級生でバーやキャバレーでバイトしている人も居るので、好奇心につられてやったのです。

マッサージや何かは、専門の方がいらして指導してくれましたが、四日に一度のお休みでは大変に疲れるお仕事ですし、初めは男の人の体にさわるだけでもとてもいやで、モジモジして叱られました。

お客さんにもいろいろの人があって、中年の肥った人や、色の浅黒い人、ヤクザみたいな人などは特に私はいやでした。でもごく普通のことだけしていればよいので、しばらくするうちに慣れましたが、だいたいに変わったことをいったり、したりする人は考えていたほどはありませんでした。

変わったことを望まれた人で、私がしてあげたのは一人だけ。お店へ行き始めて三週間も経った頃のお客さんで、珍らしく若い方、学生だそうでもきりっとした素敵なハンサム。私ってハンサムに弱いから、

好感をもって変ったことでもしたのでしよう。ポーツとなつてしまったのでした。

この方から「浣腸して」っていわれたときにはびっくりしました。でも、他の人の軽い冗談ほどの嫌悪も感じずに、ご持参のイチジク浣腸を二つもして上げたのは、やはり私が、その方にマイっていたからでしょう。便秘だからっていつてられましたけれど、次にいらしたときには、三〇〇シリンジをお持ちでした。

私がバイトをやめたのは、それから十日程後ですが、その間にその方は四、五回もおみえになりました。明日で辞めるという日に、その方に浣腸してあげながらいうと、大変に残念がられました。残念なのは私の方が強かったのですが、あくまでバイトです。その方がありません。でも、辞めてからはその方が忘れられず、自分で自分に浣腸するようになつてしまったのです。トルコ娘ではなく、女子学生、いえ、浣腸の好きな一人の娘として、あの方とお会い出来る日を夢みながら、私はもう、浣腸器を手離せない女になつてしまいました。

エステイバル・ホールに集っていらっしゃる各国の女性映画人をお呼びして楽しいパーティを計画しております。皆さん方には、そのときのホステスになっていただきます。おそらく、明日からは目の廻るほど忙しくなると思います。その代り、アルバイト料は十分に考慮してあります。明日と明後日一ぱい働いていただいたら、千フラン（約七万三千元）差上げます」

「オー……」

ため息とも歓声ともつかない騒音が一斉に起った。この金額は、彼女たちにとって、いろいろな夢を満たすのに十分な金額だった。しかも、たった二日間ですよというのだから申し分はない。

パーティは翌日の夕方からヨットを借り切って行かうという。男性をオフリミットにした女だけの集りというのが趣向である。娘たちはセーラーの服装で招待客にサービスすることになる。与えられた男くさいユニホームをフイットしながら娘たちはガヤガヤとしゃべっていた。

そして、誰彼となく明日への期待に胸を躍らせるのだった。

(未完)



最近、読者の投稿が盛んな様子を感じるにつけ、自分の内にあるすべてを吐き出してみたい衝動にかられます。私が初めて奇クに接した時の、驚きと喜びのいり混った感動は、今も鮮明に思い出すことが出来ます。

私は、派手な色刷りヌードを売りものにしてゐる雑誌には、ほとんど興味がもてないのです。グラマーな女性がどんなに悩ましのポーズをとっていても、かなりきわどいベツドシンの写真があっても、私には奇クほどの新鮮な感動が湧いてこないのです。

私は生来のものか、年少の頃より活字を追うことが好きで、昔から雑誌類をよく読んでいました。少年時代に既に江戸川乱歩の推

告

白

願望と憧憬

島田道雄

理小説などを読みました。今、思うと、乱歩の小説には、人が縛られたり猿ぐつわをはめられたりする場面がよく出て来るので、そのシーンを探していたのかも知れません。

特に美少女や、若い女が対象になっていた、挿絵があったりしたら、それこそもう夢中になっていたように覚えています。

当時は映画全盛の時代で、よく観にいったものですが、そんな場合が出てくると、ゾクゾクするほどだったのです。一緒に行った家族や友達などはどうだったのかと、今だに思い出すこともあります。

中学時代の思い出として、物置きで一人芝居をしたことがあります。一人で二役をする

のですから大変な苦勞でしたが、それでもなんとか、縄のかかった自分を見ることが出来ました。しかし家の者にみつかったらと気がでなく、事実、一度、母が呼びに来て、もう一寸のことでみつかりかけ、大あわてをしたこともあり、カッと顔面に血の昇るのが自分ですごくわかったものでした。

高校生になってからは、今度は女性の下着に興味を持つようになりました。でもこれは男であれば当然のことかも知れません。この頃にはコルセットやガーターに吊られた辺りのストッキングに美を感じ、自分も女であつたらと思つたことがよくありました。そしてその願望は、姉の下着やストッキングをこっ

そりと無断拝借することになって現われました。しかし、これらを着用して悦に入ったのですが、その姿を鏡に映して楽しむというのではなく、それらの持つ感触のとりこになっていたように思います。そして、私の好きな網タイツを姉が早く買えばよいのと思ったものですが、穿く勇気がないのか姉は、今だに網タイツは持っていないのが残念です。

私は時々、縛りの夢を見ます。そしてその対象となっている人は、ほとんどが女性であって、時には姉であることもありましたが。

自分の手で女性を縛り、猿ぐつわをはめる喜びは、夢であってもすばらしく、それ故に醒めた時のむなしさはたとえようありません。私は日常、父と兄と三人で一間に寝ていますが、何かの折に一人で寝ることがある折には、自分で自分を縛って床に入ることがあります。そんな夢を見たいからですが、勿論、猿ぐつわも忘れません。しかし、猿ぐつわをして寝ると、息苦しくて寝入ることが出来ず、さんざん我慢した揚句、いつも最後はとり去ってしまいます。手足が不自由なだけならどうにか眠れますが、そんなに苦心しているにもかかわらず、満足できる夢は見たことがありません。かえって、思いもしなかつ

たような日に見るようです。一度だけ、すぐエキサイティングな夢を見たことを覚えています。その時には眼が醒めて、驚いて傍らの父と兄に気取られなかったかと寝息をうかがったものでした。テレビなども、縛りシーンのありそうなものを選んで見えています。もう、昔に終ってしまいました。『月曜日の男』や『事件記者』などには、よく縛り場面がありました。現在のシリーズ物では「ザ・ガードマン」のファンになっています。

そうこうするうちに、私も社会人の仲間入りをし、彼女らしきものも出来て、近々と交際するようになったのですが、私のこの性を全く抑えての交際でしたので、どうも物足りない想いのデートでした。彼女は、純真無垢で、まったくの世間知らずといったタイプでしたので、気軽にエッチな話など仲々に切り出せません。大分長らくの期間、味気ない想いをこらえていましたが、遂に思い切る時が来て、喫茶店の片隅で、そのことについて、ほのめかせてやりました。彼女は大变に驚いたらしく、真赤になってうつむくだけでした。私は、さらに追討ちをかけ、様子を見ていると、驚愕と羞恥にいたたまらないという風情がありありと感じられ、私に絶望的な

思いを抱かせました。そして、その二、三日後に、私は彼女の匂いのするもの一切を整理して、別れの手紙を書いたのです。

こんなことがあっても、私の願望は一向に衰えることはなく、己むなく、以前の一人二役を、再び演じるようになったのです。しかも、そのままの再現ではなく、自分が女装した上で縄をかけることを考えました。

困難な一人縛りの方法を色々工夫し、家の者の眼をかすめてのリハーサルを幾度か行った末に万端の用意をして、チャンス待ちしました。そして、ゴールデンウィークのある日、その狙っていた機会を掴みました。

私一人が留守番をするようになったので、喜んで本番スタートということにしたわけですが、自縛の方法は、私としてはずい分、頭をひねり、何度か失敗した上に改良を加えた苦心の結晶といえますが、よく考えてみると手順を都合よくしただけで、別に自慢出来るほどの方法でもなく、説明してもわずらわしいだけです。ここでは省略します。ただ、押入れの戸や、タンスの引手などを利用して縄を巻くには自分の方から体を回転させて締めつける方法だということだけを書けばわかって戴けるでしょう。

本番の時の衣裳ですが、これは全部、姉のものの無断借用です。花模様のついた水色のパンティ、ストッキング、カップ入りのブラジャーが、最初の予定でした。それらを着て鏡の前に立ちましたが、どうも不自然です。

そこで肌色のタイツを追加し、更に純白のコルセットをつけてみますと、俄然、実感が湧き上って、胸から下だけに限っては本物の女性と変らない感じになりました。私は男の中でも大きい方ですが、腰や尻が、わりに発達していますので、こうするとヘタな女性は寄りつけない程の肉体美です。私は非常に満足して、いよいよ、そのグラマー女性にリハール通りの縄がけを始めました。高手小手縛り、あぐら縛り、棒縛り、海老責め等々。

鏡の中の女性は、私の縄を受けて悩ましく腕き廻っていました。一人二役でも難しいのに、さらにカメラマンまで兼ねることは出来ず、フォトをお送り出来なかったのが本当に残念で仕方ありません。

こういうことを書くと、私がM性だと思われるでしょうが、自分では、M2、S8の割合ぐらいの共存型だと思っています。ただ、対象を自分自身で代行しているにすぎないので、鏡に映る姿は自分であるという意識は希

薄でした。結局のところ、私の求めるものはM性の強い本物の女性、ということです。

私もやはり、良きパートナーを求めてやまない者の一人に過ぎないのです。そして、現在では将来の結婚相手には是非ともそういう人を、選びたいと思う気持ちが非常に強いのです。六月号で夢野洋氏が書いていられるように、夫婦間の愛情はノーマルなプレイよりもSMプレイによって、著しく高められるものだという説に、全く同感だからです。

ついでながら、私の緊縛美に関する見解を少々述べさせて貰いたいと思います。

まずモデルは、当然のことながら美女であるべきで、さらに、妖精的・魔女的なイメージがあれば申し分ありません。勿論、肉体美にこしたことはありませんが、衣裳をうまく利用することによってホッソリした人も生きてくるでしょう。映画やテレビの場合、女優さんは美人がほとんどなので非常に結構ですが、性質上、衣裳に制限があって残念です。有名女優やタレントなら、その人のファンである場合には、価値が倍増します。私の好きな女優が縛られると考えただけで、胸がワクワクする思いがします。

衣裳についての私の好みは、全裸よりもむ

しろ、少々ばかり身につけている方が魅力的に思います。例えば、三角パンティやネットのタイツ、薄いスリッパ、長い手袋などを着けた被縛女性には強い憧憬を禁じ得ません。場合によっては、靴もはいている方が効果的になることもあるようです。

ただこのような衣裳類は、観賞本位の場合のことで、肌にくい込む縄目を対象とする場合は、全裸にこしたことはないと思います。

縄掛けの方法では、私はまったくオーソドックスなものが好きです。適当に工夫した道具を用いるのも、別の味わいを感じとることが出来ますが、手錠や足枷類のものには興味が持てません。ただ、それらの物に、長いロープや革紐を併用すれば賛成できます。要するに紐類で上体を巻く縛り方が好ましいのですが、よく映画などに出てくるぐるぐる巻きの乱雑なものには賛成出来ません。

つまり、端正で入念な緊縛感、美しく厳しい縄がけに惹かれるわけですが、いきおいロープの太さにも好みが現れるわけで、あまり太いのも、針金のような細いものも好きになりません。いうまでもなく、拘束自体が目的ではなく、そのムードが問題なので、当然だと自分でも思います。

しかし、私の最大関心は、縛りよりむしろ猿ぐつわかも知れません。いかに見事な縛りでも、これがないと、何となく物足りない感

じを抱くのはひとり私のみでしょうか。とくに私の場合、口に布等を噛まず時、及びそれを被って縛るときが最高に惹きつけら

〔実話〕と〔体験〕懸賞原稿募集

▽題名と内容▽

- 一、私はこのような変わった体験をした。
- 一、私はこのような、不思議なことを見聞した。或は自分で経験した。
- 一、私はこのような奇妙な探訪をした。
- 一、私はこんな珍奇な研究をしている。
- 一、私はこのような怪奇な経験をした。
- 一、私は人間の靈魂の存在を信じている。
- 一、妖怪変化が私を苦しめている。
- 一、私の見聞した怪談或は珍妙な実話。
- 一、私はこんな犯罪を犯した。
- 一、私はこのような変わった蒐集をしている。
- 一、私の趣向は、こんなに変わっている。

▽規定と賞金△

- 一、右に掲げたような△題名と内容▽の原稿を書いてみようと思われる方は、原稿用紙三十枚乃至百枚ぐらいの範囲内でまとめて投稿下されるようお願いいたします。

一、写真或は絵画などの資料がありましたら

原稿に添付下されば幸いです。若し原稿を書くことが不得手の際は、素材、資料の提供にても結構ですから、その旨御連絡下さい。

一、本規定により応募下さった投稿者の方々全部の方に対して、採否に拘らず編集部作成の女体緊縛フォト（或はMフォト）を折返えし贈呈いたします。贈呈枚数は原稿の枚数に応じて加減いたします。

一、誌上に掲載しました原稿につきましては一篇につき五千円以上三万円までの賞金を掲載と同時に贈呈いたします。資料のみ提供の場合も以上に準じて賞金を呈します。

一、締切りは毎月十五日。応募作品には、必ず△実話と体験▽懸賞応募と附記又は添記して下さい。原則として『応募原稿』の返却の求めには応じかねます。景品或は賞金を贈呈する関係上、連絡先は必ず明記下さるようお願いいたします。

れるときです。したがって、テレビや映画ではその道程まで含まれたものは滅多になく、今だかつて私は見たことがありません。しかし本式のものなら、これは必ず、すべきものだと思います。その猿ぐつわの奥から、湧き上るように洩れる呻き声など、想像するだけでも私には、たまらない程の魅力なのです。

猿ぐつわにも、いろいろ種類があるようなのですが、これもまた、実際に必要なためのものではなく、ムードを楽しむためのものですから、美しいアクセサリーを選ぶように、そのモデルの顔だちを考慮に入れ、最も似合い、美しさを増すためのものでなければ、私としては陶醉しかねる気持です。

最後には目かくしがあります。でもこれは私としては実際には見たことがありません。映画で三度ばかり見たような気もしますが、後は想像だけです。もっとも、近頃、口紅の広告に眼かくしした顔をよく見ますが、いずれにしても、猿ぐつわと併用しては、顔をおおってしまうことになり、魅力をこわしてしまいうでしょう。だがやはり、口許の美しい女性なら猿ぐつわを犠牲にして、唇の美を強調するのも悪くはないような気がします。

連載時代伝奇小説

緋

ひ

縮

ちり

緬

めん

地

じ

獄

ごく

(第六回)

白鳥大蔵

片腕狼

町人ながら、あっぱれなやつ——と、寺尾半九郎はうなった。

たとえ、その目的が善であれ悪であれ、立花屋久六の執念は、たしかに、おそるべきものであった。半九郎に片腕を斬り落とされたのは、五日前である。それから、橋場の大津屋別宅へ運びこまれ、二日二晩というものは苦痛にうめき、高熱にあえぎ、死線をさまよって過ごした。

その久六が、半九郎浪人に、大津屋彦兵衛を裏切って自分を助けてくれれば、礼に千両だす、と持ちかけ、まんまと成功したのである。

半九郎は、久六をこの家から脱出させるために、駕籠を呼んだ。久六は寝床からトカゲのように這いだし、ふらつく足を踏みしめながら、自分でその駕籠に乗った。

一步あるくたびに、傷口の痛みが全身にひびくらしく、油汗を流している。それでも、悲鳴をあげない。気丈な男である。

もっとも、大津屋の別宅にいたら、いつ殺

されるか、わかったものではない。必死になって逃げだすのも、当然といえた。

半九郎はその駕籠に寄りそい、一路、花屋敷へ急いだ。

大津屋を裏切って、敵方である久六の用心棒になったことに対して、この浪人は、いまや、すこしも気がとがめていない。

気にかかるのは、久六め、本当におれに、千両よこすか、どうか、である。

したたかな久六のことである。金を手に取るまでは、信用できない。もし、嘘をついたらしたら、その場で斬り捨ててやろうと思っ

ている。いや、あっさり命を奪ってはおもしろくない。残った左腕も、肩口から斬り落として、手無しダルマにしてやろう、と残忍なことを考えている。

久六を乗せた駕籠は、隅田川の川べりを走って、まもなく花屋敷へついた。半九郎は、固く口止めして、二人の駕籠かきを帰した。人通りのない、さびしい場所である。屋敷の左手は田圃が続く、右手は鬱蒼とした森が茂っている。

「こっちは、旦那」

と、門をくぐりながら、久六がいった。傷口の疼痛を、歯をくいしばって耐えながら、先に立って案内していく久六である。

「大丈夫か、久六。肩を貸そうか」

と、半九郎が声をかける。

親切心でいうのではない。いまここで久六に昏倒されたら、千両の礼金がフイになるからだ。

「だ、大丈夫でさあ。立花屋久六、これしきの傷で、へこたれやしません」

久六は、右腕のない肩をそびやかして言ったが、顔面はかなり蒼白になっている。

庭伝いに、裏手の土蔵の前に出ようとして久六の足が、ぴたりととまった。

古井戸のそばに、一人の男が血にそまって倒れている。地面に流れだしている血は、ほとんど固まっていた。

「その男だ、お絹を助けるときに、拙者が斬ったのは」

と、半九郎が顎をしゃくり、平然としていった。

死体の顔に、じっと目をすえて、久六はつぶやいた。

「銀三だ、こいつは」

地下部屋で、二人の人質の番をしているはずの銀三が、なぜお絹と一緒に、こんな所までのこのこと出てきたのか。それが久六には疑問だった。

疑問以上の不安が、久六の胸によぎった。

「久六、お前の用心棒に雇われることが早くわかっていたら、この男を斬るのではなかったな」

と、寺尾半九郎がいった。

「なに、かまやしません。どうせ虫ケラみてえなやつなんですから」

と、久六は薄情にこたえて、土蔵の前にあゆみ寄った。

半九郎も数刻前に、ここまで来て、土蔵の中をのぞきこみ、人気のないことをたしかめ

ている。

「ここです、旦那、この土蔵の中です」

「この土蔵なら、さっき拙者も入念に調べたんだがな」

と、半九郎は不審げに首をひねる。

「恐れいりますが、この扉をあけてくださいまし」

錠がおりていないかわりに、鉄の金具をはめこんだ金網張りの扉は、ひどく頑丈で重いのだ。

「よしきた」

半九郎は、両手をかけて、その金網扉をひらいた。

土蔵特有の、湿っぽい、ひんやりした気配がたちこめている。二人は、土蔵の奥へ踏みこんだ。

「その床板を引き剥がすと、地下部屋の入り口になります」

と、指をさして久六がいった。

「なるほど、地下部屋とは思わなかった。これでは、いくら探してもわからなかったはずだ。掏摸の親分ともなると、さすがに凝った隠し場所を用意しておくものだな」

周囲を見まわしながら、半九郎は正直に感謝した。

片腕のない久六は、壁でからだを支えるようにしながら、そろり、そろりと階段をおりていく。やせおとろえた顔は、頬骨が高く、がって狼のような形相になっている。落ちくぼんだ両眼は、異様に底光りして、さながら片腕のない狼だった。

汗と涙

「ひいッ、か、か、かんにんしておくれ……い、い、いのちだけは、助けておくれッ」
髪をふりみだして、お仙が子どものように泣きわめいている。

久六親分の情婦としての、見栄も誇りも、いまや、かなぐりすてた姿だった。

天井に吊られていたのを、やっとおろされて、水を浴びたように、汗びっしょりになっている。

ひどく体臭の強い女で、その汗が妙に獣めいてなまぐさく、このせまい地下部屋のすみずみまで、ぶんぶんたちこめる。

どこからおいだすのか知れないが、むせるほど強い、女盛りの肌だけが持つ、体臭なのだ。うしろ手に固く縛りあげてある縄までが、汗にぬれて黒ずんでいる。

「た、たすけてえ……こ、殺さないでくれよう……」

涙が頬をぬらししている。

「だれが殺すと言った？……てめえなんか殺しやしねえや。さんざんぐさんだ末に、宿場女郎に叩き売るって、はじめっからそう言ってるじゃねえか」

まむしの源次が、せせら笑っていった。この男の額にも、汗が光っている。飽きもしないで、この熟れきった白い女の肌を、ねちねちとうめかせ続けているのだ。

「いままで世話になった礼を、こうして返してやろうというのさ」

いいながら源次は、三尺ばかりの青竹の先で、お仙のまっ白い脇腹のあたりをこねくりまわしはじめた。

お仙のむっちりしたまるい顎が、また苦しげにけいれんして、うめき声をあげる。

そのうめき声と、唇を噛んだ凄艶な表情がまた源次の神経のどこかを刺激して、いっそう夢中で青竹をこじ入れるのだ。

「げ、げ、源次、も、もうやめとくれ。責めるのは、もう、やめとくれ……あ、あ、お前のいうことは、なんでもきくから……もう、こ、この縄を解いておくれ……」

お仙は、血走った目で源次をみあげ、きれぎれの声で哀願する。

地下部屋の畳の上に、うつ伏せになったまもがいているので、背中にねじあげられ、きびしく縛られている両手の指の悶えが、哀れにみえる。

縄ががっちり食いこんでいるために、血行がとまり、腕の肉が白っぽく変色し、指のさきは紫色になっている。

源次の青竹が、どこをどう突き、どのへんをどのようにこじったのか、

「くッ、くッ、くくくッ……」

と、身をよじりながら、咽喉の奥でひきつるようにうめき、まるでなにかの粘液のような汗が、じっとりと皮膚の上に浮かんで、むうッとおいだす。

「なんだと？……おれのいうことなら、なんでもきく？……へッ、久六の垢がさんざんしみついたてめえの肌なんぞ、いまさら抱こうとは思わねえや！」

と、源次はほざいた。

お仙は、不自由な身を反転させ、仰向けになると、自分のすべてをさらけだした。

「く、くそッ……」

こんどは源次がうめいて、両眼をギラギラ

光らせながら、にらみつける。

「ふん……」

と、横合いで笑った女がいる。お京だ。

お京は、源次の腹のなかを読んでいる。

「やせ我慢をしなくなたっていいんだよ、源さん。姐御がせっかくあ言ってるんだ。一度抱いてやったらどうだい」

と、からかうように、お京はいった。

おや、というような顔で、源次はお京をふりかえった。

「おめえ、そんなことを言っているのか。おれがここでお仙を抱いても、おめえ、嫉けねえのか？」

源次はもう、すっかりお京を、自分の情婦だと思っている。

お京はあわてて、

「いえね、嫉けないことはないけどさ、いまままで私たちをさんざんこき使った憎たらしいこの姐御を、もっともといじめ、苦しめてやろうと思ってさ」

と、弁解する。

「ばかやろう。この源次さまに抱かれたら、苦しむどころか、この世の極楽だ。ふざけるな」

と、源次は機嫌が悪くなって、青竹の先を

もう一度、お仙のやわらかいところへねじこみ、ぐりぐり、ぐりぐりと、舟でも槽ぐような調子でえぐりだした。

「あッ、あッ、ひいッ……や、や、やめて。

お願いだから、やめておくれ。い、痛いッ」骨までとどくような激痛に、お仙は縛られた身をごろごろ転がしてのたうちまわった。

なまぐさい女の体臭が、お仙の毛穴のすべてから流れだすように、いよいよ強くにおいだして、部屋の中の空気を熱くさせる。

その臭気に抵抗するかのように、源次はなおも、えぐり続けるのだ。

「やれやれ、熱心だねえ……」

お京は、源次の執拗な折檻に、さすがにうんざりして、部屋のすみの壁によりかかると煙草をふかしはじめた。

そのお京と並んで、これも素裸にされたお雪が、うしろ手に縛られたまま、半分失神している。大津屋の箱入り娘である十六歳のお雪が、このすさまじい光景を、正気で見ていられるはずはない。

お京は、心の底では、このお雪を憐れんでいる。

できるものなら、この地下部屋から助けだしたいと思っている。

お京が、大津屋彦兵衛の懷中から掘り出した財布の中から出てきた、オランダ歌留多の半片。

その歌留多のために、大津屋の娘が、こうして拐われ、人質にされて苦しんでいる。娘にはなんの罪もないのに、羞恥と屈辱を強いられ、発狂寸前まで追いつめられている。

歌留多の半片は、どうやら大津屋の抜け荷買いの割り符らしい。

その割り符をめぐって、久六や、悪徳役人の八木沢左内や、源次までが目の色を変えている。

だが、お京にとって、抜け荷なんかどうでもいいことだ。

こうして素裸にむかれて縛りあげられ、半死半生の目にあわされているお雪の運命は、すべて、自分が大津屋の懷中物を掘り出したことから因を発しているのだ。

それを思うと、お京は心苦しい。

女拘摸のお京にも、まだそのくらいの良心は残っているのだった。

源次のために身を汚され、いまは自分から源次の情婦だというような顔つきをしているお京だが、胸の底には、不敵な反抗の火を燃やしている。

足のある幽霊

ひいッと悲鳴があがり、お仙の白いからだ
が、弓のようにのけぞった。

源次の青竹が、また無情にえぐったのだ。

「ち、ちくしょう、お、おぼえてやがれッ、
いまに、いまにこの仇は、きつと討ってやる
から……」

唇の端から、白い泡をふきながら、お仙は
ののしった。

「仇をとるって？……へえ、こいつはおもし
れえ。親分の久六は、五日前に大津屋の用心
棒に叩ッ斬られて死んだ。この立花屋の縄張
りは、黙っていてももうおれのものだ。仇を
とれるものなら、とってみやがれ」

こんどは、胸の上下にかかった縄の内側に
青竹の先をむりやりにこじ入れて、ぐいぐい
とゆすった。

それだけでなく、むっちりと白い大きな左
右の乳房が、いっそう大きくゆがんでくびれ
あがり、ぷりぷりと弾んだ。うす紅い乳首が
みるまに小指の先ほどもふくらみ、固くなっ
てふるえている。

「あッ、あッ、ちくしょうッ、そんなところ

を……ひいッ……」

背中に縛りあげられている両腕はどうにも
ならないので、両足を宙にはねあげ、バタバ
タさせてお仙はもたえる。

青筋が透けてみえるほど白い太腿の筋肉が
こじられるたびに、ぷりぷりとふるえる。

「さあ、おい、仇をとってみろ。さあ、どう
した、お仙」

言いながら、いっそう力をこめて、ぐいッ
と青竹をひとひねりしたとき、その源次の背
後から、

「よし、仇をとってやろう」

ふいに、しわがれた男の声がした。

地下部屋への階段をおりてきて、戸口の外
に立ち、黙って中のようなうすうかがっていた
久六が、はじめて声を発したのだった。

久六の背後には、むろん、寺尾半九郎もい
る。

まむしの源次の顔が、蒼白になった。ふり
かえって、久六の姿をみたとき、思わず、

「ゆ、幽霊だ！」

と、源次はうめいた。

「くそッ、迷って出やがったな！」

源次の背後に、つめたいものが走った。

やせこけて目の落ちくぼんだ久六の容貌を

みて、源次が幽霊だと思ったのは、無理では
なかった。源次は、久六が斬り殺されたとば
かり思っていたのだ。

「源次……」

久六は、源次にむかって、青白い鬼火のよ
うな笑顔をみせた。

「よく見ろ、源次。足は二本、ちゃんとつい
てるぜ。そのかわり、腕は一本しかねえけど
ね」

「お、親分……」

源次の声が、驚愕のためにかすれた。

部屋のすみにいたお京も、久六の姿をみて
恐怖のために、四肢を硬直させた。

源次は、一歩前に出た。

「おれが居なかった五日のあいだに、ずい分
いい顔になったらしいな、源次」

底光りのする目に、いっそうの凄みを加え
ながら、久六がいった。

その声に、畳に這いつくばって荒い息をつ
いていたお仙が、やっと気づいて、汗と涙に
ぬれた顔をあげた。久六の姿を、しかと見定
めて、

「お、親分。あんた、やっぱり生きていたん
だね。うれしい！」

お仙の顔が、くしゃくしゃにゆがんだ。

助かるッ……と思ったとたん、うれし涙がポロポロとお仙の頬にあふれた。

「やい、源次、お京、ざまアみやがれ。あたしの親分が、そんなにかんたんに死んでたまるかーい！」

うれし泣きに泣きながら、急に元気になって、お仙はさけんだ。

「そうだ。おれがそんなに、あっさりとくたばってたまるか。おい、源次。この始末は、どうしてくれるんだ……」

源次の膝が、ガクガクとふるえだした。

この部屋の光景を、ひと目、久六にみられたら、もう弁解の余地はまったくない。

久六の斜め背後に、寺尾半九郎がのっそりと無言で突っ立っている。

大津屋の用心棒が、なぜ久六のそばに立っているのか、それを疑問に思う心の余裕は、いまの源次にはない。

「どうする、源次」

久六は、憤怒をみせて迫った。

源次は追いつめられた。

「くそッ」

一歩後退しながら、源次は懷に右手を突っこんだ。あいくちを抜き放って、いきなり久六の脇腹めがけて突き刺した。

「ばかやろう！」

久六は体を左にひねって、間一髪、そのあいくちの攻撃を避けた。

つぎの瞬間、寺尾半九郎の腰から、大刀が一閃した。

「ぐうッ」

とうめいて、源次は前のめりにのめったまま、両膝を折って畳の上に膝をついた。

もう息をしなかった。半九郎の腕の冴えは一撃で源次を倒したのだ。

「お前に雇われた用心棒としての、初仕事だな、これは」

大刀を鞘におさめながら、半九郎がつぶやいた。

「これも千両の仕事のうちだ」

といって半九郎は、ニヤリとした。

礼金千両の約束を違えたら、お前もこうなるぞ、という意味をふくめた半九郎の言葉なのだ。

久六は、お仙に目をむけていった。

「その女の縄を解いてやっておくんなさい。

そいつはお仙といって、あっしのめかけなんです」

「親分、あたしゃ、うれしいッ……」

お仙は声をあげて、まただらしなく泣きだした。

した。

このとき、源次の死体を見おろしていた半九郎が、

「おい、久六、見ろ」

といって、源次の懷を指さした。

大きくはだけた襟もとから、オランダ歌留多の半片が、顔をのぞかせているのだ。あいくちを抜いたとき、あわてて一緒につかみだしたものであろう。

源次が、だれにもしやべらずに、必死に腹巻の内側に守ってきたこの半片も、いまや無残に、べつとりと血にぬれていた。

その歌留多をみた瞬間、久六の表情に、喜悅の色が輝やいた。

「あった！……まちがいねえ。こいつだ、抜け荷の割り符だ！」

久六は思わず身をかがめて、歌留多の半片をひろいあげた。

「こ、こ、こいつさえありゃあ……」

どもりながら、久六はいった。

「まだまだ、大津屋なんかには負けやしねえ。負けねえどころか、こいつをネタに、ゆすってゆすって、ゆすりぬいてやる！」

久六は、躍りあがりたいほどの気持ちだった。

執念の火

「旦那、この地下部屋はもうまずい。ひとまず、どこかへ引き移りましょう」

と、歌留多についた血糊を、源次の着物の袖でぬぐいとりながら、久六が、半九郎にいった。

「ここなら大丈夫だろう。めったなことでは見つかるまい。拙者でさえ、わからなかったのだからな」

と、半九郎が天井の滑車や周囲の壁を見まわしながらいった。

「旦那には見つけれなかったが、あの大津屋彦兵衛だったら、かならず、この地下部屋を突きとめます。彦兵衛は、あっしが思っていたよりも、もうひとまわりも手ごわい野郎だ。ここは、一刻も早く引き払ったほうが無事です」

久六は、強調した。

大津屋に正面切って闘いを挑むには、事態は、いささか変わってきている。

お仙の口から、すべてをききだした久六だった。

源次が銀三と手を組んで、立花屋を乗っ取

ろうとしたこと。同心の八木沢左内が、銀三の手で殺されたこと。

お京の阿魔は、源次の情婦気どりで、源次と一緒にあって、立花屋一家を牛耳ろうとしたこと、などをお仙は泣きながら久六に訴えたのだ。

そのお京は、いまはお仙のために、ぎりぎりとうしろ手に縛りあげられ、お雪と一緒に背中合わせにされて縛りつけられている。

「うむ。ここを引き払うのはいいとして、約束の千両は、いつくれるのだ？」

と、半九郎はまだ千両の礼金にこだわっている。半九郎にしてみれば、その千両欲しさに、大津屋を裏切ったのだ。

「気のみじかいお人だ。立花屋久六、嘘はつかねえって言うのに」

久六は苦笑して、隠し戸棚から五百両だけ出し、それを手つけとして半九郎に渡した。

あとの五百両は、オランダ歌留多の半片をネタに、大津屋から金をまきあげてからということに話はまとまった。

半九郎も、いまとなつては、久六の言葉に従うよりほかはない。久六は、うまうまと半九郎を味方につけてしまったのだ。

「ところで、身を隠す場所ですがね……」

香具師の親方としての立花屋の家は、浅草の馬道にあるが、そこはもう、大津屋に知られているはずだ。

うっかり立ちまわって、張りこんでいる大津屋の手の者にとっ捕まったら、ひどい目にあう。

「そうだ、ヤレツケの岩松のところがいい。あそこなら、いくら大津屋でも目がとどくまい」

適当な場所を、久六は思いついた。

深川扇橋に、久六にとっては弟分にあたる岩松という香具師がいる。通称、ヤレツケの岩松。

ヤレツケ、ソレツケの見世物を商売にしているところからきた呼び名である。

「あの男なら、頼りになる」

四半刻後――

四挺の駕籠が、ひっそりと花屋敷を脱けだした。駕籠の中には、立花屋久六、お仙が乗っており、大津屋の娘お雪、そして女掏摸のお京は、共にうしろ手に縛られ、さるぐつわを噛まされて押しこめられている。

半九郎浪人は、その四挺の駕籠によりそって走っている。

お京を連れだすと足手まといになるから、

このまま地下部屋の柱に縛りつけて置きっぱなしにしていこう、と久六は言ったのだが、お仙はどうしても承知をしなかった。

源次にひどい目にあわされた仇を、このお

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実に発売!

一月分	1冊	三五〇円(送20円)
三月分	3冊	一〇五〇円(送共)
半年分	6冊	二一〇〇円(送共)
一年分	12冊	四二〇〇円(送共)

郵便番号
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたらという御希望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時に、お手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下されるのは大阪市住吉局私書箱第四十一号出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何力月分と御指定下さい。

○三月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分二十円(切手可)の御負担を願います。

○本誌は十月号から定価三五〇円に値上げになりましたので、予約購読料は三月分三冊

京のからだで返してやるといきまいて、わざわざ、深川まで運ぶことになったのだ。

ヤレツケの岩松は、香具師のなかでも見世物を多く扱っている男で、家には始終若い者

一〇五〇円、半年分六冊二一〇〇円、一年分十二冊四二〇〇円になります。今後当分の間誌代の改訂はしない予定です。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊宛お申込み下さる方は、誌代送料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何力月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細表を雑誌に添布致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印致しますから継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りに行きたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とお知らせ下さい。ば、当方では御指定の局留としてお送りいたしますから、数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

がごろごろしている。

したがって、表の構えは目立たないが、家の中は部屋数も多く、庭もあって、かなりの広さである。見世物の道具を入れておく物置き部屋が多くあって、身を隠しておくには、もってこいであった。

「こりゃあ、馬道の元締、よくおいでだね。こう見渡したところ、妙な顔ぶれの一座で、どうやら深い仔細がありそうだが、まあいいや、自分の家に落ちついたと思って、遠慮なくくつろいでおくんなせえ」

片腕の無い異様な久六の姿に、キラッと鋭い視線をむけたが、岩松はそしらぬふりで何にも言わず、にこやかに、この一行を出迎えた。この男も、ひとくせありげな面構えをしている。

妙な顔ぶれの一座にはちがいない。

いかにも無頼な風態の浪人が一人、縄尻を握り、長襦袢をまとっただけの娘と、腰巻き一枚の女は、むごたらしくうしろ手に縛られて、その浪人に引きずられている。

お仙は、岩松と日頃から顔見知りなので、「すみませんねえ、岩さん、しばらくご厄介になりますよ。ことによったら、へんな泣き声をお聞かせするかも知れないけど、まあ、

きこえないふりをしていておくんなさいよ」と、愛想よく媚態をふりまく。

裏庭に面した奥の部屋に陣取った久六は、さっそく布団を敷かせて横になった。右肩の傷口が、またズキズキと痛みだしたのだ。

久六は、両眼をとじた。

「とにかく、これで、ひと安心だ……」

痛みを耐えながら、久六はつぎの手筈を考える。

大津屋彦兵衛を苦しめる手段を考えていると、傷の痛みがうすらぐのだ。久六の生への執念は、欲と憎悪によって支えられているのかも知れなかった。

『こんどは、彦兵衛の女房のお静をさらってくるのだ。芸者に出ているころ、通いつめたおれを、すげなくふりやがった生意気な女。おれを袖にして、大津屋なんかの女房におさまりやがったお静だ。おぼえていやがれ。この久六さまはな、一度受けた辱ずかしめは、絶対に忘れねえんだ。二倍にも三倍にもして返してやる。すっ裸にひんむいて、嫌われた男が考えつく、ぜんぶの手を使って、ヒイヒイ泣かせてやる。女が一番恥ずかしがるように、針のさきでチクチク刺しなぶるような責め方をやってやる。この久六さまの執念が、

どんなにおそろしいものか、たっぷりと思い知らせてやる。突き刺し、なめまわし、くすぐって、ありとあらゆる色の声音をしばらくしてやる。待っているがいいぜ、お静。おれはまだおめえを、忘れちゃいねえんだ……』

久六は、自分のからだだが火照ってくるのを感じた。また熱がでてきたらしい。

橋場を脱け出してから動き通しなので、いっそうやつれて目が落ちくぼみ、幽鬼のような形相になっている。

それでもなお、お静をさらってきて責めさいたむ光景を想像していると、ゾクゾクと愉悦が湧いてくるのだ。

芸者をやめて女房におさまり、あの大津屋に每晚抱かれていますお静だ。芸者のころよりもっと色気が増しているにちがいない。

あのまっ白い肌を、こう縛って、こうひらいて……と、妄想するだけで久六は、うっとりしてくる。

いくら金を積んでも、おれの前では首を横にふり続けた女。いつもおれを、軽蔑の目で見くだしていた女。おれをゲジゲジのように嫌い続けた女……。

あの高慢ちきな芸者の小静を、こんどこそ抱いてやるのだ。うしろ手に縛りあげ、さる

ぐつわを噛まして抱いてやるのだ。そして、彦兵衛に吠え面をかかせてやるのだ。

娘のお雪と、女房のお静を人質にとって脅迫すれば、どんなに大津屋が剛腹な男でも、おれの前に頭をさげるにちがいない。

そこで、オランダ歌留多の半片が、抜け荷の割り符であることを白状させ、おれにも、一口のせろとゆするのだ。

あの大津屋の身代なら、五千両、八千両、いや、一万両でもゆするにちがえねえ。

久六の色と欲の妄想は、いよいよ熱を帯びてふくれあがる。

やってやる。おれは、きっとやってやる。この片腕を取られた恨みもこめて、かならずやってやる……。

久六の執念の炎は、いよいよ青白く、妖しい色をみせて燃えあがるのだ。

悪事にかけては、三度の飯を食うよりも手慣れている岩松の子分たちを使えば、お静をさらってくることもなんて、雑作もない仕事だった……。

(つづく)

前回は古代ギリシャ、ローマ時代に端を発した半ば神話的、伝説的な女流騎兵戦士から歴史的に概説を加えようところみたが、その末尾で少し触れた映画「ローマの女戦士」は、古代ローマ帝国時代に活躍したアマゾネス等の戦闘状況、馬の飼育、調教、砦中の生活、寝台のある共同部屋。及び敵の捕虜になったアマゾネスの、深夜の馬に依る脱逃、更にアマゾネス等による武器の集獲、又昼間に堂々と砦から騎馬による出陣等の生々した描写がなされ、その方面で特に充実した力作で



アマゾネス考

= 映画 =

ローマの女戦士

佐野 寿

ある。

今回のフィルムでは、初代のローマ帝国が未だ弱体で往々にしてエトルリヤ王国にして侵略を受け、アマゾネスが逆にローマに味方し北方からの蕃族侵入を防ぎ、又、最後には積極的に敵陣を粉碎し勝利をおさめる所を画いている。

彼女等は、平時は薄い半透明の白地の衣服をかたから斜めにかけて、同色のミニスカートの様なものをまとい、やや亜麻色の髪を長めに、赤皮の半長靴を皮ひもでとめて居るが





戦闘時はローマの兵士のごとく金色と赤色のきらびやかな鎧をつけ、各々槍、析、盾、手斧をもって、皆馬に乗り勇敢に戦う。

進撃の際は全速力で平原を通り、森を抜けクリークや浅瀬を水しぶきを上げ、又、大河中にも馬を乗り入れるし、敵の裏をかく為に古代ローマ水道のアーチ状のせまい所へも乗り入れる。一番先頭は女王クレリアで、イギリスのシルビヤ・サイムスが好演する。容姿端麗、立派な体格と乗馬のベテランと云う三拍子そろった数十人のアマゾネスが登場し、見る者を完全に圧倒し、手に汗さえにぎらしめる。その活躍範囲と舞台が広大で変化に富んで居たのも我々を決して飽かしめない。

他の映画にしばしば使うスタンドインと云うか、危険な場面は女優の代役として誰か別の者がすると云うことはなく、まさに彼女等自身の熱演であり、例えばギャロップで戦闘する時や落馬する時、又、馬を乗りつづす所等、すべて自分自身でやっているのがわかるので、ますます気魄も真に迫ると云える。尤も女性乗馬者も、上達した人々は落馬したときでも、骨を折ったり必要以上の怪我はしないと云われているが、それでも極めて荒っぽい勇ましい演技であった。





中には裸馬に跨ったアマゾネスも居たが、多くは赤い布製の鞍を用い、ほんの一部しか拍車を使っていないが、あれでよく連続して馬をギャロップさせ、広大な草原平野をかけさせられるものだと感心した。彼女等の騎座も実に安定して居て、弓矢や刃を使う時も決してバランスをくずしたりせず真直ぐ馬に跨って居た。余程優秀な平衡感覚がなければ男でもちよつと無理である。

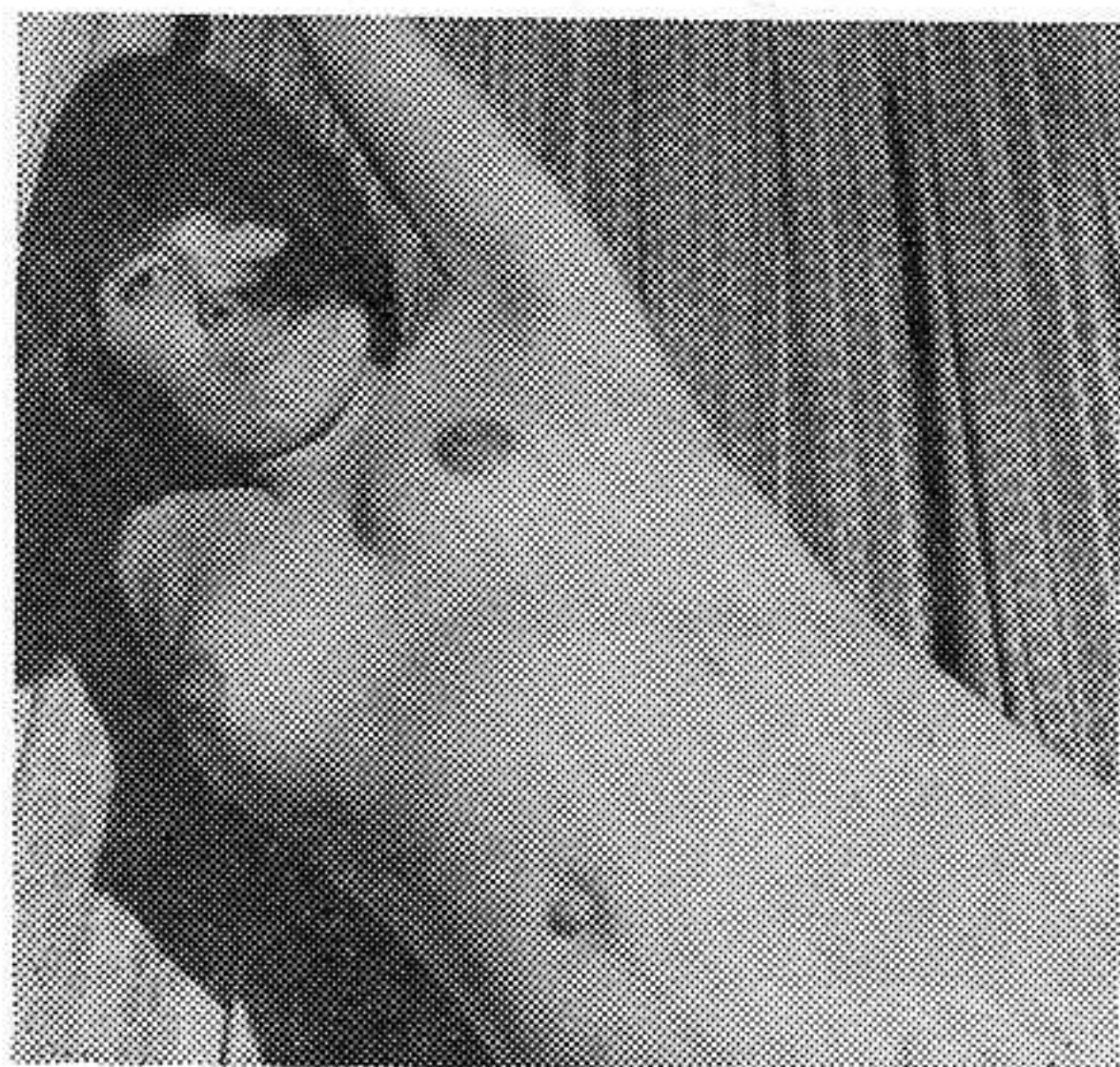
クライマックスの騎馬戦や、女王クレリヤの補佐役のアマゾネスの戦死（矢で胸をいられましたが最後迄馬にしっかり跨り、手から槍をはなさない光景は特に印象的であった）をとっても、又、平和時の楽しそうな砦内での馬の世話等、どの一コマを取ってもすばらしい印象を与えてくれた。

ローマ市内を偵察する為に、単身馬で来た女王クレリアのギャロップ姿や落馬する所、更に森の間の草原でのアマゾネスが円を描きながらの楽しそうな乗馬訓練の光景は、シヨッキングなほど鮮やかで美しかった。それに続き、ローマ市を防衛する為の義勇兵としてのアマゾネスが、大神殿の正面に馬に乗って集結する所も忘れ難い。赤皮の鎧がよく調和して似合っ居た。市民の間を、隊列をなし

て整然と馬で行進するところも悪くない。又白衣の軽装で砦に入って行く所や、寝台のある納屋でのアマゾネスのグループ生活の描写も味がある。又、彼女等が敵に包囲された砦から、策略をめぐらして剣や武器をひそかに運び出してかくす所も大いにスリルがあり、牛の大群で砦の柵をこわし、アマゾネスがかり火をもって馬で脱出する所が忘れ難い。

アマゾネス等は単に容姿端麗のみならず大きく重く、彼女等に全速力でギャロップを命令される馬は、相当疲労困ぱいするに違いない。時々鎧で武装はするが、脚やももはあらわなので、馬の動きと各騎手の関連性が手にとるようにわかり、興味、殊の外、深い。

特にアマゾネスが渡河を終えて、次の全速力ギャロップに移る前のシーンは、私を完全に圧倒し、魂をうばう様であった。私にとってこの映画は、どこと云って何一つ難点はなく、その道では誠に充実したものであり、わずか一時間ちよつとの、上映時間ではあったがエクスタシーと半ば驚乱の連続であり、見終っても十日間位は、その鮮明な印象が頭にこびりついて離れなかった。又、何時これと類似のフィルムにお目にかかれるかと鶴首して待つものである。



S M カメラ・ハント——木戸悦子の巻

—妊娠九カ月の妊婦を縛る—

胎児の喘ぐとき

辻村

隆

教えられたとおり、ダイヤルを廻す。六

×二—三四六×番。待つことしばし、

「もしもし……もしもし」

「ああ、木戸悦子さんでしょうか？」

しばらく沈黙が流れた。

「あのう、誰方様でしょうか？」

「実は、暁出版の箕田編集長から連絡をいただいた、辻村というものですが……」

「ああ、カメラ・ハントの？」

「ええ、御存知でいらっしゃるとうろを見
ると木戸さんですね」

「ハイ、でも突然なので咄嗟にお返事出来なくて……御免なさい」

関西弁でないニュアンスの、ハキハキした歯切れのよさであった。木戸悦子は、或いは誌上名であるかも知れない。だからこそ、いきなりそういわれても、返事出来なかったのではなかろうか。私にとってそんなことは些細なことであった。要するに、本人であるところの彼女の、ナマの声を聞いただけで、私の胸は既に心なし躍り始めていた。
「貴女が、カメラ・ハントに協力してもいい

って仰有ったことを編集部で聞いたものですから、いきなり不躰けにお電話したのですが本当に、お差支えないんでしょうか？」

「ええ、私のような妊婦でもおよろしかったら……」

「願ってもないことです。既に二度許り箕田さんともお会いになって、編集部で分譲用に撮られたそうですが、お体の方、大丈夫でしたら、一度私につき合ってほしいのです」

「喜こんで……」

「じゃあ、明日にでも」

「結構ですわ」

「場所は？」

「我侘いいますけど、それじゃ私の家の近くでいいでしょうか？」

「勿論、構いませんとも」

「それじゃ、南海電車上町線の、帝塚山×丁目の停留所で。私、おなか膨れていますからすぐ分ると思います。午後一時に参ります」

「分かりました。車でそこまでお迎えに上ります。くわしいことはお目にかかった折に。それじゃよろしく」

「私の方こそ。愉しみにしておりますわ。きつとね」

それで電話の連絡は終った。増田みゆき以

来、実に久方振りて妊婦を撮る機会に浴したのである。しかも彼女の場合、資料を提供するからと、奇クサロン（八月号）を通じて呼びかけて来たのだから、正に果報は寝てまてというところであった。私は、この成果をすぐさま、箕田氏に知らせた。

「よかったじゃないか。しかし又、短兵急だね。今日電話して、明日かい？」

「ウン、善は急げだ。一緒に行ってくれる」

「ゆくもんか、それどころじゃないんだ。時は金なりだ。いや秒は金なりだよ、今は」

「株？」

「皆までいわせるな」

「じゃあ一対一でいいんだね」

「そのつもりで、電話番号知らせたつもりだよ。あんたらしくもない」

「それでは遠慮なく」

「でっかいポンポン、拝見に行きなさいよ。」

只今、九カ月の筈だ。しっかりたのむよ」

「彼女の手記から察して、私は又、七カ月ぐらいかと思った」

「バカだね。あの手記が送られて来たのは四月末だよ。締切後だから、翌月廻りになって八月号にのせたのさ」

「ああ、そうか、益々嬉しくなった」

「余り無理すんなよ。無理して突然変異を起してパンクしても責任もたないよ。まあ成功を祈るよ。それより、勿々にハント書いてくれることだね。悪いけど電話の長い困るんだ、今大切な時間だから、切るよ」

あつ、それからというおうとしたら、切れてしまった。相場には没交渉の私も、市場の値動きの激しさは知っていた。それだけに彼、血眼なのだろう。

木戸悦子に対する知識は、奇クサロンの彼女の手記『緊縛と妊婦の資料提供』以外、何もないといってよかった。緊縛やプレイが、どの程度なのか？ 容貌は？ 年令は、体格は？ それらの何ひとつ知らされていない。

電話を通しての、落付いた爽やかな声。なまりのない歯切れのよさ。指定地の帝塚山という高級地帯。そんなところから、私の想像のイメージは、いつしか、中流以上の上品な若妻の姿を脳裡に描いていた。

すべては明日に委ねて、私は妊婦ハントの愉しさにワクワクする胸を膨らませた。

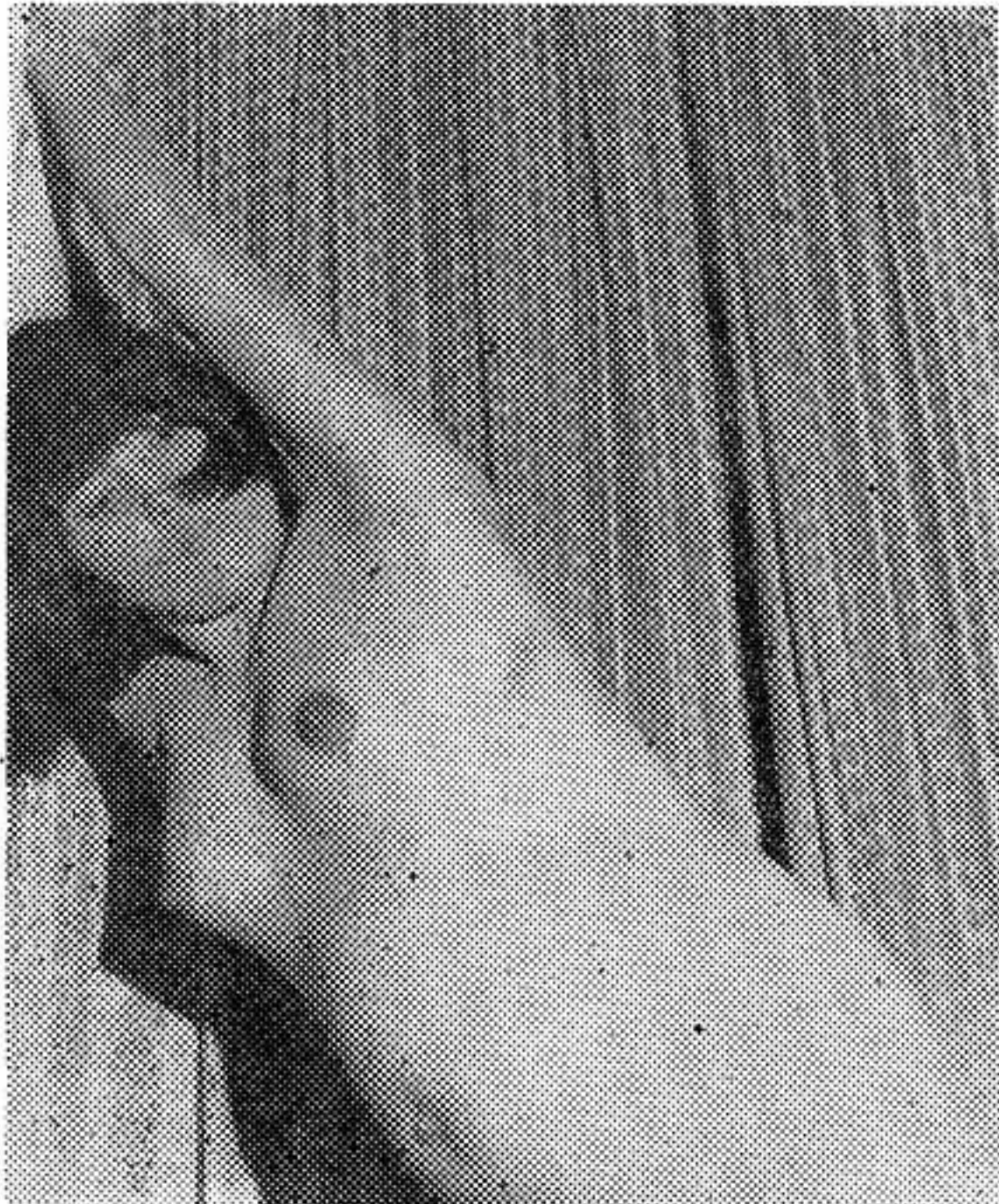
梅雨あけの寝苦しい夢魔に安達が原鬼婆がおどろに髪を乱して庖丁をとき、囲炉裡の前に、高々と逆吊りにされた臨月の妊婦が、今正に腹裂きされるというのに、傍らにたたず

む私に、逆しまの顔がにこやかに清々しく微笑んでいた。私はその笑顔にあわててカメラを構えていたのである。ああ、コッケイな性^{サガ}よ。夢にまでもオレはハントしているのか。

× × ×

日傘をさして、スツとセフティゾーンに立った人。蔽うべくもない偉大なるふくらみに瞬時にして私は木戸悦子を目に射とめた。彼女はさりげなく辺りを見廻している。時間はきっかり午後一時。私は車の窓を開いて手を振った。振った手が、眺め廻す彼女の視線に飛び込んだ。うなずいたように大きくコックリとすると、行きかう車の流れを避けて彼女は胸を反らせ、円型を突き出し気味にして近づいて来た。眼顔で会釈すると、助手席のドアを押し開く。ヨイシヨというように木戸悦子はゆったりと腰を落した。

会った最初の第一印象は、歌手の山本リンダの数年さきの容姿をすぐ想い浮かべた。それ程に木戸悦子は「困っちゃうな」の山本リンダをほうふつさせる、そっくりシヨウものの美人であった。手脚



もほっそりして、唯、腹部のみが、妊婦服をもってしても蔽いようもなくなだらかに円を描いて突出していた。髪を無雑作に短くきりパールの小さいイヤリングが殊更に、夏の陽ざしに白く光っているのが印象的であった。

「ぴったりでですね」

「ええ」

「約束の時間きっかりだと、とても幸先がいいようで、お人柄が分るのですよ」

「あら、私は又、この夏服のことかと思っちゃった」

「妊婦服はピッタリじゃない、むしろダブダブなんですよ」

「そうでもないんです。おなかに合うよう、これでも随分、苦心の作なんですのよ」

笑うと白い歯が清潔にかたちよく覗けた。

「食事は？」

「軽く済ませましたわ。近頃もう余り喰べられないんです。妊娠のせいでしょうね」

「それじゃ、そろそろ出掛けましょうか」

「この近くのアベックホテルじゃ、私達を交な眼でみるでしょうね。私これだから」

彼女は悪戯っぽい眼で私を見つめ、自分のおへその辺りを人差し指で、指さした。

「私は一向に構わないけど、この近くじゃ、あなた顔がさすでしょう。知り合いにみつかっても困るんじゃないですか」

「そうですね。少し離れた方が、いい様ですわね」

聞いたって彼女は応揚であった。泌み出る育ちのよさが、そうしたことを気につけないのであろうか。ガレージ付のモーターがフト頭に泛んだ。堺の外れの臨海工業地帯に面したデラックスなモーターが、近頃漫才の唄子・啓助のCMで宣伝されているのを、思い出すと躊躇なくそのモーターに走らせることを心

に決めた。

「三十分許り走りますが、お腹、大丈夫かしら？」

「心配ないと思いますわ。でもなるべくゆっくりね」

ゆるゆる走り乍ら、会話をつづける。

「少しお聞きしてもいい？」

「ええ、何なりと」

「関西のかたじゃありませんね」

「生れは宝塚市なんです。でも幼稚園の頃、父の都合で東京へまいりましてずっと――」

三年前結婚して、夫の会社の移動で大阪へ来たのです。余り大きくない分譲住宅ですけど夫と二人きりの生活ですの」

「勿論、恋愛結婚――」

「だといいいのですが、お見合。がっかりなされた？」

「おとなしい方らしいですね」

「至極真面目、平凡、ノーマルそのものですわ。真面目な人いいと思ったけど退屈」

「その夫にして、この妻ありですか」

「あらっ、皮肉、それ？」

「とんでもない。ジョークは、私の悪い癖です。気になさったのなら御免なさい。唯ね、増田みゆき夫人にしても、その外、私の知っ

ている奥様方は慨して夫婦プレイの方が多いので、意外だったのですよ。ノーマルな妻を夫が飼育して、夫婦プレイへ誘導していったというケースが多いのですが、御主人が全然我れ関せずなのに、奥さんが単独で、この世界に興味を持たれたことについて、奇異を感じたのです」

「今日は、こうして辻村さんと会っていることだって全然知らない筈ですわ。勿論、夫は午前七時過出勤すると、夕方六時か七時頃まで戻りませんから、その間、何をしよう」と私の自由ですけど」

「ハントに書いていいんですか」

「夫は読みませんもの、奇クを――。ご近所だつてまさか気付かないでしょうし、第一にそんな危惧より、私自身どんな形でハントに登場するのか、それを確かめてみたいのです」

「おやおや、大変な人だ」

「だって、ハントの話次々と余りうまく出来過ぎていくのですもの。だからこの眼で現実を確かめて、その真実性を探求してみたかったのですわ」

「個人のプライバシーを守るために、人物の設定や環境など、或る程度のフィクションはやむを得ないでしょう。でないと、どんな突

飛なピエロが飛び出すか、予測出来ないんです。私のカンですが、貴方御自身、木戸悦子さんと仰有るのは本名ではない筈だ。どう、図星でしょうか？」

彼女は黙ってコクリと頷ずき、その話の先を待っていた。

「当然ですよ。本名を曝け出して妊婦のプレイを提供する程あなたには必然性を感じないからですよ。又、その必要もないんですよ。世の中には奇篤な人もいますね。電話帳を繰って、伏字の×の数字を推測して、片っ端から電話するような人もいます。だからこのことを言っておかないと、木戸性を探して電話する妊婦マニアが、なきにしもあらずですからね。あなたの手記の最後に書かれた「六×二―三四六×番」ですが、局番の六×二局だって、調べる気になったら、六と二の真中に該当する局は、大阪では五局ですからね。番号は下一桁のみが伏字だから、零から九まで十番です。だから局番と電話番号を組合せて推理したら全部で五〇の電話番号が浮かび上る。しかし、その中に木戸という姓はなかった。実の処白状すると、これは私が推測したんです。根に任せて……。だから本名でなくてよかったんですよ。私のような物好

きが、未だ外に、どこかにいるかも知れないんだから。しかし、それだけあなたに、興味を持ったということですよ、これを裏返せばね」

「まあ、こわい。私余程本名で発表しようかと思ったんですけど、矢張り誌上名でよかったですわ。本当いうと、木戸は私の嫁ぐ前の旧姓なんです。万更出鱈目の苗字でもなかったのですよ。悦子は航空会社に勤めていた頃の、一番仲のよかった同僚の名前なんです。私はK枝が本名なんです。でもうかつには発表出来ないんですね。それじゃ辻村さんのハントされた女性の方の名前、あれ皆変えていらっしゃるの？」

「全然変えるのもあるし、当て字を使うものもあるし、本人の意向をきくものもあるし色々です。今は、あなたは木戸悦子さんで、私は辻村隆、それでいいんじゃないですか」

「谷ナオミさんや辰巳典子さんは実名でしょう。それに秋山さんだって」

「本名というより芸名でしょう。彼女達それで名が通っているんだから。でも芸名の方が本名より通る時もありますからね、山田勇じや誰も知らないが、横山ノックなら万人衆知ということもありますからね」

「私の考えでは、別段、悪いことをするわけじゃないしと、軽い気持ちで電話番号を知らせたのですけど……」

「勿論ですとも。でもそのことで、あなたや御主人にあとと迷惑がかかって困るでしょう」

「考えが単純だったのですね」

「正直で、おおらかなんですよ。でも手記に書かれていたように、妊娠なさる前に一度撮って見たかったですよ。そして妊娠となると錦上華を添えるってことになるのですが……」

「中河恵子さんって方がその様でしたわね。でも、私に勇気がなかったのか、どうしても

フンギリが付きませんでした。妊娠というチャンスは、もう、二度とあるかどうか未知数ですから、それで思い切って名乗りでたのです。でも案ずるよりは何とやらで、別段何事もありませんわ」

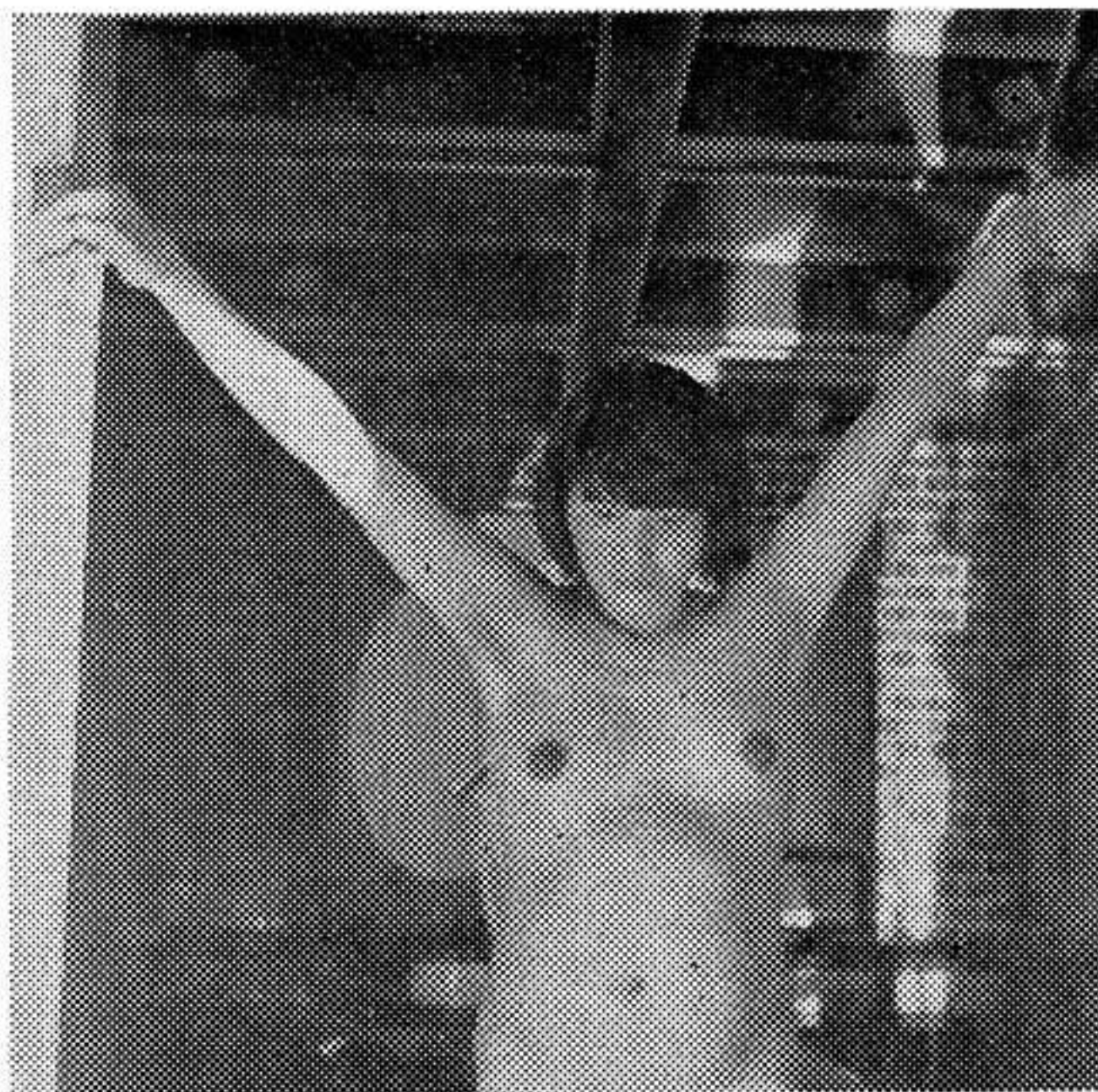
「中河恵子さんは、どういうものかとうとう私に縁がなく一度も撮る機会に恵まれませんでしたよ。彼女気紛れですのですね。しかし、今こうしてあなたを得て、一度にその日頃の思いを果せた様です」

「そのことで私お願いがありますの。うまく撮れた分だけ、記念に私に送って下さらない

かしら。膨張した腹部の、この妊娠腹の姿を女性によっては、或いは醜いと思うかも知れませんが、私はそうじゃないんです。夫との愛の結晶の胎児が、今この中で微かに息づいて、胎動しているんだと思うと、切ない程この妊娠の自身の姿が、いとおしく思うのです。ナルシズムかしら私って……。この姿が女性本来の、妻から母に移行する、いわば母になる以前の、最後の姿だからでもあるのです。もし、これから先、次々と宿ったとしても、もうその時は、今の様な感懐は起らないかも知れませんが、ね、お願いしますわ」

「ええ、きつとお送りしますよ」

「それともう一つ。妊娠という女の一大行事に対して、異常な許りに、情熱を燃やし、それに美を見出していらっしゃる瀬沼四郎さんに、私の赤裸々なフォトを進呈して下さらない？ あの方が、増田みゆきさんに捧げた麗句で「メロンのヴィナス」という言葉、それにあの文章。あの方こそ、私のこの九カ月の妊娠のフォトを、一番喜んで受取って下さる方であると思うからです。私手記でも一寸書きましたが、マニアの方でしたら、妊娠したお腹をみせてあげてもいいと言ったのは、瀬沼四郎さんのような方を対象に、その心の



俣を書いたのです。あの「マニアの方」というのは、言い換えれば、瀬沼四郎さんということなんです。一度是非妊娠中の、出来れば臨月に会いたい方ですわ。あの方になら、新しい生命がこの世に出る瞬間を、ありありと見させてあげたい気持ちで一杯ですわ。判つきりって、私が妊婦のモデルを志願する気になったのも、あの方を念頭に入れての行為であったことが、今になって判つきり思い当

ったのです。正直いって、辻村さんには、瀬沼さんほどの、妊婦に対する情熱と思慕がないと思いますの。どう？ でも私のことを赤裸々に書いていただけるのは、辻村さん以外にはないかも知れませんか。冷徹な、ハントするという眼で……」

私は、ほとぼしるような感情をこめて語る、木戸悦子の妊婦論に声もなかった。妊婦を縛るという異常なプレイにハッスルするだけで、確かに瀬沼氏のような妊婦に対する、異常ともいえる、耽美や讃嘆の、一途な情熱は持ち合せていなかった。十中七八乃至八九のプレイの事実を、事実としてペンにするだけの、客観的なプレイ精神しかないことを木戸悦子はいみじくも喝破したのである。

「瀬沼氏は自分の殻に閉じ籠って、正体を見せない方です。しかし、このハントを、通じてあなたの純粋な気持ちを呼び掛けとして、編集部気付で連絡していただきます。彼のエッセイが誌上にのったら、それが私の誠心だと思って下さい」

(辻村隆註：瀬沼四郎氏に告ぐ！このハント

を読まれたら、編集部気付で私に連絡して下さい。彼女の真心をわかちます)

「是非そうして下さいね」

彼女はフト夢見る眸になった。妊婦フォトをあえて志願した木戸悦子にとって、瀬沼四郎の折ふしに書くエッセイは、彼女に強い反応を示したことは間違いなかった。

「奇クを、あなたの近くの本屋で、御自身で買われているんですってね」

「ええ、いつも二十五、六日頃本屋にゆくとどんな場合でもチャンととって来てありますの。本屋の主人と妙に心易くなっちゃって――」

「何とも思わない？ 買うの」

「そりゃ、最初の二、三回は少し照れましたけど、本屋の主人が気をきかせて、チャンと紙にくるんであって、私が黙っていても、さりげなくそっと渡してくれますわ。本屋の話では、奇クの殆んどが固定客なんですって。いつか笑い乍ら話していたけど、奇クを買う人許り、それとなく連絡をとって本屋さんの肝入りで、どこかへ集って、奇クの会なんかつくったら、面白いんじゃないかっていてました。女は私一人らしいですけど、本屋さんの話では、固定した人は皆、かなりの

立派な紳士ばかりだっと思ってました。本気でそんなこと出来れば嬉しいなと考えたこともありません」

「意見の交換から発展してプレイへと行くと面白いかも知れませんか。若し実現したら私も一席よんで下さい。出掛けてゆきますよ。」

それで御主人、全然奇クを見ないの？」

「鍵のかかるタンスの、和服の下に、一列並べに、ズラリと敷くように並べて、その上に何枚も着物重ねてありますので、その抽出し大分重いですけど、全然気付きませんわ。でもチョットしたスリルですよ」

「でしょう。でも何かの折、それを発見した主人の、驚く顔がみものです。その折はどうなさるつもり」

「いざとなれば開き直って、仕事するより外に能のない、カタブツの夫を教育してやりますわ」

「でも立場が逆でしょう。あなたは縛られる方を好む被虐の方だし。泣きの一手で口説き落して、こんな悪女を存分にしてくれと持ちかけますかね」

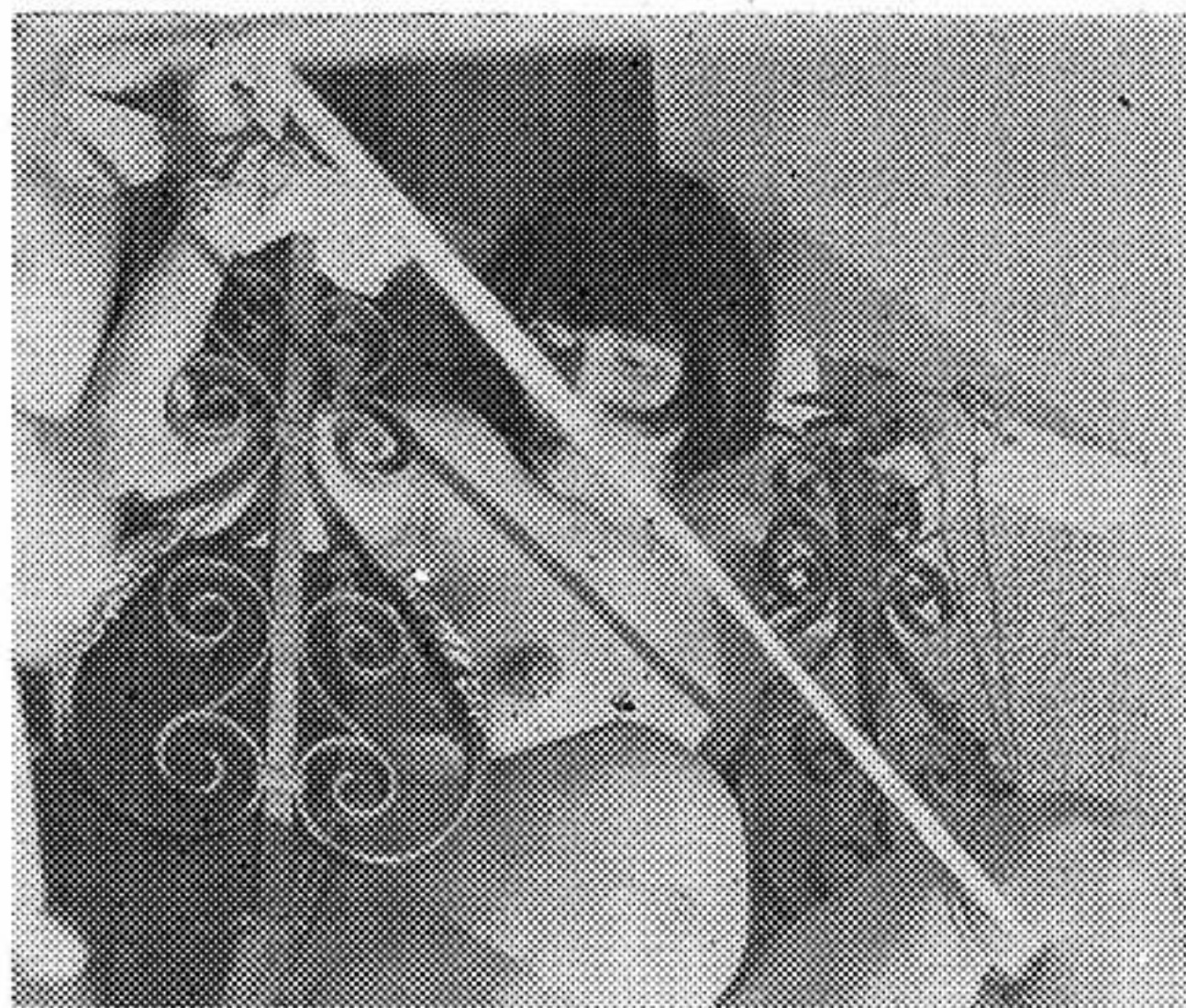
「ダメダメ、気の弱い真面目人間なんです。分りっこありませんわ。近頃はね、早く帰って来て、夕食の支度もするんですよ。体に

触ってはいけないからですって。洗濯もやりかねまじき勢いですわ」

「主人、するとMかしら」

「だから性が合わないんです。妊娠九カ月の私が、これから辻村さんに縛られて、或いは虐められるかも知れないなんてことを知ると卒倒するかも知れませんわ」

「世の亭主族とまるっきり立場が逆だ。しかしそれが、最近の夫の立場の傾向かも知れま



せんね。夫婦プレイの開眼によって、単調な夫婦の生活の堅い殻を破って、急に目覚めた様に仲良くなった人もいますよ。その行為が長い長い夫婦生活の、坂道を辿るうえにおいて、とても生活をエンジョイするようになるということとは確信をもっていえますね」

「でしょう。だから、私“失神”なんてこと一度も感じたことはありませんわ。昨日の午後のテレビの寄席番組の冒頭で川上宗薫という作家が、性の失神について堂々と喋っています。どうかと思いますけど」

「ハレンチ、サイケ、失神、ハプニングなどショックな流行語の氾濫で、もう私などついて行けない。糖尿をやって以来さっぱりで、眼は急速に霞み出し、齒齦はガタガタになって減ってくるし、精力頓に減退をきたすし……」

「あらッ、そうは見えませんか。私お会いするまでの想像では、もっと、よぼよぼかと思っていましたのよ。あら、失礼——でもお年よりは、若く見えますわ。大正十年なんですよ。ハントでいつか、そう書いてありましたけど」

「よく覚えていますね。大正二桁となると、もうダメですね」

「老化現象はハメマラっていうんですって。じゃあ、そろそろ辻村さん、老化現象現われているんですわ」

えらい言葉を、ずけずけと仰有る。齒切れがよすぎて、こちらはタジタジである。成程言葉通り、確かに、齒から目にきて、そして一件がいうことをきかない。この人、こんな知識をどこで得たというのだろう。

「年をきいては失礼だけど」

「エトのウマといったら分るでしょう」

「それで初産？」

「一年前に私の不注意から六カ月で流産しちゃったんです。だから今度が初産のようなものですわ」

「あなたのことばかしお聞きして悪いけど、奇クを知った動機は、どんなことから？」

「東京で短大を卒業して、すぐエヤーホステスになったんです。国内航路ですけど、板付について、機内を清掃していたら、シートの奥に丸めて突込んであったのが、そもその見始めなんです。乙女の胸をすぐ轟かせたものです。忘れもしませんわ。その号に、辻村さんのハントで、たしか志村善子とかいう神戸の人の『しなやかな牝獣』とかいうのがのっていましたわ」

「よく覚えていますね」

「最初のショック的な読物は忘れませんわ」

「それで、今は毎月買うようになったって訳ですね。でも御主人がそんな調子だったら、今まで緊縛されたことや、プレイの体験なんて全然なかったわけですね」

「ええ、先日、編集部の方二人と撮った時が始めてなんです」

「どうでした、その時の気持——」

「思っていたより紳士的で、形式的なのに少しあっけなかったくらいですわ。公刊誌だから、あの程度だけど、実際はもっと凄いのかと、かなり覚悟していったのですが、私のおなかをいたわってくれていますのか、物足りなかったというのが本心です」

「きっとそうでしょう。編集部のベテラン揃いだが、皆、フェミニストですからね。しかし私ならひょっとして、感情の激しい波にのって、或いは思いきりやりたくなるかも知れませんよ」

「どうぞ、その覚悟ですもの」

悦子夫人は恬淡と応えた。

「若しそれで、万一流産したといっても、その場合、責任をもちませんよ」

「いいですわ、又妊娠するよう努力しますも

の。精々夫を督励してね。だから遠慮なさらないで……。大抵のことなら耐えられると思うんです。今までに経験は全然ありませんけれど」

こんなに協力的な妊婦に対して、私は出来るものなら、伊藤晴雨が試みたような、妊婦の逆吊りをやりたかった。しかし最近急激に力の衰えた私一人では、この六十キロ近い女性をひとりで高々と吊り下げるだけの自信は到底なかったし、モーターという制約が、それを許さなかったであろう。しかし経験零に近い女性にしては、稀有の存在であった。「唯、辻村さんにお断わりしておかねばいけないのは、私、最近特に子宮が大きくなったせいか、おしっこが頻繁です。縛られてる最中に、若し洩らすような粗相があっても御免なさいね」

「喜こんで始末しますよ。フェミニスト振りを発揮しましてね。或いは珍味を頂くかも知れない」

「まあ——」

彼女は面映ゆげな羞恥を瞬間泛べたが、忽ちにして、それは媚を含んだ、艶冶な笑みに変貌した。いつしか体を傾けて、運転席の背後のシートに手をかけ、その指先が、背のあ

たりまでのびていた。背の気配が、私の好き心をそそるようにかきたてているかのようであった。

彼女の奇クサロンの手記の一部に（主人は身体も余り丈夫でなく、いつも自分の気持を満足させられたことはありません）という断片が、フト心をよぎった。

二年間という歲月、夫に秘密で、毎月秘かに奇クを読み耽った結果、あきたらぬ真面目人間の夫に、いつしか欲求不満の滓がヌメヌメと溜りに溜って、それが妊娠九カ月という異常生理現象とともに、今正に、一気に吐露

し、さらけ出さんとしているかのようであった。

夜毎悶々と夢見る被縛の妄想が、どんな形となつて、真昼の独りぼっちの彼女の身に滲ね返っていたのだろうか。その鬱積の成果を私は擲もうとしているのだ。

目指すH御苑は眼前にあった。到着の時まで、私達は殆んど喋りつづけて来た。省略のお喋りの中に、彼女の私への問いが数多く交っていた。プライバシーのゆるす限り、彼女の質問に応えて、私の素姓も隠さずに彼女に話して来た。お互いに相手を信じ合えて

こそ、プレイは赤裸々な佳境へと没入出来るものであった。数十分前までは何一つ知らぬ私という人間を、木戸悦子は短い時間の間に懸命に突きとめようと、果敢ない努力を試みていた。まるでプレイの限界の許容点を極めようとするかのよう……。

經由しつつある堺市が私の出生地であることや、それに繋がる若き日の思い出の断片、職業や生活私達夫婦の赤裸々なるプレイの在り方など、私はむしろ露悪趣味を

こめて、包みかくさず、多少の誇張すら交えて喋った。夫婦プレイの告白は、いたく彼女を刺激したらしい。山本リンダに似た、容貌のこころもち奥眼のつぶらな瞳が、驚嘆と耽美と昂奮に、キラキラ妖しく輝き始め、大きく唾をのみ込む音と共に、微かにのどが鳴り、やがて始まろうとする、プレイの前哨を告げるかのよう、頬は徐々に紅潮していった。今や寸秒も早く、木戸悦子は全裸を剥き出しにして、偉大なる腹を突出して縛られ、のたうち、喘ぎ、あわよくば失神したがって真白き静脈の浮く肌を、熱く疼かせているのを、長年のカンから、私は早くも察知した。車中の淫らともとれる会話によって隔たりは除かれ、機は百パーセント熟していた。

車を空いたガレージに乗り入れると、事務的な若い女が現われて、私の車のバックナンバーに、番号の書いた大きなプレートを立てかけた。それが只今使用中を示すものであり或いは人に知られて困るナンバーを隠蔽するモーターのささやかなサービスであったのだろう。

車から降りる木戸悦子の方に視線を送った女事務員は、彼女の腹部の膨らみに、オヤツという不審の表情をよぎらせた。モーターと



はいえアベック専門のここを訪れる男女の群の中に、臨月に近い腹を抱えた女性のあらわれたことは、確かに奇異だったに違いない。

×

×

×

階下がバス、トイレ、洗面所。瀟洒な階

しょうしや

段をぐるりと昇った二階が、広い洋間の応接風にしつらえられ、紗のカーテンを開けば、四面ステインドガラス風の鏡の寝室がゆつたりとデラックスに備わっていた。ステレオ、カラーテレビと至れり尽せりである。

応接間から寝室へつながる、カーテン仕切りに、二本のギリシャ彫刻風の柱が門となっていて立っている。恰好の緊縛柱であった。電動式のレリーズによる自動捲上カメラと、一眼レフの二台を準備する。短い時間で凡ゆるチャンスをもにしようとする貪慾さであった。ホテル備付の浴衣を羽織るようにして、木戸悦子はやつこさという体の重さで階段を昇って来た。辛うじて重なる浴衣の前を押えるようにして、腰紐もしていない。真白い太腿が蔽いようもなくこぼれている。覚悟の前の準備か、はだけの腰のちらつきの隙間にパンティはなかった。

三脚に固定した自動捲上カメラに長尺レリーズをセットし、今一台の一眼レフにフィル

ムを装填する私の慌ただしい姿を、彼女は立ちほだかったまま、じっと眺めていた。

「リラックスに行きましょう。まずあの柱からどうでしょう」

もう一つの、しなやかな黒革袋から、ぞろぞろ縄をとり出しながら、そろそろプレイへと誘導して行く。

「脱ぐのでしょうね」と彼女

「ええ、最初から全裸で行きましょう。脱いで行く過程も今更珍らしくありませんし」

潔よく木戸悦子は浴衣をさっと脱いだ。惜しげもなく裸身が、私の眼前にさらけ出された。瀬沼四郎氏の名句「メロンのヴィナス」という言葉が、その俚あてはまる壮大なる華麗さであった。増田みゆきに比較すれば、彼女の膨らみは正常の九カ月の大きさを保持していた。しかしながら、蛙腹というのか、陥

没している筈の臍窩の凹みは失なわれ、つるりと平面に近いなめらかさであった。両手でかかえるようにした膨大な腹を大らかに突出して、彼女は物怖じせず、むしろこれみよがしに私の前に堂々と立ちほだかっていた。

理想的な緊縛柱への立縛りのポーズが、先ず私の最初の構成であった。妊婦という特殊な環境に対するいたわりの気持を充分に持つ

ているくせに、その心とは反比例する、まるで逆な荒々しいゆさぶりの想念が、ヒタヒタと私の脳裡を支配していった。

彼女の細い、静脈の蒼く浮き上った手をとって、緊縛柱へと誘導する。

「まあ、十分に手加減しながらやりますよ。最初立縛りをやりますから、両手を柱のうしろへ廻してくださいますか」

心とはウラハラに、いたわりの言葉を投げかけ乍ら、私は縄を捌き始める。

「いいんですよ遠慮なさらなくても……。辻村さんの考えておられる通りやっていただいで結構ですわ」

笑みをこぼして、彼女は協力的な呼び掛けをしてくれた。実にイカす夫人である。これが緊縛未知の女性であるとは、どうしても考えられなかった。

その言葉に甘えて、私の縄はかなり強烈に彼女の後手にまとわりついて行く。柱の背後につらなる飾り付の金枠に通して、両手をひきしぼると、二の腕をしめ、胸の隆起へ8の字に縄をかけ、腹部の突出を避けて、臍下へと縄を廻して強く縛り上げて行く。既に黒ずんだ乳暈は、大きくポクリと飛出して、ぐいと力をこめて押えつけければ、米のとぎ汁のよ

うな乳液がほとばしり出るのではないかとさえ思われた。木戸悦子は縛られて行くのが、さも楽しくてたまらぬかのように、微笑みを顔面から、たやさなかった。

「苦しい？」

「ウウン、ちっとも……」

弾んだ応えがはね返ってくる。そのポーズに私のカメラは二カ所から閃光を走らせる。一糸纏わぬ全裸に、愛用のだんだら縄のみが柔肌の要所をしめ上げていた。忽ち異った方向から、数ポーズがカメラに納まっていた。ハント用として下半身カットしたのも何枚か交える。そのポーズで左足首を縛ると、背後に左脚を吊り上げる。閃光がきらめく。更にホテルの腰紐で、両眼を蔽い、猿轡をかませる。山本章お好みの構図である。もう私の脳裡には、彼女が妊娠九カ月の身重であるというハンディキャップを全然自覚していなかった。いつしかプレイの雰囲気の中に溺れ込んでいったのである。思いの尽にとり終って、縄を解いた時、彼女はハアーツと大きく肩で息をした。微かに腹部が蠢めいた感じを私は察知した。

「どう？ きつかった」

「ウウン、別に。平気よ」

「じゃあ、今度は両手を拡げて、爪先立ちになってもらおう」

いわれた通り、彼女は高々と両手を差し上げる。先ず右の手を柱一杯に引きしぼって、柱の上部にかけて、一本の縄を左の柱にからませて、左の手を高く吊り上げる。伸長した女体を、かろうじて爪先きで均衡を保たせ乍ら、木戸悦子はかすかによろめいた。伸びきった腹部は少し小さく見える。鞭打ちには絶好のポーズであった。ムラムラと嗜虐の血がたぎり始める。かたい唾をのみ込んで、かす

れたような声で私はきく。

「軽く鞭打ちされてみたいと思わない？」

えっと顔を挙げて、彼女はまじまじと私を見た。表情から、ずっと微笑みが消える。

「されたことないから分りませんわ。痛いんでしょう」

「痛くないといえば嘘になるけど、鞭打ちだってピンからキリまでありますからね。軽い程度なら、快楽を喚起するかも知れない」

「辻村さんがなさりたいのなら、試して下さいもいいですわ」



木戸悦子の瞳は刹那めまぐるしく光った。被虐の試練を受けてみようという、潜在的な願望がチラリと顔を覗かせた感じである。私はズボンを脱いでバンドを引抜いた。連日の梅雨で、洗濯ものが乾かず、その日私は、よりによって間に合せの、数年前の古いダブダブのズボン下をはいていたのである。脱いだズボンの下の、恰好の悪いことおびただしい。それにチラリと眼をやって、彼女はクスッと笑った。あわててそれも脱いでショートパンツ一枚になる。

「妊婦用のステテコみたいね。私でも入りそうだわ」

「やせたんだね。数年前ならこれでよかったんだけど、糖尿以来ダブダブに、なっちゃった。連日の雨で乾かないものだから、タンスの底から、女房引っ張り出したんだ」

言わずもがなの言い訳をしなければならぬ。若い娘なら、下着まで気を配る私なのだが、つい妊婦と思つての浅慮が、不覚の恥をさらした思いであつた。気持をとり直して彼女の脇の下をくぐりぬけ、背後に廻ると、その豊かな真白い臀部に、革バンドの一閃を振う。軽く手加減したが、パチリと小気味よい音がはじき返って、爪先がゆらめいた。声はなかった。

「痛かった？」

「それほどでもなかったですわ」

「手加減したからだよ」

「じゃあ、もう少し強くして……」

呻き声すら立てず、彼女は更に強烈さを希んだ。じわじわと被虐の悦楽が、体内に充満し始めたのであろうか。強くしてと希んだ声に甘い響きがあつた。短かめに握ったバンドを少し長くすると、私はかなり振りかぶって颯々と一閃をくれた。

「あっ！」

微かに声が洩れた。

「どうだい？」

「いいの、構わない……」

二度、三度、そして幾度か――。空気を振わせるように、臀部にバンドの激しくぶつかる音が、爽やかに鳴り響いた。微かな身もあらぬ歎歎が洩れて、豊かな骨盤が悶えて空間にのけぞっていた。つぶらな苦悶の瞳の底に私は、その時はっきりと悦楽を見た。恐らく彼女にとっては始めてに違いない鞭打ちの疼痛が、ジーンと被虐の琴線をかきならして、予期せぬ悦楽の歓喜となつて五体に激ね返つたのではなからうか。私はやっと鞭打つ手を休める。彼女はぐったりとのびて、腹部ははげしくたゆたい、浪打って、息づかいが荒かつた。

「痛かった？」

又しても同じことを口走る私に、微かに

「痛いわ、でも……」

でも……何をいいたいのだろう。よかったという卑俗な言葉で言い現わし得ない充実感を、彼女は覚えたというのであろうか。

私の心は更に嗜虐へとかり立てられていった。爪先立ちの両太腿へそれぞれ縄を巻きつ

けると、片足ずつ、思いきり左右に、開かせて柱に結んだ。ぐっと両手に体重がかかり、一杯に開いた爪先は、辛うじて床に触れていた。左右の緊縛柱に大の字に両手両脚を引きしぼられて、木戸悦子は、ハアハアと大きく喘いでいた。妊婦という限界をとくに超越した強烈な縛りであつた。膨満の腹も小さく見えた。内臓が大きく拡大されている結果、円形は縮小されたかに見えた。

容赦ない私の鞭は、その体位に向つて再び鞭の雨を浴びせ始めた。きつく、より強く、激しさを増して……数条の桃色の鞭痕が、くつきりと白い臀部を染め上げていた。

苦悶の呻きを洩らすことが、はしたない行為であるかのように、最初は努めて押し殺していた声も、いつとはなしに大きくなり、はては耐えようもなく、喘ぎ呻きつづける彼女であつた。その呻きの中に、止めてくれと叫ばぬところに、悦虐の実体がありありと露呈していたのである。のけぞった顔に、じっとりと汗が浮かび、つぶらな瞳は堅く閉じられていた。腹部の盛り上りのみが妙に生々しく別個の生きもののように、うねり、蠢めき生きづいていくかのようであつた。

私はハッとして革バンドを投げ出した。私

は、まざまざとみた。精一杯に開股したその中心より、一条の細い水液のしたたりが、ヒタヒタと床を濡らしだしたのを――。

洩らしたことすら意識になく、彼女はのけぞり、大きく呻きつけ、悦楽の淵に深々と身を沈めていた。

若し、この結果早産でもしたら――。そんな予期せぬ想いが、私の心を萎縮させた。

あわてて私は手足の縄をもどかしく解きほぐす。木戸悦子は自由になって、始めて、濡れそぼつ床に気付いた。

「まあ、どうしましょう」

困惑と羞恥の表情から、忽ち頬に紅が走っ

た。

「いいんです、私が無理なポーズをとらせ過ぎたからなんです」

私は、あわてて黒革袋から、猿轡用に持参した日本手拭をとり出して、床に跪いた。

「私がやりますわ。ねえ、辻村さんお願い、そんなことなさないで……」

懸命に奪いとりとする、日本手拭に伸びる彼女の手を払いのけて、私は手拭に床の液体をしみこませていった。

木戸悦子は、そのはしたなさを恥じいるかのように、困惑しきって、私の傍らで立ちつくしていた。

湿って濡れそぼれて、重くなつた日本手拭から、フワッとハルン特有の匂いが、鼻孔の粘膜をくすぐってよぎった。

「お腹の方、どうもない？」

「ええ、その方は何ともないようです。でもよく洩らして困るんです。特に先月辺りから段々とひんぱんになっちゃって……妊娠すると誰でもそうなのではないか」

言訳けめいてはにかむ彼女を

私は可愛いと思った。妊娠九カ月の、大きく拡大した子宮のために、膀胱は極度に圧迫されているのだ。洩らして、当然の現象である。その洩れる現場を直視出来ただけでも稀有のことであった。その原因が、両手肢を思い切り開かせ鞭打という、始めての体験の結果だから、その責は私にあるのだ。後始末して当然ではないか。黙々として拭い終ると、

私はしずくを落さぬよう注意して階段を降りていった。洋式便所の蓋をあけ、強く絞るとコップ半分程の水滴がしぼり落ちていった。気配で振向くと背後に裸の俤の彼女が立っていた。

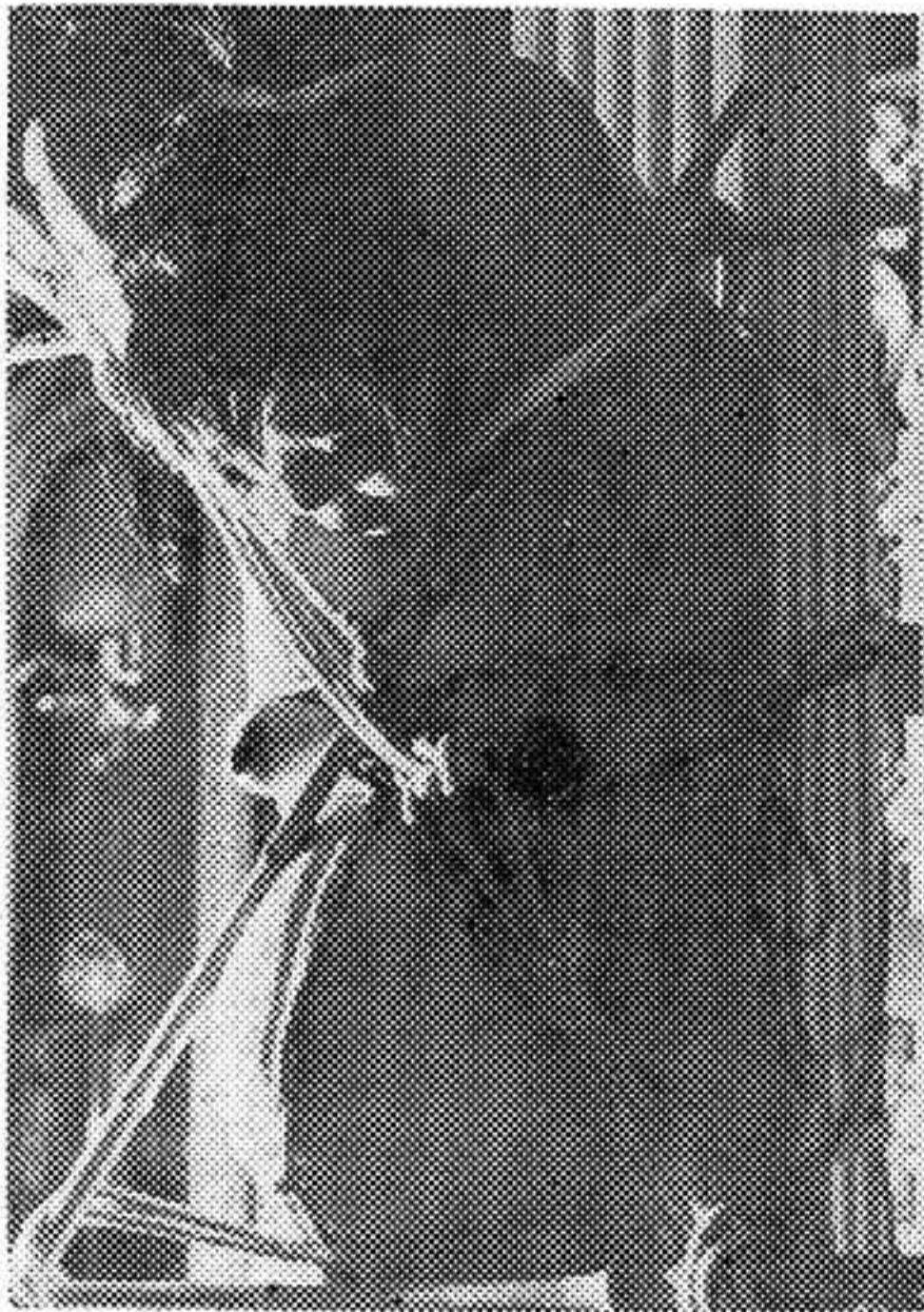
「どうしたの？」

「ええ、トイレ……」

「一風呂さっと浴びよう。よかったら肩流しであげる」

「じゃあ、そうしますわ」

いとも素直に、彼女は傍らのバスにその俤消えた。洗面所の横手の乱れ簾に、彼女の身につけた衣類の一切がこんもりとふくらんであった。一番上部の腹帯の隙間から、白いパンティがのぞけている。手にとりたい欲望にかられて、バスの様子を窺い、つと手を伸ばすと、腹帯の間から摘み出す。清潔な洗濯し



たてのパンティであったが、その個所だけしっとりとうるおいを帯び、洗っても落ちぬ薄褐色のしみが、その部分に染め上げたようにしみついていて、私はそっと、それを鼻孔に当てがってみた。微かに漂う異臭——。それはなつかしいふるさとの匂いにも似ていた。黙って出来得るものなら持ち帰りたいような想いで、深々と私は嗅いでいた。

元に戻すと、シャツとパンティ一枚くるりと脱いでバスの戸を開く。

「どうしていらしたの？」

「いや一寸ね」

秘事を知られたのかとドキリとし、私はさりげなく湯をかぶる。ポリ製の湯槽は、二人入るには少し狭すぎた。狭いのではなく、こちらが大の男と、現在大の女になりつつある二人であるからであろうか。改めて体を洗う程のこともなく、彼女は腰掛に大きいヒップをのせて、さりげなく私の方を見守っていた。さっと湯を散らせて湯槽より出ると、私は無言の尽、彼女の背に廻った。

「背を洗っていただくなんて、勿体ないですよ。本当に構いませんのよ」

「あなた、内風呂？」

「今の処二人きりでしよう。だから外湯なん

です。いずれ子供が出来たら、バスオールのようなものを、行水代りに買うつもりなんです」

「じゃあ、旦那に背を流してもらったことないでしょう」

「ええ、まあ」

「恰度いい、遠慮しなくてもいいんだ」

白くぬめついた背中に泡を立てる。光栄ある辻村三助は、丹念に、かなりの力をこめて背から丸味の帯びた腰の辺りまで、せっせと洗っていった。

「いやね、何だか又したくなっちゃった」

「何が？」

「ウフン、おシッコよ」

「ここでやりなさいよ。流せばいいんだから——」

「だって、幾ら何でも……」

「何なら口に受けましょうか」

「いやね、芳野眉美さんみたいなことを仰有る。そんなケがあるの？」

「少しはね。見るだけでもいい」

「気持だけで、出ないんですよ余り……」

先刻の後始末の一件もあって、木戸悦子はもう羞恥をかなぐり捨てていた。私の前に立ちあがると、心持ち足を広げ、気まり悪げ

に顔をそむけて、でっかいお腹を突き出すようにした。サラサラと、美しい水晶のような液体が、私の眼前に落下して来た。

× × ×

緊縛柱が余りにも理想的で、それにこだわりの過ぎるのか、又しても立ち縛りの猿轡の、極めて露出の極端なポーズを十数枚とり終った。違ったもののつもりでも、所詮は最初に撮ったフォトと大同小異であった。

堂々たる妊婦腹を誇張した全裸の妊婦を、余すところなく発表しようとするならば、どの様な緊縛があるだろうか。今迄撮ったフォトは秘蔵版のプレイに走りすぎて、ハントとして発表出来ないものの方が多かった。

私はそのために、全裸掲載の合理的な緊縛を考えた。

胸縄から、乳房を八文字にかけ、臍の辺りで十文字に縛り、後手の両手に股縄を引きしめて、その見えて困るところへ犇々と隙間もなく縄をぐるぐる巻きに巻きつけていった。一人で縛るのだから、かなりの時間が費やされる。前後左右から撮り終る。一応オーソドックスな緊縛であるが、SMのプレイとしての興味は薄かった。再び解いて、次の構成を思案する私に、彼女は提案した。

「階段の辺り、面白いんじゃないですか？」
「あの階段の上から、下へ吊り下げられたらね。でもそれは到底不可能だよ。吊り下げることが出来ても、解きようがないからね。若し下へどさりと落ちたら、胎児の一卷の終りだから危険だよ」

「あの、二階の手摺から両脚を投げ出して、両手を手摺に縛りつけたら安定しますわ。お腹が邪魔して落っこちませんわ」

「面白そうだ、やってみますか。でもあなたも随分協力的ですね。驚きましたよ」

事実、彼女の積極的な態度に私は一驚していた。たださえきつい緊縛を、妊婦の身であり乍ら、しかも変った緊縛法を提案するあたり、正しく彼女のM性は本物であるかも知れない。

「本当に妊娠前に、思いきりやってみたかったと思いますよ」

私は、つくづく惜しい気持ちでそういった。

「私も——どうして勇気がなかったのでしょうか。でも今後、子持ちになれば、もうその機会は恐らくないでしょうにね」

「お腹が大きくなかったら、こんないい場所なんだ、或いは二階から一階へ、吊り下げたかも知れませんよ」

喋り乍ら、私は彼女の両手を二階の階段手摺りに縛りつけ、徐々に鉄棒の隙間から両脚を垂れさせていた。腰を降している階段の床の幅は僅かではあった。若し何かの拍子に、臀が床から外れると、背をのけぞらせて階段の壁間に宙ぶらりんになる、危険な緊縛であった。L型に屈折した階段を降り切り、一階のフロアに立つと、垂直に見える体に、腹部のみが、ポカリと飛び出していた。駆け上り駆け下り、私はこの異様なポーズを数々カメラに納めた。ついで両脚をじわじわ開かせて階段の枠に縛りつける。仰ぎみる階下から、彼女が若しその気になれば、サンサンと女液を顔面にまともに浴び得ることが出来るのであった。開股図を真下より眺めることは始めてであった。カメラを覗いた時は、しかしその視野にあるのは異様ともいえるくらいに××××××××のみが拡大されていた。

長い時間であった。漸くにして私のこのプレイは充実感を盛り上げて終った。解き終った時、彼女は消え入りそうな声で、私の耳許で囁やいた。熱い息吹きを吹きかけて、「ねえ、もう一度叩いて下さらない？」

「えッ、いいの？」

鋭い刺激を求めているのであったのか。無言の俤うなじを垂れて小さくうなずいていた。疲労を覚えて、鎮まりかけていた私の血はクツクツと音を立てて再び沸き出した。

「よし、やりましょう。いいとも」

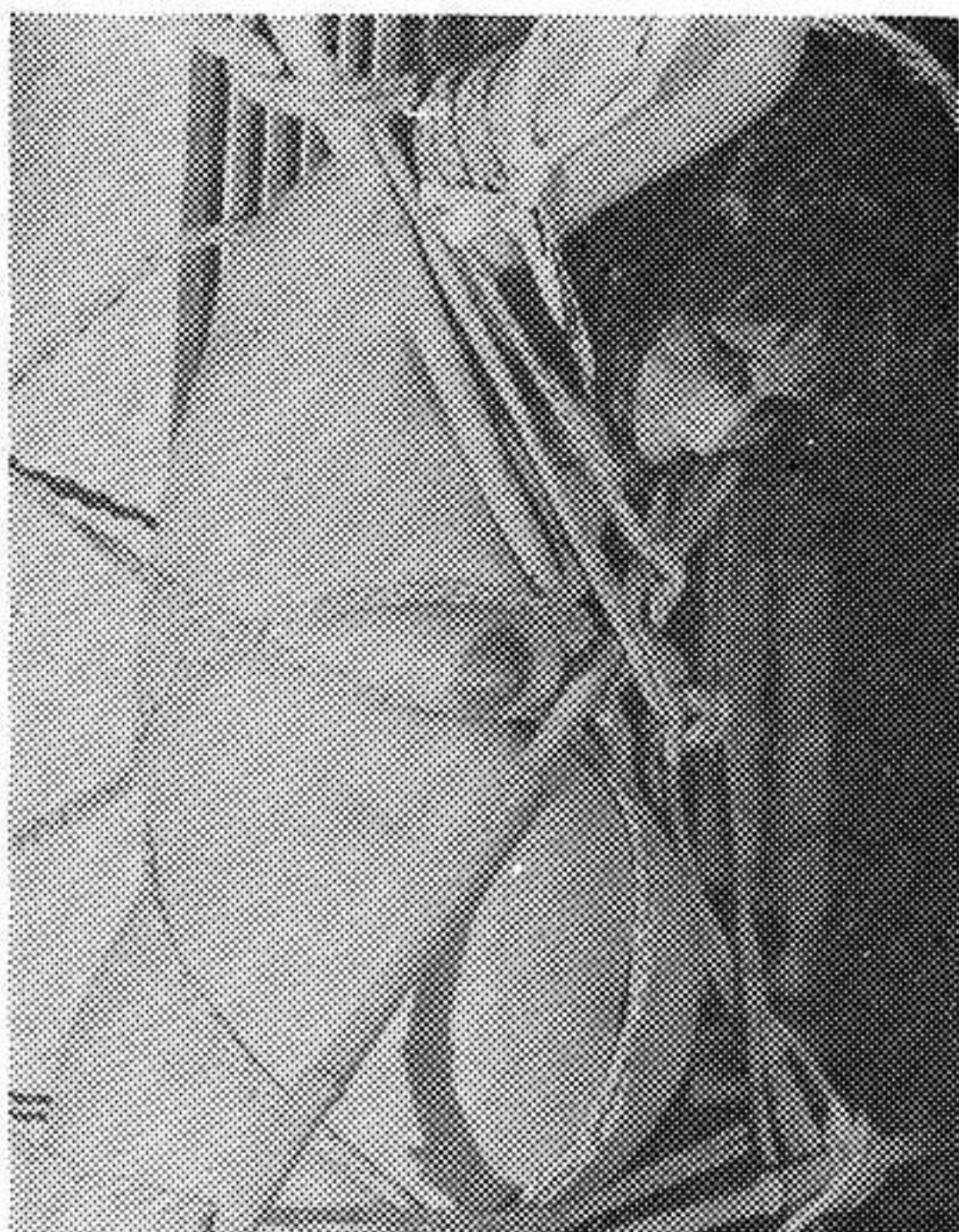
急いで洋間に引返すと、鞭打ちにもっともいいポーズをとらせることにした。

両手を揃えて縛ると、柱に高々と吊り上げる。床についた両足の一方の足首に縄を巻くと、反対側の柱にぐいと股を開かせて縛りつけ、一本足にして、前に廻った。猿轡をしたかったが、それによって、音響効果をなくすのも惜しかった。この部屋一杯に轟きわたる阿鼻叫喚の絶叫をききたかったので、口は閉ざさなかった。声が更に私の嗜虐心をかき立てるからである。

「今度は御希望だから一寸手ごわいよ。いいね、泣いてももらないよ」

木戸悦子は、半開きの乾いた唇をなめた。それは激情にむせぶ前哨の、のどの渇きでもあったのであろうか。より以上のものを今日の日に求めて、彼女の引き裂かれた女体は、被虐を求めて、疼きに疼いていたに違いなかった。

発止と革バンドが、彼女の鋭敏な個所を激



しく撃った。羞恥も虚飾もかなぐり捨てて、彼女の絶叫は部屋に轟いた。

「もっとか——」

声も荒々しく上ずって、私の革鞭は股のつけ根や腰に、小気味よく、鳴りわたっていった。流石におもんばかり、腹のふくらみは避けたが、その膨らみ以外、ムチは胸の隆起にも淡い条痕をつけた。

引き裂かれた女体はうねり、ベンベンたる腹はくねって激しく波打ち、歎歎は絶え間なく洩れて、赤裸々な狂態がのたうっていた。

背後に廻ると、その双丘にバンドは幾度か

鳴りひびく、その都度、空しい一本脚のフラダンスが、真剣に演じられていた。バンドを捨てて、私は思わず胸に噛みついてギリギリと歯型を押しつける。裂くような悲鳴と共に、ガクリと彼女のこうべが垂れ、それが悦虐の、一巻の終着を示していた。

被虐に盲いた一個の巨大な肉塊は、片脚を高々とあげた後、脂汗を浮かべて、肩で大きく息づいていた。

はかききれない黒い慾情が、私の体内でくすぶり、エクスタシーに酔う、蛙腹を更に強烈極める残酷なSの極致の緊縛へと引き立てていった。

物憂げにぐったりとする木戸悦子をだきかかえるようにして、容赦なく緊縛柱へ立たせる。

縛り方として後手よりもつらい後頭部縛りを選んだ。頭のうしろで両手をしっかりと縛り合わせると、柱に括りつけ縄のすべてを総動員させて、胸から足首まで、犇々と柱に縛りつけていった。木戸悦子は最早魂を奪われた人

形の如く、爪先立ちの苦しいポーズで、私のなすが俤になり果てていた。両手を縛って余った縄は、彼女の断髪の黒髪を引きしぼって髪の毛までも縛っていた。ビンが引きつって彼女の形相は無惨に苦悶している。腹から直線に下る股縄は深々と喰い込み、緊縛のすべてが適用されていた。今や彼女は、寸分の身動きすら出来ず、熱い吐息と共に、大きく呻くのみであった。私の足許に転がる、長尺リリース球が、刻々と変化する彼女の苦悶の様相を、その刹那刹那、刻明に撮しとっていた。足のかかとで球を踏みつける度に、パツと真白き閃光が走り、電動式の捲上げは、ジジッと微かな音を立てて便利に回転した。

堂々と突出した蛙腹は大きく浪打ち、黒ブドーの粒は揺れていた。当初の山本リンダに似た微笑みの表情はとくに消えて、そこには被虐に悦楽する、成熟の女体が、セックスの成果をまざまざと見せつけて、微かな身悶えを、つづけているのであった。その表情には判っきりと疲労の色が濃かった。いつしか陰翳が、両眼の周囲にヒタヒタと迫り、黒ずんだ眼隈が悦虐のパロメーターとなって現われていた。プレイを始めて、既に三時間を経過し、私の体力としても、恐らくこの辺りが

限界の様に思われた。私はこの犇々とした緊縛をうっとりとした眼で暫しみつめていた。つと近寄ると、後に廻してある余分の縄で、肘の折れ曲りもぐつと縛り合せてしまった。尋常でない妊娠九カ月の女体に、この緊縛は成し得る最高のものであったかも知れなかった。しかし私は未だ満足しなかった。縄は二本残っている。若し可能ならばと、僥倖を信じて持参した竹の棒が五本、包み紙も解かれず、その出番を待っているのだ。又ぞろ、辻村式のごてごてした縛りだと批判されるかもしれないが、私としては、やるどころまでトコトンやってみたかった。彼女の眼前でノロノロとその竹包を解き始める。髪の毛を結えであるのでうつむきもならず、視線のみ彼女は私の手許に投げていた。

かぬ行為であったに違いない。竹棒の一本を掴んで、のっそりと立上ると彼女の偉大なるポンポンを竹棒でポンポンと軽く叩いてみた。臍の消えた熟れた西瓜のようなポンポンは、叩けばポンポンと音が潑ねかえった。竹棒の端で、黒ブドーの如きおっぱいの先を、ぎゅっと押しつぶし、ぐりぐりとこね廻すと、木戸悦子は声にならぬ悲鳴をあげて悶えた。悶えても身動きならぬ、強烈そのものの柱縛りである。

ガラリと竹棒を投げ捨てて、その房々とした乳房を驚掴みにし、口を近づけて、くろぐろとした、大きな黒ブドーの粒に歯を立てると、グエーッと押し殺したような悲鳴が大きく部屋にこだました。所詮、噛むものではなく、吸うものであって、この行為が快樂にながらぬものである事を、私は充分に承知していた。その癖、何か突発的に噛みついてみたい慾望にかられる慾情の発露であった。

後頭部で縛った両手の腕の隙間に一本の竹棒を通し、ついで、胸から腹にかけて、X字形に二本組み合わせ、臍下で一本横にわたして部分部分を縛り合して締めると、竹棒はジワジワと柔肌に喰い込んでいった。二本の縄をこれに使い果しもう私の手許に余分はない

残る一本の竹棒を、突っかい棒のように床から××××××××××××××××と直立させる。もうこれ以上、どう縛りようもない、極致の竹を使つての、責図絵が完成したのである。幽界の伊藤晴雨に、一眼みせたい妊婦の残酷責めである。流石に声も立て得ず、木戸悦子は大きく喘ぐ許りであった。若し余分の縄ありとすれば、更に顔面をぐるぐる巻きにして、息も絶え絶えにしたい、私の激情の奔ばしりであった。再び彼女の瞳は妖しくうるんで来た。既に幾度となく、被虐の極致のエクスタシーを覚えて、尚かつ、妊婦は濡れようとしていた。微かに口許が動いて、何か呟やいているようであった。

「何？ どうしたの……」

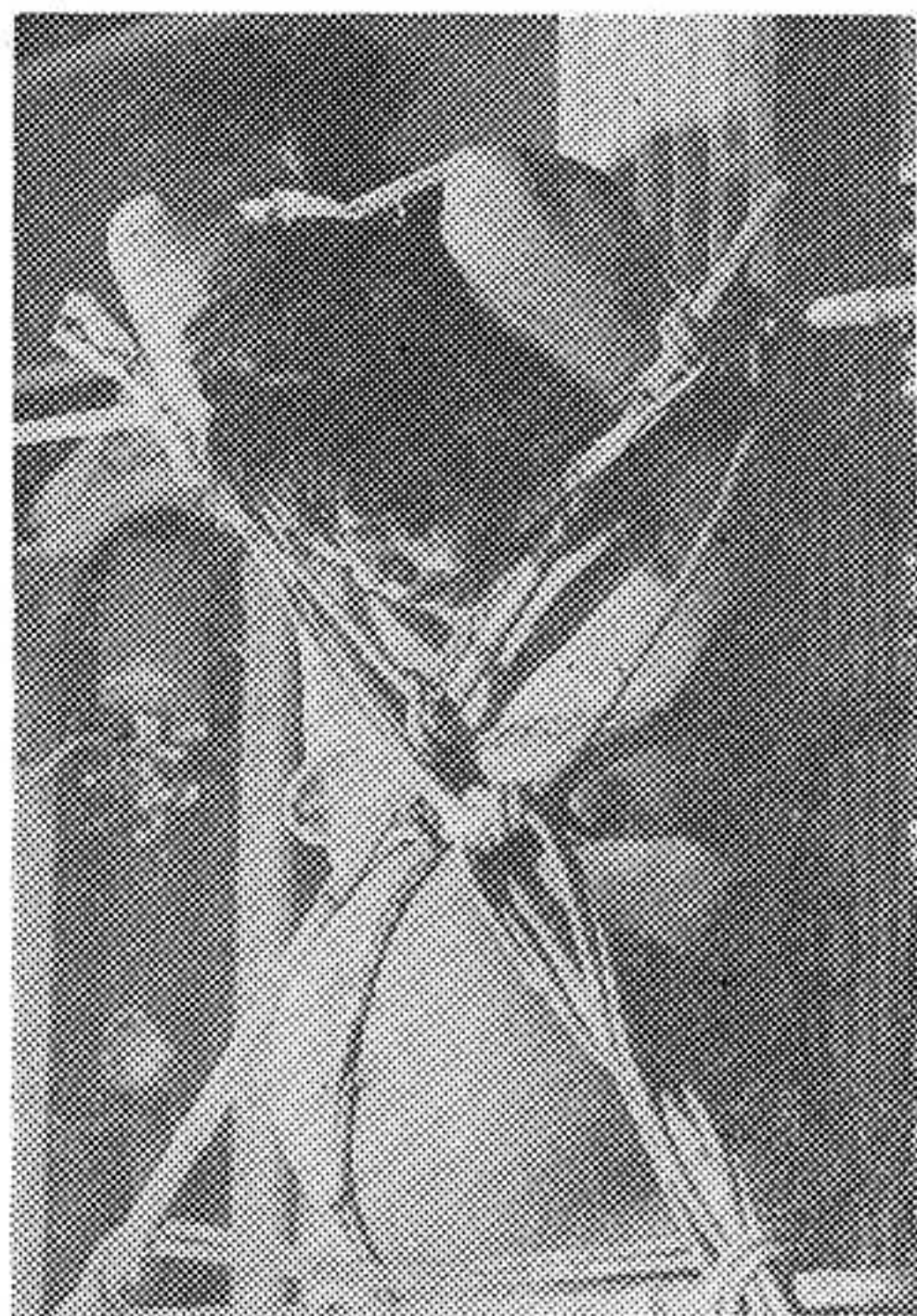
「ム・チ・ウ・チして……もっと……」

始めて知った鞭打ちの甘美な疼く快痛に、木戸悦子は耽溺しきっていた。夫に隠れて秘かに奇クを買い、被虐を求めての悶々の情は今爆発したように、飽くことなく、それを求めていたのだ。その被虐を強く求める芽は、すでに過去何年か前より徐々に胚胎していたに違いなかった。今私という人間を得て、最初は控えめな求めが、時の経つと共に、急激に増殖し、エクスタシーの境地を知って燃

えに燃えようとしているかの様であった。まさか、これ程までに求められようとは思ひもかけなかった。最初鞭打ちを口にしたのは私であったが、寧ろそれは彼女の被虐の心に火をつけた結果になり、いつ果てるともなく、燎原の火の如く燃えさかって行くのみであった。

この様な、正面向きの緊縛は鞭打ちには不向きなポーズである。にもかかわらず彼女は求めていた。この機会を失えば、再び巡りこめ被虐の愉悅のチャンスに、最後の残り火をすっきりかき立て、消え終るまで彼女は求めて已まなかった。謂わば衝動的な気持ちにかり立てられたのかも知れない。

縄目が邪魔をして、鞭をふるう余地は少なかった。腰や腿の辺りに、数発の鞭をとばしても、小気味よい音色ははね返らず、徒らに条痕のみを留めるだけであった。私は木戸悦子の髪の毛を片手で掴むと、その頬に、親愛をこめた平手打ちを数度左右に飛ばしてやった。最後の切り札、携帯用のバイブレーターが私の手に握られている。電池による震動が



始まり、ブルブル……と物憂い断続音を響かせて、それが黒ブドーに近づき、接触した時、鮮烈な五体をつきぬけるケイレンが彼女の体にショックを与え、バイブレーターが徐々に下降を辿り始めた時、彼女は身も世もあらぬ快樂の呻きと共にその刹那、失神したのである。私は判っきりこの眼で確かめたのであった。

ダブルベッドに長々と、木戸悦子は全裸の俣で横たわっていた。あの強烈な縛りをといた直後、フラフラと私に倒れかかった彼女にあわてて体を貸すと、私はだきかかえるよう

にして、疲労の極に達した彼女をベッドに横たえたのである。

「何時？」

「五時半少し前——」

「もうそろそろ帰らなくちゃいけませんわ」

「大丈夫？ 一人で——。家まで送ってゆきましょうか」

「疲れがいつときに出て、何が何だか分らなくなりましたの。辻村さんって非道い方」

「自分で希んだくせに……」

「寝てる子を起したのは誰？」

「旦那への欲求不満だね」

「でもないわ。主人はいらいらししてる様子らしいけど、私五カ月になっていらい、全然シヤットアウトしているのよ」

「反って難産になるよ。臨月までだって適当に体位を考えてならはいんだって。私の懇意のギネのドクターが仰有ってましたよ」

「大丈夫なのかしら」

「その方がかえって安産なんだって。道は広くつけておくべきですよ」

「今夜辺り私の方から要求するかも知れませんが。辻村さんのせいよ」

「おやおや、でも旦那、久し振りで喜ぶますよ」

きわどい話をしながら、やつこらさとベッドから腰を上げると、部屋一杯に散らばった道具類を片付けにかかる。

「全部撮り終ったの、フィルム」

「うん、もう五、六枚残っているよ。も一つのカメラは残りだけど」

「私のヌードなんて興味ない？」

「なくもないけど——」

「よかったら、こうしていますから、その残った分で撮りなさいよ」

木戸悦子は、ハツとするような大胆なポーズをとった。妖しくヌメヌメと光り、濡れているのは唇だけではなかった。

ぐっとカメラを近づけて近写すると、忽ち

数枚は終る。

「私に今のも下さいね」

「見たいの？」

「自分の眼でみられないもの」

「女性にもエッチがあるらしい」

「バカ——」

「御免ごめん、しかし、もう会えないでしような。二度と」

「臨月になると出られないと思いますわ」

「家へ押しかけたらいけない？」

「ダメダメ、私達を離婚させる気なの」

「旦那が趣味を解さないのがシンドイ。増田夫妻のようにはゆかないものだね」

「本当は出産間近の、最大級のおナカにとって欲しいと思いますわ、無理だと思いますけど」

「出産後、もう一度撮りたいな。旦那に子守してもらってね」

「先のことは分りませんが、八月廿四、五日出産の予定ですよ。一度その後お電話下さらない。でも、やはり乳呑児抱えて無理ですわね」

「最初の最後かも知れないね」

「でも今日の数時間のプレイで、私過去何年間かの間持ち続けていたものを、いっぺんに吐き出した様な気持ですわ」

山本リンダに似た笑顔が戻っていた。微笑みは絶え間なく彼女の表情を豊かにし、樂しげに喋る言葉の端々に、私との一對一のプレイのかげりは全然なかった。唯、歴然と残る手足の縄目の痕が、蔽いようもなく白い肌に色づいて深く彫りこまれてあった。

「帰るまでに消えるかしら」

一寸心配げに、彼女は手首をこする。

「多分目立たなくなるでしょう。夏のプレイで一番困るのが、この縄の跡なんだよ。何しろ薄着の上に、露出過度だからね」

夏の陽は五時半というのに、未だ赤々と輝いて暑かった。時間帯に引っ掛って意外に時間をとられ、始めて出会った帝塚山まで四十分以上かかった。疲れているから、家までお送りしようというと、彼女はかなり強い口調で固辞した。もうスイートホームも間近い。男女二人の姿を、どこでどう見られているか分らぬという危惧が、木戸悦子の脳裡を支配していたに違いない。そわそわと辺りを見廻す助手席の彼女は、最早、プレイの密室での彼女とは全然別人の、一人の若妻の姿に還元していた。

「ここですよろしいですわ。今日のこと、一生忘れませんことよ。ご機嫌よう」

車を素早く降りると、もう脇目も振らなかつた。私を無視して、それはむしろ虚勢にも近いわざとらしさであったが、木戸悦子は、足早に街角を曲って消えた。それが平和を維持したい人妻の本能であろうか。

私はその俛、車を流れに入れた。信号の赤で停止して、何気なく傍らをみた時、そこに木戸悦子の忘れていった日傘があった。

送るべきか、届けに行くべきか——。そんな心の迂余曲折を辿りつつ、私の心は満ちたりの思いでいつしか弾んでいた。



告
……
白

僕の思い出

——(高校時代)——

京野郁文

下校して来て便所に行った僕は、排尿と同

時に、急所にもうれつに疼痛がはしるのを感じて、思わずうずくまってしまう。その日の体操の練習で股間を強く打ってしまったのだが、だれにもなにも云わずに帰って来てしまったのだ。部屋に戻ってしばらく横になっていると、姉の美子が勤めから帰って来た。当時、僕は家が遠い関係で、姉と二人でアパートに住んでいた。

「どうしたの？ いっちゃん」

「うん、なんでもないんだけど……」
僕は口をにごした。

「そうお」

美子はいぶかしげに顔をしかめたが、エプロンをつけると台所になった。私はほっとしてテレビに見入っていたが、とたんに又、ひどく痛みだした。

思わず知らず呻いた。台所で水仕事をしていた姉が、びっくりしてとんで来た。

「どうしたのよ」

「うーん。い、いや、何でもないんだ。何でもないんだ」

私は体を二つに折って喘ぎながらもむりに笑ってみせた。しかし今度はどうしても痛み

はおさまらない。美子は私の傍に坐りこんで顔をのぞきこんだ。品の良い香水の匂いがただよってきて、私は苦しみながらも、全く当惑してしまった。いくら姉弟でも、いや姉弟だからこそ余計に、こんなところが痛いなどとはいいにくい。いやまったく恥かしいかぎりだもの……。そう思ううちにも、激烈な痛みが、またもおそって来た。

「なんでもないことはないでしょう。一体どうしたのよ、こんなふうで……。困っちゃうじゃないの。ちゃんと云いなさいよ。ねえ、ねえったらー！」

姉は驚きのうちにも怒りさえこめて云う。

「うーん。それが、あの……弱ったなあ」
どうしても僕は口ごもってしまう。

「何をかくすのよ、たった一人の姉じゃないの。どこが苦しいのか云ってちょうだいよ」
白魚のような白い手を僕の肩にかけてゆすって来た。私は姉の美子から目をそらして困ってしまった。

「あの……姉さん、実は今日、体操の時間にここをうっちゃって、そして、小用をしたらとても痛むんで……」

と僕は、とうとう話しはじめた。

「まあ、そうなの……びっくりしたわ。なんかあんまり苦しむもんですもの」

姉の美子は打撲痛ときいて少しほっとしたようだが、やがて美しい眉をしかめながら、

いろいろと症状をきき始めた。しかし私には小用をするとき痛むのと、今痛んでいることだけしか云うことはない。美子はしばらく考えていたが、

「一寸見せてごらんさい」

と、きまじめな顔付きで云い始めた。

「いやだよ、なにいつてんだい。そんな」

僕は、あわてて云った。

「恥かしいでしょう。でもそんなこと云ってられないでしょ。ね、一寸見せなさい」

「いやだよ」

私は、がんとして首をふった。

「しようがないわねえ。だけど、私が見てもわかるわけじゃないし……」

美子は始めて気がついたように笑っていたが、そうそうと思ひ出したように、つい近くに泌尿器科の医院があるからそこへ行きましよう云いだした。初めは私もいくのは厭だったが、痛むのにはどうしようもなく、姉にせかされて、しおしおと私は、そのD医院に行くべく腰を上げた。

ひやりとした待合室に入ると、若い看護婦が一人ぼつんと受付に坐っているだけで、他に誰も患者はいなかった。僕はほっとして椅子に腰を下ろした。とたんにまた痛みが走った。美子は受付の看護婦と何やらひそひそ話していたが、看護婦は僕の方をちらっと見て

うなずくと、奥に消えていった。僕はなんとなく心配で落ちつかない。美子は、ほっとしたような表情で戻ってくると僕に云った。

「大先生は往診でいないのよ、それで待とうと思っただけで、症状が症状でしょう。すぐ診てもらわないと、内出血でもしていると大変なんですってよ。それでネ、内科の方をやってられる女医さんにとりあえず診て貰いましょうと云うの、すぐに。よかったわねえ」

「え、女医先生だって！」

僕は、びっくりして逃げ腰になった。そんなのは、いやだと駄々をこねた。帰ろうとして立ち上ると又、痛み出す。

「そんなこと云ったって、今の場合、しょうがないでしょう。すぐ診てもらえるだけでも有難いことじゃない」

美子は美しい眉を寄せて怒った。そんなこんなでもめていると、診察室の扉があいて女医が顔を出した。三十を一寸出た、ほりの深い美しい人だった。その顔を見て、僕はよく学校の帰り道で会ったことを思いだした。いつもあとをつけてみようかしらと、思っていた、その人だったのだ。

「どうしたんですか」

女医は、やわらかいソプラノで云った。

「先生、いやだって云ってしょうがないんですよ」

姉の美子は云った。

「早く診ないと大事なことになりますよ。さあ、ちゃんと治療してあげますからいらっしやい、何が恥かしいものですか」

女医はさすがに、にがわらいしながら、なだめるように云うのだった。私は全く当惑しておろおろしてしまつたが、仕方なく看護婦と美子に押されるように診察室に入った。女医は生年月日、症状などを訊いて簡単に書きとめると、

「姉さんは、そこでお待ちになつて」

と云うと、カーテンで仕切つてある部屋の片側にしりごみする僕を、やさしく押しこんだ。

入った途端、僕はカーツと血が頭にのぼつた。そこには、学校友達から面白半分略図まで描いて聞かされていた婦人科用のような検診台が、不気味に光っていたからだ。丁度仰向けにねて両足をひろげ、上にあげられるように足首を乗せる台がついているやつである。

「さあ、下のものを脱ぎなさい。全部ね」

いつの間にか入つて来た看護婦は、しりごみしている私を、うながした。女医は、かたわらでがちゃがちゃ検診器具を取扱いながら「すぐ済むわ。そんなに考えこまないで」と僕の気持をほぐすかのうちに、微笑みながら云うのには参ってしまった。

私はズボンと脱ぎパンツも脱いだが、前こ

ごみになって、もぞもぞしていた。

「さあ、台にあがって」

看護婦にせきたてられて、シャツ一枚の姿で台に上がり、仕方なく仰向けにはなったが両脚をとじて曲げるようにしていた。

「そんな恰好してたら、先生が診られないでしょ。さあ、ちゃんと足を伸ばして」

と尻をびしゃりと叩かれる。この看護婦は手荒い。思わず足を広げる。

「そうそう、力を抜いてね」

と、上に伸びている腕木に足首をのせてしまった。余りな恰好に僕は、わなわなふるえてしまった。

「いいわよ」

さっと女医が脚の間に入って来た。

「力を抜いて。はい、もっと腰を出して、そうそう、そのまま、じっとして」

いよいよ診察が始った。僕は観念したものの、やはりもぞもぞしてしまふ。

「お姉さん、こちらへ来て下さい。一寸、押さえてもらいたいんだけど」

姉が入ってくる。

「いいよ。姉さん、こないでよ！」

僕は、びっくりしてあわてた。が看護婦はすぐ僕の手を押さえてしまった。そして女医は姉の美子に、私の開いている両足を押さえた。その手が、ひやりと冷たい。

「いいいったら。いやだ。もういいですから、

やめて下さい」

僕は必死になってもがいたが、看護婦と姉に手足を押さえられて動けない。

「すぐ済むから、おとなしくしなさい。ネ、いい子だから」

女医は、苦笑いしながら軽く叱りつけて、細いガラスの管を手にとった。

「あああ」

その女医の治療が進むにつれて、僕は思わず呻いた。

「やめて……。うーん、やめて！」

「じっとしていなさい。もうすぐよ」

すぐ済むといいながら、それから十数分も治療は続いた。時々私は呻いて体をうごかしたが看護婦と姉がしっかり手足を押さえているので動けない。時々姉が顔をのぞかせては「良っちゃーん、我慢するのよ、すぐだから」とやさしく、たしなめる様に云うのだが、

私は恥かしさと痛みでカッカときている。女医は治療をしながら姉の美子に色々と患部を示してその内容を話しているらしい。痛いのには拘わらず、いつのまにか私の胸のうちには口先とは正反対の、もっと激しい扱いがたをしてほしいという気持ちが、湧き始めていた。僕は薄目をあけて看護婦のふくよかな胸を見上げ、いつしかうっとりとした気になっていたが、ふと看護婦のアイ・シャドウをした目にぶつかりあわてて固く瞼をあわした。

「あら！」

姉が云うのを聞いて身がちぎまった。だからいやだと云ったのに。

ようよう治療が終わったらしい。

「はい済みました。よく我慢したわねえ」

目をあけると両膝の間に女医の美しい笑顔があつて、あわてて顔を横に伏せた。私は押さえられていた手足を放されても、ぐったりと横たわっていた。

そして

「もう終りよ。楽になったでしょう」

という姉の声もうつろに聞いたが

「馬鹿ねえ、あんなに暴れて」

と軽く背中を叩かれて、大急ぎで体を二つに折った。

僕が身じまいする間に、女医に指示をされたらしく美子は薬をもらった。僕は、ほっとして医院の門を出た。

「よく我慢したわねえ。もう大事はないらしいわ。でもこのお薬を、しばらくつけなさいってよ。私が、ちゃんとしたげるわ」

僕が少し楽になった様な表情をしていたらしいのか、姉の美子は、来るときの深刻な顔付きとはガラリと変わり、かすかにふくみ笑いをしているのだった。

数ある中で、一番強烈な印象を持って思い出される高校時代の一事件？であった。



読切・Fストーリー

レモンいろの雨

香川 泳 三

のどくびを、軽くグイグイと曳かれて、信二は目をさました。

(ママのお呼びだ)

そう気がつくと、すばやく四つん這いに、ねぐらをでる。

犬のしめる首環が、グルリとのどに巻きつき、そこから細い金鎖が頭上にのび、ねぐらからその真上の、豪華なベッドの内部までつながっている。そして、その鎖の一端は、これの大切なご主人さまのママの手に握られている。

夜、寝るときは、かならず、この鎖つきの首環をつける。信二のねぐらは、ママの豪華なダブル・ベッドの真下にきめられている。

そして、広々したクッションのよくきいたベッドに、ママは女助手のミッチイとふたりでねむるのが習慣になっていた。

二メートルの首環の金鎖は、ママの頭のところのベッドの脚につながれている。だからこれを外してもらわないと、信二はベッドから一步も離れられない。

これは、べつに逃げるのをふせぐためでは

なく、夜中にママやミッチイが、何かの必要を感じたばあい、これを引っばって信二をおこす合図用のものだった。

ベッドの下、せまい空間が、信二の寝どころだった。ここに毛布を敷き、ゴロ寝をする犬小屋みたいなねぐらだ。

犬といえば、信二の日常も犬みたいなものだった。ママのこのみで信二は、ときには愛玩犬にされ、ときにはウマにされ、ときには汚いものを無造作に食べさせられるようなブタにされ、そしてまた、ある日には、よく仕

込まれた特別な芸当で、お二人を喜ばすチンのかわりもしなくてはならないのだった。

信二のあたまたのあたりには、ママがデパートの名匠作品即売展で気に入って買った、大型のツボがおかれてある。

白磁の、みごとなツボで、十八万円したそうだが、水の四リットルはたっぷりはいる大型で、ズングリした口のひろいそのツボを、ママもミッチイもすっかり気に入った。

ツボは、鑑賞用に置いてあるのではない。

昼間のしごとに疲れきったママやミッチイがわざわざ階下のトイレまでおりるのが面倒だといって、夜中に、これをつかう。つまりナイト・ポットの代用をするわけなのだ。

ツボは使われたあと、これもある木工場であつらえてつくらせた、重い木製のフタをされて、朝まで信二の枕もとにおかれる。

朝はやくツボを抱いて、階下のトイレにすてにゆくと、ツボのなかみはチャブチャブと音をたてた。とおといような気がした。

フタをとって、なかみを便器にあけると、レモンいろのなかみが、いちだんと、たかい香気をたてて信二のハナを包む。

レモンいろの水は、ときにはポートワインのいろだったり、ときにはオレンジいろだっ

たり、一定しない。手もとが狂って、しぶきが手や顔に飛ぶときがある。でも、きたない気がしない。

はじめは、いやだったけれど、毎日毎日、ツボの掃除が、朝のだいじなしごとと、さとしたら、とてもたのしみになった。

ベッドから解放されても、首から垂れた二メートルの金鎖は、とってもらえない。それを曳きずりながらツボを抱いて、信二の熱心な清掃がつづく。

なかみは、ひどく分量の多い朝があるかと思うと、逆に底のほうに、すこししか残っていないときもある。

多いのは、二人がビールや洋酒をしこたま呑んだときだし、少いのは、信二が夜中のどがかわいて水が呑みたいのに、鎖のためにベッドから離れることができず、やむなくツボの中味で、のどをうるおしたためだった。

ツボを真中にして、その上にはママとミッチイが居り、その下には信二が存在するわけだった。両方とも違うのは使いみちである。

○

ママもミッチイも、すごく美貌だった。

そのうえ、お手のものの全身美容術で、たっぷり磨きたてるのだから、いつも輝くばかりの美しさを保っている。

二人とも部屋にいるときは、生れたままのすがたになる。

なまじ、うるさい下着など着ると、四六時中、肌の毛穴から発散する、からだの内部から生理的に発散する老廃物の排泄がまたげられ、肌が老化する。その害をとりのぞくために、まるで、この部屋では風呂のなかにいるみたいに、着てるものは、ぜんぶ脱ぎすててしまう。

そんな恰好で、ソファに掛けるママのすがたを、信二は、まるでビータスでもおがむような眼つきで、与えられたカーペッドの上にじかにすわって、下からふりあおぐのが大好きだった。

ミッチイは、ママにくらべると肌がやや黒く、そのかわり、すばらしい弾力があつた。そのすがたが、はじめのころは、どうにもまぶしくて眼のやりばに困ったが、慣れると全身くまなく見つめても平気だった。

ママのマスクは、東京生れらしく、エキゾチックで彫りがふかく、外人のような白い肌が目ごとだった。

ミッチイは京都で生れたせいとか、純日本型で、手や足は細く、そのくせ、そのほかの部

分は、すばらしい肉つきだった。

その二人の美しさは、店へくる、どんな客もかなわないような、すばらしさだった。

○

信二には故郷がない。両親もない。

どこで生れたのかそれもハッキリしない。

物心ついたときは、ある施設にいた。

施設は、十八才になると出なければならぬ規則だった。

行くあてのないまま途方にくれていたとき

新聞の案内広告で、求人広告を見た。

ボーイさん 一名 真面目で 長時間労働

に耐えられる人 二十才まで 住み込み

家族の一人として特別優遇。

「家族の一人として」の八文字が、信二の心をうごかした。

広告主は「マミイ美容院」とある。きっと

雑役にコキ使われるのだろうけど、住み込みという条件も、つごうよかった。

その足で信二はマミイ美容院にかけた。

美しいマダム面接をうけ、即決で採用された。

三食、部屋代はいらないかわりに、サラー

ーは一万円。三カ月たったなら、昇給という条

件だったが、そんな条件は、入店一カ月めにあっさり破られた。

たしかに、食事や寝るところはあったが、それは世間の常識をやぶるものだった。

しかし、いまさら、やめても、行く先もない。

信二のように、身よりもなく、だいいち

戸籍もない、学歴もない人間を、甘い顔で雇

ってくれるところはない。

その点、マミイ美容院のママは、そんなこと、いっさい無頓着で、

『ただ、忠実に骨身おしませ働いてくれたらいいわ』

と、使って、使ってくれた。

その恩を信二は一生、わすれまいと思う。

保証人なんかいらないうわ。そのかわり、あ

んたが、あんた自身を保証するのよ。問題はよくはたらいてくれりゃ、ウチは、それでいいの。

と、やさしくわらう。

信二は、このママのためなら、命をすてても惜しくない、と、そのとき、心からおもった。

だから、店のすべての雑役を、ひとりやるなどは、なんでもないことだった。

しごとは、むづかしくもなければ、つらく

もない。

ただ、奇妙に思われたのは、店にはいった

その日に、デパートの愛玩犬用品コーナーにつれてゆかれ、信二の首の太さに合わせたデ

ラックスな首環と、細い金色の鎖が買入れられたことだ。

『これが、シンのアクセサリ』

と、ママは手渡し、一日中、その首環をの

どに巻いておくことを命ぜられた。

かけ忘れると、ひどく叱られた。

信二、なんていちいち呼ぶのめんどろだから、ペットネームをつけよう。そう「シン」と呼ぶことにしようという一方的にきめられた。

奇妙な感じもしないではなかったけれど、名前など、どうでもよい。ただ、ここに置いてもらえれば、それでよかった。

首環をつけ、鎖を曳かれ、

『シン！』

と呼ばれると、まるで犬に生れかわったよ

うな、きもちになる。食事は床のうえに、はいつくばってさせられた。

○

ミッチイの身の上も信二によく似ている。

京都で生まれ、ちいさいときに両親に死な

れ、三年まえにママが、インターンを終って

「マミイ美容院」を開くときに偶然、新宿の歩道でひろわれた。

喫茶店で、ふたことみこと、しゃべったらママが、

『どう、あなた、ウチへ来ない？ 美容術はあたしが教えたげる。あなたは、助手をしなから、三年ガンばりなさい。きっと一人前の美容師の先生に仕上げてあげる』という。

ミッチイは、その話にとびついた。

路子という名は、ママの好みでミッチイと変えられた。

名まえを片カナに改めるのと同時に、ミッチイは過去の記憶をすべて捨てて、ママにかわいがられる身になった。

ボーイッシュなミッチイは、淋しいママのベッドを楽しいものにするうえに、大そう役に立った。

ひるまは、まじめな助手。そして夜は、まるで仔犬みたいな、ママのペットになった。

楽しい日々がつづいた。

その楽しさを、二倍にも三倍にもよけいにしてくれたのが、あたらしく雇われた信二である。

ミッチイは万事、先輩として信二をコキ使

えることに満足した。

それだけじゃない。

いつしか、年うえの信二を、オモチャのように、ママのまねをして追いまわすことに興味を感じるようになった。

まるで信二としては、やかましく、おそろしいご主人さまが、いつも頭のうえに二人、座を占めているようで、油断できなかった。それは、ひとつにはママの命令によるものらしかった。

雇い人どうしというより、ミッチイも主人として、信二の頭の上に君臨した。

ママは店のしごとで忙しいので、信二に特殊の訓練や教育をしてやるヒマがない。しかたがないので、美容院の特殊な道具として使う人間に仕上げるための教育は、全面的にミッチイにあずけられたのだった。

○

「全身美容クリニック」を表看板にするマミイ美容院は、山手の静かな住宅街に、小さなしかしシャトオのようなデラックスな外観で店をかまえていた。

三十八才になるママと、住み込みの助手のことし二十二才のミッチイ。そして、これも住み込みの下働きの信二の三人で、テキパキ

と日々の客をさばくのだった。

料金は、目がとびでるほど高い。

高級美容院で、客種は一流。一日に、多い日で十人。平均すれば、六人ほどの客数だけど、標準コース一人一万円の料金だから、店は黒字だった。

おもに、バアのマダム、料亭の女将、広告会社のおんな社長、女性雑誌の編集長、前大臣夫人、建設会社の社長令嬢といった、ハイ・ミス、ハイ・ミセスばかりが、客として出はいりする。

電話で、あらかじめ予約しておかないと、施術がうけられない仕組みだった。

万一、約束の時間に十分以上おけると、店のほうで、そのアポを取消す、そんな高姿勢なやりかたが、かえって客に受けて、朝十時から夜九時までの営業時間中は、ほとんど客のとだえることがなかった。

マミイの三人がかりの全身マッサージといえば、この店のひいき客の評価は、一〇〇点だった。

トルコ風呂みたいなデラックスな浴室で洗われ、蒸され、温められ、そしてママとミッチイが二人がかりで、全身を若返りのマッサージで、よくもみほぐす。

足のほうには、ハンサムで、そのうえまるでドレイのように忠実そのものの信二が、雑用をうけたまわるために控えている。

客はつくりが万事がデラックス好みで、そのくせみだらな、なにかやるせない、甘いにおいのするこの浴室にはいると、酔ったような心地になってしまったのであった。

○

サービスは徹底していた。

客は、そのあいだ、まったく、じぶんの手をつかう必要がなかった。

赤ちゃんのように、やわらかなスポンジマットのベッドに寝ころがっていれば、からだのすみずみまで、やさしく特殊なマッサージの手がのびてくる。清拭も入念だった。

甘く夢路に引きずり込むようなすばらしいマッサージが、足の裏にまでされるのだ。

どういふものか、客の多くはマッサージのとちゅうで、トイレにゆきたくなくなる。

マッサージの、テクニックが、排泄器官を快く圧迫するからだろうか。

『おくさま。恥ずかしいことはありませんわ。からだのなかの、不用品な老廃物を、のこらずだしてしまふのが、ほんとうの全身美容です

の。助手がお世話しますから、そのまま、どうぞ』

ママが、命令するように、そういい、信二に、眼でサインを送る。

のこらずだして、というママのさそいには一種の催眠力がある。

客は、ふしぎに、この一言で、筋肉のゆるみを感じ、そのままの姿勢で、ママのいうとおりになってしまうのだった。

その処理は、信二の受けもちである。

かれには、客をえらぶ権利はないから、ママの合図があれば、いつでも、身を投げだして、お手伝いをしなければならない。

客によっては、ずいぶん年よりだったり、感じがわるい顔をしていたりで、このしごとに醜怪を感じるときもあったが、しかし絶対に、どんな命令にも忠実に、したがわなければならないのである。

浴室で、スポンジ・マットのうえとはいえこぼすことは許されない。マッサージのため必然的に、すてられるものであっても、特有の臭気が、あたりにひろがったりしてはムードがこわされるし、だいいち、その匂いがかいだ、客自身が羞恥を感じてしまう。

棄て去る行為そのもののロマンは、すばら

しいけど、結果としてレモンいろの流れを同性のママやミッチイにみられたり、まして、その特有の香気が、室の湯気と混ざり合ってたりにひろがるのは、耐えられない――。

ママは、デリケートな女性の心理をよく読んで、だから信二を使うのだ。

訓練を積んだ信二なら、うまく、それを人目にさらすことなく、始末してしまえるし、香気をそとに洩らすことがない。そのうえ、男性に、そんな方法で始末させることに、まるで女王さまみたいな誇りを感じるのが、女性の心理というものであろう。この信二の、すばらしく巧みな作業も、マミイ美容院だけが提供できるサービスとして、客の人気をよび、中には、これが目的でやってくる女性もあったし、信二を名ざしで、多額のチップをくれる客もあった。

しかし、せっかくのチップは、一円も信二の手には渡されず、そのままママとミッチイの、ぜいたくなくらしを支えるためにぜんぶ吸いあげられるのだけど、信二は一言も口だしはさせてもらえなかった。

○

『あんた、不服なら、いつでも、ウチから出ていいよ。べつに止めないから。ネエ、ミッ

チイ』

ママは、口ぐせにいう。

でも、いくら、いやみを言われ、皮肉を浴びせられても、この店から出ていく気持は無いのである。

仕事はつらいけど、気をつかうことがなくのん気だったし、犬のように首環をはめられジャラジャラ、金いろの鎖を引きずって歩くくらいだって、いっそじぶんは、犬なのだ、と思っていれば、不自然でない。

犬のくせに、ご主人さまと同じ部屋で暮らすことができ、そして、いろいろの、おんなのお客さまと会えるのは、たのしいことである。

じぶんを人間だと思ふからいけないんだ。

犬なら、口はきかないし、たとえご主人さまが、気まぐれに、けとばしたり、せなかにまたがって、ウマに乗るみたいに、部屋のなかをあるきまわり、そのままの恰好で、トイレまで歩かせたり、バスをつかうお手伝いを命じたり、スリッパを口でくわえて持ててこさせたり、パチンパチンと、爪切りで切った爪の切れはしを、むりやり舌の上に乗せられたり、そのほか、口にできないような、さまざまな悪質なカラカイにも無言で素直に従う

ことができる。

そして、ノロノロと命令通りにうごいていれば、とにかく三度の飯にはありつけるのだから、苦勞する必要がない。

生れつき、おとなしく、なまけ者で、キチンとした職場で、九時から五時まで、はたらくような、几帳面なことではできない性分だから仕方がない。だから逃げ出すなぞということとは思ってもよらないことだ。

いっそ、ほんものの犬に生れかわって、ワンワン、クンクン啼きながら、ママやミッチイの足もとで、じゃれつくことができたらどんなに楽しいだろうと思う。

なまじ人間のすがたをしてるから、ときには、ムチを振りおろすぐ主人さまにも若干のえんりよがのこる。

口の利けない犬になりたいと真剣に思う。叩かれても、踏みしだかれても、ここにへばりついて、二人のご主人さまの指図通りに動いていれば、無事に平和に、その日が送れるくらしは、案外、呑気でわるくなかった。

○

いろいろな客がきた。

全身美容に大金を掛け、より美しく、より若くならうとする女性たちは、ママやミッチ

イや信二や、この三人のかもしれない妖しい、ムードを好んだ。

ことに、鎖を引きずって歩きまわる信二が命令一下、じぶんのために、どんな放埒な、破廉恥な、不潔な要求にも、絶対いやがらない、従順な態度をとることに満足した。

ことに、れいのマッサージの最中に、恥ずかしい生理行為のあと始末を、一回でもさせたあとは、客たちは、いっさいの羞恥をすてて、ママやミッチイも顔まけするような行為を、平気で要求するようになる。

『ねえ、ママ。あたし、いま気もちが、くしゃくしゃしてるの。何か生き物を、思いきりムチで引っぱたいてみたら、スカッとするんだけどな』

ナゾみたいという社長令嬢に、ママは、『そう。いいことがあるのよ、お嬢さま。シンを叩いたらどうかしら。きっと、スカッとしますわ。そうですね、お嬢さま。思いきりたたきのめしてやってくださいましな。シンはお嬢さまのような美しい方に思いきり叩かれるのが、とても好きなんですの。ホホホ、せいぜいたくさん、叩いてやってくださいませ』

と、愛想笑いをする。客は、

『そう。ママが許してくれたんだから、いいわけね』

と、ひとりぎめに、いきなり立ちあがり、ようしゃなく、よくしなう柳の小枝のムチを信二のせなかめがけて、ちからいっぱい振り下す。

慣れていても、痛さがピリリと、脳天から足の先まで走り、かみしめた口から、

『ウーッ』

と、つい声が洩れる。

いつとはなしに「一と叩き千円」という料金にきめられていた。

でも、いくら裕福な客でも、そうそう無制限に、この料金は払えない。

だから、一人がせいぜい七回も叩けば、それでストップする。

無抵抗の犬の、むきだしのせなかに、ちらまかせに振りおろすムチが、肉づきのよい裸身に炸裂するその手ごたえと、ピシッという音の響きは、叩くほうに、なんともいえない気分をあたえるのだった。

おまけに、一回千円という料金を払う以上えんりよは無用なのだ。

千円払ったら、それだけの快よさがあってあたりまえだ。客たちは、そのために、力の

かぎり小枝のムチを振るう。

はじめのころは、辛いと思った。いくらなんでも、ひどすぎると、客の手もとが狂ってうでに当り、やわらかいヒフに内出血した肌をさすって、叩いた客を恨んだこともある。

でも、ママにそれを訴えても、

『いやなら、店から出てゆけ』

と、つっぱなされるだけなので、いつしかあきらめるようになった。

あきらめるようになったら、こんどは、あべこべに、ムチの痛さが脳天をつらぬくのがきもちよく、さわやかに感ぜられるようになってきたのは、不思議だった。

手ひどくムチをうけて、からだのあちこちが痛むと、ママは特製のくすりの使用をゆるしてくれる。

レモンいろの液体が、小ビンにわけて与えられる。

それを痛む部分にぬると、ふしぎに痛みが消える。

すばらしい効果のある薬剤だが、傷口にピリッとしみて、そのときは、ちょっと痛いけど、仲々魅力のある薬剤だった。

その薬剤だけが生甲斐であった。

出どころは、大体わかっている。しかし、塗

れば痛みも腫れも引く。

かすかに、アンモニアが匂う。

この「クスリ」のおかげで、叩かれることが、つらくも、いやにもならなくなったのはママの計算どおりだった。

ツボのなかみを捨てる仕事は命ぜられてもなかみを自由にすることは許されてない。

どころか、そんなねがいは、

『生意気な、行きすぎた行ない』

として、嚴重に止められていた。

のどがかわいたので、そっと口にしたこと、は、珍しくなかったが、それを肌に塗るなどは、ママやミッチィのような女王さまの、神聖なモノに対する冒瀆として、タブーであったのだ。

それが、ムチの雨を浴びたあとにかぎってごほうびに、与えられるのだから、信二にとって、このごほうびには、たいへんな価値がある。

ごほうびさえ与えてやれば、犬は喜々として、どんな手ひどい命令にも従う……このふしぎな犬の好みを知ってから、よけいママはこの、じぶんたちにとっては、もう不用になったツボのなかみを、効果的に用いることに熱心になった。

豪華なベッドのうえに、うつぶせに長々と伸び、この浴室の、なんともいえないムードに包まれると、客たちは酔ったようになり、ママの暗示の通りに動いて、やさしいマッサージを受けるのだった。

ママの指先のうごきは、まったく巧妙に、客たちの心をとらえてしまう。

いちどでも、このベッドに横たわると、あとは客といえども、ママの思い通りに、なってしまう。ママは、くちぐせに、

『おなかのなかに、不用のものを貯めておくのは、美容の大敵です。えんりょなく、どんなおすてなさいませ』

と、暗示にかけるように言う。

ママの指先が、ちよつとツボをとらえると腸の動きが活撥になり、れいの、あいきょうのある音が、おなかから洩れやすい状態になる。

レディたちは、その音や特有の香気が部屋にたちこめるのを、ひどく恥ずかしがる。顔いろで、それを察したママは、

『チッ、チッ！』

と、かるく舌を鳴らして、信二を呼ぶ。

……その音は、こうして外部に少しも洩れる

心配がなく、完全に信二によって吸収されるのである。

いつでたともわからないうちに、それは巧妙に処理されるのだから、レディには、とても喜ばれた。

いうなれば、信二の顔面が、小型の換気扇か、クリーナーの吸い込みの役をするのだから、愛嬌のある音も、ムードをこわすような不快な香いも、あたりに発散されることがなく、まことに完全な処理方法といえた。

信二に授けられたその気体は、信二の器管で濾過され、清浄な空気になって出てくるわけだ。

そのかわり信二は、気体をむりやり捨てられ、のどから食道まで、異様な空気がようしやなく侵入してくるので、ほんのしばらくだが、ゴボゴボとむせる。

しかし、これもママの命令とあれば、辛抱できた。

辛抱どころか、慣れてきたこのごろでは、こんな命令が待ち遠しくなる。

(オレは、今この客の肉体を喰ってるのだ) からだから出されるものを肉体の一部と考えると、そんな情念がフツフツと湧いてくるのが、ふしぎだった。

まるで、人喰い人種みたいに、そんな生理的な老廃物を、ガツガツむさぼってしまう。

だから、とくに美しい女性がすがたを見せると、はやくそんなご用が命ぜられないかとソワソワしてしまうのも、むりはないかもしれない。

そんなふうだから、その場になると、いそいと、うれしそうに、ご馳走にかぶりついてしまう。

女性たちは、そんな信二を、うえのほうから珍しそうに眺めた。

○

しかし、らんぼうにはあつかいながら、ママは、ほんとうは信二をシンからかわいいと思っている。

性質はすなおで、ママのいいつけはよく守るし、おまけに客のうけがとてもよくて、信二をめあてに遊びにやってきて、チップをたくさんはすむひとまじりからだ。

女性に、妙齡といって顔も肌もすばらしく美しく輝やく時期があるように、いまの信二は、若いさかり。ママが、たまにふざけて、信二に全身美容をほどこしてやり、女の子のようなメーキャップまでやってやり、気がむいてミッチイの衣服を着せ、かかとの高い靴

をはかすると、すばらしい女性ができあがってしまう。

ハンドバッグをもたせ、お供させてデパートまでいったら、すれちがう男性が、みな見とれ、振りかえり、信二の顔を、びっくりしたようにのぞきこむ。

ブロンドのカツラまでよく似合って、すばらしい女ぶりに、ママは、かるいジェラシーを感じたほだった。

理由もないのに信二をひどい目にあわせたり、とんでもなくきたならしいものを、むりに食べさせたり吞ませたりするのは、そんなショッピングに連れあるいた信二が、通りすぎる男性たちの目をみはらせたりしたあとのことが多かった。

信二にしてみれば、とんだめいわくな話だが、でも何回も経験してくると、女装したり男たちの目を惹くことが、だんだんたのしくなってくる。

男として店にいれば、女客たちにワイワイいわれ、女性に化けて街をあるけば、こんどは男たちにさわがれる。それが、なんともたのしいのだった。

ママは、信二の顔が、とてもいいと思う。ことに、女の子みたいに、ぽってり厚く、

大口で、いま売りだしの、なんとかいう女房才そっくりの、大口とはいえ形のよいその唇を、最高に愛した。

大きくて、ぽってりと厚く、ルージュをつけないのに赤く濡れているようなその唇を、すばらしいと思う。

そのくせ、面とむかうと、何かとイジワルして、なぶってやりたくなるのだった。

そのかわいいくちびるで、汗ばんだ肌をきれいにさせたり、指の間を這わせたり、二本の指で、いじめ抜いて、ますます赤くさせるのが、たまらなくおもしろい。

命令すると、何でも、ちゅうちょせず、食ってしまふから、愉快だった。

まるで貴婦人が、愛玩用の仔犬をベッドまで連れ込むような、かわいがりかたをするくせに、きげんがわるいと、ムチで叩いたり小さな胸を、ちからいっぱい締めつけたり、思いきり両の足で踏みこむ、それと似た気持ちだった。

ママは、とかく化膿しやすい体質で、よくからだのあちこちに、小さな腫れ物をこしらえる。化膿して、ヒフの表面に、粟つぶのような、白っぽい黄いろなウミのかたまりができることがある。

そういうときは、吸い出しを貼ったりなどはしない。

信二のくちびるに当てがってやれば、かれがやさしく、そのウミのかたまりを、とってくれる。痛さも全然なく、あつというまに、傷跡がなくなってしまう、以前にもまして、肌がきれいになるから、ふしぎだった。

そのうち、この形のよい、かわいいくちびるを、充分に使って、全身パックをさせてみようと思う。そんなことを、あたまで考えるだけでじぶんの肌が微妙に濡れてくる。

○

ミッチイも、信二をかわいと思う点ではママより上手だったかもしれない。

そのくせ、生意気にも、女性たちにさわがれ、すぐくモテる信二の顔をみると、とてもにくらしくなって、いじめてやりたくなる。

先輩風を吹かせて、下着のせんたくなどまで、平気で信二にさせる。

汚れきって、甘ずっぱい臭いを放つ下ばきでも、えんりよなく洗わせる。

それだけではない、ママのマネをして、汗ばんだ、からだのあちこちの清拭なども、平然と命じた。

ママに言われて、夜なかにれいのツボを使

うようになり、他人には、みせたこともない
じぶんの不用になった老廃物を、信二に処理
させるようになってから、信二にだけは、い
っさいの羞恥を忘れた。

若いミッチイには、ねむくてたまらない晩
がある。

年ごろなのに、軽いおねしょのくせがある
ミッチイは、その予防に、夜中に三度は、ト
イレの用をすませなければならぬ。

ベッドの下、信二の枕もとのツボを使う
のさえ、ねむくて、めんどろだった。

(いいことがあるわ、いちいちおきなくたっ
て、ママのマネをして信二に、始末させたら
いいんだわ)

とんでもないことを考えだした。

まだ実行はしないけど、信二を夜尿防止器
のかわりに使ったら、どんなかしら、と、ふ
と思った。それだけで、からだの内部が濡れ
たみたいになる。

信二を、手ひどい目にあわせる点では、マ
マよりミッチイのほうが、どうやら上手らし
い。

ベッドからおりるときも、信二を呼びつけ
カーペットに這わせ、ぶよぶよとやわらかい
踏み心地のよいそのせなかを、ドシンと台が

わりに踏みつけて、おりる。

マットレスみたいに、踏みつけることに、
とても、たのしさを感じた。

たのしいだけでなく、なにかとべんりなの
だから、やめられない。

戸棚の高いところにある化粧料を取るとき
は、踏み台にする。

床に正座させた、信二のヒザのうえに、エ
イッと向き合ってとびあがって、グリグリ踏
みつける。すると、丁度よい高さで、化粧料
が取れる。

ついでに、気がむくと、二三度、そのヒザ
の上で足ぶみをし、ちからいっぱい踏みしだ
くと、信二の上半身が、はげしく前後左右に
揺れ、はげしい痛みをこらえるためであろう
信二は、ほったたをふくらせて、顔を紅潮さ
せる。それがおもしろくて、やめられない。

いちどなどは、ハイヒールをはいてたので
ぬぐのも面倒と、そのまま乗って、細いカカ
トでグリグリと踏みつけてやった。

それでも信二は、ネをあげない。

そのかわり、あとでみたら点々と太腿のあ
ちこちに、ハイヒールのカカトのあとが赤く
のこり、ママが、

『どうしたの?』

と、しきりに信二に訊いた。信二は、そん
な手ひどい仕打ちに、なれているためか、笑
って正直には答えず、適当にごま化したらし
かった。

○

信二は二人に対しては、徹底的に受身の態
度をくずさない。

どんな常識破りの、人間の尊厳をきずつけ
んばかりの、破廉恥な行為を命ぜられても、
喜々として従った。

若さにまかせて、いつも、とんでもないこ
とを平然と命ずるミッチイと、おちついて、
湿潤な、ネットリするような、肌にしみいる
ような、不潔な行為をさせるママ。どうやら
二人は、信二をいじめつけることで、愛情を
示そうとするらしい。

そしてまた、このような生活に、すっかり
おぼれてしまった信二。

打たれても、蹴られても痛くない。他人に
は、見せられないような行為でも、信二には
あからさまに見せて平気な二人に、信二は、
愛情というより尊敬、尊敬というより崇拜す
ら感じる。

だから、三人の間柄は、よくバランスが保
たれている、といえた。

ミッチイは、ママが好きだった。

ママと呼ぶより、パパと呼びたいくらいである。

夜、やさしく抱かれて、ベッドでねむることに、最高の喜びを感じた。

おまけに、たったいまも、二人のねるベッドの下には、信二が、犬のように、鎖につながれ、これをちょっと引きさえすれば、いつでも、どんなことでも命令できる。

そんなべんりな、快適な暮らしも、ママがいてくれるからできるんだわ、と思う。

二人の間柄は、美容院の経営者と、雇い人といった、固苦しいものでなく、いうなれば男まさりのママに飼われる、ミッチイもママのペットといったら、いいだろう。

ママは、ミッチイを愛し、かわいいけど信二をいじめるのが好き。ミッチイは、ママを愛し、信二をひどい目にあわすことに熱中する。そして信二は、この二人が、最高に好きでたまらない。

いうなれば、三人は三人バラバラなのでなく、ママが頭、ミッチイが手、そして信二は脚の立場といったらよいかもしれない。

つまり、三人がそろって、はじめて完全な一人の人間ができあがる、といえそうなのだ。

った。そう、信二は常にいやしい脚だった。

ミッチイが、ヒステリックになって、信二をひどい目にあわす。かわいそうだけど、そんなシーンを見ることを、ママは好んだ。

それだけでなく、ひどい目にあわせればあわせるほど、信二が、おとなしく、ますますよく働いて、客たちの評判をよくしてくれるのだから、つごうがよい。

ママは、信二の腿にできた、内出血のあとは、ミッチイがこしらえたものだ、ということとは知っている。知らないフリをしているのは、そんな肉体をえぐるような行為が、ますます信二をトリコにし、永くこの店に、信二をしぼりつけるためには、きわめて効果的だと思われるからだ。

『殺しさえしなけりゃ、調教だもの、なにをしてもかまわないよ』

ママは、そつと、そんなことを、ミッチイに言ったことがある。そのくせ、信二がかわいくてたまらないのだ。

○

マミイ美容院は、八人の特別上とくいをもっている。

一人が平均、月に三回やってくる。一回におとす金が、なにやかやで一万五千元。店の

売上げを支える太く、たいせつな柱だ。

その柱のなかでも、ひととき太く、たよりになるのが、服飾デザイナーの大木清子である。としては三十三才とか。

目鼻だちも、万事大ぶりで、することなこと、オーバーで、大声で下品な冗談を連発する、およそ信二のきらいなタイプだった。

皮肉なことに、大木清子は信二の、助手としての補助マッサージが、一度で氣にいつてしまい、カッカと熱くなって、週に三回もやってきては、ママやミッチイに席を外させ、信二と二人きりになりたがる。

料金の何倍もの心付をはずむのだから、さすがのママも、いやとは言えない。

清子は、やっていると、しつこく残忍に、ケタ外れな、醜怪な行為をつぎつぎに要求した。

いつ知ったのか、ママにせがんで、ベッドの下、れいの白磁のツボを持ってこさせ、平気で、それを使って、あと始末を信二に命令したことがある。

なかみは同じだろうけれど、信二は清子など、見るのもいやだと思う。

不服そうに渋々始末すると、その態度がよくないと、またべつの醜悪な行為を強制する

のだった。

店の大切なお客さまだ、と、信二は逃げだしたい心を、必死におさえる。

無抵抗の、そのくせ、反抗の心を燃やすのが、ストリートに清子に伝わる。

しかし清子の神経は、ラフにできているから、そんなこと知っちゃいない。

反抗すればするほど、清子の心は燃えあがり、とめどがなかった。

どっちが勝つか、対決は果てしなく続く。

しかし、清子にはマネーというすばらしい武器があった。

じぶんの好みを満足させるためには、金のちからにものを云わせ、むりやりに相手を組み伏せ、首をねじまげ、足の下に踏みしだいて、強引に命令に従わせる。

相手に、とんでもない、きたないものを与えるなど、平気だった。

なにしろ、月収四十万、独身で、ほかに金を使うことを知らないの、金ばなれだけは無類によい。

きょうも、七十万円で買ったという、ダイヤの指輪を光らせてやってきた。

デパートの保証書つきだから、うそではないであろう。

清子は無言で、その指輪を外し、ママの指にはめた。

七十万円の指輪を、ママに、その場で呉れるという。ただし条件つきであった。

信二を譲ってほしいという、たいへんな条件だ。

七十万円の指輪と引きかえに、信二を連れ帰り、あきるまで、自分の店で使いたいというのである。あきたらほかへ売り飛ばす、と毒々しくいう。

きつと、ママが夜、寝台で使用するように使ってみようというのだろう。

○

ママは、この申出に、一時は心がうごいたみたいだったけど、思い直して、やはり断わった。

信二の価値は、七十万円なんてハンパなものでなく、これからも、サービス料をかせぐ金の卵なのだ。

だいいち、信二がいなくなったあとの、夜の淋しさと不便さは、考えただけでもゾッとする――。

しかし、清子の商談をあっさり断わることは、上客中の上客を、ムザムザ逃がす結果になってしまう。

考えたすえ、ママは妥協案をだした。

七十万円の指輪はいらないから、二、三日信二を連れて温泉旅行にでもおいでになったら……。

『先生、そうなさいませな』

ミッチイと二人で、一生けんめいゴキゲンをとったら、案外あっさり清子は断念した。考えたすえ、

『いいわ。指輪はママにあげる。そのかわりシンを一週間だけ借りる』
と、いう。

東北方面を、一とまわりしてくるので、そのあいだだけ、お供に貸せというのだった。こんな相談が、当の本人の信二の一向知らないあいだにまとまって、信二は何がなんだかわからぬまに、レンタ・サービスで、運転手つきで借りた大型外車にのせられた。

○

旅の行く先々で、強制された、さまざまの行為と屈辱を、信二は永く忘れることができないであろう。

東京の、ママやミッチイから、遠く離れた解放感がそうさせるのであろうか、旅先での大木清子の命令は、マミイ美容院のマッサージ台のうえで、ママやミッチイの目のまえで

やらされた、恥ずかしさのつきまとう責めより十倍も二十倍もきつかった。

清子の、人一倍重たい尻に押しつぶされ、そのままの恰好で、あの不快なものを、始末させられた不快さ。

ママや、ミッチイの同じような行為なら、べつに抵抗もなく、むしろ平然と受け入れられたのに、大木清子の同様な命令は、反吐のでそうな不潔感がつきまとう。

ママやミッチイは、ムチだって、やさしく加減してあててくれるので、その雨を浴びても、なんともなかったのに、人一倍、大力の清子が、ちからを入りゃいいとばかり、振りおろすムチは、恐怖でさえあった。

清子は、一人で、満足そうに、一と晩じゅう、信二をもてあそぶのだった。

でも、こんなくらしに、三、四日つづいて大木清子の残酷な振舞が、慣れたら、そう苦痛でなくなってきたのは、奇妙なことであった。

ママのやりかたが、ぬるい湯加減とすれば大木清子のそれは熱湯。

力のよわい、ミッチイのムチでは、物足りないときも正直のところ、あったが、大木清子のは、それより二倍も三倍もつよく、した

がって、肌にあたる音も冴えて、いっそこころよかった。信二は、だんだんと大木清子に惹かれていった。

○

旅行から帰った信二は、疲労が出たのだから、ボンヤリと、辛く、そして楽しかった大木清子との旅の思い出にひたった。

いよいよ明日は東京へ、という前夜に、お小遣いに、と十万円くれた。

思いがけない大金だった。

そのかわり、と、また清子は、とんでもないことを要求した。

『あたしを忘れないように、おまえのからだへ、あたしのイニシャルを、イレズミにして残したい』

と言いだし、

『すこし、チクリとするけど、がまんするのよ』

と、たくましい太腿で、信二の胸をおさえ込み、右うでのつけ根に、"K・O"と、小さいく英字をいれた。

趣味で、イレズミを研究しているというだけあって、そのいれかたはあざやかだった。

肉いろのバンソウコウの下に、くっきりとK・Oの二字がかくし彫りされ、さすがのマ

マも、ミッチイも、そんな、とんでもないおみやげに、気がつかない様子だった。

きつと、大木清子が、上手に処理してくれたのだろうが、三日経ったら、一センチ四方のあざやかな英字が、肌にハッキリ刻みこまれ、上出来だった。

あらためて清子に、奇妙な愛情が湧いた。

イレズミは、永遠に消えない。これを見ると、なんだか大木清子の所有物にでもなったみたいな気がするのだった。

あの旅行の日いらい、大きらいだった大木清子に、とても会いたくなる。会ってひどい目にあわされたい、と思うのが、じぶんながら、ふしぎだった。

それは、からだにきざみ込まれた、K・Oの二字のせいかもしれない。

そんな考えに、つい手がおろそかになる。

○

しごと中に、ボンヤリしていて、信二は、ついとんでもない失敗をやってしまった。

バーのマダムだという、これも上客の、中垣妙子という客の右のうでに、ピンを持つ手が狂って、大量のオキシフルを、たらしてしまった。

原液だったので、したたったオキシフルは

中垣妙子の、たいせつな右うでを、灼いてしまった。

あわてて外科医の治療を受けたが、どうしてもヤケドのあとは、のこると言われた。

美容整形で、キズはあるていどかくせてもやはり完全にもとのようにはならないのだった。

妙子は、商売がら、ドレスにしろ、セーターにしろ、素肌を人目にさらすことが多い。一年中、右うでを出したままなのだから、そこへ、ヤケドのあとがあったのでは、かえって逆効果だ。

妙子は、店へきて大声でわめく。

『大損害だわ。弁償してちょうだい』

妙子の、ラチがあかなければ、裁判にかけてでも取るという申入れも、無理ではなかった。

○

店先でわめかれては商売にさしつかえる。

困りきったママは、七十万円のダイヤを金にかえ、それに現金を合わせて、二〇〇万円の金を、妙子に支払うことで、ようやくケリをつけた。

『この損害は、ぜんぶ、おまえの責任よ。いままでより、もっとうでによりをかけて稼い

で儲けを返えしておくれ』

ママあての二〇〇万円の借用証と、責任を負うという誓約書を書かされた。

でも信二は、一生かかっても、そんな大金を返済できるアテはないし、ママも取りたてようとは思っていない。

つぎつぎ、やってきては、アバンチュールをもとめる女性たちに、信二を売れば、そのくらいの金は一年で取り返せるだろう——。

信二は、骨を粉にする決心をした。

○

そんな矢先に、とうとうK・Oのイレズミを、ママにみつかったしまった。

『なぜかくしてたの？ おまえのからだは足のつま先まで、あたしのものだということをお忘れなんだね！』

K・Oのインシヤルが、大木清子のものであることは、信二が白状するまでもなく、ママには、ちゃんとわかる。

それはそれでよいとして、清子からもらった、十万円の金をかくしていたのがバレたから、ママは烈火のようにおこった。

それはジェラシイかも知れない大切な商品を大木清子なんかに取られてはたまらないという商売上の必要からかも知れなかった。

ママは、このさい、信二の眼玉を火で焼いても、信二の頭のなかから大木清子を消し去らなければ、と思った。

『ミッチイ、どうしよう』

○

首環の金鎖が床に垂れ、その鎖を、かたちのよい足が踏みつけている。

信二は、鎖を耳もとで踏まれているので、身うごきが全然できない。

踏む足から、上を見上げると、そこに、ミッチイの顔があった。

ママにいつけられて、これから思い切り小気味よく仕置きを加えて、信二の頭の中から、大木清子の名を抜き取る処刑がはじめるのだ。

ママは、さっきから、もう何十ぺん、ムチを振りおろしたことだろう。

まるで、手がしびれてしまったが、まだ、怒りがおさまらない。

ミッチイは、ようしゃなく、鎖を踏みしめた。

はじめに手をつかって、グイ！ と二〇センチほど首を持上げては、ドシンと床につきおとし、さらに念を入れて鎖を踏みしだく。それを、ママのムチのテンポと合わせ、さ

もおもしろそうに一、二、三、でやるのだから信二の苦痛は、たいへんだった。

死なせたくなけれど、その寸前まで行かせてやろう。そうしたら少しはこりて、不快な秘密をつくるようなマネはしなくなるだろう。

ミッチイは、ママに、いいところをみてもらいたくて、ちからいっぱい、ラグビーかフットボールのボールをけるみたいに、信二の頭を、けりつけた。

ムチや、足げりより、踏みしだかれる、鎖の重たさが、身にこたえる。

でも、いま、じぶんのど首に、ミッチイの全体重がかかっていると思うと、信二は苦しいより痛さより、うれしさが先に立ってしまう。

目のまえに、ミッチイの脚がおがめて、幸福だった。

『強情っぱり！ まだ改心しないか！』

ママは、上ずった声で、責め立てた。

『エーイ、こうしてやるから！』

気のみじかいママは、ムチをすてて、立ち上がり、信二のせなかを、まるで床のカーペットでも踏みにじるように、クツのままで、ズカズカと踏んだ。

信二は、まったく無言で、動こうともしない。

ここに至っても、まだ大木清子のことばかりめきれないのだ。

いま、せなかを踏むママの、かたちのよい足が、あのみにくい大木清子の足にみえてくる。

大根のような太い足に、無理矢理、キスさせられた、あの夜の、苦しいなかの、酔うような情感が胸にせまる。

ママとミッチイの二人合わせたポリウムがちょうど大木清子ほどなのがうれしかった。

大木清子には、ママやミッチイが、その足もとにも及ばないくらいの魅力がある。

好みのわるさなんか問題でなく、ただそのケタ外れな、放埒な好みが、信二を引きつけてやまないのである。

『ミッチイ、イレズミをどうしよう？』

ママが、浮々と言う。

『焼いちまおうよ。ママ』

ミッチイの返事は、いつもズバリで、えんりよがない。

おどかしではなかった。

卓上用の、太いガスライターが、ポーツと不気味に燃える。

ポケット用のとちがって、その火力は何倍もつよい。

ママは、ミッチイに手伝って、いきなり信二の右うでをあげさせ、にくらしいK・Oのインシャルに、火焰をあてた――。

ヒフがジリジリと焼けただれ、毛のこげる異臭が立ちこめた。

信二は、まるで焼火ばしを、肉にあてられるようなショックをうけた。

しかし、鎖を踏まれているので、逃げることはできず、ペロリと、K・Oの文字の刻まれたヒフがはがれるのを、アリアリと感じ、そして、失神した。

『こいつ、生意気に、失神したわ。まるで人間と、おなじじゃない』

そんな、とくいげなミッチイの声を、ゆめうつつに聞いた。

『このまま死んじゃったら、めんどろだわ。』

そうだ、二人仲よく、よくきくクスリを、めぐんでやろうよ』

ママは、いいながら眼くばせして、ミッチイにも、じぶんとおなじポーズをさせた。

○

……完全に失神した信二の顔いちめん、それから胸にまで、レモンいろの雨が、いきおい

SC.R. (性問題相談室) 開設

担当……弓削性科学研究所長 医学博士 弓削達人先生

他人に打ちあけ難い悩みなどについて

編集部の長年の懸案であり、近時急速にその必要に迫られていました性問題相談室 (Sex Counselling Room 略称 S.C.R.) を開設致しました。

この欄は無料相談であり、結婚生活一般から夫婦問題、さらにホモ、フェチ、サド、マゾなど性的倒錯に関する悩みの打ちあけ、巾広いカウンセリングに応じます。また誌上公開をはばかれる方には、転送先を明記すれば仮名で解答して差支えないとの御好意あるお申出をいただいております。担当の医学博士、弓削達人先生については、公的な身分はさしひかえますが、某民間病院附属の性科学研究所々長であります。

○ 本誌の愛読者の方で、医学博士弓削達人先生に性問題に関しての解答をお求めの方は、御遠慮なくお便りをお寄せ下さい。

○ 個人の秘密については絶対御迷惑はお掛けいたしません故、御安心の上、何んなりとお尋ね下さい。

○ 誌上に掲載するものについてはすべて匿名とし、御希望によっては先生の御都合のつく限り、直接の解答も致して貰います。

○ 御相談についての診断及び回答についての費用は一切不要です。

○ 宛先は編集部気付、弓削達人先生として下さい。

御遠慮なく相談をお寄せ下さい

よく散った。それは信二のみた夢かもしれないかった。

恵みの滋雨にまぎって、大木清子の、おもかげが浮かぶ。

夢のなかの大木清子は、とてもやさしく美しく、見たことはないのだけど、信二を生んだ、お母さんみたいに見える。

そのお母さんの美しい眼がじっと自分に注がれている。笑っているような、叱っているような、またたきが見える。

『ママ!』

と、声のかぎりで呼びかけたら、じぶんの声で、しぜんに失神からさめた。

どうしても、ここを逃げだして、ほんとうのママのにおいのする大木清子に抱かれてみたいと思った。

もういちど、声を大きくして、

『ママ!』

と、呼んだ。

『バカが、失神からさめたよ』

ミッチイの声がした。

レモンいろの雨は、まだ止まず、あとからあとから、とめどなく信二の顔に降りそそいだ。



登 沢 水

いらいらデート

この間の女は土端場で半狂乱だった。後手に縛り上げた手が、時には掌を開けてもがき時には虚空を掴んだ。もの言いたげな眼に響くの布片を半ば引きずりだすと「もっと強く、もっときつく。……いじめて」とうめく。お望みとあらばという訳で、後手のために誇張された乳房を、くびれるくらいに縄がけしてしぼり上げてやると、一段とうめきは高く、

唇は、わなないた。面倒なので詰物を引き出し、代りに放り出されたままのブルーのパンティーを捻じこんだ。口に溢れると思いきや彼女は積極的にそれを含んだ。すかさず、もとのネッカチーフで吐き出せないように固く縛ると、彼女の望む責めは、再開されるのだ。……

その夜二人は汗まみれの人獣と化し、一方

は満足し、他方は陶醉したのだ。

しかるにである。次の夜、同じ期待に逸りながら責め道具を片手に、彼女の腕に手をかけて唇を合わせようとする、無粋にも言うのである。

「あなたって変態ね。さわられるのもいや。縛るなんて悪趣味よ。私にはそんな趣味ないの。寄らないで」

畜生、なに言ってるやがる。ゆうべなんざ弓になって「とってもしあわせ」って、ほざいたくせに。

勝手にしやがれ。だから女ってのはいやなんだ。てめえだけ良ければ相手のことなんかこれっポッチも考えちゃいねえ。サンザ男を煽っておいて、あげくの果はポイだ。女は性来マゾ性をもっているなんて、どこぞの大学の先生がのたまったけれど、とんでもねえことだ。女の持つてるのはS性のほうだ。少なくとも男をイライラさせるS性は共通してるね。これじゃ今夜は寝つかねえ。夜中に自分を慰めるなんざ、男のすることじゃないよな。

ガール・ハントに世の男共はどうしてこう血道をあげるのか？ それは、「そこに女がいるからだ」と言えば余りに気障な文句に聞えよう。しかし、この世に男と女しかいないのだから、男は女を求めるしか仕方がない。

考えてみれば至極もつともであり、野暮な話でもある。

特に交感感情が芽生え、育ちつつある間は未知の相手に対して新鮮な好奇心で「あれかこれか」とくよくよし、試行錯誤をくり返す道程というものは俗に言うスリルとサスペンスに満ち、ある時はM的に、ある時はS的な心の動きに、身を焦すものなのである。

今日のデートの相手のO・Lは、初めての経験の気疲れからか、先にスヤスヤと寝息を立てはじめた。色白の面長な、あどけない顔を眺めていると例の気がさしてきて、ぐっすり寝こんだのをみとどけると、ネグリジェのボタンに手をかけた。ゆっくり脱がせてやると、下はピンクのパンティー一枚きりだ。透明のそれはピッチリと腰部を掩っている。紐で両手を前縛りにし、更に縦にまわして、ぎゅちりと固定しても娘は気づかない。そこで使い古された猿轡の黒いベルベットを唇にかましてから、もう一度うなじをまわして唇を包んだ。軽い呻き声が出て娘は身もだえしたがそれなりに、また深い眠りに落ちこんでいった。

やがて、束縛された手の痛みと、猿轡の息苦しさから気がつくであろう。その時、この若いO・Lは、どう反応するだろうか。……その時まで未だ間がある。その間、筆のすさびを楽しむのも、また一興である。

ここでは、プレイという非常に特殊な条件の下に現れる女のもつS性ではなく、男を焦燥感におとし入れる、無意識又は意識しての女性一般のS的言動に、触れてみるつもりである。

最も一般的なのは、古典的にいえば出逢いの場面である。いい男が小娘一人を待って、眼を血走らせイマカイマかとイライラしているのなんかはポンチ絵にもならない。今の電車で来ないから、次の電車だろう。これでもないからもう一本だけ待とう。喫茶店なら、腰が落着かず、入口の自動ドアが開くたびに背伸びする。まわりの男は女の子とサッサと行ってしまう。約束の時間はとくに過ぎて三時間、とうとうあきらめて一人分のコーヒー代を払って出る時のみじめさ。レジの娘っ子の顔をまともに見られない。

女の子を憎む前にテメエがいやになる。件の女の子はそれ程熱心ではありやしない。男が喫茶店で待っているのを見ると、しかも人待ち顔でキョロついてるのを見れば、すっかり馬鹿らしくなってしまう。別の喫茶店でジャズったり、トイレでゆうゆうと用を足しているんだな。

次の日、女の子をなじれば、答えはおおむね定まっている。「行こうと思って家を出たのよ。そしたらね……（後は時と場合で色々文

句が違う適当な理由が入る）」

純情な男の子は大抵がこれでコロリと許してしまう。女に気があるなら、必ず来るのにね。ノボせてるから、真実は口で語られるものではなく行為が証明するものだということも、すっかり忘れている。

逆に女の子を待たせたり、一寸したことでもタイミグがずれると、よその男の子とホイホイ行ってしまう。泣き面かくのはいつも男ばかり。

女の子といっても、今はやりのハレンチ娘ばかりでなく堅気の娘、特に礼儀正しい娘にも男をイライラさせる毒液は内蔵しているようである。以下のお話は、みなお堅い家庭の女共のお話。

女子大に通っている顔見知りの才媛からデートに誘われたので、ついその気になり出掛けて行った。レストランの階段を先に登ってゆく彼女のヒップあたりにパンティ・ラインがくっきりとあらわれ、堅くしまったウェストが眼の前で躍動するのを見せつけられては気もそぞろになるのは当然のこと。

頭の切れる女との会話は面白いが、定着头でっかちの他愛もない話。話題はアブ・ラブ、S・M、サイケデリック、アンダー・グラウンド。そこでやお水水と向けると、満更でもなさそう。インテリの背伸びしている処

女はどのように振舞うか興味津々。

ではと腰を上げてレストランを出る。先に立って歩き出すと、彼女の様子がおかしい。妙だなど思っているとパイと雑踏に消えてしまった。女心となるとやら、土端場で怖くなってしまったに違いない。数日後、分厚い白封筒が届いた。

『実はあなたから申しこまれたデートのこと父に了解を伺ったのですが、父の顔が大変心配そうだったので、私もどうしようかと思ひ悩みましたの。(テメエの方から誘ってきた癖に……。何言ってやがる)でも許してくれただけで参ったのです。(狼の所に来るつもりだったんかよ)あの時、もっとあなたに包容力があれば、私の心ももっと大きく開いたでしょうに。(さんざん、人をふったけたくせに)……』

小娘のくせに仲々味なことをのたまう。背水の陣で敵陣に乗りこみ、もし何かあったらみんなあなたに頼むのよといわんばかり。おまけに禁断の木の果を食べられなかったのもあなたのせいよ、では全くこちらの立つ瀬がない。処女でも本能的に男を虐めるすべを知っているようである。

処女は世故に長けていないせいか、思わぬ時にハッとさせられるようなことを言う。

この間の娘もそうだった。色白の細面の短大出の娘、この女も頭は切れる。デートにち

やんと母親に届済みで来ているのでウツカリ手がだせない。帰途近くの駅に落雷して、暫時前車開通待ちになってしまった。ノー・スリープの真白な腕、純白のスカートから直接間接に彼女の体温が流れてくる。空いている車なのに一向に離れる気配がない。時間も遅いので、彼女の母親の顔がチラついていのに、当人はチャッカリしたもので。「私、雷大好き。このまま降りこめられてもいいわ」などと憎いことを言う。

次のデートの約束を取りつけていると「私でも、とっても興奮してしまいますもの」何故と問い返すと「その理由おわかりにならない? こうして、水沢さんと顔を合わせていると、とっても興奮してくるんです」

余りこちらを興奮させるようなことは、言ってもらいたくないものだと思う。といってハイそうですかと、本気に受けて次の段階に移れば、手痛いシッパイ返しにきまっているのだ。

抱きしめて少しでも情熱的なキスの一つもしてやれば、それだけで、もう必ず後で「あの夜から私とあなたは特別な関係になりました」などと、切っても切れないズルズルの、しめっぽい、うんざりする関係が、尾を曳いてくるにきまっている。御用心、御用心である。おまけに処女との接吻は余り頂けない。下手やれば、土管とキスしているようなもの

だ。面白味も何もない。

読者の中には中年男子が多いと思うが、ハイティーンの娘が時には「小父様」などと馬鹿に気軽にくつついてくるから「俺も万更でもない」などと自惚れて目尻を下げ、いらぬプレゼントをしていると、フィに若い男にイカレられてしまうことがある。何も娘っ子は最初から、あなたに興味があったわけではない。適令の男性は狼になり易いが、中年の男なら割に親切で紳士だし、まあ安全地帯だからというだけの話である。だから若い娘に人生相談を持ちかけられるようになったら、誰かとも中年男と思われているという現実の淋しさを覚悟すべきである。

縛っておいた娘が呻きだしたので、猿轡を緩めてやった。黒いベルベットが唾液を吸ってベトベト。紐をほどいて、右手は右足のくるぶしに、左手は左足のくるぶしに縛り直した。そのまましばらく放っておいて反応をみようと思っていると、また安らかな寝息が聞えはじめた。余程疲れているに違いない。彼女のブラを見つけて猿轡にする。これで時間が稼げたというもの。

女は無意識にでも男をイライラさせる要素をもっているというテーマを提出しているのだが、第一、女の服装等がそうである。男を常に挑発し攻撃を待っているようだが、もし

男が応ずれば破廉恥罪になりかねない。女は罌を仕掛け、かかった男から快楽のみを抽出して奉仕のみさせるのである。

女は美容院に通って何故髪を整えるのか。

それは潜在的な、男の攻撃を待つ挑発的な姿態を用意することにあるとはいえないか。高島田、丸髻の女と枕をかわした男は翌朝、女の無惨に崩れた髪をみた時征服感をいたく満足させられたという。パンティを女性はずはくか。それは脱がされるためにである。脱がされる時、はじめてはいった価値を生ずるのである。だからパンティを脱がされることなく年を取ったハイ・ミスは、いずれイジワルな性悪な女に転落してゆくのだ。奇麗にセットされた髪はそれ故こわされねばならない。美容院に通う女性はすべて男をそそり、やがて襲われ、責められることを願っているといえは過言かも知れない。しかし、破壊される過程で快楽を享受し、奉仕者たる男性を、氣にくわなければ暴行者として告発もできる象徴として、女は頭上に女王冠代りにこれを戴くのであると考えられなくもあるまい。

それに女の服は、つくり方が男と逆なのだろうか。スカートのジッパーやスーツのボタンはみな、左側または正面に位置する男共にワン・タッチではずせる仕組になっている。これを挑発といわないで何といおう。

満員電車で、前の女の背中のジッパーを下

したくなるような衝動にかられなかった人はいないだろう。そしてスカートの中のあのアトモスフェア。無防備な防備。八方破れの構えで、結構道徳という堡壘に囲まれて、男の前を闊歩するのである。これ以上、罪つくりなものはない。

甘い蜜に誘われて手を出そうものなら、痴漢という名誉称号が即座に与えられる。

スカート下のアトモスフェアをのぞかれたくはないとして、女はストラックスをはく。はくならはくでズンドウなやつをはけばよいのに、パンティの線の浮きだすようなやつをはく。スカートなら見えもしないものも、思わせぶりに浮き立たせる。男なら、パンティの色がどんなか、脱がせて知りたくなるではないか。さもなければクイコミ・ストラックスをはく。体の線もこれ見よがしに出す。どうして女は、こうも男の神経をイラだたせるのだろう。

独身の娘のみならず、相手のいる女も同じくイライラさせるといってお話。

Tが唇を許したのは彼女に婚約者ができてからのことだった。二人だけの部屋で、私はTに婚約者があることを知っていたから、激しい拒否にあうものと覚悟して、半ば暴力的に振舞おうとした。

黒いスーツの彼女をやにわに抱き上げ、デ

スクに横たえようと、彼女の両の腕を背中にまわして、右手は抵抗を封じるように押え、左手は彼女の頭を後から抱えるように固定して唇を奪った。唇は柔かく独身者のように、わななとふるえたりはしなかった。軽く身を揉んでいたが、抵抗は間もなく止んだ。ではこれからゆっくりと、もう一度と思った刹那驚いたことにTは自分から求め、更に舌を深く送りこませてくるのではないか。寝室用の濃厚なフレンチ・キスだ。

Tは本当に女らしい、やさしい娘であったのに。こんなキスを教えこむとは、ヤッコは憎いやつだ。恋愛経験者と接すると、ひよつとしたところで前歴男のしつけ方がわかる。男はこの女に普通のキスはフレンチ・キスだけのようにしつけたに違いない。そうでなければ婚約者以外の男に真昼間からこんなことをするものか。畜生め、とヤケにしゃくにさわってくる。それならこちらの流義も披露しよう。

二回目は立たせたままで、両腕をゆっくり後手に組ませると紐で軽くゆわえてやった。そして、右手で後頭部を押え、左手で顎をつかみ上向かせ、長く深いキスをしてやった。一分、二分……息苦しいのか体をよじる。しかし顔はしっかり押えられているので、逃れることはできない。本格的な鼻口を掩う猿轡に似て「ウムウム」とうめくばかり。限界に

達した時、唇をそっと離して軽く抱いてやった。

このサジステイックな接吻に陶醉したのか彼女はそのまま、私の胸に顔を埋め、やがて後手のまま、崩れ落ちていった。復讐は成功した。

その後何回か彼女は私のデートに応じた。避けようとすれば、いくらでも避けられるのに何故彼女はやってくるのか分らなかった。道義感は一倍強いはずなのに。

銀座の地下のスキヤキ屋の階段を降りながら軽く唇をあててやると、別にいやな顔もせずキスを返す。だけど一言「ここじやいや。人に見られる」

食事の後、陽も落ちた街を日比谷へ自然に足が向く。公園の暗がりに入っても気遅れの態もみせずついてくる。前を行くアベックの女の方が、抱き合っている他のカップルの群を見て、急にキスを返すと男をうながして戻って行った。男の意図は失敗したに違いない。こんな時の男は憐れである。Tはとっくに私の下心を読んでいるだろう。

植込の中で抱き合っている一組、男がむさぼるように、ガツガツした様子で女の唇を求めている。この男もまたあわれである。私はテニスコートの金網を背に彼女を抱いた。そしてこの夜も女は私の胸の中に崩れてきたのである。私の気障な言葉が彼女の耳元に囁か

れる。

「もう君を離したくない。今すぐに掠って遠くへ行ってしまうたい」

「そんなこと、できっこないわ」

「がんじがらめに縛ってしまつてさ」

「大きな声立てるわよ」

「このハンカチを君の口に詰めこんで、猿轡してしまふからいいよ」

「私があなたに掠えるかしら」

「君位なら抱いて走れるよ」

「まあ」

「抱いてみようか」

「ええ……でも……」

暗がりでも……

暗がりでも小指をからませて、いいムードである。

ところが、ところがである。日比谷公園の暗がりから明るい街中に出た途端、女は手を振りほどいた。今までのムードをかなぐり捨ててるようにして、普通の娘に立ち戻っていたのである。よくもこう変身できるものだと感心するほど敏速に、そして確実に、先程は、ぐったりと私の胸に取りすがって「好きよ、好きよ」と喘ぎ喘ぎ囁いていたくせに。

私は驚異の眼で見続けたが、彼女にとって二人だけの世界から一般の社会、即ち婚約している娘の世界へ戻ったのだから、当然なことには違いない。私は、彼女が婚前の一刻にスリルに満ちた経験をするための道具に過ぎ

なかったのかも知れない。

誰にも気がつかれずに味わう不貞に似た行為は、問題ではなかったに違いない。問題なのは第三者に知られること。世間態。振舞いの失敗が怖かったのであろう。その証拠に、

後日、彼女の、新家庭で抱こうとした時も、

「ここじゃ人に見られるからイヤ」と言う。

そして衝立の蔭に入ると、例のサジステイックな接吻を許したのでもわかる。

このように、女は自分の欲望を、男の欲求という積極的な行為の蔭にかくれて、満足させるものなのだ。

私は、彼女は独身の最後の青春を、恋のアバンチュールに求めたのだと解釈しているがちゃんとした家庭の娘だけに、女心の微妙さはとりとめない。ただ彼女の婚約者の名誉のために、それ以上の行為は紳士？として差控えたし、現在は何の関係もないことを付言しておこう。

色々といらいらさせられた当事者として、

もう一つだけつけ加えておくと、人妻の場合

は更に策は巧妙である。

東京の有名女子大出であるこの奥さんに、

喫茶店から電話でデートを申しこんだ。夜は

更けていたが、奥さんは早速白いサニーでや

って来た。

主人は出張なのかも知れない。年上の婦人

と話すのは気がねがなくて面白い。普段は

おしとやかで、人前では煙草など吸う様な気配を少しも見せない彼女も、私の前ではハイライトに火をつける。不良染みた行為に魅力を感じずるのかも知れない。スカートがタイトなので体の線がくっきりと脂ののり切っていることを示している。

彼女がS・Mに興味を示すのは主人の飼育が秘かに行なわれているのかも知れない。話がはずむと素養のあるのがよくわかる。緊縛女性の猿轡姿、責め絵に深い関心があるようだ。予め貸しておいたSM文学書？等、どこでどうやって読んでいるのであろう。そんな

な彼女を想像するのも楽しい。話はい線までのってゆく。大いに教育価値のある美人である。

腕時計の日付が翌日になったので車で送ってもらう。二人だけで話したいと言う。密室同様の車の中である。タイトスカートの下のパンティは何色だろうと確かめたくなる。

裸にむいて縛り上げ猿轡をはめて、それから……そんなチャンス到来も間近だ。夢想到に耽っていると、車はいつの間にか人通りの全く絶えた住宅街に入っている。彼女もそのつもりだろうと考えていると車が止まった。

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	三千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文獻味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもつて誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、体験／原稿募集

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号に発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

どうも様子がおかしい。暗闇をすかして見れば、こはいかに私の家の玄関先の道路ではないか。華やかな雰囲気から黙りこくって坐っている私と二人切りになって、人っ子一人いない街を走っているうちに俄かに理性を取り戻したのに違いない。停車して無雑作にハンドルに片手をかけている。もし私がやにわに行動を起したら、いつでもクラクションを鳴らすつもりらしい。警笛は女房の耳に達してしまう。その結果はおして知るべしである。伸ばしかけた手も引っこめねばなるまい。それから小一時間のSM談議。おいしい果実を眼の前にして、おあずけをくわされたあげく「またお逢いしましょうね」でキス一つとはひどかった。

手足を連結縛りにしておいた為に、寝返りもうてないO・Lが、とうとう眼をパッチリと開いて、盛んに拘束された身をもがいている。ブラジャーの猿轡も、はずれかかっている。いじめられることは未経験のこの娘を、陽が昇るまでゆっくりと責めるとするか。今までサンザ女達に毒杯を飲まされたファンマンをこの娘にぶちまけてやる。今度こそは女に復讐してやる。可哀そうだが思いきりいたぶってやるのだ。……その結果が女を喜ばすことになり女への奉仕になってしまったとしても。……しかし、女とは可愛いやつだ。

の笠にかかったような連日の調教を受けながらも、ぴっちり固く緊まっついていて、天鷲絨びろうとのような織毛に柔らかく包まれていた。静子夫人は、直角にかこわれている狭い牢舎の隅で、乳房を押え、立膝したまま、そっと無表情にそれを見つめていたが、地下の階段を誰かが降りて来る気配にはっとして、身を小さくした。

牢舎に近づいて来たのは悦子であった。

「ああ、悦子さん」

静子夫人は、それが恐しい千代や川田でなかった事にほっとして、物悲しげに微笑して潤んだ瞳を鉄格子の方に向ける。

「奥さん。大丈夫？」

悦子は、鉄格子に手をかけながら、牢舎の隅に小さくなっている夫人に声をかけた。地獄の責苦にあった静子夫人を何と慰めていいかわからず、悦子は涙ぐんだまま、夫人を見つめている。

「とうとう静子、落ちる所まで落ちてしまったわ」

静子夫人は、悦子に向かってそういい、強いて笑顔を作ろうとしたが、急にたまらない悲しさが胸底に充満し、ひきつったような表情になった。泣き顔を悦子に見せるのが羞し

いので夫人は顔を横へそらしたが、すると、ますます悲しくなつて、夫人は、がっくりと首を落し、肩や膝を慄わせて鳴咽に喘ぐのである。

「——あれから、私、どうなったのか、まるで覚えていないんです。悦子さん」

静子夫人は、少し落着くと、指先で涙を拭いながら云った。

「氣を失った奥さんを川田さんと鬼源さんがお風呂へ運んだわ。私は二人に命令されて奥さんの体を洗ったのよ。それからまた二人が来て、奥さんをここへ運びこんだんだわ」

「そう。悦子さんが静子の体を洗って下さったのね」

静子夫人は、ちらと羞しげな眼差しを悦子に向け、体を小さくしながら、鉄格子の所へ歩み寄った。

「ね、悦子さん、お願い、しばらくここにいて下さいね。今、静子、とても淋しくて、淋しくて——」

「ええ。私も何かの話相手になればと思ってこっそりやって来たのよ」

悦子は、そういって、格子の傍で、体を小さくしている夫人を見ながら、

「でも、あの連中もひどいわね。あんな事ま

でさせておきながら、奥さんに何も着させずまたここへ檻禁しちまうなんて」

「犬や猿が体に布をつけるなんて生意気だと鬼源さんが云ったわ」

静子夫人は自嘲的な微笑を口元に浮かべてそう云い、

「ね、悦子さん、今、静子が一番心配している事は——」

しばらく口を噤んでいた静子夫人は、その象牙色の美しい横顔を見せ、眼を伏せて云った。

「もし、妊娠したら——ああ、本当にそんな事にでもなったら、静子、どうすればいいのかしら」

静子夫人の閉ざした眼尻から、一筋二筋、涙が糸をひくように流れて、その白い頬を濡らしている。

「そんな事、考えない方がいいわ」

悦子は、今にも声をあげて泣き出しそうな夫人の悲痛な横顔を見て、おろおろしながら声をかけた。

「そうね。貴女のおっしゃる通り、静子、もう何も考えない事にするわ」

もうなるようにしかならぬのだと夫人は、自分の心を叱咤し、悦子にも弱身を見せまい

とするのか、再び、指で涙を拭い、微笑を見せようと努力している。

「ああ、そうだった。悦子さん、貴女、フランス語の勉強がしたいとおっしゃったわね」
静子夫人がふと思いついてそう云うと、悦子は、顔に喜色を浮かべて、

「それじゃ奥さん、私に、これからここで勉強させて下さるというの」

「今の私が貴女にしてあげられるのは、それ位の事ですわ。貴女さえよければ、今日からここで——」

「嬉しいわ」

悦子は喜んだが、その時、地下の階段を降りて来る靴音。夫人も悦子も、はっと顔を硬化させた。

何か高声で談笑しながら、入って来たのは川田と森田であった。

「何だ悦子、手前また静子夫人の傍へやって来てやがるのか。仕様がねえ奴だな」

川田は、森田と顔を見合わせて笑いながら近づいて来る。

「貴方達、何しに来たのよ。今日は一日、静子夫人の調教はしないという約束だった筈だわ。鬼源さんがそう云ったのよ」

悦子は、静子夫人を庇うように鉄格子の前

に立ち、川田と森田を睨むように見て、そう云ったが、

「調教するんじゃない。昨夜、めでたく捨太郎夫人となられたこの奥様に、千代夫人達がお祝いの言葉をかけたいとおっしゃってるんだ。手前が、つべこべ口を出す事はねえ」

森田は、悦子にはげしい言葉を投げつけると、ポケットより鍵を取り出し、鉄格子の鍵穴へ差しこんだ。

「さ、奥さん、出て来な」

鉄格子が鈍い音を軋ませて開くと、森田と川田は、せせら笑うように牢舎の中をのぞいて、小さく身を沈めている静子夫人に声をかける。

「ぐずぐずせず、とっとと出て来るんだ」

森田に大声をかけられた静子夫人は、観念したように体を起し、胸と前を手で覆いながら、体を折り曲げるようにして牢舎から出て来るのであった。

「今日からは、奥さんはこの地下室とはお別れで、三階の特別室で捨太郎と同棲生活を始めるんだからな。おめえも、しつこく奥さんにつきまとうんじゃないぞ」

と、森田は悦子に、高い声で云った。

「そ、そんな——」

悦子は、狼狽して、青ざめた表情になったが、

「何をうろたえてやがるんだ」
と、森田が奇妙な顔になる。

川田が口元を歪めて云った。

「悦子は、その静子夫人から、フランス語なんかを教わる気です。いゝんですよ。なかなか見上げた精神じゃありませんか、親分」
ちえっと森田は舌打ちして、

「冗談じゃねえ。売れっ子の実演スターに、そんな閑なんがあるものか」

森田はそう云うと、用意して来た麻縄を肩から外して、川田をうながし、静子夫人のうしろに廻った。

「さ、手をうしろへ廻して」

これから、千代や岩崎の妾である葉子と和枝達が女同志で飲み合っているという二階の一室へ行くのだと聞かされた静子夫人は、蒼ざむ程に頬を硬直させながら、両手を背後に廻した。

静子夫人にとって、元、女中であった千代の手で、弄ばれる事は何よりも辛い、苦しい事なのだが、それは森田も川田も承知している。

「何か千代夫人がおめえと捨太郎が結ばれた

事のお祝いに、プレゼントして下さるそう
だ。心から感謝して、頂く事だな」

森田は、楽しそうにそんな事をいいながら
スベスベした背中の中程に交錯させた夫人の
手首にキリキリ麻縄を巻きつかせていく。

静子夫人は、翳の深い眼を物悲しげにし
ば、たきながら、首縄をかけられ、川田と森田の
馴れた手さばきで、ヒシヒシと豊かな乳房の
上下に二巻き三巻きと縄をかけられていくの
だ。

「さ、歩きな」

縄尻をとった川田が静子夫人の柔軟で優美
な肩をついた。

静子夫人は、ちらと悦子の方に悲しい影の
射す瞳を向け、柔かい睫毛を慄かせながら、

「——悦子さん。貴女にフランス語をお教え
する自由も、とうとう許されなかったよう
ですわ。でも、静子、貴女の御恩は忘れない。

——左様なら、悦子さん」

静子夫人は、涙のにじんだ睫毛をフルフル
動かしながらそう云い、川田や森田に背を押
され、ゆっくりと歩き出す。

「奥さん、待って」

悦子は、たまらなくなったよう夫人の後を
追おうとしたが、森田がきつい顔で悦子を睨

みつけた。

「この奥さんは、これから楽しい新婚生活に
入るんだ。ケツを追って来やがると承知しな
いぞ」

と、悦子の出鼻をくじくように一喝し「さ
あ早く歩かないか」と、静子夫人を押し立て
て行く。

静子夫人は、もう悦子の方を振向きもせず
憂愁の翳を浮かべた瞳を前に向け、ゆるやか
に双臀をくねらせながら、地下の階段を昇っ
て行くのだった。

中国の秘法

二階の二間つづきの日本間で、朱ぬりの大
きな丸卓を囲んで、千代と和枝と葉子の三人
は、女同志で賑やかに酒盛りを始めている。

昨夜、会ったばかりだが千代は、この二人
の悪女と妙にうまが合い、田代に頼んで一室
を借り、酒肴を運ばせて、お近づきのしるし

にまず一献と、千代が招待した形で、賑やな
女三人だけの酒席になったのだが、田代に頼
まれて、シスターボーイの春太郎と夏次郎が

この三人の悪女の接待役として、顔を出すと
忽ち巧みなシスターボーイの話術に、この奇

妙な酒席は一層活気づいて来た。

「ま、お一つ、おばさま」

などと春太郎と夏次郎は、女形めいたしな
を作って、千代達の酒の酌をし、上海からの
密輸の話で、一座をわかせているのである。

中国人が宝石類を日本へ密輸する時の手段
として、それを肛門に隠してやってくる、と
いう事なのだが、

「一つや二つならとにかく、ダイヤを五個も
六個も、そんな所に隠すなんて、一寸、信じ
られないわ」

と、和枝が酒で真っ赤になった顔をくしゃ
くしゃにくずして笑いながら云うと、

「あら、私の話の信用して下さらないの。で
も、それは本当なんですよ、おばさま。勿論
かなりの修業をつまなきや駄目ですけどね。

ベテランになりゃ五個や六個ぐらい平気でそ
こへ隠してしまいますわ。でも、税関へ来て
おならなんかしてダイヤを吹っ飛ばし、失敗
した人もいますけどね」

と春太郎が云ったので、一座は再び、大笑
いであった。

「それじゃ聞くけど、あんた、そんな芸当を
一人の女に仕込む事が出来る？」

千代が酒に火照った頬を手で押さえながら

春太郎の顔を見て云った。

「そりゃやろうと思えば出来ますわ。私は田代社長の命令で、どうしようもないじゃや馬娘のそいつをセックス出来る位、立派なものに磨き上げたのですからね」

春太郎は得意げに鼻をびくびく動かして云った。

「それじゃね」

千代は、何か意味ありげに含み笑いすると床の間にある立派な鱷皮のハンドバッグを取り、その中から、金で装飾した豪華な宝石箱を取り出した。

シスターボーイも、和枝も葉子も、眼を丸くして、その美しい宝石箱を見つめていたが千代がその蓋を開けた途端、まあ、と眼を見はった。

ダイヤ、エメラルド、オパールなどの美しい宝石類が数個、箱の底に敷かれてある鞆皮の上で燦然とした光を放っていたのである。

「すばらしいわ」

「すごいわねえ」

と、溜息をつくように宝石類に見入っているシスターボーイと二人の女の表情を千代は得意気に見廻し、

「ここに丁度、五つの宝石が並んでいるわ。」

これを全部、あんたのいうよう或る女の体の中へ隠す事が出来たなら、この中の一つをあんた達に——」

そういつて千代は、次に葉子と和枝の顔を樂しそうに見て、

「ここにおいでになる御婦人方にも、一個ずつ差上げる事にするわ」

と、云うのである。

「え？ 私達にも」

和枝と葉子は、びっくりしたような顔つきで顔を見合す。

「そう。これも、お近づきのしるしというわけですわ」

千代は、わざとらしく取りすました表情でそういうと、再び、二人のシスターボーイの方を見て、

「ただし、調教期間は三日間、いいわね」

「三日位じゃとても無理よ」

と、夏次郎が云ったが、それを引き取めるようにして春太郎が

「でも、お夏。五十万円からする宝石が私達のものになるのじゃないの。出来るか出来ないか、やってみなくちゃわからないわ」

と云って、唾を呑みこむようにしながら、

「それで、おばさま、一体、誰にその調教を

しろとおっしゃるの」

「フフフ、その女は、もうすぐここへ、森田親分が連れて来る事になっているの。凄い美人よ」

そう云えば、和枝と葉子は思いついたらしく、同時に口を開いて、

「それじゃ、昨夜の実演スター？」

千代は、樂しそうにうなずいて、

「そう。元、遠山財閥の令夫人、遠山静子の調教をこの二人にさせてみようと思うのよ」

静子夫人と自分との関係を千代は、酒の席で、葉子と和枝に話していた。主人と使用人の関係という事だけが事実で、あとは、嘘と出鱈目を並べたてていたのである。つまり、

千代は、遠山に云い寄られ、遂に肉体関係が生じたが、静子夫人はそれを知って、女中の千代を日夜虐待し、やくざの一人を使って、

千代をこの世から抹殺しようとした。それで千代が相手を殺さなければ自分が殺され

ると覺り、非常手段を使って、兄の川田と静子夫人をこの屋敷へ檻禁したという事で、和枝と葉子の同情をむしろ自分が得ようと巧みな作り話を聞かせたのである。

「あんたが怒るのは無理ないわよ。美しい顔しているくせに相当な女なのね」

「あんたが怒るのは無理ないわよ。美しい顔

などと酔った葉子と和枝は、千代のとった処置はむしろ当然といたたい方で相槌を打ち、そして今、シスターボーイが、静子夫人の調教に成功すれば、宝石が手に入ると聞かされると、

「それじゃ、私達も手伝って、あの令夫人を調教してやるか」

と云って笑いこけるのだった。

そこへ、襖ごしに川田の声がする。

「お邪魔しますぜ」

襖が開いて、森田と川田に縄尻を取られた静子夫人が上体を前かがみにするようにして入って来た。

「待ってたわよ。さ、こっちへ」

千代は、ほくほくした表情で手招きする。

三人の悪女が酒を汲みかわしている、円型のテーブルのすぐ近くに、静子夫人をつなぐ一本のロープが天井より垂れ下がっている。あらかじめ、千代が夫人を女同志の酒盛りの肴にすべく、川田に頼んで用意させておいたものらしい。

川田と森田は、夫人の優美な肩と背に手をかけて、ロープの下まで押し立て、夫人を縛った麻縄にロープをしっかりとつないで立位のまま、そこへ固定した。

静子夫人は形よく整った頬を冷たく硬直させ、軽く眼を閉ざし、肉づきのいい太腿をびったりとすり合わせるようにしている。

「まあ、凄い美人ねえ」

春太郎と夏次郎は啞然とした顔つきで、緊縛された優美な裸身を立たせている静子夫人に喰い入るような視線を向けるのだった。

「何だ。おめえ達は、この美人を見るのは初めてなのか」

森田は、息を殺して夫人の姿態を凝視している二人のシスターボーイを面白そうに見て「元は、大家の若奥様で、静子という今や森田組秘蔵のドル箱スターなんだ」

と教えると、春太郎は溜息をつくようにして、

「噂は聞いていたけど、こんな美しい女性だとは思わなかったわ」

と、飽かずに夫人に見入っている。

「どう、この美人に密輸品運びの秘法を教えしてみる気になった？ あんた達」

千代は、煙草を口に咥えて云うと、春太郎は大きくうなずき、

「私、猛然とハッスルしちゃったわ。ね、おばさま、三日間、この美人を私達に任せて頂戴。御期待に添うよう腕によりをかけるわ」

と、千代に云うのである。

「いいわ。それじゃ任したわよ」

千代は我が意を得たといった顔つきで満足そうにうなずくと、森田に向かい

「ねえ、親分、今日から三日間、この奥様の身柄を私達に預けて頂けないかしら。特別の調教をほどこしてみたいのよ」

「と云いますと——」

森田が奇妙な顔をするので、千代は小声でダイヤを隠して密輸する中国人の話をして聞かせる。

「成程、そいつは俺も一時、考えてみた事がありましたね」

と笑い出し、

「千代夫人の申し出とありゃ田代社長も嫌とは云いせんよ。それじゃ、千代夫人にこの女の身柄をお預けする事に致しましょう」

千代は、これから三日間、この部屋に和枝や葉子と宿泊する事にしたという。その間、静子夫人は、この部屋に体を拘束され、三人の女の監視のもと、シスターボーイより、その秘法を授けられる事になったわけだ。

「ただ、こんな美しい花嫁をもらった捨太郎の奴が、三日間も辛抱しきれねえじゃねえかと、それが心配で——」

森田が笑いながら云うと、千代も笑って、「そりゃ大丈夫よ。捨太郎さんとの夜の交渉はその間もこの奥様に責任を持たせて果たさせるわ。それならいいでしょ」

「それなら文句のつけようがありませんや」

森田は上機嫌で、千代の差し出す酒を、盃を取って受け、うまそうに吸いこんだ。

千代は、したり顔で立上り、静子夫人に近づくと、

「わかったわね。今日から三日間、奥様は私達のいるこの部屋で過すのよ。その間に、すばらしいお稽古事を、ここにいるシスターボーイさんが奥様にしてくれるそうだから」

千代は、さも愉快そうにそう云うと、静子夫人の顎に手をかけて、横へそむけている夫人の顔を正面に向けさせた。

静子夫人は千代の指で顔を真正面に向けると、円卓を囲んで酒を飲む葉子や和枝、そして、呆然とした面持で夫人の肢態に見入っている二人のシスターボーイ達に、何かを訴えるような陰影を湛えた情動的な眼差しを向けるのである。

「それじゃ、俺達は他に仕事があるんで」

森田は川田をうながし、女達にすすめられる酒を適当な所で打ち切って腰を上げた。

「それじゃ、いいな。ここにいる奥様方の云いつけをよく守って、しっかりと調教をお受けするんだぜ」

川田は、静子夫人の少しバラ色を帯びた柔らかな頬を指でつつき、次に、千代達に向かって、

「何か手古ずるような事があったら、床の間の室内電話をかけりゃいい。俺達はすぐにかけるからな」

そう云い残して、森田と一緒に部屋から出て行った。

二人の男が姿を消すと、千代は、「さ、皆さん、この美しい人魚が私達の今日の肴よ。肴の傍へもっと寄って、大いに飲みましようよ」

賛成、賛成、とかなり酩酊した葉子と和枝は洋酒瓶や一升瓶を抱きかえるようにして、美しい人魚の傍へ寄り、腰を落した。

静子夫人にとっては一番恐しい人間である千代とその仲間になった和枝と葉子。この三人が当分の間寝泊りする事になったこの部屋で身柄を拘束されるという事に、底知れぬ恐怖と屈辱を感じて、静子夫人の頬は、青白く硬張っていく。

「何を不服そうな顔をしてるのよ、奥様。私

達は貴女がめでたく捨太郎夫人となられたそのお祝いに、五十万からする宝石を報酬として、そのシスターボーイに貴女を調教させる事にしたのよ」

千代は、そう云って、ぼんやり突っ立っている春太郎と夏次郎に、

「一寸、あんた達。ぼんやりしていないで、その中国流の秘法とはどんなものか奥様にくわしく説明して、調教に入る前の打合せでもしたらどうなの」

千代にそういわれた春太郎と夏次郎は、ふと我に返ったような顔つきになって、静子夫人の左右に立った。

「でも、何だか私、残酷すぎるような気がして来たわ。それに、こんな美しい夫人に、そんなことを——」

と、夏次郎が弱気な声を出すと、春太郎がそれを叱る。

「何いってんのよ。報酬は五十万の宝石よ。それにこれだけの美人、私じゃ、ごつきから胸がわくわくしてんのよ」

春太郎は、急に真剣な、そして、意地悪そうな眼つきになって、静子夫人の悲しげに暗く沈んでいるような横顔を見ながら、その中国の秘法については説明し始める。みるみる

うちに夫人の繊細で美しい頬や首筋あたりが朱に染まり始めた。

「そ、そんな——ひどいわ、ひどすぎます」

静子夫人は、戦慄したよう、びくと体を慄わせると、さっと顔を横へそらせ、シクシクと声をひそめて泣き始めた。

「今更何を云ってんのよ。私達はもう森田親分の許可をもらって、貴女の身柄をその調教のために預ったのよ」

千代は、和枝に差される酒を盃に受けながら、怒ったような声を出した。

春太郎は、調子づいて、すすり上げている静子夫人に語りつづける。

「それにはまず、何度も浣腸して、胃の中のものをすっかり吐き出し、長い時間、マッサージをつづけて、筋肉をゆるめるのよ。そして、まず細いガラス棒から始めて、段々と太いガラス棒に代えて流通をよくし、次にそれを使って、何度もセックスを行ってみる。セックスが円滑に行われるようになれば、もうしめたもので、あとは電気棒を使って、更に口を開け、直腸に至るまで綿棒をつめこんでおく」

そうした春太郎の恐しい説明を聞かされる静子夫人は、堪え切れなくなったようにわず

かに身悶えしながら、嫌、嫌です、とカスレた涙声を出しているのであった。

「随分と手がこんだ事をしなくちゃならないのね。まあ、いいわ。とにかく、あんた達に任せるから、三日間、大いに奮闘努力して頂戴よ」

と、千代は笑い、早速、その支度にかかるようシスターボーイに命じる。

「それじゃ、これから必要な道具類を揃えて来ますわ」

と、春太郎が云うと、千代は、

「今日は、静子夫人の再婚されたお祝いに、何かプレゼントする予定だったのだから、使い古したもののより、真新しいものを揃えてあげてよ。一体、どういったものを集めればいいのか」

懐から財布を取り出した千代は、一万円札を二枚卓の上に置く。

「そんなに費用はかからないと思いますわ。一寸、メモしてみましようか」

春太郎達は、三人の有閑夫人達と額を合わせ、楽しそうにこれから、揃える道具類の予定を立て始めるのだ。

「まず浣腸器だわね。それから便器。これは大きい方と小さい方に分けて、二つぐらい買

って来てよ。あの奥様にふさわしいバラの花模様のついた可愛いのがありゃいいんだけど——」

千代は、春太郎の書いたメモに眼を通しながら楽しそうに笑い、静子夫人の顔をうかがうように見る。静子夫人は、もう涙も涸れ果てたといったような陰影を含んだ沈んだ表情で、しつとりと濡れた瞳を悲しげにしばたいているのだ。

「コールド・クリーム、脱脂綿、ガラス棒五本、電気マッサージ器、ベヤリング玉、ガラス玉、チリ紙——」

千代は、時々、底意地の悪い眼つきを静子夫人に向け、わざとらしく声をあげて、そんなものを読み上げて、

「それじゃ、大急ぎで頼むわね」

二人のシスターボーイがいそいそとして部屋から出て行くと、千代は、静子夫人に眼を向けて、

「さて、これで、奥様に対する私のプレゼントもすんだわ。それじゃ、捨太郎夫人となられた奥様を祝福して、乾杯しようじゃありませんか」

千代は、盃を取って、和枝と葉子を見廻した。

「それじゃ、乾杯」

三人の悪女は一息に飲みこみ、再び賑やかにはしゃぎながら、酒宴は再開される。

「一寸、見てごらんないよ。これが、ここにいる素っ裸の令夫人のありし日の姿よ」

と、千代は、以前、悦子や義子達にも見せた事のある静子夫人の写真アルバムを円卓の下から取出して、葉子と和枝の前に開けて見せる。

「まあ、きれい。この海べの露台に立っているのは、この静子夫人なのね」

それは地中海の黄昏を背景にして、ホテルの露台に立つ和服姿の藹たけた静子夫人の艶やかな姿であった。その美しいカラー写真に見入る葉子と和枝は、幾度も眼の前で緊縛された裸身をさらしている静子夫人とその写真の静子夫人は同一人物か信じられない気分であしかめている。深い藍色地の地に銀糸を散らした美しい和服姿の静子夫人の表情は実に幸せそうに微笑んでいる。

千代は、和枝と葉子がめくるアルバムを横からのぞきこむようにしながら、

「どう、フランス、イタリー、スイス、なんかにこの奥さんは今まで何度も行って、随分と贅沢して暮して来たのよ。それが今じゃこ

のざまさ。全くいい気味だわ」

千代は、静子夫人の昔のアルバムをのぞき見しているうち、何だか無性に腹立たしい気分になって来たらしく、酒をコップ酒に切りかえて、段々とすわった怪しげな眼つきになり出した。

「一寸。こうして私達がお酒を飲んでいるのに、ぼんやり突っ立っていたって仕様がなじゃないか。——をさらけ出しているばかりが、能じゃないよ。唄でもうたったらどうなの」

それを聞くと、和枝も葉子もクスクス笑い出した。

静子夫人は涙に濡れた抒情的な瞳を見開いて、ふと哀れむようなさげすむような表情をして千代を見つめた。

「何よ、その顔」

酒ぐせの悪い千代は、かっとしてコップに入った酒を、ぱっと静子夫人の顔に投げかける。

いきなり顔に酒を浴びせかけられた静子夫人は、思わず悲鳴をあげ、濡れた顔を横へそむけた。

「私じゃ何でも思った事はやり遂げる女なのだからね。昨夜、最初の予定通り、あんたを

捨太郎の女にした。次は、捨太郎の子供をあんたのお腹にこしらえる。必ず、私じゃそれを実現させるからね」

千代は威猛高になって、そう叫ぶと、フラと立上り、

「全く憎いたらありゃしない、この女」

ぴしゃりと静子夫人の頬を千代は平手打ちするのだった。

「そんな乱暴はおよしなさいよ。今日は、再婚なさったこの奥様のパーティを開く予定だったんでしょ」

和枝が酒ぐせの悪い千代をたしなめて、

「私達だけでお酒を飲むなんて変よ。この奥様にもうんと御馳走してあげましょうよ」

「そうね。この美人が酔っぱらう所を私見たいわ」

と、葉子も相槌を打ち、湯呑み茶碗に銚子の酒をなみなみと注ぎ始める。

「さ、どうぞ。たんと召し上れ」

葉子がフラフラと立上り、静子夫人の口元に茶碗酒を押しつける。

「ちよいと、あんた、私の盃は受けられないっていうの」

夫人が眉を寄せて、ふと顔をそむけると、葉子は鼻に小皺を寄せて白眼をむいた。

葉子も千代に似て酒ぐせの悪い方らしく、それに自分の旦那である岩崎が、この女に心を奪われていると千代から聞かされている。嫉妬のあまり、酒の酔が嵩じると狂気めいたとげとげしい気分になって来たのであった。それは和枝にしても同じ事で、

「ちよっと自分が美しいと思って、生意気になつてゐるんじゃない」

と、冷酷な眼つきをわざとらしく作るのだった。

静子夫人に対し、葉子と和枝が次第にそういう陰険な態度に出て来た事は、千代にとっては嬉しく、

「この奥様達は私の親友なのよ。あんな、その方達の盃は受けられないってのは、どういう意味なの。私に恥をかかす気なのね」

と、二人の悪女に呼応したように夫人の顎にぐいと手をかけるのだった。

「そ、そうじゃありません」

静子夫人は、美しい睫毛を細かくおののかせ、今にも大粒の涙をこぼしそうな哀しげな光の射す瞳を千代に向けた。夫人にとって、こうした千代を含む邪悪な三人の女のなぶりものになるという事は、鬼源の悪魔的な調教を受ける事より辛いおぞましい事であるに違

いない。それは、千代も心得ていて、だから葉子達を仲間にし、夫人を三日間も自分達女だけの寢室へ拘束、徹底的な恥辱を与えようと計画したのであった。

「さ、飲むのよ」

千代は、夫人の脂肪のしぶきで光るねっとりした肩に片手をからませるようにし、茶碗酒を夫人の紅唇に当てがった。

夫人は観念したよう瞼を閉ざし、茶碗に口を当て、無理やり流しこまれる日本酒を必死な思いで一息に飲み乾してしまふ。

「お見事、お見事。なかなか飲みっぷりがいいじゃないの」

三人の悪女は、少女のようにはしゃぎ出し更に茶碗へ酒を注ぎ始めた。

「もう、もう飲めません。勘忍して——」

静子夫人は、すでに桜色に息づいて、羞しげな風情を見せて、顔をそらせる。

「私達三人の盃を受けて頂くわ。さ、次は私よ」

和枝が次に茶碗酒を夫人に無理矢理押しつけるのだ。

「男が女をものにする場合、酒を飲ませて酔っぱらった所を狙うでしょ。それと同じよ。まず、今日は奥様をうんと酔わせてから、ホ

ホホ」

千代は、何か邪悪な意味ありげに妖怪めいた微笑を口元に浮かべた。

「それに、奥様もお酒でもうんと飲んで大胆にならなきゃ、これからシスターボーイが行おうとする調教がまともにお受けになれないと思うんだけど」

葉子もからかうように夫人の耳もとにささやきかける。

千代は、それを聞くと、も一度、宝石箱を取出して、今度は、それを静子夫人の眼に示すのである。

「これはね、奥様が秘蔵しておられた宝石類よ。以前、フランスやイタリアに外遊されていた時、金のあるのに任せてお買いになったものでしょ。どう、この宝石類を見ると、はなやかな昔がしのばれてくるんじゃない」

千代は、物悲しげな光を帯びた夫人の美しい瞳を楽しげに見つめて、

「ホホホ、まさかあの当時、この見事な宝石が、奥様のその美しい肉体を責めさいなむ事になるとは、夢にも想像されなかった事だと思ふわ」

静子夫人は、千代の残忍極まりない着想を知って、思わず体を慄わせ、眼を閉ざした。

「あのシスターボーイに中国流の秘法をしっかりと教わって、この宝石箱の中にある宝石全部を入れて見せない限り、この部屋から出してあげるわけにはいかないのだから、そのつもりでがんばるのよ、奥様」

千代がそういつて笑いこけ、桜色に染まった夫人の頬を指ではじくと、思いつめたような一種悲壮な表情を作って、静子夫人は、さつと顔を上げた。

「お酒を飲ませて——」

自棄になったよう、またこれらの三悪女に挑戦でもするかのように、静子夫人は、はつきりと声を出した。

「そう、そう、そうこなくっちゃ」

千代は、和枝や葉子と顔を見合わせて北叟笑み、笠にかかって、静子夫人の口へ酒を流しこむのだ。

三杯目の茶碗酒を飲まれた静子夫人は、さすがに苦しうに大きく息を吐き、あえぐように顔をのけぞらせる。上気して、体中を熱くし、切なげに息を吐く静子夫人を頼もしげに眺める千代と葉子と和枝。

「だけど、ほんとにきれいな体をしてるわねえ。女の私達だって、何だか変な気分になってくるわ」

和枝が溜息をつくように云い、これじゃ、岩崎がのぼせあがるのも無理ないわよ、と、ブツブツ云いながら、一本のロープに緊縛された優美な裸身をつながれ、立たされている静子夫人の周囲をぐるぐる廻るのだった。

ねっとり白い脂肪を乗せた光沢のある美肌、数本の麻縄を上下にからました見事な胸の隆起、なめらかな腹部、官能味たっぷりの腰部から太腿にかけての優美な曲線、そしてぴったり閉ざした太腿。全体に、柔かい翳をつくっているほのかなふくらみ、そうした静子夫人の美しい肉体のあらゆる部分を飽かずに凝視していた女達は、やがて、最初からの計画であつたらしく、小型のテープレコーダを円卓の下から取出した。

「ホホホ、奥様、随分といい色になったわ。さ、気分のいい所でお酒の余興に何か一曲唄って頂戴」

千代は、レコーダのマイクを今度は夫人の口に近づけるのである。

「お得意の小唄も結構だけど、私、あまりあいうのは趣味がないから、わかりやすいのをお願いしたいわ」

千代は、酒に酔って、フラフラする足を踏みしめながら、マイクを夫人の口元に押しつ

けつつ、

「そら、何時だったか遠山家でパーティがあった時、豪華なイブニングドレスを着た奥様は、余興にフランス人のピアノの伴奏で、シャンソンを唄ったじゃないの。そう、そう、枯葉とかいう唄だった」

千代は、全身に酒の酔いを漲らせている静子夫人を葉子や和枝と一緒にせきたて、シャンソンを唄わせようとする。完全に抵抗の意志を剝奪されてしまっている静子夫人は、瞼を閉ざし、やがて、銀鈴をふるわせるような美しい声で、女達の所望にこたえ始めた。

静子夫人の唄がすすむと、千代は、すっかり上機嫌になり、夫人と一緒に口ずさんだりしながら、眼もさめるような美しいイブニングドレスを着て唄った以前の静子夫人の艶姿を想起している。あの時の白長手袋をした手にバラの花を持ち、美しい声でシャンソンを唄った静子夫人の優美な姿が、まるで昨日の事のように千代の脳裡に浮かぶのだったが、今、三人の悪女の前で、素っ裸で唄う静子夫人の脳裡にも、当時の事が悲しくも懐かしく思出されて来たのだろう。唄がすすむうち、静子夫人の閉じ合わせた瞼から、糸をひくように涙がしたたり落ちるのだった。

ようやく唄い終えた静子夫人に対し、三人の女は大喜びで拍手をする。

千代は、一旦、レコーダを止めると、ますます上機嫌で、

「昔と変らぬきれいな声で、私、とても嬉しいわ」

千代は、シクシク顔を伏せて泣き始めた静子夫人の柔かい肩に手をかけて、

「ホホホ、奥様も昔の事を想い出したのね。

もう還らない昔を今更思い出したって仕様が
ないじゃありませんか。さ、元気を出して」

千代は、ハンカチを出して、夫人の涙をふきとると、

「さて、それじゃ、次の余興をお願いしようかしら」

と、今度は身をかがめ、事もあろうにマイクを夫人のその足元の前へ、近づけるのだった。

思わずはっと腰を引いた静子は、酒気を帯びてバラ色に染まった美しい顔に一層の紅を散らして、

「——な、なにをなさる気なの」

酒気のため、ねっとりとうるんだ妖しくも美しい瞳を悲しげにしばたき、力の無い声を夫人は千代にかけるのである。

「今度は、奥様にここで唄って頂くのよ」

|| 羞しい唄 ||

幾多の上流階級の男達に取巻かれ、チャホヤされ、いくら驕慢の美を誇りつづけていた大財閥の令夫人であっても、一皮むけば、落花無惨の浅ましい姿に変貌するという事を千代は楽しんでいる。一糸も許されぬ素っ裸にされたかつての自分の女主人を今、眼の前に置いて千代は、栄耀贅沢に暮した昔をわざと思出させると同時に現実の惨憺な境遇を対比的に認識させようとしているようであった。そこに静子夫人に対する心理的な虐待を千代は計算していたといえる。

「羞しい唄をうたって頂くわ。いえ、嫌でも私達三人が、これから奥様に唄わせるというわけよ」

千代は、和枝と葉子の方を向いて、おかしくてたまらぬといった顔つきをした。

「録音したテープは、明日、関西へ帰る予定の岩崎親分へのおみやげよ」

「シャンソンとその唄を親分は聞く毎、きつと奥様を懐しが事だと思わう」

女達は、クスクス笑い合うのだ。静子夫人

にうつつを抜かした岩崎に対する嫌がらせという意味もあるのだろう。

「でも、捨太郎さんが唄わせたようにあんないい声が出せるかしら。私達は、女ばかりなんだからねえ」

と、葉子が酒で真っ赤になった頬をこすりながら、舌をもつれさせて素晴らしい、キャッキャッと笑うと、

「出来るか出来ないか、やってみようというわけじゃないの。男なんかに負けてたまるもんですか」

と、和枝がすわった眼で静子夫人を見上げていうのだった。

それじゃ早速、仕度にかかりましょうよ、と女達は、押入れを開け、大きな風呂敷包みを取り出した。それを開けて、搦鉢に搦粉木などを取り出した千代は、和枝に

「責め薬は私と葉子さんが作るから、貴女、その間に、奥様をきれいに化粧しておいて下さらない」

「任しといて。私、将来、岩崎に金を出させて美容院を出すつもりなの。これでもいささか、髪の手入れ、化粧法などの研究はしているつもりよ」

「まあ、頼もしいわね。何も岩崎親分にお金

を出してもらうまでもなく、それ位の事なら私が投資してあげてもいいわ」

「ほんと。じゃ、腕によりをかけてー」

和枝は、ほくほくした顔つきで、かすかにうなだれている静子夫人の、ほんのりと桜色に染まった美しい頬に眼を向けるのだった。

千代が、あらかじめ押入れの中へ隠しておいた化粧箱を出して和枝に渡すと、

「立ったままじゃ、やりにくいわ。一度、椅子にでも坐らせてよ」

そこで、女達は、椅子を静子夫人のうしろへ置いて、縄尻を一旦、ロープより解き、夫人を椅子に腰かけさせた。

春太郎と夏次郎が、道具を仕入れて、戻って来た頃には、和枝にすっかり化粧された静子夫人が、再び、女三人の手で、元通り、ロープに縄尻をつながれ、もう逃げも隠れも出来ないといった風情で、その上背のある伸びやかな美しい肉体をすくと立たせていた。

「まあ、きれい。何だか、くらくらとしちゃいそう」

夏次郎が、陶然とした面持になって、静子夫人の側面に立っている。

澄んだ濃い夫人の黒眼は、酒の酔いのために紅をばかしたような赤みがさしているが、

それだけにぞっとする程の妖艶さがにじみ、まっすぐな柔かい線の鼻や花びらのような形の唇などを備えた夫人の瓜実顔が、化粧された事によって、一きわ美しく映えて光るのである。艶々した夫人の黒髪は品よくアップに巻かれて、千代の思いつきであろう、珊瑚玉の立人好みの簪が横に差しこまれてあった。「一寸今から、この奥様に酒席の余興をさせようと思うのよ。それがすめば、すぐ、そっちの調教にかかってもらうからね」

千代は、二人のシスターボーイにそう声をかけて、葉子と二人、しきりに播鉢の中のどろどろしたものを播鉢で練り続けている。

「一体、何ですの、それ」

春太郎が眼を丸くして、別の容器に入った青い汁、赤い汁を播鉢の中へ注ぎ足している千代に云うと、

「鬼源さんに教えてもらった、いい声の出る妙薬なのよ」

「まあ、いやーだ」

二人はすぐにその意味を知って、顔を見合わせ、クスクス笑い合った。

色々な薬草の煮汁を混ぜ合わせたというそれを持って、千代と葉子は、わざとらしく、静子夫人の足元に坐りこみ、なおも熱心に播

粉木ですりながら、楽しそうに夫人の顔を見上げた。

「ホホホ、如何が、奥様、見ているだけで、体がカッカと燃えて来たんじゃない」

ふと、悲痛な視線を走らせた静子夫人は、忌わしいものを見たように顔をそらせ、なややかな、甘い身悶えを始めるのであった。

「もうすぐだから、おとなしく待っているのよ。まあ、見るからに痒そうな色になってきたわ」

「――や、やめてっ。それだけは、それだけは嫌っ」

静子夫人は、そうした千代の心理的ないたぶりに遂に耐え切れなくなったよう激しく首を振り出した。そのような責め薬を一度鬼源達にぬりたてられ、夫人は気が狂いかけた事がある。今、それをここに三人の女が試みて、狂乱の極にのたうたせる気であることを知って、夫人は、切れ切れの声で哀願を重ねるのだった。

それを小気味良さそうに千代は聞きながら意地の悪い眼つきをし、夫人につめ寄り、酒くさい息をかける。

「私はね。白々しくすましてこんでいる奥さんを見ると妙に腹が立ってくるんだよ。泣いた

り、わめいたりしてくれた方が、とても気分がいいのさ」

と、葉すっぱな口調になった千代は、

「こいつをたっぷりぬりこめられりや、嫌でも私達の前で羞しい唄をうたわなきゃならなくなるのさ。腰を大きく振りながらね」

そして、千代は、さも得意そうに、風呂敷包みの中から紫の絹地の布をねじり合わせて作った一本の長い紐を取り出した。

「葉桜団の銀子に聞いて、これは作ったものよ。そら、ここについてる大小二つの鈴は、鍍金じゃなくて純金で出来てるのよ。奥様の寝室に飾ってあった金の彫刻をつぶして、特別に作らしたものの。何しろ、元はといえば、大財閥の令夫人、これぐらいの小道具をお使いになってもいいと思うわ」

美しく巻き上げた黒髪に立人好みの珊瑚の簪、その小粋な髪型の静子夫人を、色っぽい紫地の長紐で股間縛りに仕上げようと千代は楽しい気分で、こうした計画を練ったものだと思われる。

「痒くてたまらなくなれば、すぐにこの縄をキリキリとかけてあげるわ。そこで奥様は御自分で一生懸命腰を振り、御自分で悩みを解決すればいいわけよ。わかったわね」

千代は、酒の酔いと女達三人のなぶりものになるという屈辱に、全身を火照らせ、顔を伏せている静子夫人にそう浴びせると、挿鉢をねる手を止めた。

傍に立って、いい年をした女三人が、一糸まとわぬ美女を責めようとする光景をニヤニヤ眺めているシスターボーイ二人に、急に千代は、鋭い調子で云う。

「ここは女同志に任せておき、あんた達は隣の部屋で、静子夫人調教のための支度にかかりなさいよ。奥様の余興が終れば、すぐ調教にかかるからね。浣腸の支度でもしとかなきゃ駄目よ」

つまり、ここは女だけの秘密、男の立入りは無用と千代は云うのだった。

「あら失礼しちゃうわね。私達は、これでも女のつもりよ」

などと、夏次郎は、くねくね体をくねらせながら云ったが、何云ってんのよ、早く、どいたり、どいたり、と和枝と葉子も、自分達の秘密を他人に知られるのを恐れるのか、二人のシスターボーイを挟みつづきの隣の部屋へ押しやった。

「さて、これでここは女だけの世界よ。何時か奥様、鬼源さんにお習字を習った時、うん

と羞しい目にあわせて、と口走ったわね。今日はお望み通り、私達女三人が、気が狂う程羞しい目にあわせてあげるわ」

千代は、そう云って、がっくり首を垂れ、軽く瞑目している静子夫人に底意地の悪い酔眼を向け、わざと甘ったるく、まといについて「それじゃ奥様、仕事がやりいようお開きになって。ねえたら」

と静子夫人のミルク色に霞むムチムチした太腿を指で突くのだった。

そんな千代のふざけたポーズに和枝も葉子もならって、同じよう夫人にねばりつきながら、

「ねえ、ぐずぐずするの嫌い。私が——にたっぷりおぬりするわ」

「それじゃ、私が——に」

三人の悪女達は、自分達が一つのものを共有する秘密を楽しみ合うようにして、静子夫人をいたぶっている。

静子夫人は、それでも優美な二肢をびったりと閉じ合わせていたが、身裡にふき上って来た或る衝動を打ち払うように首を上げると眼は閉ざしたまま、

「お願いです。お酒を、お酒を——」

と、悲しげな横顔を見せて、呻くように口

を開くのだった。酒の力で、この女達になぶられる血を吐くような屈辱を耐え、何とか自分の神経を麻痺させようというのか。

「いいわよ。お酒なら、いくらでも御馳走するわ。そのかわり——」

千代が含み笑いとすると、静子夫人は、薄くバラ色に染まった頬に更に朱を浮かべ、羞恥に顔をそむけながら、

「——わかってますわ。静子を皆さんで、いじめ抜いて下さいまし。うんと生恥をかかせて——」

静子夫人の口に葉子の手で再び茶碗酒が当たてがわれたが、すでに三杯もの酒を飲まされている静子夫人は、神経はそれを求めても、もう飲める筈はなかった。

「なんだ、だらしない。もうすっかり酔ってるんじゃないの」

女達は、つながれているロープを揺らして夫人の足が乱れているのを見て笑い、

「さ、せっかく注いだお酒だから、がんばって飲むのよ」

と、夫人の唇を割って茶碗を押し込み、酒を流しこんだ。

襖をへだてた次の間では、春太郎と夏次郎が、夫人を浣腸するための支度にかかってい

る。円卓の上に布団を敷き、その上にビニールを敷き、つまり静子夫人をその上へ仰向けさせ、仕事を始めるつもりなのだ。

洗面器に石ケン水をとかしている二人のシスターボーイの耳に、隣の間の女達の忍び笑い、そして、静子夫人の絹をなぜるような哀泣が聞こえてくる。

「ねえ、お春、あの女達、少し気がおかしいんじゃないかしら」

「気がおかしいというより、女というのはあいう風に一皮むけば怖しいものなのよ。亭主を庖丁でバラバラに切っちゃまうようなものいるからね。男よりずっと残忍に出来ているのよ」

春太郎は、そう云いながら、ガラス製の大きな浣腸器を取上げ、それに石ケン水を注入し始める。

夏次郎は、ふと気弱な表情になって春太郎を見ながら、

「何だか私、良心が痛むわ。支那の売春婦が金儲けのために練習するという珍芸を、あんな美しい人に教えるなんて——」

「今更、何云ってんのよ。乗りかかった舟じゃないか。私に云わすりゃ女が美人だけにむしろやり甲斐があるってものよ」

そんな事を二人が話していた時、さっと襖が開いて、足元をふらつかせた千代が金齒を見せて、入って来た。

「これから、あの美しい婦人が、あられもない声をはりあげて尻振りダンスをおっ始めるのよ。せっかくだから、あんな達にも見物させてあげるわ。いらっしゃい」

そして、千代は、洗面器の横に置いてあった小児用の便器を見て、まあ、と顔をくずした。ブルーの可愛い女児用のおまるには、赤い絵具でバラの花が描かれてある。

「こりゃあんた達いいのを買って来たわ」千代は、その便器を手にし、シスターボーイを連れて次の間に引返した。

「たっぷりとぬりこんでやったわ。フッフ」静子夫人の前と後に腰をかかめていた和枝と葉子は、してやったりとばかりに北叟笑んで同時に立上り、互にハンケチで指先を拭き始める。

静子夫人は、開いていた優美な二肢を閉じ合わせると、紅を流したような頬の線を横へそらし、全身に上気の色を浮かべて、薄く眼を閉じたまま肩で切なげに息づいている。

「どう、可愛いとおまるでしょう。奥様の大好きなバラの花まで描いてあるわ。羞しい唄

▽賞金△

入選作品	一席	1篇	五万円	10篇
入選作品	二席	1篇	三万円	10篇
入選作品	三席	1篇	一万円	10篇
入選作品	四席	1篇	五千円	20篇

▽内 容△

一、特異な風俗文獻誌を標榜する本誌の内容にふさわしい力作を、読む雑誌としての新しい脱皮を企図する本誌の内容充実のため、広く読者の間から懸賞募集いたします。

一、S並にMは勿論のこと、各種各様のフェッショ一般、女性切腹、男性切腹、男女性、禪美、女相撲、女斗美、生首狂崇、変装、妊婦嗜好、見世物奇態珍聞、奇習珍奇風俗、風俗文獻紹介、同性愛、アブラブ等をはじめとして、その他古今東西に亘る特異風俗に関する題材を広くとりあげて下さい。

一、広範囲に大いに新分野の開拓による力作を歓迎します。特に従前本誌にて余り扱っていない分野の傑作をお待ちします。

の録音がすめば、そのままの姿で私達がこれを使わせてあげるわね」

千代は、そう云って、ブルーの小さな便器

をわざと見せつけてから夫人の足元に置き

熱い夫人の頬を指で押して、次の間の方へ夫

人の眼を向けさせた。

「そら、隣の部屋には、浣腸の支度もすつか

り出来ているね。何から何までこういう具合に段どりをつけてもらって、ほんとに奥様って幸せねえ」

千代は、一種の勝利感に酔ったよう、気持ち良さそうに云って、

「如何が、そろそろ薬の利き目が――」

と、眼を細め、夫人の顔をのぞくように見

一、形式は創作、小説、読物などのフィクションも結構ですし、又自らの体験による告白や手記、見聞記、実見談でも結構です。更に論説、意見、エッセイ、感想、手紙、随筆、シナリオ、戯曲などで、如何なる形式でも最もお得意のものをを選び下さい。

▽規定△

一、応募作品は、すべて未発表の自作の作品に限ります。作品中に引用部分があれば、その出処（作者、書名など）を明記願います。以上の枚数は四百字詰原稿用紙換算にて三十枚以上二百枚まで。必ず二百字詰又は四百字詰の原稿用紙をご使用願います。入選作品は順次、締切日は、毎月十五日。一次号の誌上に発表いたします。懸賞応募原稿は、他の一般原稿と区別するため第一頁に「懸賞」とお書き下さい。返信料同封の上、その旨添記して下さい。一、原稿の送付先は、大阪市住吉郵便局私書函第41号、暁出版株式会社、奇ク編集部懸賞原稿募集係宛。必ず郵送（第一種郵便）によつて下さい。直接の訪問は固くお断りいたします。す。採否は誌上発表を以てご承知願います。

つめたた。

やがて、心をそそり立てる程に優雅な、そして官能味を持った静子夫人の腰部が、なよなよと揺れ始める。

「――か、痒いわ」

そんな静子夫人の悩ましいばかりに切ない身の悶えようと、口から洩らすこみ上げるよくなすすり泣きを眼にし、耳にした春太郎と夏次郎は、五体がしびれたような氣分に落入り、息を呑んで見つめている。

「ホホホ、そろそろ奥様のダンスが見られそうね」

「痒い所がかけない辛さ、両手を縛られてい
る事の情なさ、さぞかし骨身にこたえたで
しょう」

「奥様、しっかりね」

女達は、そんな事を云って夫人を揶揄し、一旦、中断した酒盛りを再び夫人の身悶えを肴にして再開したのだが、夫人の緊縛された裸身をくねらすその動きや、一ときわ甘美で激しくなった哀泣は、女達の神経を楽しませると同時に、ふと悦虐めいた高ぶりにもなり彼女達の夫人を凝視する眼は、次第に残忍な色を帯び始めた。

(未完)

フ ォ ー ト

ス ト ー リ ー

私の『S M 日記』

小 竹 一 浩

前文S M 雑記

私はひと頃『SMP』とは、サディスティック・ムード・プレイであって、セックス・ムード・プレイではない』などと妙なことを考えていたものだが、やはり少しおかしいように思い出し、近頃また少し観点を交えるようになった。

プレイの対象が異性である以上、責めの対象も必然的にセクシャルなパートを狙うようにならざるを得まい。まして夫婦プレイなら尚更のこと、S M とは、サド・マゾの略などという、どぎつい感じのものではなく、セックス・ムードの強いプレイであるというべき

であろう。

極論すれば、セックスを意識しない現代Sプレイヤーは、皆無と云っても良いだろう。だからこそ、SMP実践者は高度なテクニックを持ったセクシャルプレイヤーであって最も人間らしい人間であると云えるだろう。これは勿論、対象となる女性も、楽しむ、或いは責められることを承知している場合に限るが……。

とに角、一時氾濫していた「変態」という言葉は、少くともK K 愛好者の中には一人もいないだろう。変な三段論法を用いるまでもなく、S M プレイヤーは、変質者とは全く別のものであるからである。

以前、アフタヌーンショーに出演した一女性が、「女性の幸福は、男性の下に隷属することにある。そんなことをテーマにして踊っている」というような発言をしていたことがあった。誠に名言であると思う。

社会的には男女平等結構。だがセックスに関しては、女性はMであるべきで、隷属（勿論封建時代での意味とは違う）の楽しみが分るようであれば、現代女性に非ずといったら、云い過ぎだろうか。

私もSプレイヤーの一人であってみれば、多分に自画自賛気味で申し訳ないが、こんな意味での斯界最高の名画は、辻村隆氏である。最近の「カメラハント」には、その気持

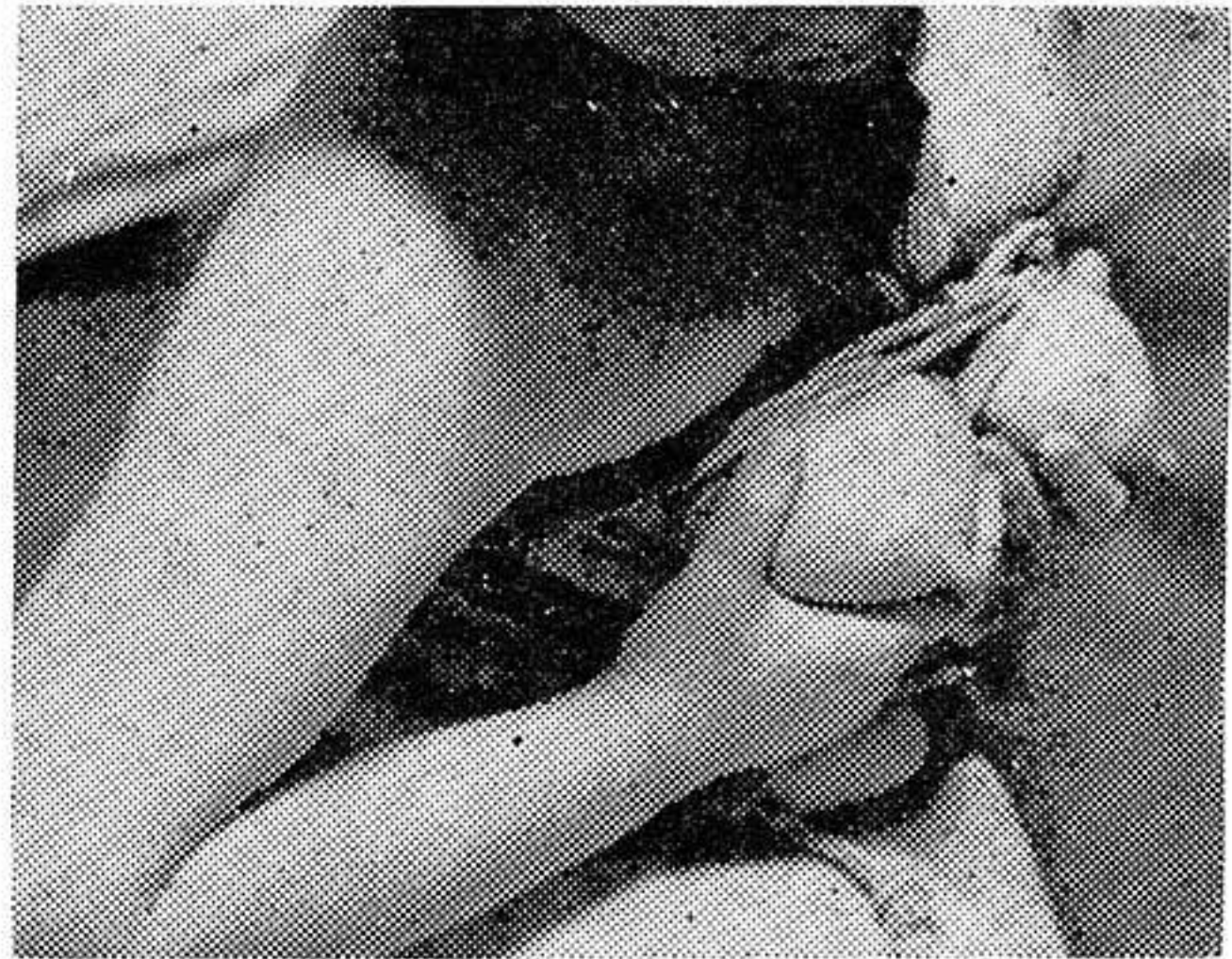
を表現したポーズがふえている。誌面から女臭が立ち昇る感じである。

結論めいたことを云うならば、SMPとはあえてもう一つSを重ねて、SSMP（セクシャルSMプレイ）とでもすべきだと思う。

KK誌上で良く見かける言葉の中に、私には少し気になることがあるので、私流の我論を述べてみたい。それは『若い女性をM化するには、恥しさを取り去ることが、先決と思う』という言葉である。これは大きな誤りであろう。私は十有余年の間に、妻の雪枝の他にも数名の女性とプレイの体験を持ったが、女性特有の羞恥心を取り去ったら、何でプレイの楽しみがあるう、と考えざるを得ない。勿論、そう云って居られる方の本意は、恥かしさを完全に取り去るよう飼育するのではなく、羞恥心をやわらげ、プレイの前進を図るということであろうが、私は、それにも反対である。

プレイの楽しさとは、女性の羞恥、喘ぎ、呻き声、身悶えをベースとして、スリルや優越感を味わうことにあると思う。

「裸になれッ」「ハイ」「放尿しろッ」「ハイ」これではまるでロボットとかわりない。「こらッ。どうしてもしないか？」



「だって……ひどいわ」

「いやなら縛っちゃうぞッ」

「いや、いやよ、アア……」

こうした対話が欲しいものだ。従って数年間、同一女性とプレイすれば、責めの激しさに反比例して興味は減退して行くのは止むを得まい。日増しに強度なものへと移行していても自ずと限界がやってくる。無理してその限界を突き破ったのでは、もうプレイの域

を越えてしまう。私と雪枝のプレイは、もう十年近くなる。雪枝に限らず、常人ならば必然的に羞恥心も薄らいでくるのが、当然だろう。尤も病的に羞恥心の強い女性がいるらしいが、こうした女性にはMにはなれまい。

某夫人は数カ月で完全に飼育したとか、某夫人は数年で何々のプレイをするようになったとか云うことを頭に入れてはいけないと思う。女性のM度は、飼育される度合にも依るだろうが、生来の強弱に大いに左右される。

従って、飽くまでもマイペースで行くべきだろう。却って、短期間で完全(?)飼育された御夫婦には失礼だが、私としては、先行き心配にさえ思われる。

しかし乍ら最初のうちは楽しいものだ。

「いいだろう?」

「だってエ……恥しいワ」

「ちょっとだけだよ」

「でも……じゃ余りきつく括らないでネ」

なんていう対話は、それだけで充分楽しいプレイであろう。又、自分が嵌められる猿轡を縫う新妻や、二人揃ってロープや首輪等を買に行く若夫婦の姿など、考えただけでも羨ましき限りである。

だが時の流れは、無情にもとどまることを

知らない。若夫婦や、プレイを始めて間もない御夫婦は、こうした楽しみを今十二分に満喫して置くべきだとは思いませんか。

兎に角、S Mプレイには、教科書などあるわけではない。羞恥心を取り去り、早く自分の思うように飼育したい等と考えずに、各自のムードをもっと大切にして、ゆっくり、大いに楽しむべきでしょう。

私達のように十年選手になると、楽しいことは楽しいのだが、刺戟も弱まり、多分に羞恥も薄らぐため、何か変ったことはないかと、複数プレイを考えたりするようになってしまう。

主題からはずれるので、もう一言だけつけ加えて「日記」に移ることにしたい。

私の体験からいえば、初縛りから数カ月乃至一年位は、毎日とは云わないが、なるべく余り間隔をおかずにプレイした方が、何か特別のことをやっているという意識が早く無くなるようだ。続けると耐被縛時間が次第に伸びるが、暫く間をおくと手の痛みを早く訴えるようになるし、考える時間を与えることになってしまう。Mへの関心の有無はどうあるうとも、初縛りに成功したら、S Mの良し悪しよりも、それが二人に限られたテクニック

にまで申し切る努力は必要だと思う。

その後は、時折うんと間をあけたりしてみるのが楽しい。とにかくこれは、夫婦だけの気軽な遊びなんだから、肩肘張ってどうのこののと考えこむのもどうかと思う。

正午から零時まで

六月とは思えぬ馬鹿陽気の日の午後。雪枝との十二時間のことを、走らぬ乍らペンで再現してみたい。

「もうすぐ正午だ。あと五分」

「本当にするつもり？ 昼間から嫌だワ」

「心にもないことを云うな」

「まあ。でも食事の仕度をしなければ」

「そんなことはしなくてよい。それより、いつものトランクを此処へ持ってきておけッ」

ロープや責め具の入った大型トランクを、重そうに持って来た雪枝は、「あと四分」という私の声に背を向けると、慌ててトイレへ飛んで行った。

正午のサイレンがなった。

「さア、ユキ、時間だ」

「ハイ」

奴隷タイムに入ったので、ユキは素直に返事をする、ナイロンストッキングから脱ぎ

始めた。

「一寸待て、靴下は脱ぐな、その他は全部」

「だって、あなた……いえ、御主人様が……」

「いいから早くしな」

「あもう、ガーターは？」

「ああそうか、やっぱりみんな脱いじゃえ」

トランクから使い馴れたロープを取り出して、ユキに両手を上げるように命じた。すなおに命令に従う奴隷の乳房の上下を縛り、肩越しにロープを廻してその縄を締め上げる。

別のまだら模様のロープを主縄にからませ乍ら、豊かな胸元をくぶり上げて行く。

「もっとかがんで、胸をそらすんだ。そうそう。そうしてじっとしてろッ」

双丘の麓をぎゅうッと絞り上げて行くと乳房が寄り合って盛り上ってくる。力一杯ロープを絡ませて縄尻を止める。

「ウーッ」

痛いのか。苦しいのか。否、両方だろう。

ユキはそれでも、マリのようにくびられた乳房をじっとうつむいて見つめている。爪先でピンとはじいてみたら、コツンと音がするのではないかと思う程固かった。

「どんな感じだ？」

「とても……」

「とても、どうした？ 嬉しいか？」

「ハイ」

「自分で揉んでみるッ」

「揉むなんて、とても……」

ユキは、こわごわ己れの乳房に手を当ててみて、その固さに驚ろいたように

「大丈夫かしら？」

私も一寸気になってきた。丁度、風船の限界を試すように空気を入れていた時の気分である。本当に、今にも破裂してしまうのではないかと思ったりした。

「辛抱できるな？」

「ハイ、でもなるべく早く解いて下さい」

「よし、さあ手をまわして」

「アウッ、お乳が痛くてエ。これ以上は……」

「はち切れそうだからナ、よし一度解いてやろう。その代り別のをやるぞ、いいな？」

「はい」

ロープから解放された乳房は、麓に紅い縄跡を残して、やっとゆったりとくつろいだ。

「さあ、もう一度両手を挙げて」

何本も付いている縄痕に、少し可哀そうになったが、構わずまた、ロープをしごいた。

胸を8の字に縛り、肩縄で吊り上げておいて、乳枷を使う。



「こらッさっきのようにもって仰向くんだ」

二つの輪をはめ、頂点を細紐で縛る。

「アッタイト」

強く縛りすぎたか、今にもちぎれそうにそののいている。その紐の一端をもう一方の頂点に縛りつける。

「あのう御主人様。右のほうが痛くてちぎれそうなんです。少し弛めて戴けません？」

ユキは、奴隷口調でおずおずと哀願する。

「仕様のない奴だな」

一度解いて縛り直してやったが、大して変らなかったようだ。

「アッ」

「我慢しろッ」

私は、用意してあった碍子の一種と思われる陶器を紐の端に括りつけた。

「さあ手を離すぞ」

「ウッ」

碍子の重みで乳房はキューツと伸びたように見えた。ちぎれそうなこの時の状態を、フォトで見て戴けるかどうか？ どうもフォトの出来が良くないのでどうかと思うが、何とか掲載して戴きたい。

「ユキッ犬のように這うんだッ」

四つん這いになったユキは、眉を寄せ痛みを耐え乍ら部屋を廻り始めた。

「もうひと廻りで許してやる」

犬のようなユキの歩みにつれて、胸からぶら下がってる碍子が揺れ動く。

「ようしッ許してやる。此処へ来い」

またすっかり解き放たれたが、ユキは触れるのも痛いのか、くっきりと跡のついたままの胸元と、その乳首を見つめるだけだった。

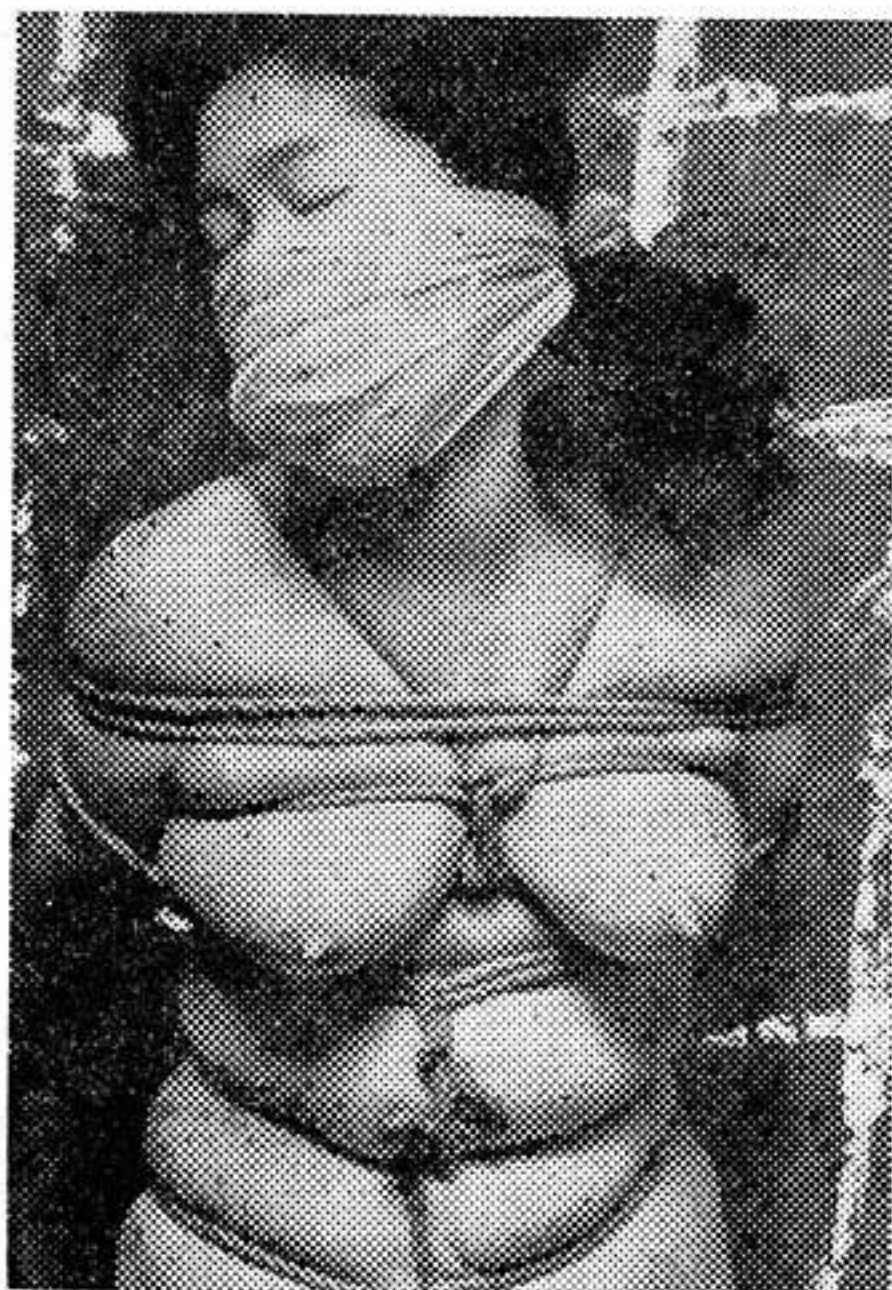
時計は一時半を指していた。

「ユキ、今日は徹底的にやる筈だったな？」

「ハイ。思いつきりいじめて下さい」

「よし。もう一回、乳房責めだ」

「えッ。それはもう……。お願いです。他の



ことならどんなことでも……」

「それじゃ、向うの八畳間に行って、待っているッ。鞭と胸衣を用意しておけ」

「ハイ」

乳房をいたわるようにして出て行くユキの背中にも、数条の縄痕が走っていた。

ビールを喇叭飲みした私は、ロープや乳枷をトランクに押し込み、持って行った。ユキは皮の胸衣を胸に当てて待っていた。

「ばかッ、顔のマスクはどうした？」

「でも、御主人様は猿轡のことは何もおっしゃらなかったものですから……」

「鞭って云ったら、猿轡するのは、わかってるだろう？」

「すみません、今かぶります」

「先にそれを着せてやろう。後ろ向けッ」

背中、胸衣の紐をキュッキュッと編み上げて、下の紐をウェストに巻いて締める。

「プレイパンティを穿いた上に、生ゴムのを穿きな」

「ハイ」

「そうしたら、その上からこのロープで縛り締めしな」

「ハイ」

ウェストを縛り乍らユキは、小声で訊く。

「あのう、もっと締めるんでしょうか」

「当り前だろう。二本まわして、ぎゅうッと締め上げるんだ。……もっときつくしろ」

「これでよろしいでしょうか？」

「いいだろう。猿轡をしなさい」

「ハイ。あのう……口には……？」

「ああそうか、パンティは穿いちゃったんだな。それじゃさっき私の脱いだ靴下があるだろ、洗っちゃったか？」

「いいえ、洗濯機に入ってます」

「よし、それを持って来て詰めな」

「ハイ」

私の汚れてる靴下を、己れの手で

己れの口中に詰めたユキは、皮のマスクをかぶると後頭部の紐を締め上げた。

「ウウウ」

（これでいいでしょうか？）とでも訊いてるのだろう。

「さあ鞭打ちを始めるぞ。その布団の上に転がれッ。手は縛ってないんだから、自由に暴れる。そのかわり、胸衣も着てるし、生ゴムパンティも穿いてるんだから、今日はベルトで叩くぞ」

「ウウ」

私は、鰐皮のバンドを引き抜くと、力一杯ユキの尻に振り下した。素肌を打つ時は相当手加減せざるを得ないが、パンティ等を身につけさせた時は、思いきり叩くことにしている。ビシッと激しい音が部屋中に響き渡る。

二、三十発位までは、両手の自由なユキはベルトの動きに合わせて、痛そうな呻きと共に転げまわる。

しかし、五十発も打っていくとユキの動きは、苦痛の為にではなく、灼きつくような疼きが、彼女のM感覚に適應するらしく、時折ピクピクと動く他は、鞭の味を噛みしめるようにじっとし始めるのがいつものことだ。打ち損じたらしく、太腿に三筋の赤蚯蚓が走っ

ていた。

「さて、一休みしよう」

もう一杯ビールでも飲もうと思ひ台所へ行きかけた時、電話のベルが鳴った。友人からだったが、さっきもかけたが居なかったのだという。鞭打ちに夢中になって、聞こえなかったらしい。相談したいことがあるので、これから行くがいかというので、断わるわけにいかず待つことにした。

「おいユキ。A君が来るんだ。縛っておいてやるから、此処で寝ていろ。いいな？」

ユキの肯ずきを見て、ロープを手にした。後手にして、上半身ぐるぐると縛り上げる。

これだけじゃ何か物足りない。鼻鉤を使うことにした。鉤先を鼻孔に引っかけて、マスクの前額部に付いている輪と結んで引き絞る。鼻はギューッと上を向く。

「ウーッ」

「牝豚なんだから、この方が似合うぞ」

「ウウ……」

何か云ってたようだが、構わずにドアを閉めて応接間を片づける。

「お待ちとおさま、酒屋ですが」

裏口で声がした。

「何も頼まない筈だが……」

「いえ、Aさんが」

「ああそう。じゃ表へまわって」

飲んべえのA君は、持ちこみで一杯飲もうという気らしい。

酒屋と入れ違いにAはやって来た。

「今日は。余り暖かいんで、ビールでも飲もうと思ってね」

「しかし二ダースとは多すぎるな」

「いつも御馳走になってるんでね」

「ところで、相談って？ 大事な話なら飲まないうちに話せよ」

「いや、実はワイフのことだね。まあ飲み乍らにしよう。奥さんは留守かい？」

「ああ、一寸買物に行ってるよ」

この時のA君の話は多少SMがかったもので、此の対話は、稿をあらためて書いてみたいと思う。二人とも良い気嫌になり、A君が腰を上げた時、テーブルの上には、十三本の空罎が林立していた。

時刻は七時に近かった。

私はユキのことをすっかり忘れていた。

（ああそうだった。ユキを縛りっぱなしだったっけ。また寝てるんじゃないかな？）

「おい、ユキッ」

「ウウウ」

ユキは寝ていなかった。手が痺れたのか、眉を寄せて呻く。

上半身の縛めを解いてやる。

「よし、全部脱って」

鼻鉤をはずし、マスクを脱いだユキは、ぐっしょり唾液を吸った口中の靴下をつまみ出すと、

「フーッ」

と大きく深呼吸した。

胸衣だけは自分で解くのは無理なので、私はずしてやる。

「さあ、パンツも脱って」

「あのう……」

どうも動きが鈍いと思ったらネクト（勿論ネクタールを勝手に締めさせていただいた語だが、私達は名詞に用いるだけでなく、ネクトする、とか、ネクトさせるといふ具合に、サ変活用して使ったりする）が生ゴムパンティの中で騒いでいる為らしい。

「ネクトしたな？」

「……」

「やったんだろう？」

「ハイ。すみません」

「よし。そうと来いッ、風呂場だ」

タイルに立たせる。

「ここで脱ぐんだ」

ユキは恥し気に、ゴムパンティを脱ぎ、その下のプレイ・パンティを引き下ろした。

「軽く絞って、口に詰めるんだ」

「えッ？」

「それを口に入れろと云ったんだ」

「ハ：ハイ」

「入れたら、そこにあるガーゼで猿轡するんだ。もっと強くッ」

ユキは、自分の不始末で濡れたプレイ・パンティを己れの口の中に入れ、はみ出した部分を鼻に当て、ガーゼで猿轡をした。

「よし、じゃそのまま立つんだ」

ロープで肩、乳房、胴、そして腿と縛り上げ、跪かせる。

「中途半端な濡れようじゃあ気持ちが悪いだろう。じっとしているよ」

ビールの飲み過ぎで、私も先程から頻りに催おしている。

いわれたとおり、ユキはじっと身動きもせずに、我が身にほとばしる止めどない滝を見つめていた。

「さあ、ここへ来い」

温湯シャワーを浴びせて、ざっと拭いてやり、部屋へ戻った。



「お腹が空いたな」

「ウウウ」

猿轡をとってやる。

「じゃあ食事の支度をしますから、手を解いて下さい」

「支度は要らない。外へ行って食べよう。テーブルの上のビール罎を片付けろ」

「ハイ。では手を……」

「馬鹿、その儘でやるんだ」

「えッ……ハイ」

ユキは後手の儘、二本ずつ台所へ運ぶ。片付けが終って一息ついた、ユキの後手と

二の腕のロープを解き、その分をウェストに締め廻す。

「ユキ。コートを着るんだ」

「あおう、この儘ですか？ 御主人様」

「当り前だろ、それとも痛いかな？」

「いいえ、それは我慢出来ますけど……」

「それなら文句を云わずに、早くしろ」

オール、ウェザーのコートを着たユキは戸締りを終えると、ぎごちない恰好で、表で待っていた私の所へ、小刻みに走ってきた。

「遅いぞッ」

「すみません。御主人様。あおう少しいたくて……」

「辛抱するんだ。今日は久し振りの奴隷タイムだろう」

「ハイ」

それから私達は、寿司屋とバーに行った。

そこでの詳述は今回は抜いて、帰宅してから事を続けたい。何故なら外出した時の話は色々有るし、いずれかの機会にまわしたい。

帰宅時間は十一時ジャスト。

「ユキ。三ツ葉のお吸い物でも飲みたいな。

解いてやるから早く作れ」

「ハイ。すぐ作ります」

ユキは、すっかり解かれた後も、歩き方が

妙に、ぎごちなかった。

吸い物を飲み終わって、また時計を見る。

「ユキ、あと四十分ある。最後にもうひと責めして、おしまいにする。いいな？」

「ハイ。御主人様のお好きなように」

大分酔いのまわってきていた私は、思いきった責めをして止めようと思った。両手を挙げさせ、胸上から細目のロープでグルグル巻きに、すき間なく縛り下ろす。変った縛り方なので、今までの誌上でさえ見たことがないが、やはり、余り魅力的なものではないようだ。しかし本人にとっては、決して楽な受縛

ではないだろう。縄のある限りギリギリ巻きつけて縛ってから、太目のロープで後手高小手に括り上げる。

「どうだ苦しいか？ 気持ちいいか？」

「ハイ。苦しいけど……とても……」

「よし、これを嵌めてやるから、零時までそこに立ってるんだぞ、いいな？」

「ハイ」

針金で作ったものを、鼻孔に当て、大きく口を開かせて下歯にかませる。これは時折、使うが、これだけでもう一切の発声を妨げることが出来る。口を閉じようとすれば、鼻を

突き上げる結果となり、仲々辛いものだ。

私がもしユキの立場で、奴隷役を果すとしてこれをかけられたら、と思ってみるが、ユキほどの耐久力はなさそうだ。そこはM性強き上に、十年選手のキャリアが物をいうのだろうか、この辛い筈の針金轡をかけられたままで、ユキは時折り片眼をつぶるようにすることがある。

痛さに顔をしかめるのかとも思うが、どうもウインクのようなのである。だとすると、奴隷のクセに御主人に対して秋波を送るふときき者ということになるが、帰するところは、辛いものだろうとは私が想うだけで、かけられた当人は、さほどのことにも感じていないらしい……というのは、口を開けているから、ヨダレが出てくる。時々拭いてやると、その片眼のまたたきが起る。だから、一度訊く必要はあるが、そうだろうと思う。

残っていたお吸い物を飲んだり、寝る支度をしているうちに、時計の長短針が重なり合った。

十二時間の奴隷タイムは、私にとっても、結構重労働で疲れたが、反面楽しくもあり、珍しくも床につくや否や、深いねむりに入って行った。

☆奇クサロン☆原稿募集

一、大好評の「奇クサロン」の掲載に適した短文、写真、絵画を求めます。

一、内容は本誌の編集方針にふさわしいもので、寄稿家編集者執筆者に対する呼びかけ、読後感、感想、批評、映画鑑賞、短信往来、SM時評、図書雑誌紹介、見聞記、詩、歌、川柳、漫画、諷刺、などなど。

一、投稿には必ず「奇クサロン原稿」と明記して下さい。誌上の匿名は御自由ですからペンネーム（筆名）を添記して下さい。

一、採用の可否に拘らず応募下さった方全員に対して編集部作成のフォトを贈呈いたします。

す。贈呈フォトの枚数は作品の出来に従って増減いたします故御承知下さい。

一、誌上に掲載しました作品に対しましては枚数に応じて稿料又は謝礼を呈します。

一、奇クサロンに掲載可能な絵画、写真、映画スチール、イラスト、漫画などに対しましても応募者全員に編集部作成のフォトを贈呈いたします。優秀な作品は誌上に発表の上、画料をお支払い致します。

一、編集参考資料の提供に対しましては、出来るだけ高価に購入したいと思しますので、お手放し可能の方は内容の詳細に希望価格を附してお申込み下されば、折返しお返事差し上げます。

懸賞入選作品

創作

青と赤の蝶

—ある若き女性の刺青願望—

小谷和勝



二十才。F短大卒。M商事経理課勤務。友成順子こと『ジュン』は当世風の派手さはなかったが、芯はしっかりした、おとなしい娘である。

美人ではないにしても、眼もとの小さなホクロが妙に男心をそそり、今までも云い寄る男もないではなかったが、何故かジュンは、いつもひとりであった。といって決してジュンが、男嫌いのカマトトなわけではない。昼休みなど適当に同僚達とは、社内の男子社員の容姿評定にも参加しているし、エッチ談義

に花を咲かせることもある。

郷里からも、二、三度縁談もあったが、ジュンはその都度、適当な口実を設けてそれを断りつづけてきた。

理由はある。だが、ジュンはその理由なるものを、他人は勿論、両親にもうちあけはしないだろう。とうてい理解されることはない。とわかっていからである。

人間の顔や性格が、一人一人異なるように性本能にたいする欲望も千差万別である。例えば、異性の容姿、裸体等を見ただけで、そ

れを感じる人もいるだろうし、春画やエロ写真でそうなる人もいるだろう。また、異性を虐待したり、反対に異性から虐待されることによって欲望が満たされる人もいる。

ジュンの場合はその対象が肌に彫られた刺青だった。

刺青は人間の装飾本能を満たすために、太古の昔から、世界のあらゆる人種の間で栄枯盛衰をたどりつつ、今日の文明社会の中まで継承されてきた風習である。

日本の刺青風俗は、外国のそれに比べると

余りにも神秘のベールに包まれすぎてきたため、刺青という言葉すら、偏見視されている現状である。つまり、犯罪者、ヤクザ者等に「いれずみ者」が多かったため、刺青の本来の姿が誤解されているのだ。

ジュンのような若い女性が、刺青に異常な興味をもつということは、ジュンにしてみれば、決して悪い事をするでもないのに、何故か、それを人に知られるのが怖い。だからといって、刺青への欲望を絶ち切ることはとても出来ない。もしそれが人に知れたら、ごく普通のオフィス・レディが……と世間は冷めたく見るだろう。

だが、世の中というものは、所詮、こうしたものではないのだろうか。国民が選んだ良識ある政治家が平気で汚職をやり、貞淑なはずの教育ママの中にも陰で売春をしたりする者が現われる現在である。

ジュンが始めて「いれずみ」を見たのは、ジュンが五才か六才の頃であった。

母につれられて入った銭湯で、まだ若い女の二の腕に彫られた、二輪の真紅のバラの花を見て、子供ごろにも綺麗な印象を持って映った。勿論、まだ刺青に対して、どうのこののと云う年頃ではなかったが……。ただ、

湯の中で見え隠れするバラの花の美しさだけが、小さな胸の中に残ったのをジュンは今でも憶えている。

その若い女の刺青が、よほど珍しかったのか何の気もなく、その女に聞いた。

「おばちゃん。そのお花、お湯の中に入れても消えないのね」

若い女は少し驚いたふうだったが、ニコリ笑って答えた。

「ええ。これはもういくら洗っても、ずっとずっと消えないのよ。あなたは、いい子だから、大きくなってもこんなイタズラなどしたらいけませんよ」

今になって、憧れに似た気持で刺青を考える度に、そのことが思い出され、何と残酷なことを云ったのだろうと胸が痛む。あの時のさびしそうな、そして囲りをはばかるような女の顔が忘れられない。

だがその刺青に対する欲望を決定的なものにしたといえる事がら起きたのは、ジュンが十八才のときであった。

学生時代の冬休みをエンジョイしようと、旅行好きな友人と計画を練った。山深い、雪の見える温泉をという事でT温泉を選んだ。シーズンには、少し間があった関係で、一流

旅館に格安で泊まれ、無邪気に喜こんだ。

客も少く、閑散とした山あいの温泉気分に浮かれ、始めて飲んだ酒でほどよい機嫌になった友人は炬燵の中で眠りこけ、退屈しのぎにジュンは一人、温泉に浸っていた。珍しい石灰岩を適所に散らし、その隙間には小砂利まで敷きつめた洒落た岩風呂には、誰もいない。ジュンの若い肌は、ほんのり桜色に暖まり、心の芯までのくつろぎにゆったりと浸りきっていた。静かだった。先程から降り続けている雪が硝子窓の棧に薄く積もっている。と、その静寂に酔っていた空気が人の気配で破られた。

「あら、お邪魔でしたのね」

品のある声がした。一人、楽しんでいた静かな陶酔を破られた腹立たしさは、鈴のような声に跡かたもなく吹きとんでしまった。

「いいえ、かまいません。どうぞ」

あわてて声の方へ視線を向け、思わずジュンは眼をみはった。

おそらく、その時のジュンの姿を第三者が見たら、吹きだしてしまっていたであろう。それ程、ジュンの姿は滑稽であった。湯壺の中に棒立ちになり、可憐な乳房や、もうすっかり女になりきった見事な肢体を晒して、口

をポカンと開いたまま人形のように氣をとられていたのだから……。

女は、そんなジュンに柔らかい微笑をなげかけながら云った。

「驚かしてしまってごめんなさいね。アラ、アラ、いつまでも、そんな姿じゃあ、風邪をひきましてよ」

ジュンは気がついて大急ぎで湯に浸ったが眼は呆然としたまま、女から離れなかった。

女の肌は見事な刺青に彩られていたからである。両腕の肘あたりから腰、太腿にいたるまで、青や朱や紫の極彩色であったのだ。

女は、ジュンに軽く会釈しながら、その凄艶な刺青の裸身を湯壺に沈めた。右肩あたりに彫られた大輪の牡丹の花が、湯の中に鮮かに浮かびあがった。

「こんな時間に、まさかと思いましたがのよ。本当にお驚きになりましたでしょうね。ごめんなさいね。可愛いお嬢さんに、こんなものまでおみせしてしまって」

タオルを使う女の、白魚のような指にダイヤがキラリと光った。

「いいえ、いいんです。でも本当いうと、私最初すごく怖かったんです。だって、おばさまみたいな人、あら、ごめんなさい。私、本

当に始めてなんです。でも、こうして近くで見ていると、何だか、その素晴らしい美しさに誘い込まれてしまいそうです」

ジュンも可成、落着きを取り戻してはにのみながらも話しかけに応じることが出来た。

それと共に、女の刺青もさることながら、その容姿の美しさに再び感歎した。

艶かな肌、形の整った眉、大きく神秘的な瞳、絶えず微妙な笑みを含んでいるような唇から、ときおりこぼれる真珠のような齒。年の頃、三十五、六であろうか。

「まあ、あなたって、ずい分お若いのに、おもしろい人ね」

「美しいわ」

ジュンが、つぶやいた。

「ほんと？ 本当にあなた、こんなものを美しいと思うの？」

ジュンは大きく頷いた。

「そう。でも、いけないわ。あなたは、まだ若いんだし、美しいと思ってくださるのはうれしんだけど、あなたのような人は、こんなものにあまり興味をお持ちにならない方がいいと思いますわ」

ジュンは、ふと幼ない頃に初めて銭湯で見たバラの刺青の女の「こんなイタズラをして

はだめよ」といった言葉を思い出した。刺青を彫った、別々の二人の女が、同じようなことを云う。だが、ジュンには、それが自分の一生を左右するような、気がしてならなかった。

ジュンは気付いていなかったが、二人の女の忠告が、却ってジュンの刺青への欲望に拍車をかける刺戟剤の役目を果たしていたのかもしれないなかった。

「おばさま。刺青って、するときは、とても痛いんでしょう」

「そうね、そりゃ痛いわ。最初は、こらえているうちに涙が出てしかたがなかったの。とにかく肌に針を刺すんですものね。でも、不思議なものね。だんだん、針の数が増すにつれて、その針の痛さが、却って私には気持ちよい響きで、肌を感じるようになったの。なにか恋しい想いがして終り頃には、一日の針の量がものたりないくらいに思えるようになってしまってた……」

女は、その時のことでも思い出しているのか、その表情に一種の恍惚感さえ漂わせていた。

「私もね、あなたぐらいの年頃までは、刺青なんてまるで他の世界のことにように思っ

いました。でも、主人が刺青に大変な興味をもっていることが判ってしまいましたの。

まあ、いろいろとありましたけど、結局、私の肌は、こんなもので汚されてしまいましたの。主人から一生の願いだから、刺青を彫ってくれと頼まれました時は、驚くというより気が狂いそうでした。そんなことするぐらいなら、いっそ死んでしまいたい。いや、郷里へ帰って両親に話してしまおうかと何度も考えましたわ。でも、やはり私は心のどこかで主人を愛していましたのね。いやいやながら主人の望み通り肌に墨を入れることになりました。最初の針が刺されたときのことは一生忘れられません。もう、これで、両親にもみせられない体になると思うと、思わず心の中で、手を合わせました。でも、今では、後悔していません。私も、私なりの考えで刺青を理解しようと努めましたし、それよりも嬉しい事は、刺青が私の肌にあるという事で、主人と私との間も、前よりも尚一層、深い絆で結ばれたように思えますの。あら、とんだ長ばなしになってしまいましたわね。始めてお会いした、見ず知らずのあなたに、とんでもないご迷惑をおかけしたようすわね」

「いいえ、おばさま。ちっとも迷惑ではあり

ませことよ。私ね、おばさまのお話を聞いていると、私のまだ知らない大人の秘密を知ったようで、とっても感激しました。生意気なようですけど、大人の世界には、おばさま達のような形での、夫婦の愛情もあるんですのね」

ジュンの熱っぽい眼差に、女は嬉しそうに頷いた。その微笑はジュンへの好意に満ちあふれていた。

「おばさま、失礼なお願いですけど、おばさまのその美しい刺青を、もっとよく見せてくださいませんか？」

何かを思いつめたようにジュンは云った。

女は、しばらくそんなジュンをジッとみつめていたが湯壺の中から静かに立ち上ると、無言でジュンに背を向けた。

そこには、青、朱、緑、紫の絢爛豪華な錦絵巻が繰りひろげられた。あでやかな天女が七彩の薄衣を翻して舞い、天女の周囲には可愛い小鳥が数羽囀っている。両腕は肘の上から肩あたりまで、朱と青のぼかしで大輪の濃艶な牡丹の花が咲き乱れ、両太腿には目も鮮やかな緋鯉の滝登りが美しく彫られていた。

「美しい」

ジュンは思わず天女の紅い唇に自分の唇を

あてた。心なしか天女の唇がうごいた。いいも知れぬ衝撃がジュンの五感を貫いた。

「アアッ、おばさま。好きよ」

ジュンは堰をきったように天女に抱きついた。若い血が、神秘的なその美しさを求めて騒いだ。

「私も、あなたが好きよ」

ジュンの耳もとで女の熱い吐息がもれた。降り続く雪の重みに耐えきれなくなった木の枝が、バシッと音を立て、白い雪の粉が闇の中に碎け散った。窓硝子越しに見るその風景は一幅の絵であった。

「きれいな雪ね」

女が云った。しかし、女の柔かい腕に包まれ、見事な図柄に頬を寄せているジュンにはその雪の花を見る事ができなかった。たとえ見たとしても、七色の乱舞する美の前に、淡白な雪美を賞でる気になれたかどうか。

初めての経験であった。ジュンは、大人の世界をもう一つ教えられた思いであった。躍動する五色の肌に包みこまれた自分自身の狂喜ぶりを、ふと不思議な思いで見詰めたときこころよい感覚を与えながら天女が舞い、緋鯉の踊るのを見た。

「私、いつまでもこうして居たい」

ジュンは絶叫した。

「そうね。あなたって、本当に刺青が好きになっちゃったのね」

「おばさま、怖い。これから先の私、どうなるのかしら」

ジュンの頬が、緋鯉によって隠れた。

「可愛想に、とうとう、あなたも刺青の魔力に負けてしまったのね」

女の唇が、ジュンの唇に重った。

ジュンの指先が肩の牡丹花に強く喰い込み、脚先が糸を張ったように伸びきった。太腿の緋鯉がジュンの白い肌に映える。

ジュンは譫語うわごとのように云った。

「おばさま。これから逢えますわね」

女は弱々しく首かぶりをふった。

「だめ、これ以上、あなたを泥沼に落したくはないの。今日のことは決して忘れません。でもね、お互いに名も知らぬゆきずりの女同志、という事にしましょう。若いあなたにはきっと立派な男性があなたとのめぐりあいを待っているはずです。今夜だけで刺青のことは忘れて早く立派な、いい奥さまにおなりなさいね」

「いや、いやよ」

ジュンの涙が緋鯉の上に落ちた。

女が、困ったわ、というような顔でジュンの背をみつめていた。

「ちょっと、まっけてね」

薄暗い照明の中で、五彩の天女がジュンに微笑みかけて消えて行った。その後、目をやったまま呆然としていたジュンのそばに女が戻ってきた時、その手には青と赤のマジック・インキが握られていた。

「ねえ、ちょっとの間、眼を閉じていてくださる。いいっていうまでよ」

屋外は凍てつく寒気であろうが、湯気立ちこめる浴場では、タイルの床に裸身のままで横たわっても寒くはなかった。

ジュンは、女の云うまま眼を閉じた。太腿のあたりにヒヤリとした冷めたい感触がはしった。

「はい、もういいわ。さあ、眼を開いてごらんなさいな」

女の声に、おそろおそろ眼を開いたジュンの視線は自然に太腿に向く。

そこには、青と赤に彩られた二匹の蝶が舞っていた。白い肌に鮮かな印象だった。女を見上げるジュンの唇から、白い歯がのぞいて微笑んだ。

「綺麗ね、おばさま」

「そうね。あなたは肌が白いから、よけいに美しいわ。私のたったひとつの、あなたへの記念なの。でも、この二匹の蝶を本当の刺青にしておいてはいけないことよ。あとで、消してお終いなさい。そして私のことも刺青のことも早くお忘れなさいね」

いつのまにか屋外は、夜が明けはじめていた。ジュンには、なにかもがあまりに刺激的な一夜であった。

今頃は、きっと、ジュンの部屋では、目を醒ました友人がジュンを探し廻っていることであろう。

天女の刺青の女とは、それ以後逢えなかった。最後までお互いの名も知らせあわぬ俤であった。きっと、女は愛する夫の許で平和に暮しているだろう。ときには、わたしの事も思い出してくれているだろうか……とジュンは思うのであった。

ジュンの刺青への異常な憧憬は、天女の女を知ったことによって、その言葉とはまるで逆に、眠りから醒めた獣のように激しくなった。

だが、ジュンは若い女性であった。正面から自分の欲望に向って進む勇氣はなく、毎日

毎日を悶々と過ごした。

時とすれば、仕事もなげやりな態度になってミスを重ねては上役の叱責をかうことが目立ってきた。

「身体の調子でも悪いんじゃない？ 一度診てもらったら？」

と、心配してくれる同僚もいたが、ジュンには、自身でその原因が判っているだけに、いたたまれぬ気持であった。ジュンが、その欲望と理性との板ばさみになって思いつめれば思いつめるほど、表情は暗さを増した。

現在の日本では、刺青風俗とは所詮、日陰にひっそりと花ひらく、陰花植物にすぎないのだろうか……。

だが、ジュンの表情に輝きが見られる時がきた。書店で何気なく手にした或る雑誌に、「刺青と日本人」という特集記事が載っていた。

その雑誌は、女のジュンが買うには、相当な勇気がいった。店員が、必要以上にジュンの表情をうかがっているような気がして恥ずかしかった。逃げるように、寮に帰ると、むさぼるようにして、その記事を読んだ。

だが、内容はジュンの期待を見事に裏切つて、ありきたりの刺青文献に終始していた。

失望にいた気持の中で、ただ一つジュンに光明を与えた一行があった。

「日本の刺青風俗を研究、調査する資料として、最も権威をもつ文献は『文身百姿』（玉川晴朗著）ではあるまいか」

ジュンは、何としてもこの「文身百姿」という本を手に入れようと決心した。ジュンが知っている書店に、手あたり次第に、電話した。恥ずかしいという気持はなかった。ただ「文身百姿」の四文字が頭からはなれなかった。

結局「文身百姿」は、昭和三十一年発刊が最終版で現在では新刊として在庫はないというのが、ジュンが得た結論であった。しかしジュンは、あきらめなかった。

今度は、東京の神田にある古書の老舗Y書店に郵便で問いあわせた。その返信だけが、残されたただ一つの希望であった。一日千秋の想いで待った。

「ご依頼の書籍、当店に在庫あり……」という返信を受けた時、ジュンは歓喜の声をあげて踊り上らんばかりの喜びだった。その価格はオフィス・ガールのジュンにはかなりのものであったが、とにかく待望の「文身百姿」はジュンのものになった。

ジュンは寮の部屋が専用であった事を、その時ほど有難く思ったことはなかった。

誰に気がねすることなく待望の書に没頭する事ができた。文字通り「文身百姿」は刺青文献の大集成であった。三十六枚に及ぶ、男女の刺青人種写真を適所に配し、数十種の図解で、大要九章の本文を成立させていた。

その主な内容は「刺青風俗の起源」「江戸時代の遊女の起請彫と恋愛彫」「文身競艶今昔」「文身師の作品と、その技術」といったものであるが「文身競艶今昔」では興味ある資料が数多くあった。例えば次に挙げる女性の刺青は多分に猟奇的な雰囲気漂わせる。

（お角）浅草に住んでいて、股のあたりに蟹の刺青を彫っていて、大道で衆人に見せ、笑う者があれば、云いがかりをつけて金をゆすっていた。

（お玉）上野の山下にいた娼婦といわれ、上野の宮様の家来とか、山内の各院にいた寺侍などを客にとり、関係した男の定紋をその都度、身体に彫っていたので最後には、全身紋ぢらしの模様の刺青になってしまった。

（お竹）ソバ屋の女で、背中から腹部にかけて金太郎の刺青があり、その金太郎の口は

お竹の乳首を喰わえていた。金太郎が全部朱彫りといわれており、相当の忍耐を要したであろう。

(お新) 背中に弁財天と北条時政、尻部に蛟竜、左右の太腿には岩見重太郎の大蛇退治腹部には九紋竜史進と花和尚魯智深、右腕には金太郎、左腕には豪傑が四人、それに緋桜の散らし。

(小高) 神田の芸者で、背中に竜、右腕に桜左腕に牡丹、太腿に男女の生首。

(お源) 本所花町の木賃宿の女将で、背中から腹部にかけて大蛇を彫っていた。

(その他) 左右の手首に珠数。左肩から上膊にかけて蛇の刺青を彫った女。

背中にドクロを三つ、腰にお岩の生首、卒塔婆、お化け提灯を配し、腕に花札を散らした女。

以下、かずかずの例がまだあるが、ともあれ、女性の肌を彩る刺青は凄いの一語につきる。それらの文献に惹きつけられたジュンはその本からある程度の刺青の道具や、彫り方についての知識を得た。

そうになると、ジュンの本能は、とどまる術を知らなくなった。刺青はジュンにとって完全な、一種の麻薬と化した。ジュンは自分の

身体に、刺青を彫りたいと思い始めたのである。素人は、素人なりに不細工な刺青を彫れそうな気がした。ジュンは決心した。興奮に身体が震えた。七本の絹針を束にし、しっかりと糸で縛った。これが刺青針であった。

暑くもない夜なのに、ジュンの額にはジツトリ汗がにじみでていた。普段、絶対人目につかぬところにと考えると、太腿か、その附近以外に適当な場所はなかった。図柄は、天女の刺青の女がマジックインキで描いてくれた二匹の蝶を、何かそれが当然なことのよう

に考えもしないで心のどこかで決めていた。下着を脱いだ太腿が、今から始まるジュンの聖なる儀式を待ち受けて、ブルブル慄えるように白い内面に血を湧かせ桜色に上気していた。

ジュンは忘れられないあの時の二匹の蝶の下絵を描いた。いよいよ憧れの刺青をするのだ、と思うだけで胸が高鳴る。

「ウッ！」
皮膚を刺す針の痛さに、ジュンは眉をしかめた。

『パシッ、パシッ』
針がはねる度に、ジュンの瞳が異様に輝きを増していった。

額から汗が頬をつたって流れ、ポタポタと滴となって落ちた。刺青針が、その動きを増すにつれ、墨を入れた点が次第に曲りくねった線に変化していく。

ジュンの口から熱い吐息がもれた。皮膚にこぼれた墨をタオルでぬぐった。その跡には青々とした線が現われた。

まだ、筋彫りだけではあるが、それは確かに刺青であった。

「ああ、とうとう私は、この肌に刺青を彫ってしまった」

熱いものが急に胸にこみあげてきた。後悔の涙か、それとも感激の涙か、ジュン自身にも判別できなかった。とにかくジュンは刺青を彫った女になってしまったのだ。

例え、それが、素人細工の幼稚な刺青であっても、ジュンにとっては大変な人生の一転換期を迎えた事になるわけである。複雑な気持ちで眺めながらジュンは、天女の彫物女のことを考えていた。

「おばさま。とうとう私も、おばさまと同じように、刺青をもつ女になりました。あれほどいけないと云われていたのに……。おこないでくださいね。私もおばさま同様に、この汚した肌を、父や母に見せることはもうな

いのです……』

ジュンは、夢みるような眸を宙に浮かしていたが、ふと気付いて再び、刺青針を手にして太腿を見詰める。

どうやら、その形が蝶にまとまった頃、その肉が赤く腫れ上った。それでも、ジュンは憑かれた者のように針を皮膚に刺し続けた。

青黒い面積が増えていくに従って、ジュンの表情に変化が起きた。それは、まるで針の痛さを楽しんでいるかのようにであった。血がにじみでて、驚かなかった。むしろ、血をみた事によって、一層ジュンの執着は増したようであった。この自らの手で、自らの肌と運命を傷つけるという倒錯の恍惚境をさまよっていた。

数日後、ジュンの太腿の二匹の蝶は、その青黒い模様を完全に白い肌の上に^{ひるがえ}翻らせていた。ジュンが十九才の時であった。

二十才を迎えた現在、ジュンの太腿の刺青は、その面積を増していたし、その図柄もまとまりがなく、多種多様であった。蛇、バラの花、トカゲ、ツバメとさまざまなものが彫られていた。

ジュンは完全に刺青女になってしまった。

刺青によって起る痛覚は、もはやジュンにとって何よりも魅力ある「性欲の具現」にすり替っていたのだった。

ジュンの手許には、百枚近くの外国の刺青女性の写真が集まっている。アメリカの或る通信販売のルートからジュンの手許に送られてきたものである。すでに、ジュンは刺青の知識や資料に対しては、かなり自信をもっていった。ジュンは、自分と同じく刺青への異常な欲望に燃える同志が、世界各国に多勢居ることを知った。

オーストラリアのシンディ・レイ、レイリン・ロビンソン。イギリスのパーム・ナッシュ、ラステイ・フィールド。アメリカのエリザベス・ウィンジュリーなどである。

これらの女性は、ジュンが足もとにも及ばぬ程の刺青で自分の身体を飾っている。もともと、外国は刺青風俗への一般の理解は、日本^にのそれに比べかなり寛大らしいことも知った。その証拠は、家庭の中で刺青を楽しんでいる夫婦が多くあるらしい写真が物語っている。それも、刺青という風習をジュンと同じように「性欲の具現」として割りきっているから日本の刺青のように統一された芸術的な

美しさには乏しいが、それは、それなりに夫婦の愛情に結ばれた刺青という事で補われているようにジュンには思えるのだった。

ジュンは、これらの写真を手にした時、思わず心の中で叫んだ。

『やはり、自分ばかりではなかった。外国にも、こんなに刺青の欲望に燃えている女性がいるのだわ。日本にも、きっと私と同じ欲望をもつ女性が居るはずだわ』

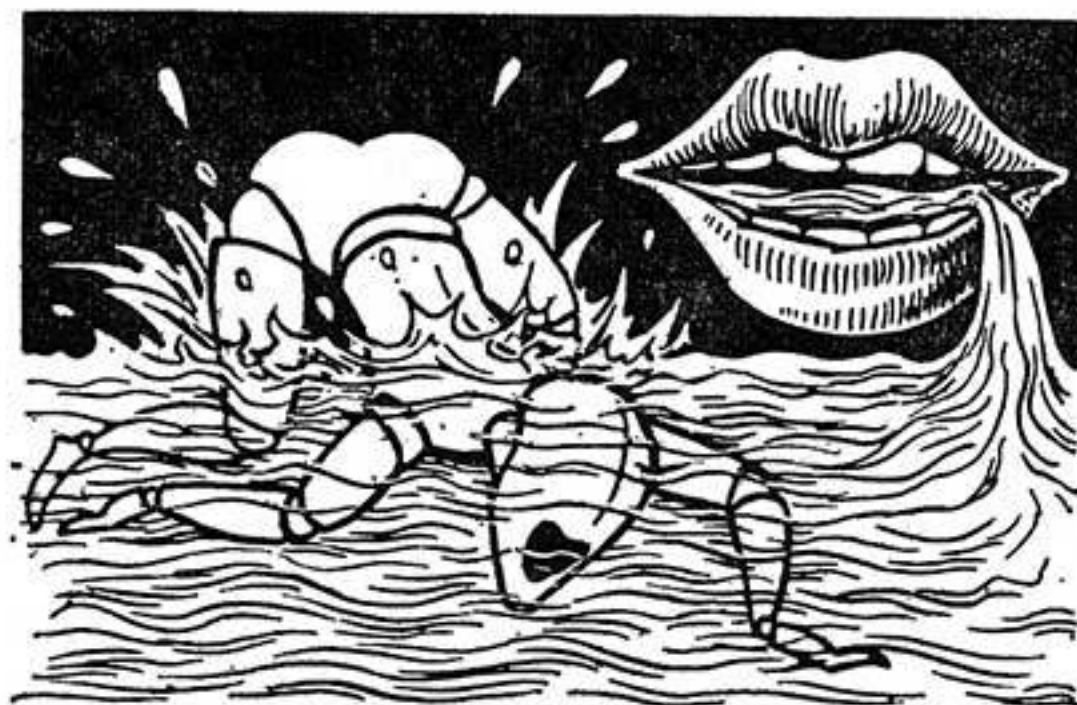
友成順子という、刺青の魅力にとりつかれた二十才の平凡なオフィス・ガールが、この先どのように生きていくか、傍観者の立場でみた場合、興味深いものがある。

おそらく、ジュンは良心の呵責に苛め苦しみながらも、刺青への果しない欲望を求めつづけるであろう。その結果が、どうであれ、自分の道を進むジュンに、自制の至らなさを故の障りは起っても、それを悔む気持は起きないであろう。

(完)

(参考文献) 「文身百姿」文川堂書房

昭和三十一年刊(限定版) 玉川晴朗著



パイプ

『プラスチック・デザイナー』という、風がわりな職業をもつ、石橋という紳士と、ここ三年来つきあっている。

かれはプラスチック・メーカーの研究部門を受持ち、つぎつぎと、すぐれたデザインを発表している、業界では名の知られた人。

職業柄、プラスチック・ポリエチレン・塩化ビニール・アクリルなどについてはすばらしく深い知識をもっている。

週に一、二回は、かれの自室兼アトリエの

マニアのノート

——この美酒に

私は酔い痴れる——

とやまかずひこ

マンションに行く。かれも、Mの趣味のほうでは、二十年のキャリアを誇り、私とは話が合うので、訪れるのが楽しい。

このあいだも、打合わせに出むくと、

『こんなもの、どう思う』

とニヤリ、デスクの上に、一本のパイプを放りだした。

直径20センチ、長さ60センチ程のビニールの透明パイプの一端に、ローズピンクの、ジョーゴがはめ込まれ、他の一端には、タバコのパイプみたいな、吸い口がついている。

『これには、いろいろの使いみちがあるんだ

ヨ』

楽しそうに、紅茶をはこんできた、若く美しいおくさんを見上げてニヤリ。

『いやだわ』

おくさんは、顔を赤くして、そそくさと逃げていった。

『吸水ポンプさ』

これだけきけば、ハハーンと大体の見当はつこう。

何によらず液体類を一滴もこぼさず吞みつくすには、このジョウゴが偉力を発揮するのだそうだ。

必要のとき、おくさんにたのんで、このジョウゴに、水でもぬるま湯でもジュースでもポットワインでも、流れるものならなんでもかまわない、好みのものを捨ててもらう。

『パイプから、こぼれて、ボクの口中に流れてくるまでの、五、六秒をジッと待つ気分は最高』

と、言う。

ーきょうは、どんな味かな？ー

と、目をつぶって想像する。

どんなものを流し込まれるか、受けるほうには、口中に流れ込んで来るまでは、わからない。

すべては一方的に、おくさんの気のむくまま。そこに二人のアソビがある。

人間の呑むべからざるモノを流し込まれても、口に固定されたパイプから逃げることをゆるされない。

理解のある、おくさんの協力で、このパイプから栄養剤を流し込まれ目を白黒。そのあとは、しごとのうえにすばらしいアイデアが生れてくるという、うらやましい話。

『それだけじゃ、ないんだ』

かれのパイプ談は、つづく。

ジョウゴを取り外し、パイプを、じかにお

くさんにくわえてもらう。

パイプから流れでる、おくさんの、かぐわしくも、あまい呼吸の息。

その吐く息を胸いっぱい吸うのだ。

『胃ぶくろのおくまで届かせて、内容物も吸いだしたいくらいのもちだが、医者じゃないから、それは無理。せいぜい空想を楽しんでるよ』

かれは云う。

なるほど、歌の『骨まで愛して』さながらに、いったん、胃のなかに送り込まれた食物が半分消化され、分泌物も混ざり合って、ドロドロになった内容物を、吸い出してむさぼり食うというアイデアは、いかにもアイデアマンらしい思いつきだ。

シズク

『センス、こまったわ』

モデルさんの千栄子くんが、半ベソでささやく。

千葉県、房総半島の南端、白浜温泉のホテルR。

この海岸で、事務所が制作を依頼されたテレビのコマーシャル・フィルムを撮ろうときのかメラマンや、スポンサーの宣伝課長

助手を引き連れて、ここへやって来た。

エキゾチックな、マスクとスタイルの二十才の千栄子くんを、スポンサーの社長がすごいお気にいりで、今ではこの会社の専属CMタレント。

私の事務所にとっては、金のタマゴみたいな、ナンバーワンのモデルだ。

じつは、年頃なのにこの子、夜尿症のヘキがあり、その恥ずかしいヘキは、私だけが知っている二人のヒミツ。

というのは、しごとの性質上、どうしても外泊が月に三四回はあり、彼女どういうものか、ホテルなど所が変わると、ついお洩らしをしちまう。

そのとき、あわてず冷静に、こっそりと処置をしてやるのが私の役目。

万一、このことがスポンサーに知られたらモデルとしての商品価値はガタオチになり、下手すれば、お払箱のうき目をみなければならなくなるオソレがある。それはそれとして『やってくれたか』

冗談まじりにいつてやるのは、ユーモアですこしでも恥ずかしさを軽くしてやろうというボクの親心(?)

でも、心配はいらない。

寝るまえに、旅にはかならず用意を忘れない、大型のビニール風呂敷を、ふとんの上に拡げ、ネグリジェはちゃんと持参だから、ホテルには、迷惑はかけない。

お洩らしの液体の大部分は、ネグリジェが吸ってくれるが、そのなかの10分の一くらいは、ビニールの上に点々と雨あがりさながらに水たまりをつくっている。

それを集めて、コップにとる。

『ボクがあとでトイレに捨てておいてやる』
そんなモノ、見るのもいやと、顔をそむける千栄子くんの気持を察して、そんなふう処理することが、いつか習慣になった。

『ヘイキだよ、きみのものだもの』

と、いっぺん目の前でそれをゴクゴクと呑んでみせてからこちらというもの、千栄子くんの私を見る目が目立って変化して、平氣の平左で処理を命ずる態度になっている。

時間がきて、メンバーは元氣をとりもどした千栄子くんを囲んでスケジュールどおりに海岸へ向う。

東京から打合わせの電話がくる時間だからーと、理由をこしらえたボクは、一人ホテルにのこるー。

ぐしょぬれのネグリジェを、ちからまかせ

にしぼり、そのシズクを集めるのも、たのしい作業だ。

あとは、何をどうしようと、かぎをかけたホテルの一室、誰にもものぞかれる心配のない私だけの世界。

しぼり取ったシズクのほうは、妙にホコリくさいが、ビニールのほうには、すてがたい香氣がある。

しかし、いつぞや、ご本人の目の前で、レモンスカッシュを呑むみたいに、呑んでみせたときの、うまさには及ばない。

できれば、ビールかサケをしたたま呑んでもらい（彼女は、ビールなら二本、サケなら四合は平氣）アルコールを、たっぷり含んだお洩らしでもめぐんではいいのだが、それは許されぬ。せいぜいいつものような事後処理くらいで、飢をみたしておくとうしようー。

ベンチ

毎月一日は、かならず、その月の商売繁昌を願って、浅草の観音さままいりにゆく。

そんな、古風な習慣を守って、もう十年になる。

おまいりは、午前中でなければ、ゴリヤクがうすい、ときいて、忠実に守る。

観音堂の裏手は、広場。ここにはスペースタワーという展望台があり、観光バスのターミナルがあり、午前中でもウィークデーでもいつも人出で賑やかだ。

七月一日も雨をいとわずおまいりにいく。ふと、気がむいて、裏の広場にまわってみる。

そこで、おもいがけないシーンに出くわしたのだった。

三十才をちょっと出たくらい、水商売ふうの女性の二人連れ。

まだ朝の十時というのに、そのうちの一人が、グデングデんと、形容したいほどの酔いかた。

着ている服のスカートをたくし上げ、下ばかりパンティを、チラつかせている。人影は他に無い。

眼にしみるような、おなかの、肌の白さ。

顔は、十人並み、小肥り。顔の色は、おしろい焼けか、浅黒いの、この、おなかの白さは、なんという凄艶さだろう。

ストリップや、海岸などでみるのとは、ちがった、白さが眼にしみる。

『おしっこ』

彼女は、相手に訴えている。

あいにく(?)なことに、ここには、トイレがない。

ビールでも、すごしたのだろう、彼女は、事態の急迫を訴え、腹を撫でている。

ついに、要求には勝てないらしく、ベンチのかげの、人目につきにくいところを、さがして、身を沈めたのは、酔ってはいても、羞恥の心があるからだろうか。

連れは、私を意識してか、

『——さん、しょうがないねえ』

と、そのあとを追う。

雨は、いいあんばいに止んだ。

二人は、まるで悪事でも働いた犯人みたいに、ソワソワとして二天門のほうへ姿を消した。

私はすばやく、ベンチの下に、酔っぱらいをマネへ、姿をひそめる。

アスファルトのうえに、雨水とはちがった円型の水のあとと、濡れたティッシュペーパーの山。落し紙に使ったのだ。

天与のめぐみを手にとって、私は呆然とした。口のなかに特有の香気と小さな砂利を感じながら——。

セキリ

毎日のように食べにゆく近所の中華料理店『東方飯店』が、一週間の営業停止をうけ、のれんをおろした。

このAランチ、二五〇円は、うまくて、ボリュームがあつて、ちょっと他にないメニューが魅力だっただけに、休まれると不便を感じてしまう。

調理場も、ウエイトレスも、三人きょうだい。経営者は、未亡人となった母親という。完全な女手だけの店で、たのしいふん囲気にあふれてたのも、わずか一週間とはいえ、休業はまったく淋しい。

その理由が、調理の娘さんが、保健所で定期検便をうけたら赤痢菌があり、そのための停止だという。

『とすると、吾々も、検便前は、あの子のバイキンでよごれた手でつくったギョーザなんか、食わされてたってわけか』

『いやだよ、まったく。赤痢菌なんか食わされてたまるか』

オフィスの若い連中はケンケンゴウゴウ。うそをつけ。一五〇円のギョーザライスが、食いたくても手が出ないと、八〇円の馬賊ラーメンなんか細々と食っていたくせに、ギョーザに菌がいようと、いまいと、オヨビでな

い連中ばかりではないか。

医学的に言うと、飲食店の客は、調理人の大便をミクロンの微量ではあるけど、しぜんに食べさせられてるのだそう。

手で直接コナをこねる、ギョーザ、にぎりずし、刺身：なるほどいわれてみれば、家庭での手料理は別として、調理人の手にじかにふれる料理のなんと多いことか。

でも、と私は、連中のバイキン雑談をよそに考える。

あの美しい調理場のカワイコちゃんのそれだったら、ミクロンどころか、一と山でも、二た山でも食べてみたい。

それどころか、赤痢菌だって、あの子のおなかを通過して、出てきたものなら、食ってみたい。

そして、おなじく、赤痢にかかって、ベツドに横になりたい——。

赤痢菌は便を仲介に、おもにハエによって第三者の口にはこぼれるというけど、そんな間接的な、生ぬるいコースでなく、じかにストレートに、強制的に口にいれられたら、相手にもよりけりだけど、これはすばらしいことと、いえるのではあるまいか。

テレビ

しごとの関係で、殆んどテレビなど見たことがなく、したがって新聞のテレビ番組のページなど、のぞこうともしない私が、ふと、その日にかぎって、番組表に、目をはしらせたのは、ふしぎな神の引き合わせ、といえるものかもしれない。

五月十四日、夜十時。NETテレビ。『テレビ文学館のタイトルで、『好色』が電波にのるといふ。新聞をみたら。

『芥川竜之介の原作を河野多恵子が脚色。原作は、平安朝の宮廷人の色好みをテーマに、男女の愛の不思議を描いている。平中……プレイボーイ……美女侍従……』

云々の新聞の解説文が、私の目を射た。新聞の解説はつづく。

『侍従への愛の炎に身をこがす平中は、その狂おしい愛から逃がれるために、侍従の不浄のものを手にいれる……』

と、名作、今昔物語のクライマックスが電波にのることを、新聞の活字は淡々と報じているではないか。

さあ、こうなると、たいへん。

朝から、そわそわと落ちつかず、しごとが

手につかない。

その日の午後から夜にかけて、たのまれた経済雑誌の座談会の司会のしごとが終わったのが8時。都心の料亭から、わが家まで帰る。その一時間の、いや永いこと。

まさか、『不浄のものを手にいれるシーンがみたくて』とは、家族には云えず、『コマーシャルを、どうしてもみる必要ができた』

と、商売の重要さに引っかけて、ガッチリとテレビの前にすわりこみ、ブラウン管を占領。

テレビがはじまる。ドラマとしては、むしろ平凡で岡田真澄が平中では、なんとも原作のおもかげとは、遠くはなれてしまった感じだが、おまちなかのラストシーンは、まったくすばらしいものであった。

原作に忠実に、かれは『箱』に、手をさし入れ、液体に濡れる指を口にもってゆき、むさぼり吸うのみでなく、固体をつかみだして……かぶりつく。

カメラは、クローズアップで顔じゅうをビシビシにした平中をとらえ、その固体をとらえる。固体のようすが、アリアリとブラウン管にうつしだされた。

茶の間に入りこむ電波にして、ここまで忠実に、リアルに、描写するとは、まさに驚歎の一語につきる。

私は『終り』のタイトルが出、あとのコマーシャルが消えても、まだ視線をブラウン管に、しばらくつけられる思いで、うごけないのだった。

座談会終了後、二次会にさそわれたのをみすみす断わってまで、見る甲斐のある番組だった。このすばらしいシーンは、永久に私の胸から消えないであろう。

二人の作家

ネクタールをテーマにした文学作品が、だんだん多く発表されるようになってきた。

昭和二十七年中葉くらい、これを素材としネクタールなる特殊用語を生み出した本誌は先見の明を誇ってよろしかろう。

そこで、あこがれの液体や、はては固体を美しく文学に生かしてくれる二人の流行作家に、スポットを当てるのも、ムダではなさそうだ。

梶山季之

売れっ子作家、梶山季之の作品には、しば

しば吾々の分身みたいな人物が登場したり、目のくらむようなシーンが描かれているので注目している。

彼ほど大胆に、多彩に、リアルに、そのうえ奔放に汚物趣味を描く作家は、他にいないと思う。

7月2日発売の『漫画読本』8月号にも、『珍人物パトロール』和田平助伝、という、注目すべき文章がのっている。

架空の名、和田平助、五十四才。実業家の金まわりのよいこの主人公が、女性を相手に一般の人には想像もつかないような怪奇なプレイに、うき身をやつす様子を、逞しい筆致で書いている。

〔伝言板〕○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱いは致しておりません故御了承下さい。○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

多少、誇張やらフィクションのにおいがなでもないが、彼の明るく、リズムカルな文章が、ときにユーモラスに読ませるので、イヤ味がない。

まえに私のノートで紹介した、前作『一匹狼の唄』のばあいと同様、呑み、食べ、さらにいやがる、相手に迫り、ときに浣腸までやる。

強要された一女性は、

一生懸命、神様にお祈りしてやっこの思いで出したわ。

と、苦しみ、流した、ネクタールシーンをえがき、かわった浣腸趣味にまで、言及している。

また、それを（主人公が）

『一滴も残さず飲み切ったわ』

と、たんたんと語らせている。

主人公の欲望はつきるところを知らず、ついには、美人のおくさんに、食べさせて貰うことを哀願し、

『いくらなんでも、できないわ。飲ませるくらいなら、まだガマンするけどー』

と、ついに、おくさんから、それを理由に離婚を迫られ、手切れ金に山林を整理するなどして、財産を減らさせられる。

梶山季之は、手をまわして、この和田平助なる主人公と『食べさせてほしい』と哀願された、別れたおくさんの紹介で、都心のホテルで会見することになるのだが、作者は、ここで、驚歎すべき、このスーパーマンとの会見記をくわしく紹介している。

文章のおわりでは、主人公の行動を評して――嗚呼――

スケベ人間のカジさんも、これには、あいた口がふさがらなかったのである。

と、あくまで和田平助氏の実在を印象づけて終っている。

この号が出る頃でも、この雑誌は、まだたやすく手にはいるだろうから、ぜひ一見をすすめたい。

また、過般、発表とともに、好評、悪評交差してサクサクの、文芸春秋別冊の、かれの作品、『ミスターエロチスト』は、SMのエンサイクルペジアを読むようで、作品のよしあしは別として、私の、愛読おくあたわさるところのものとなっているわけだ。

――ついでに言う、この『ミスターエロチスト』の文中に、二字ほど、文字を、かえてある個所を私は発見している。それは、作者の意志によるものか、あるいは編集者が、

配慮した結果である事は、センサクの必要はないだろうが、一応、このノートの性質上、そのキーだけは、記録しておこう。

その文中の、ある個所の現在使われている文字を取り除き、そのかわりに『湿』『洗』の二字に、置きかえてみる。このキーを発見して、私は、そのとき、文字通り、アッ、とおどろきの声をあげた、というのは、そうすることによって、完全に、文意が通じ、独特の生々とした文章になったからだ。

この作者の作品には、『囃』らしい、同傾向のものはたくさんあるが『アサヒ芸能』——問題小説集』に発表された。『コーポラスの恐怖』も、すばらしい。

小説現代誌に連載された『悪女伝』や『週刊現代』にのった『かんぷらちんき』にもパンチのきいた個所があったし、パンチの『OH』創刊号にも、同様サディスティンが、若い男性を、しいたげて喜ぶシーンがある。

そして、この傾向は、近ごろ、ますます巧みに、量を増しつつあるのは注目される。よほどすぐれた、アドヴァイザーが居るのだろう。

とにかく、自から、スケベ人間をもって任じ、次々に、力作をエネルギーに放つ棍

山という作家は、すばらしい存在だ。

宇能鴻一郎

棍山季之を、東の横綱とするなら、西の横綱は、宇能鴻一郎だろう。

棍山作品を、陽性とするなら、宇能文学はどちらかというと陰性だ。

『殉教未遂』『心中狸』『月と鯨鯨男』から野末陣平さんとの対談記、そして近くは『耽溺』（たんでき）。

この耽溺での、呑むシーンは必然性に富み情景描写が、きわめて自然で、どうしても、呑まなければならなかった、ほかに方法がなかった、という、すばらしい配置がなされている。

『小説現代』七月号、『薔薇と剃刀』では、実業家の夫の、Mを、たくましい筆致で、描きつくす。きれいな夫人が無言で、

『何日も洗わぬ身体を清めさせ』たり、『口をふさいで、苦しげにあえがせ』たり、夫の『もっと、奇体な希みを満たして』やったりあげくには『いちばん、清潔さと、お行儀良さから遠い戯れ』で、夫は急死。

『仰向けの、口を大きくひらいて用意した』夫の顔を見おろす、という、場面など、なかなかのものだ。

また、小説新潮誌8月号の『女神カーリーの誘惑』も、におうようなM、Sの感覚が読者の胸にぞくぞくとせまる、佳品である。

両作家の、同傾向作品のその量から言っても、質から言っても、いずれに軍配が、あげられようか。

まさに、互角。

二人を併せたら、往年の大谷崎のような大型作家にたとえられるのではなからうか。

ただ、棍山氏の動きは、ダイナミックで陽性。マスコミの人氣があがる一方のようだが、しかし、そのことと、文学作品の価値は、別なものだと思う。棍山氏は、よりプレイボーイ。海外取材などに、しばしば遠征し話題を投げ、もちろん推理小説から、社会派のものまで、その活躍は広い。

ただし、一言、棍山氏に申し上げたいことは『あなたはスケベ人間ではありません』と、いうこと。

社会的に、存在を印象づけるためには、それも一つの方法だろうけれど、スケベ人間という自称には、いささか、おっちょこちょいのひびきがのこり、これだけは、ただけない。

じまんではないが、私は、この道に目を開

いて、三十九年になる。才能もなく、世にうとい私だが、ことスカタロジの世界に關してだけは、いささかの知識をもち、体験を重ねたつもりだ。

スカタロジだから、スケベだというのはまったく見当ちがいの觀察だし、エロティックな文章を書くから、スケベ人間だということも筋が通らない。

☆誌上読者コンテスト☆美人モデル募集

賞金

一、第一席	五万円	若干名
一、第二席	参万円	若干名
一、第三席	貳万円	若干名
一、第四席	壹万円	若干名
一、第五席	五千元	若干名

要項

一、参加者は、本誌を愛読しておられる女

たとえていうならば、推理小説の作家は、よく、作品のなかで巧みに殺人をやる。

梶山さんも、たしか（作品のなかで）相当たくさんの人を殺している筈だ。

だからとて、その作家を殺人犯だとは誰も思うまい。

人を殺す小説を書いたからとて、一々、人ごろしの扱いをうけたら、たまったものでは

性の方でしたら、学歴、年齢、未婚既婚の別は問いません。奮て御応募下さい。

一、写真選衡にパスした応募者の方全員に對して一名につき金壹万円の賞を呈し、更にその際撮影した写真を誌上に發表し、読者コンテストの投票の結果、第一席より第五席まで標記の賞金を進呈いたします。

一、応募者は、略歴に身長、体重、胸囲の概略を記載の上、手札型写真を同封してお申込み下さい。選外の際は一件書類は、返却いたします。

一、写真並に書類にて選衡にパスした方には賞金壹万円を贈呈の上、コンテストに發表の写真を撮影し、コンテストの結果は追って御通知いたします。

一、写真撮影のための旅費などの費用一切は本誌にて負担いたします。

一、モデル・コンテストに對する読者の投票については、いづれ誌上に發表します。

ない。

この論法から推すならば、スケベ小説を書く作家。そしてまた、その作品を愛読する愛読者は、はたしてシンからのスケベ人間であろうか。

スケベであつてこそ人間だという解釈もわかる。だが、一般的にいわれるスケベ人間とは異質の、憧憬をもつ人間の存在を、無視されては困るのである。

梶山さんが、あまりスケベ、スケベと、スケベ人間を強調するから、スケベとは筋違いのスケベ視される材料が出来てよけい悪書追放運動などが、吾々を苦しめるのではなからうか。

作品のうえでは、何をいわれても、吾々のごときシロウトが、口をだすべきではないと思うが、スカタロジをもって、ドスケベ人間なんぞと決めつけて呼ばれるのは、心外の至りである。

梶山文学を、愛するがゆえに、作家の一考を求めたいのである。

——今月は、いささかペンがそれた。

では、あしたからヒルは健全な働き者の社会人。夜は、見はてぬユメを追う放浪者の。毎日を送ることにしよう。

鬼六談義

どさ廻りの話



——団 鬼 六——

先月号に載ったシナリオ「赤い拷問」は、伊豆の下賀茂で四日間のロケをした。

これにはカメラハントの辻村氏の友人である賀山氏が見物に見えた。賀山氏は、辻村氏がピンク女優、谷直美をカメラハントした時辻村氏より始めて紹介してもらった恰幅のある会社社長である。ピンク映画のロケに、K誌の愛読者を御招待したのは、賀山氏を含めて三回目になるが、最初から紳士的な愛読者を選んで招待したわけではないけれど、お越し願った人々は、思いの外といつては失礼だが、温厚にして篤実なる紳士ばかり。しかも、スタッフやキャスト達に果物やビールなどを陣中見舞という形で差入れて下さったりし、こっちの方でかえって恐縮してしまう有様だ。夜中に酔っぱらって、ピンク女優の誰かを羞恥責めにしようじゃないか、などと駄々をこねるような人はいなかった。

賀山氏は、ロケの二日目に東京より直接にやって来られたのだが、丁度、その頃、スタッフの中の運転手が熱を出して寝こんでしまい、宿舎と海岸のロケ現場との連絡に支障をきたしていた所、それを見た賀山氏は、義侠心を出して、車の運転には自信があるからとプロダクションの車のにわか運転手となり、

旅館の役者をロケ現場へ運ぶ、という仕事に一役、かって下さった。また、そうした映画撮影の手伝いをするという事が、実に楽しげでもあった。

賀山氏は、そこで、辻村氏のカメラハント以来、久しぶりに谷直美と逢ったわけで、旅館の私の部屋で、祝マリなども呼び、ささやかな酒席を開いたが、撮影は深夜までに及び彼のための個人用のフォートが撮れなかった事は残念であった。しかし、この映画には、谷直美の緊縛場面がふんだんにあって、賀山氏は所持されたカメラであらゆる角度より片っ端から撮りまくっていたから、充分、満足された事と思う。スタッフやキャストの起床時間に合わせて起き、朝昼夜と彼等と共に、粗末な食事を賑やかにとり、夜、撮影の仕事が終われば、女優達に混って、花札のコイコイをキャッキャッと遊んだ事も、また、いい思い出になる事だろう。私は、こうして、ピンク映画撮影の見学希望者があると、特別な扱いをせず、なるだけスタッフ達と起居を共にさせて、三文映画人達のムードにとけこませるようにするのだが、その方が仲々楽しいようで都会の複雑な機構の中ですりへった神経を慰やす一服の清涼剤のようなものになる時

もあると思うのだ。

「いや実に楽しかったですよ。機会があったら、またこうしたロケに随行させて下さい」と、帰る時の賀山氏はすこぶる上機嫌であった。

丁度、私も東京に所用があったので、賀山氏と一緒に旅館からタクシーに乗ったのだが駅近くまで来てから、しまった、と賀山氏は叫び、も一度、旅館へ戻るようタクシーの運転手に命じるのである。何か大事な忘れものをしたのかと彼に聞くと、谷直美に帰りがけにもらったせんべいのおみやげを忘れたという。何もそんなものをわざわざ取りに戻る事はないでしょう、と汽車の時間を気にして私がいようと彼女の好意を無にする事は出来ないと運転手に急がせて旅館へ戻り、せんべいを見つけて、再び、駅へ引返すのだった。実に律義な人である。海べのひなびた温泉町とピンク映画撮影、そして、ピンク女優の緊縛写真と谷直美にもらった温泉せんべいなど、賀山氏にとってはいいおみやげになった事であろう。

後日、スタジオで顔を合わせたスタッフ達が、撮影隊の車を操作してロケに協力してくれた賀山氏の事を、社長の身でありながら、

ああいう風に協力し出すとは、なかなかの人物ですね、などといって感心していたが、賀山氏が会社の人間や家人に、社用で一寸出張して来るといってごまかし、ロケの見物にやって来た所が何となく面白い。まさか、会社の秘書や部長課長連に、まして、連日多忙の身である社長が、一寸、ピンク映画のロケを見てくるなどといって抜け出すわけにはいかず、社用で出かけた事にして、ピンク撮影隊の一日運転手をやったわけだが、真に三等重役的なユーモアが感じられるのだ。

そういえば、以前、私は、このような賀山氏とよく似た人で、もう少し風変わりな人に出くわした事がある。その人は、吉岡氏というある大きな製薬会社の重役で、時価、五千万円からする大邸宅に住む五十年配の人であったが、これもまた好きな人で、ピンク映画のロケに何度か随行して来た事があった。この人も、会社の方には、取引の件で、どこどこへ出張するなどといってごまかし、念の入った事に、新しく発売する事になった新薬の見本などをぎっしりトランクにつめたりして会社を出発し、ピンク映画のロケバスにこっそり乗りこむのだ。取引先に見せる筈の薬の見本は、ロケ地へ向かうバスの中で、女優達に

バラ撒かれてしまう事になる。「薬というもんはきくと思つて飲めばきいたような氣になるし、きかぬと思つて飲めばきかないもので大体、薬屋で売つとる薬を買う奴は、精神の薄弱者だ」などと、製薬会社の重役にあるまじき事を女優達にいつて悦に入つてゐる奇妙な人だったが、この人の奇行はロケ地についたその日に始まつた。

その時の撮影は、急な斜面に立並んだ田舎のひっそりした温泉街で三日間行つたものだが、ロケ第一日目の夜、私は、吉岡氏に誘われて、その温泉街の片隅にある寒々としたボロ小屋で上演されているどさ廻り芝居を見に行った。温泉街で、時たま、ストリップ小屋はのぞく事があつても、どさ廻り劇団の芝居は、私はあまり見た事がない。というよりも何々一座とのぼりを立てたような村芝居は、今では滅多にお眼にかかれなくなつてしまつたようだ。

吉岡氏に無理やり誘われた形で、妙に便所くさい薄汚ないその芝居小屋へ入つたのだが観客は、数える位しか入つていないし、底が抜けそうな粗末な舞台で立廻りなどやっている役者達は大見得を切つたりして、哀れをもよおす位一心に芝居しているのだが、観客の

方は反応を示さず、何か他の事でも考えているかのよう、実に無氣力な見物をつづけている。そんな中であつて、吉岡氏一人だけは、舞台の役者がくさい見得をきつたりする毎、力一杯拍手して、待つてました、とか、そうだ、その意氣、とか大声でがなりつづけ、私をびっくりさせるのであつた。すると舞台で銀紙のはげた刀を振り廻してゐた、国定忠次が、や、有難う、と手を上げて拍手した観客に答えている。真に、田舎の芝居小屋らしいのんびりしたムードであつたが、その陳腐な芝居がおわると、吉岡氏は私に、楽屋へ遊びに行かないか、と再び誘うのである。その物好きさにこっちは呆れて、撮影の方が氣になるからと、私は一人で旅館へ引返したが、吉岡氏は果物籠などを買い、その田舎芝居一座の楽屋を訪問したようである。

あとでわかつた事だが、吉岡氏は、こうした田舎廻りの芝居一座に、どういふわけか異常な魅力を感じ、こうした芝居がかかつてゐるのを見ると、もうおさえがきかず、吸い寄せられるようにフラフラ小屋の中へ入つて行く奇妙な三文芝居マニヤなのであつた。その時は私も大会社の重役にしては、一寸、外聞の悪い趣味だと思ふ程度で、大して氣にもと

めなかつたが、その夜、彼は、芝居役者とあちこち飲み廻つたといつて旅館へおそく酔つて戻り、翌日は、早朝に起きて、何処へ出かけるとも告げず飄然と旅館を出て行つた。三文映画の見物にやつて来て、ふと眼にふれた三文芝居の方の見物に夢中になり、物好きにもその劇団員をぞろぞろ引きつれて、田舎町の一杯飲屋をはしごして廻るなど、全くもつておかしい人だと、私は昨夜の事を映画の連中に話して聞かせ笑つてゐたのだが、昼食の時間になつても彼が戻つて来ないので、また、どこかでおかしな事をやつてゐるのではないかと彼の事が氣がかりになり出した。そこで、製作進行をやつてゐた若い男と一緒に吉岡氏を探して表へ出てみる。芝居小屋の前を通つて、みやげものなど売つてゐる店先を一つ一つのぞきながら駅前の方まで行つてみてようやく、駅の裏手にある線路にそつた小さな商店町で吉岡氏を発見する事が出来た。

何と、吉岡氏は、何々一座という小さなのぼりを持った劇団員達と一緒にチンドン屋をやり、町をねり歩いてゐたのである。国定忠次みたいな扮装をして顔に白粉をペタペタぬり立ててゐる吉岡氏はぞろぞろついて来る子供にチラシをくばつて歩いてゐるのだが、私

を見て、よっと手を上げたから、それが彼である事がはっきりわかったものの、私は開いた口がふさがらぬ有様。夕方までには旅館へ戻るから心配しないように、と私に告げ、彼は、ヒョロヒョロ吹くチンドン屋の笛の音に合わせて腰をくねらせ、チラシを撒いて歩き出す。三文劇団は、ぶんちゃか、ぶんちゃか町をねり歩いて、今日より変る事になっていく芝居番組の宣伝をしているのだが、吉岡氏はそれに協力を申出たものらしい。というよりも、劇団員に贈りものをしたり、酒を飲ましたりして、何か手伝わせると頼みこんだのかも知れない。

後日、私は、吉岡氏の会社の人からも聞いたのだが、吉岡氏のそうした奇行は相当昔からのものらしく、家の方でもそれは彼の困った病気だとして、知って知らない顔をしているそうである。彼は時折、発作的に会社からまた家から、ふっと姿をくらまし、ドサ廻り劇団の端役なんかに使われて、二三日、地方を廻ったりするそうで、彼を知ってる劇団の方では、迷惑するどころか、とにかく相手は大会社の重役で、その度、少なからぬ金銭的援助もしてもらえるわけだから、まるで福の神が舞いこんできたかのように鄭重に扱うそう

だが、そうした人種差別をされる事を吉岡氏は好まず、その一座の劇団員になり切って、使い走りみたいな事までさせられる事に無上の喜びを感じるそうだ。

こうした奇人は滅多にいるもんじゃないと思ったが、驚いた事には、吉岡氏には、共通の趣味を持つ仲間が何人かいる、という事をこれもあとで、吉岡氏から直接、私は聞かされた。その仲間の一人は浅草の履物問屋の若旦那であったり、神田の乾物屋の御隠居であったり、また或る化粧品会社の専務さんであったり、職業も年令層もまちまちだが、一応社会的な地位のある人ばかりで、年に一度か二度、築地の料亭で親睦会みたいなものを持ち、僕は何とか一座に入って東北を廻ったとか、俺は四国まで行ったとか、旅の思出話、それと自分が何日か所属した一座の芝居評、あそこの劇団はのびるよ、だとか、あそこの座長は仲々いい味を出すとか、芸者などをはべらして、静かに盃をかたむけながら、楽しく語り合うのだそうである。

つまり、三文芝居マニヤの気楽な寄り合いだが、この人達はただ傍観者的な立場で見たことを語っているのではなく、自分達も、どさ廻り一座に加わって、実際にあちこち芝居

して廻っているところが面白い。乾物屋の御隠居で、七十才になるおじいさんは、芝居では女形専門だそうだ。

辻村氏と山本氏は、時々、ハントした女性の緊縛写真などを見せ合い、獲物を誇り合ったり、あれこれとその時の話をし合うような事をしているのだろうと想像出来るが、それと同じようなもので、彼等もまた自分の舞台姿の写真などを見せっこして楽しみ、私が獲物を求める辻村氏にピンク女優を紹介した如く、芝居するにも場がない人には、グループの一人が、知っている劇団の一つを紹介してやったりするそうである。

しかし、吉岡氏の如く、発作的に都会を飛び出し、ピンク映画のロケ隊にもぐりこみ、行きずりに知り合った名もない芝居劇団の中へ入って、チンドン屋までするというのは、たしかに異常であり、病気だと家人にいわれるのも当然の事だ。理屈をつければ、地位も財産も満たされているのだが、そこに不可解な孤独感を感じ出し、次元の違った場所に自分を置いて自分の本然の姿を見つめようという発作、とも考えられるが、KK誌のマニヤが、どうして俺は女を縛りたがるのか、自分でも理屈じゃさっぱりわけがわからないのと

同じで、とかく、マニヤの心理というものは複雑怪奇、理由なんて考えるだけ野暮であるといえるだろう。

しかし、時々、私は、こんな事をうつに考える事がある。人間は、職業的相性というものは大別すると二つあり、運命的にそのどちらかを選べれば幸いだ、選べなかったその一つを恋慕う気持は何時までも本人について廻るものだ。私達が女体を緊縛してみたいと思うのは性的な趣味だが、吉岡氏がどさ廻り劇団の舞台に立ちたがり、チンドン屋までやってのけるというのは、もう趣味なんでものじゃなく職業的なあこがれなのかも知れない。

いや、当世流に見たならば、大会社の重役がどさ廻り劇団のチンドン屋をやったとて、別におかしくもない。万才師が、参議員に立候補して当選し、ちゃんと政治家になったではないか。横山ノックのあこがれが政治家であつたとて、別に笑う事はないのである。現職の代議士が万才コンビをくんで、テレビに出演したとて、吉岡氏の家族のように、困った病氣だと眉を寄せる事は、ないと思うんだが。とまあ、賀山氏がピンク映画一座と融合して、運転手として働き出した光景を見てい

るうち、ふと吉岡氏の事などぼんやり思出したわけなのだ。

話はかわるが、映画『赤い拷問』は、鉄火肌の女を責めるものを、という或るマニヤの注文を聞いて作ったもので、こうした花と蛇シリーズ（と映画関係者はいつてゐるが）も、直言してくれるマニヤの意向を大いに取上げていくつもりだ。その試写会が終つて三日ばかりたった頃、五社の一つ、T映画のプロジューサー、監督氏達が、或る人を介して私の所へ訪ねて来た。これより製作しようとする緊縛映画についての、参考意見を何か吐いてくれという意味からで、その映画の生原稿も大体出来ているらしいのだが、いわゆるこの種のファン、マニヤの琴線にくすぐるには、どうした所にポイントを置くか、という事など私の意見を参考にして、脚本をもう少し練り直してみたいというのである。

そのプロジューサーは例の大奥物語でヒットを飛ばした人であるだけに、これからT映画にも緊縛路線というのを作る考えだとさすがに商売には貧欲であつたが、あの奥女中に輝をしめさせる企画というのは昔、女相撲とというのがあつたのを思出し、ふと考えついただけという事で、マニヤの中には女斗美とい

つて女体の輝姿に異常な関心を示す人々がいるという事など全く知らず、私が押入れからKK誌を取出してその部分を見せてやると、へえーと感心して眼を丸くし、このような雑誌が発行されているという事は知らなかったと、自分の不勉強を恥じ入るようになつたのであつた。いや、これは大発見ですよ、と女斗美の一章を見て眼をパチパチさせ、そして、ネクタールの話、妊婦の話、など読むうちに幾度も監督と顔を見合わせ、呆れ返つたように笑い出すのだ。

こういう人達に参考意見を求められて答える程、骨の折れる事はない。それに、この種のマニヤといつてもピンからキリまであるものだし、私の好みだけいえば、また、例のものに帰着してしまう事になる。

Sを喜ばせMをも嬉しがらせるという事は無理な話だろうけれど、Sだけにしぼるとしても、辻村派もあり、団派もあり、色々ややつこしい事で、一概に緊縛路線を打ち出すといつても、マニヤの好みは複雑微妙なもので党派がいくらでもあるという事を話すと、成程、同じ政治家でも自民党や社会党など色々複雑ですからね、とプロジューサーは笑うのだった。そこで彼等が作り上げたシナリオ第

一稿の説明を聞いてみる。それは、小森白の好んで作る女拷問ものとよく似ていて、女囚が役人に牢内の責場でこらしめられるものであった。

時代もので、サジスチックなものとして、まず彼等の頭に浮かんでくるのは、やはりこういう場面になるらしい。小森白なんか何度手かけてるものだし、全く新味というものが感じられなかった。

「緊縛映画の自民党という所ですな」

と、私が皮肉めいた微笑をすると、

「こういう場面以外で女を拷問すりゃ、何だか不自然な感じがすると、ライターが云うもんですから」

とプロデューサーは云う。

「そうでしょう、そうでしょう」

と私は相槌を打つ以外にない。そのケのないライターならいいような事である。だが、それでいいのだと思う。それはそれで、その種のマニヤがきつと喜ぶだろう。ただし、五社の面目にかけて、ピンク映画なんかでは到底、太刀打ちの出来ない絢爛としたものを製作してほしいと思う。そこで私は、マニヤの一人として希望を色々と話したが、彼等は、それを残酷映画の参考資料として、メモを取

りつつ、熱心に聞くのであった。最後に結論として私は云った。

「とにかく、きれいな女優さんを縛って下さい。コツはそれですよ」

その後、彼等のシナリオは第二稿で、かなり手直しされる事になったと聞いたが、さてどんな映画が出来上るのかと、楽しみにしている。

下田のロケに随行された賀山社長の話を書こうとして、筆は例によって脱線してしまつたが、先月号に載つたシナリオ中の写真で、滝リエを見た読者は、奇異な感じを持たれたと思う。

あれを、私は何しぱりというのか知らないが、彼女は、ロープのブラジャーをはめられた形で、冷たい石の床に猿轡を噛み、ちよこんと坐らされているが、あんな器用な縛り方が私に出来る筈はない。賀山氏に依頼して、彼女を縛ってもらったのだ。映画のスチールカメラマンとして彼が窓によじのぼったり、床に身をかがめたり、スタッフ達の間をかくぐって写真をとっていたのを私は手をとって、現場へ引込み、彼にとっては恐らく楽しいであろう女体を縛るという雑用を、いつけたのだが、弱っちゃうな、と彼はニヤニヤ

照れながら、それでも、あつという程の素早さで、彼女の乳房を強調したああい縛りに仕上げてしまったのである。辻村氏に師事され？ 日頃、研究をつんでおられるだけに実にあざやかなものであった。

この滝リエという女優は、無口で、借りて来た猫みたいにおとなしい女なのだが、完全なMだと私は前から睨んでいる。

ま、それについては面白い話があるので、また機会があったらしゃべらせてもらうが、この滝リエを賀山氏が縛ってから間もなく汽車の時間が来て、彼と私が旅館から車で引揚げてしまったので、あとでスタッフ達が閉口したそうだ。というのは、映画は舞台の芝居みたいに最初から順序を踏んで進行し、撮影していくものではない。都合のいいシーンからバラバラに撮っていき、あとで編集するわけだが、賀山氏が彼女を縛ってくれたのは、つまり、シナリオでいえば、シーン三十七、すでに裸にされ、緊縛されている滝リエが悪親分や乾分に追いかけられ、強制的に排尿させられようとするどぎつい場面だ。——こんな場面をピンク映画にとり上げたのは始めて、恐らく、映倫がカンカンになるだろうと思ったが、どういうわけか一言もこのシーン

の苦情は出なかった——。ま、それはとにかく、すると、三十シーンで、滝リエは、乾分二人に物置に連れこまれ、裸にされ、縛り上げられる事になっているので、私達が旅館を引揚げて、二、三時間後、このシーンの撮影に入ったのだが、一旦、縄は解かれてしまっているのです、さて、さっきはどういう風に彼が縛ったのかとスタッフ達は首をひねって考へこんだそう。

私のような単純な縛りなら、誰だって真似出来るだろうが、何しろ、音に聞こえた辻村氏の高弟が縛ったものだから、そうは簡単にいかず、縛った方は、写真だけとって無責任にも私と一緒に東京へ帰ってしまったのだから、彼等はうろたえたのである。ああでもない、こうでもない、と監督以下、ロープを持って滝リエの乳房をいじりまくり、さすがにおとなしい滝リエからも、感じちゃうじゃない、いい加減にしてよ、と叱られ、恨むなら縛った人を恨め、と叱り返し、まるで、智慧の輪でも作るようにして苦心したらしいが、どうしても元通り復元せず、えい、めんどくさい、ととうとうその場面をカットしてしまっただ。

同じ映画の中で、鉄火娘に扮した谷ナオミ

を私刑するシーンがあり、かねがね谷ナオミの大ファンだといってた賀山氏に、これこそいい思い出になるだろうと思って、彼女の豊満な肉体に情容赦なく、キリキリ縄をかけるよう依頼したのだが、すると、賀山氏は、中学生の如く、もじもじ照れ始めて、
「どうか、それだけは勘弁して頂きたい」と辞退するのであった。

「わかってるでしょう。僕、彼女にだけは、そういう事したくないんですよ」

「はあ？」

私は、わかったような、わからないような気分で、まじまじと彼の顔を見たが、秘かに好意を寄せている女性に自分がそういう趣味を持つ男と思われたくない、という心理なのだろう。そういえば、賀山氏と酒を飲めば、彼の口から出るのは必ずといっていいくらい谷ナオミの話。そして、べたほめ、というより、べた惚れで、肉体よりも僕は彼女の純情な心が好きなんだ、と初恋に悩む青年みたいな事をいったようである。

だが、それはそれ、何もピンク女優をふん縛るのに、気兼ねする事はないじゃないか、といっても、そればかりは、と賀山氏は尻ごみし、阿呆かいなと笑って、仕方なく、私が

また彼女に下手くそな縄をかけたが、これをやくざ達が温泉の湯に引きずりこんで湯責めにするという如何にも温泉場の撮影らしいふざけた責めが開始されたが、案の定、縛り方がなっていないので、ナオミの体に巻きついてる縄が、忽ち、ゆるみ出し、彼女が湯につけられて悶えているうち、さも気持よさそうにのんびり湯の上へ浮かび上ってくるのであった。

滝リエは縛っても、谷ナオミは縛れないという賀山氏の純な一面を知って、人は見かけによらぬもの、といっちは失礼だが、そんな事を感じた。

そして、ただ黙って熱心に、大きな温泉浴槽の中へ、三人の裸体の男の手で沈められたり、引き上げられたりして大熱演するナオミの、フォートを取りつづける賀山氏の横に立って私は煙草をふかしていたが、温泉へカメラを向けていたカメラマンが急に、あかん、といって、カメラの動きをストップさせた。聞いてみると無理もない。湯の中でナオミにまといついている三人の男の一人がふわふわ揺れて、カメラにおさまってしまったそうである。



△女相撲物語▽

花の女斗美たち

(15)

奮斗士好太

秋から冬——。ぬけるように青かった空の色に、だんだん灰色の雲が多くなって、色あせた眺めに変わって行きました。一雨ごとに色彩が洗い落とされて、自然のたたずまいも墨絵のようなアクセントの弱い陰気なものに移って行きます。これからが北国のいちばんいやな季節なのです。

寒くならないうちに何とか……と思って、吉永さんとの約束も、ズルズルと日を過ぎて、実現を見ないうちに雪がちらつく頃になってしまいました。別に気が変わったというわけではなかったのですけれど……。

でもまだまだこれから先、機会があることでしょうから、必ず実現させたいとは思っているのです。

寒い季節——と言えば、この冬の練習は、ほんとうに辛いものです。

全身が、汗につかってしまうような、夏の練習も苦しいものでしたが、冬のそれにくらべたら、まだまだ、がまんしやすいものでした。厳寒の一月、二月という頃には、さすがにハダカになっての練習はやりません。それでもそれまでの本格的な雪を見るようになる前はやはり全員がマワシをつけての練習を続

けるのです。

吐く息も白く見えるようになった頃、肌は切れるような冷たい空気の中でのハダカの練習は泣きそうなくらい辛いものでした。

とくに、服を脱いでからマワシをつけるまでの時がいちばんいやで、どうしても相撲部なんかへはいつってしまったのかしらと恨めしくなることもあるのでした。

こんな気持は私だけではないらしくて、松田さんや、無口な西田さんなんかまでが、「辛いわネ」とこぼし、

「もうそろそろハダカの練習は、やめにしてくれないかしら」

などと、弱音を吐くのでした。

冷え切った分厚い布地の感触が、まるで氷を当てたように、つめたさが体の中にまでしみこんでいきます。

ガタガタふるえながら、マワシを締めているなんて、どうにもイカさない恰好です。

なんにつけてもオーバーなヒロちゃんなどは、上着をひっかけてマワシをつけるという無精ぶりを発揮したりします。

「なんて恰好してるのッ、ダラシないッ」

と、おこつても

「だって、アタシって寒さにスゴク弱いのに」

「なに云ってるの。この前は体質的に暑さに弱いんだって云ってたくせに」

「アタシって、神経が細かく出来てるでしょう。だから暑さ寒さをひどく感じるの」

「まア、あきれた。それじゃ、ちょうどいい気候の時だけってことになるじゃない」

「そういうことになるかしら？」

「当たり前だワ。バカバカしい」

「だって、ほんとにそうなんだもの、仕かたないワ」

「そんなことしてるの、あんただけよ。松田

さんだって西田さんだって、みんなマジメにやってるわヨ」

「アア、服を着てマワシを締めるのがフマジメなの？」

「だって、みんな寒いのをガマンしてやるのに、あんただけそんな無精をするのは許せないワ」

「そんなら、みんなこうしなさいよ。何もヤセガマンする必要はないじゃないの」

ヒロちゃんは、しゃあしゃあとそんなことを云うのです。

「よくまあ、そううまくへらず口が出てくるわね。それくらいなら、もうすこし成績だつてよくなってもいいのに」

と、腹立ちまぎれに悪たれてもヒロちゃんは動じません。

「ウン、あたしもそう思うの。あたしの才能って、学校の勉強よりすこしズレたところにあるらしいワ」

と、やり返してアハハと笑っているものです。すから、こちらにも、ついつり込まれて、腹を立てながらも笑ってしまうのです。

そんなヒロちゃんの相手をいつまでもしてやるわけにもいきませんから、めいめいそれぞれに寒さをがまんしながらしたくをします。

ガチガチと鳴りそうになる歯をぐつぐつとくしばって、固くなっている布地を思いきりひっぱって、キツク、キツク締め込みます。

ふしぎなことに、いくら寒い日でも、マワシをキツチリと締め込んで腰のまわりに力強い圧迫を感じると、おなかの奥の方に何かホカホカとした温かいものが生まれてくるのがわかるのでした。

そして、寒さも、冷たい空気も、それまでのようにがまんできないくらいのもものではなくなつて、鳥肌立っていた腕や太もものあたりに血の色がもどり、ちぢみ上がっていた乳房もなごんでくるのでした。

全員整列してまず柔軟体操。吐く息が白く最初のうちは、やはり素足で立っている砂のつめたさに、からだのほぐれもおそいようなのでした。

でも、四股ふみから運び足の動作へと進む頃には、吐く息も熱を帯びてきて、汗もにじみます。重量級の小林さんなどは、たちまち肩のあたりに一筋二筋流れ落ちる汗が光るほどになるのです。もっとも、練習をいいかげんにやって力をぬいていたのでは、かえって寒さが身にしみるので、みんな真剣にやらなくてはならないのですけれど……。

雪が降り、そしてそれがだんだんとけなくなる頃には、このハダカの練習もひと休み。

この期間だけは、他の運動部のように、トレーニングシャツとパンツというスタイルになるのです。

こういうスタイルでの練習は、柔軟体操やウサギとびくらいの動作はいいのですけれど四股ふみは何か勝手がちがうみたいでバランスをうまくとれずフラフラするし、押し合いがいこなども、どうも力がいらなくて気のりがしないのでした。

雲が切れて、日ざしが明るくさし込んでいたある一日、例によって小林さんは、はち切れるようなからだを包んだトレーニングシャツの肩から背中にかけて、ジットリと汗をにじませていましたが、一区切りついた時、「ああ、すっかり暑くなっちゃった。こんな日くらい、ひさしぶりでマワシをつけようかなア」

と、言い出すのでした。

「ヘェッ」というような驚きの声が出て、みんなが小林さんの顔を見つめました。

小林さんは、そんな顔をジロリと見まわして

「なにをそんなにビックリしてるの？ 相撲

ってマワシをつけてやるものなのよ」
「でも、こんな寒い時にムリしてハダカになるまでもないでしょ」

中川さんが云いますと、小林さんは

「ああ、そうか……。みなさんは寒くってたまらないとおっしゃるのネ。アタシはチットモ寒くなんかないワ。さっきから汗が気持悪くってしょうがないの」

と、大げさに額や、首筋のあたりをぬぐって見せるのでした。

「そうネ、あんたくらいの厚さがあれば、寒さも感じないでしょうネ」

アハハハと笑う声に、赤らんでいた顔をいっそう真っ赤にした小林さんは

「イクジなしどもめ。そんな恰好で相撲の練習してるつもりになってるんだから」

「アーラ、失礼しちゃうワ。じゃなんだって云うの」

ちよっとふんぜんとしたような金子さん。

「そんなのは、遊びみたいなもんよ。相撲の練習だったら、やっぱりマワシを着けてカッキリとやらなくちゃ」

「カッキリ……とネ」中川さんがその妙なことばをくり返してみんなを見まわします。ゲラゲラと笑いが湧いて、陰悪になりかけた空

気も和らぎました。金子さんは、まだ少し面白くなさそうで

「じゃ、どうぞお好きなように」と云ったあとに

「でも、冷えると悪いから、もうひとつ別のマワシをおなかに巻いとくといいワ」

この痛烈なひとことにワツとはじけるような笑いが湧きました。みんな、からだをふたえ折りにして笑っています。ヒロちゃんなどヒーヒーとおかしな声を上げて、涙を流して笑いこけているのでした。

さすがの小林さんも、完全に一本とられてちよっと氣勢をそがれた形でしたが、そのうちつり込まれてプツと吹き出し、赤い顔をまします赤くしてゲラゲラと笑い出しました。

そしてやがて私を見つけますと

「テルちゃんおいで。こんな連中に構わず」と、まるで付けびとみたいなのつもりでいるらしく、さっさと部室へ戻ります。

しかたなく、私もそのあとを追います。

「ホラホラ親分のお呼びヨ。急いで急いで」

「ふんどしかつぎは辛いわねエ」

後ろから津野さんやヒロちゃんが、ひやかしながら背中をこづきます。

「何するのッ」

ふり返ってニラミつけても、みんなニヤニヤ妙な笑いで応えません。

どうやら私は、すっかり小林さんの子分だと思われているらしいのでした。

私が部室の戸をくぐりますと、気の早い小林さんは、汗にぬれたトレーニングシャツをぬぎ、堂々とした上半身を見せていました。

首が埋まるほどに盛り上がった両肩、圧倒される胸の厚さ、そしてせり出したおなかの偉大な丘の上部に豊かな二つのふくらみが乗っています。何度見てもすばらしい体です。

私が見とれているのかまわず、スルスルと全部を脱ぎ取った小林さんは、

「さあ、たのむワ」

と、私をうながします。そして

「どうせならこっちのにしようかな」

と、選手用の青い色のマワシを手渡ししました。

小林さんの場合は、実力ナンバーワンは自他ともに認めているのですし、選手用のマワシをつけるにしても、誰にことわる必要もないわけなのです。

ひろげた端を前に当て、後にまわしたマワシを私に持たせた小林さんは、グッと腰を落として姿勢をととのえました。

まるで首が埋まるくらいに盛り上がった両方の肩、たてよこ同じような型に見える広い背幅……。どこをさがしても、角張ったところのひとつもない、小林さんの上半身なのです。

その幅広い背中のまんなかをやわらかなくぼみが走って、そのくぼみをはさんだ両側をこんもりとした丘が盛り上がって並んでいるのでした。そしてその偉大な背なかは見るとびに新たな驚きを提供してくれます。その厚ぼったい起伏が小林さんの動作につれてプリプリと脈動しているのです。その広々と展開した背中の肉づきのみごときは、小林さんには失礼なのですけれど、なんだか私たちとは別の生きものを眺めているみたいな気持を起こさせるほどなのでした。

そして、その堂々たる上半身がふたつに分かれるあたりのたくましさ。若々しいエネルギーを発散させている、ハチ切れそうな腰のまわりを、ズッシリした分厚な布地のマワシがグイグイと締まって行くのは、いつものことなのですけれど、一種の快感をさえ与えてくれるのです。

プリプリと、すこしのタルミもないふたつの美事な半球を分けてキリリと締め上げてい

るタテミツと、パンと張ったボリュウムあふれる腰のまわりにキツチリと締め込まれたヨコミツとが、薄桃色の肌に青い色の美しい対照を見せて、それは、小林さんのすばらしい体にとって、何よりもふさわしいユニホームに思えるのでした。

「やっぱり、いい気分だワ。力がはいつて……」

つけ終わった小林さんは、軽くウォーミングアップをしながら私の方を見てニッコリと笑いました。

両脚を開き、グッと腰を深く落して身構えますと、私のおなかのまわりほどもありそうなたくましい太ももの筋肉がモリモリと脈動します。両腕を大きく振り、肩を回しますと厚い胸の上でポツテリしたふくらみが、プルプルと揺れ、どっしりしたおなかの表面が軽く波打つのでした。

でも、いくら温かい日だと言っても、やはり冬の空気は冷たくて、ピリピリと肌を刺します。たとえ薄いシャツ一枚でも着けているのと、裸になった時とでは、その感じ方がてんで違います。小林さんがマワシ姿になったのも、ヤセがまんから止むに止まれぬことになったところがあつたのかも知れないのでし

た。そして、さっきまで汗ばんでいた小林さんの厚ぼったい背中あたりや、ボリウム満点のおシリのあたりも、よく見ますと、鳥肌立っているようなのでした。

みんなの前で大きなことを云ってきた手前今さら「やっぱ寒いから止めにしたワ」などと云えませんか、そんなことを云ったら、この後、いつもそれを持ち出されてやっつけられることでしょう。

小林さんが寒さをこらえて、ウォーミングアップをしているのも、考えて見ますと、ちょっと悲愴な姿なのでした。でも小林さんは「チツとも寒くなかないワ」と云うような悠々とした顔つきをしています。

そんな小林さんを、私は、なんだかまぶしいものでも見るような感じで眺めていたのですが、見とれているというのでもないのになんとなく目をそらす気持ちにもなれないのでした。

「イチ、ニツ、イチ、ニツ」

と小林さんは小声で号令をかけながらウォーミングアップを続けていました。号令をかけるたびに白い息が流れます。

「サア、これでいいワ」

ウォーミングアップを終った小林さんは、

私をふり返って笑いかけました。そして

「どう、あんたもマワシをつけない？」

私は、ぜんぜんそんなつもりはありませんでしたから、びっくりして

「あたしは……」

と口ごもるのへ

「力がはいって気持ちいいわヨ。やっぱマワシつけなくっちゃ練習にならないわヨ」

と、私がまごまごしてるのをえんりよしてるのだと思ったのでしょうか、それとも彼女とくいの強引さからなのでしょう。

「さア、あたしが手伝ってあげるから、それ脱いじゃいなさいヨ」

と、ぐずぐずしていると、今にもはぎ取ってしまいそうな勢いでせきたてるのでした。

とうとうハダカにされて、覚悟はしていても、ピリリツと肌に感ずる冷たい空気に、思わずブルツと身ぶるいが出ます。

広げた前の端を胸のあたりで押え、片手をうしろへまわして、股をくぐったタテミツをていねいに細く折りたたんでキチツと引き上げます。

「テルちゃんは、いつもそうするの？」

私の動作をじっと見ていた小林さんに尋ねられて

「ええ、くせになっちゃって……」

私は、ちょっと顔を赤らめて答えました。

いくらなれたと云っても、裸で、足を大きく開いて、中腰になって……そんなスタイルを、ジロジロ眺められるのは女同士でもやはり恥かしさが先に立ちます。

「いいくせだわネ。テルちゃんは、キチョウメンだから……。でも女の子だからみっともない恰好はできないわネ。もっとも、あなたに手伝ってもらえば安心だけど」

おやおや、これじゃ当分小林さんのつけびとは続くことになりそうだ——と私は心の中でばやきました。

一回、二回と腰へまわして、ギュツと思いつききつく締め込みます。小林さんに比べますと半分くらいしかないような肉づきの薄い私の腰へ、指一本はいらないくらいに堅く締めるのです。

「そんなにキツク締めて苦しくないの？」

小林さんが目をまるくするのへ、

「あたしみたいなおヤセは、こうしないとピツタリからだにつかないんです」

「ヘーエ、あたしのようなおデブは、そんなにしたらメリ込んじゃって呼吸ができなくなっちゃうそうだわ。あなたのを見てるだけで

も息苦しくなっちゃう」

「でも、このくらいにキツクしないと、じきにズリ落ちちゃいそうで、心配で……」

「でも、テルちゃん、おヤセおヤセって云ってるけど、あなたなんかそんなにおヤセじゃないわヨ。背が高いから細く見えるだけヨ。胸だって厚いし、手足もしっかりしてるし、だいいち、このおヒップのボリュームなんか相当なもんヨ」

おしまいの結び目の端を引き上げながら、小林さんはそう云って、私のおシリを軽くハジキました。

「テルちゃん、いま何キロあるの？ 六十五キロくらい？」

「いいえ、六十キロちょっと……かな」

「でも、立派なもんじゃないの。あなたの身長ならもうちょっと欲しいところだけど、練習をマジメにやっていたら四キロや五キロふえるワ。そのくらいになったら、あなたの突っ張りも威力が増すし……そうしたら、あたしなんかこわされないように気をつけなくちゃ……」

ふだんあまり冗談なんか云わない小林さんなので、私はそれが本当にそう考えてるのかも知れないと思い、顔がゆるんでくるのを、

一生懸命がまんしました。

私の猛突っ張りに、小林さんが悲鳴をあげる……そんな情景を頭の隅で思ったりするのでした。

ひさしぶりに身につけた、マワシの感触は悪くありません。キュウツと締め上げてくるタテミツの快よい圧迫感が、小林さんの言ったとおり、気持ちを引き締めてくれます。ぐっと何かが、おなかの奥から胸へ突き上げてきて、思わずブルツとからだが震えます。

「どうしたの？」

小林さんが、びっくりして聞きました。

「寒い？ テルちゃん」

「いいえ」

私はまたちょっと赤くなって答えました。

「だって、いま震えてたじゃないの？」

「むしろぶるいです」

私は前ミツをポンとたたいてみせました。

「ああ、そうなの」

小林さんは、私の答えを聞いて安心した顔になって笑いました。

「ほんとよねエ。マワシをつけると、むしろぶるいが出るわねエ。何かこう、おなかの底から斗志が湧いてくるみたいで……」

「そうですね。やっぱり相撲はマワシをつけ

なくっちゃ」

「そうよそうよ。それをなにさ、あのいくじなしどもったら……。口だけは二人前なのに」小林さんは共鳴者を見つけて、すっかりごきげんになりました。

私たちが戻りますと、口だけは二人前の連中が、いっせいに火ぶたを切りました。

「ワァ、テルちゃんまで張り切っちゃって」

「ムリしないでヨ」

「横綱と露払い！ 太刀持はどうしたの」そのうちに、

「ビッグ山と、オーロング川ァー」

などと言う声がして、とうとう笑いが爆発してしまいました。

小林さんも、さすがに笑い出しましたが

「ウルサイわネ。あんたたちもマワシをつけてきたらどうなの。ネエ、テルちゃん、気分がちがうわネ」

「そりゃ、あんたくらいのボリュームなら寒さもたいして感じないかも知れないけど、テルちゃんまで道連れにしたなんて、ちょっとかわいそうみたいだワネエ」

中川さんが口をはさむのへ

「さァ、こんないくじなしたちにかまわないで、テルちゃん、いっちょぶつかっておい

でヨ」

と、小林さんは土俵で私を招きました。

久しぶりに身につけたマワシが、私の斗志を呼びましたのでしょいか、囲りの人たちに対しての見栄がそうさせたのでしょいか。

「そうネ、模範がいこいきましょいか」

私も、スラスラとそんなことばが口をついて出るのです。

「ワァ、すっかりいい気になっちゃって」

「いいから、いいから」

「そんな講義はあとでいいから、早くやんなさいよ」

うらやむような、ひやかすような声をうしろにして進み出ますと、小林さんはさっそく「さァッ！」

と声をかけ、両手をひろげて左足を大きくうしろへ引き、腰をグッと落として、身構えます。

ポテッとしていた小林さんのからだに何かピリッとしたものが走るのを見た感じで、丸々としたからだがちまちピンと張り切ってムッチリとした乳房までが引き締まります。一分のスキもなく緊張したみごとな体に、キリリと締め込まれた青いマワシが、この上なく映えて見えるのです。

「スバラシイワァ……」

そんな思いが、フッと頭をかすめます。

でも、これからは真剣勝負。そんな見とれていたりなどしてられません。「フウッ」とひとつ深呼吸をして闘志を奮い起こし、

「ヨォッ！」

と気合いをかけて、身構える小林さんの厚い胸をめがけて突進します。

さんざん柔軟体操やら四肢ふみやらをしたあとなので、からだも思うように動きます。

「ヨォッ！ いい当たりッ」

金子さんらしい声がして、それは、私自身でもスゴイ当たりだと思いました。

額のあたりに、胸のふくらみらしいやわらかいものの揺れ動くのかすかに感じ、がっしりと両わきを押し上げるのひらに、小林さんの筋肉がモリモリと躍動しているのが伝わってきます。

グイグイと押し進む足もとの砂の上に、後退して行く小林さんの足のあとがズーッと続きます。ドン……とわきを突かれて型どおりに回転する、その背中に感じた砂の冷たさも最初の時だけで二回、三回とぶつかって行くうちに、全身がほてってきて、いつしか汗がにじみ、吐く息が火のように熱くなります。

ぶつかって行く小林さんの胸のあたりに私の額の汗なのか、小林さん自身のなのか、汗の流れが生まれているのです。

ほんとうに、その日のけいこはすばらしいものだったと思います。真冬だというのに、吹き出る汗がとめどなく流れて、紅潮した肌の色を自分でもうつくしいなァと思って眺めたのです。

「満足そうな顔してるじゃないの、この人」
ヒロちゃんが汗をぬぐってくれながら言うのでした。

「あたしもやればよかったワ」

津野さんが、ちょっとくやしそうな顔をすのへ

「いくじなしは、いつでも後からばかりそんなことを言うものヨ」

と、これも汗に濡れそうな顔をした小林さんの痛烈な言葉がとびます。

「まあ、今日のところはなんとでもいばっておきなさい」

口の悪い中川さんも文句なしでした。

でも、それからは、ちょっと温かい日がありますとすぐ

「さァ、張り切りお嬢さん、今日はマワシをつけないの？」

「また、模範がいこをいっちょやって、いくじなしに見せてヨ」

と、けしかけられたり、ひやかされたりで困まりました。

小林さんの方は、

「いいわヨ。じゃあテルちゃん……」

と、直ぐに乗ってくるものですからますますいけません。

でも、それからあとの小林さんのお相手は私ばかりではなくて、津野さんになったり、松田さんになったり、そして、寒さにヨワイはずのヒロちゃんまでが、マワシ姿になったのには、びっくりさせられたものでした。

「みんな熱がはいってるわね」

時々顔を見せる今井さんも、私たちの猛練習ぶりに目を見はっていました。

「来年度はきつといい成績あげられるわヨ」

笠原さんや野川さんも満足そうでした。この先輩たちの卒業したあとの三年生は四人、そのうち榎本さんはマネジャーにまわるので五人の選手の座はふたつだけ残されます。

そしてそれは、当然私たち五人の二年生がねらわなければならない座なのでした。

けれども、私たち五人の間では、そのうち一つは松田さんが決定しているようなもので

した。いちばん後から入部した松田さんは、恵まれた体格と、すぐれた運動神経とでメキメキと強さを増し、あとの四人の誰が向かって行っても歯がたたないほどに差がついてしまったのでした。

バランスがとれた体格なので、服を着ている時にはそんなに大きくも見えない彼女なのに、いったんマワシ姿になって練習場に現われますと、ほんとうに見ちがえてしまうほどそれは堂々として、落ち着いた態度は、とても私たちと同じ学年の人とは思えないくらいなのでした。

豊かに広い肩幅からゆったりと張り出した厚みのある胸、そしてその上に乗った形のいいふくらみもすっかり重みを増して、おとめのいぶきを誇らかににおわせています。初めてこの相撲部へやってきた頃にくらべますとひとまわりもふたまわりも丸味を加えた腰にキツチリと締め込まれた練習用の白いマワシが、彼女の浅ぐろい肌によく映えて、ゾクゾクするくらい魅力的なものでした。前ミツの上に顔をのぞかせているおヘソが、ほどよく緊張したおなかにスッキリしたアクセントを与えています。スラリと伸びた線の美しい脚も太もものあたりに筋肉の重みを加えて、美し

さに、たくましさプラスした感じですよ。

スタイルがよくて、相撲が強くて、そのうえに勉強の成績もよくて……。三拍子も四拍子もそろった彼女なので、時にはニクシクなるのも無理はないでしょう。

ところで、松田さんの相撲ぶりは、彼女の人柄のとおり、実にオーソドックスなものでした。

立ち合いに突っぱって相手の出足をとめ、すばやく前マワシをとってグイと引きつけるのです。そして吊りぎみの寄り。長身の方なので、この吊りぎみに寄るのが効果的で、私たちではまともに向かつてはとてもダメ。津野さんやヒロちゃんが低い体勢からくい下がつて松田さんにマワシをとらせないようにした時とか、上級生では中川さんの猛烈な突っぱり、小林さんの突進……などが松田さんの攻撃に対抗できる人たちなのでした。

私も、先手をとって突っぱれた時には勝つこともあるのでしたけれど、組み止められたらそれまで……といったぐあいでも五回に一回くらいしか勝てない有様です。

こう言ってきましたと、松田さんには欠点などないように聞えますけれど、やはり松田さんにも泣きどころはあるのでした。それは、

おもに松田さん自身の体つきからくるものな
のでした。松田さんのスラリとした均整のと
れた体格は、たしかに立派ですし、スマート
でもあるのですが、そのスマートさが逆に
相撲をとる時にアダになっているのです。
つまり、松田さんのスラリとした美しい足が
弱点になるのです。重心が高くなるので低く
組みつけられた時にはスゴク不利なのです。
実際に津野さんなんかにくい下がられて、ち
よっと反り身になった時に、足をかけられ
たりしますと、あの松田さんが……と見てる方
でびっくりするくらいに、あっけない負けか
たをする時があるのです。

けれども、相撲を始めてからまだ一年にも
ならないのですし、まだまだ技術的にはこれ
から進歩することでもあるのですから、たま
にそんな負けかたをしたところで、松田さん
が弱いなどということにはなりません。

こんなことで、松田さんが第一番に正選手
にえらばれることは、みんなの一致した考え
のようでした。

けれど、あともうひとつの「栄光の座」を
めざして、あと四人の私たちの条件は全く同
じで、みんなが同様の権利があるのでした。

つまり、松田さんを除いては、あとの四人

はドングリの背くらべで、誰が優れているか
ら勝てないとはいえない有様です。

こんなことで、松田さんが正選手にえらば
れることはみんなの一致した考えなのでした
けれども、あとのもうひとつの座——。その
たったひとつの栄光の座に対しては、津野さ
んも、西田さんも、ヒロちゃんも、そして私
も、全部同じ条件——同じくらいの権利を持
っていると言ってよいのです。

つまり、松田さんを除いては、あとの四人
はドングリの背くらべで、誰が強いかと云う
いうことはできない状態だからなのです。

私の突っぱりがうまく命中すれば、誰にも
敗けない自信があります。クニャクニャした
感じであつかいにくい津野さんだって、く
さがり専門のヒロちゃんにだって、寄せつけ
なければ絶対敗けないと思います。けれども
それは、こちらの攻撃がうまくいった時のこ
とで、津野さんやヒロちゃんにしても、とく
いの体勢になれば私なんかには敗けやしないと
思っているに違いありません。

おたがいに一長一短のある私たち四人が、
ひとつの「座」をめざして競いあうのは、勝
負のきびしさをいやでも感じさせられること
ではありますけれど、それ以上にまた毎日の

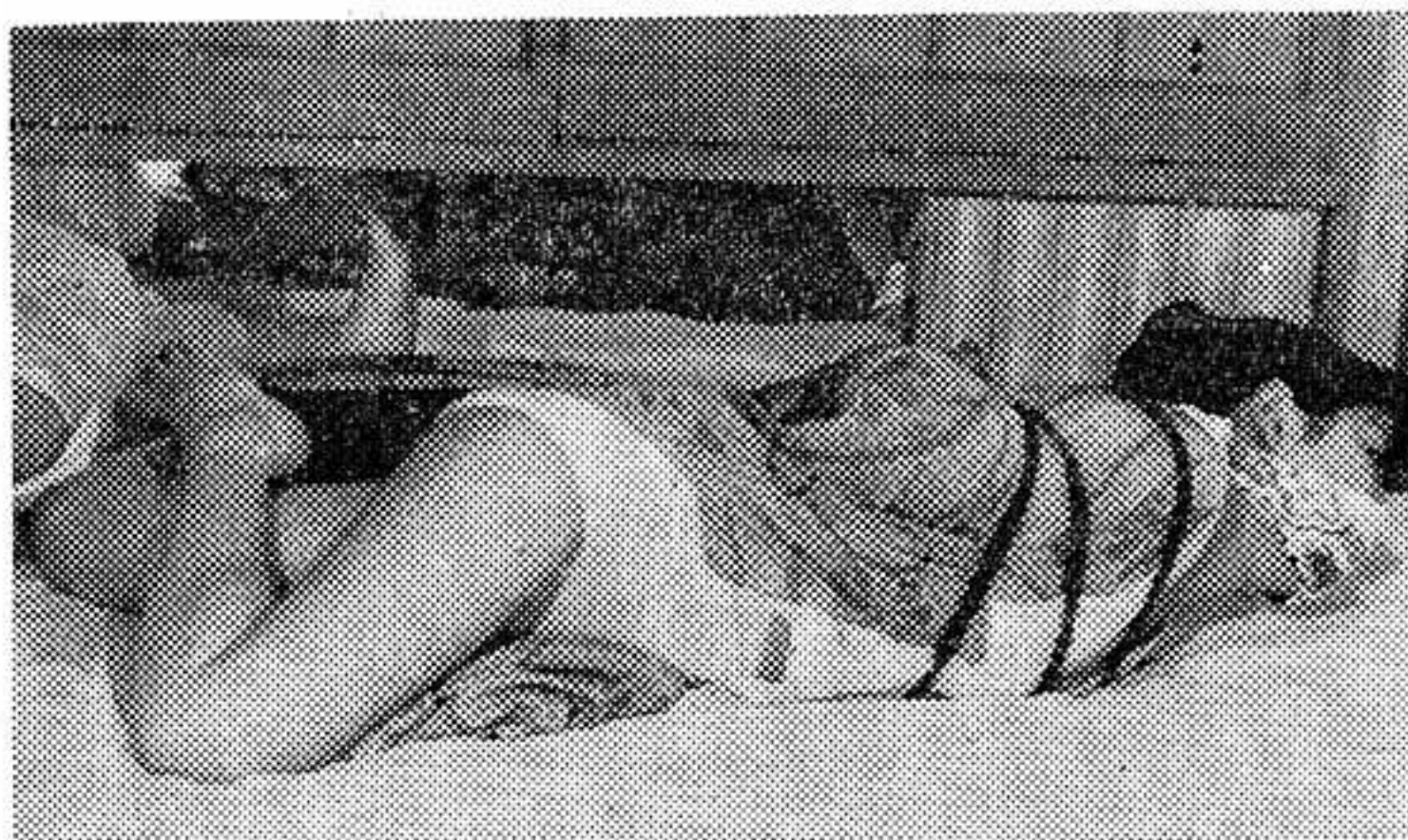
激しい練習の苦しさを乗り越えて進ませる、
大きな張り合いとなっているのです。

それに、私にはもうひとり、忘れることの
出来ないライバルがいるのです。

云うまでもなく、S高校の吉永ユリ子さん
です。しよげ返っていた私を励まし、立ち直
らせてくれた彼女は私にとって恩人でもある
のですが、そして、いくら理解があっても友人
になることを約束した間柄と云っても、その
ことで、私が彼女との最初の勝負にみじめな
敗け方をしたということが消えてしまうわけ
ではありません。敗けたこと自体は仕方なか
ったことですし、私が吉永さんのファイトに
圧倒されて戦意を失ってしまったことを、今
さらクヨクヨしてみてもはじまらないこと
です。この次からはあんなヘンテコな敗け方
はないということなのです。

いや私は、ぜったいに敗けません。吉永さ
んのあのキラキラとよく光る目にだって正面
からにらみ返してやるのです。そして堂々と
彼女を敗かしてみせます。それが、あの時の
約束だったのですから。そして、その約束を
果たすためにも、まずヒロちゃんたちに、敗
けることは出来ないのです。

(未完)



漫 筆

ふ お と
あ ん ど
むーびー

鵜 藤 恵

○

『いろいろと厳選した結果、御身分、御年令などより、貴方さまならばと信じて御案内を差上げた次第でございます。突然この様な御書状を差上げます失礼をお許し下さい』

某月某日、右のような封書が、私の手許に届いた。

『お待たせしました。新作が完成しました』
という大きな活字の、キャッチフレーズの後に続けて

『通信販売でいわゆる“秘写真”をお求めになった方は、ガッカリなさった方が多かったのではないかと存じます。現在ではこの世界も沈滞してしまい、新しい製作が少なくなり

古い写真の複写や、ツマラナイ写真類が多くカラー写真が一般に普及しているにもかかわらず、モノクロ写真が殆んどです。

又、中にはタイツをはいた美容体操まがいの医学カードのポーズ集や、パンツをはいてかんじんの所が全然見えない写真もあり、真面目な愛好者にとって大変残念な事です』

と嘆いている。そして、その後に、膨大な費用を投じた事だとか、芸術性を加味し、モデルを厳選した事だとか、長期保存に耐えるため、特に留意した事だとか、好き者にとっては涎の垂れそうな文章が、アート紙に印刷されている。

『S・M趣味の方にもキット御満足戴けるプレーの型も豊富に取揃えました』云々の文章に、ちょっと魅かれる点も感じたが、カラー名刺判にて五十三枚組、特価二千二百円、しかも送料共とあるのを見ては、いささか申込みを躊躇せざるをえない。あまりに安過ぎるからである。

安いに越したことはないが、現在、街の写真店にてのカラープリントは、名刺判（実際にはAサイズと呼ばれているトリミングをしないサービスサイズのこと）一枚、七〇円が定価である。この計算でいくと五十三枚にて

三千七百円余になる訳である。

読者諸氏の中には、カメラの好きな方もいらっしゃると思うが、カラーの場合は、現像焼付は殆どD・P店に依頼されている筈である。この場合、D・P店では、まだカラーだけは自家現像をしておらず、ラボに発注してしまう。このラボからD・P店に渡る価格でさえ、一枚、五十円弱であるから、どう考えても五十三枚にて二千二百円は納得出来兼ねるのである。これでは原価もとれまい。考えられることは印刷ではないかと云うことだがまあ、実際に注文してみなければ、如何なる内容かは判る術はない。

○

最近、実話週刊誌等の片隅に小さな活字のギッシリ詰まった広告文を良く見かけるが、小生はまだ一度も申込んだことはない。郵便でわざわざ注文する程の興味もないし、第一信用出来ないからである。

聞くところによると、現金同封で申込んでもしナシのツブテだったり、幸いに送付されて来た場合でも期待に胸震わせて開封してみると、出て来た物は広告文とは似ても似つかぬ代物で、がっかりさせられたりと云う例が少なくないらしい。

良く考えれば、これは尤もな話で、そのものずばりの写真等、例えあっても送ってくる筈がない。そんなことをすれば猥褻図画云々の罪名でその筋の追及を受けることは必至である。

注文した方も、とんでもない代物を掴まされたところで内容が内容だから、まず何処にも話の持っていくしようもなく、二度と注文するものか、で終わってしまう。

前記、ダイレクトメールも、東京・中野のK文庫なるところから注文ハガキ同封で届いたものであるが、自分の住所氏名が何処から流れたのか大体の想像はついたが、この種のダイレクトメールと云うものは、突然送付されて来たりすると、人によつては甚だ迷惑ではなからうか。小生のように一人でアパート住まいをしているなら別であるが、同居人のある場合、万一、他人に開封されたらどうする積りか――。

○

十人集まれば顔は勿論、その性質や癖までも皆違ふように、趣味もまた、人それぞれであることはいうまでもない。

“コレクター”と云う映画があったが、切手や古銭の蒐集等はコレクションとしてはその

最たるものであろう。特に切手の蒐集等、上は老人から下は小学生に至る迄、最近は随分多いと云う話である。

ここに、その性質から云って表面には出ないが所謂“例の写真”のコレクションマニアなるものは、相当数に上るのではないかと思われる。尤も子供や女性を除いて成人男子のみを対象とした場合ではあるが――。

精神、肉体共に健全？ な男性であれば、まず“例の写真”に興味を持たない人間は居ないと思う。少くとも小生の知る限り“例の写真”を見せて頭から湯気をたてて怒られたなんて云う話は聞いたことがない。

小生も特に意識して蒐めた訳ではないが、その方面の写真が大分溜ってしまった。職業柄、その気にさえなれば機会は幾らでもあったし、今迄にもっと蒐めることが出来たかも知れない。しかし、幸か不幸か夢中になって蒐める程には、小生興味がなかった――と云えば嘘になるかも知れないが、それ程興味がなかったと云うより、小生にはその種の写真より、数倍も魅かれる写真があったからである。それは過去十年近くも小生を魅了して離さなかったし、これから先も決して自分から離れていくことはないと思う。

女性緊縛写真、責写真がそれである。

○

過去に職業(写真店)柄、相当量の「秘写真」や「マル秘八咫映画」を観て来たが、その中から二、三気付いた事を記してみよう。

所謂「例の写真」では、さすがに、そのものずばりの物ばかりで、縛りを扱った物は三点しかなかった。一点は男性一人、女性二人の計三人の登場人物の演じる写真であった。舞台上云えば、左手に当たる部分に一对一の男女が今や真最中。右手後方にもう一人の女性が乳房の上下を麻縄らしき物で縛られて、二人のほうをじっと見ている。演出効果万点の写真であった。勿論モノクロである。

もう一点は図・絵である。四十数枚が一セットになっている。女性の髪形からみて、かなり古い(昭和初期位と思われる)絵である。しかし、絵は素晴らしい。相当に描き慣れた者の筆による強烈な迫力がある。この絵は今小生の手許にあるが四十余枚の一枚である。髪をおさげに結った一人の少女が全裸にされて、腰紐で細い両腕を完全に高手小手に縛られている。男が一人、その少女の軀を何とも奇妙な恰好にさせて……と云う極めて刺戟的な構図である。お見せしたい所だが、露出度

百パーセントにつき、それは不可能である。

あと一点は八咫であるが、これは、女性一人の家へ二人組の強盗が侵入する。無理矢理生れたままの姿にすると、上半身を縛り上げるその挙句メジャーを取り出して、女体の各部を実に丁寧に計り始める。この計り方が、誠に嗜虐的であったが、勿論ここに書くことは出来ない――。

一度、こんなことがあった。数本のネガから、各一枚宛、名刺判に焼きつけて呉れと云う。拝見すると全部複写であったが、驚いたのはその枚数である。各一枚宛焼いていっても、合計すると二百余枚になる。二百余枚全部が、全く異なった写真ではあるが終りの方に来ると、どれもこれもがみな同じに見えてくる。後で調べてみると、同じ駒を二度焼いたり、そうかと思うと焼いたつもりで焼き落しがあつたりで、仕事だから多いのはいいが余り多過ぎるのも、良し悪しだと思ったものだ。

登場人物の扮装の中で最も多い物と云えばまず第一に看護婦が挙げられる。次に女学生の制服姿、あとは生れたままの姿と云う順序になる。

緊縛写真でもそうであるが「例の写真」も

やはり小道具の豊富な点や、アイデアの奇抜さに於ては外国物に軍配が挙るだろう。女性同志の例のレスビアンを扱ったカラー写真があつたが、金髪女性物で、複写でないところは非常に珍しかった。この種の写真で複写でない物を求める事は普通ではまず不可能に近い。酷いものになると、複写のまた複写なんというのがある。あまり複写に複写を重ねると、いくらその技術が良くても、また六×九判のカメラを使っても、粒子の荒れは隠しようもない。粒子はこの種の写真の命である。緊縛写真もまた然りであろう。

○

先にも書いたが例の写真に興味を示さぬ男性は殆どないと思うが、中でも特に好きな方は、私の経験で云う限り、所謂、固いお勤めの男性に多いようである。

小生のお得意様の一人に某市立学校の教員が居る。小学校であるが、このお方がまた特に写真や秘具のお好きな方である。放課後のある一日、件の先生と小生が話をしていたと思し召せ。

先生、その日は宿直とやらで職員室には誰も居ないから、自然に話し声も大きくなる。そこへ、夏のことであるので開けっぱなしに

なっていたドアから、一人の若い女教師が入って来た。小生がハッとなって話を止めたのは勿論であるが、件の先生、何を思ったのか突然、その若い女教員に話し掛けた。若い女性のこと、当然、真赤になって逃げ出してしまいかと小生は思ったのだが、イヤ、ドウシテドウシテ、顔色ひとつ変えずに、堂々とお相手になりました。顔を真赤にして恥ずかしそうに俯向いたのは小生の方であった。

お役人の中にもお好きな方がいて、事務機の抽斗の中にこっそりと、そしてせっせと蒐めていらっしゃる方がいるが、役所事務の方もこのぐらいに、一生懸命にやって呉れれば「スローモーションお役所仕事」等と云う汚名は返上される事であろう。

某自動車会社の部長に、やはり右に劣らぬ人が居る。小生の蒐集品の中には、この方からお借りしたネガが大分ある。イヤ、ネガから勿論プリントしたのではあるが……。中には酷いピントの物もあったが、実に素晴らしい物が多かった事を付け加えて置く。

概して固いお勤めの方は人間として、毎日の仕事の憤懣をこういった物に対して吐き出しているのかも知れない。しかし、小生の気持ちから云えば、見たいくせに、たいして見

たくもないような顔をしてとり澄ましているような人等よりも、前記の人達に、より一層の親しみを感じるのである。

○

近頃の漫画週刊誌の隆盛は驚くべきものであるが、その中に時々面白い三行広告が載っている。つい最近見たものの中に女学生の流腸シーンの特写なるものの広告があった。価格を見て吃驚したのだが、白黒名刺にて一枚一千円とある。十枚にて一万円、百枚セットなら十万円だと云う。普通この種の写真の広告を見ていると分るのだが、大体一枚百円前後の物が最も多い。それが女学生の流腸シーンに至っては一枚千円と云う価格だから、何と約十倍である。考えてみると、この価格のつけ方はなかなか旨いものである。一枚百円前後の物だと信用出来ない人間でも、千円すれば、逆に信用して、例えば多くは注文しなくとも一枚や二枚なら注文する気になるかも知れない。

この女学生の流腸シーンに限らず、最近はず分とS・Mを扱った、この種の広告が増えて来たようである。謂く、狂った快楽恐怖の責め、だとか、被虐に陶醉する女性達、だとか、他にも色々で見かけるようになった。数

年前にはあまり見られなかった現象である。

小生はまだ一度も注文した事はないから、広告を見ただけでは判断出来ないが、これなども複写の匂いが多分に強い。あるいは逆に考えて、責めや緊縛を扱ったものの方が、そのものずばりでなくとも済むから、案外ガッカリさせられる率は少ないかも知れない。

しかし、現物を手にしてはいないのだから真偽の程は定かではない。ただ汗水流して得た貴重な金銭である。大切にして効果的な使い方をすべきである。

○

さて、八耗となると前記した以外にS・M的シーンのあるものには、お目にかかっていないが、面白いのは題名と編集方法である。この種の八耗映画には内容を暗示させるような題名は意外に付けないものが少なくない。一度、カラーで相当どぎつい作品を観賞？した事があるが、このタイトルが「ある日曜日」と云う何の変哲も無い、これだけでは、まるで家族旅行か何かの映画を連想させる題名であった。実はこのフィルムは顧客から、映写中に三度ばかり切れてしまい、スプライサーもエジターもないので、当方にて接合するように頼まれたものなのである。

エジターに掛け、タイトルを見ると「ある日曜日」となっている。そのレタリングも誠に手の込んだもので素人離れしている。と云って既製の市販品でもなさそうである。遠足か何かのフィルムだろう位に思って、回転速度を早め、約一卷(五〇フィート)程巻き取った頃にドキッとした。

今迄、ダイニングキッチンで若奥様風のエプロンをした清潔な女性が皿をかたずけたりテーブルの上を拭いたりしている傍に、夫らしき男性が煙草を銜え新聞を読んでいたのがあるが、女性が仕事を終え手を拭き始めると突然、男が女の傍に近づき後ろから羽交締めにしたのである。そして後はおきまりの女性が着衣を全て剥がされて珍しいポーズをとるシーンが延々と続く事になるのであるが、このように最初からそのものに入らず、五〇フィートも極くあたりまえのシーンに高価なカラーフィルムを消費することや、同じようにあたりまえのタイトルをもって来たり、色々と手をかけているのは、全てフィルムの内容露頭を防ぐ手段であろうと思われる。

これは大分以前、警察の防犯課員の話として聞いた事だが、この種のフィルムの押収品を担当者は最後迄は殆ど見ないと云う。最初

の一卷目位迄を見れば、後は見る必要がないからだ云うのである。前記フィルムが、そこ迄考えて作られたのかどうかは、勿論小生の知るところではない。

警察で思い出したが以前、某署に所用があって行ったところ、その署の中廊下(一般人は特に出入をしない)に悪書指定云々の文字の後に「奇譚クラブ」他数誌の誌名が堂々と掲示されていたのに驚いた記憶がある。仕事の関係で随分と各警察署を歩いたのだが、後にも先にも、こんな事は初めてであった。

——閑話休題——。

○
ほんのメモ程度で終る筈だったが紙数が意外に増えたようであるが、もう少し書こう。

最近「夫婦プレイ」の記事が大分多くなつて来たが、諸氏は撮影済の「緊縛写真」の現像・焼付は何処で処理されるのだろうか。本誌に時々、現像引受をしても良いという方の記事が載る事があるが、あまり依頼の多くなさそうなところから見ると殆ど各自、自宅で処理されているように思われる。

D・P店の場合、所謂「例の写真」のように余り露骨なネガは、例え複写であろうが、固い店では断わる場合もあるが、特に一カッ

トにつき数枚も数十枚もプリントするようにと云う、疑いのもたれる場合(純然たる趣味だとは思われぬ)以外は大体引き受ける所の方が多い。尤も未現像フィルムの場合は、中が分らぬのだから黙って依頼されれば、否応なく引き受けてしまう事になるのだが……。

モノクロ(白・黒と書く)と話がややこしくなるので、この場合敢えてモノクロと書く)の場合は、そう云う訳で別にどうと云う事も無いのだが、カラーや八耗になるとそうは行かない。

カラーでもリバーサル(スライド用のフィルム)の場合はそうでもないが、ネガフィルムになると完全にお手挙げである。十中八九断わられると覚悟した方が良ろしい。何故なら、D・P店より発注されたラボでは現像処理後、あるいは既に現像済のネガであればそのままプリントの方に廻される。その段階に於て、怪しげなフィルムは忽ち発見されてしまふ訳である。ところがリバーサル(この場合は、八耗も同一と考えて良い。何故なら八耗は十六耗や三十五耗と違ってネガフィルムは市販されていないので……)フィルムになるとプリント作業がないところから、当然抜き打ち検査となる訳だ。余り生活の悪知恵的な

話は、さすがに気が引けるので、この辺りで打ち切りとしたいのだが、仮りに万一現像所に於て、この種の貴重なフィルムを没収されたところで絶対に文句は云えない。注意してみるとフィルムの説明書に、公序良俗に反する内容のフィルムは云々の文字が印刷されているからである。

日本のフィルムメーカーに於けるこの点の固さは相当なもので、以下に二ツ程の例を参考迄に掲げてみよう。

最初はSフィルムの場合であるが、東南アジア系の外人がある日、ネガカラーフィルム一本を持参して出港日が近いので大至急現像及び焼付を各一枚宛やれと云う。短時日なので引き受け兼ねる旨を云ったのだが、どうしても頼まれ、Sフィルムの現像所宛、電話を入れて了解をとった。そこ迄は良かったのだが後がいけない。翌日現像済のフィルムが届いたので、さっそく拝見するとプリントがない。訳を訊くと、こう云った内容は焼付出来兼ねると云う。ネガを見ると別に何と云う事はない、唯のヌードに過ぎない。決して露出している訳ではないのである。これ位ならプリントしても良からうと思ひ、客が外人で出港日が迫っている事を理由に、頼んだのだ

が、否の一点張りである。結局、苦勞したのは自分で、翌日訪ねて来た色の黒いその外人に、身振り手振りで、キャビンでクーニャンを相手に撮影したと云うネガを前に、奮闘実に十五分に及んだ次第であった。

次はFフィルムの場合であるが、これがまたちょっと変っている。某総合病院皮膚科より依頼されたネガフィルムを、ラボに発注した。これは現像済のフィルムでプリントのみの注文である。発注した翌日電話があった。若い女性の声である。

「大変、申し訳ありませんが、昨日お預りしたネガのプリントは出来兼ねるんですが……」

と云い、続いて、

「あのう……おできの出来た女性の軀を正面から撮ってあるものですから……」

と、低い声である。確かにそのネガは受注の際に自分も眼を通していたので、その通りに違いはないが、一眼見れば病院で撮影したフィルムである事はすぐ分る筈なのである。しかも顧客名が個人名でなく病院名になっている。確かに被写体は一糸纏わぬ若い女性の軀であるが、医学会の席上使用される物である事は自分が直接聞いて知っている。そこで「ネガを良く見て下さい。病院で撮影した事

位、分りませんか？」

と訊くと、それは良く分るのだが、とにかくプリントは出来ませんので、とまだ同じ事を云っている。こちらにも、いくら何でも腹に据えかねたので、自分が直接医師より預かったネガであり、絶対に正当に使用されるべき旨をくどい位説明したが何としても聞き容れない。そこで自分で駄目なら、その医師から直接そちらへ電話をするように頼んでみるがと云ったところ、電話では駄目だがどうしても必要なら、間違いなく病院で使用する旨の証明書を書いて押印して貰って来て呉れと云う。結局、証明書を届ける事によって、プリントは無事病院に届いたが、余りにも固すぎるのには吃驚したのを通り越して腹がたつた。この辺等、もう少し臨機応変に処置して欲しいものである。

以上掲げた例以外にも、まだいろいろと「写真」に関する話はあるが、今回はこれぐらいで、現在迄に数百枚入手した、本誌の八分譲写真・分譲絵画Vに対する、小生の希望、並びに不満を少しく個条書きにしてみても置き度い。

一、先にも述べた通り最も重要な事は粒子である。スタジオで大型カメラを使用して

落ちついて撮る訳ではないだろうが、せめてハーフサイズカメラだけは使わないで戴き度い。幾らO光学等でフルサイズとたいした差はない等と宣伝しても、手札に伸してみれば粒子の荒れは明らかである。なにも四×五判で撮って欲しいとは云わない。少くとも六×六判でお願い度い。カメラ・ハントの場合、二眼レフが携帯や機動性の点で不便であれば、三十五耗のレフあたりが限度である。

一、送付されて来た分譲写真の封筒を開封する時の気持はまた格別であるが、取り出して見てフェロ斑^{ムラ}のある場合がある。殆どは奇麗に仕上ってはいるが、たまに酷い場合等、もう一度水洗してフェロを掛け直し度い位である。細かい事ではあるがフェロタイプには充分気をつけて戴き度い。

一、一枚一組として分譲する場合は別であるが、三枚あるいは四枚一組の場合に考慮して戴き度い点がある。三枚組はまだ良いのだが、四枚一組はどうも困る。大体同一ポーズの物が非常に多い。過日、購入した一組は特に酷かった。四枚の内、三枚は殆んど同じポーズである。カメラ

アングルがほんの申し訳程度に変わっているに過ぎない。写真部でも十分に注意はしているであろうが、購入する側にしてみれば、これでは二枚一組で買った方が良かったと思うのは当然である。損をした様な気持になる訳である。組数によって違うが一枚百三十円前後になるのであるから、購入する方も選びに選んで注文しているのだから、三枚一組で済む様な内容のものを四枚一組にはしないで戴き度い。

一、ストロボや閃光球では仕方がないが、ライトを使ってジックリ撮影する場合、ライトの位置にも充分注意して欲しい。単なるスナップ写真とは違うのである。半逆光にて撮影された「緊縛写真」を二、三見て気付いた事だが、責められる女性の哀れさや美しさが大変良く出ていたように覚えている。マスターライト以外に

一、二の補助光源を用いて出来るモデルの表情の微妙な陰影もまた貴重である。最近はないようであるが、以前頻繁に分譲された感光紙焼付はどうも頂けない。あれなら印刷の方が余程マシである。写真にしる絵にしる、印画紙焼付と違って

コントラストが全くついていない。それに保存が不可能である。数カ月経つと感光紙同士がくっついてしまう。無理に剥がせば膜面が剥がれてしまうし、コリゴリである。随分前の話であるが略号ブロマイドで分譲された感光紙焼付の写真が小生の手許にあるが、あれは最も悪かった。百枚の内、いま満足に見られるのは僅かに一割程度である。後は皆、変色したり髪の毛や縄等の黒い部分が白く抜けてしまっている。これ等はまだ良い方で酷いものになると写真が完全に消失して、唯の紙に化した物さえある。当時、百枚にて千円だったと思うが、現在の限定版「美しき縛しめ」も同じ千円で百枚前後の写真が載っているのだから、こちらの方が変色はしないし印刷は素晴らしいし遥かに値打品である。

(以上)

「緊縛写真」は他にも販売されている所があるが、永い間の経験から、本誌扱いのものが最高だと思ふし、またより以上良くしたいと願う、我儕者の戯言として、お聞き流しの上よろしく御寛容の程を……。

・ ・ ・ 贗 作 シ ナ リ オ ・ ・ ・

繩 付 き 芸 者

沢 田 広

1 京子のマンションの一室

下着姿の京子、熱心な様子でラジオで商品市況を聞きながら、時々嬉しそうに、ほくそ笑んでいる。

ブザーの音に気がつき、チョッと舌打ちして立って行く。訪問者は妹芸者の光代であった。

京子「いらっしゃい」

光代「今日は。(ラジオの声に気づき)あれ相場でしょう。京子ねえさんは、小豆で稼いだり、スナックを経営したり、芸者というより女実業家ね」

京子「お金を儲けるのに、芸者もなにも変り

があるものかね」

光代「だって私達は芸妓でしょう。お色気を売るのが商売なのに。相場なんか力を入れてると、目の色が変わって狐みたいにならないこと?」

京子「まさか。今はね、多角経営時代なの。

現実には厳しいのよ」

光代「それで……」

京子「私はね、貧乏という棒でつつかい棒をした家で大きくなったのよ。もうあんな生活はマッピラだわ。お金の為なら何でもするわよ」

光代「ハイハイ、それはお互いさま。じゃま

あ今日の借り賃」

京子「毎度おおきに」

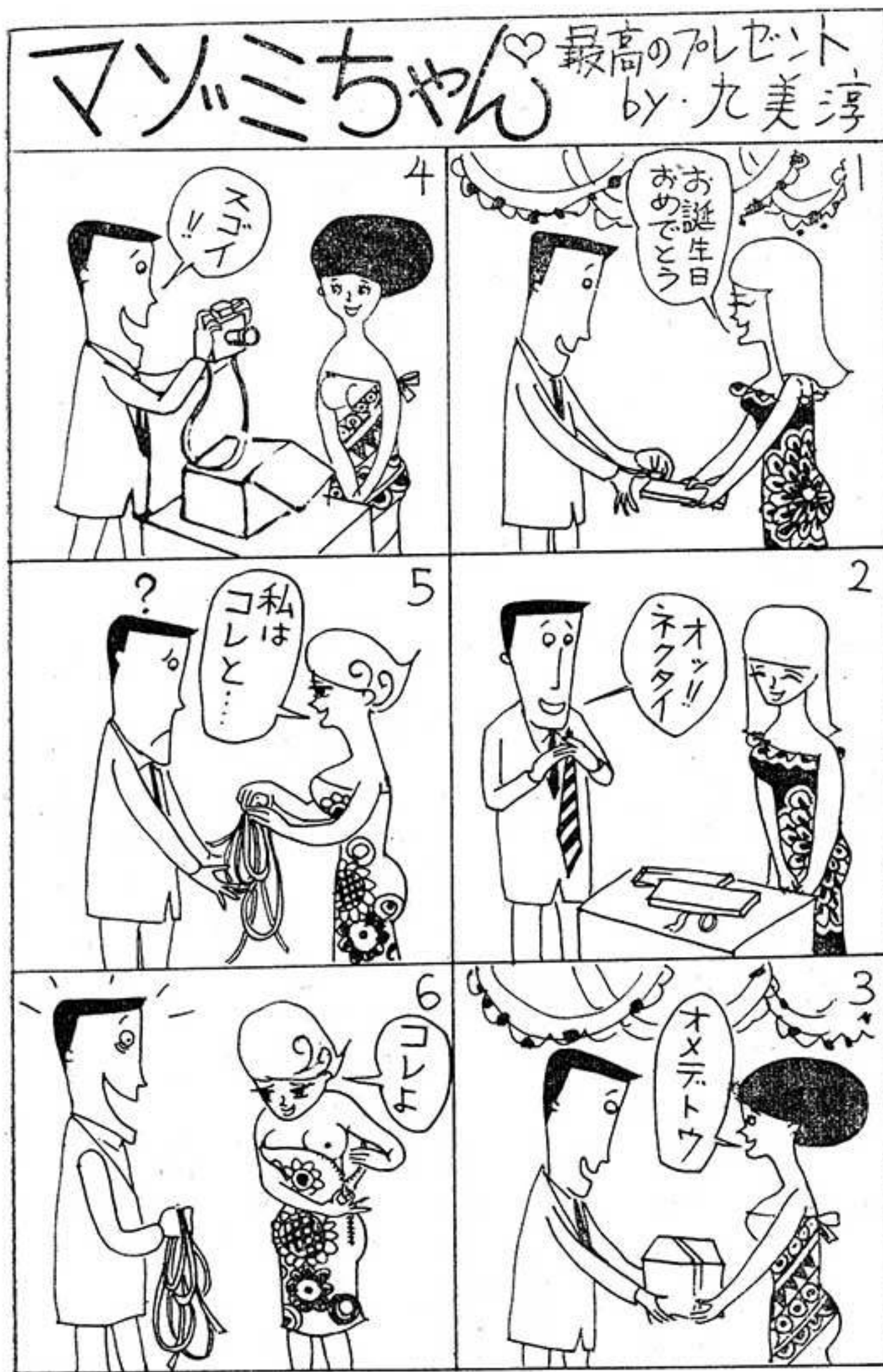
とおどける。茶の間でセンベイを囓る光代に、京子外出の支度をしながら話しかける。

京子「私のことをそんなにいうけど、あんたも相当なもんよ。他人の部屋を借りて、お金儲けをするんですもの」

光代「金儲けに時と所を選ばずね。とにかく貧乏の棒はいやだからね」

2 街頭の道路

京子ポータブルラジオで、商品市況を聞きながら歩いていて、時々ニヤニヤとする。向うから来た男が、けげんな顔をしたが調子を



合わせて笑いかけ、

男 「ずい分ごきげんじゃないか。どう、つき合わないか」

京子「スケベー」

男がびっくりするのに目もくれず、又ニヤツと笑う。

3 京子の経営するスナック「ハレハレ」
マダムらしく指図をしている。テキパキと

なかなかの貫禄である。

4 料亭「三春」の仕度部屋

京子、光代等芸者達と一緒に、化粧している。双肌脱ぎの背肌が艶々しい。

5 座敷

若い男、田村が金包らしきものを出す。

田村「持ってきたよ」

京子「有難う。いつも済みませんねえ。本当

にたすかるわ」

田村「京子、結婚してくれ」

田村と京子、抱き合う。

6 マンションの京子の部屋

京子、電話をしている。その眉根あたりがときどきかげれるが、声はわざと明るい。

京子「弱気になったら駄目だから、ずーっと買って頂だい。いいのいいの、少しがんばれば上向くから」

7 二三日後 同部屋

電話で話している京子。悄然とした気持ちを隠し得ないようである。

京子「ヤッパリあの時に、手仕舞いしておけば良かったのね。今更いっても仕方ないけれど……。イイワ、清算して頂だい」

8 同部屋 仲買問屋の社員

社員「しめて五百二十万の赤となります。なんとどうも」

京子「五百二十万ねえ」

と力ない。

9 料亭「三春」

お女将の春子と京子が向い合っている。春子は複雑な目付で眺め乍らタバコをふかす。

春子「そりゃ、何もかも承知であんたが住込んでくれるのは好都合だけれど、二百万

もすぐとはねえ……」

京子「マンションの権利も、『ハレハレ』も売って、きれいさっぱりハダカになったんですが、まだそれだけ不足なんです」
春子「ずいぶんとまた思い切って買っていたものね」

京子「割と信用があるので、相場を張らして呉れたのだけれど」

春子「仕方がないわね、オーサンに頼む？あの人ならアンタに御執心だから、きつと二ツ返事でウンと云うよ」

京子「何年契約ならというんでしょうかしらねえ。でもこの際、他に当てはないし。

………お願いします」

春子うなずいて電話する。

春子「モシモシ、OK株式会社ですか。こちらは三春商店でございますが、社長さんに……。ハ、ハイ、このままお待ち致しますから……」

10 三春の女将の部屋

春子「京子さん。あんたも相当な強者だし、オーさんのことも知ってるわね。覚悟してのこととは思うけど、本当にいいんだろうね」
京子「ええ」

春子「じゃ」

と、赤と白のマンダラの縄をとり出し、ゆっくりと、しごいてみせる。

春子「脱いで。オーさんの趣味に合わせてあげないと値打ちがないわ」

京子が、決心したように着物を脱ぐ。腰巻一つになると、春子がニジリ寄って、京子の左手を後へとり、縄を巻く。

春子「そちらも後に回して」

京子、後手に縛られる。縄は胸へ二巻き、乳房を押しあげている。首縄をぐっとシメ上げて止める。

春子「きれいな肌ね。オーさん、きつと大喜びよ。それにアンタもこうされるの、嫌じゃないんでしょう」

春子、乱暴に京子の白い腰巻をとり、紅色の腰巻を下腹部に巻きつける。

春子、女の子を呼び入れ、

春子「着物の始末、たのんだわよ。どうせ朝まで裸なんだから」

11 廊下、京子引き立てられてくる。

芸者ノ香、酔客とふざけながら来るのと出合う。ノ香が眼を丸くしてつくづく眺める。
ノ香「マア、京子ちゃん、素敵だわ。ホントにいろっばいわねえ」

酔客はゴクリと唾をのみ込んでじっと、見詰めたままで無言。

ノ香「美しいわ」

と、両手で京子の肩を押え、胸や腕の縄目をまさぐり出す。

京子「アア」

と、しゃがみかけるのを、ぐっと上へ引きあげたノ香

ノ香「女はやっぱり、あわれな姿になると、お色気が引き立つわね。あんたは綺麗だから余計よ。私もくくって欲しいわ」

酔客、無言でうなずく。
客の手前、あまりつつけんどうに出来ず、イライラした眼付で春子がそのノ香のカラーカイを見ていたが、

春子「サア、もういいでしょう。その位にしてよ。旦那さんがお待ち兼ねだから」

と、ノ香の手を払って縄尻を引いて合図し京子の背中を押す。

12 座 敷

太田が独りでチビチビ酒をのみながら、待っている。

春子「ごめん下さい、遅くなって済みません。途中で引っかかってしまつて……」

と京子をグイッと引き入れる。京子はよろ



け裾を乱して倒れかかる。

太田「ハッハハハ。ようようお待兼ねの生仏

のご入来か。有難や、有難や。どうぞご

利益を賜りますように……ハッハハ」

と手を合やすマネをする。

京子がふすまのそばに、ようやく身を起し

て坐っているのを、春子がぐっと縄を引きし

ぽって

春子「ハイ、では御主人様、あなたの奴隷を

お引渡し致します」

太田が「ウン」とだけ云って、渡された縄

を取って引きよせる。

太田「よく思い切ってくれたな。ま、とにかく

飲めよ。かけつけ三杯縛られて四杯」

酒にむせる京子。

春子「オーさん、うまく可愛いがってね。ず

い分、ご執心だったけど、これから、

ずっとあなたの独占物なんだから」

太田「独占物か。いいね、まったく」

春子「京子ちゃん。何はともあれ、ポンと大

金を出して下さったのよ。せいぜい頑張

ってお仕えることね。裏切ったら承知

しないからね」

春子は軽く京子の肩を叩いてから、太田に

笑いかけて座敷を出る。

太田「京子、その姿はイイナ。ちょっと歩い

てみてくれ」

後手のまま、うなだれて歩いてみせる京子

の縛られた姿体を、太田は目を細めて、酒を

のみなから眺めている。

太田と京子の色模様。

13 同じ座敷の隣り

太田が窓際の椅子で煙草を吸っていると、

春子が入ってくる。

春子「お早うございます。マアマア、京子ち

ゃんは、まだオネンネ？ いいご身分だ

こと。羨しいわね、まったく」

とふとんをはぐと、手足を後で一つに縛ら

れた京子。体をすくめることも横向くことも

出来ず、恨めしそうに見上げる。

春子「チャンと用意をして旦那様のお見送り

をするのよ」

足だけ解いて連れて行く。

14 内玄関

京子後手に縛られ、口に靴ベラをくわえて坐っている。太田が靴を履いて、靴ベラで軽く京子を打つ。

京子「行っていらいっしやいませ」

と、後手の不自由な身をかがませて頭を深く下げて送り出す。

15 路 上

田村と光代が立ち話しをしている。

光代「そんな理由で、昨日から京子さんは三

春へ住込みの身よ」

田村「よし、会いに行く」

光代「普通のお客としてならね」

16 三春の座敷

田村「京子。何も云わずにこんなにするなんてひどいじゃないか」

京子「ごめんなさい。済まないとは思うけどあまり急転直下だったので、相談するヒマもなかったの」

田村「明日の昼、会ってくれ。ダメか、明後日ならどうだ」

京子「もうダメなのよ。お金を受取ってしまった以上、裏切れないわ」

田村「こんな事は云いたくないが、今までは僕だって、相当に無理をきいたつもりなんだよ」

京子「わかってます。済みません。本当にごめんなさい。謝るわ、心から」

17 昼の三春のお女将の部屋

春子「マア、もうこうなったら無理ね。何ととっても、あのドタン場を助けてもらったのだから。それを今更、あなたと別れますなんて、絶対に云えないわよ」

田村「京子はおあみえていても、とっても純な所があるんだ」

春子「ところがそうでないところもあるのよ。いずれにしても、あの子は堅気の奥さんには、なれないわよ」

田村「いまからでも遅くはないよ」

春子「あなたもウブね。いいわ、あの子の正体をみせたげる。明日の夜、この前で待っていらいっしやい。キットよ」

と書いたものを渡す。

18 廊 下

暗い部屋に手探りで入る春子と田村。

19 部 室

太田と京子が卓を前にして坐っている。

太田「今日は変った事をやるよ」

京子を促してパンティ一枚にすると、縄をとり出し首にかけて、前にたらし、足の間を通して、首にかけた縄に通す。

京子は痛そうに、首の縄を持って身をよじる。太田はニヤリとして亀甲縛りに縛って行く。足を組ませて足首をくくり、腰へ廻して止めると、かるい海老縛りの型となる。膝の間に棒を渡してしまふと、京子は倒れることも出来ない。太田、バッグから吸引器を出して京子の乳房に当てて、空気を抜く。激しく身を揉む京子。

20 隣の部屋

春子と田村、小さいマジックミラーからのぞいている。

21 元の部屋

太田がバイブレーターを、縛られたままの京子にかけている。京子、マゾヒスティックな境地に恍惚となっている。

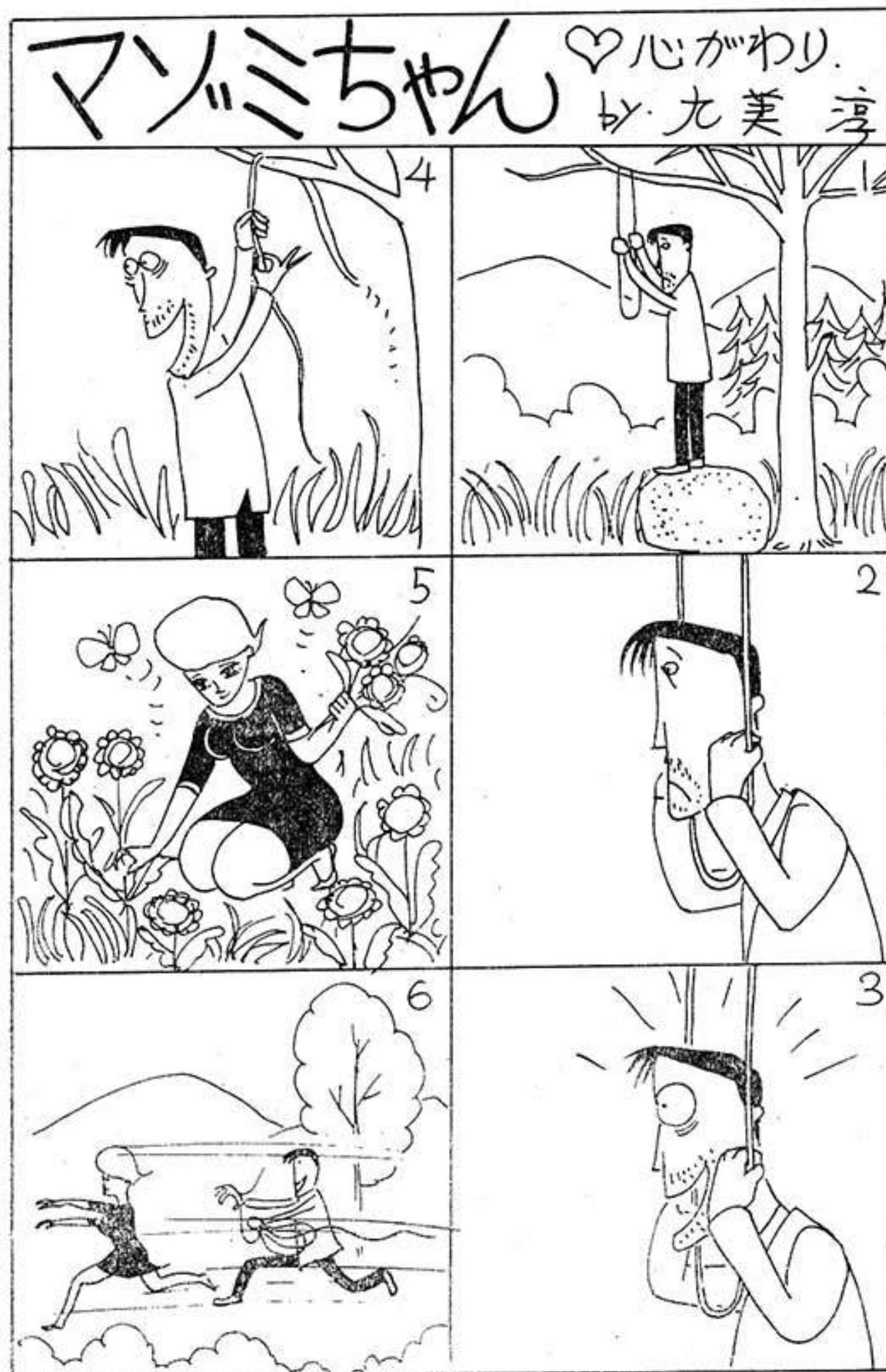
22 春子が田村にささやく

春子「どう、わかって？ 京子はあるにされるのを、本気で楽しんでるのよ」

23 元の部屋

太田、京子を吊ると、鞭で打ち始める。京子の肢体がぐねり、鞭が飛ぶ度にそり返る。

24 田村の眼



田村「美しい。あのジジイは汚ない奴だが」

25 元の部屋

太田と京子、いつ果てるともないプレイに
惑溺している。

26 路上

■二三日後、風呂帰りの京子は田村に呼び止
められる。待ち伏せていたのである。

田村「京子、僕と暮そう」

京子「……………」

田村「君は本気で、太田社長のメカケになる
つもりなのか」

京子「ソツとしておいて、お願い」

田村「僕は、いやだッ」

と抱きよせようとして、二人がもみあつて
いるのを、通りがかりの車の中から太田が見
つけた。車から出て、二人の方へ。

太田「京子、何している？」

京子「アッ」

田村「京子は僕の恋人だ。あんたは金の力で

京子を自由にして……………」

太田「君、どうして私を知っているのだ」

田村「京子、この人と別れて、僕と結婚して
くれ、頼む」

太田「だまれ、京子は俺のものだ。京子、浮

気は許さん。車に乗れ」

田村、思わず太田に、つかみかかろうとす
るが、人が見ているのに気付き、身をひるが
えて去る。太田、京子を車へ入れると、赤
電話をかける。

太田「三春のお女将か。太田だ。京子がワシ
を裏切った。お仕置きをするから、例の
所で待っている。お前も責任があるぞ」

27 ある建物

玄関を入ると部屋の中に庭がある。太田が
京子の手を後にとって押すようにしてつれ込
む。黒い皮のショーツとブーツを着た春子が
出て来る。ものも云わずに京子の着衣を、は
ぎとる。京子は後手に押えられているので逃
げられない。パンティだけにすると、皮のさ
るぐつわを京子にかまし、細いヒモで拇指を
くくり合わせて、首に吊る。早縄というもの

である。

春子「さ、お歩き」

と腰をけりつける。手首が吊上げられて首が締まっているので、京子は自然に胸を張った姿勢になり、うつむくことも出来ず、ギコチない歩き方である。

春子「前に云ったろう。危機を助けてもらっ

た事を忘れちゃいけないよって」

太田「飼犬に手をかまれるとは、この事だ」

春子「ゆっくりお仕置きをしてやるよ。京子

も味を覚えたらうれしいから、まんざらイヤでもないだろう」

28 地下への階段を下りる京子

29 地下室

天井から幾つもの鎖や手枷が下り、パイプのベッドや椅子、鉄棒のようなものが立っている。

太田「俺は日本調が好きなんだ。拷問式にやってくれよ」

春子「京子は洋風？ 和風？ どちらなの」

京子は、イヤイヤと首をふるだけである。

春子「欲張りだよ、この子は。両方とも、とっても好きだなんて」

春子は京子に正坐させ、捕縄で古式に縛って行く。無抵抗に縄を受ける京子は早くも被

虐の喜こびに慄えているようだ。

春子は、鞭打杖を京子の目に示し、ビシッビシッと打つ。たまらず横転する京子の尻にも、杖はとぶ。

30 海老責め

丸く縛り上げられた京子が呻いている。

31 追い廻し

足枷、手枷、首枷をつけられ、ムチで追われる京子。

32 企み

それから大分たったある日のこと、三春の春子の部屋へ田村が来ている。

田村「お女将さん、さっきもいったように京子の事はキレイに忘れます」

春子「その方がお互いの為よ。それでアイデアあって、どんなこと？」

田村「ただし、あの社長とは、ハッキリ別れたんでしょね。でないと……」

春子「その点は、いいの。京子のタフにネをあげて、さすがに好きな社長も、満腹

したって云いだしたのよ」

田村「アイデアと云うのは、こうなんです。

あの女を縄付き芸者にしてはどうです」

春子「ヒモツキじゃないのね」

田村「ハハハハ。縄付き芸者です。若い子と

組まして、余興でもなんでも芸者姿で責められるってのはどうです」

春子「そりゃ面白いわ。好きもの客が多いから……。あなた演出してくれる？」

田村「思いきり、残酷なのをね」

二人、うれしそうに笑う。

33 例の地下室

客が六人ばかり、マスクで顔をかくしている。舞台では、といっても床板であるが、日本髪の京子が、緋の腰巻だけで拘束具を装着されて、春子と銀子に責められている。

春子と銀子は、腰まである皮の長靴と、パンティと続いたのを身につけて、上半身は裸である。

春子、京子の箆口具をはずして、二股になった責め具で、後から首を押えつけ

春子「ご挨拶をなさい」

京子「……………」

春子、京子が云いよどむと、銀子にムチをあてさせる。

京子「私めは、京子と申す、ごらんの通りのマゾ芸者でございます。お慈悲をもって責めて下さいませ」

客の一人「年と、サイズは」

京子「二十四才。サイズは86、60、90」



客 「経験年数は」

京子「六年です」

客 「ホウ。責められるようになってか？」

京子「イエエ、それは一年程です」

客達が京子の感違いに、ドッと笑う。

春子「へんな子でねえ。いじめられるのが好きなんですよ。だからウンと拷問しないと、喜ぶばかりで、困るんですよ」

客 「そっちの若い女はどうなんだい」

春子「こちらは目下調教中ですわ」

京子は、厳しく縛りなおされて、春子と銀子から、羽毛でくすぐられ始める。

客、田村らしき人物「社長、ご感想は」

社長「ウーン、ものすごいもんだなあ。あつ

君、明日来給え」

田村「ハイ、有難うございます」

34 三春の座敷

客 「縄付き芸者を呼んでくれ」

35 週刊誌らしきものの記事

アイデア商売「縄付き芸者」の見出しなど

36 例の地下室

フツンの上に、黒っぽい縄で縛られた京子が横たわっている。両足は竹の棒にくくりつけてある。銀子が半裸になり、レスボス風な接吻をしている。そこへ春子が現われる。

春子「銀子、何してるの」

銀子「許して」

銀子が春子に組み敷かれ、後手にされてビシリと縛られて行く。引起されて京子と向い合わせにさせられる。その二人を春子がバイブレーターで交互に責める。京子と銀子が悲鳴をあげて転げまわる。

37 薄暗い部屋の中

天井から吊られた京子と銀子に、ムチを振るう春子。狂気じみた打ち方をする。

京子の、責められているさまざまの姿態。

銀子の、悶えまわるさまざまの姿態。

京子と銀子の二人が、ムチと同時にハネ返るさまざまの姿態が交錯して、部屋中に異様な雰囲気妖しく美しく充満してゆく。

終

SMサイドSFストーリー

金星の怪

町 陽 一



体の何処かが悪くなると健康のありがたさが判るという。日頃健康そのものの人間の方が余計その傾向は強いだろう。高次もこの前の事件で受けた傷の為、ギプスにとりつかれてから何日たつだろうか。ギプスと云っても一時代前のように体全体を締めつける大げさなものではなく、ほんの悪い所だけ動けないようにしてあるだけだが、それでも高次にとっては大変な苦痛だった。本当に本部から新訓練の指図が来ていなければどうなっていたか判ったものではなかった。

この部屋には、ベッドが二つあった。その

一つに高次が寝かされていたのだが、寝かさされた翌日、正確に云えば手術の翌日から高次はその、もう一つのベッドに一人で移るように命じられたのだ。それも歩いて行くわけではない。寝たまま、体を動かさずに移動しろというのだ。高次の体からは万能ベルトも外されている。どうして動けというのか、本部からの指示は云う「念力移動の訓練をせよ」確かにテレポーテーションの実現の可能性が出て来た。だが、奴等は機械の、それも大がかりな機械の助けを借りて、やっと実現出来たのだ。それを本来の姿とは云いながら、念

力だけでとは、高次もいささかむくれたが、本部からの命令は絶対だ。その上、時間潰しにはもってこいだ。その日から高次は馬鹿のように上を向いたまま隣のベッドに移ろうと想像した。何度馬鹿馬鹿しくなった事か。そのうちに新型万能ベルトが出来て来た。今度のは極端に薄く、肌色をしているので腹に直接しめると、裸になってもそう簡単には見破られそうにもなかった。それに今度のベルトには新たに、様々な能力がつけ加えられていた。だが、高次には、まだこのベルトを試してみることは許されなかった。そのベルトを

横に置いたまま、テレポーションの練習をくり返すしかなかった。しまいに頭が痛くなって来たが、持ち前の頑固さから、高次は注意力を集中させ続けた。そこに行きたいという意志、そこに居るという想像。口をつぶって、目を閉じて、高次は空しく、くり返した、くる日も、くる日も。他にすることがないのが幸いだった。わずか一カ月位、ギプスの虜となっていただけだったが、その期間は高次にとって永遠とも思われる長さだった。医学の発達にともなって、ギプスの期間も短縮されたが、それでも一カ月程もつけていなくてはならない程の重傷だったのだ。ここには誰も見舞には来なかった。ここは完全に、女人禁制の病院だった。高次としても、訓練以外に気をまぎらす事もなかったのだ。

退院の日が迫って来たある日、高次は、もう半ばあきらめかけたテレポーションの訓練を習慣のように続けていた。ベッドに仰向けになり、目を閉じて、もう一方のベッドに移ろうとする。今の高次にとっては、自分の脚で歩いて行けるのだが……

ドアが開いた。看護人だろうと高次は目も開けなかった。

「あらっ」

その口から洩れた声が、女性のものと判ると、高次は反射的に目を開けた。ぴったりした服が余りにも、体の線を現わしているのが全裸より刺激的だった。その美しい曲線を、一瞬のうちに見てとった高次だが、次の瞬間床に激しく叩きつけられていた。

「大丈夫？ A 6号」

目の前の豊かなふくらみが、刺激的だ。

「何をしていたの？ 貴方は、いま宙に浮いてたのよ」

「え？ 浮いてた？」

逆に高次が驚く番だ。

「フーム。だとするとテレポーションの出来損いだ」

つぶやくと、傍の顔を見た。蜂蜜色の肌、

黒い髪。

「君は？」

「B 1号」

「B 1？」

「そう、初めての女性部員よ」

高次は手を伸ばして柔い手を握った。しばらくもてあそんでいたが、突然鋭い気合と共に手首をひねった。女の体が高次の体を越してベッドの上に飛ばされた。だが二人の手は離れず、今度は高次がベッドを越して向う側に投げ飛ばされた。

「見事」

高次は続けて打った腰を撫ぜながら立ち上った。

「大丈夫？ 治ったばかりでしょう」

「いや、打った所が違うから」

二人は、どちらからともなくベッドに腰掛けた。久し振りの女性の雰囲気は高次の落ち着きを無くさせたようだ。艶のある黒髪、タイツのように全身を覆う光沢のある布、その下に隠された豊かな曲線。何時の時代になっても、女の曲線に男は弱いものだ。一時、曲線の目立たない女性が評判になった事があったが、観賞用でしかなかったのだ。

「入院して初めての女性の御入来だからな」

「お見舞に来たんじゃないのよ、今日は。新しい指令」

「おやおや、休養もさせてくれないのか」

「有能な部員は休養など出来ないわ。世界は忙がしいのよ。それに、今度は休養も兼ねているの」

「信じられないな」

「私とハネムーンよ」

「え？」

世界最強の敵が相手と聞いた時でさえも、

高次は、こんなに驚きはしなかったろう。

「いいから、本部に聞いてもらなさい」

高次はB1号の目を見ながら、手首の通信ベルトに手を伸ばした、呼び出しスイッチを押す。

「二人は新婚旅行、金星センターに行け。指令はB1号が持っている」

頭脳に直接飛び込んで来る指令はまことにそっけない。全快祝いの一つ位云っても、ばちは当るまいと舌打ちしながら、高次はスイッチを切った。

「成程」

「指令よ」

B1号は小さな円筒を渡した。高次は万能ベルトを処定の位置に、はめ込む。

「目下、金星センターに原因不明の事件起りつつあり。昨年暮から、一人の出生もなし。又、妊娠のきざしもなし。この所、毎年確実に十人の出生は見ていた。又、確認は出来ぬが外敵侵入の兆しあり。関連性は不明。A6 B1は新婚旅行客として調査せよ。以上」

処理ボタンを押して、指令を消去した。

「さて、花嫁さん、お名前は何？」

「パスポートにはミツと記されています」

「特技も知らせて欲しいなあ」

「そうね、一般訓練は勿論全部A。それ以外には……ああ、そう、一寸私を縛ってみて」

B1号は高次に背を向け、両手を背にまわした。

「よし」

高次はベルトから細紐をとり出してB1号の手首に巻きつけた。あの奇妙な城で見たミス・マゾの柔らかい肉体を思い出す。縄抜けの出来ない特殊な縛り方をすると、余った分を胸に巻きつける。この縛り方にはどんな女でもきつと呻くに違いない。

「いいよ」

B1号は高次の方を向いた。ぎゅちりと喰いこんだ縄の為、余計豊かに見える胸のふくらみが、まぶしい。

「いいこと？」

呻く筈のきびしい縄目に、にっこりと笑った美貌が身を沈ませて僅かに跪いた。

その間、ほんの二、三分だったろうか。

「ほら」

B1号は自由になった両手を前に出した。

「ふむ」

「まだ他にもあるけど、実用的なのは、これだけね」

金星センター。そこはフロンティアでもあり、新観光地でもあった。ハネムーンにしてはまだ少し危険が多過ぎたが、指定区域内だけなら殆ど危険がないし、又、若いカップルにとっては少し位危険があった方が楽しみが増すというものだ。兎に角、金星センターは新婚組に評判が良かった。

A6号とB1号、いや、高次とミツの甘いカップルがセンターについた時にも格別、目につく事もなかった。二人は、いかにも新婚のようにふるまった。ホテルの一室におさまった時にも、高次はミツを求めた。

「駄目よ」

高次は信号ベルトをミツのそれに密着させると、声に出さずに云った。

「何処から見られているか判らないんだ。我々は新婚なんだから」

「そうね」

ミツは抵抗を止めた。ミツの体は予想通り美しかった。蜂蜜色のなめらかな肌に万能ベルトは溶け込んでしまったようだ。

「どうするの」

体は敏感に反応しながらも頭は冷静だ。

「危険区域に入るのさ。どう見ても、外から何か操作しているらしい」

「出してくれる？」

「センターには責任無しという書類に署名をすればね」

「いいわ」

蜂蜜色の体がのけぞった。

「はい、ここここに署名して、拇印を押して下さい」

高次とミツの物好きなカップルは、こうして危険な、未知の世界に、センターから借りた光線銃を手にして踏み出して行った。

半日の間に可能な限り、しかも人知れず集めた情報によると、本部からの指令通り、この一年、赤児の誕生はなく、又、その傾向もないようだった。原因は全く判らない。

センターから見た時と違い、外に出ると、植物の繁茂はひどかった。

「光線銃は、いつなんどきでも使えるようにしておけよ」

「いいわ。でもこの霧では、どの程度効果があるかしら。新しいのを使ってみたいわ」

「駄目だよ、一ぺんにばれてしまう」

霧……というより白く厚いカーテンを下ろしたような中に時折、巨大な樹の影が浮かび上がる。

「帰りは大丈夫？」

「大丈夫、センターがこれを貸してくれているから」

高次は、手にした小さな物を示した。

「これがあると、何処にいてもセンターの位置が判る」

「どう……」

ミツの質問は途切れた。霧を裂いて、女の悲鳴が聞こえたのだ。一瞬、顔を見合わせた二人だが、どちらからともなく声の聞こえた方に走り出した。足元に、どんな危険が待っているか、そんなことを気にしている暇はなかった。だが、赤外線装置を使わないで走るのは、二人の足を自然ににぶらせた。

白く深い霧、黒い大樹の影。その下に一つの人影が浮かび上った。まだ二十才前か、体は成熟していたが幼なさのとれない体のすべてをさらした少女は、両手をまっすぐ上に伸ばした形で樹に縛りつけられていた。見ただけでも柔かそうなフックラした肌に、ぎっしり喰いこんだ縄目が痛々しくも妖しい。しかも、全く身動きの出来ない少女に恐るべきことが起こりかかっていたのだ。すぐ前に生えた植物の太いつるが生き物のように動いて少女に巻き付こうとしている、五本も六本も。

「食人樹だ」

高次は云うが早い光線銃の絞りを細くし一番強い光を発射した。まるで剃刃に切られたように根本からスッパリ切れる。一本、又一本、さらに株も煙を上げて消滅した。

まわりには色々な動物の骨が散らばっている。ミツはその間に、少女をつないでいる鎖と柔肌に巻きついていく縄目を焼き切った。少女は力無く地面に崩折れた。その体を高次は、膝に抱き上げた。しつとりと重い体は、昨夜のミツとは又違った感覚だ。

「高次、これを」

ミツは自分の着替えを出した。その目に、笑いと、ちょっぴり嫉妬が含まれていた。

「うむ」

丁度、服を着せ終った頃だろうか、少女が気がついたのは……

「あっ」

「大丈夫か」

「ありがとうございます」

「どうしたんだ、もう少しで殺される所だ」

「私……裏切者なのです」

「裏切者？」

「ええ、ボスの意見に反対なので」

「ボスって？」

「それは……」

「ああ、云いたくないなら良いよ」

高次は何か感じるものがあつた。

「センターにつれて行ってあげようか」

「いえ、あそこには入れません。私はセンターにとって敵ですもの」

「では何処へ」

高次は、少女の云った敵という言葉に気がつかないふりをした。

「私をかくまってくれるおじさんが……」

「送って行こう。ミツ、どうする」

「そうね、私はセンターに帰ってるわ」

一寸ふれた通信ベルトでミツは別行動をとることを伝えた。ついでに、変な気を起さないでよ、とつけ加えることも忘れなかった。

「じゃ、行こう」

高次は少女の肩に手をかけた。

森の中の路は細かった。所々に食人樹が待っている。先程のように近くに來たものを捕えるもの、鞭のようなつるで獲物を叩きつけるもの、同じ食人樹でも色々種類があつた。その一つ一つに注意を払いながら歩く二人はいつしか肩をしっかりと抱き合っていた。

少女はやがてポツリ、ポツリと、問はず語りに身の上を、話し始めた。その話は、高次

には、たしかに驚きだった。

彼女の名はカマラと言つた。勿論地球の人間ではない。地球人と同じ姿、同じ生活をしているが、湿気の多い所でないと生きていくことは出来ない。若く見えるが地球年令ではもう四十を過ぎていく。しかし地球人の四倍近く長生きする種族では、彼女はやつと思春期だったのだ。カマラの母星はもう滅びかけていた。そこで金星を植民地に選んだわけだが、そこは地球人が先に定植している。又大きな武力を持たない為、地球人を自然に滅ぼそうと実にのんびりした計画を立てたのだ。今、センターに向けて放射されている波は受精卵にだけ効果があり、そのすべてを破壊してしまうのだ、受精完了と同時に。

カマラは反対した。地球人と一緒に暮せるというのだ。その反対がカマラを破壊に導いたのだ。

「どんな機械でその波を送っているの？」

「見えるわ、大きいもの。見たい？」

「そうだな、一寸見ても良いな」

「案内したげる。だけど見つかったら二人共すぐに殺されてしまうわよ」

「大丈夫さ。そんなに近く迄は行かない」

高次は心の中で、すでにカマラに場所を教

えてもらった後、彼女をまいてから一人でしのび込む計画を立てていたのだ。

ヒョーッ

突然鋭い音がカマラの口から洩れた。高次は光線銃を構えて横に跳んだ。

「大丈夫、私を助けてくれる人」

カマラは視線を林に向けたまま云つた。

ヒョーッヒッ

小さいが鋭い音が返つて來た。

「行きましよう、大丈夫だから」

今度はカマラが先に立った。むき出しの腕や脚が細く、幼なさの残る背や腰が高次の好奇心を、いささか刺激した。

「止れ」

鋭い声が高次の後でした。

「銃を捨てて手を挙げろ」

高次が手を上げながら、万能ベルトのスイッチを腹筋で押そうとした時だ。

「大丈夫よ、タチナ。私を助けてくれた人」

「おおカマラか、よく助かったな。もう半分

以上、あきらめていたのだが」

「この人が來て、銃で撃つて下さったの」

「おお、地球の方だな。私はタチナ。私達は仲良くしなければならぬ。一緒に暮らせて下さるかな、この金星に」

「私はすべて許す権利なんか持っていませんが、個人としてはどうぞと申し上げます」

老人と云うには若過ぎる感じだが、その言葉しか、ぴったりに物を見出せなかった。

誰云うとはなしに三人共同じ方向に歩き出した。老人タチナが先頭に、続いて高次カラだが、道が少し広くなるとカマラは高次と肩を並べた。十分ばかり歩いたであろうか、特に樹のよく成長した所でタチナは止った。

「ここが私達の家です」

外から見た所は全く判らない、ただの茂みだが、一步中に入ると粗末ながらも、住心地の良さそうな部屋が出来ていた。

「カマラが奴等に目をつけられ出したのを感じて、急いでこれを作ったのです。しばらくはここで無事に過ごしていたのですが、或る日カマラが外へ出た時、運悪くつかまってしまい、今日貴方に助けってもらったという訳です」

「その間は？」

「拷問されました」

「拷問？」

「ええ、他にも地球人の味方をする者が居るだろうって」

「しかし拷問された割には体がきれいだが」

高次は先程のカマラの裸身を思い出した。

「あら、どうしてですか。拷問されると体きたなくなるのですか」

カマラは高次の胸中など判らないような表情 問い返した。

「じゃ、拷問の仕方が違うのかな。地球では縛ったり打ったりするんだが」

「ああ、肉体的に責めるんですね。私達も昔はそうしてたらしいですけど、今は精神的にへめます。勿論、体は縛られますけど」

地球ではもっと進んでいて、苦痛を与えないで知りたい事を知る方法があると云おうとしたが、高次は口をつぐんだ。こんな所で拷問問答をした事でどうなるものでもない。

「それで、どうしても口を割らないから、あんなにされたんです」

「いや、助けに行こうにも何処に居るか、どうしているか、さっぱり判らず、半ばあきらめていたんですよ」

三人の話はつきない。カマラたちの母星の事、そこからの短い旅行……どうやら大仕掛な機械によるテレポーションの様だが……ここに來てから地球人に見つからないように基地を築いた事など、高次には初めての話ばかりだった。

「ところで、貴方はここに住んで居られるのかな？」

「いえ、実は新婚旅行でして」

「おや、これはおめでとう。では長らくお引き止めする事も出来まい。奥さんを待たしては悪い」

「でもタチナ、外は真暗よ」

「え、もうそんな時間か。では泊って頂くしかないな」

「暗くても大丈夫ですが」

高次はもっとここに居て、色々な事を聞き出したかったが、口ではそう答えた。

「いや、いかん、いかん。貴方はこの星の夜の恐ろしさを知らない。想像を絶する危険が待ち受けている」

「では仕方がない。今夜は泊めて頂きます」

「そうしなさい、そうしなさい」

食事は地球の物とは違い金星上の植物を加工したもののだが、充分、高次を満足させた。それに食卓での話で、明日早くカマラが機械を見に連れて行ってくれると約束した。

「では、お休み」

高次は、案内された部屋に入ると服をぬいだ。ミツに連絡しようと思ったが、タチナ達

に交に思われてはまずいと思い直した。裸になつてから、さあ万能ベルトはどうしようかと迷つたが、結局そのまま床に入る。手にふれても、余程注意深くないと判らない位だ。

「コージ」

戸が小さく開いて、カマラがささやいた。

「うむ？」

「カマラ」

云うより早くカマラは部屋に滑り込んだ。

薄灯りで見ると一糸まとわぬ姿だ。昼間初対面の時に見た裸身だが、今は充分すぎる程刺激的だ。高次はつばを飲んだ。が右手はひそかに動きベルトを外すと布団の下に隠した。

カマラの体温が近付いた。夜のムードに包まれるとカマラに最早、少女っぽさは無かつた。遠い星の女。地球人と全く同じ様な女。高次には、むろん初めてのことだが、カマラは全身を投げかけてきた。

さわやかな夜明け……と云いたい所だが、ここではそんな日は一日もない。さわやかな気分は高次だけだ。注意深く、ガウンをまとつてからベルトをつけた。服を着てカマラに再び近付く。

「カマラ、カマラ」

丸い肩をつかんでゆすぶると、寝返つたはずみに胸のふくらみが露わになった。

「コージ」

眼を見開いたカマラは、高次を愛らしく見上げた。

「さ、起きて、朝の散歩だろ」

「散歩？」

「そうさ、起きたらすぐ連れてってくれるって云つたろう。なるべく早い方が、危険性が少ないって」

「あ、そうね。起きるわ」

カマラは腕を伸ばして高次の首をかかえ込むと、唇をつけてから、小走りに部屋を出て行った。

カマラ達の住居から、ほんの半時間ばかりの所にその機械はあった。ここ迄は地球人も来ないと見えて、別に隠すでもなく、堂々とその姿を見せていた。丁度マイクロウェーブのパラポラアンテナを、小型にしたような形で、センターの方に向けられていた。高次はふとこの波を利用すれば、避妊はいとも簡単だが、とつまらない事を考えていた。

「見張りがいるの？」

「今だったら居ないわ」

「だったら、もっと近付いてみようよ。あれ

だけでは面白くない。機械をもっと見たい」

「危いわ」

「大丈夫さ」

高次はカマラの肩をそっと抱いた。全身にぴたりとした光を吸収するような服だ。

「こっちよ」

カマラは案外、素直に先に立った。高次は万一という気持で、片手で武器の点検をしながら後に続いた。今日、勝負を決めるつもりはない。それには、カマラが邪魔だ。今日は場所を見るだけにしておいて、ミツと一緒に作戦行動に出る予定だ。

あるかなしかの道を踏んでカマラは、ずんずん進んで行った。すぐそばのように見えるが、機械の所迄、相当な距離だ。所々に食人樹が待っているが、朝早くは動かないと見えて、傍を通過しても何の反応も示さない。

「あそこよ」

一寸した広場のような所に出ると、カマラは茂みに身を秘めて云つた。なんと、すぐ目の前に秘密の機械が、内臓をさらけ出して立っている。

「ほう、これはすごい。カマラ、一寸ここで待っててくれ」

「コージ、危いわ」

「大丈夫だ、見てくるだけだから」

カマラをふり切って、高次は茂みから茂みへ走った。ベルトを有効に使いたかったが、今カマラに不審感を抱かせると後で動きにくくなる。高次は自分の体力だけに頼ることにした。

近付くにつれて、機械の細部が見えるようになって来た。一つ一つをプラスチックの様な物でカバーしてある。勿論、高次にはどれが何の働きをする機械か全く判らない。こんなに近付けたのだから、いっそ、破壊して帰ろうかと思った時だ。

「コージ！」

後から叫び声が聞えた。ふり向くと、カマラが何処から現われたのか、二人の男に両腕をとられて、今、正に後手に縛り上げられようとしている。

「カマラ」

手早く光線銃を引き抜いて、走り出そうとした途端、高次は後から全身にショックを受けて、ひっくり返った。反射的にバリヤーを張ろうとしたが、一瞬遅く、高次は崩折れた急速に遠去かる意識の中で、ミツとカマラの裸身が踊りまわっていた。

焦点の定まらない高次の視線の中で、カマ

ラが裸で大の字に磔られている。無駄のない引き締った体、まるで霧の彼方に立っているようだ。だが高次はやがて、自分の肉体の苦痛にその霧が急速にたれて行った。だが目の前の女体は消えなかった。但し、それはカマラではなく、ミツだった。

「ミツ！ うっ」

傍に行こうとして、高次は手首に痛みが走り引き戻されたが、気が付くと高次も裸にされた上、両手首を高々と吊られているのだ。

「気がつかれたか、A6号さん」

どこからともなく声が聞えて来た。

「地球から、はるばると、ようこそ。それ、おつれもご一緒に。いや、結構々々。おお、それに、もう一人も」

声と共にカマラが、突き飛ばされるようにして入って来た。下半身は、身体にぴったりした服のままだが、上半身はすっかりむき出しにされた上、後手に嚴重に縛られ、発声の自由も奪われていた。胸のふくらみに喰い込んだ縄目が痛々しい。

「カマラ」

高次の声に少女は悲しげな瞳を上げた。むき出しの肌に責めの跡が無数に残っている。

「何者だ、お前は」

「カマラに聞いたろう」

「どうして我々を捕える」

「当り前さ。放っておけば、機械を破壊するだろう」

問答を続けながらも高次は、ひそかに自由を取り戻そうと努力していたが、こんな不自然な姿勢ではとても無理だった。幸いベルトは気がつかないと見えて外されていない。通信ベルトの方は視線がそこまですとどかないので、どうなっているのか判らない。

ミツは先程から首をうなだれたまま身動き一つしない。どうしてミツがここに来ているのか、ここに来てどんな事をされたのか、全く想像もつかない。

「ミツ、ミツ」

声が聞えなくなったので、高次は危険を覚悟で呼んでみた。少しも反応がない。

「ミツ」

声が高くなる。

(注意して)

急に直接の返事が返って来た。二人共通信ベルトは無事らしい。

(どうしたミツ。大丈夫か)

(大丈夫。相当ひどくやられたけど、それよ

りその女に注意して)

(その女……って、カマラか)

(カマラっていうの? 敵のまわし者よ)

(そんな馬鹿な)

高次は改めてカマラに視線を落した。うつ伏せになって動かないカマラの背に、一面の鞭跡。高々と縛られた両手はいささかの自由も許さない。肌に陥没している縄目は、決して、まやかしの縛り方とは思えない。

(あなたはこの女に骨抜きにされたのよ)

(しかし、カマラは殺されかけた。それに、

今も責められたし)

(A6号、貴方は何処迄馬鹿なの。私達が助けた時は、コンピューターで、安全な時間を見計って縛りつけたのよ。それに今は責められてなんかいないわ。あの傷跡は偽物よ。貴方もベルトは無事なんでしょう)

高次は反射的にベルトに力を入れた。途端にカマラの背がクローズアップされる。素肌を縛る縄は本物だ。随分厳しく縛ってある。だが、鞭跡は……高次は息を飲んだ。B1号ミツの言葉が正しかったのだ。実に真に迫ってはいるが、それはまぎれもなく巧みに作られた物なのだ。もう一度、縄目に視線を移し一本ずつたどってみる。と、たしかにきびし

く締めであるし、どうにも解けそうにない縄目に見えるが、縄の端を引くと簡単に解けるようになっている。しかも、その端はカマラの指先の近くにある。

(ミツ)

(判った?)

(まいったよ。あの縄も、締めつけがきびしいだけで、一寸引けばすぐ解ける)

(あらそう。それは知らなかったわ。それで何か判った?)

(うむ、まあ)

高次は今迄にカマラから得た知識を一まとめにして、ミツに送り込んだ。

(一寸、おかしい所があるわ)

(何だ)

(その女が拷問は精神的なものだと云ったのでしょう?)

(そうだね)

(私は肉体的に痛めつけられたわ。それも念の入った責めぶりよ)

(何を聞こうとした?)

(別に何も。只私を痛めつける事に専念していたわ。鞭で打たれ、逆吊りにされ、木馬で責められ、逆海老にされ、海老責めにされ……あ、バカ!)

その時々姿がミツから直接送られてくるので、高次の頬の筋肉は思わず、ゆるんでしまった。

(何時からだ)

(貴方と別れてすぐよ)

(縄抜け出来ないのか。お得意だろう)

(それが駄目なの。どうにも動けない)

(カッターは)

(使えるわ。だけどそれではこれでおしまいになるのよ。もう少し様子を見なければ)

(体は保つか)

(大丈夫、まだいけそうよ。……ダメだったら高次! 何処見てるの。バカ)

高次の探查眼が手首から二の腕を通り、腕から胸のふくらみ、細く締った腰に至った時だった。

(やあ、判ったか)

(何よ、失礼ね)

(いや、何、あまりきれいだから)

(良いわよ、ごまかさなくても)

(これからどうするつもりだ)

(ボスは貴方よ)

(よし、もう少し様子を見よう。しばらく、ベルトは使うな。カマラの事も気がつかないふりをしろ)

(了解)

通信は終り、後は普通の囚人二人……いや三人が残った。カマラは床に崩折れたまま身動き一つしない、肉眼で見ると、むき出しの上半身に食い込む縄目と責めの跡が痛々しいだけだ。

「カマラ、カマラ、大丈夫か」

「いくらカマラが敵方だと判っても、昨夜の能動的な柔肌を憎む気にはなれない。」

三人の前に四、五人の女性が現われたのはそれから一時間もたってからだろうか。

「女を」

リーダーらしい女の合図でカマラが引き起こされ傍の柱に後手のまま縛りつけられた。

「男」

リーダーは光線銃を引き抜くと高次に照準を合わせた。他の女が高次の縛しめをとく。胸と腰だけを覆った刺激的な姿だ。高次は改めて後手に縛られた。ミツが縄抜け出来ないと言っただけあって、特殊な縄らしい。上半身をしっかりと縛り上げられると足首が揃えて縛られ、合図と共に、足首を上にして高次の体は宙に浮いた。体重を支えて縄が足首にキリキリと喰い込んで行く。

「何の為に、こんな事を」

逆さの世界の中で、ミツもカマラも、浅間しい自分のこの姿を見ていると知った時、急に高次は恥かしくなって来た。と同時に、二人を含めた周囲の女達の眼が、何か異常な輝きを帯びたように感じられた。

「殺す為に」

「なら、さっさと殺せ」

バリヤーの用意をしながら高次は答えた。

「すぐにでは面白くない。充分に楽しんでからだ。女は、もう楽しんだ」

一瞬、ミツから複雑な感情が流れた。

「次はお前に踊ってもらう」

その肌も露わな姿、見事な線に似ず、女の言葉は荒っぽかった。

女の手が高次に近付いた。

「ううっ」

高次の胸の小さな乳首にクリップが噛みついた。全身を痛みがかけめぐる。そのクリップには長いコードがついている。

「よし」

「うわあ」

思わず高次はわめいた。胸のクリップから流れる刺激が全身を踊らせた。痛いとか、しびれるとか、そんな単純な言葉ではとても表現出来ない。体の中から、くすぐられ、ひっ

かかれ、抵抗力を失なって行く。

「これは頂きましょう」

全く抵抗出来ない状態のままで、高次のベルトは二本とも外された。やはり敵は知っていたのだ。だがその性能まで承知の上だろうか。とにかく、これで全く無防備になった。

「奥さんもご一緒に踊ってもらった方がいいね。不公平なもの」

「いやあ」

逆さになった高次のまともならぬ視線の中でミツの体に何かがつけられた。

「貴女のもね」

ミツのベルトも外されたらしい。と同時に「ぎゃあ」

縛しめも切れよとばかりミツがもがいた。

高次と同じ刺激ではあったが、高次よりも苦しみは激しく感じるらしい。白い体がもがき汗が光り、唾液が糸を引いて流れ落ちた。意識は急激に薄れ、苦痛がむしろ快感に近いような鈍った錯覚に陥って行った。

高次は今迄様々の苦難を切り抜けて来た。A6号と呼ばれるようになる迄の訓練もその一つかもしれない。だが、今度受けた苦痛は今迄にないものだった。一度受けた苦難は、

避ける事が出来るか、少なくとも耐える事が出来るという自信を持っていた。だが、金星で初めて受けた苦痛には、あまりにも簡単に参ってしまった。肉体的苦痛もそうだが、カマラが敵のまわし者だという事も、抵抗力を奪い去るのに充分な力があつたのだ。頭から信じ込んでしまったのは、あまりにもうかつだった。後で考えれば、疑える節はいくらでもあつたのだ。

高次は痛みに気付いた。意識が戻ったからだ。見廻すと、部屋というより独房に近いものだ。廊下側に小さな窓があるだけで、他は全部分厚い壁だ。幸い監視眼はついていないようだ。高次の体は傷だらけで依然、何ら身にまとうものはない。逆吊りの後、どれ程ひどい仕打ちを受けたか、はっきりとは思ひ出せなかった。と同時に、ミツに対しても同じような責めが加えられた事も。

彼等は決して、問いを発しなかった。彼等にとっては何も必要ではないのだ。只、二人を責める事だけに喜びを感じているのだ。その間、カマラはどうしていたか、全く記憶にない。一緒に責められていない事だけは確かだった。矢張りカマラは敵方だったのか。しかし高次は、甘いようだが、どうしても信じ

られない気持だった。たった一晚の事だが、忘れられない美しさだったのだ。

きたえられた体は急速に回復して来た。だが、先程と比べて、大分室内の温度が高くなって来たようだ。全身を汗が流れ落ちる。高次は、戸口に近づいた。段々と熱くなる。扉はもう手がつけられない程熱している。火事か。一瞬高次はそう思ったが、小さな窓を通して見えた見張りがのんびりしているのを見て、すぐにその考えを打ち消した。打ち破ろうにも何にもない部屋だ。温度はもう耐え難い迄上って来た。

四つの壁が熱を発しているらしい。高次をとじ込めたままむし殺すのが目的か。高次は少しでも部屋の中央に戻って考え込んだ。ベルトがあれば、こんな扉など、訳もない事なのだが、今は何も体につけていない。ミツはどうなったのか。考え込んでいた高次はふと思ひ付いた。まだ未完成だし、自信もないのだが、テレポーテーションはやってみる価値がありそうだ。というより、今の高次には他にする方法が考えられなかったのだ。

高次は目を閉じた。扉を抜けて廊下に立つ自分を想像する。扉が通れるかどうか、全く判らない。何しろ病院に居た時以来、練習を

していないのだから。そう、あれはミツに初めて会った時だ。

廊下には見張りが居る。もし成功すれば、さぞ驚くだろう。しかし、そんなものは素手で倒せる。俺には出来るんだ。きっと出来る力が備っている。と、ふいに体が軽くなった、体重がなくなったように。

一瞬、視力が失なわれた。何か灰色の物が流れた、と思う瞬間、高次は見張りの前に立っていた。何が何だか判らないでいるうちに見張りは簡単に打ち倒された。命迄取るつもりはなかったが、裸身の恥しさと、意外に上手く出来たテレポーテーションに、いささか興奮していた為、力が入り過ぎたのだ。

それにしても良く移動出来たものだ。この超能力がそう簡単に自分のものになったとは思えないが、追いつめられて必死になった事と、体に何もつけていない事が、かえって良かったのだらう。

高次は見張りの服を剥ぐと身につけた、鍵もすぐに見つかった。廊下を足早に歩きながら両側に注意を払う。ミツの閉じ込められている部屋はすぐに判った。高次と全く同じ状態になっていた。扉を開けると中の熱気が吹き出して来る。ミツは部屋の中央に裸身を横

たえ、気を失っている。汗に光った肌は妙になまめかしい。

「ミツ、ミツ」

声をひそめて高次は呼んだ。力の抜けた体は意外に重い。

「ああ」

ミツのつぶらな瞳が開いた。気づけば回復は早い、体を起こすと、ミツは胸を覆って体を折った。乙女の本能だろう。その手に、丸くなった背に、責めの跡が鮮やかに刻まれている。

「さ、急ごう。恥しがっている場合じゃない早く」

高次は、ミツの姿に気がつかないようなそぶりでも彼女の手を引いた。こんな時にはベルトのない方が都合がいい。

廊下の曲り角で飛び出した女を高次は、瞬く間に打ち倒すと、その服と、光線銃をミツに渡した。廊下は二つに分れている。

「両方に行こう。どんな事があっても、必ずここへ戻ることに。いいね」

「いいわ。A6号、気をつけて」

痛々しい縄と鞭の跡にもかかわらず、B1号は、すっかり元気を取り戻していた。

その若々しい肢体が遠去かるのを見送って

から高次は音もなく走った。途中二、三の見張りを倒して、扉が半開きになった部屋の前に立った。まわりに注意してから、そっとのぞき込む。大きな机が一つと、一人の女、机の上には彼とミツのベルトが置かれてあり、そして背を向けているのは……

「カマラ」

扉を開けると、声を掛けるのと、跳躍するのが同時だった。ふり向いたカマラの手にした銃が、正確に扉を焼き抜いた。だが、床に転がった高次は、素早く彼女の右腕を背に捻じ上げた。銃がポロリと落ちる。

「コージ」

カマラの目に驚きが走った。

「残念だったな、無事で」

「コージ、よかった」

カマラは高次の胸に顔を埋めた。

「死ぬ程心配してたのよ」

「それにしちゃ、ちと荒っぽすぎる歓迎ぶりだな」

「誰か判らないもの」

「どうして許してもらえた？」

「許してなんかくれないわ。明日、又死刑になるのよ。貴方に助けられた時と同じように裸にされて、木の幹にぎりぎりに縛られたま

ま、あの葛に食べられてしまうの」

「今はどうして自由なんだ」

「自由じゃない。これでも、手足を縛られているのと同じ事なのよ。ここからは逃げ出せないの」

「大丈夫だ、逃げよう。さあ」

高次は矢張りカマラを心から疑えなかったようだ。

「駄目、貴方だけ逃げて。ベルトは、ここにある。貴方だけなら、逃げられるわ。ああ、コージ、お願い。その前に私を抱いて」

カマラは高次を抱いて、自分から床に倒れた。片手が高次を抱きながら、もう一方は、自分の体から、布切れを外して行った。高次は徐々に、その柔肌の圧迫に負けていった。

「コージ、アブナイ！」

戸口の所でミツの激しい声が出たのと、高次の体が回転して、カマラの左腕を叩き折るのが同時だった。

「ギャア！」

すさまじい声を挙げたカマラの手から銀色の細い針がこぼれ落ちた。

「大丈夫だよ。僕だって油断はしていない」

「どうだか、あやしいものよ」

「そら、ベルトだ」

二人は二本のベルトを身につけた。

「何か判ったか」

「何もかもね」

「何もかも？」

「そう、ここに居る者は星の生物なんかじゃない。りっぱな地球の人間よ」

「まさか」

「そうよ。こんなに地球人に似た異星人って考えられる？ まるでSFよ。それに精神的拷問だって？ なによ、私を見て」

ミツは背を向けた。縄目や鞭の跡で、すさまじく彩られている。

「カマラ、どうなんだ！」

高次は、キツとした態度で、床にうごめく美少女をにらみつけた。

その豊かな胸の丘を、ミツの足がギュッと踏みつけた。カマラは顎をそらして圧迫に悶える。ミツの足先がこじられる。苦悶の呻きと共にカマラの右手がその足にかかるが、ミツの足先は、柔肌に埋ったままだ。

「サ、答えて頂戴ナ」

カマラの眼が絶望的に閉じられた。

「その通りよ。すべてが計画通り行ってたのに。あの機械だって、A6号をおびき寄せる為なのに」

「何が目的なんだ」

「まずA6号を殺す事。それから……」

フツと言葉は途切れた。のけぞったむき出しの形の良い胸のふくらみの脇に銀色の小さな針が光った。二人は反射的に防護膜を作って、ふり向いた。戸口に銃口があった。

「ミツ、行くぞ」

反生力装置と、加速度装置のスイッチが入った。二人は宙に浮くと、女達があっけにとられているうちに頭上を飛び越していた。

「ミツ、建物の破壊を。僕は機械を壊す」

続いて待ち合せ地点の指示を与えると、高次は一気に外へ飛び出した。銀の針が、バリヤーに当って音を立てるのも気にせずに飛んだ。広場を越して機械に近付くと、高次はエネルギーボックスからコードを出して、ダイヤルを合わせ、機械に当てると、すぐ元通りにしてバリヤーだけを張ったまま走った。これ以上エネルギーは使えない。

見た所、機械に変化はなかった。だが、高次のふれた場所が徐々に腐蝕されたようになって来て、それが急速に拡まって行った。ついに傾き始め、爆発を起した。その間ほんの数分ぐらいであった。そして、二、三分遅れて建物も同じように倒れていったのだ。まるで

で無数の白蟻が喰い荒すように、強い酸が犯して行くように。

バリヤーはもう必要なかった。高次はスイッチを切って足を止めた。ミツもすぐに追いついた。

「いや、参った。こんどは全く良い所なし」

「女に甘いからよ。どう、こんなの」

ミツは、ぱっと裸になると立木の前で手を上に上げた。丁度、最初見つけたカマラのように哀れにも美しい、そして魅惑的なポーズである。彼は思わず足を踏み出した。

「あ痛っ！」

すでにミツのまわりには、防護膜が張られてあった。

「バカねえ」

笑いながらミツのなめらかな肌は、衣服に包まれていった。

「おあいにくさまでした」

「チエッ。まあ仕方ないでしょう。さあ、新婚さんの御帰りだ」

「駄目よ、甘えちゃ。もう私はB1号、貴方はA6号よ」

ミツ、いやB1号は足を早めた。若々しいその素晴らしい後姿に、高次は苦笑いのものを禁じ得なかった。



私は昭和二十八年頃より奇クを愛読致しております。恐らく一番古くからの読者と自負しております。あの当時は川端多奈子さんの全盛時代で若き日の私は、その頃住んでいた三宮で彼女とデートした懐かしい思い出を持っています。

誌上に出ていた川端多奈子さんの文通の申出に早速編集部経由で彼女に対して手紙を出したのでした。その頃はKK通信なども出ていて文通の斡旋なども取扱っていましたので彼女からの返事を受取ることが出来たのでした。

私にとっては高嶺の花だと思っていた川端多奈子嬢を自分の手で縛りあげることが出来た感激は今でも忘れることが出来ません。

その後私の心を奪ったのは昨年五月号、六月号のカメラハントに載った笹原八千子の記事です。辻村隆氏より山本一章氏へのバトン

タッチも只々見事でありました。

如何にマゾ女性とはいえ八千子未亡人ほど私の心を奪った素敵な女性はありません。エビ責め、吊り責め、逆エビ責めと数々の強烈な責めの挙句、その後尚SEXを要求されたとのこと、Sファンの心を奪うこと八千子未亡人において他に類を見ないと思います。

奇クを愛読していた約十五年間私の一身上にも色々の出来事がありました。先ず昭和三十年秋に結婚。甘い新婚時代から妻を縛り色々と強烈なプレイを致しました。

その妻とも昭和三十二年三月五日離婚し、それ以後は妻を恋いながら夢遊病者のような生活が半年程続きました。そんな或る日、ふと

飲みに入った居酒屋で知り合った女性と意気投合して一年四カ月同居しました。その女は変わった性格で二の腕の内側に北川東一郎の女と私の名前を刺青しました。

ところが、その女性とも色々な事情で別れ、昭和三十四年に現在の妻と結婚しました。今の妻は今の二人の女性とは違って緊縛プレイには全然興味を示しません。興味を示さないどころか、私が永年に亘って蒐集した貴重なコレクションの写真を私の留守の間に焼き捨ててしまったのです。

昭和二十八年に発行された奇クには小さな色々の縛り写真が百枚以上もぎっしりと印刷されていたのがあります。その中で私が特に気に入ったのは『芋虫縛り』でした。前記した二人の妻にも、それを手本にして麻縄で縛り上げたところのある思い出の写真なのです。

それを含めて数十枚の写真をすっかり失ってしまったのですから私の怒りも大きかったのですが、妻を縛り責めようと思っても、中々うんと言わないのです。しかし

夫婦生活というものは不思議なもので、一番非協力的な現在の妻と一番長く同棲を続けていることになりす。と言いますのも現在では私も余り若くもなく今までのように口争いをしたから簡単に別れなくなっています。

そのかわり、アルサロとかキャバレーで見つけた気の合った女性と緊縛プレイをやっています。現在のパートナ―は二十台も半ば過ぎた痩せぎすの女性ですが、私の好きな芋虫縛りや吊り責めにも易々と協力してくれます。仕事の関係でそう毎日のようには実行出来ませんが、一週間に一回ぐらいは彼女のアパートの一室で激しい緊縛プレイを楽しみます。

彼女が夜の商売なので多くは午後一時から四時頃までの時間を利用してあくことなき強烈な女体緊縛を敢行するのでした。彼女の簞笥の一番下の抽出には、色々の縄や紐がぎっしりと詰っています。

組立式の梯子を用いて彼女を逆さ吊りにした時は、余りにも熱を入れすぎて、とうとうその夜の彼女の店を休ませてしまったこともありましたが。私の女体緊縛の遍歴はどこまで続くでしょうか。

女体緊縛の遍歴 北川東一郎



(第五十二回)

辻 村 隆

茶の間のテレビにも最近SM的な内容を織り込んだものが、しばしば登場するようになった。これも、その一例。七月廿六日夜のザ・ガードマン『幽霊の招く館』

夫の浮気を探ぐりに来た妻(山

東昭子)が古い山荘に忍び込み、鍵穴から内部を覗くと、そこに凄まじい光景が展開している。若い娘(笠原玲子)が半裸で後手に縛られ、顔を数回となく水の中につけられた挙句ヒモであるやくざの男に革バンドで激しく鞭打たれている。果ては娘の首をしめつけてゆく。娘の告白に、男が責折檻することが好きで、自分を離さないんだと、男のサジストを説明させている。その娘をモデルにして、ガイコツや妖奇なとり合わせで写している、カメラ・マニアの夫を発見した妻が、やくざや夫に捕まって後手に縛られ、猿轡をはめら

れて、長い間転がされている。イタリヤ映画『殺しを呼ぶ卵』もそうであったが、一種の遊戯、所謂プレイとしてSMを扱っている映画テレビが段々多くなってきた。可笑しい傾向である。

×

×

木戸悦子夫人の快よい御協力で妊娠九カ月のえがたい妊婦フォトを撮った日から一週間ばかりたつて、ケメ子こと佐々木真弓から、ひょっこり電話がかかってきた。(六月号『ケメ子早春譜』参照)二、三日前から、夜の勤め先がミナミの方に変わったので、是非遊びに来てほしいという。夜の蝶が蜜から蜜を求めて飛んだのであろうが、入店勿々の実績稼ぎらしい。あれ以来撮っていないので、こちらも渡りに船の内心であったが、甘い顔をするすっきりいいカモにされてしまいかねない。近々行

くからと約束したが、彼女曰くに店を変った機会に「ケメ子」は廃名にしたそう。この数カ月の間に、そういえばケメ子の頃は、すっかりさびれてしまった、もうケメ子では通用しなくなったのだらう。GSのザ・ダーツもザ・ジャイアンツもその後一向にパツとしない。新しい店での名前は、清子とつけたという。その故事来歴が面白い。もともと水前寺清子のファンだったが、それにあやかっつけたという、水前寺ではいくら何でも気がひけるので、名前の方を拝借したというが、清子では、世間にザラにある平凡な名前。それでも当の本人、水前寺にあやかっって、これから又いちいち説明いりで売り出すつもりなのだから他愛がない。いずれこの佐々木真弓をもう一度撮って、或いは続篇をかくような仕儀になるかも知れない。カメラ・ハントの趣旨としてなるべく一人一篇でゆきたいのだが、奇クサロンの読者の方の中にも、いいモデルなら度々登場して結構というようなお言葉もあったので、左近麻里子さんにも、いつか登場してもらおうつもりでいる。彼女、カメラ・ハントでは書いていないから。

×

×

木戸悦子さんから、便箋三枚の便りが届く。差支えないと思われるので原文の併紹介します。達筆で水茎のあとも麗わしい。(前文御免下さい。暑さ殊の外きびしいでございますが、辻村様にはいよいよ張り切っています。お別れします時、もうあれが最後と思いましたが、一夜二夜、経つにつれてひとしおプレイのひとつときが懐かしく思い出されてなりません。許されるならば、せめて出産の間際まで、もう一度か二度、思いきり耽美の雰囲気に入入してみたい気持ちです。あの時は主人にももっと優しく仕える気持ちでおりましたのに、やはりわたくしの自我の気持が強いためにどうしてもその気になれないのでございます。そのくせ、縛られたい気持はいやまずばかりです。妊婦としての資料提供という、一般のモデルの方と異なった方面より志願しましたその心の奥には、本当は縛られたい、いじめられたいという気持の方が強かったことを、自分自身はつきり自覚しました。あの時冗談の様におっしゃっておられました逆吊りも、今のわたくしの気持で

はいとわらない、いやむしろそうされたい心の方が強く働くような気がいたします。唯、辻村様がわたくしのプライバシー（おわかりと存じますか？）をおとりになりましたが、あれはプレイを逸脱したゆき過ぎのように思われますので、その点のみ少し抗議したいような気持ちです。その代り、縛られることの方でしたら、わたくしの体力の許すかぎり御協力するにやぶさかではございません。もう一度お目にかかれる機会をおつくり下さいますれば幸甚と存じ上げ、つい思い余ってお便り申し上げました。わたくしの非礼をおゆるして下さい。尚、編集部箕田様にも、お願いの手紙差上げてありますので心多き女とお笑い下さいませぬよう。奇巧の御発展と共に辻村様の御活躍のほど、蔭より偏えにお祈りいたしております。かしこ

× × 大映の知人より、『秘録おんな蔵』の未発表のスチールと銘打って、十枚許り送っていただいた。最初、成人向として撮ったのが、あとで一般向に変更したためSM好みの、私達同好者の一番見たいところは、殆んどカットされてしまったらしい。友人にとめられて



いるのでスチールを誌上に発表出来ないので残念だが、スチールでは全裸縛りの連縛で、かなりきわどいものもある。主人公の安田道代だけは、流石に一流スターの貫録で、長襦袢を纏っているが、同輩の女達はいずれも全裸、又は腰巻一枚の危な絵式構成である。題材を吉原の私刑蔵にとってリンチ式の、責め拷問、羞恥責めをふんだんに見せる予定だったのに、骨抜きにされたのはいささか惜しかった。近々、武智鉄二もこの種の映画のクランクインに入るし、東映も企画中である。一昔前ならヒヤヒヤしながら、そっと愉しんでいたようなフォトも、SM全盛の今一流映画館のポスター、スチール

に堂々とする様になったとはあ世の中も変わったものである。謂わば私など、人より二十年許りこの達に早く興味をもったに過ぎないということ、大切にコレクションしていた昔のSMフォトも今となるとすっかり色褪せて、この種のスチールよりも遥かに劣るごく平凡なものに成り下ってしまった感じである。

× × ぬきさしならぬ仕事の真最中、いきなり前触れもなく姫路の同好の友U氏が、川口有里子という若い娘さんを、つれて訪ねてきた。彼の会社に納品している、機械部品メーカーの事務員だそうで、いずれは部長の位置を利用して、彼女が連絡で出入するうちに口説き落したらしい。大阪への所要もあってドライブを兼ねて誘ったら、喜んでついて来たということであつた。車中、モデルに口説いたら、すんなりO・Kしたという。

準備もなし、反ってあんまりあっさり陥落したので間誤つて、フト私を思い出して、急拠つてきたというのであつた。幾ら好き者の私でも、いきなり、モデル同伴で来られては慌ててしまう。まして夏休み中で子供も在宅中だし、仕事の手も離せず、応接間でU氏と喋る間に、パチパチと数枚スナップをとり、最後にU氏が、まあこの娘のおっぱいや肌をみてやってくれよと強引に上半身をぬがせたので、応接の戸棚からとり出した一条の縄、素早く体に巻きつけ、簡単に後手に縛って数枚。その一枚が、これである。何をされても拒まず、眉と眉との間隔のやや広い、大らかなこの娘は、微笑みながら泰然としていた。いずれ近日中、プレイのモデルの確約をして、一時間で別れた。据膳の場合でも、どうにもならぬ時が、この私にだってあるという一例である。ちなみに、彼女は二十一才のO・L。淡白素直な性格に見え、私のいうプレイという意味が分らない線まで行けそうな感じである。応接間でのションのマのハレンチのお粗末――。

第二の味

文と絵

きくキチ

女性裸。こんな考えが一般にあるのではないだろうか。奇クを見まわしてみると、縛られる女性にはみな素裸かパンティーのみをまとった姿で縛られていきます。まるで脱がさなければ味がない、というように思えます。しかしそうでしょうか。私も乳房をむき出しにされた緊縛女性には好きです。これは我々SMにとって自然の味つまり女性の持つ第一の味と言えるでしょう。しかしながら人間はどういう訳か下着というものを脱ぐり出して今日に至っています。私の言う下着というのはスリッパのことですが、今のSMにとってこのスリッパは忘れられた、あるいは邪魔な存在にされているのではないのでしょうか。でも私はこう思います。スリッパをまとった緊縛女性の持つ物こそ「第二の味」



である。乳房をさらした緊縛女性からは激しさというものを感ぜますが、スリッパの姿で縛られた女性には何とも言えない哀れさを感じます。つまり前者は動であり後者は静である、と対の味をなしているのです。しかしこの「第二の味」は実際にプレイをしている方にとっては



〔告白〕

私の願望・・・

希求十年

鵜藤 恵

二十七才。独身である。恋人もいない。初めて本誌を手にしたのは十七才の頃と記憶している。それから十年——。私は本誌及類似誌を、四百数十冊所持するに至った。とても一度で持ちきれぬ量である。これだけになると置き場所に困る。家人に発見される恐れがあった。隠し場所に困った末に、遂に家を出る決心をした。無駄な出費は覚悟の上で自宅の傍にアパートを借りた。唯、蒐集物を保存し度い家の者の目に触れない置き場所が欲しい。それだけの為である。私の場合、他に理由はない。借りた以上そこで寝なければおかしい。だから寝ることは寝る。しかし、それ以外の生活はすべて自宅でするのである。風俗誌と関連資料の蒐集をするために、このわずらわしい生活を現在迄、よくもまあ飽きずに続けて来たものである。

斯うして過ぎた十年の間、私から一日として離れた事のない想いがある。女性緊縛、即ち「女性を縛り度い」。一度で良いから、この腕でこの手で女性の体を縛ってみたい……。これが十年間、夢にまで見た願いであり望みである。しかし、この十年間にその希みを果たす事は出来なかった。まだ若い男の二十七才と云えば一応、結婚適齢期と云われる年齢である。が、私にはまだその気がないし、第一相手がいない。恋人がないのである。その気になれば機会は何度かあったが私は自ら其等を放棄して来た。恋人をもつのが恐ろしい。結婚するのは、それ以上に恐いからである。マゾの女性なら無論問題はない。が、もし恋人や妻となる女性が、マゾでない普通の女性だったらどうなるか……。私には先が見えるような気がする。如何に可愛い女でも、どれ程に



「異聞緋縮緬地獄」

新井伸治

・・・イメージ画・・・

すでに知りつくした、又物足りないものかもしれせん。というのは、私は実際にプレイをする機会を持っていないので、全て私の想像によるものだからです。

手は後手にぎっちり縛りあげられ、縄は胸の上下にも深く喰いこんでおり、胸元には肩からはずされたストラップが垂れ、うつむいた女性の身体は羞恥にうす赤く染まって白いスリッパにくっきりはえる。いわば人間がつくり出した「第二の味」。もっと味わってもいいのではないでしょうか。

素晴らしい妻であっても「縛られる」と云う（其れは彼女にとって生れて始めての、体験かも知れない）変な行為に対して非常な嫌悪感を持ち忌避するような女性であれば、急速に破滅に向かう事は必定である。

第三京浜を制限速度ギリギリで走っている自分のくるまを追い越して行くスポーツカーがある。その中にびったり寄り添った若い二人の影。例えくるまは「わ」ナンバーのレンタカーであっても愛し合った者同士、青春を愉しんでいる。そんな男女の姿を見るにつける私の胸は形容し難い憤怒に包まれる事がある。それはスポーツカーに追い越されたからなどと云う、つまらないことではなく、全く異質の誰にも云えぬ自分自身の陰湿な「欲望」この体内を、流れる「Sの血」に対してである。それさえなかったら、自分もあのスポーツカーの男女のように青春を謳歌する事が出来た筈なのである。ではそれを捨てればよい、といわれるかも知れぬ。捨てらるものなら私も捨てたい。

しかし、私は今決して悔いてはいない。恋人を限定される事はあっても、この道の分らない人間よ

りは愉しみが余分にひとつあると云うものである。マゾの女性を掌中にする迄は奇妙な嫉妬心に悩まされるかも知れないが……。とにかく、この先自分の前に目の醒める様な女性が出現したところで、マゾの女性でない限り、恋人や結婚の対象としては私は考えない。過去がそれを証明している。マゾの女性なら例え跛だって良いと思っている。容姿端麗でなくとも気立さえ良ければ、伴侶として迎えることに躊躇はしない。これだけは断言出来る。

時に「Sの血の欲望」に負けて犯罪を連想させる一瞬がある。そんな時、私の脳裏に新聞の三面記事がクロースアップされる。そうになったらお終いである。動物以下にはなり度くない。人間には理性がある。こう思ってそんな時、私は本誌の頁を捲る。そうする事によって「欲望」を本誌が昇華して呉れる筈である。それでも我慢出来なければ所謂「自慰的創作」でも書いて投稿すれば良い。原稿用紙の罫目を埋める作業が胸のモヤモヤを消して呉れる。要するに本誌に頼る以外にないような私の今の気持なのである。



安井喜久子

御夫妻に

風流軒極道

白土三平の「忍者武芸帳」からベエトーベエンの第九交響曲まで、さまよい歩いた私が、モジリアニとか云うへボ画家の展覧会で、ため息ひとつ吐かなかった私が、男の私のすべてを費消しつくしても悔いがないと思った数枚のフォトがある。こいつの旦那は地上

最高に、幸福だと、嫉妬やまなかったフォト……。安井喜久子夫人。貴誌分譲フォト、川端嬢（もう十年も昔）以来、購入しつづけ梨花悠紀子嬢に至り、美女緊縛の頂点に達せりと思っていた私が、「略号おく（後手縛りで引き廻す）」「略号およ（片足吊り、股裂き責め）」以下を見て、胸のときめきいかんともしがたく、喜久子夫人の緊縛を、うつつにみることを得ば、現在のすべてを捨てるも悔いなし——とまで思っておる次第。

先ず、「略号およ」における菱縄縛り四枚中の一枚。猿ぐつわなく全裸、はにかむが如く、くるしむが如く、上をむき、両股を、おそらくは、開かされているであろう愛の極致。「略号およ」四枚中の三枚——空想を働かせば、ミロのヴィナスにまさる片脚を、部屋と部屋をくぐる柱に、あられもなぐたかだかと吊られ、散々、締めあげられたであろう麻縄を、無残にまき散らせて、数人の男達に、四周から、いっせいに、カメラを向けられたであろうフォト。そのなかに、夫人の最愛の旦那さまも、ひよっとすると、混っていたのではなからうかという夢……。僅かにレイアウトした編集者の美事さ。カットしたゆえに、一層ひき立つ夫人の女体の美しさ、屈服のさなかに、猶、忘れぬ気品ある様子。母なるがゆえに、若妻なるがゆえに見せる乳房の、この上ない麗わしさ……。悠紀子嬢以来貴誌のモデルに食傷気味であった私のぞみを、九割九分生かしてくれた喜久子夫人のフォトに、私は陶醉しきってしまう。

そこで嫉妬するのは、喜久子夫人の旦那さま。八月号の如く、台所で、この永遠のヴィナスを思う存分、弄ぶという、地上、稀れにみる特権を享受なされている男性——旦那さま……。幸福です。恐らく、現在の日本の男性のなかで最も、幸福だと申し上げる事ができましよう。安井氏よ幸福なれ。この地上、最上の「美しき妻」喜久子夫人を愛し給え。そして、許されるならば、私達、読者の夢——喜久子夫人を、地獄のそこへ導くことを許したまえ。「略号およ」「略号よ」以上、天然色でのフォトを私達に、恵みたまえ。

編集部だよ

○嘗ての本誌上にて刺青の女王としてグラビア写真に或は座談会のホステス役として活躍した山原清子さんから久方ぶりに電話を貰った。家庭の事情で便りが出来なかったが身辺とみに余裕が生じたので告白など書いてみたいとのことなので或は再び彼女のイキのよい姿に接することが出来るかもしれない。

○八月三日から臨月に入るという木戸悦子さんを紹介したところ、早速カメラハントの取材で実行に移した辻村隆氏より電光石火の早さで原稿を送ってきた。今月はいろいろと予定があったそうだが、この方を先に掲載することになった。

○暑さの厳しい折柄、寄稿家、執筆者、愛読者の方々から暑中見舞いのお便りを多数頂戴した。誌上を以て厚くお礼申し上げます。尚、私信で編集子に面会を求められる向きが多いのだが、身辺多忙のため全部の方々の御希望にそうわけにはゆかないのが残念である。

○奇クサロンの原稿の投稿者の方

映画通信

スクリーンの責め

細川 英治

即ち、

1、「日本拷問刑罰史」のヒロイン

5、「裏切りの季節」のヒロイン

日本成人映画史上に燦然と光輝をはなちたまえ。既往のものの何倍かの見事な迫力と、被縛美が巧ま

2、「極秘女拷問」のヒロイン

そして、私達が、夢みる「日本女拷問史」「拷問される女」「責められる新妻」以下にヒロインとなり、「徹川拷問史」に夫妻揃って出演し、主役を演じたまい？

本夜は、これにて。御夫妻の御健康と御自愛を心からお祈り申し上げます。

3、「丸裸女地獄」のヒロイン

4、「胎児が密猟するとき」のヒロイン

ヒロイン

出されるといふサド的なシーンがあつて、我々を楽しませてくれます。その他、女の緊縛場面がふんだんに見られます。

「砂の穴」

コールガール二人が、S趣味の老人に一人十萬円で買われるのだが、その中の一人は両手首をロープできっちり縛られた上、正座を命じられる。お金ほしさに観念して、いわれるままに正座して首うなだれる小娘の背後にまわった老人は、手にもった皮の鞭で、かわいそうな女の背といわず尻といわず、所かまわずめった打ちにする。

「ダブル・ベッド」ワールド映画の主人公がマジックミラーからのぞき見たダブル・ベッドの物語であるが、初老の男が若いピチピチとした若い女の子をムチで打ちすえては、その悲鳴を聞き楽しみながら愛撫するシーンや、ほう満な女を大の字にベッドに縛りつけて、さるぐつわをかませたうえ、絵筆で女の全身をくすぐるというS的な場面が、好き者の眼を楽しませてくれます。

「悪道魔十年」

この映画は小杉痴遊と名のる、ぼうず上りの枕絵師が特にサジスチックな絵に興味を持ち、同棲している女をモデルにするというス

又、松井康子も絵のモデルになるが、両手は床柱の下にかく縛り止められ、両足は机の足に開股に縛られ、仰向いたまま身動きできないようにされて、さんざん羞恥責めにされて、苦悶の表情を引

若い女の苦もんする表情と絹を裂くような悲鳴。鞭の女体にはじけるピシピシという音が、今もなお私の耳にのこっているほどの迫力のあるすばらしさであったが、場面が短いのが玉にきずで、おしい気がする。

にはフォトを贈呈しているのだが中には三行広告式の走り書きで読者通信にも載せられないようなのを奇クサロンの原稿だと送って来られるのがある。短くても結構なのだが、とにかく掲載価値のあるものをお願いする。

○それから目下のところ編集部では原則として手紙の斡旋とか読者の紹介とかいったことは取扱っていないので御諒解いただきたい。

○先月号から編集人が箕田京二から杉原虹児に変わったが、編集内容については従来通り変更はないので御安心いただきたい。

○今月も兵庫県をはじめとして四国の各県の青少年対策本部を回ってきたが地方都市の書店には一冊も店頭で見つけることが出来ないのに、県条例で指定されているのは、いささかやりきれない気持ちである。とにかく少しでも指定回数を減らすよう努力したい。

○『性問題相談室』は弓削達人先生の御都合によって直接回答の分に重点が置かれたため誌上掲載の分は休載となった。発足して第二回目なので残念ではあるが先生のお仕事への許す範囲内で極力発表して貰うよう心掛けるつもりなので引続いて相談をお待ちしたい。

夏と妊婦

高野原美

夏の女性の薄着は、妊婦ファンの私にとっては、特に楽しい限りである。

薄着になったためか、車中や街頭で見る大きく膨らんだ妊婦の腹が特によく目立ち、楽しみが増した。妊婦マニアの喜びに反比例して、妊婦は大きな妊娠腹をかかえて苦しさが増す時期であるが、それ以上に女性生理の特権とも云うべき妊娠腹を突きだして、多くの男性の羨望と讃美の視線を受ける喜びに耽けることだろう。

先日デパートの上で、立派な妊娠腹の丸い膨らみを鮮かに見て妊娠の誇りを全身に溢れさせた妊婦を、じっと十数分間鑑賞する機会に恵まれた。大きな腹をして羞恥もなく、堂々と誇らし気に雑踏の中で立っている姿を見ながら鮮かに妊婦の特徴のある張りつめた妊娠腹が、薄い服を逸して想像され楽しい一ときであった。真昼の若い美貌のグラマー妊婦を眼前にしての空想は、真夏の太陽のように強烈であった。

仙台の蛙腹の女王、豊満な腹を愛し、男性に厚い皮下脂肪の弾力に富んだ腹を加虐されたいと願う美川さんの熱望するように、私の白昼夢は止めどなく続いた。

薄いマタニティドレスを透して臨月近い妊娠腹は妊娠ヌードフォトを毎日のように鑑賞する私の前で、生々しい妊娠腹を晒していた現実の健康な妊婦と、ヌードフォトと、それに美川さんの切々たる告白、訴えの記事とが交錯して、何時しか妊婦は白刃を手に腹部を朱に染めて悶え、動物的な四つ這いの姿勢での大量浣腸に、豊満な臀部をモジモジさせて妖しいマゾ感に陶然とし、緊縛に肩で喘ぎ、豊満な半球の妊娠腹を波打たしているのだった。

毎日、数人は妊婦の楽しい特徴的な肉体を鑑賞できる最近の季節である。奇ク誌も、次々と緊縛モデルを探しだし、女性も協力的になつて来ているのを喜んでおり、SMカメラハントに期待しているのであるが、妊婦となると簡単に

は行かない。

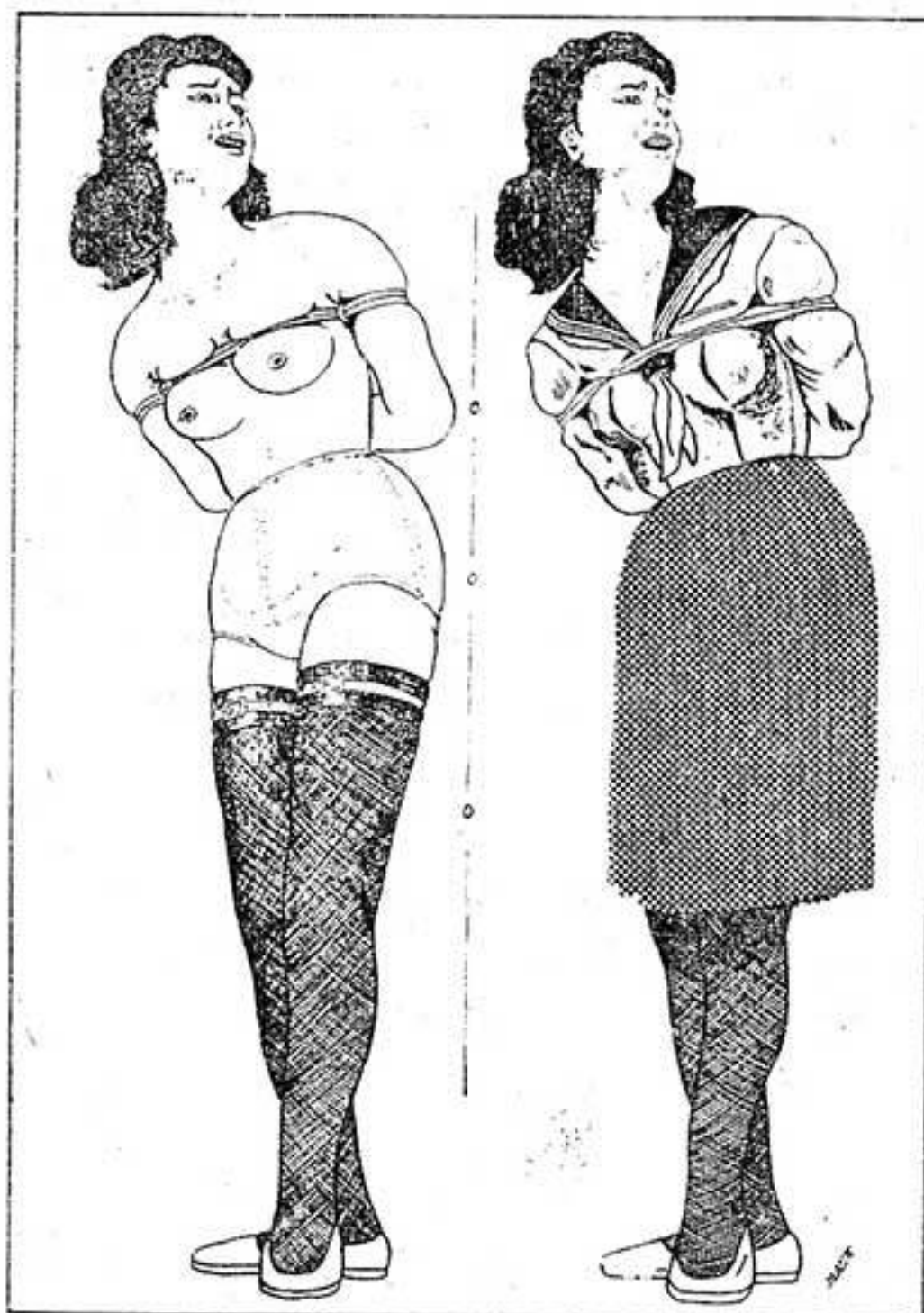
妊婦マニアとしては分譲フォトだけでなく、その豊かに張り切った膨隆した妊娠腹をなまの眼で鑑賞し撮影する機会を望んできた。この期待を満足させる記事が八月号に掲載された。奇クサロンの木戸悦子さんの記事は、妊婦マニアとして最高の喜びである。

早速お願いしたいと思うが遠方なのかどうか問題になる。近在であれば是非機会を与えられたいと思う。また、この機会にマニアのため妊婦ヌード撮影会を計画して貰えればとも思う。

マニアのために、木戸さんの理解ある好意的な態度を切望する。

「透視の術」

柏木真佐男



僕のイメージ画集

短 信 往 来

河上ユリさんへ

橘 雅 美

河上ユリさん。私が貴女にお便りするの、これが三度目になりますね。

五月号での、あの恥らいをかくしきれない真面目な告白に対し、私の呼びかけ（七月号）は、あまりにも毒された常識のない文章だった様です。

自分では、それでも、はやる心を精いっぱい押えたつもりだったのですが……。

気を悪くされましたら、お許し下さい。奇クを愛する読者の皆さん総ての人のアイドルであるべきユリさんを、私一人の為にだけ利用してしまった身勝手さを、反省している次第です。

幸か不幸か、読者通信他による貴女への呼びかけが、我田引水かも知れませんが、未だ私の目にはとまりません。編集部の方のおちからか、単なるめぐり合わせかは分るはすありませんが、そつと

つぶやいた貴女の「ひとり言」を耳にした私が、自分なりに、魂をこめて迷える友としてユリさんにあて、筆をとりました。「未知の願望に寄す」がそれです。

このまま、「奇ク」から貴女の御名前が消えてしまうのは、私にはとても残念です。それが、すでに愛する人に身を縛められていたとしても、どうかもう一度、誌上でお目にかかりたいのです。

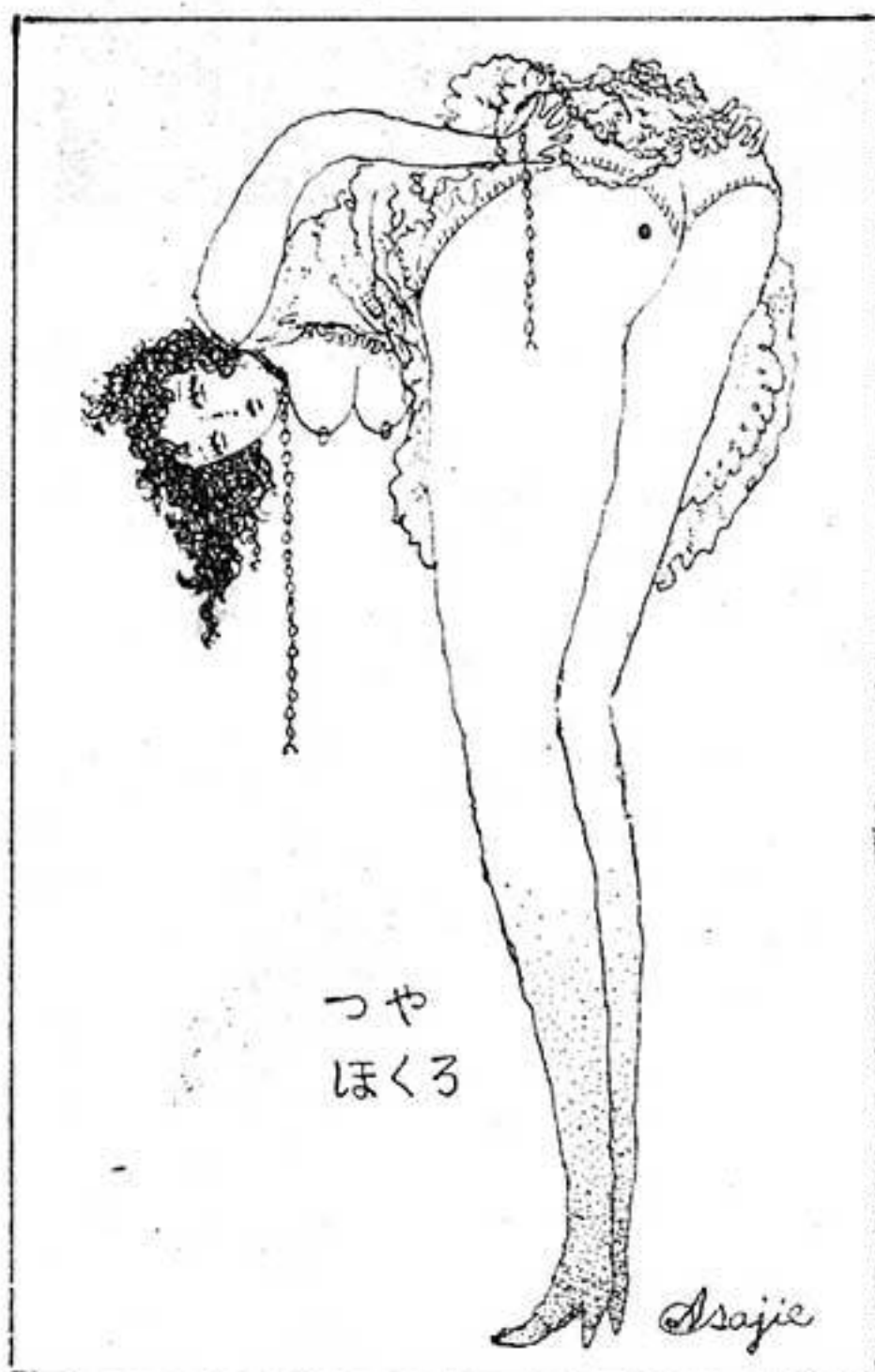
私はまだ若く、人間的にも幼稚です。いくら気どったところで、そう大それた人物にはなれっこありません。自分の年（二十三才）と気持ちにさからわず、ストレートにぶちあたります。

ユリさん。私は貴女と文通をしてみたいのです。いけませんか。

七月号での私の呼びかけも、五月号での貴女の告白も、良識ある編集部の方により、いくらかは文章らしくして頂いてはいますが、白い紙に並んだ活字は、何とも冷たく死んでいるとは思いませんか。

もう一度、自分の投稿された文章を、読んで御らんになれば、ユリさん御自身で、それがお解りになるのではないのでしょうか。

私はお待ちします。ユリさんからのお便りを——。五月号での勇



つやほくろ

「つやほくろ」

室井亜砂路

気を、もう一度ふるって下さい。

私も、いつかは「奇ク」でのカウンセリングを受けさせて頂く事になるでしょうが、それにも増してやはり身近に自分と同じ様な友を得たいと思います。

単なるめぐり逢いだけで終わってしまうのか、末長く、手紙のやりとりが出来るのか、はたしてある日、お逢いした瞬間に私のSとユリさんのMが丁度磁石の様に離れられなくなってしまうのか……それを知っているのは、神様だけな

のです。

めぐり来た真夏の空に似た、スカッとした気持ちで、私の願いが実現する事を祈りつつ筆を置きます。勝手なひとり言を書いてしまいましたが、ユリさんの御心を、少しでもゆり動かせる事が出来たらと思えます。それではさようなら。

私の手のひらの中で、汐の香りをふくんだセプレートの水着姿のままギリギリと縛られ、もがいているユリへ。

私とプレイをして下さい

城山ほずみ



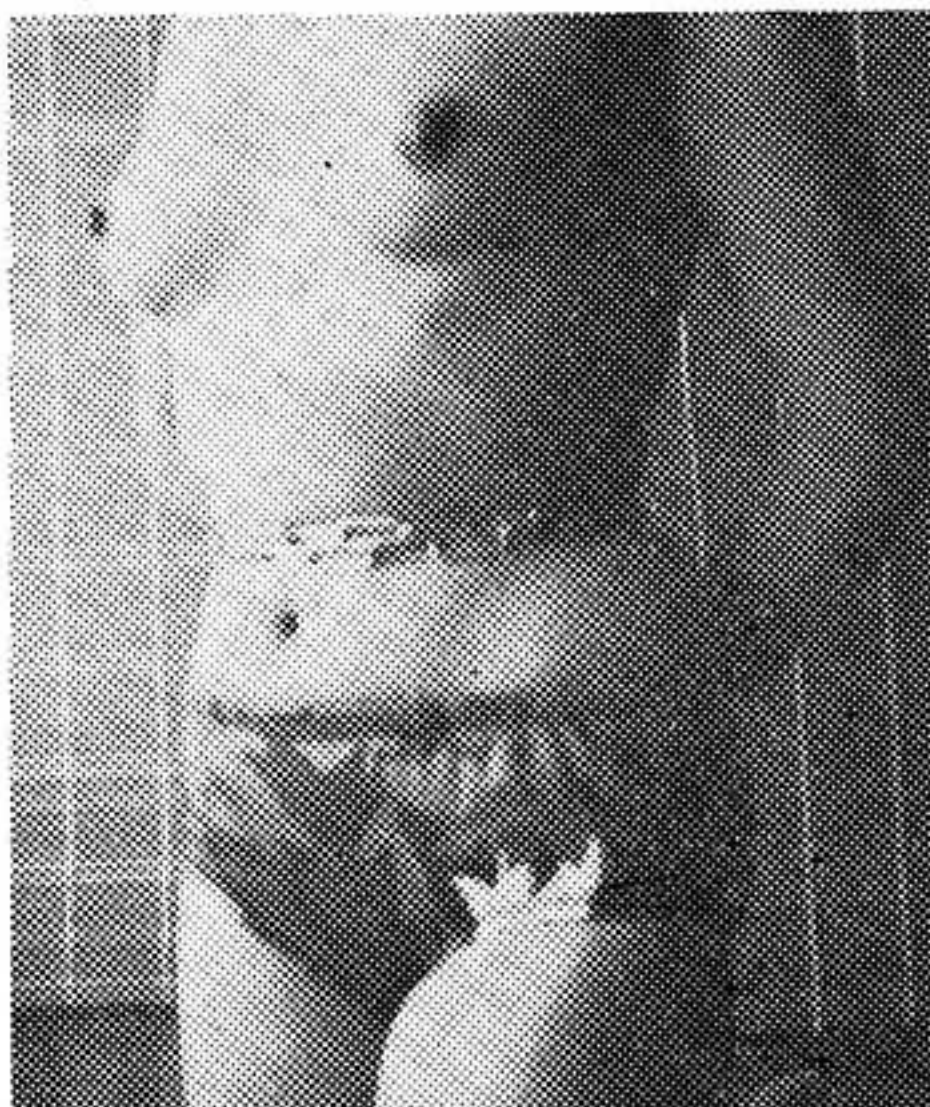
奇クの男性ファンの方お元気ですか？ 私は六月号のサロンに写真を発表していた、横濱の城山ほずみです。おかげさまで私とプレイをしてやろうとおっしゃる男性からのおたよりをいただきました。また、たいへんうれしく思っています。さっそくプレイのお相手をさせていただきます。その場合には、私も楽しいのですからもちろんモデル料などはいりませんが、他の費用（交通費とホテル代）だけは持ってくださいね。

私はホテルなどばかりでなく、野外でもプレイをやってみたくて日頃から思っています。どこか人



プレイのときには遠慮なく、思うとおりに縛って責めて下さい。ムチ、バイブレータ、ローソク等の小道具を使用しても結構です。でもやはり未婚ですので、ほんとうの生贄はこまります。これだけは守っていただいて、セックス以外でしたら、どんな恥かしい縛りプレイにも応じます。私は責められる事によるこびを感じる女です。

私とプレイをしてもいいとお思いの男性の方、いい責めのアイディアを考えてお便りを下さい。そしてお互いに楽しみましょう。私はむづかしいことをいうことは出来ませんがプレイの好きな男と女がプレイとしてSMを楽しむ事は、決して社会的



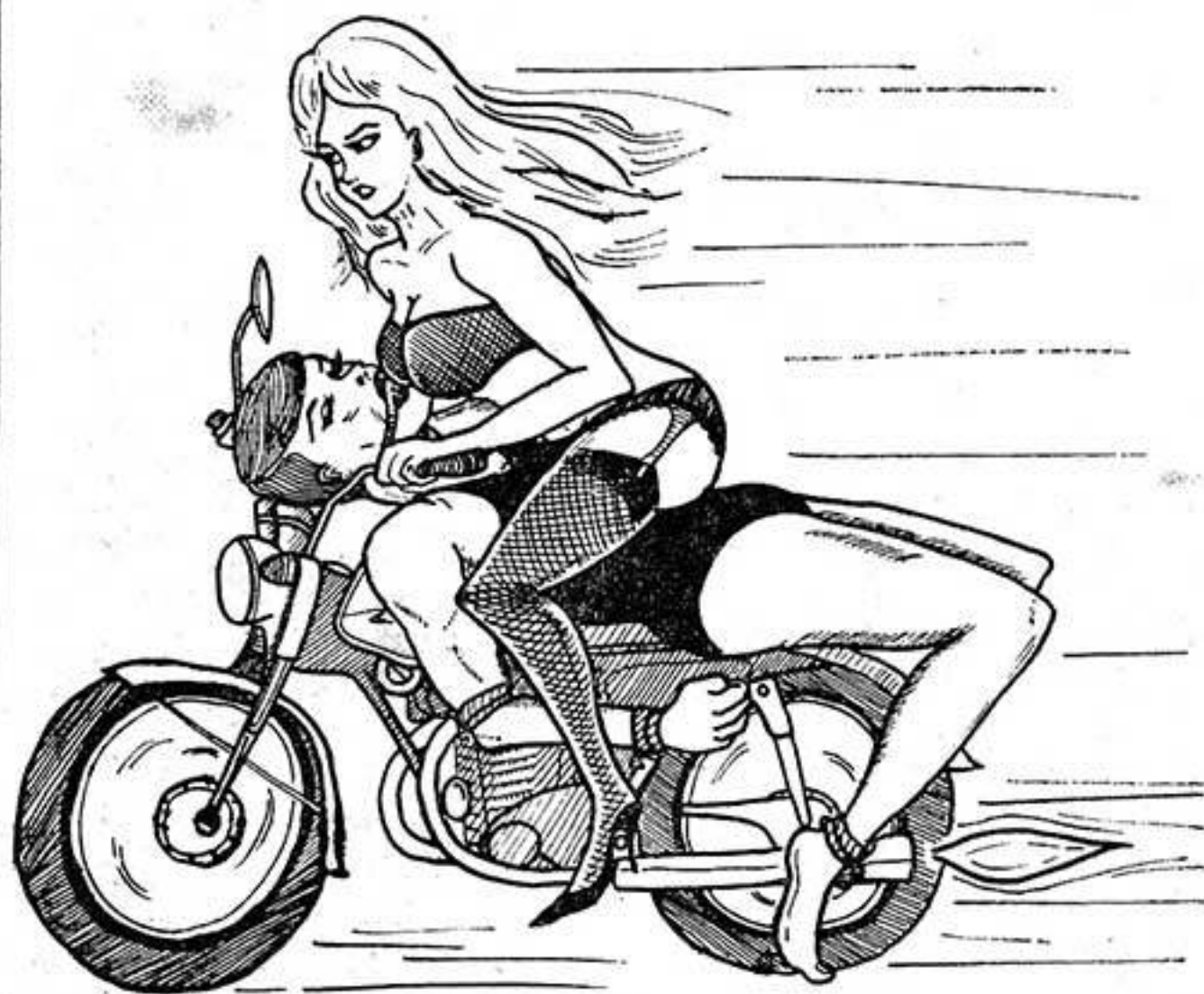
に悪い事だとは思っていません。本当に暴力的ならいけないでしょうが、お互いが楽しむあそびなら何も、問題はないでしょう。責めてもらった後のあの気分はどういものはありません。毎月のカメラハントのモデルの方だって、私と同じような気持ではないでしょうか？ 私はそう思います。

同封しました写真は、ごらんのようにビキニパンツを使用していますが、プレイの時には注文をつけたりはしませんから安心して下さい。第一、生贄の女が責める男の人にあれこれいうようではプレイのネウチがありません。

★イメージ画★

「特別製サドル車」◎美人に限り、
無料で貸します。◎

東京・赤ちゃん



淋しい誕生日

早木夢二

病後静養中ということともなる
と、大好きな拷問プレイも思うに
任せない。

誕生日となると、決ってどちら
かが縛られてプレイ祝いをするこ
とが、ここ十年近くの習慣となっ
た。

ていたのに、残念ながら、今年は
甚だ、おさむいこととなった。
私は勿論、彼女の失望も大きい
ものであった。

彼女の誕生日。もう永い間、プ
レイから遠去かっているが、私た
ちの近年では、大へん珍しい現象
である。その誕生日の習慣を思う
とき、どうしてもおさえきれず、
病後のやつれた体に縄をかけても
らった。

しかし拷問プレイは無理なので
囚人である私が、お役人さまの彼
女から責め問いを受けるだけで止
めたが、短時間のそれだけで、私
は充分に疲れてしまったが、プレ
イにごぶさたは彼女も同じで、し
かも病人ではない。その切なげな
表情と、久しぶりの縄目とが、私
の気持をゆさぶった。結果は一層
疲れを増すことになったが、一時
的にせよ、発病前の状態に戻れた
ことは、大変に嬉しかった。

それから二十日余で、私の誕生
日。いつか「女囚とお役人さま」
に書いたように、彼女からの何よ
りの贈り物を今年も受け、共に楽
みたい気持は一ぱいなのに、悲し
いかな、気力、体力ともに不足で
彼女に申し訳けないこととなって
しまった。

それでも、例年通りとはいかな
いが、菱縄縛りに縄がけして、そ
のままテレビを見たり食事をした
り、緊縛方法や拷問の話に花を咲
かせたりした。どこか物足りない
が、私たちマニア夫婦にはふさわ
しい雰囲気だけは保てた。

療養中に、私がいつかサロンに
書いた希望通り、広沢参議の妾に
対する「拷問」映画が誕生してい
た。だけれど、今度は清川八郎の
妾、お蓮の拷問ぶりを映画にしろ
と書いていられた。

私の、いわば血となり肉となっ
ているようなこの世界から、病氣
をしたばかりに閉め出され、とり
残されたような淋しさを覚える。

早く快くなつて、彼女との拷問
プレイのおくれを一举に取り戻し
たい。観損なつた映画は、どんな
場末にでもおっかけていって、何
度でも観てやるんだという意欲が
湧いて来た昨今、それだけでも心
強い気がするのだ。

彼女ももういいトシになった。
だが、久しぶりにかけた縄目に見
せた肌は、相変らず小肥りで、目
立った衰えはみえなかった。今年
の誕生日は淋しかったけれど、全
快祝いはずっと充実したプレイで
飾れるだろう。

初めて奇クを手にして

岩田浩二郎

私は今ふるえる手付でこれを書いている。「奇ク」を知った感激に、私の胸はふるえるのだ。今の私の気持をたとえて言うならば、長い間探し求めていた理想の女性にようやく巡り合えたような、そんな気持だ。

私はいかなる雑誌、週刊誌、私家本を読んでも、何かしら物足りなさを感じていた。それが一体何なのか、自分でも分らなかったが、奇クを手にして初めてその正体が分ったのだ。奇クこそ、私が求めていたものだったのである。正直言って、三五〇円也は私には重荷だった。その時、私のポケットには三六〇円しか入っていなかったのである。

しかし私はためらわずに、文字通り有り金をはたいて、奇クを買った。買わずにはいられなかったのだ。そして、どの一ページを読んでも、やっぱり買って来てよかった！ という感慨が、胸にこみ上げて来る。

読者諸兄姉はすいぶん難しいこ

とばかり書いておられますが、私のごとき新参者には西も東も分りません。しかし、もし感じたことを述べることをお許し願えるならば……。

奇クは漢字がやたらに多いと言ふこと。当用漢字だ何んだと、うるさい漢字制限を強いられる他の雑誌と異り、本誌は自分のおもむくままに原稿が書けるように思える。それは誠に好ましいことである。

しかし、中には漢字を多く使ったものが高尚な文章で、そうでないものは軟派的な文章だと考えておられる方が（読者の中にも編集者の中にも）かなりあるように思われます。

私は漢字に重きを置くよりも、文章表現の充実に力を入れるべきだと思ひます。

又、奇クはSとMの専門誌のようですが、三〇〇に近いページをそれだけに費すのは、なんだかもったいないような気がします。もっと幅を広げて、セックスに

関するもの一切を扱うべきではないでしょうか。ただし、奇クが単なるエロ本になり下ってしまつては、墓穴に葬られる結果となりますので、あくまでも高尚なセックス専門誌であつてほしいと思ひます。

× × ×

母親と一緒に風呂へ入つて、藻のようにゆれるものを初めて意識して、目をみはつた十歳の頃。親達の真似をして、近所の子供とオシメゴッコをして遊んだ十一歳の頃。汲み取り式トイレの糞の上に一面に散つた赤い花に、理由もなく異様な戦慄を覚え、全く自然的にオナニーを覚えた十二歳の頃。近所の小さな子らと同じように、小形の越中ふんどし（一名、金隠しとも言ふ）をして川へ入ろうとし、ハミ出ている今までなかったものを発見して、泳ぐことをあきらめた十四、五歳の頃。

ふとした過ちで拘置所暮らしをした二十歳の頃。同房の者に寄つてたかつて押えつけられ、かなり重症の包茎を嘲弄され、紫色に腫れ上つたのをみつめながら、余りの痛さにトイレの隅で泣いたつけ。初めて風呂へ入つたら、とび上るほど痛かつたなあ。

川柳・あぶちっく

(村まつり)

水沢 のぼる

○ 村祭思い出は血と泥猿ぐつわ

○ 泣けてくる囃子膝の子は三つ

○ 猿轡かこんで五人くじを引き

○ 射こまれて弓にのけぞる猿轡

○ 長老も祭にかついだ仲間なり

○ 夢うつつ露にしめつた轡解き

○ かつがれて満足を人妻もあり

○ 若後家の化粧念入る祭の夜

○ 村祭あれが縁だなおい女房

○ 頬かぶり風呂敷で娘をおっ包み

○ この頃は野良の車にかつき込み

○ 不覚なり風呂敷の娘に妻の味

○ かつがれた噂を醜女大きくし

○ かつがれもせず五十未だ処女

そして、初めて女と遊んだ時、女の下着を、記念だと言ってむりやり持って帰ったつけ。

しずかに自分の昔を想うとき、

そんな思い出が、汲めど尽きぬ泉のように次から次へと私の胸によみがえって来る。

もし許されるなら、そうしたこ

とがらをもっと詳しく書いてみたいと思います。今後の私の良き伴侶となるであろう奇クが、ますます発展するよう心より祈ります。

○ 嫁の来ぬ村の悲哀を村長なげき

(註Ⅱ祭にコイタスの意あり)

欲 求 不 満

安 井 喜 久 子

四月号のSM一〇〇問、私は塚本記者の誘導尋問で本当のことをお話してしまいました。その中で本当に好きで好きでたまらない趣向……それは複数の男性によって

責められることが最高です。

勿論縛り、笞打ち、それに吊りもその味はSMファンの一般の人並に好きなことはまちがいありませんがそれが複数人二人以上Vの男性によって責められる時こそ何とも言えない極致の世界です。

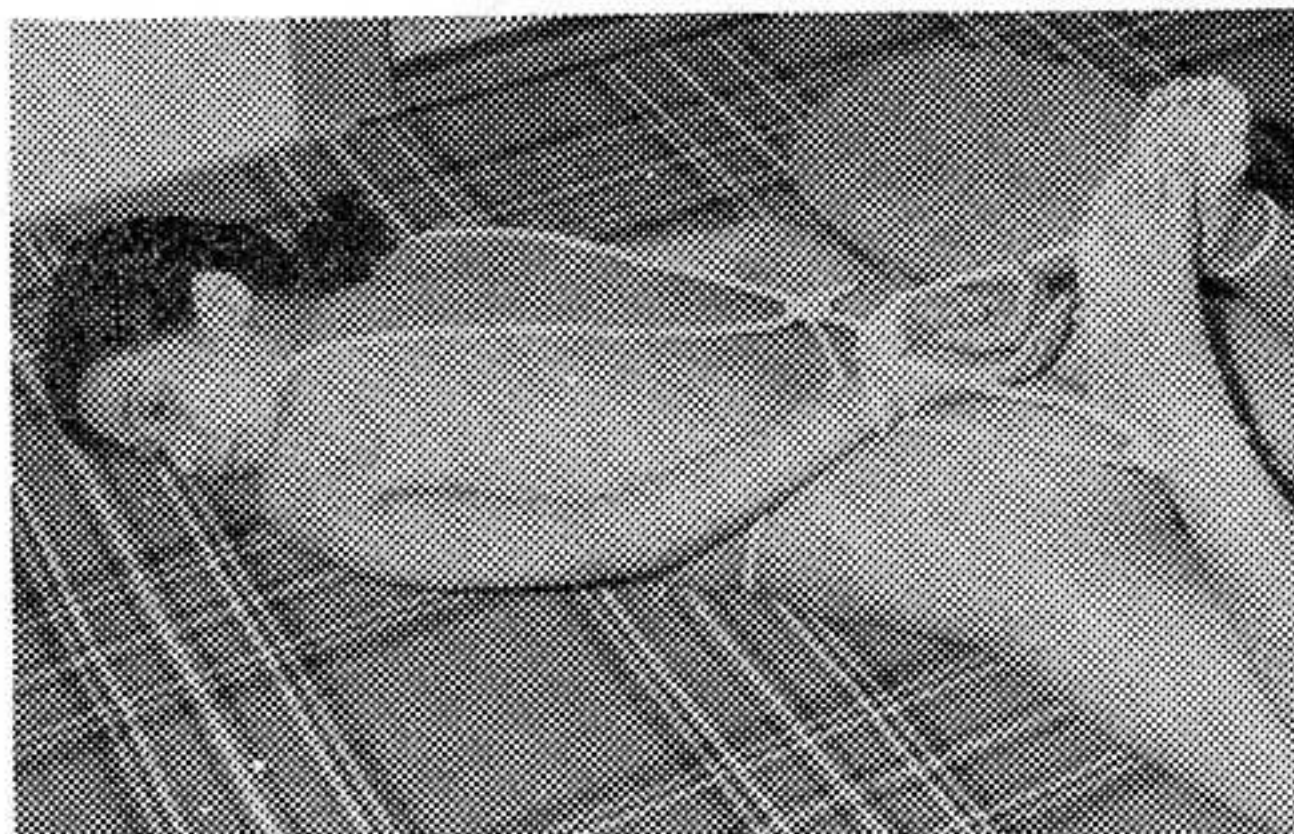
結婚してからは夫の趣味、趣向

を理解し、従うのが妻の役目と思いながら、いつしか覚えたこのSMの感覚。愛し又愛着を感じ乍ら又その上好きで憎らしいこの縄、

この笞、複数の男性により責め続けられるその瞬間(長い時間ですが私には瞬間としか思えない)過去数度の経過しかありませんがその時間の間は丁度少女がグループサウンズのファンと同じようにシビレ感じでもあります。

それは私の二十数年間の最高の時間なのです。

申し遅れましたが過日はKK誌気付にて私の縛りのアイデアをお



教え願えるよう申し上げたときには、多勢の方々からのお手紙、又は絵をあんなに沢山お送り下さいましたことを、誌上をお借り致します。御礼申し上げます。

でも、私は欲求不満ですの。何

故? 恥かしかったので申し上げます。ませんでしたけれども、本当は複数の男性から責めていただきたかったのです。

「花と蛇」の静子夫人はMの女性として、小説ながら最高に幸福な女性だと思えます。いつもいつも複数の男性によって、前からそして後からと責められることの連続ですもの。

室井亜沙路さま、春川ナオミさま。いつもあなたがたお二人のイメージを、KK誌上にて楽しく拝見致しておりますが、こんな私でもいることをお忘れなきようお願い致します。

亜沙路さま、ナオミさまをはじめ、SMファンの方々。絵又はお手紙にて、どうぞ喜久子を複数の男性によって、ビシビシと責めてやって下さい。

その絵が、又そのお手紙の中の女性が喜久子でありますように祈りつつ、又現実にもそのチャンスが到来致しますように期待しつつ待ちます……。

詩

「やまびこ」

菊池 淳子

△浣腸に魅せられた

女のうたえるうた▽

一、誇る艶肌ひき剥かれ
あえなき目クギ辛らけれど
み恵み深き看護とて
献げゆく身のすべなきを
授かる君はなに故に
忌み蔑すむやイチジクと

二、おまえ恨むにあらざれど
乙女のにしるし芽生えきて
まなうら熱き浣腸は
常の戒しめ交らずば
母のみ旨の重きぞと
讃え許せぬしたり顔

三、そは母君も同じこと
君を妊ごる過ぎし日は
まるめ剃られし涼し身の
目かくし暗き十字架に
命もちぢむ導尿と
声も塞さがる浣腸器

四、哀れさ知ればお仕置の
縄目にまさるかのおマル
まなざし注ぎ語らるる



僕の耽美画

杉田与三郎

初めての投稿です。同封しました印画は、僕が描いた絵を写真にしたものの一部ですがご覧下さい。僕は耽美主義者です。だから、女性を縛ると、余計に美しく見え、なんとも



いえないエロチズムを感じるので。そんなわけで僕は、女性の緊縛姿の中にこそ、至上の美があると信じてうたがわれない者です。美人モデルを使って絵にしたような写真を撮ってみたいと思っていますが、まだ二十四才の学生の身では、いろいろと資金の面で実現せず、ただ想像する夢を作画に託すばかりなのです。

僕はサデスト系の人間と自認しますが、ソフトな方だと思っています。軽いムチうち、バイブレーター、刷毛などによる遊戯的責め方をしてみたいと思うのですが、自分からそのようなことを望む女性は、なかなかいないものです。嫌がるのをムリにしたのでは意味はないし、お金のためだけにするような女には興味は湧かない。せめて会話だけでも情緒を楽しむ事のできる女性でも居ればオツなものです。……僕の好みの女性は奈美悦子さん型ですが、色々な小道具やバックを使い、光線を利用しての幻想的な縛り写真が撮れば素晴らしい

無念のしとね笑む声は
お熱の昨夜イチジクに
憂いやすらぎ慎しむと

五、召され仰ぎし母君の
溜息あつく訝かれば
うれしやこの夜貴き身
寝苦しき日に張るお腹
背に手をそえばためらいつ
せまるつぼみに目をつむる

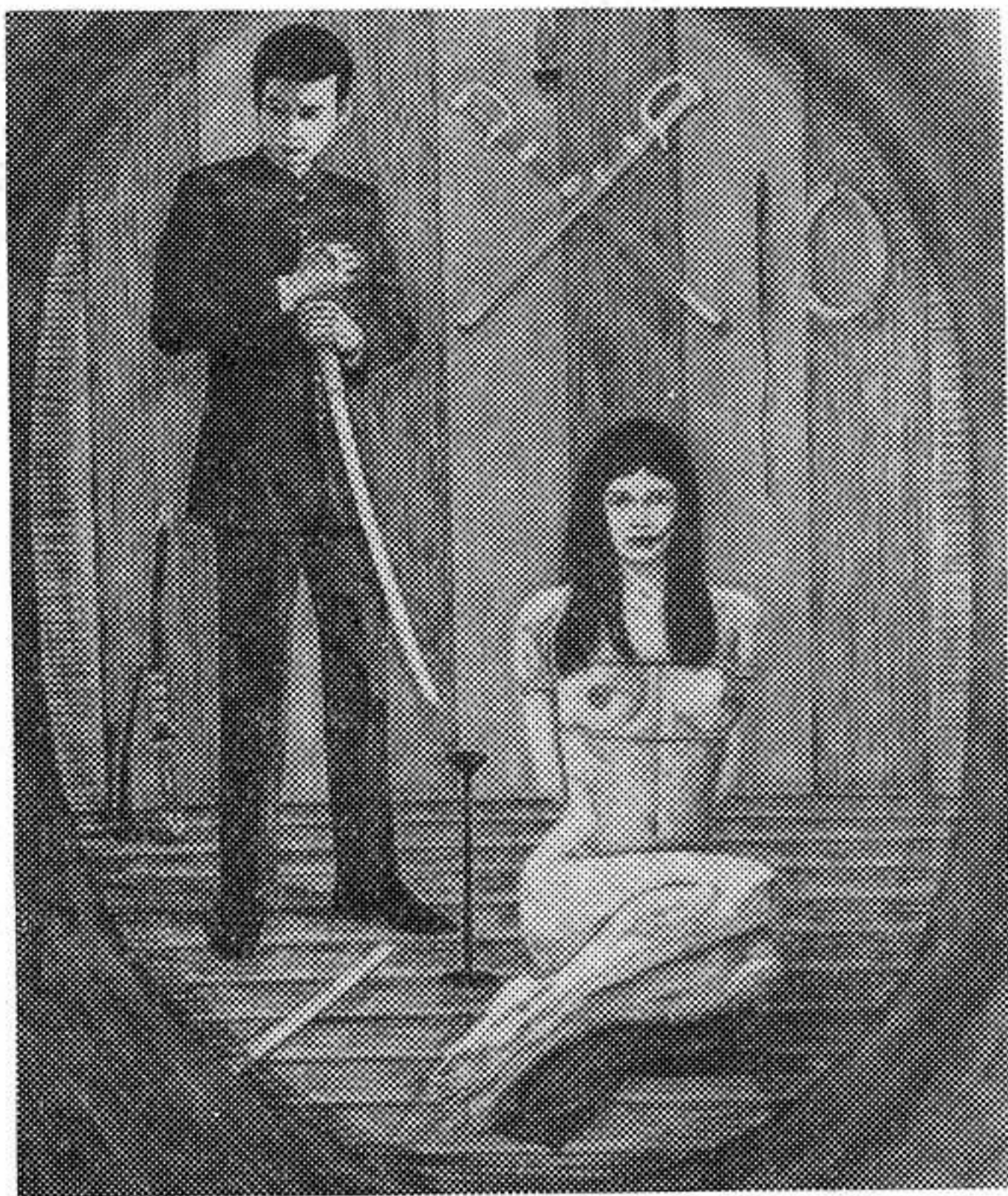
六、いつかは母も吾もまた
はぐくみ護る愛し児に
瞳やさしくうなずきて
躡正しく素直なら
もろ足たばね高々と
いとし与えん浣腸を

七、いかにましますかのお臀
筒さき描くあの味と
相呼ぶ心こだまして
答羞かしお下げ髪
無念と想う遠き日の
甘き戦慄いま恋いし

八、襦袢の日より看とりきて
かけ替えなき児健やかに
祈る浣腸この母の
胸の思いを誰か知る
うき目としおれ恥じ忍ぶ
いじらしき子の永久なれば

『実験室』

系 振 昇



と思います。

イメージとしては古い茶室か、夕暮れ時の美しい自然の中での美女緊縛が最高です。僕の場合、ムードを一番大切にしたい、縛りにもP・T・O(このごろ流行し始めた言葉だが)が必要なように思えます。いくら女性の緊縛姿が好ましいといっても、場所も雰囲気も構わず、ただ裸を縛ればいいってなものじゃないですよ。

僕のようなのを、何型というのか知りませんが、自分ではロマンチストのつもりで、全裸を好み、緊縛を目標とするのも、美を引出すための手段です。勿論、愛するための縛りで、緊縛によってムードを盛上げたいのですが、一方的に加虐の陶醉を求める気持はありません。同じ呻きでも、苦痛の呻きと求める呻きとは違います。

面はマユを破る人間の手。そしてころげ出す奇形の蛾。……先日見たNHK教育番組、12チャンネル「みんなの科学」中学生? 向け放映実験室の一場面。

糸にくぐられたカイコのうごめき。私はそのクローズアップが眼に残る。その夜の夢で、カイコと美女が、すり代っていた。

毛虫はグロだが、フックラとした山を持つ色白のカイコが体をくねらしているさまは可愛い。

「……ここをくくっておくと、このままで糸を吐いて、やはり蛾にはなりますが、こういう変型の蛾

になるのです……」

説明と同時に、カイコの胴が、糸によって千切れんばかりに絞りつけられた。カイコのフックラした山がすぐ大きく変わった感じで

苦しそうにうごめき廻る。次の画

「馬のつぶやき」

青井 松造

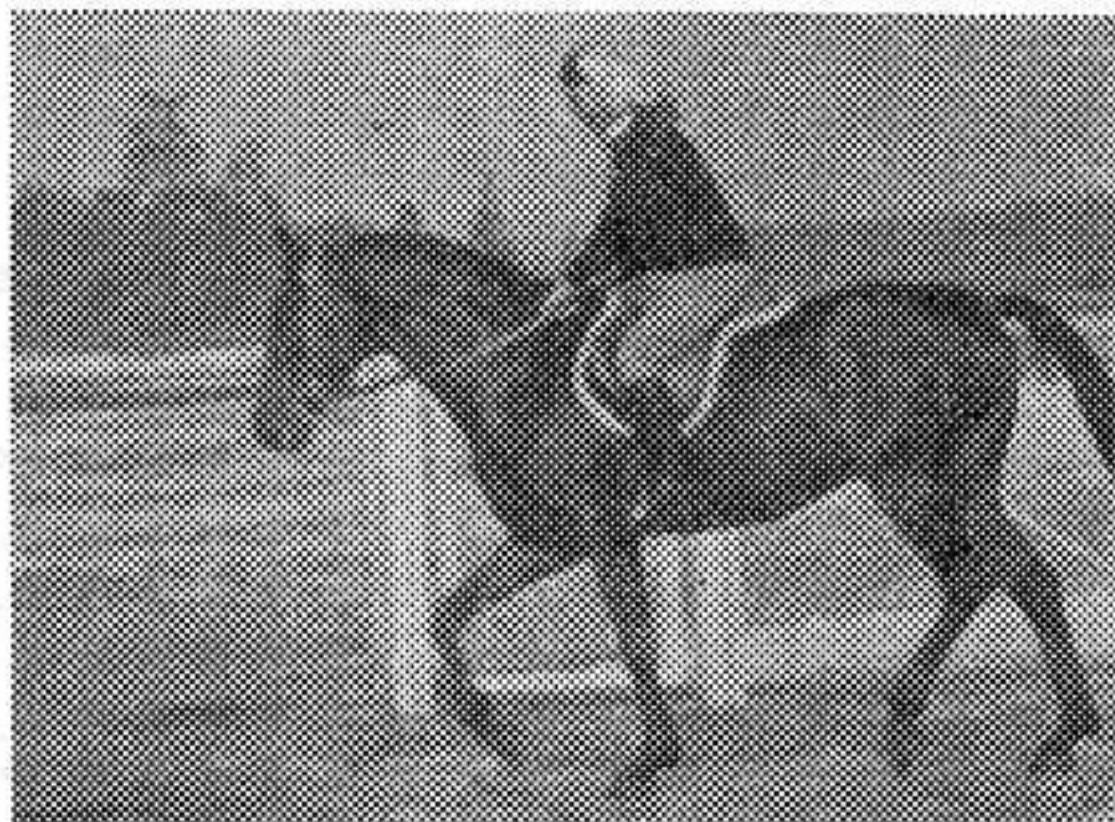
写真提供 佐野 寿

おとなしいって？ あっしが？
あんたは近頃のおっしだけしか知らないからそういうが、これでも北海道に居た頃にゃ暴れんぼうでチッタア仲間にコワモテのほうでやした。ガールフレンドなんかもちよつと鼻をならすだけでイソイソとついて来たもんだが、今考えしてみると、ありゃ、怖いのが半分でシンからモテたわけじゃなかったらしい。馬仲間のメスってのは優しいからねえ。それにくらべると人間のメス、いや、女性っていうそうだが、おっそろしく手厳



しい種族があるもんだと思うよ、まったく。

北海道では、牧場の若い衆が背



中ののっかったのはやはり毎日だった。が、チョイ駆け程度で、やたらに首筋叩いてほめてくれた。背中もそう重くはないし、脇腹もくすぐったい程度のことだ。済んだ。たまに腹が立って、後足で立ってやると簡単に降りてくれて、腰の辺りをなぜながら何かいってた程度だった。が、今の主人は、そんなわけにゃいかね。

何しろ女だろ。怖いものなんのって、おはなしにならねえ。

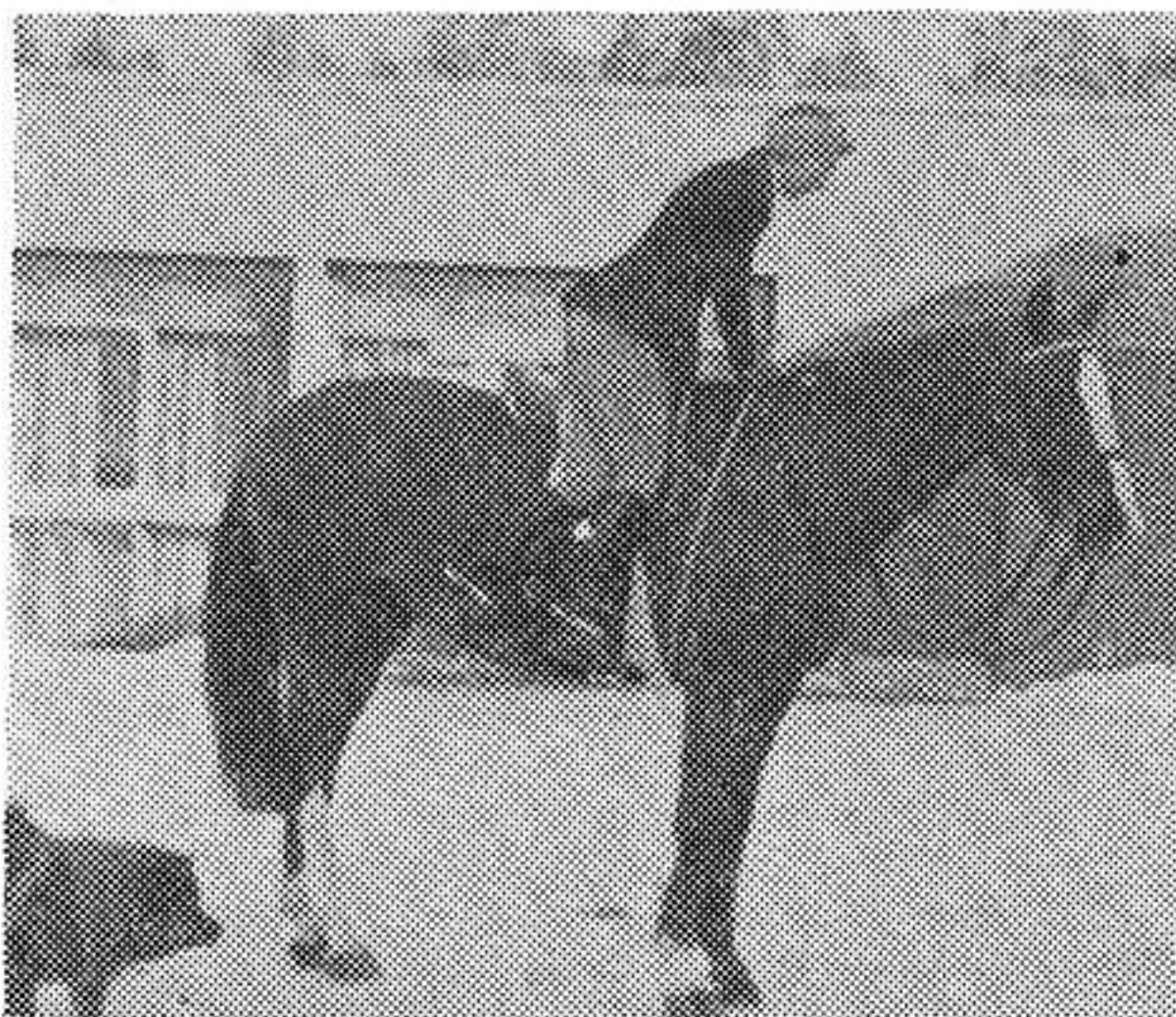
第一、俺は生れてこのかた、ク

ラってえらしいが、人間の尻敷を背中にのっけずに直接背骨の上へどしんと乗ら

れたのは、ここへ来て初めてのことだ。

そりゃあ、少々のものがのっかっててもどうってえこたあねえが、妙にフンワリとして、そのくせずしっとくるのが背中で踊られると面喰わあね。それにさ、あの脇腹を両方から締めてくる足の力ってえものはバカに出来ねえ。人間の女もや

はり優しいものと聞くこともあるが、あっしの女主人に限って、あの噂は信用出来ねえナ。スゲー力で手綱を引かれりゃ口が裂ける想いだし、拍車の痛さがどんなものかあんたご承知かね。あっしだってたまには自由に走りてえが、ちよつとでもそうすりゃあコトだ。脇腹をギュッと締められた上に、拍車と鞭だ。見てくれよ、この腹の傷と、尻のハレ上りをさ。え、辛いだろうって？ ヘッヘヘのヒンヒンさ……。



印画紙焼付極鮮明写真

〔新しいモデル強烈縛り〕

Y字型宙ハリツケ

大手札四枚一組 略号八ちねV
左近麻里子

開股逆さ吊り姿態

大手札三枚一組 略号八ちてV
左近麻里子

強烈菱縄柔肌縛り

大手札四枚一組 略号八ちやV
左近麻里子

豊満な臀部への責め

大手札四枚一組 略号八ちみV
左近麻里子

猪吊りの滑車責め

大手札四枚一組 略号八ちつV
左近麻里子

悶々たる尻立て縛り

大手札四枚一組 略号八ちなV
左近麻里子

股間立縛りの表情

大手札四枚一組 略号八ちすV
左近麻里子

全裸立縛りの表情

大手札四枚一組 略号八ちさV
左近麻里子

豊満な体緊縛のあえぎ

大手札四枚一組 略号八ちこV
左近麻里子

緊縛と柔肌の交錯

大手札四枚一組 略号八ちくV
左近麻里子

輝美表と裏の二態

大手札二枚一組 略号八ちけV
左近麻里子

美女の鼻をもてあそぶ

大手札四枚一組 略号八ちるV
左近麻里子

美女の鼻孔を鑑賞する

大手札四枚一組 略号八ちれV
左近麻里子

開孔器で美女の鼻腔検査

大手札四枚一組 略号八ちきV
左近麻里子

開股拷問椅子正面縛り

大手札四枚一組 略号八なたV
中河 恵子

甘美な椅子縛りプレイ

大手札四枚一組 略号八なあV
中河 恵子

のけぞる痛打の果て

大手札四枚一組 略号八なちV
関谷富佐子

臀部に炸裂するムチ

大手札四枚一組 略号八なつV
関谷富佐子

痛打による絶妙表情

大手札四枚一組 略号八なてV
関谷富佐子

絶妙なるバック姿態

大手札四枚一組 略号八せきV
左近麻里子

強烈猿ぐつわ哀歓

大手札四枚一組 略号八せかV
左近麻里子

息づくボリウムを縛る

左右に開股を縛る

大手札四枚一組 略号八せみV
左近麻里子

ゴムカバーの猿ぐつわ

大手札三枚一組 略号八せなV
左近麻里子

羞恥椅子開股縛り

大手札四枚一組 略号八せけV
左近麻里子

黒布の猿ぐつわと緊縛

大手札四枚一組 略号八せこV
左近麻里子

甘美なる開股椅子プレイ

大手札四枚一組 略号八せまV
木村 洋子

開股吊り縛りの極致

大手札四枚一組 略号八せむV
木村 洋子

菱縄雁字搦目縛り

大手札四枚一組 略号八せえV
木村 洋子

私を虐めて下さい

大手札四枚一組 略号八せろV
中河 恵子

豆絞りの猿轡縛り

大手札四枚一組 略号八せれV
中河 恵子

悶える全裸の表情

大手札四枚一組 略号八せりV
中河 恵子

麗身の裏と表の表情

大手札四枚一組 略号八せとV
中河 恵子

竹棒と猿轡と縄と

豊満な緊縛全裸を晒す

大手札四枚一組 略号八せゆV
左近麻里子

陽光に映える亀甲裸身

大手札四枚一組 略号八せいV
左近麻里子

縄で弄ぶ豊満緊縛女体

大手札四枚一組 略号八せたV
大島 照代

後手縛りに狂い泣く

大手札四枚一組 略号八せのV
大島 照代

遅ましく臀部責め

大手札四枚一組 略号八せねV
大島 照代

強烈縛りに喘ぐ裸身

大手札四枚一組 略号八せにV
大島 照代

大の字笞打ちの悶え

大手札四枚一組 略号八わりV
関谷富佐子

絶妙の尻立て鞭打姿態

大手札四枚一組 略号八わもV
関谷富佐子

鞭打ちの女王昇天す

大手札四枚一組 略号八わめV
関谷富佐子

狂い咲く鞭打の妖花

大手札四枚一組 略号八わみV
関谷富佐子

大の字ハリツケで鞭打

大手札四枚一組 略号八わとV
関谷富佐子

蒲団に狂いまわる女王

印画紙焼付極鮮明写真
〔美人モデル緊縛フオート〕

鞭打ちによる感溺の表情 大手札四枚一組 略号 (めち) 五〇〇円 関谷富佐子	股裂縛りて痛打する 大手札四枚一組 略号 (めの) 五〇〇円 関谷富佐子	海老縛りの鞭打地獄 大手札四枚一組 略号 (めぬ) 五〇〇円 関谷富佐子	尻立縛りて強打に泣く 大手札四枚一組 略号 (めし) 五〇〇円 関谷富佐子	ムチは臀部の双丘に炸裂 大手札四枚一組 略号 (めけ) 五〇〇円 関谷富佐子	鞭に悶える鉄砲責め女体 大手札四枚一組 略号 (めま) 五〇〇円 関谷富佐子	逆手吊りて晒す臀部 大手札四枚一組 略号 (めり) 五〇〇円 関谷富佐子	鞭の縛りに夢心地表情 大手札四枚一組 略号 (めも) 五〇〇円 関谷富佐子	鞭は美体にからみつく 大手札四枚一組 略号 (めさ) 五〇〇円 関谷富佐子	狂う鞭に狂い泣く女体 大手札四枚一組 略号 (めさ) 五〇〇円 関谷富佐子	両手吊りの女体に強打 大手札四枚一組 略号 (めさ) 五〇〇円 関谷富佐子
----------------------------------------------	--------------------------------------------	--------------------------------------------	---------------------------------------------	----------------------------------------------	----------------------------------------------	--------------------------------------------	---------------------------------------------	---------------------------------------------	---------------------------------------------	---------------------------------------------

鉄砲縛りに鞭打の雨 大手札四枚一組 略号 (めせ) 五〇〇円 関谷富佐子	鞭打ちに示す感泣の極致 大手札四枚一組 略号 (めて) 五〇〇円 関谷富佐子	逆海老開股縛りに鞭打ち 大手札四枚一組 略号 (めひ) 五〇〇円 関谷富佐子	ムチに悶絶した美夫人 大手札四枚一組 略号 (めへ) 五〇〇円 関谷富佐子	のけぞる悦虐表情の露呈 大手札四枚一組 略号 (めふ) 五〇〇円 関谷富佐子	責めによる美的法悦表情 大手札四枚一組 略号 (めら) 五〇〇円 関谷富佐子	妊婦開股縛り哀歎 大手札四枚一組 略号 (わう) 五〇〇円 中河 恵子	八カ月の妊婦開股責め 大手札四枚一組 略号 (わの) 五〇〇円 中河 恵子	妊婦太鼓腹開股縛り 大手札四枚一組 略号 (わえ) 五〇〇円 中河 恵子	妊孕美人媚態の立像 大手札四枚一組 略号 (わお) 五〇〇円 中河 恵子	妊孕美人媚態坐像 大手札四枚一組 略号 (わき) 五〇〇円 中河 恵子	両手吊り片足挙げ妊婦 大手札四枚一組 略号 (わく) 五〇〇円 中河 恵子
--------------------------------------------	----------------------------------------------	----------------------------------------------	---------------------------------------------	----------------------------------------------	----------------------------------------------	-------------------------------------------	---------------------------------------------	--------------------------------------------	--------------------------------------------	-------------------------------------------	---------------------------------------------

八カ月の妊婦両手吊り 大手札四枚一組 略号 (わさ) 五〇〇円 中河 恵子	突き出た腹部の妊孕美 大手札四枚一組 略号 (わし) 五〇〇円 中河 恵子	両手吊りの妊婦正面 大手札四枚一組 略号 (わす) 五〇〇円 中河 恵子	縛られた妊婦の艶姿 大手札四枚一組 略号 (わせ) 五〇〇円 中河 恵子	両手一本吊りの妊婦 大手札四枚一組 略号 (わち) 五〇〇円 中河 恵子	恵子の妊孕美緊縛 大手札四枚一組 略号 (おに) 五〇〇円 中河 恵子	初妊娠の太鼓腹の美 大手札四枚一組 略号 (おぬ) 五〇〇円 中河 恵子	裸身縛りの妊孕美 大手札四枚一組 略号 (おす) 五〇〇円 中河 恵子	身籠った裸身責め 大手札四枚一組 略号 (おも) 五〇〇円 中河 恵子	麗わしの妊婦縛り 大手札四枚一組 略号 (おひ) 五〇〇円 中河 恵子	膨満の腹部緊縛美 大手札四枚一組 略号 (おみ) 五〇〇円 中河 恵子	立縛り髪責め引回し 大手札四枚一組 略号 (おけ) 五〇〇円 安井喜久子
---------------------------------------------	---------------------------------------------	--------------------------------------------	--------------------------------------------	--------------------------------------------	-------------------------------------------	--------------------------------------------	-------------------------------------------	-------------------------------------------	-------------------------------------------	-------------------------------------------	--------------------------------------------

猿轡の裸身を晒す 大手札四枚一組 略号 (おふ) 五〇〇円 安井喜久子	後手縛りて引回す 大手札四枚一組 略号 (おく) 五〇〇円 安井喜久子	片足吊り上げ責め 大手札四枚一組 略号 (おて) 五〇〇円 安井喜久子	憂愁夫人の菱縄縛り 大手札四枚一組 略号 (おや) 五〇〇円 安井喜久子	柱対向立ち縛りの夫人 大手札四枚一組 略号 (おあ) 五〇〇円 安井喜久子	片足吊り股裂き責め 大手札四枚一組 略号 (およ) 五〇〇円 安井喜久子	逆エビ責めに泣く女 大手札四枚一組 略号 (おわ) 五〇〇円 安井喜久子	柱正面立ち縛り媚態 大手札四枚一組 略号 (おの) 五〇〇円 安井喜久子	股間縛りにもかく女体 大手札四枚一組 略号 (おう) 五〇〇円 安井喜久子	豊満の女体をくびる 大手札四枚一組 略号 (おれ) 五〇〇円 安井喜久子	開股前屈愛撫責め 大手札三枚一組 略号 (おね) 四〇〇円 愛知 葉子	逆エビ縛りの愛撫 大手札三枚一組 略号 (おな) 四〇〇円 愛知 葉子
-------------------------------------------	-------------------------------------------	-------------------------------------------	--------------------------------------------	---------------------------------------------	--------------------------------------------	--------------------------------------------	--------------------------------------------	---------------------------------------------	--------------------------------------------	-------------------------------------------	-------------------------------------------

〔最近作緊縛傑作フォト〕

開股竹棒羞恥責め

大手札三枚一組 略号「ねろ」 四〇〇円

逆エビ責め手足縛り

大手札三枚一組 略号「ねき」 四〇〇円

竹棒開股強烈繋り

大手札三枚一組 略号「ねく」 四〇〇円

鼻責めと鼻孔大写真

大手札三枚一組 略号「ねけ」 四〇〇円

首縄後手強烈縛り

大手札三枚一組 略号「ねこ」 四〇〇円

全裸開股膝頭縛り

大手札三枚一組 略号「ねさ」 四〇〇円

菱縄縛り竹棒責め

大手札三枚一組 略号「ねし」 四〇〇円

柔肌に喰込む縄目

大手札三枚一組 略号「ねす」 四〇〇円

豊満な全裸を弄る

大手札三枚一組 略号「ねせ」 四〇〇円

逆エビに痛める魔手

大手札三枚一組 略号「ねそ」 四〇〇円

黒髪をいたぶる手

大手札四枚一組 略号「そや」 五〇〇円

菱縄縛りにあえぐ

大手札四枚一組 略号「そゆ」 五〇〇円

強烈後手縛りの狂態

大手札四枚一組 略号「そき」 五〇〇円

牝犬奴隷の醜態

大手札四枚一組 略号「そよ」 五〇〇円

全裸二つ折り縛り

大手札四枚一組 略号「そむ」 五〇〇円

菱縄しぼりの表情

大手札四枚一組 略号「その」 五〇〇円

八の字開股羞恥責め

大手札四枚一組 略号「そか」 五〇〇円

菱縄縛りの全裸を晒す

大手札四枚一組 略号「そえ」 五〇〇円

奴隷捨札開股縛り

大手札三枚一組 略号「きむ」 四〇〇円

菱縄強烈開股縛り

大手札三枚一組 略号「きま」 四〇〇円

竹柱立縛り晒し者

大手札三枚一組 略号「きみ」 四〇〇円

柱宙縛り苦痛表情

大手札三枚一組 略号「きめ」 四〇〇円

猿轡股間縛り歩き

大手札三枚一組 略号「きも」 四〇〇円

浣腸にむせび泣く女

大手札四枚一組 略号「つゆ」 五〇〇円

身動き出来ぬ強制浣腸

大手札四枚一組 略号「つえ」 五〇〇円

竹棒開股苔打ち縛り

大手札三枚一組 略号「つひ」 四〇〇円

後手吊りにもがく女体

大手札四枚一組 略号「くて」 五〇〇円

逆エビ縛りの色々

大手札四枚一組 略号「つか」 五〇〇円

逆さ吊りと足吊り

大手札四枚一組 略号「つよ」 五〇〇円

愛知葉子

大手札四枚一組 略号「つお」 五〇〇円

片足吊り上げ縛り

大手札四枚一組 略号「つや」 五〇〇円

美しき臀部を晒す

大手札四枚一組 略号「つく」 五〇〇円

階段に晒す全裸身

大手札四枚一組 略号「つね」 五〇〇円

花瓶を太股で挟む裸身

大手札四枚一組 略号「つな」 五〇〇円

麻里子の裸身をあばく

左近麻里子 略号「つな」 五〇〇円

絶妙の鞭打ちポーズ

大手札四枚一組 略号「つに」 五〇〇円

悶える白肌を俯瞰する

左近麻里子 略号「つね」 五〇〇円

両膝頭開股宙吊り

大手札四枚一組 略号「くち」 五〇〇円

片足挙げ吊り責め

大手札四枚一組 略号「くも」 五〇〇円

両手吊りに悶える女

大手札四枚一組 略号「くい」 五〇〇円

開股責めを悦ぶ女

大手札四枚一組 略号「くあ」 五〇〇円

両手万歳吊りにもがく

大手札四枚一組 略号「くむ」 五〇〇円

静子夫人への羞恥責め

大手札四枚一組 略号「くめ」 五〇〇円

雁字搦目縛りにうめく

川越美佐子 略号「くと」 五〇〇円

八力月の妊婦に革具責め

増田みゆき 略号「へね」 五〇〇円

九力月の妊婦に首枷責め

増田みゆき 略号「への」 五〇〇円

激痛に耐える鞭打ち表情

関谷富在子 略号「わつ」 五〇〇円



わたしは十数年来、奇クを愛読している者です。わたしは札幌に住んでおりますが、読者通信に寄せられる人は殆んど内地の方ばかりで、北海道の方のお便りが載っていないのを、心さびしく思っております。奇クが発売されますとまたたく間に売れてしまうところを見ますと、案外、関心の深い方が多いと思います。わたしは三十五才、勿論、妻子ある平凡なサラリーマンです。妻は、わたしが奇

クの愛読者などとは知るよしもありません。物事は妻であるが故にできることと、できぬことがありますが、わたしは、その後の方で、その意味では不幸な男かもしれない。奇ク愛読の女性の方、ともに語り合ってみませんか。この広い札幌に、ひとりもおられないものでしょうか。おひとり心で秘めておられる女性の方、おいででしたら、ぜひ、わたしの呼びかけに応じて下さい。

(札幌市・佐藤良三)

私は「花と蛇」を愛読するマゾ女性です。特に、みだらな、おぞましい調教の場面では、自分が責められているような気分になり、身体が熱くなってしまう。どなたか、私をミッチリ調教して下さいませ。どんなきびしい調教でも、女として大事な修業ですもの喜んで、お受けいたします。そして、いろいろな芸を立派に演じられますように、一生けんめい、努力いたします。その芸をご覧に入れて批評していただき、きびしい訓練によって、どの部分が、どれだけ発達したか、くわしく検査していただきますわ。変った調教方法を、ご存知でしたら、ぜひ、

ご紹介下さいませ。

(横浜・片野初枝)

中野昭子様・私の体験を、お聞き下さい。先日、私は頭痛をもよおしたので、近在の病院をおとずれました。先ず例によっての体温脈搏の検査。そして、お決まりの注射をしたのですが、その後で便の検査をすると看護婦に言われました。一瞬たじろぎましたが、病気のためだと思い、検査を受けました。その時に使われた、何というのですか名前はわかりかねますが、ガラスの棒でできたものを挿入されました。その時の痛いような、快いような感じは、いまだに忘れることはできません。その後は、自分自身で試すことさえもできませんが、一度は、あなた様のような方に実行していただきたいと思ひ、訴えて次第です。あなた様には当然の報酬として、浣腸責めは勿論、あらゆる責めをもつて、苦しみの極限に、あるいは羞恥の絶頂に追いこみたいと存じます。呼んでいただければ、いつでも、あなたを責めにまいます。快よいご返事、お待ちしております。(横須賀市・高城明)

私は、毎月本誌を購入して真先に「花と蛇」に目を通します。それから一息ついて、他の文章を読みます。今月号は団先生が御多忙の由、少しいつもより文章が短いのは残念でした。しかし「シナリオ」にて、その不満も十分満たすことができました。斎藤先生の「探奇考料」は、私達には手に入らず見ることもできない珍しい色々な専門書のご紹介で、お蔭様で苦勞せず楽しませていただけたことを感謝いたします。「Mモデルとその妻」伏虎氏の文は、S及びMの者、それぞれの心をとらえさせる魅力十分で、今月号の新人賞を獲得の資格があると思います。(羽曳野市・原田)

柳瀬様、私は貴女のような女性を、ずっと以前から待ち望んでいました。私は貴女を恥かしい責め方で泣かせてあげたいのです。私は貴女の縛りの写真を、いつも肌身はなさず持っていたいのです。どうか私の、この切ない願いをかなえて下さい。もし私とプレイして下さるのでしたら、いつでもよろこんで参ります。私は暗室を持っていて、自分で現像、焼付ができますので、何かと都合かと思

います。よろしければお便り下さい。
(奈良・加藤昇)

○

この欄を毎月たのしく読ませていただいております。最近、気のついたことは、複数でのプレイばかりで個人、つまり自分自身を対象にしたプレイのアイデアがないのは、さびしい気がいたします。それでも八月号の大川恵子様のは最近では異色のやり方だと思えます。残念ながら僕は浣腸プレイは好みません。それでは僕のアイデアを述べさせていただきます。使うものはエキスパンダー、割りバシ、糸などです。①エキスパンダーによる乳房責め。ボディビルに使う、あのバネのことですが、それを乳房を上下からはさむようにして二本ずつ胸に巻きます。つまり乳房をしめつけると同時に体をもしめつけるわけです。上下二本ずつで適当な緊縛感が味わえます。最高四本ずつぐらいまでは堪えられると思われます。傷がつくといけませんので、布で細長い筒を作って、その中にエキスパンダーを入れて使うとよいでしょう。②割りバシによる乳房責め。新しい割りバシを十二本、用意します。それ

らを三本ずつ束にしたのを、四つ作ります。それを二つを一組にして二組つくります。その作り方は束ねたハシ二つを、指二本ぐらいあけて、片端をヒモで結びます。それを乳房に上下からはさんで、もう片方をゴムのヒモでしめつけます。つまり、乳房をハシで上下からゴムの力でしめつけるわけです。その時、乳首に糸を結んで引っぱると、責めの感じも味わえます。以上ですが、これらを総合して一しよにすると、とてもよい責めの快感が味わえます。乳房をハシで上下からしめつけ、さらに胸にエキスパンダーを上下に二本ずつ。その上、乳首に糸を結びつけて引っぱると、その適度の痛みによる快感は、なんとも言えないものである。複数の方のプレイにも用いていただきたいと思う。なお僕も複数のSMプレイは永年の夢である。勇気のある女性、ぜひ相互プレイをお願いいたします。

(東京・石井茂作)

○

本年度一月号よりの愛読者。以前よりS・Mプレイに興味を持っていたが、プレイの経験なし。そのようなわけで、奇クを読むにつけ、世の中にS・Mの傾向を持

ち、又プレイを楽しむ人々の多きを知り、驚き、たのしく感じている次第。従って、事実を述べているカメラ・ハントや手記に魅力を感じる。そこで、一つ提案がある。読者の中には、私と同じような方も、かなりあるのではないだろうか。カメラ・ハント特集が企画されている今日、夫婦プレイの特集もやってはと思うのである。カメラ・ハントとは違った新鮮さがでるのではないだろうか。編集者、並びに読者の方々の同意を得られれば幸いである。

(奇ク仏安)

○

岡崎市の中上淳一様。五月号の呼びかけに、お便りいたします。僕は女の下着が好きで、スリッパパンティ、ブラジャーなど三十枚余り持っております。これらの女性の下着を体につけて責められたらと、日頃、思っております。中上様、どうか二人のプレイが実現いたしますよう、ご返事お待ちしております。愛知の皆様、お便り下さい。

○

(愛知・南利明)

またまた御無沙汰いたしました。が、八月号拝読し、早速ペンをとる気になりました。その後も研究

の方が忙がしく、ついつい本屋へ寄ることもなく二、三カ月、あっという間に過ぎてしまいました。こうした後にみる奇クの味は、又格別で、いつもマンネリだ! といって、けなしていたのも、なつかしく感じてしまいます。全体の基調は変わっていないようですが、常に新しいものをとり入れていくという熱意が隅々に感じられます。今月号で面白く読ませていただいたものとしては、辻村氏のカメラ・ハント(薊魔子の巻)これは私が最も愛読させていたでいるので、毎号これが一番のたのしみ。辻村氏の文章は、私の意識を同一化(辻村氏には大変失礼な言い方だが)するところがある。私には文章の巧拙はわからないがとにかく、自分をとけこませることが出来る、その中でふるえ、おののく鮮鋭な自己の意識を見ることが出来る。今回の場合には、モデルよりも辻村氏の方に興味? があった。他のものとして斎藤夜居氏の「探奇考料」、団鬼六氏の「鬼六談義」。こういう所で接する団先生の魅力、辻村氏と相似かよった、私にはいい意味で人間くさく感ぜられます。風流極道軒氏の、「妻を縛らせるの記」これも同じ

ような理由で私好みのものです。サロンの中で牧十郎氏がお書きになられていたように、一面、人間として、より高度なところで、人間そのもの、具体的な人生との関連においての葛藤ETCを追求したいと思って当然であろう。今まで何度か、こういった意見に反論が寄せられたものだが、それに対する答は先程の命題の中に充分くり込まれている。私にとっては、その関心が一番強いというだけのことである。そしてこの方向性というものは、当分変わらないだろうと自分では思っている。私には文才はないし、先輩諸氏の書かれたものを通して一方通行でしか意志が疎通しないのは残念だが、現在の限られた状況では、これだけしかいいようがない。その意味で少しでもそういった方向を指向した全力投球の作品がでてくることを希望したい。私が奇クを知ってから、もう六年余りを数えるが、三年前、五年前のSとかMとかいうものの把握と、今のそれとは明らかに違ってきている。当然、その一つは世間一般の、こういうものに対する慣れが一般化したという状況の反映であろう。しかし私にとって、その相違を生みだした過

程は、私自身の最も急速な成長の過程の発現の一形態であったといふことがいえよう。そして、その最も明白な根本的な相違は、今、私はもはやSでもMでもなからうということである。裏をかえせばそれでもやはりSでありMである、といえるかもしれない。しかし以前の概念を超越したものとして自分自身の広がりの中に組み込まれているのである。つまり、私にとって自分の専門の経済学を研究するのと同じ意識で、同一次元でSMが存在する。そのSMは、先程も述べたように、自分がSでありMでありとかいうものと別の、すなわちSMという概念自体の存在行為である。私はやはり、そのSMに感激し、喜びの声を口にするだろう。人がいう、Sの人、Mの人と同じように。こういう人間というものは、おかしいのだろうか？ 少なくとも、今までの奇クにこういうことを述べた人は余りいない。しかし私にとっては、これが当然のように思える。「SMが好き」という言葉で表現されるように、これはある意味で（大部分の場合）趣味の問題であると思う。つまりある人が釣りが趣味でありある人が碁が好きなように。

安井・中河・金原緊縛写真

安井・中河・金原緊縛写真	
大手札印画紙極鮮明焼付フオート	開股羞恥責めの姿態
安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円	安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円
髪吊りて強烈ムチ打ち	安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円
片足首引きつけ縛り	安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円
尻立て鞭打ち艶姿	安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円
柔肌に炸裂するムチ	安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円
エビ縛りの鞭打ち	安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円
貞操帯着用鞭打ち	安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円
痛打にもかく美女体	安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円
あぐら縛りの羞恥責	安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円
片脚挙げて晒す裸身	中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円
強烈エビ縛りて苦悶	中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円
膝頭縛り開股竹棒責め	中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円
竹棒開股足首縛り	中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円
股間縛りの裸身表情	中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円
菱縄縛り猿ぐつわの表情	中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円
乱痴戯騒ぎの結末	中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円
菱縄縛りて床に喘ぐ	中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円
浣腸責めの甘い恐怖	中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円
浣腸液の注入直後	中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円
強制浣腸の各姿態	中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円
浣腸責めの美態開陳	中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円
浣腸を待つポーズ	中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円

女性の場合、こう簡単にいかないのは、すべて社会的状況が規定しているといえよう。以前、私はSかMであることを前提にして、SかMかで大いに迷い結局S七十パーセント、M三十パーセントなどと自ら規定したものである。そしてそれは、今やすべて思い出たくなってしまっている。どうもいつものクセが出て支離滅裂な文章ができてしまいました。こんな文章にも何らかの反応があれば読者みょうりにつきると申せましょう。

(東京・泰)

柳瀬慶子様、私は二十余年も奇クを愛読し、同好の女性の出現を待ち望んでいました中年男であります。八月号で貴女のお呼びかけを拝見し、始めて私もお便りをする決心ができました。名古屋在住十年の間にも、なかなか同好の方にもめぐり合うことができず、奇クを愛読することにより、心を慰めてきました。このたび、貴女の文を読み、最早、貴女に会ったような心持です。私は女性を十分に理解しておりますので、必ずや貴女に満足して頂けるプレーができると確信しています。ぜひともお会いできます機会を得られる色

よいご返事をお待ちしています。

(長野県・石橋)

初めて投稿するSを自認の二十六年の男性です。奇クを愛読して五年、二年前に初めてSMプレイをすることができ、甘美な世界を経験いたしました。それ以後はプレイの機会にめぐまれず、又、思いついてM女性に呼びかける勇氣もなく、味気ない日々を送ってまいりました。しかし、SMに興味を持ち本誌を愛読する者は、プレイなくしてはSMは語れないと思ひ、M女性に呼びかけます。私のSは縛り、鞭打ち、浣腸です。興味あるM女性との交際を希望します。勿論秘密は固く守ります。私自身、責任を持ってプレイすることを約束します。私を理解いただいてからで結構です。勇氣を持って名乗りを上げて下さい。私はSMに興味を持つ人ほど文化人と思ひています。決して異常とは思ひていません。人間の持つ本能であり、ノーマルな行為と思ひています。申しおくれましたが私は外国資本の会社に勤める大学卒のサラリーマンです。身長は一七二センチ体重は六八キロです。

(大阪・麻生隆)

可憐表情の全裸縛り 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆめ	立縛り正面裸晒し 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆえ	両手吊り全裸晒し 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆひ	雁字搦目後手縛り 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆあ	股間縛り柔肌責め 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆも	猿ぐつわ開股責め 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆに	豊満な臀部強烈責め 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆほ	強制全裸開股責め 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆみ	股間縛り悶える 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆる	全裸縛りに羞らう 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆへ	私の妊娠腹を見てね 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河恵子 略号 八ゆわ	縛られた妊婦横臥す 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河恵子 略号 八ゆよ
被虐に燃える全裸妊婦 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河恵子 略号 八ゆぬ	尚も見せたい妊婦腹 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河恵子 略号 八ゆる	股間縛り首縄正面 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よれ	両手吊り正面晒し 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よそ	全裸高手小手の麗身 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よの	全裸股間縛りの媚態 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よや	強烈な変型エビ縛り 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よい	正座猿ぐつわの仕置 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よふ	凄絶海老責め地獄 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よえ	女体二つ折り縛り 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よぬ	あぐら縛り全裸晒し 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よあ	イルリの浣腸責め 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よた

浅井圭子様、貴女のような方が近隣におられるとは、夢にも思っておりませんでした。八月号の背尾君への返答では、男の自尊心、自己愛があれば駄目、悲鳴をあげて許しを乞うなら駄目と言われませんが、M性として過去に飼育されるか体験していない者ならば当然貴女の要求通りの事はできないでしょう。かりに、私も女王様に飼育されるとか、又S女性にオモチャのように恥ずかしめられ、いたぶられることを想像するだけでも興奮に慄えますが、さて実際に体験すれば、心ならずも悲鳴をあげたり許しを乞うことでしょうか、いくたびかの体験、調教により、自ら思うような奴隷に仕上げることに楽しく、男性の自尊心、自己愛、羞恥心を踏みにじることに、サジストの遊びがあるのでないでしょうか。私は過去に少しプレイの真似ごとをしたことがあります、すが、相手の女性が本当のSでなかったのか、私は悲鳴をあげたり許しを乞うようなことはありませんでした。その反面、Mとしての遊びを味わうこともできませんでした。私は三十三才（年より四、五才、若く見えるそうです）で、

神戸に在住し大阪へ勤めております。M七分S三分の中途半端な男ですが至って協調性があり、一度約束すれば、いかなることも履行し今は一応信用を得ております。貴女様にご迷惑をかけたり、又、少しの不快感も感じさせないことをお約束いたします。

（神戸・土肥）

私は十年ほど前から奇クを愛読している者で、奇クを読むのを唯一の楽しみにしています。そして口絵、グラビア写真が少なくなってきたことを惜しんでいます。しかし新しいアイデアや夫婦プレイの状況などが発表されるようになったのは良いと思います。私は縛りや責めの経験は少ないのですが、緊縛、くすぐり、羞恥責め、メカニックな縛りの好きなS男です。写真の処理は自分でできます。お互いの秘密と立場を尊重し、プレイに徹して下さる女性と知り合いたいと思っています。また御夫婦によつてプレイを楽しんでおられる方々、私にもその喜びを味わわせて下さい。プレイを通じて、お互いに人生を楽しみましょう。岐阜の北山はじめ様の呼びかけられたグループに参加させて頂き下さい。ま

大手札印画紙焼付

〔緊縛女体美のシリーズ〕

両手吊りに悶える女体

大手札印画紙焼付 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もえ

強烈なる甘いムチの洗礼

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もゆ

ムチに狂い哭く美貌の夫人

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もよ

半吊りでムチ打つ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もす

逆エビの味に感泣する

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もせ

ムチの一打に反りかえる

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もれ

関谷夫人の女体陳列

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もる

尻立ての鞭撻ポーズ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もて

片足吊り挙げて喘ぐ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もな

私をムチ打って頂戴

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もね

脂ぎった女体を縛る

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もむ

鞭は柔肌に炸烈する

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もう

滑車吊りに甘い鞭

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もき

両手万才吊りに鞭打ち

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もこ

狂う鞭に哀切表情の夫人

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もみ

浴後の剥玉子縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八はゆ

投げだす白い緊縛裸身

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はよ

待望の脚挙げ緊縛姿態

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はて

二つ折り女体エビ責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八はお

柱の前に緊縛された全裸

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はの

神妙なプレイ寸前の女身

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八はひ

この「赤い拷問」がベストに入ります。「鞭と肌」「D・ドッキン」グ「リンチと縛り」「肉の飼育」は期待はずれでした。それから最後の一つ。シナリオでバーのマスター英治の役をやっている伊海田弘は映画では本人と違うと思います。映画のキャスト・タイトルをよく見ていなかったのだれだったかわかりませんが、たしかに伊海田弘ではありません。

(東京・木本英夫)

私は二十九才の独身の男性で、大阪港湾で貨物船の荷役作業に従事しております。私どもは作業中に時々事故が発生し、犠牲者も六月一カ月間に三人も出ており、危険度も高い職場です。大体、運動神経がにぶく、体のこなし方のかたい人が犠牲になっていきます。私も、そのような体質で、常に何とかならないものかと頭痛の種にしております。そこで誠に自己本位なお願いで申しわけございませんが、Sの女性の方にプレーしていただき、もっと柔軟な体になりた

いと希望しております。プレーに關しては、手首などの少々の傷はかまいませんが、なるべくなら傷がつかないように、おねがい申し

上げます。その他一切のことは、プレーをなさる方におまかせいたします。私の人生の目的は、人間愛に富んだ生活を送るのが最高のものと考えております。かつて、胃の手術や肺結核などの病気を通じて色々と考えさせられましたので、それらの事実を持って健康を与えられている今日、少なくとも喜びを感じております。話は元に戻りますが、プレーに關しましては口外せぬことをお約束いたします。それというのも、今日の社会では私共のプレーという事柄は通用しないばかりでなく、相手になつて下さる方も私も、そのために人格がそこなわれる恐れがありますので、この点は十分注意いたすつもりでございます。どうかSの女性の方、よろしくおねがい申し上げます。(大阪・中野孝平)

毎日、暑い日が続きますが皆様益々ご活躍のこと、読者の一人としてお喜び申し上げます。さて九月号を拝見して、トップの「八愛妻記」(千草忠夫氏)「夜の潮騒」(葉夜田氏)の二作が光っております。白鳥大蔵氏の「緋縮緬地獄」は益々佳境に入り、手に汗を握られます。辻村氏の文章は

最新撮影総天然色
カラー・プリント写真

両手吊りに悶える女 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 大塚 啓子 略号八てきV	後手裸身柱縛り 大手札四枚一組 略号一二〇〇円 大塚 啓子 略号八てかV	縄目にあえぐ裸女 大手札四枚一組 略号一二〇〇円 大塚 啓子 略号八てくV	豊麗な裸身をくびる縄目 大手札四枚一組 略号一二〇〇円 大塚 啓子 略号八てこV	後手高手小手縛り 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 大塚 啓子 略号八てまV	長襦袢の緊縛色模様 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 東浦 啓子 略号八てみV	緋の腰巻緊縛色模様 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 東浦 啓子 略号八てむV	猿ぐつわに呻く女 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 東浦 啓子 略号八てめV	柱宙吊り強烈縛り 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 東浦 啓子 略号八てもV	ポリウムを縛りあげる 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 東浦 啓子 略号八てんV	縄に苦悶する裸女を狙う 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 東浦 啓子 略号八てるV
大塚 啓子 略号八うおV 大手札二枚一組 略号八〇〇円 東浦・大塚 略号八うてV	縄に悶える緊縛色模様 大手札二枚一組 略号八〇〇円 東浦・大塚 略号八うてV	真紅の腰巻着用縛り 大手札四枚一組 略号一二〇〇円 大塚 啓子 略号八うこV	華麗なる緊縛裸身 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 一宮百合子 略号八るむV	みだらな開股縛り 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 一宮百合子 略号八るのV	責めに疲れた諦観 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 一宮百合子 略号八るおV	真紅の腰巻姿で緊縛 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 一宮百合子 略号八るまV	羞らしいの真正面縛り 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 一宮百合子 略号八るけV	若肌に喰い込む縄目 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 一宮百合子 略号八るふV	高手小手後手縛り 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 一宮百合子 略号八るやV	股間縛りの開股姿態 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 中河 恵子 略号八るよV
羞らしいの股間縛り 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 中河 恵子 略号八るにV	中河 恵子 略号八るにV	中河 恵子 略号八るにV	中河 恵子 略号八るにV	中河 恵子 略号八るにV	中河 恵子 略号八るにV	中河 恵子 略号八るにV	中河 恵子 略号八るにV	中河 恵子 略号八るにV	中河 恵子 略号八るにV	中河 恵子 略号八るにV

毎号私達をSの世界にさまよわせてくれます。ご健康に留意されて今後とも私達のために健筆をふるわれるようお願いいたします。

(尻崎・塚口生)

柳瀬慶子様、貴女の通信文、拝見しました。正直の話、私は非常にうれしかった。なぜかという通信に載る女性は、ほとんどが遠方ばかりで東京近辺の方が少なかったのですが、今回、貴女のような女性が目と鼻の先におられるのを知ったからです。そこで、ぜひ私とプレイをしていただきたく、お便りを書きました。女性の責めは、苦痛を呼ぶ責めも、たしかによいものですが、私はやはり女性の自覚を忘れさせる尻恥責めだろ

うと思います。貴女を女としてもっとも恥ずかしい開股縛りや亀縛り、そして海老責めにより痛めつけ、今度は浣腸するのです。そして、あなたは恥ずかしい恰好のまま排便を強制されるのです。もしこんなことを実現できたら……と

徳島県の吉倉美子様、九月号のお便り拝見いたしました。私は愛媛県に住む二十才の女性でございます。貴女様も私と同様、ふんどしマニヤであることを知り、お便りさせていただきます。私は奇くを愛読しましてから日が浅く、色々貴女に教えていただくことばかりです。フォト作品、ふんどしの締め方など、お話しをお聞かせ下さいね。マニヤの皆様からのお便りお待ちしております。

(川ノ江市・越智かおり)

神戸の大上那美子様、私は昨年より、奇くを興味深く読んでいます。特に団先生の「花と蛇」の緊縛による羞恥責めには感動しています。今までは、投稿のわずらわしさ、距離的な問題等であきらめていましたが、三月号で貴女の投稿を読んで私は決心をしました。私の縛りは傷を残さぬように、あくまでも自由を束縛する手段にしか用いません。そして目かくし、さるぐつわを適時、使いながら、貴女の偉大な白ろうのような双丘に激しい責めを集中するのです。恐らく貴女は息をはずませ悲鳴をあげて悶えるでしょう。貴女は自

双胎臨月蛙腹鮮烈写真

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円

増田みゆき

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円

臨月腹裸身の媚態

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円

黒縄縛りの媚態

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

立縛りにあうの裸女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

開股された股間縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

豆絞りの猿ぐつわ縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

柱縛りに喘ぐ刺青女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

高手小手に悶える全裸

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

緊縛に映える入墨の肌

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

脱がされた緊縛刺青女体

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

縄にのたうつ入墨裸身

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

山原 清子 略号一〇〇〇円

腰巻一つで縛られる刺青女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

女相撲迫力投業連続動作

大手札十二枚一組 略号五〇〇〇円

恵子の妊孕美観賞

大手札四枚一組 略号一〇〇〇円

孕み若妻の羞らい

大手札四枚一組 略号一〇〇〇円

八の字の開股責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

足枷強制開股責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

全裸強烈逆エビ責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

両手吊り足枷責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

両腕逆手吊り責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

豊満なる臀部責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

大の字縛りと足挙げ責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

お申込みは大阪阿倍野局私書箱

第14号箕田京二宛へ願います。

(神戸市葺合区・山本)

(数近明夫)

私は二十八才の自称サドの男性です。私がSMに興味を持ちはじめたのは五、六年前からです。その後、現在まで奇クを毎月かかさず読み、女性を責めることを夢みております。私は羞恥責めなどが好きで、余りひどい縛りや責めは好みません。体をきずつけたりするようなことは嫌いです。あくまでも精神的にいたぶるような責めがいいと思います。けれども私は今まで一度もSMプレーの経験はありません。ないというより、相手がみつからなかったと言うべきでしょう。どなたか奇ク愛読の女性で私とプレーをお望みの方がおられましたら、お便り下さい。

○

(兵庫加古川・土田潔)

全裸後手柔肌縛り 大手札三枚一組 佐々木真弓 略号△こよ▽ 四〇〇円	乳房強烈膨隆責め 大手札三枚一組 佐々木真弓 略号△こわ▽ 四〇〇円	海老責めに苦悶する 大手札三枚一組 佐々木真弓 略号△こお▽ 四〇〇円	全裸の緊縛全身晒し 大手札三枚一組 佐々木真弓 略号△こる▽ 四〇〇円	煙草責めに喘ぐ女 大手札二枚一組 佐々木真弓 略号△こぬ▽ 三〇〇円	緊縛麗姿に映えるライト 大手札三枚一組 佐々木真弓 略号△こほ▽ 四〇〇円	臀部強調後手縛り 大手札三枚一組 佐々木真弓 略号△ころ▽ 四〇〇円	羞恥に悶える全裸緊縛 大手札三枚一組 佐々木真弓 略号△こに▽ 四〇〇円	ホステスの緊縛姿態 大手札三枚一組 佐々木真弓 略号△こち▽ 四〇〇円	二つ折りで責める女体 大手札三枚一組 佐々木真弓 略号△こへ▽ 四〇〇円	脈打つ全裸の臨月腹 大手札三枚一組 中河 恵子 略号△こふ▽ 四〇〇円	臨月腹の革紐股間縛り 大手札三枚一組 中河 恵子 略号△こや▽ 四〇〇円	猿轡の臨月妊婦腹縛り 大手札三枚一組 中河 恵子 略号△この▽ 四〇〇円	卓上の股間縛り狂態 大手札三枚一組 長井葉津子 略号△こそ▽ 四〇〇円	羞恥の足挙げ責め 大手札三枚一組 長井葉津子 略号△これ▽ 四〇〇円	悦虐責めの女体終着駅 大手札三枚一組 長井葉津子 略号△こた▽ 四〇〇円	片足挙げの鞭打ち責め 大手札三枚一組 関谷富佐子 略号△こら▽ 四〇〇円	柔肌に弾ける惨酷な答 大手札三枚一組 関谷富佐子 略号△こな▽ 四〇〇円	あぐら縛りの女体鑑賞 大手札三枚一組 左近麻里子 略号△こて▽ 四〇〇円	対談用に縛られた女 大手札三枚一組 左近麻里子 略号△こて▽ 四〇〇円
------------------------------------------------	------------------------------------------------	-------------------------------------------------	-------------------------------------------------	------------------------------------------------	---------------------------------------------------	------------------------------------------------	--------------------------------------------------	-------------------------------------------------	--------------------------------------------------	-------------------------------------------------	--------------------------------------------------	--------------------------------------------------	-------------------------------------------------	------------------------------------------------	--------------------------------------------------	--------------------------------------------------	--------------------------------------------------	--------------------------------------------------	-------------------------------------------------

とができません。私は貴誌の「カメラ・ハント」の写真及び分譲写真等を参考にいたしておりました。十年ほど前の本誌に、写真と解説により、縛り方の幾種類かが紹介されていたことがありました。けれども残念ながら私は、その当時の奇クをどこかへ処分しており、手元がありません。そこで、お願いですが、「カメラ・ハント」の文中に出てくる縛りの解説の方をもう少し入念にしていたいただきたいと思ひます。そして「縛りの解説書」(写真入)を分譲品として出していただけないでしょうか。私は又、帯などにも趣味を持ち、分譲品等、二、三点、買い求めて使用しております。貴誌におかれまして、このような品のあつせんをしていただけないでしょうか。私達夫婦は現在、市販されている色々な趣味の下着を利用して色、形などの変化を求めて楽しんでおります。ゴム製品でも良いのですが、より巾広く面白い写真ができることと思ひます。又、今は夏です、水を利用して前手縛りと股間縛りで泳がせてみるのはいかがでしょうか。数日前、近くの河原へ妻を連れて行き、これをためしてみましたところ、ある程度、

満足いたしました。その後、顔を布で目かくし、後手縛りとして浣腸を行って見ました。川の水の冷たさも手伝って、より一そうのききめがありました。その他にも色々頭では考えていますが、なかなか実行にうつすことができないのが残念です。以上、つまらぬことを記しましたが、地道に奇クが御発展されんことを願って筆を止めさせていただきます。

(富山市・山内史郎)

柳瀬慶子様、八月号のお便り、うれしく拝見いたしました。私は同市に住む三十五才になる高校の一教員です。奇クを愛読してから十五年になり、貴女のような人があらわれるのを待ち望んでいました。今のところ私の趣味は女性を縛り恥ずかしめ、プレイをしないと気持ちすまないのです。貴女は待っているのです。私のような者が現われ、身動きのできないほどきびしく拘束され、両足を思いきり開股され、吊るされ、くすぐられ、打擲され、浣腸されることによって、貴女は歓喜の涙を流すことでしょう。私は余り女性の方とプレイをしたことはありませんがSMの喜びを話し合いながら、プ

レイの研究をしようではありませんか。(川崎市・関良太郎)

斎藤氏の「探奇考料」毎号、楽しく読んでいます。奇クにはシックリしないとの読者の意見もあるが、私は異質原稿、大いに結構といたい。SだMだと目の色かえて騒ぎたてるだけで、要はろう細工の食堂の料理サンプルみたいに一向に身につかぬ作品ばかりの中に、「探奇考料」のような特質な発表も、マンネリ化を救うものだと思える。一、二の原稿以外は、同じネタをこね廻し色つけ直して形を変えたような作品ばかりなので読む気がしないが斎藤氏の特殊発表があるので奇クを購入しているのだと言っても過言ではなからうか。城市郎氏の「発禁本研究」と違った味の、斎藤氏の資料を私は高く評価し、今後も続けて下さることを切望するものである。

(東京・小山蒙堂)

中野昭子様、ご返事ありがとうございます。ごさいました。私の方から連絡場所を指定させていただきます。八月二十六日から二十八日まで千駄谷の室内プールの女子の更衣室でお待ちしております。午後一時から二時

頃まででは、いかがでしょうか。ご都合が悪ければ二十九日から九月一日まで品川のスケート場の隣りのプールの女子更衣室で同時刻にお待ちします。私、黒と白の縞の入ったビキニを着て、手にタオルを持っています。プールの更衣室しか考えられなかったものですから。会う日を楽しみにしてお待ちします。(東京・大川恵子)

小生、奇譚クラブが小型になってからの愛読者で、もう何年ぐらになるか数えきれません。その間、いろんな雑誌が出ました。風俗草紙、読切ロマンス、風俗奇譚等々。最近ではSMグラフ、SMマガジンが出版されています。しかし休刊の時期があったとはいえず、一貫して出版意欲を燃やされた、奇ク編集者、発行者の熱意に、敬意を表します。小生は読書派で、最近特に外出するヒマがなくなり簡単な作文も家人の目を盗んで書く始末です。辻村さんの「カメラハント」に登場した辰巳典子さんが、縛られ女優としてアイドルとなりました。もちろん小生も大ファンですが、その外にも御最氣スター? としては「女子学生極秘日記」の原美子(だったと思ひま

次号(十一月号)は九月二十五日に発売いたします

す)千月のり子、といった女優さん等で、いい雰囲気を出してしました。これらの女優さんを対象にして、こんな映画を観たいなあ、と、簡単な状況を入れて、マニアの夢みたいなのを作ったのが、今回お送りした「縄つき芸者」です。団先生に申し上げてみたい気がします。皆さん勇敢に呼びかけていらっしやいます、若い時と違い、その業界で、あるいは知人も増えますと何の某といえば、ああ、あの人かとわかるようになりガンジガラメになったようで、何もできません。専らコレクション専門になります。昔の奇クを引っぱり出して思い出やらピンク映画ショーなどを材料に書いてみようかななどと考えたりしています。では、暑さの折柄、御身大切にお過ごし下さい。(大阪・沢田宏)

前々号のこの欄で、映画面の写真撮影のことを尋ねている方がありましたが、その後お答えがない様子です。私がお教えします。写真営業をしております関係上、時々お客様にたのまれて映画撮影

をすることもあります。先ずスチールですが、コダックのトライX (ASA400) を用いまして、これをASA800で用いるのがよいかと思ひます。F1・8でしたら「 $\frac{1}{500}$ 」で切れます。プロマイクロールを用いますと、自然にASA800に上ります。もしシャッターがおそくて「 $\frac{1}{500}$ 」や「 $\frac{1}{800}$ 」でよいなら粒子の方を細かくできます。次にスチールのカラーの場合ですが、大体、私の経験ではコダックエクタクロームハイスピードASA160以外は無理のようです。これはトランスペアレncy (スライド用) で、プリント用ネガではありませんが、この頃ではスライドからでも、お望みならプリントも作れます。アンスコ200もよいかもしれませんが、使用せぬため判りません。このエクタクロームハイスピードは、美しい発色で、デイルイトタイプ(5500ケルビン)を用いればよく大ていのカラー映画は驚くほど美しく再現します。ことに青と赤の美しさは素晴らしいものです。カラーフィルムは増感はききませんか

ら、露出は正確にして、F1・8なら「 $\frac{1}{15}$ 」で、F3・5なら「 $\frac{1}{4}$ 」で丁度よい発色をします。(普通の映画面で、5500ケルビンを用いて) タングステンタイプ(3900ケルビン)は用いぬ方がよい。次に8ミリですが、これは現今、ASA指数の高いフィルムが未だ開発されず黒白でやっとASA250 (フジダブル) です。カラーに至っては、ASA400しかありません。16コマでとれば、大体「 $\frac{1}{500}$ 」のシャッターに当りますからかなり明るいレンズが入用で、いずれにせよ、カラーによるコピーは無理です。(特殊の場合は上記ASA400も使えますが)。フジネオパンSSASA250 (ダブル) を用い、F1・4のレンズを開放で16コマでとれば、丁度出ると思ひます。以上、大体、申し上げましたが、映画は24コマで、そのコマ自身ブレておりますのでスチールでピタンときれいな画面をのぞまれても、あかぬ場合が多い。又「 $\frac{1}{500}$ 」以上のシャッターは使えません。映画のカメラマンのクセでピントが甘かったり、映画館の映写技師のクセでボケているときもありますし、何より小屋によって電源の明るさに差がある

のに泣かされます。上記は大体、平均のところですが。やはり、一カ所の小屋で一度やってみて結果を調べ、その上で同じ映画を今一度写すとよいと思ひます。なお、出し物によっては写真機を持ち込むと文句をつける小屋もあります。(何も言わぬ小屋の方が多い) できれば顔なじみの小屋で一言、あいさつしてからお撮りになるがよい。シャッター音や、モーター音は案外、高く、近所迷惑なものですから。防音ケースなども売っておりますが、それはまあ、よいでしょう。

(京都・D・P・E)

小生は創刊号より愛読している者ですが、幾多の困難を排して今日まで継続して発刊されている情熱には感心いたしております。いつも何かのことで発刊が中止されるのではないかと、冷や冷やした気持ちがあったことは否定できません。人間性の深奥にある妖美な世界に注視し、それをあくまでも追求されんとする熱意に感激いたします。各分野での戦後近代化は、人間本能の最も重視すべき性の世界も容赦いたしません。むしろ遅きに失するぐらいで、マ

ンネリ化した過去の観念から脱却して新しい性の近代化を求められてきた、ゆえんだと思います。私は、性はもっと明るく解放した方が良く、考える論者です。明るくロマンチックに性は解放されるべく、又合理的な近代化を計る必要があると考えます。教育にもとり上げ、性の色々の問題を、早くからよく知るよう努めなければならぬと思います。スエーデンの行き方を、小生は買います。カラリとした性のあり方が良いと思う者です。本誌で追求される問題も多くの学者が、これまで早くからとり上げている問題で、誰でも持っている所の人間のさがと言って良いと念願します。本誌を読む人が

く、人間は誰かれを問わず凝視する所のものだと存じます。この点を追求して止まない貴社の態度は人生の真実を認識しての、誠実さが今日まで本誌を一部人士に心からの共鳴と愛護の表示となつて具現されたと考えられます。現代の変態性を今後も一層、誠実に情熱を以て追求されんことを切望する次第です。本誌は、妖美なる人生のこの部分にスポットを当て、文学的、医学的、宗教的に縦横に分野を開拓するならば、道はもっともと開けるであろう。そしてこの分野における一大雑誌になるよう、高い目標を持ってもらいたいと念願します。本誌を読む人が

すべてこの分野に行動を希求しているとは限らない。読むことによって、なるほどとうなずき、視覚によつて満たされた感慨を持てば良いのであるし、又、多くの人がそうなのだと思います。日常の繁忙の中で実行ができるものではない。その点で本誌は代官してくれていると言つても良いと思っています。どうぞ今後とも誠実に頑張つて下さい。さて小生は、戦後本誌をひそかなる友として愛読してきましたが、一寸思い出してう人のこと。ロマンチックなサジイズムETC。女性の心の底からの、この分野における告白であり

ました。今後とも女性からの発言、告白、体験記を一番、望んでおります。
(兵庫県・山内四郎)

私は女性の羞恥責めを好む三十才になるS男性です。全裸での開股縛りや海老責め、その他色々の羞恥責めで悶える女性の姿は、もっとも美しいものだと思つております。私はD・P・Eは全部、自分でできます。女性の読者の方で私のプレイの相手になる自信のある方、ご返事下さい。貴女が喜ぶの涙を流すまで責めてあげます。もちろん紳士的におとりあつかいします。
(大阪・北田勇)

本誌既刊号在庫一覧表

○本誌既刊雑誌は左記一覽表の通り在庫しておりますが、39年に発行のものについては在庫の僅少な御注文願います。お早い目に御注文願います。送料は当社に負担しておりますが、今後は三ヶ月以上予約注文以外、送料は含みず、一部につき送料二〇円のお負担をお願いいたします。多数一括してお求めの際は、小包にて発送申し上げます。

昭和40年8月号	昭和40年7月号	昭和40年6月号	昭和40年5月号	昭和40年4月号	昭和40年3月号	昭和39年12月号	昭和39年11月号	昭和39年9月号	既刊雑誌在庫案内
(送共三三〇〇円)	(送共三三〇〇円)	(送共三三〇〇円)	(送共三三〇〇円)	(送共三三〇〇円)	(送共三三〇〇円)	(送共三三〇〇円)	(送共三三〇〇円)	(送共三三〇〇円)	

昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	--

☆編集後記☆

○ご自身からのご希望とはいえ九カ月の妊婦ともなれば、ハントする辻村氏も内心随分気を遣われたことと思う。お腹の赤ちゃんを含めたお三方のご苦勞？を謝し、『胎児の産声を挙げるとき』の健かならんことを祈る。

○斎藤夜居氏から寄せられた『探奇考料』とは別の「此見亭漫語」を始めとし「茶の間の戯れ事」八牧高志「濡れにぞ濡れし」八芳野眉美「拷問異聞」八陸月笛一郎「いらーらデート」八水沢登「ふおとあんどむーびー」八鵜藤恵「それに先月、間に合わない」八団先生の「どさ廻りの話」と、今月号は随筆的なものを比較的多く掲載したが、それぞれ、味わい深いものと思う。

○黒淵嬰一氏がお得意のアレンジものの「贋作平家物語・富士川」を寄せて呉れた。綿密な史実を織り込んだ独壇場。大方読者の前作を凌ぐ好評を得るのではあるまいか。加えて千葉青鬼氏が「大噴火」をひっさげて再登場連載の構えをみせていられる。期待を乞う。

○今月号発表の懸賞入選作品「狂執」八播野弘三「青と赤の蝶」八小谷和勝の二作は題材の変わり種という意味で採り上げてみたが感想をお待ちしたい。後者の刺青については少なからぬ前例もあるが、前者の傾向は本誌としては冒険といえるだろう。尚、性質上、かなりの添削をさせて貰った。乞、ご了承。

○白鳥大蔵氏の「緋縮緬地獄」も第六回を迎え、いよいよ佳境に入った感じ。洒落なテンポは「花と蛇」と好対象といえるだろう。

◎懸賞原稿募集

△体験、告白、手記△

皆さまが自分で直接体験されたことや、自らの性癖や性向について訴えたいこと、或はこれだけは、どうしても人に話したい、書いて残しておきたいといった事柄を、どうか腹藏なくお寄せ下さい。皆さまの真実の叫びや思い出などの寄稿を心からお待ちしております。採用篇には賞金三千円以上贈呈いたします。

△創作、小説、物語△

本誌の内容に適したものでしたら如何なる傾向のもので

も結構です。皆さまの平常抱かれています夢を文章に托してお寄せ下さい。形式も敢えて問いません。但しすべて未発表のものでも自作に限ります。若し引用する部分がありますら、必ず出処の明記をお願いします。採用原稿に対しては賞金十万円迄贈呈します。

△感想、論評、批判△

本誌に掲載された内容についてでも結構ですし、又関連したもので結構です。とにかく本誌を読まれて感じられたことを忌憚なく皆さまのペンのためて下さい。採用篇

△(映画、雑誌)通信△

映画、雑誌、演劇、新聞、週刊誌、或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出処は出来るだけ詳しく記載下されば幸いです。採用篇には本誌三カ月贈呈致します。◎尚、以上の採用篇に対する本誌贈呈の代りに、写真を御希望の方には、代理部分讓品の中から御指定下されば、贈呈いたします。

☆本誌御購読の榮☆

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下さい。重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下さい。重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 三五〇円

十月号

昭和四十三年九月二十日 印刷
昭和四十三年十月一日 発行

編集人 杉原虹児
発行人 北村俊夫
印刷人 北村俊夫

大阪市住吉郵便局私書函第四十一号

発行所 暁出版株式会社

郵便番号556
(昭和三十三年四月二〇日第三種郵便物認可)
(昭和四十二年四月二一日)
国鉄大塚特別扱承認雑誌第二一〇号

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビア写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に努めることと致しております。但し、本誌の趣向として編集いたしましたもの、関係上、十八才未満の方には絶対販売し上げないよう、特にくれぐれもお願ひ申し上げます。